KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa "WHEN THEY CRY."

竜騎士07

Illustration／ともひ

第四話～祭囃し編～（上）



KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

第四話～祭囃し編～（上）

竜騎士07

KODANSHA

リA-14

雛見沢村を、惨劇の渦に陥れる要因はすべて明らかになった。

繰り返される〝昭和五十八年六月〟を乗り越えるためには、膨大な数の刻の〝カケラ〟をすべて結び合わせて〝奇跡〟を起こすしかない——が、その前に〝神〟を僭称する女が立ちはだかる。物語は、悲劇の運命を生み出す強固な意志が育まれた彼女の少女時代へと遡る。あなたは散らばった〝カケラ〟を紡ぎ〝昭和五十八年六月〟を乗り越えて、

〝奇跡〟へ辿り着けるのか……⁉

かつてない恐怖、そして来るべき未来の物語の可能性を斬新に詰め込み、あらゆるメディアを席捲したゼロ年代の記念碑的一大ムーブメント、『ひぐらしのなく頃に』。その「解答編」の最終形態が、今ここに小説として結晶する——。

圧倒的なまでに〝小説〟の力を見せつける竜騎士07からの新たな挑戦!!



ISBN978-4-06-283688-3

C0093 ¥1300E (0)

9784062836883

1920093013000

定価：本体1300円(税別)

講談社

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

第四話～祭囃し編～(上)

竜騎士07

Illustration／ともひ

第四話～祭囃し編～（上）

ひぐらしのなく頃に解

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa...
"WHEN THEY CRY..."

KODANSHA BOX

竜騎士07
Illustration／ともひ

書斎の中は積み上げられた書物と資料でいっぱいだった。

それに埋もれた席に座り、一心不乱に書き物をするふくよかな老人と、絨毯の上にいっぱいに広げられた資料を分類する少女の姿があった。一見すれば少女のそれは、いたずらかお遊びのように見える。

だが、その表情はとても真剣で、単なる遊びではないようだった。

「おじいちゃん。資料の分けっこが出来たよ。」

「うむ。ありがとう。…さてさて、どういう結果になったかな？」

「うん。同じ症例の人がこれだけ集まった。全国平均と比べても明らかに異常なくらい。」

「ふむ…！　やはりな。こっちも興味深い論文を見つけたところだ。精神外科と文化についてまとめたものでな。前頭葉に寄生する存在を予見したものだ。」

「前頭葉は人間が人間らしくあることを司る部分…。」

「そうだ。人の感情は心が生み出すのではない。脳という名の器官が分泌物を生み出して与える副産物に過ぎん。その器官に特定の干渉をする寄生虫が存在し、ひとつのコロニーに蔓延したならば、そのコロニーの思想はひとつに統一されるだろう。」
「イデオロギーが広がるのは、寄生虫感染が広がっているから？　イデオロギーが激突するのは、異なる寄生虫同士が自分の生息圏を拡大するためにぶつかりあっている？」
「あるいは、宗教圏の分布か、国家の分布か、人種の分布か。我々の世界の異なる文化コミュニティの存在とその対立を、人の思想に影響を及ぼす寄生虫的存在に原因があると仮定している。」
「おじいちゃんと同じことを考えている人が外国にもいたんだね。」
「もちろんいるとも。地球上には無数の寄生生物がいて、宿主と共存し、時には宿主を支配したりすることが広く知られている。そして、人体に寄生する存在をたくさん発見してもいる。……にもかかわらず、人体に寄生し、その宿主を支配する存在については頑なに否定してきた。仮定すらも含めてな。」
「……どうしてだろうね？　人間だけ特別な存在のわけはないのに。」
「それを仮定することは即ち、イデオロギーの蔓延を、疫学的見地の蔓延と置き換えられるからだ。イデオロギーの対決は議論で行なわれれば平穏だが、その対決が疫学的に行なわれた場

合、恐ろしいことになるからだよ。」
「悪い思想や文化が蔓延するのを食い止めるのを、疫学的に治療する…？」
「中世ヨーロッパのペストなどを想像しなさい。悪い伝染病が大流行する。伝染病患者を強制的に入院させ、完治するまで退院させない。完治出来ずそのまま病院で死んでしまうこともある。その死体は焼き捨てる。患者が触れた物にウィルスが感染しているかもしれないから、それらを全て没収して焼き捨てる。家族にも感染の疑いがあるから強制的に入院させねばならん。」
「個人の思想を理由に、病気でもないのに入院させるの…？」
「思想を病気と置き換えなさい。後はまったく同じだ。完治するまで退院させない、触れた物は感染の疑いがあるから全て焼き捨てる、家族にも感染の疑いがあるから強制入院まで同じだ。」
「思想なんて個人の自由なんでしょ？　ペストとは違う。」
「人間の思想が、ある種の寄生虫によって生み出されていると仮定した場合、ペストとまったく同じ意味になるのだよ。つまり、思想は治療不可能な伝染病と置き換えられるわけだ。」
「つまり……、異なる思想を持った人を、えっと、疫病患者と同じに扱う？」
「そういうことだ。この考えを延長すると、人種単位、あるいは宗教単位の大量虐殺が起こ

る。……そうすると、再び人類は大量虐殺を肯定してしまう論調になりかねん。だから、脳内寄生虫を語ることは、戦後はタブーになっているのだ。」

「タブーって…？」

「触れてはならない、考えてもならないということだな。だから、誰も研究せん。いや、それどころか、脳内に寄生する存在がいると考えることすら忘れられている。…万物の長たる霊長類を支配する寄生虫などいるはずがないと頭から決め付けている。」

「あははは。何だかお粗末な話。いないことの証明なんて〝悪魔の証明〟。絶対に不可能なのに。」

「その通り。悪魔がいることを証明することは容易い。悪魔を連れて来ればいいのだからな。だが、いないことを証明することは出来ん。〝いない〟を連れて来ることなど出来んのだからな。」

「あははははは。何だか、脳内寄生虫が、自分たちの存在を秘密にするために、寄生している人間たちを操っているみたい。」

　私と祖父は、愉快に笑い合った。

「人間も自然界の生き物のひとつに過ぎん。食物連鎖の頂点にいるだけで、それを以って神格化された存在であると思い込むなど愚かしいことなのだ。人とてあらゆる寄生虫に支配されう

るのだ。その存在が、今日まで発見されていないからと言って、それを以って存在しないという証拠にはならん。……絶対に存在する。必ず存在するのだ。」
「科学の世界にもたくさん、存在が仮定されていて、そのずっと未来にそれが証明されたものがあるんだもんね。」
「そうだ。それらの仮定をした科学者が全て、生きている内に評価を受けられたわけではない。世迷言だと呆れられ、その正しさを証明出来なかった科学者も大勢いたのだ。」
「でも、…おじいちゃんは生きている内に証明されるといいね。じゃなかったら、…おじいちゃんが可哀想。」
「大丈夫だよ。神さまは努力する者を見捨てたりはしない。努力は必ずいつか結実するのだ。」
「いつかって、それはいつ…?」
「神がいつ降臨されるのかは誰も知らない。それは例えるなら、泥棒がいつ訪れるのかわからないように。だから予期せずしてその時を迎えて、不信心であったことに歯軋りすることがないよう、常に目を醒ましていなさい。」
祖父が好んで口にする言葉だった。
成果がいつ結実するのかは誰も知らない。だが、いつか必ずその時がやって来る。だから、その時が訪れて、努力が満たなかったことを悔やまぬよう、常に努力を惜しまないでいなさい。

いつかは必ず実るのだから。……そういう意味らしかった。
「でも、おじいちゃんが生きてる内に絶対に努力が実る…？　生きてる内に認められなかった科学者がたくさんいるのに…？」
幼さゆえの残酷な言葉だったと思う。
ただ、言った私はそんなつもりはない。祖父の努力と勤勉を間近で見て知っていたからこそ、短いであろう寿命の中できっと評価されてほしいという願いを言ったつもりだった。
「お前は、イエス様の復活を知っているかな？」
「うん。磔にされて殺されてから、三日後に復活したという話。おじいちゃんがよく聞かせてくれた。」
「イエス様は、どういう風に復活したと思うかな。」
「……朝が来たら目を醒ますように、むっくりと起き上がった…？」
「処刑された後に亡骸は埋葬された。だから体は土の中に埋まっている。」
「…………じゃあ、ゾンビみたいに墓石を押しのけて起き上がってきた…？」
「ははは、違う違う。そんなのを復活とは言わん。そして、イエス様を殺した罪人たちも、まったく同じことを想像したのだ。」
キリストは処刑される直前に、自身は三日の後に復活すると預言した。罪人たちはキリスト

を埋葬し、その墓を厳重に封印し、キリストの体が蘇ることがないよう、兵たちに監視させた。だが、キリストの言う復活とは、肉体が蘇るという俗的な意味ではなかったのだ。復活とは、教えが蘇るということ。

三日の後、キリストの正しい教えは復活し、人々は信仰を取り戻した。正しく導かれようとする人々の心に、その教えは蘇ったのだ。それこそがつまり、キリストが復活したということなのだ。

信仰する人々の心の中にキリストは蘇る。

その時、キリストという存在はすでに地上にはない。心の中にある。

…………つまり、キリストが人間以上の存在となって復活した瞬間なのだ。

「たとえ死後であっても、正当な評価を受けられたなら。その偉業は必ずや蘇る。その時、私の体が朽ち果ててしまっていても、私の存在は蘇って評価を受けるのだ。」

「それはおじいちゃんが、イエス様と同じように、神さまになったということ…?」

「そうだよ。私の研究はいつか必ず認められる。その時、おじいちゃんは神さまになれるということなんだよ。だから、自分が生きている内に評価されることに焦る必要はないのだ。その時が訪れるのが、私が生きている内なのか、そうでないのか。それは神さまにもわからない。だが、その日は必ず訪れる。だから、その日の訪れを疑うことなく、ひたすらに努力を続けな

くてはならないのだよ。」

「…………。」

祖父の口から直接、祖父の寿命が長くないことを言われると、……悲しい。別に特別な病気にかかって余命を宣告されているわけではないが、平均的な寿命を考えれば、祖父の寿命がいつまでも続くことは考えられなかった。

私には祖父しかない。だから、祖父がいなくなってしまうことを想像したくなかった。祖父は、私がそういう話を好まないことを思い出したのだろう。やさしそうに微笑むと、私の頭をそっと撫でてくれた。

「もちろん、おじいちゃんも、自分が生きている内に研究を認めてもらいたい。だから、精一杯がんばるよ。」

「うん。私も、おじいちゃんが世界中の人に褒めてもらえるように、いっぱいいっぱいお手伝いする。」

おじいちゃんが生きている内に褒めてもらえるように、…というのは省く。珍しく、自分の失言を口にする前に気付けた。

「うむ。ありがとう、嬉しいぞ…。」

祖父は満足そうに笑ってくれた。宇宙の神秘を解き明かそうなんていう、途方もない研究じ

やない。
私たちが求めるのは、人体寄生虫が人体の行動を支配するかもしれない可能性という、本当にささやかなものなのだ。突飛なものでもなんでもない。
しかも、それは単なる想像ではない。その尻尾はすでに掴んでいるのだ。
××県鹿骨市、雛見沢。
この村の出身者が持つ、偏執的なまでのホームシックと帰巣本能。そして、それが果たせない時に発現する、祟りに憑かれたと称する一連の異常行動。
そして、この村に太古の昔より根付く土着の信仰に見え隠れする異常なルール。それらを重ね合わせた時、祖父は雛見沢出身者のある共通項に偶然気付き、村を支配する何かの存在を仮定した。
そして、今日まで長い間ずっと研究を続け、その外郭を固めてきたのだ。
昭和中期。
日本全国で、大昔から風土病だと思われていた数々の奇病のベールが剝がされていた。
それらの多くが寄生虫感染症であることがわかり、忌避されがちだった分野が、にわかに脚光を浴び始めているところだった。祖父の研究も、そんな奇病研究の中のひとつに過ぎず、……
だからこそ、それらに混じって、当然のように発表され、正当な評価を受けられる日が遠くな

い内に訪れると確信していた。

それでも、もし。……祖父の研究が、存命の内に実らなかったなら。私は、…継(つ)ごう。その研究を。祖父が教えてくれた。復活とは、肉体が蘇ることではない。
評価され、偉業が蘇ることなのだ。

……そしてその時、人は神となって復活するのだ。そうなれば、祖父がたとえ寿命を尽きさせてしまっても、常に私と共にいてくれる。

私はもうひとりぼっちにならなくていい。ずっと、おじいちゃんと一緒なのだ。

そして、祖父と私が二人で成した偉業が認められ、……祖父と私は神となり、永遠の安寧(あんねい)を得るのだ。

祖父を、神にする。

私も、神になる。

だから、永遠。

ずっとずっと、一緒…。

■昭和三十二年の脱走劇

…キーホルダーに括り付けられたカギがたったひとつ。それには鶏小屋と書かれていたが、今、恵理子がカギを差そうとしている錠前は鶏小屋のものではない。

すんなりと開くはずだった。そういう約束だった。だが、開かない。恵理子の額に玉の汗が浮かぶのがわかる。言い出したのは恵理子だ。

その恵理子の表情に浮かぶ焦りは、すぐに私たちにも広がった。

「や、……やっぱり鶏小屋しか開かないカギなんだよ…！　もうやめて戻ろうよ…！」

「静かに!!」

本当は私たちは、中庭で鶏小屋の掃除をしなくてはならないのだ。

それがここにいることが知られたなら。…そして、私たちが何の目的で、この裏口の錠前を開けようとしているのか、知られたなら。

……私たち四人は「手足をもがれた豚の刑」を免れないに違いないのだ………！

「恵理子、焦らないで…！　だって、そのカギで開くんでしょ？　試したんでしょ!?」

「………だから静かにしてって言ってるでしょ!?　カギは合ってるのよ！　堅いだけなんだか

ら……!!」
それはもはや悲鳴すれすれ。……私たちの心臓は、廊下中に響き渡っているのではないかと思うほどに、ばくんばくんと高鳴っているのだった…。その時、明らかに子供のそれとは違う足音が響いてきた。
「静かに…ッ!!　誰か来た…!」
三人は慌てて息を潜めて気配を殺すが、…恵理子の耳には入っていなかった。
まるで、この錠前を開けさえすれば、それで全てが決するかのように、がちゃがちゃと錠前とカギをいじり続けていたのだ。
「恵理子、誰か来るから静かに!!」
「……このカギで開くんだから…!!　夢じゃないの、私は確かに試して、…そして開いたんだからッ!　だから開いてよ、何で開かないの!?　開けば幸せになれる、こんな地獄からおさらば出来る!!」
「恵理子ッ、誰か来るんだってばッ!!!」


施設

■両親の死

父さんと母さんが死んだ。享年が何歳だったかも、よくわからない。私はそれくらいに幼かったから。

私ひとりを留守番に残し、両親の二人だけでお出掛けをしたからバチが当たったに違いない。

鉄道の事故だったという。

ひどい惨事だったという。

大勢の人が犠牲になったという。でも、まだ父さんは幸運な方だったかもしれない。

……生きて病院に担ぎ込まれて、私にいくつかの言葉を残すことが出来たのだから。

母さんなど、原形を留めてもいなかったらしいから。

「……お、……お父さん、お父さんお父さんお父さん……!!」

その、あまりに憐れな変わり果てた姿を、私は父さんだと認めたくなかった。父さんと呼びながら、それが違う人であってほしいと願った。だが、……無情にも、……それは父さんだった。

本当は父さんを起こすべきではなかっただろう。

……父さんは、私にまどろみを破られることによって、ようやく忘れかけていた苦痛を思い出

してしまったのだから。

「……うううぅ……。ううぅ……。」

「お父さん、お父さんお父さんお父さん!!」

父さんはきっと、泣きじゃくる私の頭を撫でたかったのだろうと思う。…だって、右の腕を動かそうとしたから。

でも、その腕は包帯でぐるぐる巻きにされていて、……しかも肘から先がなくなっていた。私の頭に被せるべき手の平は、ベッドの上には見当たらなかった。父さんの右手は、本当は怖い思い出しかない。私がいたずらや嘘をついた時、平手で打つのが主な役割だったから。でも、だからといって、なくなってほしいなんて願ったことは一度もない。それに、平手で打たれた回数に比べたら本当に微々たるものだけど……、……たまには私の頭を撫でてくれた。大きな手の平で、それ自体がご褒美であるように、…私の頭をやさしく撫でてくれたんだ。

私がどんなにちゃんと早起きをしても、ちゃんとおつかいが出来ても、もう父さんは私の頭を撫でることが出来ないのだ。いや、……本当はそれすらも微々たる問題だった。緊急手術の時間は迫っていた。手術の成功率は高くないと、予めお医者様には釘を刺されていた。本当なら面会謝絶なのに、会わせてくれたのもそういう意味なのだ。

父さんは、私の頭を二度と撫でられないどころか、……私の前から永遠にいなくなってしま

うかもしれない瀬戸際にいたのだから…。

「…お父さん、手術できっと良くなるよね⁉　お父さん、きっと元気になれるよね⁉　なれるよね⁉」

「………よ、よく聞きなさい。…お父さんは駄目かもしれない。もしもお父さんが死んでも、お前はしっかり生きるんだよ。」

「嫌だ嫌だ！　お父さんは元気になるよ！　お医者様がちゃんと手術してくれるもん‼　だから死んだりなんかしないんだよ‼」

古い時代の人らしい頑固な父さんだった。痩せ我慢が美徳で、絶対に辛いとは口にしない人だった。

だから、自分が死ぬかもしれないなんて弱気な言葉がその口から出て来ることが信じられなくて……、私は必死にそれを否定しようとした。……だが、私の願いごときでは、父さんの残された時間を延ばすことは出来ない。

父さんは、自分が言葉を残せる時間がすでに限られていることを知っていて、私に、本当に大切なことを伝えようとしていた。そんな父さんの必死の努力を、私は否定するように泣きじゃくって掻き消す。

…いっそのこと、そんな私を平手打ちしてほしかった。

泣いてわがままを言う私に、いつも父さんがそうしたように。……でも、父さんは私に平手打ちをすることはもう二度とない…。

「よ……、よく聞きなさい。……お父さんもお母さんもな、戦争で親類をみんな失ってしまった。だから…、お父さんが死んだら、お前の世話をしてくれる人は誰もいない…。」

それを改めて言われる必要はなかった。父さんも母さんも日頃からそれを口にしていたから私はよく知っていた。

……つまり、私にとって、父さんはこの世に唯一残る肉親なのだ。

「もしもな、お父さんが死んだら、高野先生を頼りなさい。高野一二三先生だよ。言ってみなさい。」

「高野、ひふみ…。」

「そうだ。高野一二三先生だよ。…高野先生はお父さんの恩師なんだ。きっと、お前を助け、けっ、げほッ!!　げへがはッ!!」

「お父さん、お父さんお父さんお父さん!!!!」

お医者様たちが大慌てでなだれ込んで来る。

お父さんはまだ何かを伝えようとしていたが、それはしゃべらないようにと制止するお医者様たちのせいで聞き取ることは出来なかった。私は弾き飛ばされて病室を追い出される。そし

て病院の廊下でおろおろするばかり。

……父さんがどういう状態なのか、手術はいつ始まるのか、誰も教えてはくれなかった。そして、父さんともう永遠に言葉を交わすことが出来なくなることも、…誰も教えてはくれなかった…。

私設養護施設

……父さんの言い残した「高野先生」の名前を、お役所の人とか色々な人に言ったと思う。そうすると必ず、連絡先は？　と聞かれた。私は、知らないと答える他なかった。すると決まって、その話はそれで終わってしまい、あるいはたまに「調べておく」という返事がもらえたが、それでも結果は大して変わらなかった。私の後見人は現れず、私は社会的な権利を享受するため、施設へ生活の場を移すことになった。当時は、まだ戦災孤児が少なくなく、公立の施設もたくさんあったがどこも満員の状態だった。また、善意の個人による民間の施設も多く存在していた。

私が送られたのも、そんな民間の施設だった。そもそも、孤児を引き取っても何の儲けにもならない。

だから、敢えてそれをやろうという人間には、私財を投げ打ってでも孤児を救おうという、尊敬に値する博愛の精神があったに違いない。

…そして、そんな愛に触れ、子供たちが健やかに育ち、感謝の言葉を述べて社会へ巣立っていくことを期待したに違いないだろう。だが、そんなに世の中は甘くない。

親に自分を育ててくれた恩を、自分が幼い内に示せる子供が一体、世の中に何人いるというのか…？　子供は両親の愛で育てられるように出来ている。だから、そんな環境を引き裂かれた子供たちは皆、心に深い傷を負っていた。

ましてや、子供の個性など子供の数だけあるのだ。……等しく慈愛を受けたからといって、誰もが天使のように育つわけじゃない。全員の心の傷が癒せるわけじゃない。だから、子供たちの中には少なからず問題児もいた。……いや、問題児と呼ぶのが適当だったかどうかもわからない。

それは、両親を失ってしまったことへの悲しみであったり、その悲しみを覆い隠すためのやり場のない怒りであったり。

……ひとりひとりと向かい合って話をすれば、きっとわかり合えることだったに違いない。

だが、…少なくとも私のいた施設では、そこまでの時間を職員が割いて、理解しようとする努力はしていなかった。少ない人数の職員が、規律に反さないよう見張り、統制するので精一杯

だった。

だから、子供たちが心の傷の痛みに呻くのを、問題行為としてしか括れなかった。見返りを求めない愛など、この世に存在しない。

この施設を設立した人間も、結局は見返りを求めていたのだ。

…子供たちの感謝という見返りを。だから、そんな淡い夢は現実にあっさりと引き裂かれた。子供たちは、施設を収容所呼ばわりし、職員たちの献身的努力に一切感謝せず、不満ばかりをぶつけた。

……だから、次第に職員たちも夢が醒め、慈愛だけではやっていけないことを悟ったに違いない。子供たちが収容所呼ばわりするように。…職員たちも次第に、収容所であろうとするようになっていった。相互の不信感による悲しい連鎖だった。

そして、子供たちを規律で縛りつけ、問題行為を抑圧する体制へとなっていく…。この施設の設立者の額縁は飾られているが、その顔が訪れたのを見たことはない。

彼は、施設に対して私財を投入しているだけで社会奉仕の悦に入っているのか、…それとも、天使のように育った子供たちに囲まれて祝福されるという現実感のない夢がようやく醒めたのか。…どちらかはわからない。

とにかくひとつ言えることは。私がいた施設は、そんな夢はとうの昔に醒めてしまっていた

ということだった。規律はたくさんあり、もっともらしいことをいくつも定めていたが、何よりも尊ばれているのは、沈黙だった。子供のおしゃべりは、近付けあったマイクのように、互いが互いを増幅して大きくなる一方。その挙句に喧嘩などが起こり、規律が乱れる。

そのため、子供たちの間での私語は禁止された。私語さえなければ、全てはうまく行くと思ったのだろう。

にもかかわらず、施設にはいつも人の声が聞こえていたと思う。その聞こえる声は概ね、二つ。職員の怒鳴る声か、子供の泣き声かのどちらかだった…。施設の中を自由に歩き回ることは許されていなかったから、どこで誰が泣いているのかを知ることも出来ない。泣き声と怒声に混じって聞こえる、ガンガンと叩きつける金属音。…何かしらの仕置きを受けているに違いないが、それがどんなものなのか想像もつかず、私たちは震えながら俯いて、聞こえないふりをしながら漢字ドリルを続けるしかない。

同室の誰かがそれを、「棺桶の刑」だと教えてくれたが、それ以上を教えてはくれなかったし、私もそれ以上を知りたいとは思わなかった…。昨日までとまったく同じに過ごしていても、職員の機嫌が悪ければ何にケチをつけられるかわからない。

…だから、私が知ろうとしなくても、「棺桶の刑」がどのようなものか身を以って知らされてしまう日が、突然訪れるかもしれないのだから…。廊下を職員の足音が近付いてくる。それ

に私たちは気付き、背筋を伸ばし、より一層、勉強に集中している風を装った。実際に勉強しているかどうかより、職員が見て勉強しているように見えるかどうかが重要だったからだ。私の隣の子がうつらうつらとしていたのに気付き、私は肘で小突く。

…それだけの合図でその子は気付き、周りの子と同じように背筋を伸ばすのだった。夕方が近い。……この時間が一番眠くて辛くて、…そして危険な時間だったのだ。ガチャリと私たちのグループ室の扉が開き、不機嫌そうな形相をした職員が姿を現す。

そして、全員が居眠りをしていないかをジロリと見回すのだ。たとえ、本当に真面目に勉強していたとしても、職員が居眠りをしていると感じたら駄目だ。

…だから私たちは、必要以上に真剣さをアピールしなければならない。私たちの席の間を職員が見回る。

…その足音が自分の脇をすんなりと通り抜けてほしい……。

私たちはそれだけを祈りながら、同じ漢字を何度も何度も何度も繰り返し書き続ける。そうやって勉強のふりをすればするほど、どこかの誰かの気の毒な仕置きの金属音がより一層耳に染み込んで来るのだった。ガンガンと金属と金属をぶつけ合うような嫌な音と、その度に聞こえる金切り声のような悲鳴…。一体どんな目に遭っているのか。そしてそれはどれほど恐ろしいことなのか。

…そして、「棺桶の刑」以上に恐ろしい懲罰がまだまだあるのではないか。

私たちはその恐ろしい想像を少しでも紛らわすために、より一層、画数の多い漢字を何度も何度も繰り返し書くのだった。

　かりかり、かりかりかりかりかり………。

…金属音と悲鳴が、いつまでも聞こえていた。ルームメイトと言葉を交わせる貴重な時間は、消灯後だけだ。施設は田舎の山の中にあったから、都会と違い、夜は本当に静かだった。シンと静まり返り、職員の気配がずっと彼方へ遠のいてしまったことを充分に確認した上で、私たちは私語を楽しむ。……それだけが私たちの娯楽だった。もっとも、私語を楽しむなどという洒落たものなどではなかった。なぜなら、話の内容は、陰口が一番多かったからだ。あの職員は誰々にだけ厳しいとか、不公平だとか、陰湿だとか。そんな話を、誰かが眠気に耐え切れなくなるまで延々と繰り返していた。そして、どうやったら陰湿な職員に仕返しが出来るのか、という話になり、…皆、妄想の中でだけ、職員に対し陰湿な復讐をする。……それを口にしながら泣き出してしまう子がいるくらいに、感情的に。

　こんな後ろ向きな話題でも、それは私たちにとってとても大切なガス抜きに違いなく、今日と変わらない明日に絶望しながらも、眠気に身を任すことが出来るのだった。……だが、たまにそれとは別の話題が出ることもあった。それが、………川の向こうの町にあるという、「百合丘

慈愛の家」の話だった。

「……うん。慈愛の家ではね、昼寝の時間の他に、おやつの時間もあるんだって。それで、そこは院長先生がとてもやさしい人でね…。」

慈愛の家も、ここと同じ民間の施設らしかった。だが、そこはこことは違い、とても温かな施設で、…今の境遇と比べれば夢のような場所ということだった。

何年か前、もっともっとこの施設が酷かった頃、何人かの子供たちが集団脱走を企てたという。(とんでもない話だ。今よりももっと酷かった頃があったなんて…)逃げた人数は三人か四人。正確なところはわからない。

そして彼らが目指した先が、その慈愛の家だったのだ。脱走は成功だった。不幸な一人を除き、残る全員が無事に慈愛の家の敷地に逃げ込めた。

他所の施設の敷地の中まで、職員は追いかけることが出来なかったのだろう。つまり、ここの職員にとって、他の施設の敷地は治外法権に当たるに違いない。職員たちはまんまと逃げられたことを悔しがりながら、……それでも捕まえた一人を引き摺って帰ってきた。きっと職員たちは、逃げ延びた彼らを連れ戻したかったろう。

誰一人逃がさないのが職員たちの意地に違いなかったから。…その意地は、その後の偏執的な施錠ぶりから容易にうかがえた。だが、逃げ延びた彼らが連れ戻されることはついになかっ

た。職員たちがどれだけ悔しがろうとも、彼らを連れ戻して懲罰を与えることは叶わなかったのだ。つまり、慈愛の家まで辿り着ければ、この地獄のような施設の魔手から逃げ切ることが出来る…。それに比べ、…捕まった一人のその後はあまりに悲惨だった。……だが、どのような仕打ちを受けたかは、具体的には伝わっていない。

残されているのは、当時を知る者の残した奇怪な単語だけ。「水を飲めないアヒルの刑」や「潰れた芋虫の刑」、「手足をもがれた豚の刑」。それらがどんな懲罰なのか想像もつかない。

ただひとつ言えるのは、私が知るもっとも酷い懲罰「棺桶の刑」よりも、もっともっと過酷なものらしいということだ。

……私は、その不気味な懲罰名から、その恐ろしさを推し測る他なかった。……その後、その子は念願叶い、この施設を出ることが出来た。彼は、この施設を無事出ることが出来て、自由な空の下で、存分にその空気を吸い込むことが出来ただろうか？　噂によるならば、…それは叶わなかった。

〝ボイラー室でかくれんぼをしていて、滑って転んで、延髄を損傷して死亡した〟

だからボイラー室に入ってはいけないと、その直後に施設の子供全員に訓示があったというが、……ボイラー室が常時施錠されていることを誰もが知っていた。

そう、誰もが理解した。その子は殺されてしまったのだ。ただ殺されたのではない。ありと

あらゆる責め苦の果てに、殺された。
脱走すればこの世の地獄を見せられるという、見せしめのために殺された。
だが、そのリスクを負って逃げ延びた子たちは、その名の通り、慈愛に満ちた「慈愛の家」で、ごくごく普通の、だけれどもここに比べたら格段に待遇のいい、生活を得られたのだ。
…本当に慈愛の家が天国かはわからない。どこの施設だって、似たようなものかもしれない。
……だが、それでも、ここの地獄に比べたら、どこだってマシに違いないのだ。ここをただ脱走しても、やがては警察の浮浪児狩りに捕まる。そうすれば、すぐに身元が割れて施設へ送り返されてしまう。
それは殺されることと同じ意味だ。だが、慈愛の家に辿り着くことが出来れば、そこで引き取ってもらえる。ここには送り返されない。
私たちは、いつかここを脱走してそこへ辿り着きたいという夢を語ることで、何とか辛い現実を忘れようとするのだった……。私たちのグループのリーダー格だった恵理子が、さらに声を小さくして私たちに言った。
「……みんなは、もしチャンスがあったら、…脱走したい…?」
脱走したくない人間などいるはずもない。これは言葉通りに受け取るなら愚問だった。……
実際はそうじゃない。

…もしチャンスがあったら、捕まったら恐ろしい目に遭わされる恐怖を乗り越えて脱走に踏(ふ)み切れる度胸(どきょう)があるか？　と聞いているのだ。だから誰もが、即答(そくとう)出来ずにいた。もしも、昔の集団脱走の時、全員が逃れきることが出来ていたなら、それがどれほど心強い実績(じっせき)になったことか…。しかも、その事件を受けて、以来、施設は脱走を警戒して色々と警備を厳重にしているという。

確かに、外へ通じるあらゆる扉や窓は厳重に施錠されていて、容易には逃げられない。

…同じ集団脱走がもう一度企てられたとしても、失敗する確率はずっと高くなっているだろう。三人が逃げて一人が捕まったなら、……今度は三人の内の二人が捕まる？　いや、…全員が捕まる可能性だって否定出来ない。

「……逃げられるものなら逃げ出したいよ。」

「でも、慈愛の家は近くない。橋だって長い。きっと捕まっちゃうよ…。」

「そもそも、お外にだって出られないよ。どこもみんな鍵がかかっている…。」

偏執的と言えるまでに施設内は鍵だらけだった。外からも内からも鍵が必要で、消灯の時間ともなれば、廊下ごとに区切られて施錠までされてしまう。

……間違いなく、ここは監獄(かんごく)だったのだ。噂では、施設は引き取っている子供の人数に応じて国から補助金をせしめているという。だから、私たちが脱走してしまうことがあれば、その

金額が減ってしまうというわけだ。
しかも、私たちがここでの境遇を外に漏らすようなことがあれば、この施設に査察が入り、色々と大変なことになるらしい。だからこそ、ますます偏執的に私たちを閉じ込めるのだ。
「チャンスがあったら、それはもちろん脱走してみたいけど…。でも、実際のところ、脱走出来るところなんてないよ。どこもみんな鍵が掛かってる。」
「………えっとね。…知ってた？　中庭の鶏小屋の鍵…。………階段裏のドアを閉めてる錠前と同じ鍵なんだよ…。」
「…え？　それって本当…⁉」
「しッ‼」
私たちの驚きの声を、恵理子が制す。量販されている錠前は、同じ鍵で開くことが多い。もちろん普通は、同じ鍵で開かないよう、異なる型番の錠前で揃えるのだが、…恐らく、錠前を掛けた職員もそこまで気が回らなかったのだろう。
この施設には、同じ鍵で開く二つの錠前が存在していたのだ。無論、鍵は子供たちに触れさせてもらえるものではない。
……だが、そんな鍵の中に、ほんのいくつかの例外があった。それが、鶏小屋の鍵だったのだ。グループごとに毎週当番がある。鶏小屋の当番になったら、職員室で鍵を借りて、小屋の

掃除や世話をしなければならない。

そして、決められた時間内できっちりと終えて、それを返却しなければならない。その当番の間、鍵は子供たちだけの手に委ねられる。

職員はたまに見回りに来るが、ずっと監視しているわけではない…。

「…恵理子ちゃん、………まさか、…その鍵で…⁉」

「や、やめようよ…！　危険だよ……！」

「…もちろん、一人なら危険だよ。……でも、みんなでなら少しだけ話は変わってくる。」

「どうして…？」

「昔の集団脱走の時、どうして捕まったのが一人だけで済んだか知ってる…？」

彼らも、必死だった。……集団脱走に当たり、逃げ延びる確率をわずかでも上げるため、…あることをしていたのだ。

…だから、犠牲者を最小限に抑えることが出来たというのだ。

「何をしたの？」

「…彼らはね、全員、バラバラに逃げたの。異なる方向へ、バラバラに。施設に職員が少なくなる日を狙って、三人バラバラの方向に逃げたの。」

そうすれば、…運に頼るが、逃げ切れる確率は多少高まる。

一人では逃げ切れないだろうが、…もし、職員が別の仲間を追ってくれれば、自分が逃げ延びることが出来る確率は高まるのだ。つまり、……恵理子は、私たちを集団脱走に誘っているということだった。この話は、乗る人間が多ければ多いほど有利だ。………だが、子供たちの中には、職員に内通することでご機嫌取りをしている連中もいる。
だから、むやみに声を掛けることも出来ない。その意味では、恵理子が私たちを脱走に誘ってくれたのは、信頼の証でもあった。恵理子に、私。そして智美に菊子。…四人。
「………ここに、一日でも長くいたいなんて子、いる？」
三人が首を横に振る。……だからといって、この計画に乗ると即答も出来ない。
「確かに…、私たちはこんなところに一日どころか一時間だっていたくないよ。」
「昨日とまったく同じことをしているのに、明日はそれを怒られるかもしれない…。もう耐えられないよ私…。何をすれば、あるいはしなければ怒られないのかわからない生活なんて、一秒だって耐えられない…！」
それは全員同じ思いだった。厳しい規律に耐えることは出来るかもしれない。……でも、曖昧な規律に耐えることがどれほど辛いことか。この施設のルールは、職員たちの機嫌だけで決められているといっても過言ではない。
これをやっていれば大丈夫、これをやらなければ大丈夫。

そんな境界線が、まるで潮が満ちたり引いたりするように、曖昧に変わるのだ。…そして、それを口にしようものならば、より恐ろしい目に遭わされてしまう…。
「私は、賛同者がいなくても脱走する気。……説明したように、一緒に逃げる人間が多ければ多いほど、私たちが助かる確率は高くなる。それによく考えて？　鶏小屋の鍵を使った脱走が起これば、裏口の鍵は必ず別のに変えられちゃう。つまり、この方法は一度しか試せないということ。……後から、やっぱり賛同すればよかったなんて思っても、もう手遅れっていうことよ…⁉」
「……でも、……ううぅ……。怖いよ……。」
「私も怖いよ…。捕まったらきっと殺されちゃう…！」
智美と菊子が特別に臆病だということはない。
でも、恐れる気持ちはよく理解出来た。…実際に脱走の話を持ちかけられ、捕まったら恐ろしい目に遭うらしいという話が、一気に現実感を帯びたからだ。それは恵理子も同じだったと思う。…でも、彼女はその恐怖を勇気でねじ伏せたのだ。
そして、私たちにその話を打ち明けてくれた。
「……なら、いつまでもここにいる気⁉」
「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ…‼」

「怖いのはわかる。でも、一度しかないチャンスなの。一度だけの勇気でいい！　美代子はどう？　私と行く？」
私は智美や菊子とは違い、過剰に震え上がってはいなかった。
…もちろん、私なりに震え上がってはいたが、取り乱している二人に比べれば、幾分か冷静に見えたに違いない。
「…………絶対に、逃げ切れる……？」
それを恵理子に保証出来るはずもない。だが、聞かずにはいられなかった。
「…保証なんかないよ。でも、あんたが一緒に来てくれるなら、私が一人で逃げ出すよりも逃げ切れる確率は高くなる。もちろん、あんたにとってもね。」
恵理子は打算っぽく言ったが、…実際は同意してくれる仲間が欲しかったに違いない。
…逃げ切れる確率が増えること以上に、それは大切なことだっただろう。
「智美と菊子は、怖いなら無理には誘わないよ。脱走は私と美代子だけでするから。二人だけでも十分。」
「……えっと、えっと……!!」
恵理子が締め切るような口調で二人を追い詰める。
それは一見冷ややかだが、二人に勇気を振り絞らせるための彼女なりの檄だったのだ。

仮に私たち二人が成功失敗を問わず脱走に及べば、同じグループである二人にも何かの連帯責任を求められるかもしれないのだから…。
「何も、明日すぐに実行するわけじゃない。鶏小屋の当番は一週間続く。その間に、チャンスをうかがえばいいいし、もし危険だと判断したら次の当番の週まで待てばいい。……慎重にやれば大丈夫。」
職員のローテーションとタイミングも大事だが、私たち各自が慈愛の家までの道を知っていなくてはならなかった。全員がバラバラに逃げる作戦なのだから、この辺りの多少の地理を理解していなくてはならない…。私は決断する。
「………うん。……私は一緒に行く。でも、脱走のタイミングは慎重に計ろうね…？」
「もちろんだよ。捕まったら殺されるんだからね！　…私だって下手なんか打ちたくないんだから…！」
「わ、私も行く…。」
「私も私も…!!」
置いてきぼりを嫌うように智美と菊子も同意し、私たちは突然の脱走計画に乗ることとなったのだ……。慎重に機会を待った。職員が少ない日を狙った。
…そして私たちは運を天に託したのだ。

ガチャン！

「………あ、………開いた……！」

ちょっとした力の加減だったのかもしれない。

…恵理子が何度試しても開こうとしなかった錠前は、ちょっとした角度を加えた時、拍子抜けするくらいにあっさりと開いたのだった。裏口の扉がゆっくりと開くと、……さぁっと冷えた風が通り抜け、私たちの頬を撫でた。そこは、まだ自由の世界ではない。……むしろ逆。そこにいることを知られたら、ただそれだけで恐ろしい目に遭わされてしまう、危険な世界。

だが、…その世界を潜り抜けなければ、その先へは辿り着けないのだ…。

「……よし、…行くよ……。」

恵理子はそう言おうとしたんだと思う。私たちもそれを合図に一斉に駆け出すつもりだった。

…だが、恵理子より先に聞こえた声は、彼女のものではなかった。

「お前たちッ、そこで何をしているッ！！！」

私たちは弾かれたように走り出す…ッ！　外は雨だった。あっという間に雨粒が全身を濡らし、衣服を張り付かせてしまう。それは普段なら、とても気持ちの悪いことだったろうが、今はそんなことをまったく気にしていられなかった。ただただ、降りしきる雨と鮮烈な外気の中

を、ひたすらに駆けた。砂利の上を駆け抜けるだけなのに、なぜか田んぼの中に足を突っ込んで走っているような感触がした。…足がずぼずぼと泥田にはまり、思うように足が上げられないあの感じ。いくら走っても走っても、ちっとも速度が出ないようなもどかしさ…！　体より心が急いている証拠だった。

後で職員が脱走だと喚くのが聞こえる。もうあとはがむしゃらに走るしかない…!!

「きッ、決めた通りに……バラバラの方向にッ!!　散って！！！」

恵理子の合図で、私たちは思い思いの方向に散る。自分を職員が追ってこないことを祈って…！　あぁ、私たち四人は全員、無事に慈愛の家で再会出来るだろうか…？　四人が無事揃えるか、……それとも、辛い時を共に耐えてきた誰かが欠けるのか。いや、それともあるいは…、……みんなは無事に辿り着けて、……その欠けるのが自分になる可能性だって……。

祈るような願いは、後から聞こえてくる職員の声で断ち切られる。

「待ちなさい、待ちなさい待ちなさいッ！！！」

追ってくる職員は私たちの人数より少ないはずだ。だから、運が良ければ自分には追っ手がいないはず。遠くから聞こえてくる職員の声が自分に対してでないことを祈りつつ、後を一瞬だけ振り返る。あぁ、そんな振り返る余裕があるならば、どうしてさらに一歩先へ足を踏み出さない？　どうしてもう一歩先へ逃げ延びないッ!?　振り返った私の顔に覆いかかる分厚い手

の平。荒い息をするために開かれた私の口に、その手の小指が紛れ込むのがわかった。
私は顔面を引っ掻かれるように摑まれると、砂利混じりの水溜りに押し潰すように突っ伏された。もちろん大人しくなんかするわけがない。私は暴れてもがく。その瞬間、職員の表情が目に入った。それは、…何て憎悪の表情ッ!! そうさ直感する。見せしめにするために私を生かして捕らえたいだけなのだ。そして、見せしめにした後のことを考えるならば、今この場で殺してしまったとしても、何の問題もないではないか。…そうさ、今この場で息の根を止めてしまおうとするこの世のものとは思えない憎悪を私は見る…! 私の口の中に入ったままの小指は雨粒にまみれ、私の舌に触れた。
……形容の出来ない嫌な味と感触が、悪寒となって私の全身を駆け巡る! あぁ、思った!!
この味は、私が殺される味だッ!! この無骨な指をそのまま私の気管にまで捻じ込んで、私をこの場で窒息させて殺してしまおうという、殺しの指なのだッ! だから、私は生きるために戦った!!
「んんんんんんッッ!!!」
「ぎやおおおっぉおおおおぅうッ!!!」
口の中いっぱいに生暖かい気持ち悪いのが広がる。たくさんの鼻血を出した時に、それを飲み込んだような感触。私はそれをブゥ!っと吐き捨てると、小指を押さえて転げまわる職員に、

今度こそ振り返りもせず背を向けて駆け出した。

「ぐおのやろおおぉ、ブッ殺してやるぅうッ!!!」

背後で、激昂する声が聞こえた。追ってくるのはもう職員じゃない。きっと野獣だ。捕らえたりなどしない。今この場で私を噛み殺そうとしている野獣なのだ…!! 靴はいつの間にか脱げていた。スニーカーなんて上等なものじゃない。死に物狂いで駆けたら、こんなものあっさり脱げてしまう。剝き出しになった素足は、そのヤワな足の裏で砂利をがりがりと食う。もちろんそれはとても痛いものだったが、今だけは気にならなかった。

……足を止めれば、その痛みを楽しむ余裕さえ与えられないのだからッ!! 木立が私の顔を擦り、腿に引っ掛けた有刺鉄線が一文字の傷痕を残す。砂利を食った足の裏は血塗れになり、石を蹴り続けた爪は割れて血を滲ませていた。職員の指を噛んだ時に口の中を満たした血が、私の口から涎と共にぼたぼた吐き出され、私の口元と胸元を真っ赤に汚していた。幼い少女が、全身を生傷や擦り傷だらけにし、血を真っ赤にこびり付かせながら、ただただ自由を求めて、走る。捕まれば殺される。追っ手に理性があれば、恐ろしい懲罰で虐め殺されるだろう。理性がなければ、今この場で殺されるだろう。殺されたくない、殺されたくない…!! 肺と心臓が爆発しそうだった。恐怖と酸欠で頭は真っ白だった。意識が途切れそうだった。そうさ、いっそ途切ってしまいたかった。……後から執拗に追ってくる職員の声さえ聞こえなくなっていた

ならば!!　膝がガくがくする。両足がきちんと動かない。糸の切れた操り人形のように転んでしまいそうだった。それでも、転んでは駄目なのだ。駄目なのだ駄目なのだ…!!　あ……、と思った時には、もう顔面全体で砂利を食う感触があった。鼻にツンと来る、転んだ時、特有のあの嫌な感触!　そして間髪を入れずに野獣の咆哮が私に圧し掛かる…!!

「この野郎ぉおおぉ、よくも俺の指を、指を指をぉおおぉッ!!!!」

「うわあああああぁあああぁあッ!!!」

■車中で

「あああぁあぁ…、……ぁ…。………はぁ…、はぁ!　はぁ!!」

跳ね上がった時、腿をハンドルにぶつけたらしい。ジンジンとした鈍痛が少し遅れてから襲ってきた…。私の全身は汗まみれだった。

額の汗を拭い、胸に手を当てて、自分の心臓がどれだけ高鳴っていたかを知る。痛む腿をさすった。すっと、一文字に。そこはハンドルにぶつけた、今、痛んでいる場所ではない。でも、今はそちらの方が痛む気がした。わずかな月明かりが照らす車中には、私を脅かす恐ろしい野獣はいない。靴を履いているし、血にも塗れてなんかいない。もちろん爪だって割れてはいな

い…。突然、窓が叩かれ、私はぎょっとした。
「三佐。時間です。」
「ぁ、……は、…ありがとう。」
仮眠を取るから、一時間したら起こせと言っておいたのだった。一時間という区切りは長すぎたかもしれない。仮眠は長すぎるとかえって体を愚鈍にさせる…。リクライニングを起こし、私は車を降りた。涼しい外気が、私の全身を心地よく冷ましてくれるのを感じる。月明かり以外、何もない山道。
その路肩に私の車とトレーラーに偽装した指揮車が停められていた。口の中が気持ち悪いのでいっぱいだ。……私はそれを路肩にぶぅっと吐き捨てた。それでも、口の中に広がるあの嫌な気持ち悪さは拭えなかった。
血と唾液と、そして雨の味。
額から流れ落ちる汗と雨粒が私の口に忍び込み、それらを飲み込むことも満足に出来ず、だらだらと零し続ける。あの、口の周りの感触を思い出し、鷹野は口の周りを拭うような仕草をした。
「…………………はぁ、…………………ふぅ…。」
自分らしくもなく緊張しているのかもしれない。だから夢見が悪かったのだろう…。

指揮車にはコーヒーメーカーがあったはず。…悪い夢にうなされたこの体を醒ますには、まずいコーヒーがぴったりに違いない。
「どう？　何か動きは？」
「いえ。何も。先ほど岐阜から定期連絡が。問題なしとのことです。」
「そう。……ねえ、どなたかコーヒーを淹れてくださらない？」
「はい。ミルクと砂糖は？」
「ミルクだけ。…あ、やっぱり砂糖も入れてくださる？」
口の中が何だか気持ち悪い。……小指を噛み潰した時の、汚らわしい血が口中を満たしたあの感覚。
甘ったるいコーヒーで口の中を洗わなければ、私は悪い夢から完全に醒めきることは出来ないようだった…。

■鷹野と東京

「…ハイ、バンケットより後方〜！　スピーチあと一人で乾杯に入ります。準備出来てるねー!?」

「後方OKですー。内部、全然聞こえないんでスピーチが終わるタイミングでコールをお願いしますー!」

「いいかい、各卓にビールは十本ずつだよ! ちゃんと自分の縄張りにスムーズに運んでね!」

蝶ネクタイをすっきりと着こなした若いホテル従業員たちが、ビールケースから次々とビール瓶を抜き出し、乾杯の準備に備えていた。

時折、インカムから内部の進行状況が伝えられ、彼らは宴会場にビールを運び込むタイミングを今か今かと待ちかまえている。通常の宴会ならば、ビールは先に並べておけるのだが、宴会に先立ち講演などがある場合はそういうわけにはいかない。

客人たちは長引く講演で、ラップをかけた寿司がどんどん干からびていくのには耐えられても、ビール瓶が汗をかいてテーブルを濡らすことを嫌うし、それ以上にぬるくなったビールを飲ませられることに耐えられなかった。

だから、乾杯に入る直前に配膳しなければならないのである。だが、乾杯の前にはスピーチが入る。決まってそれは冗長だ。

しかも、このような規模の大きい宴会ではスピーチの来賓も多く、乾杯のタイミングは非常にわかり辛かった。

その為、冷蔵庫から出されたビールケースはこうしてバンケットルームの外で野ざらしにされ、結局、彼らはぬるいビールを飲ませられるわけである…。とても広い会場内には、純白のテーブルクロスをかけられた白いテーブルが何十と並んでいた。それらのテーブルには八人近くが座っているのだから、この空間に数百人にも及ぶ人間がひしめいていることになる。それは大変な熱気だった。テーブルの上にはラップをかけた色とりどりの料理皿が並ぶ。

寿司や舟盛り、美しい果物皿。また、壁際には料理人たちがまな板を並べ、新鮮な料理を振る舞う準備をしていた。そんなテーブルにつく客人たちは、いずれも身なりの良い老紳士たちで、にじみ出す雰囲気から、それぞれが各界で知られた名士であろうことをうかがわせる。

そして、天井にぶら下がる巨大で美しいシャンデリアの迫力は、そんな賓客たちを迎えるに充分な格がこのホテルに備わっていることを無言で物語っていた。壇上では、乾杯前のスピーチにしてはあまりに長い大演説を、威厳ある老紳士がまくし立てていた。普通、この手の大演説は嫌われる。乾杯の直前ならなおさらだ。

だが、客人たちは、時にそうだそうだと叫び、時には大きな拍手がわき、熱気で盛り上がっていた。熱気、というのは好意的な言い方かもしれない。異様な盛り上がり方、と言う方が恐らく言い得ているだろう。

「大体ですね、自分の国の国旗に敬意を示すなという教育をしている国が、世界中のどこにあ

るというんですか!!　ないよ、そんな国はどこにもない！　日本だけなんです、そんなおかしい教育をしているのは!!」

「「そうだそうだッ!!」」

「国旗や国歌を強制されることは心の自由への強制？　馬鹿言っちゃいけない！　いいですか、国旗や国歌を愛するというのはですね、自然に湧いてくるもんなんです。自分を知り、郷土を知り、歴史や国家を学ぶ。そうしていく中で自然に自らが日本人であることを自覚していき、日本社会の一員を担う国民としての役割を理解していく。その結果、自然と湧いてくるのが国を愛するという心なんです!!　ところが反日教師どもは、それを軍国主義の洗脳だと、こう言っている。馬鹿言っちゃいけない!!　そう言ってる連中がやってることはなんですか!?　これから日本を背負っていく子供たちに反日妄想をすり込み、自虐教育で洗脳している！　日本は恥ずべき国で、貴様らはその国に生まれた恥ずべき人間であるとッ！　国家を蔑ろにし自分の生まれた国を否定せよと!!　そんなことを吹き込んでいるわけです！　無垢な子供たちはそれをそのまま鵜呑みにし、何の裏付けもなく信じてしまう。そりゃ当り前です！　学校は学ぶところなんですよ？　そこで教師がそうだと教えれば、子供たちは何の疑いもなく信じるんです。こんな卑劣な話がありますかッ!?　今こそ、日本の教育を私たちは体を張って守らなければならない時なのですッ!!」

万雷の拍手が会場に溢れ出した。
会場の老紳士たちは口々に肯定を連呼し、自らが同じ思いであることをアピールし合っていた。その壇上へ、たすきを掛けた一人の男が招かれる。
会場から再び万雷の拍手が沸き起こり、彼の登壇を歓迎した。流行のドラマの勇ましいBGMがその登壇を演出していたが、その圧倒的な拍手の前には、まったく不要なものだったに違いない。登壇した男のたすきには本人の名前が大きく筆書きされていて、××県知事選挙立候補予定と添えられているのがよく見えた。
「憂国の同志、〇〇〇〇君を皆さんにご紹介いたします!! 彼、〇〇君は、長年、前知事の下で知事室長を務め、その懐刀として長いこと××県政を支えて参りました。この度、前知事が高齢により勇退を決意され、その後任として指名されたのが、ここにいる〇〇君なのであります!!」
「私の県にも、実に悔しいことに反日教師が何人もおります! 教育の自由、心の自由などと宣いながら、子供たちに反日教育をしゃあしゃあと強いている!! 正しい歴史を伝えず、連中お得意の捏造と歪曲で、日本は悪かったの一点張り! 大東亜共栄圏の真の意味や、アジアを白人支配から解放しようとアジア各国のために血を流してくださった勇士たちのことは伝えようともしない! 戦前、どれだけのアジアの国が白人植民地であったか、そして日本がア

ジア解放に立ち上がり、戦後、どれだけの国が自治を回復したか、その意味すらも伝えようともしない!!　情けない!!　そんな連中が、真剣に教育を考える教師たちの中に混じり込み、神聖な学舎を汚し続けていることには、もう我慢がなりませんッ!!　私、〇〇〇は××県知事に就任し、そういった屑どもを全て追放しッ!　××県の教育を正しッ!　日本の将来を担うことが出来る健全な若者たちを育てることが出来る環境を取り戻すことで、日本再生百年の計の礎を築いていく覚悟でおりますッ!」

「彼、〇〇〇君は、来年の××県知事選挙に立候補いたします!　どうか皆さん、温かい応援とみなぎるお力で、彼、〇〇〇君をどうか男にしてやってくださいッ!!」

「〇〇〇ッ、日本の教育を正して参ります!!　どうかよろしくお願いいたします!!」

会場は三度、万雷の拍手で満たされる。誰もが立ち上がって拍手を送り、同志の決意にエールを送るのだった。誤解がないように、先にこの会合を説明しなくてはならない。

この会合は決して、政治結社の集会でもなければ、立候補者講演会でもない。信じ難いだろうが、大学の「同窓会組織」の会合に過ぎないのである。学校の同窓会組織は、誰にとっても馴染み深いもののはずだ。

小学校から中学校、高校、大学。それらを卒業すれば、ほとんどの場合は自動的に同窓会組織に組み込まれる。

そして数十年を経て同窓会の招待状が届き、旧交を温めて当時を懐かしむ、乙な経験をさせてくれるに違いない。だが、同窓会組織にも様々なものがある。

前述の、単なる同窓会の幹事を務める程度のものから、より結束した「勢力」と呼ぶに値するものまで様々だ。同窓会組織の結束が特に強くなったものは、同窓会とは呼ばない。これは「学閥」と呼ばれる立派な勢力になるのだ。日本社会では、同門の出身者が所属する組織を超えて結束する習慣がある。

また、出身校が優秀であればあるほど、その傾向は強くなるのが知られている。中でも、大学の最高峰である「旧帝大」出身者の結束が特に強固であることは戦前から有名だ。なぜ、優秀な人間ほど結束したがるのか。自分たちが高い倍率を潜り抜けてきたというプライドによるものとも、もちろん言えるかもしれないが、やはり最大の理由はコネクションによるところが大きいだろう。旧帝大出身者はエリートとして各界に散っていく。

そして、高い確率で将来、要人に成長していくだろう。その際、同窓会の結束は計り知れない意味を持っていくことになるのだ。

実際、平成の今日にあっても、旧帝大の出身者たちは強力な学閥・同窓会を有しており、各界に軽んじることの出来ない影響力を維持している。旧帝大間での交流も盛んで、その卒業生たちの結束は今日でも非常に固いのである…。さて、旧帝国大学と言えば、普通は東京大学の

ことを指すが、単に帝大といった場合、それは特定の大学のことではなく、帝大の名を冠した七つの大学のことを指す。

その内訳は、東京、京都、東北、九州、北海道、大阪、名古屋の七つ。……いずれ劣らぬ最高学府である。

これら七帝大の出身者たちが集う、言わば学校の枠を超えた同窓会組織は、実際に存在している。……この会場にひしめく老紳士たちも、そんな七帝大の同窓会組織の中のひとつの団体なのである。

ただし、この会合の団体は単に帝大卒業生であれば自動的に入会が許されるものではなかった。入会に当たっては、会員の推薦や社会に対する貢献度、品格など様々な条件を満たして初めて入会が許される「選ばれた紳士の同窓会」なのである。

ゆえに、会員たちは各界の要人たちがひしめき、明らかに単なる同窓会組織を超えた政治力を持っていることが容易にうかがえた…。だが、この会にはもうひとつ、重要な入会資格があった。

それは、国家への貢献と日本再生、国を憂う心や強い愛国心。その結果、非常に右傾化した国粋主義の団体となっていた。壇上では依然、××県知事選に打って出るという男が熱弁を振るっており、戦後日本がいかに憂うべきものに落ちぶれたかを説き続けていた。

その熱弁に熱心な相槌（あいづち）を打つ老紳士たちに混じり、鷹野の姿があった……。鷹野はこの会合に慣れているようで、今日のこの会合も、普段に比べて特別、異常だという感じでもなさそうだった。ではあるが、相変わらずの過剰な熱気に、ややうんざりした表情を浮かべているのだった。鷹野がこの会合に席を与えられている以上、彼女がこの「同窓会」の会員であることは明白だった。

ということはつまり、彼女は非常に優秀な学歴を持ち、のみならず同席する老紳士たちに負けない社会貢献が認められていて、かつ、偏（かたよ）った愛国心があること。だが、鷹野が満たしている入会資格は学歴のみで、その他の諸資格は実は満たしていなかった。

様々なコネクションから推薦を受け、特別に入会を許されたのだ。…つまり彼女は、この会の人間たちほど偏った思想を持ってはいなかったのである。にもかかわらず、なぜ鷹野はわざわざ好んで、このような会合に席を持ち出席しているのか。その理由は恐らく、今、壇上で熱弁を振るっている知事選候補予定者の男と同じに違いない。同じように、壇上の男も鷹野と同じく、本来はそれほど偏った思想を持つわけでもない。今日の会合に合わせ、彼らが好みそうなスピーチを用意してきただけのことである。

政治家が一番欲しいのは票だ。票は個人が投じるものだが、一人一人に支持を訴えていたら時間がいくらあっても足りない。……となると、統一した意見や意志を持つ集団に対して支持

を訴えていく方がずっと効率がいい。つまり、壇上の男は、この会の趣旨に賛同する内容のスピーチをすることで、自分を同志だと認めさせ、彼らの有する強力な支援を受けたがっているということなのだ。会場の老紳士たちは、自分と志を同じにする同志を最大限に応援するだろう。

様々な便宜や応援、そして援助。それも計り知れない規模で。今日の議事がそのまま進めば、会は彼を応援することを正式に承認し、政治資金団体を通じて多額の資金を援助することになろう。

もちろん、資金以外の形でも何かの協力をするに違いない。当然、壇上の男だけが利するわけではない。壇上の男は、この圧倒的な応援を受けて、恐らくきっと、来年の××知事選に勝利を収めるだろう。

同窓会は会員に現職知事を迎え、ますますに政治的発言力を強めていく。そして、無視することの出来ない強力な勢力へと成長を続けていくのだ……。今、ここをお読みになられている読者諸兄は恐らく、こんなものはもはや「同窓会組織」ではないとお感じだろう。

それは間違っていない。この段階にまで至れば、これは立派な「結社」だからだ。

いや、その団体や活動をオープンにしていなかったなら、それは「秘密結社」とさえ呼ぶことが出来るのだ。一部の諸兄は恐らく、こんな怪しげな団体が日本に存在するわけがないとタ

力を括られているに違いない。
だが、この説明に関してだけは一切のフィクションはない。私たちの社会にも、こういった勢力や組織がいくつもあり、強力な政治力を発揮して、国家の施策に影響を与えていることを理解する必要がある。
それらは、前述してきたような学閥であったり、あるいは各界各党の勉強会、業界団体、諮問機関、宗教団体、奉仕団体、様々だ。また、そのスタンスも右派左派、タカ派ハト派と様々である。
……それらの具体的な団体名は、ここでは挙げない。しかし、丹念に新聞を読んでいるならば、時には目にすることもあるはずだ…。日本では、こういった勢力を示す単語があまり一般的ではない。
秘密結社などという単語を耳にすれば、恐らく諸兄の中には、白い三角頭巾を被った怪しげな組織を連想してしまい、失笑してしまう方もおられるだろう。
だが、それは残念ながら大きな間違いだ。日本よりもはるかに巨大な国土と国民を有するアメリカでは、もちろんこういう団体もずっと多く、また絶大な影響力を持つ無視出来ない勢力となっている。
そのため、こういった勢力を示す単語も、結社などという規模では示さない。

時にはホワイトハウスよりも力があると囁かれ、シャドーガバメント（影の政府）と呼称されることも少なくないのである…。我らの日本にも、戦前は「財閥」という名のシャドーガバメントが存在していた。

敗戦により、GHQによって解体されたが、戦後すでに四十年が経過している。馴れ合いと根回し、寝技が得意な我が国に、再びシャドーガバメントが生まれていない保証などないのである…。

そんな、シャドーガバメントの内のひとつの会合に、鷹野三四の姿はあった…。

小泉翁との面会

その景色を漠然と見たなら、広大なゴルフコースとゲストハウスのように見えたかもしれない。ホールを回るゴルファーの姿こそ見えないが、きっとそう思うに違いない。

だが、それは間違っている。なぜなら、これはゴルフコースではなく、広大な芝生の庭だったからだ。

そしてゲストハウスに見えるものは、とてもお洒落な豪邸なのだ。……これが個人の敷地と家であることに気付いた時、一般的な市民は驚きを隠せないだろう。もちろん、内装も外観に

劣ることはない。

贅沢な絨毯。壁には様々な動物の剝製が飾られ、棚には値段を聞きたくもない高級酒がずらりと並ぶ。…そんな客間に鷹野はいた。ノックがあり、車椅子に座った老人と、それを押す若い女が入って来た。鷹野が立ち上がって会釈をしようとすると、老人は、立たなくていいとそれを右手で制した。

「いい、いい、立たんでも。久し振りだの～～。いつでも遊びに来なさいと言っとるのに。」

「そのお言葉だけで光栄ですわ、小泉先生。」

小泉と呼ばれた老人は、杖と女の手を借りながら、ソファーに腰掛ける。深いしわが刻まれ、自分ひとりの力では満足に腰掛けることも出来ないほどに老衰している。……だが、そこまで老いてなお、彼は絶大な影響力を持ち続けているのであった。

「相変わらずお盛んですわね。首筋、口紅がついておりますわよ。くすくす…。」

「ほっ？　そりゃ本当かね、はっはっはっは。やれやれ、こりゃお恥ずかしいの～～。」

老人の首に口紅などついていない。

車椅子を押してきた女が、ヘルパーというには美人過ぎ、仕草が妙に艶かしかったから、鎌を掛けてみたのだ。そしてどうやら、鷹野の想像通りらしかった。

明日にもお迎えが来てもおかしくないような老いぼれなのに、下半身だけは棺に入る直前ま

で現役のつもりらしい。これでは死神も呆れて、もうしばらくは迎えに来そうもなかった。
「三四ちゃんも、いつの間にかすっかり美人さんに成長したの～。いつまでも小さいと思っとったらいつの間にの～～。」
「ご冗談を。本当にそう思われていたら、私のおしりを撫でようなんてなさいませんわ。」
「はっはっはっはっは！　老い先短い年寄りに触らせても、減るもんではないに～。」
「私よりももっと柔(やわ)らかいおしりをさんざん撫でておいでのくせに。くすくすくすくす。」
鷹野と老人は、しばらくの間、品のない話で盛り上がった。その様子から、二人の関係が短くなく、気の置けない仲であることがうかがえた…。やがて、先ほどの女がお茶の用意に戻ってきた。それを済ませて退室すると、その足音が遠のいたのを聞き届けて、老人は言った。
「………しかし。三四ちゃんは本当に立派な子だの～。…高野くんも、これほど立派に育ってくれて、きっとあの世で鼻高々(はなたかだか)だろうなぁ。」
「そうであればいいのですが。…祖父の偉業には、私など足元にも及びません。」
「高野くんも、色々と運がなかった。時代にも恵まれんかった…。もし、何もない時代に研究をしておったなら、あんたに引き継がせることもなく、見事、研究を完成させておっただろうの～…。」
「ですが、そういう時代だったからこそ、皮肉(ひにく)にも祖父は雛見沢症候群の存在に気付くことが

出来ました。」

「…………世界は、もう核の時代だ。アメリカとソ連が山ほどの核で睨み合い、列強が核を以って発言権を得る。……しかし日本は、非核三原則で核を永遠に放棄しちまった。核なくして国もない時代なんだ。…悲しいこったの。」

昭和中期。東西の緊張は高まりつつも、核を突きつけあった均衡は冷戦という名の仮の平和を与えていた。

国連常任理事国は核武装する大国で占められた。彼らは核による優位を不動にするため、核不拡散の条約で世界を縛り、日本を含む非核国の台頭を永遠に封じた…。

日本が再び、世界と対等に渡り合える国家になるためには、核武装、もしくはそれに匹敵するカードが必要になる…。そう考える人々もいた。

「現実的に考えて、我が国の核武装は永久にありえないでしょうね。」

「だろうの～。国民の理解を容易には得られんな。それを無視して核武装したとしても、外交カードにはなりえん。」

日本は核武装を放棄する代わりに、アメリカの核の傘に入ることで抑止力を得ている。そのアメリカと対等な関係になりたいと願う人々にとって、その鍵は核武装をおいて他にないと考える者も少なくなかった。

だが、現実問題として日本が核武装することはあり得ない。それに、核武装すれば直ちに日本が列強に加われるかと言ったら、それもまた微妙な問題だった。

鷹野と老人は、しばしの間、核を巡る世界の均衡について、思い思いの持論を述べ合うのだった。鳩時計の音で、話が大きく脱線していたことに気付き、二人は笑いながら本題に戻ることにした。老人は、鷹野がこの部屋に通される前から置いてあった、机上のアタッシュケースを指差す。鷹野は、小さく頷くと、それを開けて中身を晒した。……中身はぎっしり詰められた新札の壱万円札だった。この大きなアタッシュケースをいっぱいに満たすには、一体、どれだけの金額が必要になるのだろう。

新札の百万円の束がちょうど厚さが一センチになるというのだから……、……下手をすれば、金額は八桁を超えかねなかった。しかも、鷹野が今、開けているアタッシュケースと同じものが、見ればあと二つ、脇に置かれているのだ。だが、鷹野も老人も、その凄まじい中身に特別驚いたりはしない。鷹野はアタッシュケースを閉じると、頭を下げた。

「ありがとうございます、先生。このご恩は忘れません。」

「はっはっはっは。金は人生の長い若者が持つべきだの。年寄りがあの世まで持っていくもんじゃない。金はあるだけ物を言うが、現金はさらに物を言う。大事に使いなさい。」

「もちろんですわ。祖父の夢を実現するためだけに使います。」

「高野くんが羨ましいの。よいお孫さんを持たれた。きっとあの世で、あんたを自慢しているだろうの～。」
「まだ自慢されるようなことは何もしていません。祖父の研究を完成させたとき初めて、私は祖父に褒めてもらえる資格が得られるのだと思います。」
「……本当に羨ましい。ウチのせがれたちは全然ダメだ。金儲けのことしか頭にない。…金は儲けてからが大切なんだ。その儲けた金で、御国のために何を貢献出来るかが大切なんだ。それこそが、今日まで自分を育んでくれた御国へのご恩返しっちゅうもんなんだがの…。」
「あら、たくさんの愛人たちに気前良くおごるのも御国へのご恩返しなんですの？」
「もちろんだとも。あいつらが買い物をすれば、金は巡って御国に戻る。金は天下の回り物だ。」
　だが、その気前良くおごられた愛人たちは、おそらく海外ブランドを買い漁るだろう。…老人の思惑通りになるかどうかは怪しい。鷹野は、それも含めてくすくすと笑った。
「だが、女どもにバラ蒔く金と、三四ちゃんに託す金は意味がまったく違う。」
「ええ。存じております。」
「三四ちゃんは今日までよくがんばってきた。礼を尽くし、大勢の人たちの信用と支持を取り付けた。今だから話すが、晴山くんも望月くんも、最初は君のことを若過ぎると批判的だった

んだがね。はっはっはっは。だから私も、三四ちゃんのその努力を認めて、その金を託すんだ。」

「はい。」

「…そしてな。その金を私が託す、つーことはの。私が三四ちゃんを、髙野くんの研究の正式な後継者だと認めたということなんだ。」

「ありがとうございます。私ごとき若輩に委ねてくださったことに、深く感謝いたします。」

「いやいや！　これは髙野くんと君の研究だ。彼も三四ちゃん以外が引き継ぐことを望まなかっただろうの〜。だから、三四ちゃんがここまで上り詰めたお陰で、他の年寄りたちをより説得しやすかったわけだ。」

「……祖父の完成出来なかった研究を、私が完成させることだけが、私が出来る祖父への唯一の恩返しですから。そのために求められる努力ならば厭いません。」

鷹野は、積み重ねてきた苦労を思い出すように、ほんの少し自虐的に笑った。

言うまでもなく、鷹野は目の前の老人から見れば孫世代、いや、それ以下かもしれない。それだけ年齢の離れた世代の人間たちから信用を得るために、鷹野がどれだけの苦労をしてきたか。その苦労を想像することの出来ない者に説明するのは難しかろう…。そして、鷹野は勝ったのだ。

味方を増やし、敵を退け、支持を増やし、自分の存在を認めさせた。
長い時間を掛けて己が信用を築き上げ、長老たちと歓談出来る格にまで成り上がったのだ。
だからこそ、今日の場こそが、鷹野の短くない苦労の日々の集大成なのである。彼女は今や、強力な勢力の後ろ盾を正式に得、祖父の果たせなかった研究を完成させるために羽ばたこうとしていたのだ……。
「さて。………高野くんの研究を正式に引き継ぐことになったなら。…三四ちゃんにも話しておかなきゃならんことがある。」
「何でしょう。うかがいます。」
そこで老人は一度言葉を切り、卓上の煙草入れから高級煙草を一本、抜き取った。鷹野は、慣れた仕草で老人の煙草にライターの火を貸す。
鷹野には喫煙の嗜好はない。……老人が煙草を嗜むことを知っていて、ライターを懐に忍ばせているのだ。こんなささやかなことがいくつも積み重なって、今日の彼女の信用を築き上げている…。
「……高野くんが雛見沢症候群の存在に気付いたのは、日本ではなく、満州だった。」
「はい。祖父の手記によるならば、昭和十五年頃から、当時、主に関東軍に多く送られていた雛見沢出身兵士による末期症状事件の存在を知り、雛見沢に存在する未知の寄生虫症の存在を

予想した、とあります。」

戦争という過酷な状況下にあっては、時に人は精神を壊す。そんな中、雛見沢から遠く離れた戦地に送られ、緊張した毎日を強いられていた雛見沢出身者たちは、時に末期症状を発症し、錯乱して歪な事件を引き起こした。

ただ、広大で混乱を極めた戦地でのこと。個々の事件は個別に扱われ、その裏に潜む何かに気付く者はいなかった……。

「当時、高野くんは軍医少佐として関東軍に行っており、現地の防疫研究所で各種伝染病の予防対策について研究していた。そんな中で偶然、いくつかの錯乱事件が全て同じ出身地の兵士によって起されていることを知った。高野くんは、雛見沢出身者に特有の症状ではないかと仮定し、個人的にこの研究を始めたのだ。……そして、雛見沢出身の兵士を研究所勤務にして集め、色々と調査した。そして雛見沢独特のオヤシロさま信仰の存在を知り、特異な性質を持つ寄生虫症の存在を確信したのだ。」

それだけのことで寄生虫症と断言することは、今日の諸兄には短絡に過ぎるように思われる方もおられるだろう。

だが、二十世紀初頭。当時の最先端医学であるドイツ医学によって、未知の病気の数々が細菌や寄生虫の仕業であると解明されている時期でもあった。未知の病気の裏にはきっと、未知

の病原体がいるに違いないというのは、決して短絡的思考ではなかったのである。例えば、今日ではビタミンB_1の欠乏が原因であると解明されている脚気も、二十世紀初頭においては声高に未知の病原体の仕業であると叫ばれていた事実がある…。

「はい。祖父はその研究が軍にとって価値のあるものになるのではないかと予想し、予算を求めましたが一笑に付されたとか。」

祖父は研究者としてはとても熱心で優秀だったが、それをアピールし理解を得る政治力については生涯、皆無だった。

雛見沢症候群。

…いや、人の脳に寄生し感情をコントロール出来る可能性の存在。…誰も解き明かしたことのない謎に初めて気付いた快挙を成し遂げながらも、祖父はその快挙を他人にアピールすることについに成功出来ず、支援者を得られないまま、快挙に対する正当な評価を得られないまま、孤独の内に人生を終えた…。研究は、個人の力では限界がある。人材、資金、バックアップ。それらがそろって初めて成し遂げられるのだ。私は祖父の失敗がそこにあったと思い、そこを蔑ろにすることがないよう、今日まで積み重ねを続けていたのだ…。

「………当時の軍部は、低予算で且つ即効性のある兵器を期待していた。高野くんの研究は、非常に興味深いものではあっても、当時の軍には期待されなかったということだの…。」

「ですが、先生は唯一、祖父の研究に理解を示してくれたと聞いています。祖父は先生のことを無二の親友と記していました。」

「高野くんとは同郷だった。同じ蕎麦屋を知る人間と、遠方の戦地で会えるというのは奇跡的なことだったの～。彼とは年は離れていたが、私たちは固い友情で結ばれていたのだ。だから、高野くんからはよく話をされたの。画期的な研究になるに違いない、本格的な研究のために予算を付けられるよう根回しして欲しいと何度も相談を受けた。」

「祖父の手記にも、先生が色々と各方面に掛け合ってくださったことが記されています。……結局、祖父の研究が認められることはありませんでしたが、先生だけが理解者でいてくれたことは、きっと存命中、大きな心の支えになっていたものと思います。」

「だが、結局は何の力にもなれんかった。……だから、高野くんにしてやれなかった協力を、三四ちゃんにするんだ。三四ちゃんに協力するのは、高野くんに対する私の罪滅ぼしでもある……。」

「……ありがとうございます。祖父は、良い親友に恵まれたと思っています。……軍上層部に、先生のように理解を示してくれる方が少しでもいてくれたなら。祖父の人生はもっと違ったものになっていたかもしれないと思うと、とても悔しく思います……。」

そこで老人は、目を閉じて少し考え込むような仕草をする。……そして、ほんの少し遠くを

見るような目をしながら言った。
「…………実はな。真実はそうではない。上層部は高野くんの発見に少なからず関心を持っていたのだ。」
「……え？　それは初耳です。でもそれならなぜ祖父の研究を認めなかったのですか…？」
「ある事情により、高野くんに雛見沢症候群を研究させたくない都合が出来たのだ。その理由は、私と一部の高級将校しか知らん。私を除き、全員が他界した今、…高野くんの後を継ぐ三四ちゃんには話しておこうと思う。」
「…………研究させたくない都合とは、…何ですか。」
私は今日まで長いこと、祖父の研究は、みんなが馬鹿にして無視しているから日の目を見ないのだと信じてきた。
戦時中に雛見沢症候群の秘密を暴こうと思った祖父は、自分の所属する組織である軍に研究予算を求めた。
だが、さっき老人が言ったとおり、軍は即効性のある兵器を期待したため、祖父の研究に関心を示さなかったと、…そうだと信じてきた。それが実は、軍は関心を示していたなんて、本当に初耳だった。
「それを話すには、当時の満州における関東軍のことを話しておかなければならん。当時、関

東軍は満州にあったが、北進するか南進するかで意見が分かれ、対立しておった。」
　当時、日本は満州に軍隊を構え、北に進みソ連を牽制するか、南に進み領土を拡張して資源地帯を確保するかで意見を二つに分けていた。ソ連とその前身であるロシアは厳寒の国土の都合上、冬場に凍結しない不凍港を常に求めており、領土を南に拡張しようとする南下政策を採り続けていた。その南下政策との激突が日露戦争だったと言われている。日露戦争は、歴史的評価では日本の勝利ということになっているが、実際はポーツマス条約で講和した痛み分けの戦争であり、疲弊した双方が矛を収めあっただけに過ぎない。ロシアが降参し、全面的に降伏したわけでは決してないのである。その為、ロシア脅威論は燻り続けることになる。
　その後、帝政ロシアは革命で倒れるが、日本としては新生ソ連の南下に対する脅威が払拭出来ていない状況にあった。
「歴史的には南進しますね。日ソ中立条約を結んで北進を放棄。その結果、独ソ戦開始後、押されていたソ連軍は極東の戦力を対独戦線に集中。一時はモスクワ直前にまで迫っていたドイツ軍に対し猛反攻を開始し、戦局を逆転させます。」
　日ソ中立条約は結んでいても、いつ日本が攻め込んでくるかわからない。そう思うからこそ、ソ連は極東に戦力を割かざるを得ず、対独戦線に十分な戦力を集中出来ずにいた。そもそも、ドイツとソ連も独ソ不可侵条約を結んでいた。ドイツはそれを破棄してソ連へ攻め込んでいる。

しかも日本とドイツは軍事同盟を締結している。

それを思えば、ソ連がたとえ日本と中立条約を結んでいても安心出来なかったのは当然に違いない（皮肉にも、そのソ連側から日ソ中立条約は破られるのだが、その歴史的評価はここでは割愛する）。

「その通り。ヒトラーが三国同盟を結んだのも、日本がソ連の反対側を牽制することを期待したものだ。だが日本は結局、北進を放棄する。ドイツの攻勢が優勢だったため、経緯を見守ろうという意見が支配的だった。仮に北進するとしても、ドイツがモスクワを陥落させるのが最前提だと考えられとった。…それをゾルゲにすっぱ抜かれ、ソ連は極東国境の重戦車を全て独ソ戦線に送ったのだ。そしてモスクワ戦は敗北が確定し、クルスクの戦い以降、ドイツは大敗走を迎えることになる。」

「…歴史のターニングポイントですわね。」

冷戦時代になればこそソ連は世界を二分する強国という認識だが、少なくとも昭和十四年の直前までは関東軍にそういう認識はなかった。日露戦争で一度勝利を収めていたし、帝政ロシアが革命で倒れて誕生した新生ソ連政府がまだ磐石ではないとタカを括っていたのだ。

結局、その過小評価は昭和十四年のノモンハン事件で改められることになる。高度に機械化されたソ連軍と短期間とはいえ激戦を繰り広げ、大きな損害を受けた関東軍は、ソ連とは戦う

べきではないと知り、日本は日ソ中立条約へと傾いていく…。

「だが、少なくともノモンハン事件の直前までは、関東軍はソ連を強く意識しており、北進と南進で意見は真っ二つに分かれていた。そのため、対ソ戦への軍備増強の見地から中国との全面衝突は避けるべきであるという慎重意見もあったのだ。」

「でも確か、盧溝橋事件を境に、日中戦争へと展開していきますね。」

昭和十二年七月。

北京郊外の盧溝橋にて日本軍と中国軍が睨み合っていた。

七月七日の深夜。

訓練中の日本軍に対し銃撃があり、両軍は戦闘状態に突入。この事件が切っ掛けとなり、長い日中戦争が始まることとなる…。

「うむ。歴史的には、あの事件が日中戦争の幕開けのように言われとる。……だが、当時、北進と南進で意見の分かれた軍部では、中国と全面衝突するべきか否かでも意見が分かれておったのだ。いや、それどころか事件がこれ以上大きくならんよう、参謀本部が穏便な解決を指示したほどだった。」

北進派は、対ソ戦略の見地から日中の激突は無意味であると主張し、盧溝橋事件を穏便に終わらせることを望んでいたという。

だが、内地の南進派は、この事件を切っ掛けに中国へのさらなる派兵を決定。中国に対する強硬政策を打ち出し、かくして日本と中国は盧溝橋事件を切っ掛けに全面戦争へと突入していくこととなるのである。その後、ノモンハン事件で辛酸を舐めた日本は対ソ戦略を大きく転換。日ソ中立条約を締結して、南進へ路線を確定。

ますます日中戦争は泥沼の様相となっていく……。

「……もし、盧溝橋事件がなかったなら。その後の歴史は今日と大きく変わっていた可能性もあるの。……結局、いつか戦争になり、同じ歴史を辿ったかもしれん。だが、南進派にイベントを与えなければ、軍部は慎重論を維持してソ連を牽制し続け、ソ連は東西双方に軍備を割かねばならず、…………ひょっとしたら、ドイツはモスクワを陥落出来ていたかもしれん。そうなれば日本もシベリアへ雪崩れ込んだかもしれない。……今の世界地図は今日とはまったく異なったものになったかもしれんの…。」

仮にモスクワを占領出来ただけでドイツが大戦の覇者となれたかは怪しい。

ドーバー海峡を隔ててイギリスは依然、健在だったし、アメリカは虎視眈々と開戦の機会をうかがっていた。それに、あのナポレオンも一度はモスクワを占領している。でも結局、冬将軍には勝てず撤退していったのだから。

「…あの戦争が、枢軸国の勝利で終わったかもしれない、ＩＦの世界ですわね。」

「うむ。盧溝橋事件での一発の弾丸が、世界の歴史を変えてしまったかもしれん可能性もあるということだの。」

「……確か、その弾丸を、どちらが発砲したかで、歴史解釈が日中で異なっていましたわね。」

「日本側の主張では、中国軍陣地に近付きすぎた日本兵に対して中国軍の一兵士が、恐怖心から発砲してしまったのではないかと言われとる。だが中国側は、発砲は日本軍の陰謀であると主張しとる。」

「でも、銃撃はあった。誰が撃ったかはわからずとも、それが日中戦争の引き金になった。」

「うむ。それだけが、歴史の真実だの。」

「…………しかし先生。その話と祖父にどんな関係が？」

「盧溝橋事件の時。深夜、訓練中の中隊に対して銃撃が行なわれ、ただちに全員が集合し点呼を取った。その時、一人だけ兵士がいなかった。この兵士はその後、戻って来るのだが、彼が伝令に出て中国軍陣地に近付きすぎたことが原因ではないかと囁かれた。…………ところで。……この兵士が雛見沢出身の兵士だったことは知っているかね…？」

「……え…。そうなのですか…!?」

「高野くんから雛見沢症候群の話が出て、雛見沢出身者には突如として錯乱する可能性があることがわかった時。…私たちは関東軍に配属されている雛見沢出身兵士のリストの中に、盧溝

橋事件のその兵士が含まれているのを知った。」

「では、……盧溝橋事件の発砲とは…、」

「真相はわからん！　だが、雛見沢症候群を末期発症させた錯乱兵士による発砲の可能性が否定出来なかった。その兵士は事件の際、戦死している。当時の資料がなく、どういう状態で死に至ったのかは記録がない。」

「…………………。」

その後の日本軍側の主張と交渉は、中国軍側からの発砲を前提に進められた。

事件のわずか数日後には、中国側からの謝罪を求めて、示威行為としての三個師団の増派が決定。中国側はもちろんこれに反発。一気に情勢を悪化させていったのである。

「そんな中で雛見沢症候群の研究がなされれば、日本側の主張に悪影響を与えかねないとの懸念が起こったのだ。政治的グレーゾーンに踏み込む危険性を配慮し、高野くんの研究は却下されたのだよ…。」

「……………そのため、…戦争が終わった後も、祖父の研究が顧みられることがなかったと…？」

「そうだ。……戦争は終わったが、歴史認識の溝を巡っての対立は続いとる。高野くんにその気はなくとも、雛見沢症候群の研究が公になれば、終わった戦争の諍いを蒸し返すことになり

かねん。……そう危惧した重鎮たちが、戦後も高野くんの研究を黙殺するよう、根回しをしておったのは今だから言える話だ。…私にも、高野くんに協力しないよう、長く釘を刺されておった…。」

「…………………。」

鷹野は努めて平静を装ったが、…口の端が苦々しく歪むのを隠しきることは出来なかった。祖父の研究に誰も関心を示さなかったのは、それを良しとしない黒幕たちの暗躍があったからだというのだから。

……黒幕たちがそれだけ危惧するということは、…皮肉にも、祖父の研究の重要性を認めていたということ。………祖父の孤独な生涯が悔しくて悲しくてたまらなかった。

「だが、そういう連中は他界し。もう当時を知る者は私しかおらん。もし今、まだ高野くんが生きていたなら、私はそれを謝って全面的な協力を申し出るつもりだった。だが、彼はもういない。だから、私は三四ちゃんに謝り、高野くんにするはずだった協力を、君にしようと思ってるのだ。」

「……よろしいのですか？　私が雛見沢症候群の研究をすることで、蒸し返しになるということはありませんか…？」

「もう当時とは時代が違う。それに、……雛見沢症候群の研究には、単なる風土病では済ませ

られないものが潜んでおる。研究によっては、戦後日本を再び列強の末席に返り咲かせる切り札になるやもしれん。」

「当時とはもう風向きが変わった、ということですわね。」

「そうだ。不幸にも、髙野くんは風向きが変わるまで存命することが出来なかった。……だが幸い、三四ちゃんという後継者に研究を託せた。だから私は、この命ある限り、三四ちゃんの研究を最大限応援する。私は髙野くんに協力を約束したのに、様々なしがらみから力になれず、彼を失望させた。その償(つぐな)いを命ある限りしていこうと思ってる。それが、髙野くんが無二の親友と呼んでくれた私の、この世に残された最後の仕事だと思っとる……！」

「先生……。本当にありがとうございます……。」

「いや、いい。私も死ぬ前に洗いざらいを話せてすっきりした。とにかく、私の目が黒い内は三四ちゃんの研究に一切の不自由はさせん！　何かあったらいつでも頼りなさい。助力は惜しまないからの～！」

　祖父と、かつての上司で親友でもあるこの老人に、どんな絆(きずな)があったのか、鷹野には想像することしか出来ない。……でも、その絆のお陰で、鷹野は強力な後ろ盾を得られたことは間違いない。涙さえ薄っすらと浮かべ、感傷的な表情を浮かべる鷹野は内心、老人の全面協力の約束に躍(おど)り上がりたい気分だった。老人と鷹野はしばらくの間、互いに相手の感謝を否定しては

頭を下げ合っていた。

そんな頭の下げ合いがひと段落したところで、老人はほんの少しだけ表情を真剣にし、あまりに長かった前置きの果ての、本当に言いたかったことを口にした。

「そういうことだ。私が言いたいのはつまり。……雛見沢症候群には、歴史すらも作りかねない魔力が宿っているということだ。それは国の運命すらも捻じ曲げかねない。……そこのところをよく肝に銘じて、慎重に研究をしなさい。」

■高級料亭

上品な小料理の配膳を終えると、女将は毎度の利用を深々と感謝した後、しずしずと姿を消す。上品なお茶室のような室内は、とても落ち着きがあり、下手に飾らず、それでいて本当の贅が尽くしてある、素晴らしいものだった。

この高級料亭で、財界の要人や政府高官が人目を忍んで会合するのによく使われる、その道では有名な料亭だ。そこには、よく肥えた壮年の紳士たちが五人ほど。そして、その中には鷹野の姿も混じっていた。鷹野は、一歩引いた位置でかしこまるように座っていた。その様子から、鷹野にとってかなり目上の人間たちとの会合であることがうかがえた。

ダブルの高級スーツに身を包んだ男は、そんな鷹野に、硬くならなくていいですよと声をかける。

「どうぞお楽に、鷹野さん。今回の件、非常に興味深く読ませていただきました。このような研究が、数十年にわたり眠り続けてきたとは…。」

「うーむ、驚きです。旧日本軍が戦時中に行なっていたBC兵器の研究は、ほとんどが実らず、研究基礎も全て米軍に接収され、何も残っていないと思っておりましたよ。」

「……この研究は、軍上層部にもほとんど相手にされなかったと聞いております。」

「なるほど。ゆえに、誰にも知られず、そしてGHQの追及も受けなかったというわけですな。その意味においてだけは、本当に幸運でした。」

「ふぅむ。高野先生の研究を鷹野さんが引き継ぐとは、面白い。これも因縁ですかな。まるで、あなたの体を借りて、故人が研究を完成させようとしているかのようです。」

「くすくす。本当にそうかもしれませんわね。私も奇妙な因縁を感じます。」

鷹野は、高野一二三を祖父と呼び、慕っているが、対外的にはその関係を説明してはいなかった。高野の研究を自分が受け継ぐことに、私情が混じっていると思われることがプラスにならないと判断したからだ。

だから表向きは、鷹野はかつて高野一二三と交流があり、高野の死後、その遺品の中の資料

からこの研究を見つけて引き継いだ…、というようなことになっていた。

「それで、先生方。…いかがでしょうか。」

「うむ。防衛庁がね、非常に強い関心を持ったよ。はっはっは！　中川くんが言うには防衛庁技術研究本部が強い関心を示してくれてね。研究のスポンサーを名乗り出てくれた。」

「おお、それは朗報じゃないですか。おめでとう、鷹野さん！」

「あ、ありがとうございます…！」

「何でも、向こうが言うにはね。いくつかの省庁間での有識者による、次世代抑止兵器の研究会があってね。この中でアルファベットプロジェクトというのがあるらしい。鷹野さんはご存知ですかな？」

一個人に過ぎない鷹野が知るわけもない。……だが、日本社会の中核に紛れ込む、国粋主義者の超党派勢力が、国民の与り知らぬところで物騒な研究をしていても、それはありえないことではなかった。社会とは、人と人のつながりで編まれた網のようなものだ。人は、同調する人間と手をつなぎ、同じ思想を持つ「網」を作り上げていく。

それは世間によく知られているものもあれば、誰もその存在を知らない秘密のものだってある。今日のこの会合に参加している面々だって、個々の肩書きではまったくその関係を想像出来ないに違いない……。次世代抑止兵器の研究会。そこで研究されている、アルファベットプ

ロジェクト。この単語の羅列だけでも、おおよその想像は可能だった。

まず、抑止兵器という単語。抑止兵器は普通、核兵器のことを指す。兵器というものは普通、敵に対して使用し、打ち滅ぼすことを目的とする。

だが、抑止兵器の概念はまったく異なるのだ。それは敵に対して使用することを前提にしない。使用したら大変なことになるぞ、と脅すことによって、相手の侵攻そのものを抑止する。米ソは大量の核兵器を持ち合い、互いを牽制している。だが、双方ともそれを使用することはない。そうなれば全面核戦争となり、共倒れになるからだ。

ゆえに、抜かない伝家の宝刀となるのだ。もちろん、この伝家の宝刀は互いが持ち合うから意味がある。もし、片方しか持たなかったら、そこに軍事的交渉の余地は一切なくなる。

つまり、核を持たぬ国は核武装国の前にまったく無力なのだ…。そんなはずはない、日本は核を放棄していても国として今日も成立しているではないか、と考える方もおられるかもしれないが、それは間違っている。日本は核を放棄したが、アメリカとの同盟によって、その核の傘に入っている。つまり、アメリカの核によって国を成立させているのだ…。

だが、それはつまり、永遠にアメリカの属国であることに甘んじなければならないことでもある。

……それを脱却し、アメリカと対等な関係の強い国家に生まれ変わるためには、その核の傘

を出て、日本独自の抑止兵器を持たなければならない。……そう考える有識者たちの会合に違いなかった。そこまで至れば、アルファベットプロジェクトという言葉も何となく察しがついた。核兵器は大量破壊兵器とも呼ばれる。

だが、大量破壊兵器と言った場合、核兵器だけのことを指したりはしない。その内訳は、核兵器を筆頭に、生物兵器、化学兵器と続く。これら、核（Atomic）・生物（Biological）・化学（Chemical）の三つの頭文字を取り、ＡＢＣ。その為、大量破壊兵器をＡＢＣ兵器と呼ぶこともある。（この三区分に入らない大量破壊兵器も存在するが説明は割愛する）

そのＡＢＣで、アルファベット。つまり、アルファベットプロジェクトとは大量破壊兵器研究の隠語ということに違いない…。鷹野のその想像はどうやら正解のようだった。

「本来は、日本が核武装をするのが正しいのです。戦後、平和国家として確立し、多大な国際貢献を果たした我が国は、常任理事国入りを果たし、核武装してこそ初めて一人前の国家として認められる。それこそが、戦後日本百年の悲願なのです。」

「左様です。だが、現実には核不拡散条約により、核は大国だけが独占。また、国内世論は核アレルギーに染まり、内外からの締め付けで実現を不可能にしております。」

「生物化学兵器は、別名、貧者の核兵器とも呼ばれる。核を持てない小国はすでに熱心に研究を進めているという話です。」

「はっはっは、鷹野さん、誤解しないでくださいよ？　この度の研究は細菌兵器の保有が目的ではありません。同種の兵器が他国によって国内に持ち込まれる危険性について、事前に十分な対処を行なうための研究です。自衛のための研究であることを誤解しないようにお願いいたしますよ。」

「はい。存じております。」

日本人のこういう方便を鷹野は嫌っていた。だが、それを表情には出さない。

彼らは何だかんだと言いながら、この研究に生物兵器の価値を見出した、ということなのだろう。だが、実はそれすらも方便だった。

生物兵器研究をするなら、雛見沢症候群などという未知の奇病を研究するよりは、天然痘や炭疽菌などを研究した方がよっぽど手っ取り早い。

だから実は、防衛庁が生物兵器として興味を持った、というのは正しくないのである。つまり……。……鷹野が研究するためには、予算や人材、施設などのバックアップが欠かせず、強力なスポンサーが必要となる。それへの渡りを鷹野は政財界の裏の長老に頼み、方々への根回しをして、生物兵器転用を口実に防衛庁から無理やり予算を引っ張った、というのが本当のところだった。

だから、この話が防衛庁公認というわけではない。…正確には、防衛庁を牛耳る黒幕たち

に認めてもらった、ということなのだ…。黒幕たちは、防衛庁からアルファベットプロジェクトに予算を落とす。
　黒幕たちはそこへ鷹野の研究を推薦して割り込ませる。
　鷹野は予算を得、黒幕たちはリベートを得ることで公金(こうきん)を吸い上げていく。……こうして考えると、このプロジェクトが本当に真剣に次世代抑止兵器を研究しているか疑わしい。単に、黒幕たちが公金を吸いだすために使っているトンネルプロジェクトなのかもしれないのだから。
　まぁ、そんな難しいことは、鷹野にとってどうでもいいことだった。黒幕や長老たちの思惑など知ったことではない。自分の研究のために予算を引き出せればそれで十分なのだ。どちらにせよ。鷹野はもっとも欲しかったスポンサーを得た。しかも、自分に思いつく組織の中でも最大の機関からだ。それはまさに、祖父にとっての念願でもあった。
　彼女は努めて冷静を装っていたが、内心は躍り上がりたいくらいの気持ちだった。
「中川くんとしては今回の件、十分に研究が進んだら、丸ごと買い取って構わないと言ってくれてる。まだまだ未完の研究だが、その未来性については十分に理解出来てるようだ。」
「仰(おっしゃ)るとおりです。この研究はまだ道半(みちなか)ばで、十分な資金と施設、人材が欠かせません。」
「それでだね。ここからが交渉になるんだが……、向こうとしては、この研究、丸ごと抱えてしまいたいのが希望らしいんだ。…こう言っちゃ悪いんだが、君一人に任せるには荷が重いと

考えてる。」
鷹野の有頂天は、そこで少しだけ醒めた。
「わ、私はお金が欲しくて研究しているのではありません。ひとりの研究者としての知的探究心からです。私に必要なのはスポンサー。先方が求めるのは成果。そういう関係に期待したかったのですが。」
少し興奮し過ぎたことにすぐ気付き、鷹野は自分の胸を撫でて心臓を落ち着かせた。……仮にも、研究助成ということになっている。予算に見合った成果を期待しようと思えば、彼らにとって、鷹野はまだまだ若輩に感じられた、ということなのだろう。
「わかってますわかってます。鷹野さんが今日まで積み上げて来た研究を、横から掻っ攫われたんじゃやそれはあんまりですからね。そこは私もよ〜くわかってます。もちろん、向こうにもそれは伝えました。それで出てきた折衷案がこれです。」
「まず、アルファベットプロジェクト内の新規事業として鷹野さんの研究を立ち上げます。理事会の承認を経れば正式に予算をつけることが出来ますからね。鷹野さんには客員という形でプロジェクトに参加していただき、研究に携わるという形になります。」
資金を得ようとしたら、相手の傘下に入るのは当然だろう。ここまでは異論はない。
「ただ、研究会は今回の研究に予算をつけるに当たり、いくつかの条件を挙げています。ひと

つは、先ほど先生が申し上げた、この度の研究に関する分野で優秀な才能を持つ人物に研究筆頭を委ねることです。」
「お言葉を返すようですが、私以上にこの研究に詳しい人物が、故高野先生を除いて存在するとお思いですか？」
「まままま！　そこは鷹野さん、抑えて抑えて！　お気持ちはごもっともです。」
「それでは、その人物に私が研究を売り渡すのと何も変わらないではありませんか。まったく話が違います。」
「わっはっはっは。落ち着きなさい、鷹野さん。」
鷹野の表情からわずかに零れた怒りの表情を、老獪な彼らは見逃さなかった。そして、この程度のことで表情に出してしまうようでは、やはりまだまだお若いなぁとでも言うかのように、はぐらかす笑いをする。
もっとも、その笑いは鷹野を見下したものではない。どちらかというと、話は最後まで聞きなさいというような、少し頼もしさを感じさせるものだった。
「もちろん、そこはあなたのやりやすいように手を打ちます。小泉先生から、あなたをよろしく頼むと念を押されているんです。大恩ある小泉先生に託されたあなたを、私が蔑ろにするとお思いですか…？　大丈夫です。ここはひとつ、私に任せてください。あなたも、そして連中

も納得するうまい妥結点を用意します。」

「と、申しますと…？」

「その人物の人選は私が握っているということですよ。わはははははは！」

鷹野を除く一同はげらげらと大笑いした。鷹野も遅れて笑いに混じる。

つまり、これはその、骨抜きということだ。防衛庁側は、鷹野ひとりでは少々心細いので、専門家をリーダーに据えろと提案した。だが、そのリーダーの人選は、鷹野の後ろ盾の人物が掌握していたのだから。

鷹野は実感する。……あぁ、これが後ろ盾を持つことの頼もしさなのだな、と。

「万事、私に任せてください。あなたがやりやすい候補者をこちらで探します。鷹野さんはその中から、組みやすいと思う相手を選べばいいということです。」

これならば何の不安もない。表向きの代表は私ではないが、研究の実質は私の手元に残る。

……もちろん私とて権威ではない。研究の上で頼れるパートナーがいてくれればそれに越したことはないのだ。

「この件、しばらく先方と私の方で調整します。もちろん、鷹野さんの満足の行く形で決着出来るようにしますので、しばらく朗報を待ってください。」

「はい。お世話になりますが、どうかよろしくお願いいたします…！」

「そうだそうだ、防衛庁の話だけじゃないよ。厚生省の永田くんも一枚噛んでくれるそうだよ。国立感染症予防研究所の伊藤くんを紹介してくれてね。機材や技術についてのバックアップを名乗り出てくれてる。」

「ほ、本当ですか…！　あ、ありがとうございます…！」

「わっはっはっは！　もうこれは立派な国家プロジェクトですなぁ。おめでとう、鷹野さん！これも今日までのあなたと、そして故高野先生の地道な研究が評価された結果です。」

「い、いえ！　全て高野先生の努力の成果です。私などまだ何も…！」

「はっはっはっは。謙虚なのは実に良いことです。小泉先生も仰っておられましたが、本当に鷹野さんは良い方ですなぁ。可愛がられているというのも頷けます。」

「それでですね、向こうとしては鷹野さんの身分を防衛庁で預かってしまいたいようです。幸い、鷹野さんは医師免許をお持ちですからね。研究本部の医官として身分を保証するようです。」

「それは、えっと……、公務員になれということですか？　これは意外な話ですね…。」

「アルファベットプロジェクトに携わる研究機関のほとんどは公的機関です。今回の研究は陸自も強い関心を寄せており、職員を陸自から派遣したいと強く要望してきています。ですので、場合によっては身分は陸自の扱いになるかもしれません。」

「まぁ、この辺は役人の縄張り争いだと思ってください。その役人たちの上に立つには、役人の身分が必要になってくると、そういうわけですな。もちろん、どういう形になろうとも、鷹野さんが不快に思うようなことにはしませんから、安心してください。」
「わかりました。その辺りはお任せいたします。…しかし、高野先生がかつて旧日本軍にこの研究の援助を求めた時には断られたことを思うと、自衛隊が興味を示されたのが意外というか、遅いというか、複雑な気持ちですね。」
「それは……仕方ありますまいな。戦況が悪化していた日本軍が求めていたのは、即効性があり、瞬時に戦局を引っくり返せるものだったのでしょう。決して、高野先生の研究を見下していたわけではないはずです。」
それは真実ではない。そのことをすでに鷹野は長老の告白から聞いている。鷹野はふっと意識が途切れるような気分を味わうと、目の前の会合が遠くの世界の出来事のように感じるのだった。この日を望み、こうなるように努力してついに至った今日なのだ。ついに私と祖父の研究は認められ、第一歩を印す。それは夢にまで見た日なのだ。だから、実はこれが夢なのではないかと想像することが恐ろしかった。
本当に嬉しいという喜びは、すぐその場では理解出来ず、時間が経ってから初めて理解出来るということも少なくない。……鷹野は、まさにこれがそういう気持ちなのだろうと思ってい

た…。
「…ると思います。多分、佐官クラスの階級が与えられるのではないでしょうか。となると鷹野さんは副隊長の地位になりますから、恐らく、三佐ではないかと。」
「これは素晴らしい…！　鷹野三佐ですか。いやいや、羨ましいですなぁ！　男に生まれたからには、一度くらいは自分のことを階級で呼ばれてみたいものですが。いやはやいやはや、鷹野三佐ですか、ふむふむ！」
「三佐？　何ですか？」
「あぁ、自衛隊の階級のことで、三等陸佐のことです。企業でいうところの、副部長くらいでしょうね。おそらくその階級が、プロジェクト発足時に鷹野さんに与えられることになるかと思います。」
「旧日本軍で言うところの少佐ですよ。……そう言えば奇遇ですなぁ。高野先生も、旧軍では少佐の階級にあられたそうではありませんか。」
はっとする。そうだ。…祖父もかつて日本軍にあって、少佐の階級を持っていた…。祖父が果たせなかった研究を自分が引き継ぐため、今日まで重ねてきた努力。
そして揃ったお膳立て。……そしてその末に私に与えられるだろう階級が、当時で言うところの少佐で、祖父と同じもの。祖父の研究を引き継ぐことが、血のつながっていない自分にと

っての、血縁にも勝る関係だと信じて頑張ってきた。そして与えられた階級がおじいちゃんと同じだなんて。まるで運命か何かのよう。

……これは、おじいちゃんのメッセージなの…？　それはきっと、天国の祖父からのエール。そして、研究だけでなく、その想いも継承したことを示す証。

鷹野は、三佐という階級に、何か運命めいたものを感じずにはいられなかった。

「……おじいちゃん。……私、……ようやくここまで来たよ。」

その独り言は、男たちの笑い声の中では誰の耳にも届かない。でも、祖父の眠る国にはきっと届く。そう信じての呟きだった。まだまだ、道半ばに過ぎない。この研究が偉業となるには、これから長く険しい道を乗り越えなくてはならない。そうでなければ、祖父は神にはなれないのだ。私も神になれないのだ。

…………。

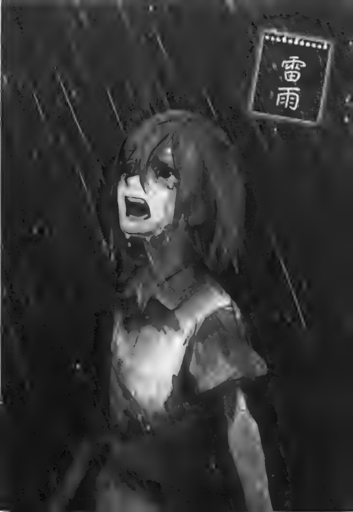
祖父の残した遺書にあった、お前は神になりなさいの一文。

そして、その一文の前にあった、私は神になれなかったの一文。

それこそが、唯一の祖父の遺志。祖父は、私に託したのだ。自分の研究の全てを。神の復活は、肉体が蘇ることではない。…残された人間の心に蘇ることなのだ。

祖父はまず私の心に蘇るだろう。そして、その偉業を知られ、学会の人間たちは争って祖父

の資料を読むだろう。それこそ奪い合うように。そして、このような研究がすでに戦時中から行なわれていて、誰の理解も得られずに孤独な研究に生涯を捧げた高野一二三という人物を知り、その偉業をようやく讃えるのだ…。


雷雨

■入江所長就任

「ご紹介します。鷹野三佐です。……三佐、こちらは入江京介先生です。」
「ど、どうも、入江と申します。」
初対面の入江は、非常に緊張した様子だった。恐らく、私が怪しげな組織の黒幕だとでも思ったのだろう。
無理もない。政府高官を仲介に、このような仰々しい部屋で私を紹介されたなら、普通の人間ならそう思って当り前だ。
「くすくす。畏縮しなくて結構ですわ。鷹野とお呼びください。」
「恐縮です。この度はお引き立ていただき、深く感謝いたします。」
「どうぞ、お掛けになってください。」
入江京介という男の雰囲気を言い表すならば、典型的な小市民と言えただろう。
老獪な年寄りたちに年功序列でいびり続けられ、都合よく使い捨てられていく典型的なタイプと言えるかもしれない。その辺の狡猾さは私にだいぶ劣るようだった。…だからといって、何の野心もないわけでもない。彼も、ひとりの若者として、何か功績を残して自分の名を後世

に留めたいという夢は持っていた。
また、人前ではこうして謙虚なのだが、その論文はどちらかというと革新的かつ攻撃的で、そのギャップはとても激しいものだったのである。
「……雛見沢症候群の資料を読ませていただきました。」
「いかがでしたか？」
「その、………非常に驚くことばかりでした。…確かに今日の医学の暗部に踏み込みかねない内容ではありますが、未だ世界で誰も解明していない神秘という点で、知的興奮を抑え切れません。」
鷹野はくすりと微笑む。入江が雛見沢症候群に対し、絶大な興味を示してくれたことが、その言葉だけで十分わかったからだ。
彼女は今日まであまりに大勢の人間の中で揉まれてきた。だから、そこで培われた直感でわかる。……この男とはうまくやって行けそうだった。仮に薬にならなくとも、決して毒にはならない。…私とスポンサー、双方の都合を満たす最高の人材に違いなかった。
「私こそ驚いております。入江先生ほどの博識かつ経験豊富な方が、責任ある地位も仕事も与えられず、医局の片隅で飼い殺されているなど。これは医学界の重大な損失と言わざるを得ませんわ。」

「……ははは。」

入江が曖昧に笑ってはぐらかす。本人は知られていないつもりだろうが、私は彼について詳細な資料を得ていたので、彼がどうして稀な才能と実績を持ちながら、表舞台から放逐されているかを知っていた。彼は脳外科の権威の下で稀有な才能を発揮し、将来を期待されていたという。

……だが、倫理を巡る論争に敗れ、中央を追放されたのである。入江の持論は、人の反社会行為の多くは、脳の疾患で説明出来る、というものだった。

この世には生まれつきの悪人など存在せず、彼らは全て治療すべき哀れな患者である。彼らは、生まれた時は正常であったが、その成長の過程で心因性や外因性等の何らかの理由により、脳に疾患が起こり、それによって人は悪人になる、というのである。

つまり、悪人に必要なのは懲罰ではなく、治療であり、彼らを悪人たらしめている疾患を治療出来れば、彼らを善人に戻せると考えたのだ。儒教の考え方のひとつである、人間性善説に則った考え方だろう。この考えによるならば、人は生まれながらにして同族に対し互助の精神を持っており、その後、後天的に、悪意を学んでいくというのである。

……入江は、この後天的な部分を疾患と考えたのである。人の考えは脳が生み出す。

だから、心が病んでいる人は脳が病んでいるわけで、つまり脳を治療すれば、その人は善人

に戻ることが出来るという考え。これを、精神外科という。
平成の今日では廃れてしまっているが、昭和中期までは絶賛されていた外科手法だった。特に、従来は一切の治療方法がなかった重度の精神病患者に対して絶大な効果を上げたと言われ、その発案者にはノーベル生理学医学賞さえ贈られている。それくらいに画期的なものだった。
人間は考える生き物で、考えるが故に「病む」。故に考えすぎる人ほど心を病みやすいのは、誰でも知る話だ。
その考えたり、悩んだりする部分が病むと、社会行動を逸脱するようになる。その部分を「前頭葉」という。平たく言えば、精神外科手術とは、この前頭葉を切除する手術のことなのである。
手術も、頭蓋をまるまる外しての大手術ではない。頭蓋骨に小さな穴を開け、そこから特殊なメスを刺し込み、前頭葉の大切な部分を、すっと切断するだけの手術で、決して大手術というわけでもなかった。その手軽さもまた、画期的だったのだろう。ほぼ治療が不可能だった数々の精神病患者に奇跡的な成果を示し、戦前に発見されたこの手法は瞬く間に世界に広がった。
難治で重度の精神病も。そして解放されることのない深い悲しみに囚われた心の重病人も。
それら全てをこの手法によって救うことが出来たのだ。人類は心の傷を癒すために、様々な

宗教やまじないを生み出してきた。それを、外科的手段で解決したという快挙。…これがどれほど画期的なことだったか、おわかりいただけるだろうか。

入江は精神外科に心酔(しんすい)し、人の心の外科的治療に邁進(まいしん)したのである。だが、今日の人権感覚で言えば、心が病んでいるからといって脳の一部を切除するなど言語道断(ごんごどうだん)に思えるに違いない。

徐々に世間の意識が変わるに従い、精神外科は次第に非人道(ひじんどう)呼ばわりされていくことになる…。前頭葉は、悩みを司る部分である以上に、人を人らしくする「人間」そのものを司る部分でもある。…そこを切除するのだから、患者には取り返しのつかない大きな変化が起こることが少なくなかった。悩まなくなるゆえの、根拠(こんきょ)なき幸福感。性格の変化。物事に対する興味の喪失(そうしつ)。感情の抑制(よくせい)がなくなり、周囲には理解不能なほど感情の変化が大きくなったり。時には記憶の一部を失うことすらある。

…もちろん、死に至ることも少なくなかった。昭和も四十年代に差し掛かると、精神外科は下火になり、また、向精神薬(こうせいしんやく)の開発もあって、徐々に行なわれなくなった。

だが、一部の肯定派はその後も手術を続け、臨床(りんしょう)データを集め続けた。そして、その有効性を再び世間に知らしめようと活動を続けていたのである。また、手術は患者に同意なく行なわれることもあった。全身麻酔をかけられ、気付いた時にはもう脳の一部を切除されていた、という事例が、一説には（日本だけで）数万人に及んだと言われている。今日の感覚では、患者

の同意なしの脳切除手術など非人道の極みと思えるだろうが、当時はそういう考えはなかった。
そもそも、患者に事前に同意を求めるという考えが平成近代のものであることを重ねて追記する。よって、当時はそれが非人道という評価は受けなかったのである。それに対する風当たりが急に強くなり、人道的であるか否かで論争が起こった。そしてとうとう決着がつき、精神外科を否定することで幕を下ろすこととなった。
その後、日本精神神経学会は、「精神外科を否定する決議」を可決することになる。以後、日本では精神外科は禁止され、日本医学界のタブーとして封印されていくことになる…。入江は精神外科界の若き急先鋒だった。
その有効性と実績をアピールし続けていた。……ゆえに、非人道的行為の戦犯として扱われ、表舞台から追放されたのである。だが、追放されたからといって、持論をそうそう翻せるものでもない。入江にとって、人の悪行の根源は脳であり、そこにこそ治療すべき秘密が隠されているという考えに変わりはないのである。
そんな入江にとって、人の脳に寄生し感情をコントロールする雛見沢症候群の存在は、持論を肯定してくれるものだったのだ…。
「私如きでよろしければ、……この度の話、ぜひお引き受けさせていただきたいと思います。」
当然だ。入江の履歴を考えれば、この話を断るわけはない。

彼は温和そうな表向きとは異なり、胸の内には若さ相応の野心がある。自分を追放した学会を見返す大きな研究をしたいという欲求がなかったわけがないのだ。

そして、その機会が破格の待遇で与えられた…。

「ありがとうございます。入江先生ならば、きっと良いお返事をいただけると信じておりました。当方も、あなたのような専門家を迎えられ、とても助かります。」

「し、しかし、私などが所長でいいのでしょうか…。それは鷹野さんがやられた方がよろしいでしょう。私は単なる医者に過ぎません。人の上に立ったことなど…。」

「ご安心ください。それにつきましては私も全面的にサポートいたします。トップは制服ではなく背広からというのが上の希望でもあります。お気に召しませんか？　入江所長という呼び名は。くすくす。」

「い、いえいえ…！　いやしかし…、あははは…。」

入江は、実はまんざらでもないとでも言うように、照れ隠しに笑った。

「現在、雛見沢に研究施設を建設中です。表向きは診療所ということになっています。入江先生にご快諾をいただけましたので、入江診療所という名前にいたしましょう。」

「い、一国一城の主とは……、も、勿体無い話です。」

「あと、身分を陸自で預かることになりますので、先生の籍は陸自の医官という扱いになりま

す。私の上司ですので、二佐の階級になりますわね。入江二佐という呼び名はいかがでしょう？」

「あ、あはははは！　私は軍人じゃありません。二佐という呼び名はご遠慮させていただきたいものです…。所長だって恐れ多いくらいです。いやいや……あははは…。」

未知の脳内寄生虫の研究のチャンスを与えられ、しかもカモフラージュとして、新設診療所の所長の身分付き。しかも部下も予算も付く。防衛庁と厚生省のバックアップが付き、最新機材の研究施設も与えられる。…入江が上擦った声で笑ったとしても、それは無理もないことだった。もちろん、リスクもある。この秘密研究に携わる以上、入江には数々の守秘義務が課せられる。また、未知の奇病の土地に足を踏み入れるのだ。自らが罹患しない保証はまったくない。

だが、それに躊躇するには入江はまだまだ若かった。それらを十分納得した上で、入江はもう一度、自分の人生に花を咲かせようと意気込み、宣誓書にサインをするのだった。鷹野はそれを見届け、ようやく緊張が解けるのを感じた。入江がほぼ間違いなく話に乗ってくれるとは思っていたが、一割くらいの確率で拒否する可能性も考えていた。

所長の人選に思った以上に難航し、鷹野にとって組みやすい候補者は入江ひとりだった。…なので、入江に所長就任を断られたら、正直、かなり状況が悪くなるところだったのである。

入江が所長就任を引き受けたことによって、いよいよ雛見沢症候群の研究が始まる。研究所兼診療所は来春には完成する。厚生省と防衛庁から最高の機材と人材が用意され、潤沢な予算が与えられる。そして、本格的な研究がスタートするのだ。全てが順調だった。

いや、順調は当然だ。順調にことが運ぶよう、今日までどれほどの努力を重ねてきたのか……。

「以上です。就任おめでとうございます、入江所長殿。三佐、宣誓書へのサインを終わりました。」

「ありがとう。これからよろしくお願いいたしますわ。入江所長。」

「こちらこそ、よろしくお願いします。鷹野さん。仲良くやりましょう。私も全身全霊をかけてがんばります！」

「こちらこそ。お互い、最善を尽くしましょう。」

これで所長のポストは埋まり、全ての問題をクリアした。

■宴席

「わっはっはっはっは！　それはよかったよかった。おめでとう、鷹野さん。いえ、鷹野三佐でしたかな？　わっはっはっはっは！」

全ては順調だった。入江は無事にお飾り所長のポストに就き、私のための研究機関の設立は、ささやかな時間と事務手続き上の問題だけだ。

私は、時折、鹿威しの聞こえる料亭にて、後ろ盾の大物たちに万事が順調であることを報告していた。

「これも全て先生方のお力添えがあったからこそです。鷹野三四、皆様に心より感謝させていただきます。」

「まぁまぁ！　鷹野さんに本当の意味でおめでとうが言えるのは、研究が成功に終わった時ですな。ようやく入口に辿り着いたに過ぎませんよ。」

「仰る通りです。寝る間を惜しんで研究に身を投じていく覚悟です。」

「高野先生が成し遂げられなかった、さらにその先へ至られることを私ども一同、楽しみにいたしておりますぞ！　わっはっはっは！」

「まぁまぁ先生！　今日はそういう堅苦しい話は抜きにしましょう！　今日は鷹野さんのこれからと入江機関の設立を祝って、乾杯と参りましょう！」

「乾杯の前にご挨拶申し上げます。厚生省の永田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。」

今日の会合には、初対面の様々な高官たちが揃っていた。

今やもう、この計画は絵に描いた餅ではない。実務者レベルが実際に顔を合わせるべき段階なのだ。

研究機関を支えるには、様々な角度からの助力が欠かせない。…私は初対面の高官が紹介される度に、頭を下げ、その人物の名前の暗記と、どれだけの影響力のある存在なのかを測っていく。

「あぁ、鷹野さん、彼をバシバシこき使ってやってください！　彼のところの研究所は入江機関のバックアップをしてくれます。技術的に困ったことがあったらいつでも頼ってやってください。」

「こき使うだなんてそんな…！　こちらこそお世話になります。鷹野と申します。どうかよろしくお願いします。」

「鷹野さん、こちらも紹介しましょう。陸自から出向の富竹くんと小此木くんです。陸自側からのバックアップをします。ぜひご挨拶させてください。」

「初めまして。富竹と申します。この度のプロジェクトの監査役を仰せつかりました。どうかよろしくお願いいたします。」

研究予算は陸自から出ている。適正な研究がなされているか、陸自からお目付け役が付くのは当然と言えるだろう。

……だが、本来、監査役というのは私の敵の立場であるはずだ。…その立場の人間が、こうして内々の宴席に呼ばれているというのはどういうことなのか。つまり、この監査役もこちら側の人間ということ。

どこまでもされている根回しに、私は改めて後ろ盾の頼もしさを感じずにはいられなかった。

「私は直接は雛見沢に赴きませんが、定期的にお伺いして、研究の進捗管理等をさせていただくことになります。」

「あら、それは残念ですわね。雛見沢は空気もよくて自然も素晴らしいところですのよ。ぜひ仕事以外でも気軽に遊びにいらしてくださいね。」

「あはははは…。ありがとうございます。そうさせていただきます。」

監査役という肩書きがある以上、この富竹という男とは仲良くした方が得だろう。今後、陸自から予算を引き出し続ける上で、その額面の調整は全てこの男の胸の内ひとつということになるのだから。

「…小此木と申します。よろしくお願いいたします。」

「彼は不正規戦部隊のひとつ、山狗の隊長です。雛見沢に常駐し、三佐を直接サポートします。」

「ボディガードみたいなものと思っていいのかしら…？」

「要人護衛、機密保持が主な任務です。三佐の直接の手足となりますので、どうかこき使ってやってください。」

「…よろしくお願いします。」

富竹という男が、軍人にしては表裏のなさそうなタイプだとすると、この小此木という男は正反対のタイプに見えた。

機密保持が主な任務だと言ったが、防諜（ぼうちょう）や情報操作等、スパイ的なことを得意とするのだろう。なるほど、この雰囲気は納得だった。雛見沢症候群に陸自が出資している関係上、軍事色は色濃い。そうである以上、この研究は誰にも知られることなく水面下で行なわれなければならないのだ。このような部隊が必要となるのは無理もないことだろう。

それに、荒事（あらごと）をこなせる部下がいてくれるのは、何にしても心強い。これまた、仲良くして損のない相手だった。

「さぁさぁさぁ！　挨拶はこれくらいにして早く乾杯に移りましょう！　ささ、富竹くんも足を崩して！　今日は入江機関の前途（ぜんと）を祝（しゅく）して無礼講（ぶれいこう）に参りましょう!!」

入江機関設立祝いなのに、入江本人が呼ばれていないというのはなんとも滑稽な話だ。だが、それが入江の役目だ。

スポンサーの条件を満たすだけのカカシの所長役。もちろん、専門家として多少の協力を期

待しているが、所詮は外様に過ぎないのだ。今日の宴席は、入江機関設立に尽力してくださったお偉方への感謝の席のつもりだったが、いつの間にか、一番の功労者である鷹野を労う会になっていた。普段は自分がお酌をする立場なのに、今日は逆で、代わる代わる人がやってきてはお酌をしてくれる。

新しい関係者は自分の機嫌を取ろうとうやうやしい態度を取り、普段は最敬礼のお偉方は、今日は無礼講だと気さくに接してくれ、これまでの地道な積み重ねを讃えてくれた。私の研究はあらゆる機関に承認され、大きく羽ばたこうとしている。…そこから成果が出た時、恩返しを期待したい連中は、ここぞとばかりに私に恩を着せてくるということなのだろう。

思惑はともかく、それは今の私にとってとてもありがたいことだった。

「それでは入江機関の設立と、鷹野三四くんの今後ますますの発展を祈願して乾杯に移りたいと思います。荒井先生！　音頭をお願いいたします！」

夢のようだった。

わかってる。

夢を叶えるための舞台作りがようやく終わっただけで、まだまだこの段階で満足してはならないのだ。

でも、今日この場だけは喜んで、祝いの酒に溺れてもよかった。鷹野は元々、特別お酒に強

い体質ではなかったけれど。今夜のお酒はこれまでに一度も味わったことのない美味なもので、飲めば飲むほどに上機嫌になれる、最高の宴席だった……。富竹たちが自分を三佐と呼んでくれるのも心地よい。その階級は戦時中の少佐のことで、祖父と同じ階級でもある。…つまり、ようやく祖父と同じところにまで上ってきたことの証。

ここからが正念場だ。ここからいよいよ、祖父が至れなかったところを目指す。

鷹野にとって、人生最高の夜だった……。

化粧直しに行ってくるといい、鷹野は席を外した。

幸せな気持ちで胸がいっぱいで。少し夜風に当たって自分を落ち着けないと、幸せで胸がはち切れてしまうような気すらしたから。宴席は母屋から外れた離れで行なわれていた。

化粧室は母屋の方なので、渡り廊下を渡っていかなくてはならない。渡り廊下からは、手入れの行き届いた素晴らしい日本庭園が目を楽しませてくれた。すっかり忘れていたが、今日は雨だった。

いつもなら、雨にはうんざりするところだが、…今日に限っては、それすらも私を祝福してくれているように感じられる。火照る体には、雨粒を少し感じさせるひんやりとした空気が心地よかった…。こうして歩くと、思った以上に体がぐらつく。

……やはりいい気になって少し飲み急ぎすぎたのだろう。自分の飲める分量を忘れてしまう

なんて、私らしくもない。いくら宴席とはいえ、醜態を見せるのは恥ずかしく、私は酔いが醒めるまで雨の庭園を眺めていることにした。近くに、緋毛氈のかけられた上品な椅子があるのを見つけ、それに腰を下ろす。

さっきまでは関係者の中にいたため、みっともない姿は見せられないと常に緊張を強いられてきたが、こうしてひとりになると、それが解けて本当の意味でリラックス出来る気がした。

空を見ると、雨は相変わらず強いが、向こうの空がどことなく明るい。

……この雨も、そういつまでも降り続けているわけではなさそうだった。……そう。止まない雨などない。どんなに冷たくて、身を強く叩き続ける風雨の中に放り出されたとしても。止まない雨などこの世にないのだ。ふと見ると、サンダルと傘が置いてあるのが見えた。……何となく誘われて。鷹野は庭へ出る。宴席から聞こえてくる品のない笑い声が少し遠のいた気がした。

傘を少しだけずらし、空を見上げる。その顔に雨粒が容赦なくぶつかってくる。鷹野は髪が濡れるのも忘れて、しばらくの間、空を見上げるのだった…。

■逃走中

……初めは焼け付くボイラーのような心臓を冷やすにはちょうどいいと思っていた雨も、…体が冷え切るに従い、辛いと感じるようになっていた。赤紫に腫れあがった無残な素足は、ジンジンと鈍痛を感じさせ、実際の足よりももっともっと腫れあがってしまったかのような錯覚をさせる。砂利道はどこまでも続く。……自分がどちらの方角へ歩いているのか、そんなものはとっくにわからなくなっていた。職員がもう追ってくる気配はない。がむしゃらに林の中をいくつも駆け抜けたことによって、追っ手を撒けたのだろう。その時、梢の先などで体のあちこちを摺っていたらしい。それが今頃になって痛みを伴ってそれを教えてくれていた。体は冷え切り、空腹感も感じるようになっていた。雨を避けるための屋根も見付からない。ただの森の小道。今一番恐ろしい想像は、がむしゃらに逃げる内に方向が引っ繰り返ってしまい、自分は実は、逃げてきた施設の方向に戻るように歩いてるのではないかというものだった。

あの職員の指を、私は噛み潰している。…千切れたとは思わないが、きっと歪な傷痕をずっと残すに違いない。……それを思えば、私が施設に連れ戻されたらどんな酷い目に遭わされるか、想像するに容易だった…。……だから、私は絶対に慈愛の家に辿り着かなくてはならない

のだ…。せめて、太陽があれば、それから方角の見当をつけることも出来るのだが…。

このいつ止むとも知れない雨の中ではそれすらもどうしようもなかった。だが、ここで足を止めても何もない。…私に出来るのは、何かに辿り着くまでひたすらに歩き続けるだけだった……。恵理子たちは無事に逃げ切れただろうか。何人の職員が追いかけてきたかはよくわからないが、少なくとも一人は私を追ってきたのだ。…その分だけ、逃げ延びた可能性は高いだろう。無事に、慈愛の家へ辿り着けただろうか。そして、ふかふかのタオルを与えられ、雨に濡れた体を拭いて暖を取ることを許されているだろうか。

そして、…もし私のことをまだ忘れないでいてくれるなら、私の分のタオルを用意して待っていてくれればいい…。それくらいに、今の私は体が冷え切っていた。雨の当たらないところをもしも見つけられたなら、そこに腰を下ろしたかった。

…でも、そんな場所はどこにもない。木陰の下は一見、雨粒がしのげそうに思えたが、たっぷり枝葉が吸った雨粒が大粒になって落ちてくるため、むしろ木陰の方が居心地が悪いくらいだった。やがて、空が少しずつ暗くなり始めているのを感じた。雨のまま、今日は日が落ちてしまうのだろうか。

辺りには街灯ひとつない。このままでは真っ暗闇に閉ざされてしまうだろう。

そうなれば、一歩も歩くことなど出来なくなってしまう。…たとえ雨ざらしでも構わないか

ら、腰を下ろして足を休めることが出来たらという欲求が強くなる。でも、もし腰を下ろしたなら、二度と立ち上がる気力などなくなってしまうに違いない。……だから歯を食いしばって、その欲求を堪えた。もし恵理子たちと一緒に脱走することを選ばなかったなら、雨に濡れて寒さに凍えることはなかったろう。

でも、…あの施設の理不尽な生活に比べれば、これしき大したことはないのだ…。……そう自分を納得させて、悲鳴をあげかけている両足を騙すしかなかった。だが、軋む足が言い返す。確かに施設での酷い生活に比べれば、冷たい雨の中で凍えるのだってまだマシなことかもしれない。

……でも、それは施設に比べればというだけの話。…ごくごく一般的な、自分と同い年の子たちと比べてもマシなことだと言えるのか。……そんなこと、自分の足に言われたくなかった。父さんと母さんと一緒だった頃は、特別、裕福ではなかったにしても、町内でも普通の、平均的な生活をしていたと思う。

やさしい笑顔や、許してもらえるわがまま。朝、台所から聞こえてくるまな板の温かな音や、居間から聞こえる新聞紙を畳む音がただただ懐かしい。何の不足もない生活だった。近所にも学校にも友達はたくさんいたし、学校生活も楽しかった。嫌いな先生の授業は苦手だったけど、勉強そのものも十分楽しんでいた。…十分、満ち足りていた。それで十分な生活だった。不平

不満など言ったことはない。誰かに後ろ指を指されるようなことなんかしたこともない。ならば、これは一体、何の天罰だというのか。あの鉄道事故の日から、私は転がり落ちるだけ転がり落ちた。運命のサイコロは常に一の目だけが出続けた。私にサイコロの目が微笑むことなど一度だってなかったのだ。せめて、あの鉄道事故が私のせいだったならまだ受け容れられる。……でも、あの事故は私のせいでもなんでもない。……いや、事故の現場すら私は見ていないのだ。父さんと母さんがいつまでも帰ってこなくて、ずっと家で待っていた。デパートに買い物に行くのについて行くのは大好きだった。行けば必ずデパートのレストランでおいしい食事をすることが出来たから。

だから、デパートに行くなら私にも声をかけてほしいといつも言っていたのに。……なのに、あの日、両親は私が遊びに行っている間に、私に内緒でデパートに行ってしまったのだ。遊びに行った友達はいなくて、肩を落として帰ってきたら、家は誰もいなくて、デパートに行ってきますという書置きだけが残っていたんだ。それで私は、あぁ遊びになんか行かなければよかったって後悔しながら、留守番をしてたんだっけ。夕食の時間になっても帰ってこなくて。

私はお腹を空かせながら、私を置いていって出掛けた両親を恨んだんだ。きっと、自分だけを抜きにしてデパートのレストランでおいしいものを食べてるに違いないって思いながら。もし遊びに行かず家に残っていたなら、きっと今頃、レストランでお子様ランチを食べていた。

チキンライスの山の上にちょこんと立った、爪楊枝の国旗が、何だかとても嬉しくて嬉しくて。
そういえば自分には、お子様ランチに刺さっている爪楊枝の国旗を集める趣味があったんじゃなかったっけ。…そうだ、集めてた。お子様ランチの旗が二十本集まったら、何か素敵なことが起こると願掛けして、集めてた。
でも、その旗は揃わなかった。あと一本で二十本だったのに、…届かなかった。
あと一本があったなら、……両親の事故はなかったことに出来たのではないか。……想像するだけでも虚しくて悲しくなる、…お子様ランチの旗の、思い出。いつまでも、両親がデパートから帰ってくるのを、じっと待っていた。…お腹が空いたので、煮干を食べて待っていた。あまり食べると、摘み食いしたのがバレるので、バレない程度に気をつけながら。そうしたら、……電話が鳴ったんだっけ。私は、両親からの電話に違いないと思った。一人娘を空腹のまま放ったらかす両親に悪態をつきながら受話器を取ったんだ。
でも、出たのは両親じゃなかった。
……………………。
私の家はどうなっているのだろう。
借家だったから、もう他の人が入居してしまっているのだろうか。私の部屋はどうなったのだろう。学習机も、その右側の真ん中の引き出しにしまっていた、溜め込んだお子様ランチ

の国旗は捨てられてしまっただろうか。あの家がもう我が家でないのなら。私はどこを居場所にすればいいというのか。

…いや、仮にまだ私の家だったとしても。私を迎えてくれて、そして守ってくれる両親はもういない。両親に守られないというだけで、世界はこれほどまでに残酷(ざんこく)になるのか。両親を失い悲しみに暮れる少女を、どうしてわざわざ住み慣れた我が家から連れ出すのか。どうして私をそっとしておいてくれなかったのか。……確かに、色々と聞かれたさ。確認をされたさ。…でも、心に深い傷を負って呆然とするひとりぼっちの少女に、難しい書類を出されたら、その内容の吟味(ぎんみ)なんか出来るわけがない。はいかいいえかと聞かれたら、よくわからないけれど、はいと答えるしかない。そうしたら、いつの間にかこんなところに連れて来られた。…あまりに無慈悲だった。私には何の落ち度もない。……ただ普通の女の子だっただけ。

確かに何かの書類に色々とサインさせられたけど、……だからってそんなのはあんまりだ…。私にとっての温かな世界は、何の予告もなくぷっつりと途切れてしまい。そして私を、あまりにも残酷で無慈悲な世界へ、たったひとりで放り出す。これが世界なのか。この世界には私の味方は存在しないのか。…両親が死に、親類がひとりもいないというだけで、これほどまでにも世界は悲しくなるのか。運命のサイコロは、いつになったらこれまで続いた一の目に見合う六を見せてくれるのか。

「……うう……ッ……。」

いつしか、熱い涙がぼろぼろと零れていた。そのしょっぱさが、何だか無性に苛立たしくて悲しくて。私はさらに涙を零すしか出来なかった……。でも、いくら泣いたって、悲しんだって。凍てつく雨で冷え切った体を温めてはくれないし、…今の私を救ってもくれない。今、自分がどこを歩いているのかもわからないいし、どちらへ向かえばいいのかもわからない。

施設から慈愛の家までの道順は、脱走計画を練る時に恵理子たちと一緒に地図を見て覚えていた。…でも、それは最短の道順でしかない。

私は完全に道に迷い、途方に暮れていた…。でも、とても不思議なことに、涙を零しつくすと、……何の根拠もないのに、ほんの少しの力が湧いてくる気がした。

人の涙は目のゴミを洗い流すためにあると習ったけれど。…それだけではなかったのだ。…心の中にある何かも洗い流してくれるのだ。私は両の拳をぐっと握り締めると、再び、軋む足を交互に動かし、自分が正面だと信じる方角に、砂利道をひたすらに歩き続ける。……雨は一向に止む気配はない。どんどん、どんどん暗くなってくる。私は雨の中、天に向かって吼えた。

悲しみは、いつしか怒りに変わっていた。

「神さまのばかッ!!　…どうして!!　どうして私がこんな目に遭わなくちゃならないの!?　私が何をしたの？　何もしてない!!　ただ普通に生活してただけ。そんな私がどうしてこんな目

に遭わなくちゃならないのッ!! 人生はいいことも悪いことも二つあって、どちらも長続きしないってお父さんが言ってた! なら、これだって長続きしないんだよね…? いつまでも私は、こんな酷いところにひとりぼっちじゃないんだよね…? ねぇ、そうなんでしょ…?」

天を仰いでも、私の顔面を冷たく大粒の雨が叩きつけるだけだ。

神さまなんていないって、もちろん理屈ではわかってる。…でも、そんな不信心で、今の自分が救われるわけがないのだ。いてくれるならば、いる。いや、〝いろ〟。…私の言葉がもしも天に届いているならば、それは相槌なのだろうか。天にごろごろと雷鳴が轟いた。私は確信した。…神さまはいる。

いてくれて、私の嘆きを聞いてくれているのだ。そして、全ての人は神さまの下、公平であるというルールのはずなのに、その恩恵から漏れている私の訴えを聞いてくれているのだ。

「もう私は十分、辛い思いをした。十分過ぎるくらいに!! これまでがそれに見合うくらいに幸せ過ぎたなら、この不幸を甘んじて私は受けることもあるかもしれない。でも、そんなことなかった!! 私は普通の生活をしてきたに過ぎない。それが幸せじゃなかったのかと言われたら、…確かにそれは幸せだったのかもしれないけれど…。だからって、それの裏返しがこれでは…あまりに見合わないッ!!」

天は再び相槌を打つ。私の嘆きをしっかり受け止めてくれていた。だから言ってやった。

「もし!! 私の運命が神さまの何かの間違いだと言うのならッ!! もう私を解放して!! これで私の不幸を終わりにして、私を今日までの不幸に見合う幸福に導いてッ!! でももし!! これが私に与えられた運命で、このまま私に生涯を終えろと言うのならッ! こんな人生いらないッ!!! 私を殺してよッ!! その雷で私を打ち付ければいいッ!! 落雷で殺されてしまうという最後の不運を私に見舞えばいいッ!! さぁ、試してみなさいッ!!! 私の人生を無慈悲に奪ったように、その雷で無慈悲に私を打ち据(す)えればいいッ!!」

天はもう一度、唸(うな)り声をあげる。びりびりと全身に震えを感じるくらいに大きな雷鳴を轟かせる。

普段なら、恐れて家に閉じ籠(こも)って雷雲(かみなりぐも)が過ぎ去るのをじっと待つだろう。……だが、今の私は雷雲に何の畏(おそ)れも感じなかった。

「さあ!! 殺せッ!! 田無(たなし)美代子はここにいる!! 私のお父さんとお母さんを奪ったように、私の命もここから奪えッ!!!」

天は私の挑発に乗る。そして、人間の分際(ぶんざい)で身の程を弁(わきま)えない暴言を吐(は)き続ける私に、その天の矛の狙いを定める…。

私もそれを望み、大きく手を広げる。まさか神さまほどの存在が、私を外すということはあるまい。でも、神さまだって万が一ということはある。…等しく公平なはずなのに、私にだけ

不公平な不幸を与えるのだから……！

「さぁ狙え、殺せ!!　私を天に連れて行けッ！！！」

だがもし、私を殺し損ねたなら。

「私の運命を、ひっくり返してみろッ！！！！」

天の閃き。直前に空気が乾くような、いや、焦げた臭いを嗅いだような気がした。私はとてつもない何かに弾き飛ばされ、いつの間にか仰向けになって倒れていた。

…それはとても不思議な経験。たった今、ものすごい力で放り出されたにもかかわらず、……なぜかそれは何年も前の出来事のように感じられたのだから。…私は、いつからここで仰向けに倒れているのか、わからなかった。鼻を突く異臭。…その妙な臭いに、やっと私は正気を取り戻す。

見れば、私が背にしていた大木が、ざっくりと割れ、枝葉がチリチリと焦げた臭いをさせていた。見上げると、闇の中に火種の赤い光がちらちらと見え隠れしている。私はしばし、何が起こったのか理解出来ず呆然と立ち尽くした…。落雷があったのだ。……そして、それは私を打ち抜かず、私の背負っていた大木を貫いたのだ。……つまり、私は死に損ねたわけで。私はまだまだ、この冷たい雨に打たれて闇の森の中を裸足で彷徨えということなのだった。でも、……私は神さまとの賭けに勝ったのだ。

私は確かに賭けた。落雷に我が身を賭けた。貫けば、それで終わり。でも、もしも私を殺し損ねたなら、…私のこの不幸な運命を引っくり返してくれと。
私は強がるように笑いながら天を見上げ、自分が未だこうして生き残っていることをこれ見よがしに示してみせた。天は遠雷で唸ると、私との賭けに敗れたことを認めたようだった。
さぁ、神さま。私を救って。私は賭けに勝ったんだから、この不幸から今すぐ救い出して。
………………。
短くない時間を立ち尽くした。天が、私に何を応えてくれるのかを、雨に打たれながらひたすらに待った。…でも、天はもう一度応えることはなく。……待てども待てども、雷鳴ひとつ聞こえることはなかった…。もう一度、頬を熱いのが伝う。
……当り前じゃないか。……天に神さまがいたら、…こんな理不尽な運命など許したりするものか…。私の不幸な今日までが、まさにこの世に神さまなど存在しないことの証拠じゃないか……。
いよいよ暗闇に沈む森は、私を無慈悲に包み込もうとしていた。私は、このままここに眠らなければならないのか。……落雷で一気に命を奪われるのではなく、雨に凍えさせられながら雨水が私を溺れ殺すまで、じっとここで待ち続けなくてはならないのか…。太陽など消えてしまえ。二度と昇るな。……そして、この森が闇に閉ざされ、私の視界の全てを闇で塗りつぶし

てしまうように、私の存在も塗りつぶしてしまえ。……そして、どうかこのまま私を消して欲しい……。…………永遠なのか、わずかなのか。…時間の単位すら喪失した闇の中で。私は何かが見えた気がした。……それは、…灯り。森が闇に閉ざされたからこそ、…木立のずっと奥から漏れてくるわずかな灯りに気付けたのだった。

…でも、そうだろうか。…さっきまであんなところに灯りがあっただろうか。私は、まるで灯りが誘っているように感じた。…あの白い灯りはきっと蛍光灯。蛍光灯の白い灯りは、電球のほんのり黄色い灯りに比べるとどこか冷たい感じがするのが好きではなかった。

……でも、あの白い灯りからはそういう冷たさは感じなかった。

私はその灯りを、神さまが示した道標だと信じることにした。信じなきゃ、救ってくれないに違いないと、最後に信じて…。蛍光灯の灯りが水溜りに映る。それは泥の中の水溜りではない。…歪んだアスファルトの上に溜まった水溜りだった。……私は森を抜け、舗装道路に出たのだった。灯りは、忘れられたようにぽつんと立つ街灯だったのだ。でも、道路に出られたからといって、何かの解決になるわけじゃない。

ただの田舎の道路だ。森を貫く一本の道路で、民家も商店もなければ、通りがかる車さえない。街灯も疎らで、私を闇夜から解放してくれるほどではなかった。ぺたりと私の素足がアスファルトに乗り上げるのを感じた。それは砂利を踏んでいた時とはまったく違う、慈しみさえ

感じるやさしい感触だった。
ずっと砂利の上を歩き続け、痛みすらも麻痺(まひ)してしまっていた足だったが、……アスファルトのやさしさを覚えてしまうと、二度と砂利の上を歩きたくないと言い出す。…私はこの舗装道路の右に行くか左に行くかのどちらかしか選べないようだった。
もし神さまが、砂利の上を歩き続けて足を痛めきってしまった私を哀れに思って、ここへ誘ったなら、それはそれで嬉しいことだったが、……さらにもう少し導きがあってもいいように思った。これだけの幸運では、私の今日までの不幸とはあまりに見合わない…。……そう思った時。…灯りによる導きを私は感じた。
見れば、遠くに灯りが見える。それは右側にだけだ。私はそれを目指して歩く。そして少しも歩かない内に、その灯りの正体に気付いた。…それは、何でこのようなところに、と不思議に感じずにはいられない、…電話ボックスだった。このような森の中で、一体誰がわざわざここまで出向いて電話など掛けようと思うのか。
いや、…そもそも当時、電話ボックスはとても珍しいものだった。タバコ屋の軒先にあるような赤電話はよく見掛けたが、独立した電話ボックスは都会にしかないものだと思っていた。…まるで、この電話ボックスが悪いことをして、罰としてこのような暗い森にひとり放り出されているのではないかと錯覚してしまうくらいだった。

そう思うと、……このひとりぼっちの電話ボックスは私と同じ境遇のように感じられ、…私は一層の親近感を感じるのだった。電話ボックスに辿り着いたところで、今の私にとって何の解決にもならないはず。それを理屈ではわかっていても、……私は電話ボックスへ向かうことに何の疑問も感じなかった。きぃ、と扉を押し開けると、……中は灯りに集まる蛾や昆虫でいっぱいだった。普段だったなら、気持ち悪いと感じるかもしれないが、…今の私には雨から逃れようとここに集まった仲間のようにも感じられた。

…暖房など何もないはずなのに。…でもなぜか、電話ボックスの中は温かだった。四方を鋼鉄製のボックスがしっかりと守り、私を冷たい雨から守ってくれる。いつしか私はそこにへたり込むように座り込んだ。

蛍光灯の灯りが温かく包み込み、もう泣いてもいいんだよと囁いてくれてるような気がした。……でも、あの落雷の瞬間から、涙は干上がってしまって、もう一滴も零れてはくれなかった。体中の傷が痛む。そしてふくらはぎの筋肉が痛む。…体中の骨が軋み、もう二度と立ち上がりたくないと騒ぎ立てた。電話ボックスの中で、雨から守られながらこのまま眠ってしまいたいという欲に駆られる。……でも、もしもこのまま寝てしまったら、…その間に、私を探す職員たちに見つけられてしまうかもしれない。確かに、窓の部分は高いから、しゃがみ込んでしまえば外からは見えないだろうけども。…このような暗闇の森にある唯一雨宿りが出来る場所な

のだ。職員が中を確かめないわけがない。…私はいつまでもここにいられないのだ。（当時の電話ボックスは今日のような全面ガラス張りではなかったため、電話ボックス内に隠れることが可能だった）

疲れきり、やつれきってしまった心は、その現実を理解していたが、…ここを今すぐに立ち退かなければならないという焦燥感には駆られなかった。………達観と言おうか諦観と言おうか。…初めて経験する不思議な落ち着きだった。

まるで自分が自分ではない感じ。……とても不思議な感覚だった。私はひょっとすると、あの落雷の時、死んでしまったのではないだろうか。…今の自分は、田無美代子だと思い込んでいるだけで、別の存在なのではないか。

…そんな妙なことを大真面目に考えてしまう…。そして、そんな妙な感覚は、この電話ボックスには何か意味があると考えさせた。

なぜなら、神さまが私をここに導いたのだ。………雨を一時しのげるだけの意味で、この場所へ私を誘ったはずがない。

意味があるのだ。ここにはきっと何か私を救う意味があるのだ…。……でも、一体、何の意味があるのだろう。電話ボックスは、電話を掛けるためにあるのだと思う。……でも、私はお金を持っていない…。そう思った時。……さっきまでは何もなかったところに、…鈍い銅の輝

きがあるのを見つけた。……どきりとする。だって、そこには十円玉などさっきはなかったはずだ。いや、私の勘違い……？　でも、私にはそうは思えなかった。……さっきまでなかったところに、十円玉が忽然と現れたように感じられるのだった。

なら、…この十円玉は神さまのお導きだ。この十円玉を使って、電話をしろと言っているのだ。でも、………どこへ？　ここには電話帳などない。

ということはつまり、……私の知っている番号にしか掛けられない。

………いや、私の知っている番号に掛けろということなのか…。だが、十円玉は一枚しかない。掛けられるところは一箇所しかない。そして、話せる時間も長くない。

……神さまを試すような真似をしたものだから、…神さまも私に対し、試すような真似をするらしい…。……このたった一回のチャンスで、もう一度、私の運を試せということらしかった。私は思わず外へ飛び出して、雨粒に再び打たれながら天を仰いだ。そして心の中で叫ぶ。

この味な勝負を受けてやると叫んでやる。この十円玉で、どこへ掛けろというのか。どこへ掛けろというのか。自分の家？　両親はすでに死んでいるし、親類もいない。掛けたって、誰も受話器を取らないだけだ。

………いや、電話料金をずっと滞納しているのだから、不通にされてしまってるのではないだろうか。私の自宅は、私の失ってしまった人生そのもの。いや、人生の残骸でもある。

…そこへ掛けようと思うのは単なる未練で、……人生を引っくり返そうという前向きな姿勢とは相反するものだ。だから、自宅へ電話をするために十円を投じるのはきっと間違っている。なら、……このたった一枚の十円玉は、私の未来に投じなければならない。未来。…未来？　私の未来って……？　その時、…まったく予期せず、再び巨大な雷鳴が轟き、私の耳をつんざいて意識を真っ白にさせた。そして、無音の真っ白な世界で、…目蓋の裏に浮かぶのは、今となっては懐かしき記憶。それは最後の父の光景。病院のベッドの上で、苦しそうにしながら、私に大切なことを託す、最後の時。

「もしもな、お父さんが死んだら、高野先生を頼りなさい。高野一二三先生だよ。言ってみなさい。」

「高野、ひふみ…。」

「そうだ。高野一二三先生だよ。…高野先生はお父さんの恩師なんだ。きっと、お前を助け、けっ、げほッ!!　げへがはッ!!」

「お父さん、お父さんお父さんお父さん!!!!」

お医者様たちが大慌てでなだれ込んで来る。

父さんはまだ何かを伝えようとしていたが、それはしゃべらないようにと制止するお医者様たちのせいで聞き取ることは出来なかった。

……聞き取ることは出来なかった、なんてことはないんだ。私は聞いていた。聞こえていたのに、父さんの苦しい声をそれ以上聞くのが痛々しくて、聞こえないふりをしただけなんだ……。父さんは苦しい咳の中、最後に確かに言った。そうだ、私は確かに聞いている…！

それは数桁の数字。……私は固い唾を飲み込む。そうだ。……それは、…電話番号だ。

……親類がなく、誰も私を引き取ってくれないことを知っている父が、最後に頼れと言った、高野一二三先生。その先生に連絡を取れと、電話番号を私に伝えようとしたのだ…。ああ、私は何て大切なことを聞き流していたのだろう。父が苦しい咳の中で、人生で最後に許された言葉を使って、娘に伝えようとした本当に大切なことなのに…‼

あの時のことを、……さっきの雷鳴ははっきりと思い出させてくれた。今まで、一度も思い出せなかったはずの……その数字が、自然と口から零れだす。私はそれを、……ダイヤルしてみる。

…間違いない。これは、お父さんの恩師、高野先生の電話番号なのだ…。だが、十円玉を投じようとする瞬間、その手が止まる。もし、自分の記憶にわずかの歪みがあったなら、それまでだ。……逡巡(しゅんじゅん)するな。間違いないんだ。間違いなく、その番号なんだ。…早くダイヤルしないと、忘れてしまいそうなくらいにか細いけれど。私は意を決して受話器を取り、十円玉を

投入口に入れる。
ガチャリ、ツ――――。
私のダイヤルを待つ電子音が聞こえてくる。この十円玉が駄目だったら、……死ねばいい。再び森に戻って、落雷を待とう。あるいは雨の森に寝そべり、雨水が私を溺れ殺すのを待とう。アスファルトの上で眠り、深夜の車が私を轢(ひ)き殺してくれるのをじっと待とう。
……私の不幸を全て引っくり返す。この十円玉で…!! 躊躇せず、ダイヤルする。一気に。でも焦ってはいけない。ダイヤルはゆっくり確実に回さないと、番号が変わってしまう。
……その確実さが私を苛立たせ、さっきまであんなにも鮮明だった数字の記憶を嘘のようにおぼろげにしてしまう…! …最後の桁をダイヤルし、……私は電子音が受話器の向こうで駆け巡っているのに耳を澄ました。電話番号が間違っていないことを、天に祈るしかない。
そして、仮に高野先生につながったとしても、何を話せばいいのか、全然わからなかった。ここがどこなのか。どうすればいいのか。何を頼めばいいのか、話せばいいのか。……何もわからなかった。電話の料金は決して安くはない。十円玉で話を許される時間などほんのわずかだ。向こうの電話に届いたらしい。呼び出し音が繰り返される。どうしよう、相手が受話器を取ったら、わずかな時間しかない。
……今からでも受話器を置こう。そうすれば十円玉が戻って来る。よく話す内容を吟味して

整理してからもう一度掛け直すんだ…。そう思った時、……受話器が取られた。
「もしもし。高野です。」
「…………ぁ、」
息が詰まりそうになる。………私の記憶に残っていた番号は正しかったのだ…。電話に出たのは、年齢はわからないが大人の男性の声だった。……お父さんが恩師と呼んでいたのだから、きっと年配に違いない。そ、そんなことはどうでもいい。早く何かをしゃべらないと…。…早く早く…。
「ぁ、…あの、…高野先生ですか？　えっと、…ぅ、高野、…一二三先生ですか…？」
「………？　そうですが、どちら様ですか？」
相手は相当、怪訝(けげん)に思ったようだった。無理もない。名乗りもしない相手に名前を確かめられたら、普通なら薄気味悪い。
「ご、ごめんなさい…！　私、田無って言います。田無美代子と申します。」
「田無さん…？　はい。」
「あの、私の父に高野先生に電話しろって言われたんです。父は、田無武光(たけみつ)と言います。」
「……田無。……田無。………あぁ、田無くん！　あぁぁぁ！」
怪訝そうだった声色が、思い出したような声で一気に変わる。…高野先生は古い教え子を思

い出してくれたようだった。
「私、娘です！　お父さんに電話しろって言われて…。」
「田無くんに何かあったんですか…⁉」
あぁ、これではいけない。十円玉で話せる時間なんて本当にあっという間なのだから…！
「お父さんとお母さんが……電車の事故で死んじゃって…。それで、高野先生に電話しろって言われたんです。」
「田無くんがお亡くなりに…！　そうですか…。二人とも？　…それは本当にお気の毒です。田無くんは、私が大学で講師をしていた時、しばらく交流があったことがあります。何事にも勤勉なよい青年でした。結婚式に呼んでもらった時に会ったのが最後だったような気がします。」
どうやら、私が生まれたことまでは知らなかったらしい。でも、お父さんを覚えていてくれた。それは本当に幸運なことだった。
「それで、田無くんは私に何と…？」
「あの、…えっと、………」
何て言えばいいのか、咄嗟(とっさ)の一言が出てこない。高野先生に電話しろと言われただけだ。…何をどう伝えればいいのか。

十円玉で話せる残り時間はもうわずかに違いない。そう思えば思うほどに、焦りが募る…。
…普通、電話が切れてしまう瞬間に予兆はない。
でも、その時、私は神懸った何かで、その予兆を悟った。
つまり、たった一言しか許されなかった。だから、一番伝えたい一言を最後に託す…!
その言葉を伝えきる前に、電話は無情にも切れた。向こうには、助けての、タスケ、くらいまでしか伝わっていないかもしれない。声色から、私の必死な思いを汲み取ってくれるのを祈るしかなかった。もう受話器からは何も聞こえない。でも、……私はほんのわずかだったけれども、高野先生と話をした。
「た、助けてくださいッ!!!」
高野先生は架空の存在じゃない。実際に存在して、お父さんのことを覚えていてくれた恩師だった。もし、彼がかつての教え子の死を悼んでくれたなら、きっと私の自宅を訪れてくれるだろう。
そして、私に引き取り手がなく、施設へ連れて行かれたことを知ってくれるに違いない。
そして、私を迎えに来てくれて、引き取ってくれるに違いない…?
その時、……涸れ切ったと思っていた涙が、ほろりともう一度だけ零れた。何の希望もない人生だと思っていた。その中で一粒の希望を見付けられることが、こんなにも嬉しくなれて、

勇気をもらえることだなんて知らなかった…。電話の向こうに聞こえた声は、とても頼もしく温かい声だった。

父さんは病院のベッドの上で、後にたったひとり残される私のことをずっと考えていてくれたに違いない。…そして、私を託せる一番信頼出来る人の名を口にしたはずなのだ。

そして、それが高野一二三先生なのだから。だから、高野先生はきっと信頼出来る。きっと私を探し当ててくれる…!! でも、それは明日にはすぐにやって来てくれるというものではないだろう。…来てくれる日まで待ち続けなくてはならないだろう。

ほんの数日か、一ヵ月以上先か。……とにかく、じっと待っていよう。電話ボックスにいつまでもいると、追っ手に見付かってしまうかもしれない。私は再び冷たい雨の中に身を晒す。さっきまでと同じ雨のはずなのに、…なぜかほんのちょっぴりの温かみを感じた。

あの雷雨の中で死を望み、いつ自分に雷が落ちてもかまわないと思っていたのに。…今はまったく逆だ。生き延びたいという強い力がみなぎるのを感じた。生きたい、と思ったからこそ、今は全身の痛みをより鮮烈に感じることが出来た。……死んでも構わないと諦めることは、こんなにも痛みを忘れさせてくれることだったのだ。私は、高野先生が助けに来てくれるまで、じっと待たなくてはいけない。

慈愛の家へ行こう。慈愛の家へ行って、高野先生が来るのを待とう。施設は、私が慈愛の家

へ逃げたとは言わないかもしれない。…でも、慈愛の家は私に電話を禁止したりはしないだろう。電話で改めて、自分が慈愛の家に保護されていることを伝えればいい…。……でも、慈愛の家はどこにあるのか。ここがどこかを示すものは何もなく、慈愛の家はおろか、逃げ出してきた施設がどちらの方向かすらわからない。でも、ここに立ち止まっているわけにはいかなかった。

歩かなければならない。そして、雨宿り出来るところを探さなければならない。人を見つけ、道を尋ね、慈愛の家を目指そう。

失ってしまった人生を、もう一度取り戻す、たった一本のか細い蜘蛛の糸が、私の前にようやく垂らされたのだから…。冷気と鈍痛が全身を苛む。高野先生に出会うまでは、絶対に死ねない…。せめて、車でも通りかからないだろうか。それが地元の人だったなら、道を聞けるかもしれない。

…逆に警察はまずい。きっと私たちが脱走したことは警察に通報されてるし、警察は浮浪児に対して何の容赦もしない。…私を捕らえて施設に送り返すはずだ。どちらにせよ、…誰かに現れて欲しかった。

でなければ私は、果てしなく続く、この暗闇のアスファルトを永遠に歩き続けなくてはならないのだから……。……どれだけ歩いただろうか。…車などまったく通らない。私ひとりを残

して世界が滅んでしまったのではないか、などと妄想し始めた頃、初めて車が一台、現れてくれた。後方に車の音を感じ、振り返ると、はるか彼方からヘッドライトが近付いてくるのが見えた。…どうしよう。道路に立ち塞がって、車を停めてもらおうか。こんな闇夜（やみよ）だ。手を振るくらいじゃ、気付いてもらえず通り過ぎてしまうだろう。でも、道路の真ん中に立ち塞がったら、下手をしたらはねられてしまうかもしれない…。……そんなことをぼんやりと考えている間にも、車はどんどん近付いてくる。さっきの電話の時は、よく考えずにダイヤルしてしまい、咄嗟に何を話していいかわからなくて混乱してしまった。…だから今度はよく考えてから行動しよう。

それが思いつかないなら、とりあえずこの車は通り過ぎさせてしまって構わないだろう…。そんなことを漠然と考えていたから、その車が鋭い悲鳴のような音でブレーキを掛けながら停まってくれたのが、ものすごく意外だった…。…落雷を間近に受けるという、神秘的な経験をしてから、私は足が地に着いていなかったかもしれない。……あの真っ暗な森の中で、私は半ば正気（しょうき）を失い、正常な思考を失ってしまっていたかもしれない。

だって。

私の姿を見て停車したということは、私のことを知っている人間が乗っていたというわけで。

……そんな人間がこの土地にいるとしたら、それは…、そこまで考えが至って、ようやく私

の全身に恐怖が駆け上った。私は脱兎の如く駆け出す。その背後に、待ちやがれッという乱暴な声が浴びせられた。でも、もう脱走した時のような瞬発力は失われていた。右足も左足もがくがく震え、ちっとも協調しようなんてしやしない。…あぁ、やっぱり電話ボックスで座り込んでしまったのがいけなかったんだ。座ってしまったから、足がもう挫けてしまったのだ…。後襟を掴まれ、自分の服の襟元に喉を潰されそうになる。服の縫い目がどこか裂けたらしい音がした。アスファルトの上の水溜りで私は転倒し、職員に圧し掛かられるような形で組み伏せられた。……指は私の口の中にない。出来る抵抗はもがくことだけだった。こんな状況下になって、私は恵理子たちに聞かされていた、恐ろしい話を電撃的に思いだす。脱走に失敗して捕らえられた子が、他の子への見せしめに受けたという様々な責め苦。「水を飲めないアヒルの刑」や「潰れた芋虫の刑」、「手足をもがれた豚の刑」。

……忘れることの出来ない、不気味な刑罰の名前が次々に頭を過ぎる。私はあらん限りの金切り声をあげながら、逃れようと死力を尽くしたが、そんなものは全て手遅れだった。職員に挟み込まれるようにして、車の後部座席に連れ込まれる。どうして自分を見逃してくれないのか。…それはきっと、施設での数々の悪行が私の口から外部へ漏れるのを恐れているからに違いない。職員たちは、私を追いかけた時には、その口から恐ろしい声を吐き出していたのに、…私を車に詰め込むと、後は逆で信じられないくらいに沈黙を守った。それはまるで、死神た

ちにあの世への舟に無理やり乗せられたかのよう。私は自分の命運が尽きたことを、否応なく自覚しなければならなかった…。

でも、………でも。

髙野先生に電話した。……髙野先生はきっと助けに来てくれる。

それがいつかはわからないけれど、…きっと何日か後には助けに来てくれるはずなのだ。だから、……それまで生き延びたいと思った。それまで生き延びることが出来れば、私は救われるのだ…。私をどんな責め苦が待つのか、…想像もつかない。でも、……死ぬものか。…絶対に生き延びてやる…。もう私は地獄から抜け出す蜘蛛の糸を掴んでいるのだ。……あとは、それを引き上げてもらえるまで堪えるだけなんだ……。

車が停まった。……私の期待を一切裏切らず、そこは施設の正門前だった。両脇の職員は、私を二度と逃がさないというのを握力で示すかのように、私の両肩を握り締めていた。

……骨と皮しかない私の肩がきりきりと痛む。……怖くないと言ったら嘘になる。自分はどんな目に遭わされるというのか…。通用口を潜らされ、…私はようやく、冷たい雨から解放された。……もっとも、解放という例えが正しいとは思いたくない。こんなにも深夜なのだから、消灯時間はとっくに過ぎている。…施設はシンと静まり返っているはずだった。

でも、……音はあった。それはとてもおかしな音たち。

止めるのを忘れたシャワーの音。私の大嫌いな金属をずっと叩きつける音。それに混じる職員たちの奇声、怒声。…背中を悪寒という名の蛆虫（うじむし）たちが這（は）いずり回る。…あぁ、私は何をどう書き記せばこの恐怖を伝えきれるというのか…。用具室の扉を職員がノックすると、その扉が開かれた。…開くと同時に、用具室の中の怒声が溢れ出す。その中の光景が、私の瞳に飛び込んでくる。……その異様な光景を、私は受け止めきれずにいた。二人の職員が、暴力的な言葉を吐き出しながら、……竹刀（しない）で、体育用のマットを叩いているのだ。そのマットは、……ほら、連続前転なんかをする時に使うような、特に長い特別なものに違いない。…でも、こんなにも太く巻かれていただろうか…？

そして、その巻かれたマットは紐（ひも）で縛られ、そして用具室の隅に立て掛けられていた。…それを、職員たちは竹刀で打ちつけているのである…。言葉というのは普通、人に対して掛けるもの。…なのに、マットという人でない存在に、まるで人であるかのように暴言を吐きかけて竹刀を振るうその様は、一言で言うならば狂気の体現に他ならなかった。そのマットの上から、…何かがはみ出ているのが見えた。それは、えっと、……誰の靴だったたっけ……？　頭が恐怖の霜柱（しもばしら）でいっぱいになり、何の思考も許さなくなるのを感じた。

私の前に、ぬっと男が立ちはだかる。…その男の小指には、ぐるぐる巻きの包帯がされていた。私の目線が、…その小指からゆっくりと上へ登っていき……、その男の目へ辿り着いた時。

……私の瞳を食い破ろうとするくらいに覗きこんでいる野獣の目と、ぶつかる。声なき悲鳴が私の喉の奥から振り絞られた…。でも、声なんか出ないからそれはきっと…、金魚が息苦しくて口をぱくぱくさせるような…そんなものにしか見えなかっただろう。野獣は私に小指を突き出し、吼え猛った。それが言葉なのか咆哮なのかはわからない。でも、きっと暴言か何かに違いないことはわかった。

私は怖かった。死にたくなかった。生き延びたかった。生きて待てばきっと高野先生が助けに来てくれる。そう思ったから、生にしがみ付きたかったから、だから恐怖に屈服した。

「ご、…ごめんなさいごめんなさい！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!　あぁああぁぁぁあぁぁッ…！！！」

その小指に包帯をした手が、髪を鷲掴みにして私を引き摺る。私は泣きじゃくりながら、野獣の心に、わずかでも慈悲が蘇ることを祈って、謝罪の言葉を重ね続けるしかない。

それは、まるで壊れた謝罪人形。ネジが切れるまで、ごめんなさいを紡ぎ続ける狂った人形。ぜんまいの音の代わりに、涙を零し、血を吐くくらいに、謝り続ける、…彼らの玩具。途中、シャワー室が見えた。扉が開いていて、中から怒号があふれ出しているのが見えた。それもとても異様な光景…。

出しっぱなしにされたシャワーの滝の下に、……あぁ、何て違和感…。ロッカーが横倒しに

されていて、シャワーを浴びているのだ。…こんな妙な光景を私はこれまで想像したことすらない。横倒しにされたロッカーに冷水のシャワーが浴びせられ、そのロッカーを二人の職員が竹刀でガンガンと打ちつけている。あの嫌な金属音は、彼らがロッカーを叩く音だったのだ…。私にその光景を見せるつもりはなかったらしい。乱暴な腕が私の髪を引っ張って首を捻り、無理やり逆側を向かせる。

そして思った。それは、私にその光景を見せないために振り向かせたんじゃない。

…シャワー室とは別の光景を見せるために振り向かせたのだ…。そこには窓があり、中庭があった。……普通なら真っ暗闇で何も見ることなど出来ない。…でも、なぜか灯りが付けられていて、中庭は煌々(こうこう)と照らし出されていた。そして、見てしまう。鶏小屋の中で、＊＊＊＊った、＊＊＊＊を。……な、……なんて、ことを…。＊＊＊＊ったら、＊＊＊＊、＊＊＊＊＊＊＊＊…、＊＊＊＊＊＊!!　でも、あの髪型は確かに恵理子だった。…＊＊＊＊?　＊＊＊＊＊＊＊ッ!!!　あんなことしたら、＊＊＊＊!　……あんまりに＊＊＊＊ッ!!!

「うわああぁあああああああぁあああぁッッ!!　ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいッ!!!　あああぁあああぁあッ!!!」

死にたくない死にたくないッ!!　生きてれば必ず高野先生が助けに来てくれる、必ず助けに

来てくれるッ！！！　私が引き摺られた先は、職員用便所だった。アンモニア臭がツンと鼻腔（びこう）を突く。でも、そこに置かれていたのは、あまりに便所には不釣合（ふつりあ）いな＊＊＊＊…。…何でこんなものが便所なんかに置いてあるの…？　まさか＊＊＊で私を＊＊＊る気なんじゃないよね？　そんなの＊＊だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だッ!!！

「田無。これは施設のルールを守らない悪い子へのお仕置きなんだからな？　みんなちゃんとルールに沿（そ）って生活してる。それを守らなかったらお仕置きを受けなきゃならないのが法治国家のルールなんだからな…？」

「ごめんなさいごめんなさい!!　もう悪いことしません、言うことは何でも聞きます！　ちゃんと守ります、従いますから!!　許してください!!　＊＊＊は許してくださいッ!!　やだ、痛い痛い痛い痛い痛いッ!!　嫌ああああぁああああぁあぁああぁあッ！！！」


サイコロを
六に

■高野三四

「えっえっ…!!　えっくえっく…!!　うっくうっく…!!」
…いつから私は泣きじゃくっていたのだろう。……そして、いつからこうしてもらっていたのか、わからなかった。泣きじゃくる私の頬に、祖父がそっと手を当てていてくれた。…私はその手を愛おしく抱きながら、涙に濡れる頬を押し付けている。
「……落ち着いたかな？」
「お、……お…じいちゃん……。ひっく……！　うわあぁあぁぁぁ……ぁぁ…。」
祖父は、もう片方の手を私の頭にそっと載せる…。祖父の両手の温かさに、私は少しずつ平静を取り戻していった……。見れば、…私は整頓中の資料の山の中。ふかふかの絨毯の上で寝そべりながら資料整理をしていたのが失敗のようだった。
…私は単純作業にいつしか眠くなり、…うつ伏せになってうとうとしてしまっていたのだろう。そして、……思い出さなくてもいい辛い夢を見たのだ。
「うつ伏せに寝ると、胸が苦しくて悪い夢を見やすいんだよ。…もうこんな時間だ。美代子は部屋に帰って寝なさい。」

「全然平気。あはは、居眠りしちゃってたから、眠気がなくなっちゃった。もうすぐで終わるの。だから終わらせちゃうね。」
「明日も学校がある。もう寝ないと、また先生にあくびを怒られてしまうよ。」
ここのところ、私の就寝時間は遅くなっていた。だから、学校では最近、あくびばかりしていた。…それを先生が連絡帳に書いたわけだ。
「大丈夫。ちゃんと終わったら寝る。だから続きをさせて…？　それに、おじいちゃんも私に構ってちゃ駄目。早く書斎に戻って、論文の続きを書くの。」
研究を発表する日が近付いているらしかった。祖父は自身の研究に、とても精力的に打ち込んでいたが、出来る努力には個人としての限界があった。
これ以上に踏み込んだ研究をするためには、協力者が欠かせない。この研究が、人類の謎を解く大きな鍵になるということを説明し、その偉大さを理解させなくてはならない。ただ、この研究はその内容が非常に難しい。……だから、誰に見せてもいいわけではない。でも、いつか見せるに値する協力者が現れるに違いない。そう祖父は信じて、今日までたった一人で研究を続けてきたのだ。
その研究を、もちろん私も手伝いたかった。でも、私に出来るのは資料の整理と文房具の整頓。あと家事を極力代行して、祖父が研究に専念出来るようにしてあげるくらいだった。祖父

はそれを、とても助かっていると言ってくれたけど、私はこれくらいでは手助けをしているつもりになれなかった。

…将来はきっと、もっともっと勉強して、良い大学に入り、良く学んで、真の意味で研究を手伝ってあげられるようになりたい。

確かに今は成績も並だし、学校の授業もそんなに好きじゃないかもしれないけど、…いつか本気で勉強する。祖父の、本当の意味で力になるために。もし。祖父が心臓の病気にかかり、研究を続けられなくなるようなことがあったなら。私は迷うことなくこの胸を裂き、祖父に私の心臓を差し出すだろう。

肺の病気なら、肺を差し出す。内臓の病気なら、内臓を差し出す。

…それは狂気染(きょうきじ)みたことでもなんでもない。とても当り前なこと。だって、……祖父が私を探し出してくれるのが、あと一日でも遅かったなら。

……私は生きていなかったかもしれない。…あるいは生きていても、人の形をしていないか、…生きていても、人の心を失っているかのいずれかだった。つまりそれは、祖父が来てくれたから生きられるということ。………祖父が私を生かそうと駆けつけてくれなかったら、…私は生きていられなかったということ。だから、私はこの生を祖父に捧げることに何の抵抗もない。むしろ、…私の命を捧げることで、祖父の命の一部となれるなら、それは本望なのだから。

永遠に一緒にいたくても、……人の存在は永遠じゃない。しかもそれは、私の両親が突然の事故で死んでしまったように、…あまりに儚く、しかもある日、突然、何の予告もなく終わってしまうのだ。

両親を失った悲しみは生涯癒せない。…でも、今は祖父がいてくれる。だから、悲しくない。でも、……その祖父とて、永遠の存在ではない。突然、予期せぬ理由で私の前から永遠に消え去ってしまうかもしれないのだ。

…私の両親がそうだったように。だから、……祖父の命の一部になりたいと心の底から願った。

そうすれば、…どんな不幸も鉄道事故も、私と祖父を永遠に引き裂くことなど出来ないのだから。もう一生、ひとりぼっちになりたくない。

いつまでも、おじいちゃんと一緒。

いつまでも、…おじいちゃんのお手伝いを、していたい。

「…わかった。じゃあ、この資料の整理が終わったら、ちゃんと寝るんだよ。約束。」

「うん。約束。」

指きりげんまんの仕草を交し合う。そして笑顔を交し合い、祖父は書斎に戻っていった。私は乾いた涙の跡が少しだけ痒くって。洗面所に顔を洗いに行って、それから歯を磨いた。そし

て、鏡に映る自分の顔を見る。

……何度見ても、…その顔に祖父の面影はない。当然だ。血などつながっていないのだから。祖父にも血のつながった家族がいるに違いないのだが、今日までその話を聞いたことはない。…祖父もあまり触れたがらなかったので、私も無理にそれ以上を聞こうとはしなかった。……祖父に、本当の孫がいるかいないかなんか、問題じゃない。

私は、たとえ血がつながっていなくても。…高野一二三の孫なんだ。孫なだけじゃない。…それ以上の存在でありたい。親子関係とか恋愛関係とか、そんな程度のものじゃなく。

…もっともっと、絶対的で魂のつながった、…どんな不幸も切り離すことの出来ない絶対の縁。

私は、高野美代子。高野一二三の孫娘。

……高野美代子というより、高野美代かもしれない。…祖父は、私の名を呼ぶ時、よく「みよ」と呼ぶから。一二三の魂を継ぐ者でありたい。祖父の名が、三までを数えるなら、…私は祖父と共にその三を数え、そして続く四を数える人間でありたい。私はその日から。名乗る名を変えることにした。濡れた指先で、それを鏡になぞる。

高野、三四。

新しい私に相応しい名前だった。

■小泉大佐

「大佐殿！　ご無沙汰いたしております!!」
「髙野くん～～!!　だからもう大佐はなしだよ、なしなし！　暮れに具合を悪くしたと聞いてから心配してたんだよ～！　でも元気そうで何より!!」
「わっはははははははははは!!」
祖父は日頃から、自分には友人はひとりもいない、みんな戦争で死んでしまった、と私に言っていた。
だが、実際にはそれは正しくない。一人だけとても親しい友人がいたからだ。それがこの、祖父が小泉大佐殿と呼ぶ壮年から老年に差し掛かる紳士だった。
この紳士がどこで祖父と縁があったのかはよくわからないが、二人は出会うといつも軍隊の話や戦争の話ばかりをしていたので、きっと軍隊で一緒だった友人だろうと想像するしかなかった。
「みよちゃんも大きくなったね～～！　今、身長は何センチくらいになったんだい？」
「ん……、この間、身体検査があったけど、…えっと、二センチ伸びました。」

「そうかそうか！　育ち盛りはいいの〜！　いっぱい食べていっぱい運動して、いっぱい大きくなるんだよ！　いいなぁ、高野くんはこんなに可愛いお孫さんに恵まれて。」

小泉氏は、私と祖父に血のつながりがないことを知っているのに、私のことをいつも孫と呼んでくれた。…それがとても嬉しくて、私は少しだけ多めに紅茶を注いであげた。給仕を終えると、私はぺこりと一礼してからその場を去る。本当はその場に留まって話を聞いていたいのだが、…祖父は戦争中の話をあまり私に聞かせたいとは思わないらしく、その場に留まろうとしているといつも追い出されてしまうのだった。

だから、追い出される前に自分から立ち去る。……でも、それは祖父の側を離れるという意味ではない。この広い客間の向こうに行くというだけの話だ。祖父たちの場からは離れるが、話が聞こえるソファーで、行儀良く耳を傾けていようということだったりする。

そして、何か彼らが求めることがあったなら、ささっと現れてそれをお手伝いする。……そんなところでポイントを稼いで、少しでも自分が役に立っていることをアピールしたかったのだ。私は離れたソファーで、クッションを抱きながら百科事典を読み始める。そうしながら、祖父たちの会話に耳を傾けるのだった…。

「それは良かった。教授たちは都合が合えば再来週の日曜日にもさっそく来たいって言ってくれたよ。」

「本当ですか…！　ありがとうございます、小泉さん…！」
「いやいやいやいや！　高野くんが書いたレポートがそれだけ興味深かったことの証左(しょうさ)だの！　かなり関心を持ってくれてね。ノーベル賞ものの研究になるかもしれないと、非常にウケが良かった。」
「ノーベル賞だなんてそんな…！　ははは、お言葉だけでも恐縮です…！」
祖父が照れ隠しに笑う。…こんなにも上機嫌に笑うなんて。よっぽどいいことがあったに違いなかった。…恐らく、祖父が発表しようとしている論文を、小泉氏が学界の権威に見せて反応を見たのだろう。それで、どうやらかなり強い関心を示してくれたらしい。
それはつまり、祖父の研究を認めてくれたことでもある。まるで私のことを褒められたかのように嬉しくなってしまうのだった。
「しかし、いつも心配なのは、君自身が雛見沢症候群に感染してしまってやしないかということだねぇ。…君が自分の首を掻き毟(むし)るようなことがないよう、気をつけてくれよ？」
「ひょっとすると、私もすでに感染してるかもしれませんな。でも、雛見沢症候群は、普通に生活する分には決して危険な病気ではないのです。村人たちがオヤシロさま信仰を作り出し、厳しい戒律(かいりつ)で自らを縛った頃は、かなり危険な病気だったかもしれない。…でも、時間と共にそれは薄まり、今ではよっぽどのことがない限り発症することはないようです。」

「……あれだけの発症例があったのに？」
「雛見沢症候群の発症には、特に精神の状態が重要なのです。普通に、心穏やかに生活している分には、なぁんにも悪さをしない病気なのです。」
「戦争という、異常な状況下で精神が追い詰められた時のみ、発症する…。」
「そうです。……なぁに。恐れることなどないのですよ。初期の自覚症状は鬱状態に似た疑心暗鬼。それを自覚したら、高野式呼吸法等により心身のリラックスを図り、かつ、九時間以上の睡眠を一週間以上取る！　これで発症など未然に防げてしまうのです。実際、私の指導下にあった雛見沢出身兵士はひとりも怪死しませんでしたぞ。」
　そう得意気に語ると、祖父は高野式呼吸法なる、怪しげな体操を披露し始める。……なんでも、体をほぐすことによって血液やリンパの流れを良くし、結果的に心にまでリラックス効果があるとかないとか。
　でも、その体操の仕草が、ちょっとかっこ悪いので、私は祖父がこれを始めるとわざと見ないように目を背けるのだった。……この一点においてのみ、ちょっと負い目を感じる…。あぅ。この体操は、たまに私にも強要される。…嫌がると祖父が悲しそうにするので、言われた時には大人しくやるのだが。
「ふむ。ならばいいんだがね。野口英世も研究対象が元で死に至っている。君も気をつけて

の。」

「だが、野口先生の偉業は死後も揺るがない。研究者としては本懐でしたでしょうな。」

野口英世の話は祖父によくしてもらう。

貧しい農家の生まれだったが、よく勉強して医学の道へ進んだ。だが学歴を理由に差別を受け、日本を脱出。アメリカに活動の場を求めた。

そして、様々な研究で功績を挙げ、黄熱病のワクチンを発見するという偉業を成し遂げたという。祖父は、自分の生い立ちが野口英世に重なるところが少なくないらしく、しばしば、もっとも尊敬する人物だと口にしていた。結局、野口英世は西アフリカの地で亡くなった。

自身の輝かしい実績である黄熱病ワクチン。それが、アフリカの黄熱病には効かないという話が出て、彼はそれを研究すべく西アフリカへ飛び、…研究対象の黄熱病にかかり世を去ったのだ。研究者が研究対象に命を奪われる。…それはしばしば研究者の勇気を試そうとすることでもある。

その意味において、自ら雛見沢に足を運び、様々な研究や資料集めをする祖父は、とても勇敢だったと言えるだろう。祖父は自分がすでに雛見沢症候群に感染していると自称しているくらいだった。もっとも、祖父は雛見沢症候群という病気が猛威を振るったのは、古文書から推定するに数百年以上も昔の話で、今では人間と共生している普通の細菌と変わりないと言って

いる。

……戦争中に不幸な発症者を出したのは、戦争という極めて異常な状況下に置かれたからであって、平和な現代においては発症はまず考えられないとも言った。非常に楽観視しているようだったが、私を決して雛見沢へ連れて行くことはなかったので、実際は口にしているほど楽観視していなかったのかもしれない。

もっとも、その祖父と生活を共にしている以上、私がすでに感染していたとしても何の不思議もない。でも、だからといって、不安もなかった。祖父から、雛見沢症候群はしっかり自己管理が出来ていれば決して発症することはないと教えられていたためだ。だから私は、雛見沢症候群に対して、その恐ろしい末期症状を知りつつも、過剰な恐怖感は抱いていなかったのである。小泉氏との雑談はその後、終始、上機嫌なものだった。当然だろう。祖父の書いたレポートに強い関心を持ってくれた人たちがいた、という話があったのだから。しかも、再来週の日曜日にはここへ直接訪れ、祖父から直に話を聞きたいというのだから。近代医学の急激な進歩により、未知の領域は次第に狭まりつつある。……祖父が発見した雛見沢症候群が、果たして新大陸となりえるのか。

全ては再来週に決まるということだった。再来週にやってくる客人たちはどうやらひとりではないらしい。また、学界でも名のある重要人物たちばかりらしい。…富も名声もすでに十分

あり、それだけでは満足出来なくて、世界的な賞を受賞出来る研究に携わりたいという、知的探究心の衰えない人間たちばかり。
…協力者とスポンサーが一気に得られる未曾有の大チャンスだった。
「では、再来週。私も様子を見に来ます。ぜひ頑張ってください。」
「これも全て小泉さんのお陰です。本当にありがとうございます…。」
「ははは。それは無事、賛同者を集められてからにしましょう。その折にはぜひ、秘蔵のワインを開けて乾杯と行きましょうの。」
それが別れの辞となった。祖父は、小泉氏の後姿が見えなくなるまで頭を下げ続けていた。
どうやら、この大チャンスのお膳立てをしてくれたのは彼らしかった。だから私も、祖父と同じように頭を下げてその後姿を見送るのだった…。
「聞いてたかい？　ようやくチャンスが巡って来たよ。私のレポートに関心を持ってくれる人が現れたのだ。」
「うん、聞いてたよ。これでおじいちゃんの研究に、協力してくれる人やお金を出してくれる人が現れるんだね。」
「まだそうと決まったわけじゃないさ。ははは。」
とは言いながらも。非常に好意的な感触であったのは間違いないらしい。祖父のこれまでの

孤独な研究がようやく認められようとしていたのだ。
「再来週の日曜日なの？」
「うむ！　忙しくなるぞ。プレゼンテーションで第一印象の全てが決まる！　資料を読みやすく作り直したり、いやいや、人前でキチンと説明出来るよう少し練習をした方がいいかもしれない。とにかくとにかく、手落ちがないようにしっかりやらないとな！」
「資料の作り直しは大事だね。おじいちゃんの字は読みにくいから、少し大きめに書いた方がいいと思う。」
「むむむ…。と、とにかく忙しくなるぞ！　再来週か、うかうかしていたらあっという間だ。」
「そうだね！　私もお手伝いするよ。ホルマリンの容器とかの埃も拭き取らないとね。あと、丸まった資料の反りを直さないと。絨毯の下に敷いて一晩も置いたら直るかな？」
「うむむ…！　やらなければならないことは山ほどだな！　みよ、手伝ってくれるかい？」
「もちろん！　学校を休んでお手伝いする！」
「それはいかん！」
　私たちは笑い合ってから、空に向かって拳を突き上げ、再来週へ向けてがんばろうと意気込み合った。その日から、祖父はますますに書斎に閉じこもりきりになった。
　人に見せるための資料というのは、簡単に作れるものじゃない。ましてや、コピー機などな

い時代のことだ。全ての資料は手書きでしか作れない。あるのは間違いないが、どこにしまったか思い出せない資料の発掘や、その他にもあれやこれや。私の場合は、…そうだ、来客のおもてなし用のカップが足りるかどうか、まず数えてみなくちゃ。そうそう、お紅茶の葉っぱも残り少ないんじゃなかったっけ？　お茶請けにも少しは気を遣った方がいいかもしれない。こういうのは祖父はちょっと無頓着な人だから。それを言い出したらきりがない。

窓を拭いて、少しでもこの部屋が明るく見えるようにしなくちゃいけないし、あれやこれや！　それは目まぐるしいほどに忙しくて、そして矢のように過ぎ去ってしまう、あっという間の二週間。私にとって、もっとも祖父の研究を手伝っているという充足感が得られる、素晴らしき二週間の日々だった。

祖父にとって記念する日になって欲しい。だから、そんな日は清々しいくらいに晴れわたって欲しいと願うのだった…。

■発表会

その日は、私の願い通り、とても清々しいお天気に恵まれた。

夕方。

涼しい風がとても気持ちいい中、祖父は普段めったにしない正装をし、緊張した面持ちで、書斎（しょさい）を所在なく歩き回っていた。私も、祖父に習い、ピアノの発表会の時にしか着たことのない素敵な服を着ておめかしさせてもらった。

でも、祖父と違って私は緊張していない。…目の前の祖父の緊張ぶりがあまりに滑稽だったので、かえってリラックスしてしまったくらいだった。そろそろやって来る頃かもしれない。

祖父が窓から外をうかがう。すると、黒い車がやって来て、門の前に停まるのが見えた。

この時代、車は存在自体が高級品だ。自家用車を持っている家庭など、一クラスに一人いるかどうかという時代だった。

だから、車から降りた数人の紳士たちが、非常に立派な身なりだったとしても、それは当然に思えた。私と祖父は慌てて駆け出し、彼らを出迎えるのだった。

「ようこそおいでくださいました。高野と申します。今日は本当にようこそ…。」

「お召（め）し物をお預（あず）かりします…。」

私もかねてからの役割分担に従って応対をする。

だが、祖父が滑稽だったのでリラックスしていた、なんて話はさっきまでの話。…祖父も私も、いざこの場になって緊張の峠（とうげ）を迎え、カチンコチンになりながら応対をした。

「初めまして先生。そして初めましてお嬢さん。いえ、お孫さんですかな？」
「孫です。みよ、ご挨拶なさい。」
「初めまして。高野三四と申します。」
「賢そうな子ですね。……本日は小泉先生の代理で参りました。小泉先生は急な用事が入ってしまい本日は出席をすることが出来なくなってしまいました。そのことを大変残念がっておりました。」
「…そうですか。それは残念です。」
今日の場のセッティングをしてくれた立役者が欠席。
…先々週の約束通り、秘蔵のワインを用意していた祖父にとっては少し残念なことだった。
「皆さん、ご紹介いたします。こちらは高野一二三先生です。高野先生は戦時中、満州の防疫研究所におられ、伝染病予防分野の第一人者として活躍されておりました。また、戦地での栄養失調、食糧難対策として、合成食品や合成酒の研究に特に顕著(けんちょ)な功績を残されました。」
「…よろしく。」
「初めまして。」
「お邪魔いたします。」
祖父よりもさらに高齢と思われる老紳士たちが、代わる代わる帽子を取りながら挨拶した。

彼らの蓄えられたヒゲや、凝った意匠の杖や眼鏡などから、無知な私であっても彼らが学界の重鎮であることがうかがえる。祖父は彼らに最敬礼のお辞儀をして丁重に迎えていた。

「それでは皆さん、どうぞ書斎へ。埃臭い場所で大変恐縮です。どうぞこちらへ…！　みよ、皆さんにお茶の準備を。」

「はい。」

一番緊張していないつもりだったのに。気付けば、今や一番緊張しているのは私だった。私が何かを発表し、私が評価を受けるわけではないのに、一番緊張しているというのは何だか滑稽な話だった。

　それを言い訳にしていいかわからないのだが。…緊張しきった私はせっかくお湯をなみなみと満たしてあった魔法瓶を引っくり返してしまい、せっかくこの日のために選んできた紅茶でもてなせなくなってしまったのだった。祖父に謝り、私は慌ててやかんをガスコンロにかける。とりあえず、来客分の紅茶が淹れられる分だけでいい…。

　そんなだったから、私が紅茶とクッキーを配膳台に載せて書斎に入る頃には、祖父の発表会はまさに佳境に入ったところであった…。

「血管もしくはリンパ管を破って脊髄へ侵入し、髄液を通って脳内に至るものと思われます。また、死後の解剖結果、脳炎を起こしたものを複数件、確認しています。好酸球性髄膜脳炎

は住血線虫でも起こすことが知られており、その生態は限りなく酷似するものと推定されます。」

　祖父はそう言いながらホルマリン漬けの標本瓶の間を歩き、いくつかを指し示しながら説明をしていた。脳みそをばらばらに分解してホルマリンの中に吊り下げたその瓶は、百をゆうに超えるだろう。

　皆、埃にまみれてひどい有様だったので、私が数日かけて瓶の外側を綺麗に拭き取ったんだ。…だから、ぴかぴかの標本瓶をずらりと並べることが出来て、ちょっぴり嬉しかった。

「ただし、住血線虫症はその症状が非常に多岐にわたります。頭痛、昏睡、錯乱。住血線虫特有の症状が出るわけではありません。雛見沢症候群はそれとは違い、極めて特有の症状を有しています。」

「……それが、喉を自ら掻き毟る自傷行為だと仰るのですね？」

「左様です。これについては死亡直前を知る兵士たちの目撃情報からわかっています。この自傷行為はこれまでに知られてきたどのような病状にもありません。雛見沢症候群独自のものです。また、末期患者にしか見られない行為であることから、これは一部の寄生虫症に見られるのと同じ、エクソダスであると考えられます。感染者の体内で十分に成長し幼虫を繁殖させた後、寄生虫は体外へ脱出し次なる感染者を探すのです。」

「……では、その血液には寄生虫卵もしくは幼虫が満たされているわけであり、防疫の知識のない現地の兵士がそれに触れていたならば、彼らも感染していた可能性があるわけです。……にもかかわらず、雛見沢出身者以外の兵士に感染例がないことをどうお考えですか。」

「これについては潜伏期間その他を疑ったのですが、雛見沢という地域だけに限定していることから考え、現地の特殊な気候その他があると考えられます。また、次章で詳しく取り上げておりますが、雛見沢の古い土着の信仰から考え、」

「……ありえないですよ高野先生。寄生虫に社会性があるなど聞いたこともない。」

「いえ、ですから、これこそが雛見沢症候群の画期的な発見のひとつでありまして…、」

老紳士が、資料を示しあいながらぼそぼそと言葉を交し合う。

この頃になってようやく鈍感な私にも、この場が決して和やかではないことに気が付く。

「高野先生のご高説を賜りながら、先の資料を拝見させていただきました。まず申し上げて、寄生虫が人間の思想をコントロールするなどまったくにもってありえないことです。……人間の思考は極めて高度な神の芸術とも言える脳で作られます。また、思想というものは、人間の思考の中でも非常に上位のものであり、現在の地球上においては人間にのみ許された高度な能力です。それに介在する寄生虫がいるなど、は！　考えられませんよ。」

「…同感です。思想とはつまり、個より全体を優先した考え方とも言えます。つまり、社会性

を維持する最前提条件なわけですな。それが、遺伝子を残すこと以上の欲求を持たない寄生虫如きに宿るわけがない。生物学的にもいって、寄生生物に社会性、真社会性が発見されたことは一度たりともありません。」

「し、しかし、寄生虫が宿主の行動に干渉するケースは非常に多く報告されており…、」

「高野先生はひとつ、誤解をされていますな。寄生虫が宿主の行動を支配する原理は常に生殖・繁殖のためという極めて原始的理念に基づくものだけです。先ほど引用されましたトキソプラズマ原虫が寄生した鼠が猫への忌避性を失うのも、上位宿主に宿主を捕食されやすくするためであり、単なる宿主乗り換えのための行為に過ぎません。」

「ハリガネムシに寄生されたバッタの入水自殺も同じ話ですな。ハリガネムシは十分に成長すると水棲となります。その際、宿主であるバッタを水辺へ誘導して溺死させ、その体内から水中へ脱出する。」

「…そ、その通りです。私は雛見沢症候群における、自殺的な喉の掻き毟りもそれに当たると考えまして…。例えば、ギニア虫でも同じように、患部を痒みで掻かせて体外へ脱出するというケースが…、」

「そうです。全ての寄生虫の目的は繁殖のため。そんな存在が、神の芸術とも言える脳に寄生し、…いやいや、寄生すること自体は別におかしいことではない。…寄生し、人間の思想に影

響を及ぼすなんて、はっきり申し上げて妄言です。いや危険思想と言ってもいい。」
「雛見沢という村が閉鎖的文化から独自の信仰を生み出したこと自体は、そう不思議には思いません。日本各地に散見するよくあるケースです。だとしたら、日本中のそれらの文化は全て寄生虫によるものなのですか？　それらは文化的なものであって、雛見沢の件に限っては寄生虫によるもの。その区別をどう立証されたのですか。」
「い、いいえ、ですから、現地で死亡した雛見沢出身兵士の解剖の結果から、そうだと信じるに足る様々な、」
「失礼だが高野先生。信じるに足る臨床データだと語るには、少々先生の収集されたケースは少なすぎます。しかも、ご自身で言われたように、戦場という異常な状況下の話です。」
「いえ、ですから、…次の次の章で説明しますように、雛見沢症候群は疑心暗鬼と緊張、ストレスなどによる微妙なバランスが崩壊した時に…、」
「喉を掻き毟るという特徴的かつ異常な自傷行為が複数件あったならば、何かの共通性があるに違いないと疑われるのもユニークかとは思います。ですが、だからこそアテにならないのですよ。戦地という異常な状況下で、たまたまレアなケースが重なっただけのことなんです。高野先生は重なった偶然を見て、ゲシュタルト的な構成主義に囚われ法則性を見つけたように錯覚してしまったのではないかと考えます。」

「そうでないことを証明するには、雛見沢症候群の感染者に対する膨大な臨床データが必要です。ですが、倫理的に考えてこりゃ立証は不可能でしょう…！」
「出身者が祟りだと了解する行為は、どちらかというと文化依存症候群の範疇です。それに対し、寄生虫妄想症を重ねられることは、…失礼だが、高野先生はユニークな雛見沢の信仰に心酔し、その結果、ご自身が文化依存症候群に取り込まれてしまっているのではないかと考えます。いえいえ、神秘的分野を研究する人間にはよくありえることですよ。我々も日々、気をつけています。」
「はっはっはっはっは……。」
……祖父の顔がどんどんと青ざめていく。私もまた、呆然としているしかなかった。そんな寄生虫は聞いたことがない、ありえない。単なる偶然の一致であり、客観的に考えるには資料が足りなすぎる。…そんな話が延々と続けられ、祖父がたまに意見を返すと、一に対し十が返ってくるような有様だった。…いつしか祖父は、彼らの批判の前に沈黙せざるを得なかった…。
「ただ、どんな発見も最初は理解されないものです。高野先生の研究もその内のひとつでないかと考えます。当時、どんなに馬鹿馬鹿しいと思われていた研究でも、その後、真実が解き明かされ、評価を改められるというのも、これまたよくある話です。」
「……わ、……私は皆さんに比べれば素人です。個人の研究家に過ぎず、一流大の出でもなけ

れば、学閥にも属していません。もちろん権威や研究所へのコネクションもありません。ゆえに、個人の研究ではこの程度のことまでしか調べられないのです。…果たして雛見沢症候群が真実なのか、…それとも皆さんが仰られるように私の妄想に過ぎないのか、…それを確かめるためにお力添えをいただくことは出来ませんでしょうか…。」

「…もちろん、これが世紀の大発見になるならば、一大センセーションを巻き起こすでしょう。何しろ、人間の文化や思想は全て寄生虫の意志によるもので、前頭葉は彼らを住まわせるだけの場所に過ぎないという、ははは、大胆な説なのですから。」

「雛見沢症候群が存在し、その感染者が感染によってその、オヤシロさま信仰というものに組み込まれることがもし立証出来たなら。地球上に存在する全ての宗教、いや、文化、国家さえも寄生虫で説明出来るかもしれないんですからな…！」

「その話の壮大さはとてもユニークです。高野先生は、我々のような人間にひっそりと論文を読ませるより、それで本を書かれて一般大衆に発表された方がよろしいでしょうな。」

俯く祖父の握り拳がわずかに震える…。だって、…それはあまりにひどい暴言だったのだから。私は学問のことはよくわからない、ただの小娘に過ぎない。だから難しい話はよくわからないけれど…。

……祖父は個人でここまで研究し、色々と積み重ねてきたのだ。でもそれを立証しさらに踏

み込んでいくためには、協力者が欠かせないはずなのに、その協力者たちが、祖父の研究を個人的妄想と切り捨てるのだ。

そんな滅茶苦茶ってない。まるで卵と鶏はどっちが先かみたいだった。第一、この高慢ちきな連中が要求するくらいに研究が進められたなら、祖父は助けを求めようとなんてしない。でも、彼らは個人レベル以上の成果を見せないことには協力出来ないと矛盾したことを言っているのだ。それに、どんな学問だって、最初はちょっとした思い付きから研究が始まるんじゃないのか？　研究する前から、十分にその存在を立証出来ているなら、何それ、研究の必要なんて初めからない。

…妄想だから研究の余地がないなんて言い出したら、今日の学問はどうやって切り拓かれてきたというのか…。……そんなことよりそんなことより…。

先々週、小泉氏が来た時の感触では、彼らは非常に興味深い研究だと絶賛していたんじゃなかったっけ…？　まるで話が違う、全然違う…！

どこかの料亭

……美代子の嘆きはもっともだった。そして間違っていない。

実際、高野の研究について嘲っている当の本人たちも、つい先日まではこの研究に最大限の関心を寄せていたのだ。
某日、某料亭にて。彼らは高野の研究を非常に面白がりながら、興奮気味に語り合っていた…。
その席を設けた小泉は、各界の権威の協力が取り付けられたことに満足していた…。
「この高野氏の論文は非常にユニークです。特に、優生学的見地からは無視出来ないものが感じられます。」
「はい。非常に興味深い研究だと思っとります。脳はまだまだ未知の領域です。」
「人は神の子などでは断じてない。人も進化の洗礼を受けた動物に過ぎません。ならばダーウィンに従い、各地の環境に応じて進化には差が出てくる。…つまり、人類にはすでに優劣があるのです。国家として如何に優秀な血統を守り、よりよい遺伝子を未来に残せるか。…これを国策として掲げ研究せねば、来世紀において人類は、致命的な序列を与えられることになるでしょう。」
「高野氏の研究は、単なる寄生虫症の域を超えるだけのポテンシャルを秘めていると言えるでしょうな。」
「次世代に残すべきでない劣悪な人間が、もし遺伝子によるものでなく、感染症によるもので

あると解明出来たなら、外科的手段によって更生が可能になるということになる。結果、我が国は未来に素晴らしい人間を残すことが出来るでしょう。優生学的見地から、高野氏の研究は早急に取り組まれるべきです。」
「これはモニス氏のロボトミー手術以来の大発見になる可能性がありますぞ。もし、感染症疾患と個人の資質の因果関係が立証出来れば、ノーベル賞どころでは済まんでしょうな……！」
「小泉先生、この度の貴重な機会に深く感謝いたします。」
「高野くんは昔から一途で熱心な男での～。だが、人付き合いがヘタクソでな。ずっと独りで研究してきたのだ。だが、独りで出来る限界を迎え、ようやく人に助けを求めることを覚えたんだな……。どうか先生方、高野くんの話に耳を傾けてやってください。」
「畏れ多いですよ、先生……！　むしろ、この度のご縁にこちらが感謝したいくらいです。」
「私どもとしては、もう協力させていただくことは前提です。むしろ学会での縄張り調整の方が今後の急務ですなぁ。」
「このようなユニークな研究を、世界に先駆けて研究出来るとは……。この年になって、このような貴重な幸運に恵まれたのを感謝したいです。」
　その時、控えめなノックが聞こえると、すっと襖が開き、女将が顔を覗かせた。
「…失礼いたします。お客様がお見えになっておりますがお通ししてよろしいでしょうか。」

「客？　はて、どちら様ですかの。」
女将が耳打ちをすると、その表情から血の気が、さっと引く。
「お、お通ししてください。いやいやいや、私もお迎えにあがります…！」
小泉が立ち上がろうとすると、もう廊下をドスドスと歩いてくる足音はすぐそこまで迫ってきていた…。
「せ、先生…！　このようなところへお越しいただけるとは…。」
「小泉くん、ご無沙汰だな。今日はちと、どうしても君にしておきたい話があってな。」
「はい。大恩ある先生の話とあっては聞かぬわけには参りません…！　何でも仰ってください！」
小泉と名乗る老紳士も、決して軽んじられる立場の人間ではない。
表舞台からすでに退(しりぞ)いているとは言え、強力な影響力を持ち続けるフィクサーのひとりだった。その彼が、ここまで低姿勢に出るのだから、相手の男がどういう人間なのかうかがい知ることが出来た。ボディガードの屈強な男に肩を借り、もう片方の手には高級な杖を突きながら歩く老人。すでに自分ひとりでは満足に歩くことも出来ないくらいに老衰しているのに、…その威厳と迫力は寸分も衰えてはいなかった。
「単刀直入に言う。君の友人の研究な、あれ、止めさせなさい。」

「は…？　と、申しますと…」
「小泉くん。雛見沢症候群は、墓穴まで持ってかなきゃならん。あれに手を付けちゃならねえんだ。……あれを調べるとな。藪を突いて蛇を出すかも知れん。しかも太くてでかい蛇がな。……君がこのままガブリとやられるのを黙って見とるには忍びないのでな。ちょいと君の小耳に入れてやろうと思って今日は来たんだ。……連れの先生方にはちょいとお待ちいただいて、……どうだ、ちょいと向こうの部屋でわしと飲まんか。」
「は、はい…！　お供させていただきます…。」
小泉はすぐに、これが圧力だと悟った。
……どういう方面からの力かわからないが、雛見沢症候群の研究を快く思わない長老たちが、この研究のバックアップをしようとしている自分を煙たがっているのだ…。
「……小泉くんは、覚えてるかね。………盧溝橋事件は。」

■高野書斎へ戻る

「まったくの世迷言ですな。本日、私どもがお邪魔したのは、資料になかったそれ以上の客観的何かが開示されるかもしれないことを期待したからです。本来ならば、本日お邪魔するにも

値しない内容だったのを、小泉先生たってての願いということで義理を尽くさせていただいたまでです。」
「徒労ではありましたが、来て正解でした。あなたに適切なアドバイスをすることが出来るのですから。……あなたは余生をこんなことに費やされるくらいなら、盆栽でも始めなさい。いいですぞ、盆栽は。」
「同感です。こんな書斎に、ホルマリンの瓶を並べていても不健康なだけですな。」
「しかし、実にユニークな内容でした。あなたさえ良ければ、出版社の社長を紹介しますよ。大衆にはこのくらいの刺激があった方が受けるでしょうからな。」
もう彼らは悪意を隠さなかった。へらへらと笑い、祖父を扱き下ろし、研究のみならず祖父の人格までも否定するような雑言を浴びせかけた。それがもし挑発だったなら。それに乗ることは祖父にとって彼らの見下す人格であることを認めるようなものだ。……祖父はこの瞬間にあっても、孤高の研究者であり、…誇り高き存在であり続けようとした。
だから、……もう拳は震えていなかった。…それどころか、貴重な時間を割かせてしまったことを詫び、もうこれ以上、拘束するつもりはないなどと言い出すのだった。
「この論文はお返ししますよ。もっともこれを論文と呼んでいいなら、学会もどれだけ気楽なことか。」

老紳士のひとりが論文の束をぞんざいに祖父に突き返す。
祖父はそれを咄嗟に受け取れなかったので…。……祖父が今日までがんばって書き連ねてきたそれは、バサリと音を立てて落ち、絨毯の上に舞うように散らばった。だが、彼はそれを詫びもせず、書斎を後にした。
その後に付いて皆、退室しようとした。………だから、彼らは祖父の努力が紙の形となって散らばったその床を、ぐしゃりぐしゃりと音を立てて踏みにじった。祖父の表情は、変わったようには見えなかった。……でも、…私には歪んで見えた。祖父の背負う書斎の壁が、ぐにゃりと悲しく歪むのが確かに見えた。
「…………………ッ！！！」
私は飛び出していた。…そして老紳士の足に組み付く。
彼が憎いんじゃない。いや、憎いか憎くないかと言われたらもちろん憎いのだが…、そんなことじゃない、そんなことじゃない。祖父の論文を踏みつける足が許せなかったのだ。
「踏まないで…!!　踏まないで…ッ!!　おじいちゃんが頑張って書いたんだから、…足で踏んだりしないで…ッ!!」
私は未だ踏みにじり続ける、その足を、散らばった紙面から退かしたかった。…でも、それは根が生えたように頑丈で、私ごときが押したり引いたりするだけでは決して退こうとはしな

かった。その私の背中が、むんずと掴まれる。……掴んだのは祖父だった。
「孫が失礼をいたしました…。ささ、どうぞこのままで結構ですので…。後片付けは私どもの方でしますので……。」
「踏まないで!! 踏まないでぇ!! おじいちゃんのを踏まないでったらッ!!」
私の叫びなど何の意味もない。
……結局彼らは、私の叫びなど意にも介さず、…さらにいくつかの足跡を付け、書斎を出て行くのだった…。後には私と祖父だけが残された。
私は祖父に後襟を掴まれたまま。もう何の言葉も口から出せず、わんわんと泣いているだけだった。祖父は、意地でも感情を表情に出したりはしなかった。口元を歪めさえしなかった。だから、私が祖父の代わりに泣くべきだと思ったのだ。なのに、祖父にぴしゃりと頬を打たれた。私は祖父のためを思って泣いていたはずなのに、どうして頬を打たれたのかわからず、一瞬だけ困惑(こんわく)した。でも、…なぜか理解した。
本当に泣きたいのは祖父なのだ。…でも、その祖父は堪えたのだ。
…だから、私も泣いてはいけなかったのだ…。だから私はごしごしと涙と鼻水を拭いて、……祖父がそうしているように、黙って俯いて、絨毯の上に散らばった論文を見ているしかなかった。

「……ごめんな、みよ。」
どうして祖父が謝るのか理解出来なかった。てっきり祖父は、彼らのあんまりな振る舞いについて文句を言い、その同意を求めるものとばかり思っていたから。
「……もっと私がしっかり研究が出来ていれば、こんなことにはならなかったのに。……せっかく今日まで、みよがあれだけお手伝いをしてくれたのに…。それを無駄にしてしまってごめんな…。」
…何て祖父は健気だったのだろう。あれだけの暴言を浴びせられて、…なお私を気遣えるのだから。私は、首を浅く横に振りながら、…床に両手をつく…。
そして、散らばった論文を集めようとして、………ぽたりと、一度は止まった涙が再び零れ落ち、万年筆の文字を滲ませるのを見た。全部全部、…祖父の手書きの文字なのだ。自分の研究にようやく理解を示してくれる人が現れて、嬉しくて嬉しくて…、寝る間も惜しんで書いたものだった。
それが、ぐしゃりと足跡の刻印が付けられ、歪められていて…。それは祖父の心を踏みにじり、足跡の刻印を残したのとまったく同じこと…。
「…私の研究がまだまだ足りなかったんだ…。もっともっと研究を重ねていたなら、こんな

ことにはならなかったんだ。……ごめんな。本当にごめんな。…おじいちゃんはもっともっと研究を重ねるからな。これくらいのことじゃ、…挫けないからな。」

その言葉は、私に言ったものなのか、自身に言い聞かせるために言ったものなのか、わからない。

「…大丈夫。神さまは見ておられる。そして、…自分が評価されることを疑ってはならんのだ…。いつか、必ずきっと評価されるから。その日まで努力を怠ってはならんのだ…。」

祖父は、普段からよく口にする言葉を再び口にした。……でも、私は知っている。

…神は人の運命を気まぐれに弄ぶだけで、決して好意で救ったりはしない。今日までこれだけ慎ましやかに努力を重ねてきた祖父にこの運命を与え、……何の罪もない幼かった私にあのような無残な運命を強いたのだ。…祖父は繰り返している。……でも、私は知っている。確かに神はいる。祖父が信じる存在は実在する。でも、そいつらには慈悲など何もない。理不尽な運命を気まぐれに与え、それを試練だと呼ばせ一方的に与え続けるだけ。そんな残酷な現実を、もちろん祖父に言えるわけもない。

………私はあの雷雨の日以来、再びもう一度だけ神に言う。……どうして。…どうして、祖父のこの努力や頑張りに正当な評価を与えないのか……！　祖父は、散らばった論文は自分が集めるから、紅茶のカップを片付けてくれと言った。…私は無言で頷き、一口も口を付けら

れることなく冷めたカップを配膳台に片付けるのだった。それを押して書斎を出る。その私の背中に祖父が声をかけた。

扉を閉めていってほしいと。

普段だってちゃんと閉めて退室している。…わざわざ言われることじゃない。でも、祖父がそれを望んだのだから、私は口答えせず扉を閉めていった。そして、……配膳台を押しながら廊下を去る私は聞いてしまう。

書斎から漏れ聞こえてくる、祖父の嗚咽を…。それを聞くうちに、再び目が潤むのを感じた。悲しさと悔しさと、…こんなにも身近にいながら、何の力にもなれなかった自分の不甲斐なさに怒りすら感じた。……その時、濡れた頬にとても涼しい風が当たった。換気のために細く開けた窓から入る風だった。カーテンがとてもやさしくはためいている…。外から聞こえてくるひぐらしの声。…その声を聞いている内に、私は少しずつ落ち着きを取り戻していった。…もし、私が泣くことで、祖父の悲しみを和らげることが出来るなら、祖父に代わって私はいくらでも泣こう。でも、実際は違う。…むしろ逆で、私が泣いたからこそ、祖父も涙を堪えきれなくなったのかもしれない。私は、祖父の何の役にも立っていないのだ。…………あの日を思い出す。…私が今を生きていられる理由を思い出す。祖父が助けに来てくれなかったら、…私は便所の片隅で人の形をした肉のままで生涯を終えていたかもしれない。

……それを、祖父が助け出してくれたのだ。私が失った権利を取り戻してくれた。…歩く権利を。立ち上がる権利を。服を着る権利を、食事をする権利を、話す権利を、考える権利を。…それはつまり、人間として、生きることが出来る権利…。祖父は、私からの助けを求める電話ですぐに動いてくれたのだ。私の自宅を探し当て、私がどこの施設に送られたのか、お役所のずさんな書類管理に苦しみながら探し当て、…そして、助け出してくれたのだ。

もちろん、その時にあっても、祖父は研究に全てを捧げていた。祖父はその時間を削り、見ず知らずの私を救うために費やしてくれたのだ。…祖父が心臓を患ったら、自らの胸を裂き、心臓を差し出そうと誓った。

だが祖父は心臓を患ってなどいない。

……だから心臓は必要ないが、でも、今の祖父は大切なものを必要としている。…そしてそれは、世界中の誰でもなく、私にしか与えられないもの……。自然と、私は両手で拳を作る。そして、…爪の跡が残るくらいに…、ぎゅうっと握りこむ。私は、…高野三四として新たな生を受けて、ようやくすべきことを知ったのだ。……あぁ、やっとわかった。「私」が生まれてきた理由。高野三四がやるべき、目的…！

願いを成就し、望む未来を紡ぐ力。

紡がれる糸の強さは、意志の強さ。
気高く強き願いは必ず現実となる。

私は祖父の偉大さを知っているつもりで、その実、ちっともわかっちゃいない。
祖父を本当の意味で手伝えるようになるには、その高みに及ばなければならないのだ。
あらゆる教科は、祖父のもとへつながる。蔑ろにしていい教科などありはしない。
今の私にとって、勉学に勤しむ以上に祖父に協力出来ることはあるはずもない。

その日から。私の人生は覚醒した。
まるで今日までの全てが卵の内側の世界だったかのよう。
私はようやく卵の殻を割り、自らが生まれ、意志を持ったことをはっきりと知った。
祖父のために生きよう。そして、どうすれば祖父のために生きることが出来るのか。……私はその方法を知っている……！

「…教師生活をして長いが、君ほど弛みなく勉学に勤しんできた生徒は見たことがない。かといって、決して勉強のみに視野が狭くなることなく、社交性も身に着け多くの友人を作った。」

「勤勉なのは、勉強することでしか至れない私の目標があるからです。社交性を疎かにしないのは、孤独な天才があまりに無力であることを知っているからです。」

まだ、足りない。

「私はまだまだ、自分の望む姿に至れていないんです。大学に入るのなんて、私にとっては単なる経過に過ぎない。そこで何が学べるかなんです。」

全然足りない。私を、祖父を手伝える存在に至らせるには全然足りないのだ。

高校生活の全てを学力向上に当てた。祖父の助けにならない学科であっても、それは最高学府への道になる。そして最高学府で最高の教育を得て、祖父の唯一助けになれる無二の人間になるのだ。

「……うむ。……先生は君を教え子に持てたことを誇りに思う。東大でもお茶の水でも好きに選びなさい。今の君にとって倍率など何の意味もない。君にとって、学ぶに値する学校であるかどうかだけが大事だ！」

高校時代の担任はそう太鼓判を押し、最高学府を受験する十分な資格があると保証してくれた。

それは小さな胸に宿る、大きな決意。

人の命が、もしも地球より重いなら。
私の小さな決意は、地球よりも重い。

雛見沢症候群を真に理解し、祖父の研究を本当の意味で手伝えるようになるには、まだ何が足りない？

妥協も言い訳も必要ない。私の求める高みははるかに高く険しいのだ。まだまだ足りない、何もかもが足りない。同期たちの、一流大学入学を以ってまるで人生の勝利者であるような振舞いが実に馬鹿らしい。大学など、私に必要なものを学ばせるための場所でしかない。もし、この自称最高学府が私が学ぶに足りないなら、私には関心などありはしない。

「まさか、才女のあなたが寄生虫研に来られるとは思いませんでした。貴女ほどの方なら、引っ張り凧だったでしょうに…。てっきり、もっと見栄えのいい研究に関心を寄せられると思っていました。」

「私が学びたいこと、研究したいことが、寄生虫だからです。私は、今日、ここで学べる資格を得るために勉学に勤しんできました。……私如きでは学ぶ資格はありませんか？」

「そんなことはありませんよ！　入学試験を第一位で突破した貴女を拒むはずもありません。

ようこそ、寄生虫研へ。嫌われがちな学問でね。研究者はまだまだ少ない。だから他の学問に比べて未知の分野が多いのです。」

そう。寄生虫の世界は未知の世界。いや、無知の世界。

寄生虫が人を支配するなどあり得ないという先入観が横行する無知の世界。

そんな無知な奴らが祖父を嘲笑い、祖父の結晶の論文を踏みにじった……！

「寄生虫の世界には、まだまだ解き明かされていない未知があります。私は、それを解くために。……それを解こうとする人の力になるために、ここまでやって来たのです。」

運命は個人だけじゃなく、人の世界を支配する絶対の力。

それはつまり、もはや運命。

私が紡ぐのは、運命。

実現の約束された願いは、もはや願いとは呼ばない。

私は学ぶだけではまだまだ足りない。祖父と共に穴倉に籠って研究をするだけでは意味がないのだ。祖父が得られなかった、「協力」を得る力を私は蔑ろにしない。祖父の研究は、机上で完成するだけでは終わらない。それを発表し評価を受け、祖父の偉業が真の意味で讃えられ

るには大勢の人の力を借りなければならないのだ。
「ええ、そうです。当会は帝大首席卒業生にのみに入会資格を与えている同窓会組織です。毎年七人の入会者のみしか認めておりませんので、一般的な同窓会組織と比べると小規模ですが、その結束は比べようがありません。」
「そのような会へお誘いいただき、とても光栄です。私如きでよろしければ、ぜひ末席を賜ればと思います。」
「いえいえ、貴女ほどの実績と経歴をお持ちの方を末席など、とんでもない。先輩方も貴女を歓迎されるでしょう。会の名簿には、現役大臣、高級官僚、大企業の社長や顧問などが名を連ねています。彼らはあなたを必要とし、あなたが必要とする協力を与えるでしょう。」
「……小泉先生もこの会におられたのですね。私の祖父の親友だった方です。まさかここでまたご縁があるとは…。」
「そうでしたか。きっと小泉先生も貴女の入会を歓迎されることでしょう。」
孤高の天才など何の意味もない。……人は社会に生きる。社会とは人と人とのつながり。それを蔑ろにしてはいけないのだ。私は個人として出来る最大の努力をする。そして、個人では

至れない個人以上の力を得るために、社会とのつながりを否定したりしない。全ては私の目的のため。髙野三四の生きるたったひとつの願いのため。

そうだ。私の身に許された全ての努力を惜しむな…！　私の絶対の意志が、絶対の未来を紡ぎだす。誰にも邪魔出来ない。誰にも覆(くつがえ)せない。サイコロの一なんて認めない。健気な努力が、電車事故だけで打ち消されるなんて認めない。全てのサイコロを六にしてやる。サイコロを神になんか委ねない。運不運になんか委ねない。神に祈るのは自らに努力を尽くさぬ愚か者のすることだ。私は神などに委ねない。全ての結果は私が紡ぎだす！　私の強固な意志が、神さえ介在出来ない絶対の未来を作り出す！　それは、祖父が教えてくれた神になる方法とは違う。それは、生きながらにして神に至る方法。それに気づいた時、私はようやく解放される。それは、両親を失った時の悲しい記憶。その後の辛い生活。そして、論文を踏みにじられた時に見せた、祖父の涙。そう。私は神の域を超えるのだ。神の気まぐれなどに負けない存在に！　祖父の研究を、認めさせてやる。それは私が望む未来。約束された未来。人々は祖父の論文を奪い合って読み合う。かつて蔑ろにされ、踏みにじられたその論文を、うやうやしく手にとって読むのだ。たとえ、その日を待たずに祖父に死が訪れたとしても。その程度の運命に私が泣くことなどないのだ。だって、祖父はすでに私に教えてくれている。たとえ、死んで土中に埋められた身であっても、復活出来ることを。私が、祖父の偉業を完成させ、世界中が祖父を讃え

る。その時、祖父は復活を遂げ、神となり永遠となる。それは永遠の絆。どんな電車事故でも千切れない。神がいくらサイコロの一を並べようとも！　あの電車事故の日から、私の人生は全てサイコロの一だった。でも、私はそれに負けず、ここまでやって来た。サイコロの目など私は超越する。サイコロの目は私が決める。運命すらも、私が決める。挫けぬ絶対の意志で……！

■雛見沢

「診療所はいつ開くんかいねぇ。クーラーが付いてるとええんの。」
「来月んにゃ診療開始っちゅ、書いてあったたん。すったらん、若い先生だとええんの〜、ひゃっひゃっひゃっひゃ！」
境内(けいだい)への階段途中ですれ違った老婆(ろうば)たちの会話だった。入江診療所はすでに工事を終え、オープンを間近に控えていた。
研究区画には最新の機材が運び込まれ、本格的な研究のスタートを待っている。もちろん、入江もすでに最高のコンディションでスタンバイしており、私の次に雛見沢症候群に情熱を燃やしていると言っても過言ではなかった。そして、この研究を陰から支える防諜部隊の山狗も、

すでにダミー会社の隠れ蓑で興宮近辺に潜伏している。現在は有事に関係する公共機関への工作を進めているらしい。全てが順調だった。あえて懸念をひとつ挙げるとしたら、雛見沢ダム基本計画の噂くらいか。建設省内で、雛見沢一帯を水没させるダム計画が進行中であるという噂があり、数方面から圧力をかけているところだ。

私の後ろ盾たちにとって、建設省は影響力の少々及びにくいところらしく、やや難航していると聞く。万一、圧力が不調に終わっても、まだ数手用意しているので、どの道、いずれは頓挫するだろう。楽観視してるわけじゃない。そうなることは決まっているのだ。〝私が、この雛見沢で、研究をする〟

それを絶対の意志でやり遂げるのだ。

…だから、神が雛見沢を水没させるダム計画というサイコロの一を見せたとしても、何も恐れることはない。神にサイコロなど委ねない。私がそのサイコロを摑み、六を上にして叩きつけるだけなのだから。別に、私がこの神社を訪れたのは、そういう意味でこの地を守る神に宣戦布告がしたかったからじゃない。単に、この境内からとても見晴らしのいい場所があるのを知っていたからだ。社の脇をさっさと抜け、以前、訪れた時に見つけた取って置きの場所へ行く。そこは……、まるでこの村の全景を見下ろすためだけに設けられたような特別の場所。

突き抜ける強めの風が、私が今いるこの位置がまだまだスタート地点に過ぎず、私の目的に

至るまでにまだまだ逆風が満ちていることを教えてくれる。だから私は、この程度の風などにたじろがず、悠々と村を見下ろしてやるのだった。祖父は雛見沢症候群に至る上で、医学的見地からも迫ったが、同時に民俗学的見地からも迫っていた。

この村に伝わる奇怪な信仰は、この地が太古の昔から雛見沢症候群の存在を知っていたことを伝える最大の証拠だ。それを研究することの意味は計り知れない。第一、祖父とて百年も研究しているわけではないのだ。だが、この地は数百年間にわたり、雛見沢症候群と共にあった。この地が生み出した信仰や伝承自身が、最高の研究者でもあるのだ。

それを、昔話の戯言と切り捨てるのは愚かの極みと言えるだろう。少しずつ調べ始めているが、……なるほど、祖父を虜にするだけのことはある。

雛見沢症候群は、非常に面白い側面をいくつも持っている。それはさながら、わずかに角度を変えるだけで無限の煌きを見せてくれる万華鏡のよう。祖父の研究をなぞるのはとても楽しいことだ。

……自分なりに研究したことなのに、後に祖父の手記から同じ内容が見付かると、自分が祖父と同じ道を進んでいることを一層強く感じられて嬉しかったから。……村の守り神、オヤシロさまを祀る神社。だが、彼らが神だと崇め奉るその対象は、実際は寄生虫症が生み出した幻に過ぎない。

それの秘密を私が解き明かし世界に発表した時。…この地の神は、神の座を追い落とされ地に堕ちる。……私に不幸を与え続け、運命を試すような真似をする連中に初めて一矢報いることが出来る瞬間なのかもしれない。

そうか、………これは、祖父の夢をかなえるだけでなく。…私の不幸だった人生に対する、復讐でもあるのか。私は社の前に戻って来た。……賽銭箱があるとつい小銭を放りたくなる衝動に駆られる。でも、賽銭は神にご利益を期待して投じるものだ。でも、私は運命を神に委ねないのだから、賽銭などする必要は何もない。いずれ私が化けの皮を剝ぐ。…だが、その瞬間の直前まではこのオヤシロさまも神に列せられているのだ。ならば、今だけは敬ってやるか。くすくすくす。半ば、宣戦布告にも似た気分で私は財布にちょうど余っていた十円玉を取り出す。……あの電話ボックスで拾った十円玉が、私の人生の転機だった。もし、あそこに十円玉が落ちていなかったら、……私の生涯はあそこで閉じていただろう。

「…あの一枚の十円玉に関してだけは、あなたに感謝するわ。」

あなた、とは言っても、それはこの神社が祀る神に言ったわけではない。

「でもね。…あの程度で、私はあなたを許したつもりなんてない。…そして私は、あなたのご利益なんか期待せず、自分の努力だけでここまでやって来た。……今後あなたがどんな理不尽な運命を与えようとも、サイコロの一を出し続けようとも。…そんなものにはびくともしない、

絶対的に強固な意志の力で。…私は私の理想を勝ち取ってみせる。」

そしてこの地での研究で、…祖父の偉業は讃えられ、神となる。私はこの地に崇められる神を蹴落とし、神を超えた存在となる。

「…いつから私は神という言葉に拘るようになったのかしらね。……祖父がいつも神さまを引用した話ばかりするからかしら？　……くすくすくすくす。」

さぁ、あの時にあなたに借りた十円玉を私は返す。…これで貸し借りは一切なしだ。あなたは人を意地悪に試し続ける座に執着しなさい。私はそんなあなたを蹴落とすために、これから戦いを挑む。

私は、あの日、神に借りた十円玉を賽銭箱に放って返した…。

「……………………え。」

…一瞬、何が起こったか理解出来なかった。私が賽銭箱に向けて放った十円玉は、放物線を描いて賽銭箱の中に放り込まれるはずだったのだ。……なのに、……そうならなかったなんて、どう説明すればいい…？

賽銭箱から外したわけじゃない。賽銭箱に小銭を放るのに外す人なんているもんか。そうじゃないそうじゃない…。だって、十円玉は、…まるで枯葉が朽ちた蜘蛛の巣にでも引っ掛かったように…、……宙に張り付き留まっていたのだから。そして、それは逆に私側に放られるよ

うに弾かれ、…私の足元に転がった。まるでそれは、…賽銭箱が私の施しを拒んで弾き返したかのような錯覚。

……当然だ。賽銭箱は神を敬う気持ちを入れるもの。だが、私の放ったのは敬いじゃない。むしろ挑戦なのだから。ということはつまり、これは、……私はびくっとする。なぜなら、この場にいるのは私だけだと思ったからだ。なのに、何の気配も感じさせずに、実はもうひとりが身近にいたことを知ったなら、きっと誰だって驚く。

…その少女はいつからそこにいたのだろう。まるで社の中から出てきたかのように。……いつの間にか、その不思議な雰囲気の少女は、賽銭箱を挟んで私と対峙していた。巫女装束を見れば、この神社に関わる者に違いないと思う。もちろん、私もそうだと思った。……でも、心のどこかでさらに思った。

関わる者ではなく、そのものではないか、と。なぜなら、…その少女の瞳は私をじっと見つめて、……いや、睨んでいたから。私は思わず不敵な笑いを返してしまう。…私が心の中で言っていた、神への挑戦の言葉。………それが聞こえていて浮かべている表情に思えたからだ。

だから、……その言葉は私の口から自然と出た。

「あなたが、……ここの神さまね。」

少女は頷かない。でも、私はその無言を肯定だと受け取った。何て矛盾した感情なのだろう。

…私はこの地の神を否定し、その存在に対して挑もうとしているのに、…この少女が神であることを疑わないのだから。少女は、言った。
「……強い意志は、運命を強固にします。」
「…………………。そうよ。」
それは、私が心の中でよく呟く言葉だった。この言葉を人に聞かせたことはないし、何かから引用したつもりもない。…だから、普通に考えたら、この少女がその言葉を口にするのに驚きを隠せないはずだった。
でも、……この少女は、人間の少女ではないのだから、それをおかしいとは思わない。今度は私から言ってやる。
「神は運命のサイコロを振り、その出目で人間を弄ぶ。でも、人間には意志の力があるわ。その力が強ければ強いほど、サイコロの目などに人は縛られないの。…わかる？　人は極限まで努力を積み重ねることで、誰にも挫かれることのないくらいに強固な意志を持つことで、サイコロの目に左右されない力を得るのよ。」
「……はい。よくわかりますのです。揺るがない信じる力は、どんな運命もサイコロの目も打ち破りますのです。」
「そうよ。それはつまり、サイコロにて弄ぶ神々への人間の復讐。……神々の干渉を排して

自ら運命を切り開く人間の讃歌。どんな不運にも耐えて、今日を努力で獲得した私の神々しさを知りなさい。」

くすくすくすくす……！　自然と私の口から悪意ある笑いが溢れ出る。だが、少女の強い意志を感じさせる表情はわずかにも歪みはしなかった。

「…………僕はようやくわかりましたのです。……何度繰り返しても、決して覆せぬこの運命は、……あなたの強固な意志の力ゆえ。」

「そうよ。〝強い意志は、運命を強固にする〟。鋼のように鍛えられた運命は、如何なるサイコロの目にも動じない。それは即ち絶対の未来。」

「……それを、幾百年を生きる僕たちでなく、人の身であるあなたが知るとは。……認めますです。……あなたは限りなく、〝神に近い場所〟にいる。」

「それは光栄ね。くすくす………。」

そして、少女は目を細めるようにして私を睨みながら、……いや、自らの意志の強さを示しながら、私に「布告」した。

「…………………僕は、…あなたに負けない。かつて僕たちは、どう戦ってもあなたに勝てないと思った。……だから僕は、…あなたに屈した。地に堕ち、輪廻の中を這いずりながらみすぼらしく生きた。………でも教えられましたのです。…信じる力が運命を切り開く奇跡を起

こすと。」
「私の強い意志が作り出す運命に、あなたの強い意志がそれを打ち破る奇跡を起こすというわけ……？　くすくす、道理ね。」
だって、それが人の世の法則なのだもの。思いの強さが願う未来を実現する…！
「僕たちは、……あなたの意志の強さに負けないのです。」
「古き神の座に執着するのも大いに結構。あなたの意志が私の意志に勝てるか、試してみなさいな？　神は人を試すが、人が神を試してはならない不条理(ふじょうり)。……だから敢(あ)えてあなたを試してあげるわ？　お前の意志の強さが、私の意志の強さに勝てるかどうかを、試して御覧(ごらん)なさい…!!」
それは、はっきりとした私から神への宣戦布告。私を数々の不幸で弄んだ神々への復讐の始まり。
そして、神である少女も私の挑戦を正面からしっかりと受け止めてくれる。
「…僕はあなたに比べてあまりに非力だけれども。あなたに比べてあまりに出来ることが少ないけれど。……たとえ、僕の意志の強さがあなたに及んだとしても、それくらいでは覆せないくらいに圧倒的な力の差ではあるけれども。」
「そうね。私は圧倒的な力を得たわ。その力を得るために、今日までどれほどの強い意志を持

すくす……！」
「……わかってる。あなたの強大さはわかってる。それに比べて僕や僕の仲間たちの力はあまりにか細いかもしれない。でも、僕は諦めないことを選ぶことが出来る。………賽の河原で永遠に石を積み続けるように、あなたのサイコロに一が並び、僕のサイコロに六が並ぶその日まで決して負けを認めず諦めない。気が遠くなるほどの長い時間、あなたに屈しないことで意志の強さを示してみせよう……！　そして、河原に石が積みあがった時、…僕たちはその川を越えることが出来、あなたの前に対等な存在として現れるでしょうッ…！　その時こそ、この永きにわたる運命の戦いに決着がつく！」
「くすくすくすあはははははは！　ならば結構、かかっておいでなさい!!　どちらの想いが強いか！　強かった方が未来を作る。強かった方の望んだ未来が訪れる。私は私の未来を一歩も譲らない！　その未来では祖父の偉業は讃えられ神となり、かつて私を不幸にて試すような真似をした神に対して復讐をする。」
くすくすくす、あっははははははっはっはっは!!　間抜けなチビ神め！　身の程を思い知らせてやる！
「貴様を神の座から引き摺り下ろしてやる!!」



カケラ紡ぎ



ようこそ。

『ひぐらしのなく頃に～祭囃し編～』の世界へ。

この世界では、あなたは羽入(はにゅう)の視点から物語世界を再構築することが出来ます。最大の目的は、あなたにとっての理想である「昭和五十八年六月」を作り上げることです。その理想を実現するためには、様々なカケラを集めていく必要があります。ただし、鷹野の理想もまた強固です。それを覆すためには相当の苦労とカケラが必要となるでしょう。

予め警告しますが、この作業は非常に緩慢かつ苦痛です。羽入はこの作業を百年以上も行い、一度は挫けて運命に身を委ねてしまったのですから。鷹野の理想に打ち勝つのは容易なことではありません。この世界の試練は、あなたに羽入のそれに準じた苦痛を与えるでしょう。

あなたは無数のカケラによって何度も繰り返される世界に精神を磨(す)り減らされ、かつて羽入が屈服したように、あなたも屈服することがありえます。あなたが屈服を認める場合。あなたはいつでもこの読書を終了することが出来ます。

その場合、あなたとあなたの仲間たちの運命を巡る世界は「鬼隠し編(おにかくし)」から「皆殺し(みなごろし)

編」までの世界で閉じられます。
あなたはこの世界のことを忘れ、本書を廃棄することによって、この世界での「死」を迎えることが出来ます。…やがて梨花がそうなるように。
あなたの理想の「昭和五十八年六月」は、この世界に散らばる五十個ものカケラを結び合わせることで組み立てていきます。カケラを結び合わせるには、それぞれのカケラに合ったカケラが必要です。……それが五十個もあるのですから、あなたはその膨大な量にきっと眩暈すら覚えるでしょう。

そうして、五十個もの膨大な数のカケラ全てを結び合わせ、一つのカケラにした時、…そこには理想の「昭和五十八年六月」が生まれるでしょう。
その時こそ、私たちがもっとも欲する「祭囃し編」が始まるのです。

……これは非常に長く険しい試練になります。
もう一度繰り返しますが、羽入は百年以上これに挑み、しかも一度は挫折しています。
仲間たちが奇跡を信じるのと同じ気持ちを、もしもあなたも持っていてくれたなら。たとえ、羽入の住まう世界が違っても、彼らのことを信じることが出来たなら…。

ようこそ。
『ひぐらしのなく頃に～祭囃し編～』の世界へ。

この世界では、梨花たちの信じる世界をあなたも信じてくれているかどうかを試します。奇跡は、全員の力が集まった時にのみ起こります。
鷹野の組み上げた昭和五十八年六月はあまりに強固です。彼女は国家権力の中枢に入り込んで後ろ盾を得、一般人の常識を超えた様々な力を得ています。それに打ち勝てる勝算など百のサイコロが全て六を示してもありえません。つまり、奇跡を起こす以外に勝算は考えられないのです。全員の力が集まった時にのみ、奇跡は起こります。そして、その全員には、あなたも含まれているのです。

――覚悟は出来た？

もちろん、私は出来ているわ。
永い旅のコツは根詰め過ぎないことよ。
まぁ、のんびり行きましょう。
私はいつものワインを飲みながらやらせてもらうわ。

では、始めましょう？

ここでの時間は無限にあるのだから。

Frederica Bernkastel

◆地元説明会

「でして、ダムの建設事業に伴う地域振興や地場産業の育成などですね…、」
「そんなことは聞いてねぇっつってんだらぁ!!」
「俺らの誰の断りがあって、ダムなんか作ろうって言い出したかって聞いてんだ!」
「おう、わしらから税金絞るだけ絞っといてそれに対する返事がこれっちゅうんか!? おんどりゃあ、誰の税金で給料もらっとんじゃあ!!」
「ですから! 先ほどから申し上げておりますように…!!」
「言い訳など聞いちゃならんねぇ、いつ計画を中止するんか聞いとるんじゃい!!」「お前じゃ話にならん、東京の建設大臣を連れて来い!! ここではっきり白黒つけちゃる!!」「引っ込まんか木っ端役人があぁぁあぁ!!」
「大体おどれら、人様の税金で仕事しとって、何でわしらより高い段で話をしとるんじゃ。目線で話さんかい目線で!!」
体育館の中は怒号に満ちていた。
雛見沢ダム基本計画地元説明会。…表に出ている立て看板にはそう書かれていた。

壇上で、役人の男が何かを言おうとする度に、満場の住民たちは一斉に怒号を浴びせ掛け、それを塗りつぶす。

それでは進行にならないので、それらを聞こえないかのように振舞い、ダムの有用性をパネルで説明すればするほど、住民の声を聞かない政府の横暴という図式になり、ますますに彼らの怒りを焚きつけた。

壇上と住民の席の間には空白地帯が設けられ、警官隊がスクラムを組み制止線を作っていた。

…もし、これがなかったら、住民たちはすぐにでも壇上に駆け上がり、取っ組み合いに発展していたに違いない…。

……そんな光景を、僕はみんなの後から見守っていた。

彼らが、怒りの感情に飲み込まれているのが、はっきりと色で見える。…血の赤に徐々に飲み込まれ、……ある目的のために芽生えた怒りの感情が、目的そのものに取って代わり、怒るために怒るという悪循環を生み出そうとしている…。

…怒りは決して不要な感情ではない。人は生きるために様々な障害にぶつかる。それと戦い乗り越える力の原動力が怒りなのだ。

…その意味において、怒りは人の生きる力そのものと言える。だから、怒りそのものを否定したりはしない。

だが、度を越えた怒りは、時に目的を忘れさせる。…それはすでに、生きるための力ではない。頭に血が上り、自分が何をしたかったのかも忘れてしまった、まさに暴走の状態なのだ。
………このような感情は、僕たちにとって辛く悲しく耐え難いもの。
……村人と共にある僕たちが、少しずつ怒りの感情に飲み込まれて、「鬼」に染まっていくのが、僕には色を見るようにはっきりと見えているのだった…。
人間の世界のルールはわかる。国の政策に立ち向かうには、個人の力はあまりに無力だ。
……それに立ち向かうためには、個人の域を超えた力と結束が必要になる。
だが、その力を正しい方向に導くのはとても難しいこと。
…怒りの連鎖は怒りのために怒りを生む。生きるために怒るのではなく、怒るために怒る。
……それは、ただの鬼でしかない。そして、……この感情は、永い間、静かに眠ってきた僕たちを乱暴に起こすものにしかならない…。
みんなが、…怒りに塗りつぶされていく。
僕たちは平和に村人たちと共存することを知り、静かに眠りながら過ごしてきたのだ。
……それが、起こされ、……鬼ヶ淵沼から鬼が湧き出したと伝えられたあの時代に戻ってしまいそうになっている…。
僕はみんなに、どうか落ち着いてと叫ぶ。でも、怒りが怒りを増幅しあうこの悪循環に、僕

の声無き声など誰にも届きはしない……。それでも誰かひとりの耳に届くことを信じて、僕はみんなに、どうか落ち着いてと何度も叫ぶしかないのだ。

このままでは、……鬼が目覚めてしまうかもしれない。眠りにつき、二度と蘇ることなどないはずだった鬼たちが、……この騒ぎで目覚めてしまうかもしれない……。

その時、騒ぎの雰囲気が変わった。

見れば、壇上と住民の間の対決だったのが、いつの間にか住民と住民の間の対決に移っていた。……一体、何事だろう？

「じゃかましいわッ!!　そりゃおんどれの都合やんね、勝手に総意にせんといてんなクソババアッ!!」

「あんじょう、すったらんわッ!!　ようも言ったん、抜かしよってからにこんの輩（やから）ぁあぁッ！！！」

「おうおうッ!!　てめぇお麺（りょう）さんと知っててその口利いとるんかいな、上等きっちゃら、おああッ!?　名乗らんかいおおぅッ!!」

「やっかましいわぁ!!　園崎（そのざき）がなんぼのもんじゃい、わしゃあ北条（ほうじょう）じゃ、腰巾着（こしぎんちゃく）は引っ込んどらんかいッ!!」

「おぉう北条んの！　何ば抜かしよったんようも村を沈めちゃる言えるのぉ!!　お前ぇ何ぼで村を売ったんッ⁉」

「黙らんかい死に損ないがぁッ!!　いいんか、雛見沢には貧乏人も大勢おるん、お前んとこみたいに、山に畑に唸るほど持ってる地主とはわけが違うんッ!!　わしゃあの、国の補償金で十分満足しとったん、町の公営住宅も手配してくれちょうゆぅし、なぁんも不足はなかったん!!　それをおんどれが全部ちゃぶ台引っくり返しよったん、台無しにしよったんじゃボケぇッ！！！　おどれら地主の都合で人まで巻き込むなや！　そんなに国と喧嘩せぇんかったらおどれがひとりでやれ!!　したらん、ゼニが誰が払うんね、おどれかいな!!　うちはな、貧乏だし育ち盛りが二人もおるん。おとなしゅう、国からゼニをもろぅて職を斡旋してもろぅて、人生再設計ちゅうとこなんや。それをおどれは何じゃ、いつからお前はわしの代表になったんじゃ!!　お前、そんなに偉いんか、おあああああッ⁉」

「おうおうおう、北条の!!　ようも抜かした、この裏切り者がぁッ!!　んなら村から出てけ出てけッ!!」

「おう、出ていったら！　もちろん、それに見合うゼニはお前が払うんじゃろうな⁉　わしが国からもらい損ねたゼニ、きっちり都合つけてくれちゃるんじゃろなぁッ⁉　村から出たぅともゼニがないんじゃ。おどれが払うんならすぐにでも出たっるわ!!」

「……北条の言う通りだ！　立ち退いてもいいと思ってる住民もいるんだぞ！　御三家は俺たちを巻き込むな！」
「おうおう何じゃぃ？　今抜かしたのは誰じゃぃ⁉　名乗らんかぃボケッ⁉」
「残りたいヤツは勝手に残ればいいだろが‼　立ち退きも権利じゃ、勝手に人様の権利に干渉するなやこんのダラズがッ‼」
「そうじゃそうじゃ‼　園崎のクソババアはすっこんどれッ‼」
「…あーー、もちろんダム計画に同意してくださる方には見合う補償を用意いたしております。決して土地の搾取ではありませんのでぇ…、」
「黙れ役人‼　おんどりゃあ、村ン真っ二つに裂こう魂胆かぃッ‼」
「死ねや北条‼　村の空気を吸う資格はねぇ、今すぐ息止めて死ねッ‼」
「なめんなボケが‼　ぶッ殺してやるわ、前に出ろクソババア！！！　おおおお、引っ込まんかいデカポリ‼」
「よーーぅ抜かした。…よーぅ抜かしたわ北条の。……この園崎お魎、ひっさびさに頭に血ぃ上って来よったんわ。きっちりケジメ取らせてもらうかんの。あんじょう、楽しみに待っとれやッ……！！！」
「北条、やれやれッ‼　国は俺たちに仕事と住処とカネを与えろー‼」

「こらこら!! やめなさい暴力は!! お互い、やめてやめてッ!!」
「すったらんたぁ上等じゃああ!! おんしが出てこんかいなッ!!」
みんなが、真っ赤な怒りにどんどんと染まっていく…。
僕はそれを、黙って見ているしか出来ない………。せめて出来るのは、……これから起こるかもしれない惨劇を、…今から詫びることだけだった…。
…ごめんなさい、ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…。
そして………、この日がきっかけなのだ。
……この日を境に北条家と園崎家は決定的に対立し、北条家は村の中で孤立を深めていく。
それは沙都子(さとこ)と悟史(さとし)を辛い運命へ突き落としていくということなのだ……。

◆古手梨花

お母さんに買い物を頼まれ、スーパーへ買い物に行く途中、沙都子に出会った。
聞けば、沙都子も同じような買い物を頼まれたという。ならば一緒に行こうということになった。
買い物メモを見せっこすると、お互いの家の今晩のメニューが想像出来て楽しい。

沙都子の家はどうやら魚と煮物らしい。ちなみに私のうちはハンバーグのようだった。
「あら、ハンバーグとは羨ましいですわね…！　私、魚はともかく、煮物というのがちょっと怖いんですのよ？　先日買ったカボチャがまだ、だいぶ残ってるみたいなんですもの。」
「……きっと今夜もカボチャの煮物三昧なのです。かわいそかわいそなのです☆」
「予めカボチャが出て来るとわかってるのも憂鬱でございますわね。はぁ。」
「……み～☆　突然カボチャを出されても怒るくせに贅沢な沙都子なのです。」
「り、梨花にだって少しは嫌いな食べ物があるはずですわよ!?　そういえば梨花、大福とかシュークリームとか、甘い物が嫌いだったんではございませんこと!?」
「……別に嫌いではないのです。意地悪で食べないだけなのですよ。食べる気なら何個でも食べられちゃいますのです。パンプキンパイだっておいしくいただけますのですよ、にぱ～☆」
「うぅぅぅ、梨花だけ好き嫌いがないなんてずるいですわー!!」
そんなやり取りがとても楽しい。
沙都子はボクにとっての一番の親友。面倒臭いと思っていたお買い物も、沙都子と一緒になれただけで、楽しい夕方のお散歩に早変わりするのだった。
スーパーの近くは他にもお惣菜屋さんとかが並び、雛見沢のちょっとした商店街になってい

いた。夕飯の買い物に一番繁盛(はんじょう)する時間だ。雛見沢の主婦たちが集まり、賑(にぎ)やかな買い物をしていた。

とりあえず、私と沙都子では買うものが違うので、それぞれ分かれて目的の物を買うことにする。

「えい、いらっしゃいいらっしゃい!! おや、梨花ちゃま、いらっしゃい！ お買い物かい？偉いねぇ！」

「……にぱ〜☆ ボクはお買い物が出来る偉い子なのです。」

「そうかそうか、梨花ちゃまは偉いなぁ！ ほら偉い子のご褒美(ほうび)にこれをあげよう。」

軒先(のきさき)に吊るしてあるお釣り用の小銭入れのザルの中には、時折喘息(ぜんそく)を患う主人のために飴(あめ)がいくつか入れてあった。

それを一つ取り、ボクに放ってくれる。

苺(いちご)ミルクの味がする、ボクの大好きな飴だった。あとで沙都子の前で、自分だけがもらえたと自慢するために、今は食べず、わざわざポケットにしまう。

ボクにとって、沙都子をからかったり、羨ましがらせたりするのはとても楽しいこと。

沙都子はそれらに対して、いつも過剰なまでにリアクションをしてくれる。一緒にいれば退屈に感じることなどない、最高の友人だった。

「おや、梨花ちゃまのところは今日は何だい。豚の挽(ひ)き肉だと、う〜ん、」

「……ハンバーグなのですよ。お花の形の目玉焼きを乗っけて、ケチャップでお絵描きをするのです。」

「おっほっほっほ！　それはいいねぇ！」

そんなやり取りを楽しみながら、私は買い物袋の中を少しずつ満たしてく。

…その時、主婦たちのひそひそ話がふと耳に入った。

それは、…少しだけ冷たい内容。………買い物に訪れている沙都子に対するものだった。

村を国に売る裏切り者のくせにいつまで村に居座るつもりなのか。早く出て行けばいいのに。

そして、堂々と買い物に来る度胸もなく、娘に買い物をやらせるとは。…ぐちぐち、ぐちぐち…。

……ダム計画の地元説明会で、北条家と園崎本家が徹底的に対立することになる大喧嘩をして以来。北条家は村の中での孤立を深めていた。

当初こそ、北条家に同調する立ち退き派も少なからずいたのだが。

園崎本家が主導で村中の徹底的な意見調整が図られ、全体主義的な論調に固められていくと、徐々に立ち退き派は鳴りを潜めていった。

また、園崎家や公由(きみよし)家などの、村に大きな影響力を持つ御三家筋からの露骨な嫌がらせも大

きく作用していた。

園崎本家は、北条家を見せしめに苛め抜くことで、同調する立ち退き派が現れないようにする戦略に出たらしい。

それは、先祖から何代にもわたって住み続け、そして自分たちも恐らくはこの村で骨を埋めることになるだろう住民たちにとって、とても圧力のある嫌がらせだった。

かつて地元説明会で、鼻息荒く北条家に同調し、立ち退き派のリーダーとして煽り立てるような威勢のいいことを言ったのはどこの誰だったやら…。そのような者はすっかり鳴りを潜めてしまい、踏み絵的に北条家への冷遇に参加していった…。

北条家への苛めは、今や村全体からかけられる圧力となっていた。北条家は裕福な家庭ではないから、町会費を長いこと滞納していた。

平和だった頃は、互助の精神でそれを大目に見て、いつかまとめて払ってくれればいいと寛容だったのだが、ここに来て一気に風向きが変わり、滞納分の町会費を一括ですぐに払えと北条家に迫ったのだ。

払って払えない額ではなかっただろうが、こういう風に売られた喧嘩は、北条家も買ってしまう。挑発に乗るように町会を脱退してしまった。

……だが、これはまんまと悪意ある策に乗ってしまっただけだった。

町会を敵に回すというのは、陰湿な苛めが行なわれることを意味する。
例えば、北条家がゴミを出していた場所は、清掃局と町会が掛け合って設けられた仮設のゴミ捨て場だった。
町会の規約では、町会員の家庭だけが使えることになっている。
…北条家が町会を脱退した次の日から。北条家がゴミ捨て場に捨てたはずのゴミ袋は全て、いつの間にか玄関先へ送り返されていた。しかも、袋が破れてゴミが散乱した状態で。
また、北条家のすぐ近くにある垣根道(かきねみち)に看板が立った。
「私道につき通り抜け禁止。町会員以外の通り抜けを禁ずる」
そこには頑固親父(がんこおやじ)が朝晩立ち、北条家の人間を一切通さなかった。
…私道とは、私有地を道路にして開放したもので、外見は普通の道路と何の違いもない。だが、立派な私有地であり、土地所有者以外の通り抜けを禁ずるのは決しておかしいことではないのだ。
他にも他にも。……陰湿な村ぐるみの苛めは重ねられた。
その村八分のような恐ろしさが村中に蔓延し、…北条家に同調すれば同じ目に遭わされるかもしれないと怯(おび)えさせ、…ますますに北条家を孤立させていく。
……大人たちは、そういう泥臭い暗闘(あんとう)を子どもたちには話さなかったから、沙都子が学校で

苛めに遭うということだけはなかったが。…窒息しそうなぐらいの緊張感を毎日強いられていただろうことは想像に難しくない…。

今、ぼそぼそ陰口を言っている主婦たちも、別に沙都子に直接言ってるわけではない。
……でも、だからといって、時折零れて聞こえる内容と、冷たい目線に沙都子がまったく気付かないわけもない。……いつから村は、こんなにも沙都子に冷たくなったのか。…沙都子の親友としてとても悲しかった。

こうして見てみれば、沙都子の買い物はボクの和気藹々としたものとは全然違う。
私が挨拶したり買い物したりすれば、オマケがもらえたりお得にしてもらったり、色々あるのに、…沙都子にはない。

いや、それどころか、………わざと後回しにされたり、聞こえないふりをされたり、……沙都子に関わりたくないという気配が充満しているのがわかった。

…ごった返す主婦たちの合間を縫って、ずっと魚屋の主人にほしいものを言っていたはずなのに、最後の最後まで後回しにされた沙都子。

……沙都子は強気な笑顔を浮かべて、全然気にしない風を装っているが、……ボクにはわかる。それはあまりに痛々しい痩せ我慢…。

その時、沙都子が小銭を地面にばらまいてしまった。渡されたお釣りを財布に戻そうとして、ちょっと指に引っ掛かったのかもしれない。

ボクは沙都子から少し離れていたので、主婦たちの間を潜り抜けて、一緒に小銭を拾ってやろうとする。

………でも、そこではっとした。

……沙都子が、たくさんの小銭を落としてしまって、右往左往しながらそれを拾っているのに、………誰もそれを手伝わない。

いや、手伝わないというより、…まるで沙都子がそこにいないかのように振舞っているのだ。

…自分のミスで落とした小銭なのだから、沙都子も誰かが拾うのを手伝ってくれるのを期待しているわけじゃない。

…………でも、……それでも…。…これだけの人が行き来しているのに、………ただの一人も手伝おうとしないなんて…。

「……沙都子、ボクも拾いますですよ。」

「あ、………ぁ、だ、大丈夫ですすわよ梨花…。」

そのわずかな仕草だけで、私には彼女の傷ついた心の痛みがわかる。

しかも、…私が沙都子の小銭拾いを始めたら、他の主婦も一緒に小銭を拾い出したのだ。そ

うするのが当然であるとでもいうような顔で。
……古手家の巫女のボクが拾い出したなら手伝ってもいいのか。ボクが拾わなかったら、最後まで見て見ぬふりをしていたくせに…。
そして、……「ボク」が拾えばみんなが手伝ってくれるというのが、沙都子の心をどれだけ傷つけているというのか…。
私は主婦たちが拾ってくれた小銭を礼も言わずに奪い取る。……礼どころか唾(つば)を吐いてやりたいくらいの気持ち。
「あ、……ありがとうございますわ。梨花。皆さん。」
…感謝の言葉を述べないと、またどこかで、北条の娘は礼儀知らずだ、みたいなことを言われかねないのだろう。沙都子は、苦々(にがにが)しくその感謝の言葉を口にした。
それを見下ろす主婦たちの、さもどうでもいいような淡白(たんぱく)な表情が、……私にはとにかく耐えられない。…沙都子が今、負っている心の痛みが、耐えられない…。
「……お買い物が終わりましたら行きましょうです、沙都子。」
「え、……えぇ…。」
私は沙都子の腕を摑んで、そこを抜け出す。
…悔しい、悲しい、辛い。

沙都子に何の罪があるというのか…。
その冷たい現実が、悔しくて悲しい。
自分はマスコットのように可愛がられている。でも、それと同じものを沙都子に分け与えることが出来ない…。……沙都子は今頃、…どうして同い年の自分と梨花で、ここまで対応が違うのかと呆然としているに違いない…。
………こんな思いを沙都子にさせるくらいなら、一緒にお買い物になんて来なければ…、いや違う。私が沙都子の分まで一緒にお買い物をしてあげればよかった…。
「……沙都子。」
「…な、……なんですの、梨花。」
「……小銭をばらまいてしまって、かわいそかわいそなのです。…なので、これは沙都子への残念賞なのですよ。」
私は、せめて沙都子の心の傷を、ほんのわずかでも癒してあげたくて、…さっきもらった苺ミルクの飴を取り出す。
でも、…沙都子は受け取らなかった。
「……その飴は、梨花がもらったものではありませんの。」
私の手が、びくっと凍える…。

…沙都子は見ていたのだ。この飴を私が受け取るところを……。
「…渡した人だって、梨花に食べてほしいと思って渡したんですわ。………だから、私が食べたら失礼ですわよ……。」
…沙都子は私に背を向け、別れ道に至るまで、ずっとそのままだった…。
別れの挨拶すらなく、……沙都子は買い物袋を持ってとぼとぼと去っていく。
……私は、…沙都子の心を癒したいつもりだったのに、……最後の最後で傷口に塩を塗るような真似まで……。
こんな自分がどうして沙都子の親友だなんて？
もし私に握力があったなら、…そのまま飴を手の中で握り潰してしまいたかった……。

◆ダム計画撤回作戦

「…いやぁ、遅くなって申し訳ございません。今日はどういうわけか患者さんが多くて多くて。」
「お疲れ様です、入江二佐！」
くつろいだ様子だった富竹は、入江がやって来るのを見ると立ち上がり背筋を伸ばした。

「あぁあぁ、その二佐というのはどうか止めてください…！　私は医者です、どうもその軍隊的な階級には馴染めません。せめて所長でお願いします…。」

「了解しました、入江所長。あははは…！」

それはもはや、入江が二佐と呼ばれることをあまり好まないことを知っていての、冗談のようなものとなっていた。

富竹たちは気さくに笑い合う。もっとも、鷹野としてはうんざりとした様子。

同じネタを何度も繰り返すというのがどうも好きになれず、機会があれば富竹に、もうその二佐というのを止めろと言うつもりだった。

……言えば、柄にもなく傷つくだろうなと思うので、言い出し損ねてしまっていたが。あと、富竹の発音のせいなのか、二佐がどうしても「リサ」と聞こえてしまう。

一度そう聞こえてしまったら、彼が言う度に「入江リサ」「入江リサ」と聞こえてしまうのだ。

鷹野がこっそりそれを入江に話したら、それは大いに受けたのだった…。

今日は単なる挨拶で、明日がミーティングの日になっていた。

富竹は今日から来ているが、明日、東京から監査が何人かやって来て合流し、機関の研究進捗状況について説明を受けることになっている。

「それはそうと、ダムのことで村中が盛り上がってるみたいですね。」
「ええ、それはもう…！　村中、大変な騒ぎですよ。私も、役員として自治体の地元説明会に参加してきたのですが、…怒声と罵声のそれはもう賑やかな説明会となりました。」
雛見沢ダム基本計画の発表後、当然、雛見沢は大騒ぎとなった。
政府は割と早期の内に譲歩案を撤回。攻撃的姿勢を明白にする。
交渉の余地を見せることが、かえって相手を付け上がらせることになるという考えらしかった。
だが、その目論見(もくろみ)は裏目に出ることになる。
地縁による結束が歴史的に強いこの雛見沢の地では、そういう態度に対し逆に団結を招く結果となり、政府も村も、互いに一歩も引けぬ泥沼の様相を呈していたのである。
「くすくすくす。雛見沢の人は気性が激しいですものねぇ。やっぱり鬼の血が流れてるからなのかしら。」
「笑い事じゃないですよ…。あの説明会に、夜中まで付き合わされた方の身にもなってみてください。」
「それはお気の毒でしたね。はっはっはっは…！」
「いや、…本当に笑い事ではないですよ、富竹さん。ダム計画はどうなってるんですか？　本

当にこの村はダム湖に沈められてしまうんですか？」
「それについては、東京の方でも圧力を掛けています。表向きは騒ぎになっていますが、実際の裏方ではかなり屋台骨がぐらついているはずです。」
「……その圧力が早く効くといいんですがね。村は朝から晩まで賑やかで、村人の心もこのところ、荒んできたように思います。診察に来るお年寄りに捕まって、たっぷりと反ダム論争を聞かされる時がありますよ。」
「くすくす。付き合わなければいいのに。入江所長は人がいいから。」
「そうも行きません。私は研究所長である以前に診療所長でもあります。話を聞くのもケアの一環ですので。」
「それはとても良いことです。感服いたします。」
「私は、東京の皆さんがうまく圧力を掛けてくれて、いずれはダム計画を撤回してくれるものとわかっているからいいですが。村人にとっては、先祖代々から住んできた土地を追い出されかねないと、本当にすごい騒ぎです。」
「立ち退けと言われても、引っ越せるほどのお金もなく若さもなく。立ち退き補償金の額の吊り上げが狙いだったのかもしれないけど、…急にお役所の態度が変わっちゃって全面衝突。……こうなってしまったら、穏便に決着というのは無理かもしれませんわね。」

「かつては、補償金に納得して立ち退きに応じようという人たちも少しはいたんですが。御三家の園崎家さんが強硬意見で村人をリードしてましてね。国との対決姿勢を煽っているようなんです。街宣車みたいなのがよく騒がしくしてますし、ビラやらチラシやら機関紙やらが回覧板と一緒によく回ってきますよ。」

「ここに住む人にとっては大変な問題ですからね。気持ちはわからなくもありません。」

「……そういう意味では、思惑は多少違うかもしれませんが、そんな皆さんのためにも、このダム計画は早く撤回になるよう交渉を進めて欲しいものです。撤回されれば、この村もすぐに落ち着きのある元の村に戻るのでしょうから。」

「もちろんわかってます。それについては東京の方で交渉を進めておりますので、もうしばらく私どもにお任せください。」

「…東京の方で噂を聞いたんですけれど、建設省の方になかなかうまく圧力を掛けられるコネクションがなくて苦労してるとか？」

「いやぁ…、はっはっは…。私如きでは詳しくは知りませんが、水面下調整がうまく行っていないのではという話も少し聞きます。」

　鷹野の持つ後ろ盾は非常に強力な勢力ではあるが、だからと言って日本全てを網羅しているわけではない。

得意とする方面もあれば、不得手とする方面もある。
……建設省に圧力を掛けられるコネクションについては、あまり得意ではないに違いない。
「冗談抜きで。ダムが出来ますからここを立ち退いてくださいなんて話には、本当にならないんですわよね…？」
「も、もちろんです。それだけは絶対に問題ありません。時間が掛かっているだけですので、皆さんはどうかそこは任せて研究を進めてください。穏便に済ませることが出来ない場合は、最終的な荒療治も辞さないことで意見はまとまっておりますので。」
「荒療治、…とはなんですか、富竹さん。」
「そこは我々の領分です。入江所長は気にされなくて結構です。どうかお任せください。」
「………そうですか。…わかりました。よろしくお願いいたします。」
「大丈夫ですわよ、入江所長。ダム計画は絶対に撤回されますわ。……だって、そう決まっているんですもの。…くすくす。」
鷹野がくすくすと笑うと、富竹もそれに倣い薄く笑った。
…入江だけがその笑いについて行けず、わずかの疎外感を味わう…。
…………後に入江は、村で見掛けない一人の少年の診察を求められた時、その荒療治の意味を知ることになった。

◆富竹ジロウ

確かに天気予報は、夕方に土砂降りになるかもしれないと予告していたが…、まさかここまで降ってくるとは思わなかった。
僕たちは、廃線になったバス停跡の小屋で、雨雲が過ぎ去るのを待っていた。
「…ごめんよ、鷹野さん。」
「あら、いいのよ気にしないで、ジロウさん。私も、土砂降りになるかもしれないことを覚悟の上で出掛けたんだから。くすくすくすくす。」
鷹野さんがくすくす笑う。
天気が崩れるかもしれないという彼女に、大丈夫大丈夫といって連れ出したのが僕なのだ。
…彼女の貴重な休日を無理に付き合わせ、こんなザマでは男としてみっともないったりゃありゃしなかった…。
今夜が帰京なので、また当分、雛見沢には来れない。
そう思ったら、今日を興宮の安宿で過ごす気になれなくて、彼女に散策に行こうと誘ったのだ。

「いや、………ははは…。本当に申し訳ない。」
「くすくすくすくす。」
彼女はしばらく、小さく悪態をつくフリをしてはチクチクと僕をからかった。
決して追い詰めるのを楽しんでいるわけではない。そんな彼女なりのコミュニケーションをとてもチャーミングに思っていた。
…僕は多分、…いつの頃からか彼女の虜なんだと思う。でも、彼女にとって僕は東京から来る査察官でしかない。
…そういう立場を認識して、僕に好意的に接してくれているだけで、決して僕個人を好いてくれているわけではないはずだ。
……そう思うと、自分は職務上の立場を使って、彼女を無理やり連れ出したのではないかという気持ちになり、少し憂鬱になる。
僕のこの微熱は、恋心でなく風邪か何かだと思い込んでおいた方がいいだろう。
でも、彼女は嫌な時はきっぱりと嫌だと言う人だ。
……もちろん「嫌」という言葉は使わないが、あらゆる間接的表現で、「嫌」に準じることをきっぱり言う人だ。…だからこそ、彼女が僕に付き合ってくれるのは、わずかでも好意があるからだと信じたい。

「……はぁ。」

そんな自己中心的な考えに苛まれ、僕は軽く首を横に振るのだった。

僕のそんな様子を見て、まるで胸中を見通しているかのように彼女はくすりと笑うのだった。

そんな仕草に、思わず赤面してしまう。

「ジロウさんも不思議な人ね。東京ではさぞや女性にもてるでしょうに、なぜわざわざ私みたいなおかしな女に付き合ってくださるのかしら…？」

「お、おかしななんてことはないよ…。鷹野さんは十分、魅力的だよ…！　むしろ、僕みたいな男のために貴重な休日を割いてもらったのが、申し訳ないくらいだよ。」

「確かに私は、とても大切な研究のために生涯を捧げたつもりだけど。それだけじゃ人生は潤いがないもの。たまには、頭を切り替えて遊ぶことも大事だし。……それに、異性とのコミュニケーションは脳の活性化にもとてもいいんだから。くすくす。」

「あははははは…。僕ごときで、鷹野さんの頭の気分転換のお役に立ててるならいいんだけどね…。」

「あなたには、私と一緒にいても気分転換にはならない…？」

鷹野さんが、どきりとさせる小悪魔的な笑顔で微笑みかける。

僕は、耳まで真っ赤になっているかもしれないのを悟られないように、誤魔化すので必死だ

った。
「そんなことないよ…！　僕も鷹野さんと一緒に過ごせると、こう、…その、色々と気分転換になるよ！　それにほら、鷹野さんに野鳥撮影のことを布教すれば、僕も撮影の同志を得られるわけだしね…！　も、もしよかったら、次に来る時は僕の古いカメラを持ってくるよ。買うと高いからね、ははははは…。」
「ありがとう。あなたを虜にする野鳥撮影が、どれくらい楽しいのか、くす、ぜひ教えていただけると嬉しいわ。ぜひ、次の機会には野鳥撮影の散策にご一緒したいわね。じゃあ私、自分では買わなくていいのかしら？」
「あ、あ、うん！　僕のお古で少し挑戦してみて、馴染めそうだったら新しいカメラを買う方がいいんじゃないかな！　と、東京に戻ったら送るよ！」
「ありがとう。次に来て下さる時は、ぜひ私の写真の批評をお願いするわね。」
「う、うん…！　ははは、どんな写真か、楽しみだなぁ！」
「くすくす。きっとジロウさんみたいにはいかないわ。本当に初めてですもの。」
涼やかに笑う彼女と、真っ赤になって頭を掻きながら笑う僕の暑苦しさではまったく対照的だった。
でも、…僕の自意識過剰なのだろうか…。鷹野さんは、僕と一緒にいることを苦痛に思って

いないように感じてしまう。……社交辞令だったら、ここまでは付き合ってくれないはず。

……あぁあぁいかんいかん。

女の人の社交辞令を真に受けてしまって、勝手に傷つくのが僕の悪いところじゃないか…。彼女が僕に好意を持っているかもしれないなんて、誤解しちゃ駄目だ駄目だ…。

「……そう言えば、こうしてジロウさんと二人きりでゆっくりおしゃべりをするのは初めてね。」

「そ、そうだね。いつも、所長とか他の研究員の人とかがいたりするからね。」

「私、あなたのことを全然知らないの。あなたが東京でどんな仕事をしているかとか、今までどんなことをしてきたのかとか。自衛隊ではどんな活躍をされているのかしら…？」

「あは、あはははは…。昔ちょっとだけ教官の真似事をしてたけどね。怪我をした時に目をやっちゃってね。普段の生活には支障はないんだけど、大事に受け取られちゃって、それ以来は事務屋の仕事ばかりやらされてるんだよ。あははは…。」

鷹野さんは、きっとドジを踏んで怪我をしてしまったのでしょう、みっともないとくすくす笑う。

「それでね、隊内の広報誌を作る仕事を手伝った時に、イベントの写真撮影で初めてカメラの魅力を知ったんだよ！　カメラには人を幸せにする力があるのさ。あははは、何を言ってる

んだろうって思ってるだろうけど、これは本当なのさ。僕はカメラに触れるようになってから、日々に幸せを感じるようになったと思ってるよ。」

「……カメラで、どうして幸せになれるのかしら…？」

「うん。カメラというのは、日々の生活を切り取って写真にして残すものなんだ。残すくらいなんだから、幸せなものを写したいというのは当然だろう？　じゃあ、幸せなものはどこにあるんだろうと、ファインダー越しに自分の周りの世界を覗いてみると。…そこには、今まで当り前だと思っていたものが、実はとても幸せなものだったんだと気付くことでいっぱいなんだ。…例えば、路肩のアスファルトの隙間（すきま）から健気に生えている一輪のタンポポだって、忙しく通り過ぎる時にはただの雑草に過ぎないけれど、ファインダー越しに覗いた時、それは春の訪れを教えてくれる、季節からの素敵な贈り物であったことに気付けるんだよ。それを写真に収め、アルバムに残す。…そしてアルバムを再び開く度に、その時の幸せな気持ちが蘇ってくるんだ。」

「ジロウさんは風景や野鳥の撮影をしながら、そんな気持ちに浸（ひた）っているの…？」

「うん。その写真が芸術的かどうかとか、賞を取れるような劇的瞬間かどうかなんていう野心的なことは、僕にとってあまり重要じゃないんだよ。僕たちが気付かない、小さな幸せに気付かせてくれる、そこにこそカメラの魅力があるんだと思っているんだ。だから、そんな気持ち

でこの雛見沢をファインダーで覗けることはとても楽しくて幸せなことなんだよ。」
「…………………………ふぅん…。」
僕は、たまに雄弁に語り過ぎてしまうことはよくあったが、多くの場合、鷹野さんに揚げ足を取られて茶化される。
…だから、彼女がこんなにも素直に話を聞いてくれるのはとても珍しいことだった。
鷹野さんは、ちょこんと僕の脇に座ると、…僕が手に持っているカメラをいじる仕草をする。
…僕の演説でどの程度の感銘を受けてくれたかはわからないけれど、カメラというものに、多少の関心を持ってはくれたように見えた。
半ば、馬鹿にされることを覚悟していたので、彼女のそんな素直な仕草が、何だかちょっぴり嬉しかった。
「ちょっと試してみるかい？」
「……………私にも出来るかしら。」
「簡単だよ！　最初は、ピントの合わせ方とシャッターの押し方だけ覚えれば十分さ。持ってごらん？　あぁ、レンズには絶対に触れちゃ駄目だよ…！」
「ぶぅ。簡単じゃないじゃない。……くすくす。」
せっかくカメラに関心を持ってもらえたのだから、彼女と一緒に被写体を求めて雛見沢の雄

大な自然の中を散策出来たら最高だったのだけれど。
……意地悪にも、雨は一向に止みそうな気配がない。
でも彼女はとても面白がってくれて、この雨の中の小屋の中で、色々と目に留めてはフィルムに収めていた。
だから、彼女が撮った初めての写真は、全てこの薄暗い小屋の中の、妙なものばかりなのだ。
それ以来。…僕と彼女は、再会する度に、村の中をカメラ片手に散策している。

◆入江京介

市民健康診断は、私たちの研究を進める上で非常に有意義なものであった。
一定年齢以上の住民のみが対象とは言え、大勢の雛見沢住民を同時に検査することが出来る。
……研究所が表向き、診療所をやっていることの最大の利点であった。また、色々な根回しから、村人の遺体を独占的に検死解剖することも出来た。
……医学を学問と捉える者にとって、これほど恵まれた環境は他にないに違いない。
故高野氏が残した研究資料の追試は順調に進んでいる。……個人の研究とは思えないくらいに先見性のあるその内容は、徐々にその全貌を明かしつつあり、改めて故人の研究の偉大さを

思い知らされるのだった。

「失礼します、所長。」

「……あぁ、鷹野さん。お疲れ様です。」

「先ほど東京から、残りの検査結果が郵送されてきました。こちらに置きますわね。」

「ありがとうございます。……いよいよ面白くなってきましたね。」

「くすくす。この面白さを共有出来てとても嬉しいですわ。」

…鷹野さんは、私の補佐を務めてくれている陸自から出向している人間だ。でも、その雰囲気は、私が知る自衛官のイメージとは程遠い。

……私たちの研究が、外見的にも事務的にもあらゆる面から隠蔽されているように、…彼女の正体もまた隠蔽されているのかもしれない。

…この鷹野という名前も、おそらくは偽名に違いないのだろう。

私は一介の医師であり、研究者に過ぎない。鷹野さんのサポートがなければ、入江機関の長などとても務め切れないのだ。

彼女は「東京」のクライアントたちとのパイプ役であり、私の補佐であり、…また、雛見沢症候群について、非常に精通した研究者でもある。

……彼女の存在は、必要不可欠だった。

…そう思えば思うほど、入江機関ではなく鷹野機関にして、彼女が所長の座についた方が正しかったのではないかという気になってくる。

だが、そもそも、私が声を掛けられた時に説明されている。…私のクライアントは、機関の長に民間人を据えたがったからだ。そのため、彼らはその条件を満たせる私を探し出し、所長に祭り上げたのだ。

……自分が雛壇(ひなだん)に飾られているだけの存在の自覚は、多少はある。

だが、私だってただ飾られているわけではない。

極めて珍しい奇病の研究を預(あず)けられたのだ。私だって研究者だ。知的好奇心が疼(うず)く。

クライアントの目論見は別にして、雛見沢症候群の謎を解き、人類が初めて知る神秘に最初に辿り着く人間の一人になりたいという欲求はあるのだから。

「…雛見沢症候群という寄生虫感染症がほぼ間違いなく存在するという、浮き彫りの情報はいくらでも集まるのに、…原因となる病原体が発見出来ないのはとても悔しいですね。」

「そうですわね。電子顕微鏡を使えばあっさりと見付かるだろうという期待も少しはしていたもので。」

光学顕微鏡では見ることの出来ない、極小の存在、ウィルス。

それを知ることの出来る電子顕微鏡の発明は、医学界にとって非常に重要なことだった。だ

が、非常に高価なものなので、個人が所有出来るものでは断じてない。
故高野氏は手記の中で、電子顕微鏡なら発見出来る存在に違いないと予言していたが、それは外れたということになる。
鷹野さんも電子顕微鏡があっさりと正体を暴いてくれると楽観していたらしく、数々の検死体から何も発見出来ないことに落胆していたこともあった…。
実はここに来て、私たちの研究は最初の山を迎えたらしく、数週間前から研究は座礁していた。……そのため、今後の進め方を少し考える必要があった。
「……となると、極小の極小なのか。あるいは、検体そのものに問題があるのかもしれません。」
「と、申しますと？」
「例えばですが、野生のネズミの体に多数のノミが寄生していることはご存知と思います。ですが、ネズミの死体を調べたところでノミを見つけることは出来ません。宿主が死んだ時点で寄生虫であるノミの生活基盤も崩壊するからです。」
「宿主が死ねば、寄生虫にとってそれは、地球が滅んでしまうのと同じこと、というわけですわね。」
「そうです。滅びた後の地球を調べても、人類を見つけることが出来ないのと同じです。」

「……ということは、滅ぶ前の地球を調べればよい、という話になりますわね。くすくす。」
「そうですね…。ただ、滅ぶ前の地球には人権があります。生きている内に調べることは難しいでしょう…。」
生きている人間の脳を調べる。…たとえ隠語で語ったとしても、それはとても重い意味を持つものだ。医学的に言えば、調べればわかること。
……だが、人の世に生きる私たちには、人の世のルール、倫理がある。
その狭間(はざま)で、私たちは医学に貢献していかなくてはならない…。かつて、私が人類の幸福のためにと、精神外科の道を突き進んでいたことを思い出す。
……過ちだったとは思わない。
…だが、倫理という概念が果たして私を許すのか。それはわからなかった。
いつの日にか地獄の閻魔(えんま)が私を裁くだろう。それが無罪であっても有罪であっても。…私は甘んじて受け入れるつもりだ。
私は遠い目をしながら、そんな過去のことを思い返していると、……その声は突然聞こえた。
それは鷹野さんの声。
…とても明快でわかりやすい、…なのにそれがかえってぎょっとするような、…そんな響き。
「わかりました。滅ぶ前の地球を用意させましょう。」

「……え？」
私はぎょっとする。
……医学の発展という言葉はしばしば、生贄も辞さないという悪魔の囁きに通じる。
その、悪魔の声を私は聞いたのだ。
「くす。そんなに難しいことではありませんわ。雛見沢の住民で、すでに重篤の状態で市内の病院に入院しており、いつ死んでもおかしくない患者を探させるだけですもの。」
「……しかし、…いくら余命幾ばくとはいえ、自らの体を、生きている内に献体に差し出される勇気のある方がいらっしゃるでしょうか…。」
「そんな必要はありませんわ。いずれ亡くなる方に、ほんの少し早くお休みいただくというだけの話ですわ。書類上ね。くすくす。」
存命中の患者に死亡宣告を出し、…それを〝検死〟する。生きながらに。
「む、無理でしょう…！　第一、頭蓋を切開するような大手術となれば絶対に痕跡は残ります。遺体を遺族の方が見られたら不審に…、」
「そういうところを何とか出来るのが私どもではありませんの。山狗に至急、条件を満たす患者が存在しないか市内の病院を調べさせます。先生は、お皿の前でナイフとフォークをお持ちになって待っているだけでいいんですわ。すぐに料理をお持ちいたしますから。……くすくす

くすくす。」
「は、……ははははは…。」
鷹野三四さんが、私の実質的パートナーであることは疑わない。
だが、…どうしても心を許すことが出来ないのだ。……彼女は研究者としてのある一面が、私のそれと大きく異なるようだからだ…。
……あぁ、だが私が彼女とどう違うというのか。私は結局、彼女の言うように、皿の前でナイフとフォークを持って待っているだけなのだ。…魚を下すすところを残酷だから見たくないと綺麗事(きれいごと)を言っているだけ。
彼女がこれから用意しようとしてくれているディナーこそ、……私が実は一番欲しているものではないのか。
何たる偽善(ぎぜん)。……彼女がじゃない。私がだ。かつての私が彼女とどう違ったというのか。
患者の同意を得ずに、…その人の一生を左右しかねない手術を幾度と施した私が、今の彼女とどう違ったというのか。
……私は今日まで、自分の実績に疑問を持ったことは一度もない。なのに、……なぜか彼女を見ていると不安になってくるのだ。
鷹野さんが、所長席の内線電話で小此木さんに連絡をしている。…今、立案した計画を説明

するために呼びつけているのだろう。
私は、…それを止めることもせず黙って見ている…。
私は…、自分がどうしてこの道を志したのか、…その原点を思い出すべく、過去を回想していた……。

◆入江の生い立ち

医者になろうという動機は、子供の頃にありがちな非常に不純なものだった。お医者さんになれば儲かる。尊敬される。…そんな程度が原点だった気がする。
だから、近所の子供たちと遊ぶ時にも、自分は常に医者として振舞った。付け焼刃の知識で、転んだ子の傷口を洗ったり、捻挫を冷やしたりしてあげていたっけ。
自分の周りも、京介くんは将来、きっとお医者さんになると信じていたんだ。
家は貧乏だったから、私のその志をとても喜んだらしい。
医者になるにはたくさんの勉強が必要だと教えてくれ、貸本屋さんから医学書もどきを借りて来ては読ませてくれたっけ。
一冊の借り賃も決して安くない。だから、借りた一冊を一日で斜め読みし、翌日に両親がそ

れを「以前に借りた本と重複してしまったので、本を変更したい」なんて言って、タダで二冊目を借りて来てもらったりしたっけ。

もっとも、そんな知識は、実際には大して役に立たないのだが、将来はきっと医者になるというモチベーションを盛り上げる意味では、とても有意義だったと思う。

近所ではお医者の京介くんと呼ばれたし、クラスでも必ず保健委員に推薦(すいせん)された。先生も、医者になるためにはどう進学すればいいか相談に乗ってくれた。

もちろん、夢だけで医者になれるほど現実は甘くない。勉強も大変だったし、決して楽な道のりではなかった。

医者の門を叩くには大学に入るのが欠かせない。だが、家が貧乏だったため、学費のかかる私大は認めないと言われた。となれば、国立大学しかない。

私の成績は決して悪くはなかったが、国立大学は極めて狭き門だった。その上、医学部ともなれば、その門はさらに狭まる。

…懸命に勉強した。原動力は、子供の頃の夢。

自分はお医者さんになって、みんなに尊敬されるんだ、という本当に安っぽい子供の頃の夢だけが私の背中を押してくれたのだ。

……そして合格。

順位は決してよくなかったが、それでも辿り着いたのだ。子供の頃の夢を叶える、そのスタートラインにようやく。

両親は大喜びだった。

…父も母も学歴は低かったから、自分の息子が医学部合格を成し遂げた快挙に、親類中を呼んでお祝いしてくれた。

たとえ国立と言えど安くない学費を承知の上で、盛大にお祝いしてくれた。

父は、感情を表に出さないタイプだった。何があっても仏頂面。自分の意見を述べることもなく、率先（そっせん）することもない。

母に促されお膳立てをしてもらい、最後に現れて無言で去っていく、あの時代に多かった無言頑固タイプだった。

その親父が、涙を浮かべながら歓喜する姿がとても嬉しくて、自分も涙をもらってしまったことを思い出す。

私の背中を何度も叩きながら親類に、こんな息子を持てて俺は幸せだと何度も繰り返し、私に面と向かって、これまでの努力を讃えてくれたのだ。

そして、それは私を東京へ送り出す壮行会ともなった。駅で父は、辺り構わず万歳を連呼して見送ってくれた。

それが見えている内は、恥ずかしくて嫌だったのだが、…父の姿が見えなくなって初めて、感涙が込み上げてきたのを思い出す…。

それからは永く険しい勉強の日々だった。

ハイカラな都会の生活に溺れ、自堕落になりたい日もたまにはあった。

でも、その度に田舎から届く両親の手紙に励まされ、何くそ、俺は挫けないぞ、と頑張ってきた。この頃は、自分の将来の夢は開業医で、田舎に帰り、内科や小児科を開いて地域に貢献したいと思っていた。

だから、まさか夢にも、脳に関わることになるとは思わなかった…。

ある日、私をいつも励ましてくれる田舎からの手紙の雰囲気が、少し変わった。

文面はいつもと変わらぬ田舎の近況と、こちらの生活を気遣う内容だったが、…追伸部分がいつもと違う雰囲気だった。

「最近、お父さんがとても乱暴になりました。ひどい時には家中が散らかるくらいに暴れて困っています。」

…その粗暴な振舞いと、寡黙な父の姿がどうしても重ならず、私は驚きを隠すことが出来なかった。何かよほどのことがあったのだろうか。

…だが、そのような心当たりがなく困っていると、母の追伸は結ばれていた。

母は父の伴侶だ。私が生まれるよりずっと前から、ずっと父と共に過ごしてきた。…実の息子に気付けないようなことにも気付ける人だった。

…その母にも思い当たらぬ父の乱暴。…………一体、何があったのか。

父母は本当に仲が良いおしどり夫婦だった。幼い自分が母を困らせると、父はゲンコツで制裁(せいさい)したものだ。…そんな父がどうして母に辛く当たるのか。

父母の間で何か仲違いがあったのではないか。

……元旦(がんたん)には帰る。その時に父と腹を割ってみようかなんて思っていた。……だが、私が考えている以上に状況は深刻だったのだ。

ある冬の寒い日。…私の下宿先の鍵が開いていた。

泥棒にやられたかと驚いて入ると、……そこには荷物を抱えた母の姿があった。

…そう。母は父の暴力に耐え切れなくなり、私のところへ逃げてきたのだ。

女、三界(さんがい)に家なしなんて言われた時代だ。

父と同郷の母は実家にもおめおめ帰れず、上京した私のところへやって来たのだ。

そして、母の口から知らされる父の暴行の日々。あんなにも物静かな人だったのに、なぜ人が変わってしまったのかわからないと母は泣いた。

そして、もう二度とあのような乱暴な人のところへは戻らないと決別を口にするのだった。
息子の私は、おろおろとするしかない。
…もう一度父を話し合うことは出来ないのかと言ったが、…それは母の体中に残るアザの前には無力だった…。
その後のことは、……思い出すのも辛いから掻い摘む。
母が家を出た直後、父はそれを浮気だと思い、ご近所の家に木刀を持って押しかけて暴れ、……警察に逮捕された。
すぐに釈放されたが、近所の誰かが逃げた母を匿っていると疑い、同じようなことを数度繰り返した。誰彼の見境なく喧嘩を吹っかけ、…最後には路上で愚連隊もどきに袋叩きにされて死んだ。
…葬儀の喪主は親類が務めてくれたが、母は参列しなかった。
死人に鞭は打たない。だから誰も父の蛮行を今さら批判しなかったが、…誰もが、どうしてあの寡黙だった人がああも豹変してしまったのかと不思議がっていた…。
そこで親類たちから聞いた、晩年の父の様子は、母から知らされている以上の奇妙なものだった。
母から聞いているのは、突発的な暴力や激昂のことばかりだった。…だが、それは極めて目

立つ一面に過ぎなかったのだ。他にも、笑ったり、落ち込んだり。
…様々な感情が突然に発露(はつろ)しては切り替わっていたらしく、特に晩年はそれが著(いちじる)しかったという。
そして、ある事故を境に強い頭痛に悩まされるようになっていたこと。
…父は土建職人だった。仕事先の事故で建築用の角材で頭部を強打したことがあったらしい。
……意識はすぐに戻ったらしく、本人もぴんぴんしていたため、それだけのことで片付けられてしまったが、…その事故以後から、父の頭痛や異常が徐々に始まっていくというのだ。
私はこの事故と父の豹変に因果関係を感じ、帰郷後、教授に打ち明けた。
「…ふむ。断言は出来ませんが、その様子から、入江君のお父さんに何らかの精神障害が起こっていた可能性は否めません。その頭部打撲事故の際に脳に障害が起こり、脳器質性精神障害を起こしたのかもしれませんね。お父さんの晩年の状況は、そんな患者さんに多い、意識変容や譫妄(せんもう)に酷似していると思います。」
人の行動は脳から作られる。……その脳が疾患することで起こる、行動の異常。
つまり、父は異常者でもなんでもなく、…気の毒な患者に過ぎなかったのだ。
「お父さんの遺体を検死出来るなら、脳をよく調べてみるといいでしょう。…ひょっとすると腫瘍(しゅよう)のようなものが見付かるかもしれません。」

だが、父の遺体はすでに火葬されている。それを確かめることは永遠に出来ない。
でも私は、父の状況から間違いなくそうだと断言出来た。
それしか、あの寡黙で家族思いで、…母に静かな思いやりを寄せていた父の豹変を説明出来ないのだから。
……私は、父の名誉を回復するため、親類たちにそれを説明したが、ほとんどの人たちは納得してくれなかった。
脳が傷つくようなことがあれば死んでしまうはず。だが父はぴんぴんしていた。
だからあの事故で脳が傷ついたわけがない。
それに、あれらは父の人間性に起因するもので、脳ではなく心の問題に違いないと、心という都合のいい言葉で無理やり片付けられてしまった。
…それが、一般人の持つ脳に関する知識の限界だった。……彼らのいう心は、脳という器官で作られるものに過ぎないという考えがないのだから。
親類たちのほとんどは信じてくれなかったが、………それでも、たったひとりだけ信じてほしい人がいた。
……それが母だった。
母は老衰が進むと、心も少し狭くなり、……父に受けた乱暴を誇張して語るようになってい

た。

…口を開けば父の批判ばかり。そして最後には必ず、どうしてあのような人のところへ嫁いでしまったのかとさめざめと泣くのだった。

……あれだけ仲のいい夫婦だった。

…家族仲の良い最高の家族だった…。

だから母の、父に対する誤解だけは絶対に解きたかったのだ…。

父のあれらの行為は、脳障害による症状に過ぎない。

…母に対する辛い仕打ちの数々はとても悲しいものだが、それは本当の意味で父が望んだことではないのだと、……父には罪はなかったのだと、何度も説明した。

…でも、……母はその説明にはついに納得してくれなかった。

母が息を引き取る最後の瞬間、…私は母に、父を許してやってほしいと頼んだ。

だが母の最後の言葉は、……自分の骨は決して父と同じ墓に納めないでほしいというものだった…。

………父に罪はなかった。

ただただ、…父は脳障害という悲しい疾患の犠牲者だっただけなのだ。

風邪をひき、咳が止まらない人にうるさいと言う人などいない。それは症状なのだから仕方

がないことで、むしろ同情を与えるべきなのだ。
父の場合は、それが咳というわかりやすい形ではなく、……性格の変容というわかりにくい形だっただけなのだ。
もし私が、もっともっと脳のことを勉強していたなら、母にもっと詳しく説明して、…父への誤解を解き、……せめてあの世では元通りのおしどり夫婦に戻れたのではないか。
…それを思った時、……私は自分の無力さに泣いた。
そして、……世の中には私の父と同じに、…同情されるべき患者なのに、誤解され蔑まれている人々が大勢いることを悟る。
そして、私は知る。
難治の精神病や脳疾患に対する画期的な治療法として脚光を浴び、研究が進められていた「精神外科」を。
その日から、…私は生涯をかけて「脳」を学び、誤解された人々を救おうと誓ったのだ。
もう父はいないけど。……もし、あの日の父がそこに現れたなら、自らの手で治療出来るように。…そして、母と仲直り出来るように。
それが、私の。……入江京介がこの道にかける情熱の原点。

◆女王への協力依頼

その夜。古手(ふるで)家当主である神主は、家族会議があるといって妻と梨花を和室に集めた。
御三家が集まり、村について合議するのが雛見沢の伝統だ。
それに伴い、園崎家や公由家のような大所帯なら、意見調整のために予め親族会議や家族会議をすることもありえるだろう。
……だが、古手家は分家筋が途絶え、今や本家の一家族三人しかいない。
だからこれまで一度も、家族会議なるものを開いたことはなかった。
「どうしたんですか、改まって。……ひょっとして、ダムに関わるお話ですか？」
今この村で一番重要な問題はダム問題しかない。
妻は神主が切り出そうとしている話は、それに絡むものに違いないと思った。
…そして、家族を集めてまで話すのだから、きっとそれは大きな決意を伴うもの。
……例えば、立ち退きに応じるとか、そういう話になるだろうと思っていた。
「……いや、ダムの話ではない。…………だがこの村に関わる、いや、この村のご先祖さまたちにも関わるとてもとても大事な問題だ。」

古手家は代々、神職にあり、村の守り神であるオヤシロさまを祀ってきた。
…その当主がこう切り出すのだから、それはよっぽどの話に違いなかった。
にもかかわらず、ダムの話ではないというなら、一体何の話なのか…。
「…私は入り婿だ。だから、古手家の本当の血を受け継ぐ、お前と梨花にはよく聞いてほしい。
……………お前たちは普通の人間ではないのだ。」
「……ボクはオヤシロさまの生まれ変わりなのですよ？」
「梨花、そういうのは口にしてはいけません！ …あなた、そういう話は梨花のいないところでしましょう。それでなくっても集会所のお年寄りたちが梨花に妙なことばかり吹き込んで、」
「その、オヤシロさまの生まれ変わりというのが、……どうも本当らしいのだ。」
「はぁ…!?」
「……少し長い話になる。二人ともしばらく黙って私の話を聞きなさい。」
妻は何の話が始まるのかと怪訝な表情を浮かべていたが、梨花はいつものきょとんとした表情で、まったく平静だった。
神主は、妻が落ち着きを取り戻すまで待った後、語り始めた…。
「この村には、大昔からある病気があるのだ。……それはこの地にだけある特別な病気、風土病というものらしい。…それには、この村に住むものが全員かかっている。今、この村に住ん

でいる者だけではない。大昔から住んでいたご先祖さまたちも、みんなみんな、ずーっとこの病気にかかってきたのだ。」
「そんな…。だって、私たちはみんな普通に生活していますよ。この村だけの病気なんて、聞いたこともない…！」
「落ち着きなさい。……その病気はな、この村にいる限り、何も問題はないのだ。だが、この村を出て遠くの地へ行くと発病してしまう。…わかるか？」
「わ、…わかるわけないでしょう、何のことだかさっぱり！」
「……オヤシロさまの祟りと同じなのです。」
取り乱しかける妻とは正反対に、落ち着いた声で梨花が言った。
「そうだ。この村から離れると祟りがあるのと同じなのだ。……つまり、オヤシロさまの祟りだとご先祖さまたちが代々恐れてきたのは、この村だけにしかない風土病のせいだったのだ。」
「そんなことあるわけないです。だって、私たちだって時には村を離れることもあるじゃないですか。村の人だって、仕事で遠くへ出掛ける人だっているし、海外に出掛ける人だって！」
「うむ。それは長い長い時間を経て、病気が徐々に弱まってきたかららしい。だから、このまさらに長い時間を掛ければ、消えてなくなってしまうものだったのだ。……だがそれが、ダム戦争のせいでおかしくなったらしい。……ダム戦争で、今、村中が熱に浮かされたように興

奮している状態にあるのは、みんなもわかっているだろう。…そういう興奮状態や情緒不安定な状態は、この病気を悪化させてしまうらしいのだ。」
「よく…話がわかりませんけど。…つまり、この大昔から祟りだと呼んできたものは全て、…その病気の仕業だと仰るんですね？」
「そうだ。オヤシロさまの作った決まりは全て、この病気から村人を守るための決まりだったのだ。」
「……そんな…！　それじゃオヤシロさまは神さまではなく、…病気が正体なんですか！　そんなこと!!　古手家代々のご先祖さまたちに説明出来ますか!!」
「落ち着きなさい。オヤシロさまの信仰は変わらない。オヤシロさまが雛見沢を見守ってくださることに何の変わりもない。……オヤシロさまの祟りを再現する病気が、この村には大昔からあったということ、それだけなんだ。」
「そんなのは認められません!!　そんなこと、亡くなった先代や先々代に説明出来ますか!?　古手家数百年の伝統に対する、いえ！　オヤシロさまに対する冒瀆(ぼうとく)ですッ!!　そんなことをあなたに吹き込んだのは誰ですか？　失礼極まりない!!　第一、そんな変な病気が実在するという証拠があるんですか!!」
「…………ある！」

「それはどんな？　誰が！」
「厚生省と国立感染症予防研究所の方からだ。病原体もすでに特定され、現在、治療方法などを研究している最中だという。…先週、実際にその資料や標本などを見せてもらった。厚生省の方はこの病気を雛見沢症候群と呼んでいるらしい。」
「……そんな……!!」
「雛見沢症候群は、普通に生活している分には何も影響のない無害なものらしい。だが、雛見沢を遠く離れたり、精神や情緒が不安定になったりすると発病しやすくなるという。発病すると、妄想などに取り憑かれ、最悪の場合、発狂したりすることもあるらしい。……この病気は、戦争中に発見されたんだそうだ。戦地で雛見沢の兵隊だけ異常な病気を起こすことがあるのに偉い学者の先生が気付いて、研究がずっと進められてきたんだという。……その辺の話はだいぶ詳しくしてもらったんだが、…すまん。難しい内容だったので私の口からはこれ以上うまく説明出来ん。もし私の説明では納得出来んというなら、お前も直接話を聞いてみればいい。……私だって最初は、何を馬鹿なことを、オヤシロさまを冒瀆する気かと憤慨していたのだから。」
「………………。」
「その病気を研究するために、入江診療所が作られたというんだ。あそこは表向きはただの診

療所ということになっているが、実際は病気を調べるための隠し研究所らしい。」

「秘密で研究しているなんて、胡散臭いじゃないですか！　それも厚生省がやっていることなら、堂々とやればいいじゃないですか！」

「いや、そうはいかんらしい。例えば、ハンセン病の人たちが長い間誤解を受けて隔離され、今なおその誤解が解けきれず勘違いした差別を受けていることを考えなさい。…雛見沢の人間は皆、怪しげな病気に罹っていて、突然、発狂してとんでもないことをするかもしれないなどということが日本中に知れ渡ったら、大変なことになってしまうだろう。厚生省もそのことを反省していて、この病気については厳重に伏せた上で治療を目指すらしい。

勘違いするな、私たちを見世物にするというんじゃないぞ。この病気を根絶させ、この村を病気から解放しようとしているのだ。……自給自足が出来ていた大昔ならともかく、現代では村から一歩も出ずに生活などなりたたん。村から出るだけで発病するかもしれない病気など、村人にとってどれほど危険なものか、わかるだろう。……繰り返しになるが、昨今、反ダム闘争で村全体が強い興奮状態にあって、雛見沢症候群にとって、非常に良くない状態にあるらしい。」

「……もし村人がおかしくなって大変なことをしたら、きっとマスコミがパシャパシャでいっぱいなのです。」

「そうだ。そうなってからでは手遅れなのだ。」

「…………そんな。…いきなり言われても信用出来ませんわ…。本当に相手は国の人？　変な詐欺に騙されてるんじゃないですか？」

「信用出来んのも無理はない。……先方は研究所はいつでも見に来ていいと言っている。私はもう見せてもらっているが、あれは詐欺とかそういうレベルではない。……殻倉の大病院でもあんな大掛かりな設備はないぞ。………お前も、私の話に納得出来ないなら、研究所で詳しい話を聞かせてもらうといい。私よりもっと詳しく説明してくれるだろう。向こうは、研究所の説明でも納得出来ないなら、東京の国立研究所で説明してもいいし、厚生省の本庁舎で直接説明してもいいと言ってる。」

「…………………。…でも、信じる信じないは別にして、…それが私たちにどういう関係があるんです？」

「古手家は代々、オヤシロさまの血を受け継ぐと言われている。そして、八代続いて女子が生まれれば、その八代目はオヤシロさまの生まれ変わりであるとも。」

「……みー。」

「そうですわ。私が七代目。梨花が八代目。でも、それとその病気に何の関係があるというんです？」

「うむ。……この雛見沢症候群という病気は、ある種の寄生虫によるらしい。虫といってもものすごく小さい。人の目には決して見えんくらいに。……その虫たちには親分格がいるというのだ。」
「ま、…まさか、それが古手家だと仰るんですか!!」
「その親分格の寄生虫は、代々古手家の直系だけに受け継がれるらしい。つまり、…先代はお前。今は、梨花だ。」
「……みー。」
「ば、馬鹿馬鹿しい!! そんな話やっぱりおかしいですわ!? 大体ですね、寄生虫なんてそんな気持ち悪いもの!!」
「だから落ち着きなさい!! 私では説明が下手だ。専門の人に説明を受けなさい。そして、彼らが言うには、この病気の治療を研究するためには、親分格の研究が不可欠だと言うのだ。」
「嫌です!!! そんな怪しげな研究、まっぴらごめんですし、梨花だってそんな研究には関わりません!!」
「だから落ち着きなさいというのに!! 彼らの研究では、雛見沢症候群は、村から離れると発病するのではなく、親分格から離れると発病するということらしいのだ。……お前も小さかった頃、村人から神通力(じんつうりき)があると言われていたことがあるだろう? 遠方に出掛け、偏頭痛(へんずつう)など

にかかったお年寄りが、お前に祓ってもらうとたちまち頭痛が消えたという神通力。…それこそが親分格の証拠でもあるというのだ。古手の血には、発病者を救う力がある。それを研究するのは治療薬を見つけるためにも、とても重要なことなのだそうだ。」
「……ボクを研究すると、村のみんなが助かるのですか？」
「先方はそう言っている。」
「……その病気は村の全員が罹っているのですか？　ボクも？　みんなも？　沙都子も？」
「…うむ。村に住む人間全員だけでなく、興宮に住む親類なども全て含むそうだ。多分、何千人という規模になるだろう。それだけの大変な病気だから、厚生省がわざわざたくさんの予算を投じて専門の研究所を作ってくれたのだ。」
「わ、私は反対です！　梨花をそんな怪しげな研究の生贄にするだなんて!!」
「……ボクはいいのですよ。ボクが生贄で沙都子が助かるなら、全然平気なのです。」
「梨花は黙っていなさいッ!!　とにかく絶対反対です！　あなたにそんな妙なことを吹き込んだ人たちには、私が直接会ってはっきりとお断りをします。梨花を変な実験で殺されてたまるものですか!!　大体、梨花は古手家のたった一人の跡継ぎなんですよ!?　もしものことがあれば古手の血はここで絶えてしまうかもしれないじゃないですか!!　あなたはもっとですね、古手の家のことを考えていただかないと!!　そんなだから村の人たちに日和見主義とか何とか言

われて……!! 大体、おかしいじゃないですか!! 建設省は村をダムに沈める。厚生省は村の病気を治す。何が何だかさっぱりわからないです!!」
「厚生省は、この病気は環境の変化で大変発病しやすいと警告していて、建設省に対しダム計画を中止するよう働きかけてくれているそうだ。…だからお前も研究所を見せてもらいなさい。あれだけの大設備を、ダム湖に沈むかもしれない土地に建てるわけがない。」
「……くぁぁぁぁぁぁ…。」
梨花が大きく欠伸をする。
梨花のような少女には、もう堪える時間なのだろう。
「……ボクはもう寝ますです。……父さん、ボクはいつでも協力すると、その人たちに言っておいてくださいなのです。」
「り、梨花!! そんなこと私に断りなく勝手に決めちゃいけません!!! 梨花ッ! 待ちなさい梨花!!!」

◆谷河内の採石場

雛見沢症候群を研究する上で、実は一番最初に協議しておかなくてはならない重要な問題が

あった。

それは、女王感染者に万が一のことがあった場合に発生する、村の大崩壊についてだった。

これは祖父も論文の中で、もっとも危険な事態であると警鐘を鳴らしているものである。

祖父によるならば、もしも女王感染者が死亡するようなことがあった場合、急性発症の平均的時間から見て、四十八時間以内に一般感染者全員が末期発症するものと考えられていた。

これは一見するととんでもない話のように聞こえるが、世界中に伝わる怪しげな地方宗教の崩壊や集団自殺などを丹念に研究していくと、浮き上がってくる真実でもある。

世界の怪事件の中には、雛見沢症候群に類似したコミュニティを支配する寄生虫症によるものと思われるものがいくつも散見する。

…祖父はその中からさらに、雛見沢症候群に酷似しているケースを抽出し、さらに丹念に調査した。

その結果、教祖やリーダーの死亡を引き金に、コミュニティが暴走の後、全滅するケースを複数確認。

その平均時間が四十八時間以内であるとしたのである。

実際、一般感染者が女王感染者から何らかの影響を受けているのは間違いなく、女王感染者の健康状態が、村全体に影響を及ぼしているという統計的事実もある。

梨花が体調を崩し通院した週は、普段に比べて格段に多い通院者が出ることが、すでに統計でわかっているのである。
風邪程度の症状でこれだけ顕著な結果が出るならば、……もしも梨花の身に何かがあれば、四十八時間以内に大変な事態になることが考えられたとしても、決して逸脱した話ではなかった。
そのため、入江機関は雛見沢症候群を研究するという使命に匹敵する最大の任務として、女王感染者、古手梨花の身柄の保護を掲げる必要があった。
女王感染者の研究協力をすでに取り付けているが、もちろん間違って生命に支障があるような事態を招いてはならないし、…悪意ある何者かが彼女の存在を聞きつけ、殺害するようなことも防がなければならない。彼女の命は、村人二千人の命とまったく同じものなのだ。
それでも。……それでも何かの間違いが重なり、致命的事態として女王感染者の死亡を許してしまった場合。
……入江機関はその事態についても対応策を用意しておく必要があった。
そのため、入江機関設立の初期に私が緊急マニュアルの草案を作った。
もしも万が一。女王感染者が死んだり、あるいはその他の理由によって、一般感染者全員に急性発症が起こるような事態が発生した場合。

一斉急性発症の起こる四十八時間以内に執行しなくてはならない緊急措置。

…………被害を近隣に拡大しないための最終手段である。それが、自然災害を偽装したガスによる抹殺作戦…。

実際の作戦詳細については、私のクライアントであるアルファベットプロジェクトが全面的に担当してくれた。

核だの細菌兵器だのを研究する物騒なプロジェクトだけあって、実に手馴れたもので大変助かった。…私如き素人には、村人二千人を効率よく抹殺するプランなど提案出来ないのだから。

陸自は、雛見沢の上流にある谷河内地区にて、ダミー会社を経由して閉鎖された採石場を取得。

そこを抹殺作戦用機材の秘密備蓄基地とした。

人間を眠るように殺してしまう、危険な殺人ガスの装備が備蓄され、緊急マニュアル発動時には、これらを使用して、陸自の特殊部隊が村を抹殺するという手はずになっていた。

だが、村人を抹殺する装備を用意するという事実だけでも、政治的な危険が伴う。

それでもなお用意させようとするからには、クライアントたちに雛見沢症候群がどれほど危険な側面を持つか、抹殺作戦の必要性を理解させなくてはならないのだ。

私は彼らに抹殺作戦が必要であることを資料で示さなければならなかった。

そのためには、祖父が長いこと温め続けてきたこれらの資料は最高に役に立つことになった…。

クライアントたちは祖父の論文のコピーを読み、雛見沢症候群が最悪の場合、どのような大惨事をもたらすかについて衝撃を受けているようだった。

「……つまり、女王である一人の少女に何かがあれば、村人二千人以上が全員、錯乱するということなのですね…？」

「はい。雛見沢症候群に極めて類似するいくつかのケースでは、集団自殺を示すものが少なくありませんが、雛見沢症候群の場合、強い疑心暗鬼や過剰なまでの危機意識から、何かの過剰防衛を行なう可能性があり、被害は感染者二千人に留まらないものと推定されます。それらは無政府状態の暴動から始まり、猟奇的な、あるいは宗教的終末観にも似た異常な状況を作り出すでしょう。これに対する事前の鎮圧策を用意しなかった場合、世界の注目を浴びることは避けられません。また、その猶予は、事態発生から四十八時間しかありません。」

「…つまり、いざことが起こったらもう誰にも防げないということですな。」

「感染者全員を四十八時間以内に全員治療することは不可能なのかね？」

「無理だろう。それに治療方法すら確立していないし、研究所の規模では村人全員の救済は物理的に不可能だ…！」

「…しかし、このような恐ろしく珍しい病気があるとは…。世の中わからんもんですな。」
「常に最悪の事態に備えることは、国防にも通じますし、我々アルファベットプロジェクトの理念でもあります。そして、使うことが目的なのではなく、備えることそのものが肝要（かんよう）なのです。」
「確かに。仰るとおりですな。運用規定については決裁区分の強化などまだ検討したいところはありますが、最悪の事態に対応する準備が必要だということは理解出来ました。」
「都市沈黙戦の研究班に、雛見沢地区沈黙戦のシミュレーションをさせましょう。これは至急行なわれる必要があると思います。…こうしている間にも、女王感染者の少女が車にはねられて死んでしまう可能性だってあるのですから。鷹野三佐、ありがとう。また質問しますので、着席してくださって結構です。」
私の後ろ盾のひとりが、さり気なくプッシュしてくれたお陰で、ほとんど問題なく決着出来た。
ほぼ丸一日をかけての説明となったが、異論はわずか。
誰も祖父の論文を、そんな馬鹿なとといって批判したり、頭ごなしに否定したりはしなかった。
……今日、彼らに読ませている資料の中には、……あの日、偉そうな権威たちが、祖父の心

と一緒に踏みにじり足跡を残した屈辱の論文も含まれている。
にもかかわらず、ここにいる一同は誰もそれを馬鹿にせず、…足蹴にされたものを、しっかり手に持って読んでくれた。
それは一見、とても小さなことだが、……祖父の研究が初めて認められた瞬間でもある…。
私は、祖父の残した資料を手にしながら、時にその紙面を指差し、掲げながら議論を続ける彼らを見て、胸の内が満たされていくのを感じる。
……あぁ、私はこの日のために努力してきたのだと知った…。
天国のおじいちゃん、……この光景、見えてますか…？

◆神主の憂鬱

古手神社の境内の中にある集会所こそ、鬼ヶ淵死守同盟の本部事務所であった。
本来は閑静(かんせい)であるべき境内の中は、あちこちに「ダム反対！」と書かれたノボリが立てられており、まさに反ダム勢力の本陣であることを物語っている。
事務所内には、死守同盟の幹部たちが三十人以上、ぎっしりと座っており、今後の方針などについて熱心な意見交換をしていた。

集会所は古手家の敷地内にあるとは言え、村人共有の施設なので、使用時間は午後の九時までという規則が定められていた。

もちろん、議論が過熱すれば、それを超えてしまうこともあるが、基本的には会合は午後の九時で終えるのが流れになっていた。

もし話し合いが早くに終わってしまえば、午後の九時までは雑談をして過ごす。それが彼らの基本的な流れだった。もっとも雑談と言っても、ダム戦争の真っ最中であり、その内容は大抵、ダムに関わるもの。

……どこどこへ陳情に行って門前払いにされたとか、誰々が警察に不当逮捕されたとか、ダム現場事務所の対応が乱暴であるとか、そんなものばかりだった。

雑談のため、やや感情的な話も多く、そのためか、北条家に対する陰口も少なくなかった。

「…そしたらさぁ、回覧板(かいらんばん)捨てちゃったっとか言い出すんだよ！　普通に考えてそんなことするかねぇ⁉」

「あそこの奥さんはさ、チョイと頭のネジがイカレちまってんだよ。この間もさ、ゴミ置き場で牧野(まきの)さんとこの婆(ばぁ)さんとすんげー口論してて！」

「大体、何て言うかね。本当に粗暴(そぼう)だよね、あそこのご主人は。理性がないというか！」

「あぁ、お前さんは地元説明会の時を見てないのかい？　あれはすごかったよ、なぁ⁉　あそ

こまで言うからにゃもう村にはいられないよ。さっさと出てけばいいのにさ！　カネがもらえないのどうのこうの！　浅ましいったらありゃしないね！」
「いやいやいやいやいや！　理性のなさで言ったらあそこの奥さんも相当のもんだよ！　わははははは！」
「それでやっぱり遺伝なのかしらね！　あそこのお嬢さん、買い物によく見掛けるんで挨拶するんだけど、向こうから挨拶は絶対に返さないのよ？　だから私たち馬鹿馬鹿しくなっちゃって、以来、見掛けても知らないふりしてんだから。」
「それ言ったら、あそこの坊主も、いーっつも暗そうな顔してるよなー！　うっはははははは！」
いつの間にか、北条家は村の敵、裏切り者という図式が出来上がってしまい、北条家の陰口話なら、誰もが気軽に乗れる最大公約数的話題になってしまっている。
…この村で御三家、特に今や園崎家がどれだけの影響力を持つのか。
そしてお魎さんがどういう気性の人かを理解していたなら、ああいう喧嘩を吹っかけることは絶対にない。
北条夫妻とて村の住人。町会活動にそれほど熱心でなかったとはいえ、お魎さんがどういう人か知らなかったはずはない。

……それを公衆の面前で罵倒（ばとう）するようなことをすれば、必ずや何倍にもなって跳ね返ってくることが想像出来たはずだ。…にもかかわらず、一時の感情に任せて暴言を口にしてしまった。その意味で、今日の北条家の孤立は、気の毒だとするよりも自業自得だとする論調の方が強い。

…立ち退きで国と交渉したければ、水面下でこっそり個人的にやればよかったのだ。あのような場で堂々と口にしたこと自体が愚かしいと言えば愚かしい。

そういう意味でも、北条家に対して同情する者は少なかった。

あの説明会の大喧嘩のせいで、園崎家は北条家を目の仇にし、徹底的な攻撃を加え始めた。

…そのせいで、北条家以外にもいた立ち退き派は声を大に出来なくなり、自分もスケープゴートにされることを恐れて、渋々、立ち退きを諦めなければならなかった。

…そんな人たちにとっても、あそこで北条夫妻が軽率な喧嘩をしなければ、立ち退きの補償金をもらい損ねることはなかったのだと批判する声もあるという。

ダム反対派からも、元立ち退き派からも嫌われ、文字通り村で孤立を深める北条家…。しかも、北条夫妻は気性が荒く、嵐が過ぎ去るまで頭を垂れていればよかったものを、売られた喧嘩は買うとばかりに息巻いたため、わずかにいた同情する人たちもいなくなってしまい、…今や北条家批判に対し異論を挟む者はひとりもいない。

それは、この集会所の中のあちこちでされている陰口を聞けば一目瞭然だった…。

梨花は、湯飲み茶碗の後片付けを手伝っているが、その陰口はきっと耳に入っている。

……彼らが陰口を叩く内の一人は、梨花の友達の沙都子ちゃんでもあるのだ。…梨花がどんな思いでそれらを耳にしているか想像すると、胸が痛む…。

…古手神社の神主として、私はこれらを放置していていいのだろうか。

オヤシロさまは本来は、敵対する者すらも融和し仲を取り持つ縁結びの神さまだ。

相容れぬ存在である人と鬼が戦った時、天より降臨されて、その仲を取り持ったはず。

……その神社を祀る自分がこのような状態を放置していることは許されないのでは…。

私は、唾を散らしながら口汚く北条家批判をしているお魎さんの脇に座った。

「すったらん、だぁほが抜かしよるんよ、あのボケはッ‼ ならんしゃもあーもないんかいね、ほんまに恩を知らんやっちゃいな‼ あんの裏切者には絶対、オヤシロさまの祟りが下るんね、許されなかといな！！！」

そうだそうだと持ち上げる老人たち。

………これだけ気持ち良さそうに話しているところに割り込むのだ。穏便な話にはならないかもしれない…。

でも私は覚悟を決める。…古手神社の神主として。そして、梨花の友達である沙都子ちゃん

のために。
「……お魎さん。…北条さんの悪口を言うのはそろそろこれくらいにしませんかね…？」
「はぁあぁあ⁉　何ね、何ば言いよりおるんかいな…‼」
「…いや。北条さんもそんな悪気はなかったと思うんだが。あまりいつまでも尾を引くのは可哀想だと…、」
「しゃあらしいんね！！！　おんめ、あれを聞いちゃらどんなすったらん、思わんとね⁉　なぁんをしゃあらしい‼　あぁ、しゃあらしいしゃあらしい‼」
……お魎さんは園崎家当主。
鬼を継ぐ者だ。自分に敵対した者は絶対に許さない。
その耳に、もう許してやったらなんて言葉は届くはずもない…。
お魎さんたちは、もうすっかり激昂してしまい、話は聞いてくれそうになかった。
また、私は話の中で、ダム計画などその内なくなってしまうから、もう少し落ち着いたらどうか、ということを口にしてしまった。
……これは、入江診療所の人たちから、政府の裏側ですでに圧力が掛けられていて、ダム計画は近いうちに必ず中止されるのを聞かされていたからである。
それが、彼らには私が日和見的に見えたらしい。

…いつの間にか、私に対する批判も始まっていたようだった。

…この日以降、私はいつの間にか、日和見主義者の烙印をもらっていることに気付く…。

………鬼とて、話を聞いてくれる余地があるならば仲も取り持てよう。…だが、聞く耳を持たない人々の仲を、どうやって取り持つというのか。

すっかり彼らの機嫌を損ねてしまい、私は諦め顔で口をつぐむしかない…。

そんな私の背中に、そっと掛かる小さな手があった。

「梨花か。………もう遅い時間だから家に戻っていなさい。」

「………私たちがいくら努力しても、…届かない。」

梨花は遠い目をしながら、そう言った。

「……この澱みきった村の悪弊は、その澱みに住まう私たちにはどうしようもないのかもしれない……。でも、……希望をなくすものか。……今にきっと、…こいつらを打ち破ってくれる人がやってくる。今に、…きっと…。」

その目には、……古手の巫女にしか見えない未来が映っているようだった…。

◆バラバラ殺人事件

昭和五十四年初夏

「…はぁ…はぁ、……はぁ、……はぁ…！」
「………くそったれ、……やべぇよ、やべぇよ…。…監督…？　監督、……返事してくださいよ。……監督ぅ………。」
「あ、……あほんだらぁ…。し、死んでるに決まってンだろが…！」
がらん。……大きな音がして、全員は我に返ったようにはっとした。
誰かが、手に持っていたシャベルを落としたのだ。…そのシャベルの先端は、どす黒い血がべったりと染み付いている…。いや、それはシャベルだけにではない。…その場にいる六人の作業員風の男たち全員の衣服にも染み付いていた。
一人が、監督と呼び声をかける先には、全身血塗れでぴくりとも動かない無残な死体が転がっていた…。
「…監督ぅ……、……監督ぅ……、ううぅ…！」

「やっかましい…！　死んでるに決まってンだろ！　…仕方ねぇじゃねぇか！　正当防衛だろ、正当防衛…!!」

喧嘩の原因は、自分たちが事務所内でビールを開けているのを監督に咎められたからだ。

あちこちに飲酒禁止だの喫煙禁止だのと標語をべたべた貼りつけていた。そのルールを破る者には容赦のない雷が落ちたのだ。

確かにルールを破ったのは彼ら六人が悪い。

でも、住民運動の敵意に日々晒され、ストレスが限界まで溜まっていたからなのだ。

…だからつい監督を挑発するようなことを言ってしまった。表に出やがれ、と。他の人間も、やれやれと囃し立てた。

辛いばかりの工事で面白いことなど何もない。だから、つい喧嘩を囃し立てるように言ってしまったのだ。

せいぜい罵りあいか取っ組み合い程度を期待していた。

…だが、次第にそれはエスカレートしてきた。いや、…厳密には監督が異様に感情を爆発させだしたのだ。

……監督だって普段、住民のやかましい運動の矢面に立たされている。自分たちがストレスを溜めているように、…監督だってストレスが溜まってても当然なのだ。

でも、…それでも常軌を逸していた。
監督は初め、確かにシラフだったはずだ。
……でもどんどんおかしくなっていって錯乱状態になり、…それはまるで人が変わったようで、…いや、…まるで何か〝悪いモノ〟にでも取り憑かれたかのようで…。
後で囃し立てていた彼らでも、その異常な様子に酔いが抜けてしまったほどだった…。
そして……。監督はいきなり傍らのシャベルを拾い上げると、何の躊躇もなく口喧嘩の相手の頭を叩き割ろうとしたのだ。
…咄嗟に、転ぶように避けたから脳天で食らわずに済んだが、もし避け損なっていたら、絶対に頭をカチ割られていた。
そして、転がりながら避ける男に対し、何の躊躇もなくシャベルを何度も打ちつけた。
それを男は必死に転がりながら逃げる。
……この頃には喧嘩の次元を超えていることに気付き、囃し立てていた男たちは取り押さえに行った。
だが、監督はその男たちに対し、シャベルを振り上げたのだ。
振り上げられた男は、それを腕で×を作るような形で防ごうとした。
……縦に振り下ろされるシャベルを腕で防げるわけがない。

鮮血がほとばしり、苦痛のうめき声が漏れ出した。
この頃には誰もが理屈抜きで直感していた。…監督は普通じゃない。今の監督には何の手加減もなく、…もしこちらが防いだり避けたりしないなら、容赦なく脳天を割ってくる…！
シャベルを持つ相手に対抗するには、…いや、シャベルの攻撃を防ぐにはこちらも何か持たなくてはならない。
隙を見て一人が大型ハンマーを手に取った。…それを見て、他の人間たちも皆、得物（えもの）を手にするべきだと気が付いた。今の監督を取り押さえるには、得物が不可欠だと自然に思った…！
「……こんなつもりじゃなかったのにぃ…。…ぅわぁぁぁぁぁぁ…。」
監督の狂気が六人に感染するのは時間の問題だった。
…そして、取り押さえが、いつの間にかリンチにすり替わるのだって、時間の問題だった。
気付けば監督は血塗れの肉塊（にくかい）だった。
…顔面は腫れ上がり、肉や皮が削げ、頭蓋骨が覗いているのがわかった。…誰もが、すでに絶命していることを悟った…。
「ふ、ふざけんじゃねぇよ…!!　俺たちは殺されかかったんだぞ！　こいつが襲い掛かってこなけりゃ、俺たちだって反撃しなかったんだぞ!!　なぁ!?」
六人のリーダー格の、一番最初に口喧嘩を買った男が仲間に同意を求めるが、誰もが青ざめ

ていて、返事をしたりはしなかった…。

それが、…男には面白くなかったのかもしれない。

…自分が喧嘩を売った。他の仲間たちは後から加わったに過ぎない。……自分が主犯扱いなのだ。

だからこそ、自分がトカゲの尻尾のように見られていることに耐えられなかったのかもしれない…。

「い、いつまでもナヨナヨしてんじゃねぇ…!! 仕方ねぇだろ! 殺ッちまったもんは仕方ねぇだろ!! 俺たちゃな、もう殺人犯なんだよ!! 覚悟を決めるんだよ! まさかおめぇら、自首して懲役食らいてぇなんて思ってんじゃねぇだろな!? 冗談じゃねぇよ!! ムショなんかこの年で行ってられっかよ!! 隠すんだよ! こいつの死体を隠してスッとぼけるしかねぇんだッ!!」

……その男が、実は過去に暴行事件で執行猶予判決を受けていることを、何人かは知っていた。だから、…もし警察沙汰になれば、罪はこの件だけでは済まないのだ。

だからこそ、…顔を真っ赤にして、何とかこの状況から逃れようと喚きたてているのだ。

…もし、この場にいたのが監督と男だけだったなら、彼はこうまで息巻く必要はなかった。

…ただ冷静に、監督の死体を隠してとぼけるだけで良かったのだ。

だが、ここには彼も含めて六人いる。共犯という名の目撃者がいるのだ。
この内の誰かひとりでも良心の呵責(かしゃく)に負けて自首なんかしたら、それは自分にも及んでしまうのだ…。
「で、……でも、…死体なんか隠したって、…バレるよ、いずれ…。」
「それより…、正当防衛ってことでちゃんと主張して…、その、過剰防衛くらいで勘弁してもらぇねぇかな……。」
「甘ったれたこと言ってんじゃねぇ!! これだけズタボロに殺しちまってンだぞ!! 過剰防衛で済むかよ⁉ 親が見たって見分けがつかねぇくれぇに殺っちまってんだぞ馬鹿野郎ッ!!!」
「で、…でもよぅ…、どう隠したって、監督がいなくなったのは明日の朝にはバレちまうんだ。どうしようもねぇよ……!」
「どうしようもねぇのは、おんどれの頭じゃいボケぇッ!!!」
弱音を吐く男の頰を張り倒す。……いつの間にか、リーダー格の男の形相は鬼のようになっていた…。
「いいかボケども⁉ 俺たちゃな、殺人犯なんだ殺人犯!! グズグズ言ってりゃ、五年六年食らい込まれちまうんだよッ!! 俺らン中にひとり裏切り者がおってみろ!! 全員が捕まっちま

うんだよッ!!　懲役を舐めんな？　どうせ捕まる覚悟だっちゅうんなら、死ぬ気で逃げまくってやるんだ!!　年貢の納め時になったら好きなだけ覚悟決めりゃええんだ!!」

どんどん……、男の形相が鬼のようになっていく。

それは、ついさっきまで監督が浮かべていた表情でもある。……何かに取り憑かれたように豹変した監督と、同じものが彼に取り憑いたのではないか……。彼らは本気でそう思った。

思えば、…その表情はデモ活動で吼え猛るこの村の住民たちと同じ形相なのだ。

この村の本当の名前は鬼ヶ淵村なのだという。そして、そこには凶悪な鬼が住んでいたといい、人に乗り移ることもあるのだと。

……デモ隊がうそぶくそんな話を、今は本気で思い出していた…。

この形相がさらに行き着いた時、…監督はシャベルを振りかざして殺意を剥き出しにした。

………目の前の男もそうならない保証などないのだ。

実際、彼は得物のハンマーを握り締めたまま、ぎょろぎょろと睨みつけて威圧してくる。

……もし、誰かが一言、自首しようと口にしたなら。…多分、その男の頭を一撃で叩き割るだろう…。

「…そうだ。…………裏切り者を出さんためにな。いいこと思いついたわ。…へっへっへ。死体も隠しやすくなって一石二鳥だぞ…。」

「ど、………どんな手だい…。」
「へっへっへ…。この野郎の死体をな。………みんなで仲良く、この人数で割り算するんだ。」
「そ、……そりゃあ……、」
そんなのはまずいよ、と反論したかった。殺しただけでも重罪だ。…その上に遺体損壊までやるなんて、いくら何でもやり過ぎだ…。
…だが、反論したらこの場で殴り殺しかねない雰囲気だった…。だから、それ以上の言葉を喉から出すことは出来なかった…。
「全員でバラすんだ。この野郎が日頃言ってンだろ。共同作業だよ。全員、共犯だ。それで、バラした部品は各自が責任を持って隠すんだ。………な？　これなら全員仲良く主犯だろ？　へっへっへ、自分だけ罪が軽いから自首しようなんてズル抜けは許さねぇってわけさ。…へへへへへへ！」
「……う……………。」
五人は、もうその鬼気迫る形相に完全に飲み込まれ、……鬼ヶ淵村を支配する鬼の真の恐怖が背中を這い上がってくるのを、ぞわぞわと感じているのだった……。

◆生贄第一号

寝惚けるということは、こんなにも間近でけたたましく鳴る電話の音にも関心を示さないということらしい。
私はしばらくのまどろみの後、ようやくそれが電話の音で、このような時間に連絡を取りたがっている緊急性の高いものであることを理解した。
時計を見れば、深夜の二時。こんな時間に一体何事だというのか。
「………もしもし、入江です。」
「お休みのところ申し訳ございませんわ、入江所長。」
鷹野さんだった。
…彼女が私用で電話を掛けてきたことは一度もない。
…また、彼女は入江機関という組織においては私の次の序列者であり、事実上、機関運営を完全に任されている立場である。
……その彼女がこんな時間に電話を掛けてきたのだから、それはきっと相当不穏で、さらにその上、緊急性の高い事態に違いなかった。

「……遅くなりました。末期患者が出たというのは本当ですか。」
「ええ。生きた検体がほしいと思っていたら、本当に運良く。くすくすくすくす。」
私は最初、哀れな犠牲者を、彼女が強引な手段で誘拐してきたのではないかと思っていた。
診療所地下にある研究区画に、すでにその男は移されていた。
拘束台の上でもがき、暴れるその様は、抵抗というよりは錯乱状態に見えた。
口にする言葉は支離滅裂で、怒っているようにも悔やんでいるようにも、あるいは子供が駄々をこねているようにも聞こえた。
……一見して、普通の状態でないことは明白だった。
「…とにかく、麻酔で眠らせましょう。このままでは自分の舌を飲み込んで窒息しかねません。」
「もう少し状態を観察したかったのですけれど、仕方ありませんわね。」
白衣のスタッフがすぐに麻酔の準備をする。
正常な状態の人間であっても、このような怪しげなところへ連れ込まれ拘束台に縛り付けられたなら、少なからず暴れるはずだ。しかし、それを加味しても、この男のそれは異常なレベルだった。

……捕らえたのは山狗の小此木さんたちだろうが、よくもこのような状態を捕獲出来たものだと感心するほかない…。

彼女の説明によると、診療所からの帰り道に偶然、末期患者と遭遇したというのだ。

診療所に連れ帰って簡易検査をしたところ、陽性の可能性極めて大と判断した、とのことだった。

……もちろん、そんな都合のいい説明を鵜呑(うの)みにする気はなかった。

…でも、この男が末期患者であることは疑いようがなく、雛見沢症候群の研究を進める上で渇望(かつぼう)して止まない、生きた検体でもあった……。

「一体、この男は何者です…？」

「くすくす。あの男が持っていた新聞の包み。…中に何が入っていたと思います？」

「……う…、…これは何です……？」

ステンレスの皿の上に置かれた血塗れの新聞紙の包み。

べっとりと血が滲み出すそれは、開ける前から何かおぞましい物が包まれていることを想像させた。

にもかかわらず、鷹野さんは面白いもので驚かそうというような表情を浮かべる…。

「う……、これは、…ひどい……。」

そこには、血塗れの……、右腕が…。
拘束台の男にはちゃんと右腕がある。…ということは、この男のものではない。……では一体これは…?
医者としてこのような痛々しいものは多少は見慣れている。
……しかし、それでも目を覆いたくなるのは、あまりに暴力的で無残なその断面だった。
…とても医学的処方に則ったとは思えない、乱暴な切断方法。
…この右腕が、いかにして切り取られたか、その経緯を想像させるには充分な惨たらしい痕跡であった…。
「状況から考えて、この男が切り取った物と考えていいでしょうねぇ。くすくすくす。」
「……つまり、彼は近隣で起こった何らかの死体遺棄事件の犯人、ということですね。」
その時点では、この腕が何者のものなのか理解不能であった。
だがその翌朝、ダム工事の現場監督のバラバラ殺人事件が発覚し、その右腕が見付からないという情報が入り、この右腕の持ち主を知ることになるのだった…。
「この男、前科者だそうで、しかもその上、執行猶予期間中だとか。…にもかかわらず、また罪を犯してしまうなんて。それで殺人の発覚を恐れて遺体を隠そうと思ったのでしょうね。」
「…状況にもよるでしょうが、懲役数年で済むというものではなさそうですね。」

「くすくす。入江所長も、こんな社会の屑が相手なら、解剖に躊躇はないのでは？」
「………社会の屑がさらに犯罪を重ね、さらにその上、雛見沢症候群で凶暴化したのか。それとも、前科を悔いる善良な小市民が雛見沢症候群で凶暴化して罪を犯したのか、どちらかはわかりません。…前者ならともかく、…後者ならば彼には何の罪もありませんよ。」
それが雛見沢症候群の恐ろしいところだ。
……自らの人間性に問題があって行なった犯罪なのか、雛見沢症候群に駆られた末に犯した不幸な事故なのか、…区別が容易でない。
……いや、そもそも、その人間性の欠陥は何に起因するものなのか。
それこそが、入江が追い求めるところでもあった。
罪を憎み、人を憎まず。
……犯罪者は、懲役を与え懲らしめることでしか矯正出来ないのか。…もし、脳の疾患により犯罪に無意識に駆り立てられたのだったら、…それを治療することで、人は矯正出来る。
つまり、…この世には罪などなく、あるのは治療を待ち誰からも理解されない哀れな患者だけなのだ。
中世の時代には、脳に障害を持つ患者たちが、患者と理解されず、悪魔憑き呼ばわりされて、幽閉されたり処刑されたりした時代があった。…それから数世紀が経ち、今や彼らは治療を受

けるべき患者として認識されている。
………時代で認識は変わりえるのだ。
今、罪人と呼ばれて蔑まれ逮捕される人々も、数世紀後の未来には、患者として認められ適切な治療と人権が認められる時代が来るかもしれないのだ。
罪を、悪意でなく疾患で説明すること。
…これこそが入江のライフワークだった。
雛見沢症候群は、それを極めて端的に説明出来る奇病。…これを解明することは、入江にとって、極めて重要な意味を持つ…。それを解明するためには、………医学的生贄を必要とする。
それはとても罪深いことだが、………その覚悟なくして、解明はありえないことも理解していた。
…入江機関は初めからそれを前提としている。
私も所長就任を求められた際、その覚悟があるか何度も確認されているはずだ。
そして、……ようやくその機会を得た。…これは奇病研究の、極めて重要な第一歩になるのだ…。
しかし、………この期(ご)に及んで私には躊躇があった。
確かに、私は様々な手術で人の体を開いてきた。

…この男に施すのも、限りなく近い行為だ。…………だが、根本的に違う。

私が今までしてきたのは治療行為だ。

生かすためにやった。より良い将来が送れるよう、患者のためを思ってやった。

だがこれからしようとしていることは治療行為ではない。…彼を最終的には殺してしまう。

しかも、その死は人道的な見地からかけ離れる。

………生命を、摂理に逆らって無理やり維持しながら、…生きたまま脳を開いていくのだから。

「入江所長？　聞いてらっしゃいます？」

「…ぇ、……あぁ、すみません。もう一度お願いします。」

「解剖計画書を提出し、東京に応援を要請した方がよいかと思います。何しろ、単に生きてるだけでなく、末期症状を起こしている大変貴重な検体ですもの。慎重な解剖が求められますわね。」

「…そうですね。仰る通りです。そのようにしましょう。」

「それまでに数日の猶予があると思います。そこで、麻酔を解いていくつかの反応実験をしてみたいのですが。」

「……危険ではありませんか？　たとえ拘束を解かなくても、何が起こるかわかりません

よ？」
「ようやく手に入った活きのいい検体なんですもの。ただ脳を覗くだけじゃ勿体無いですわ。くすくすくすくす…。」
鷹野さんの妙なまでの浮かれぶりが、とても気持ち悪い…。
……だが、よくよく考えれば鷹野さんの反応の方が正しくて、…温度差のある自分の方がおかしいのかもしれない。
ここにいる目的は研究のためでしかない。
…ならば、初めての解剖の機会に、胸をときめかせるのが正常な反応に違いないのだ。
……にもかかわらず、私は躊躇が抜けきれずにいる。
自分の研究者魂はこの程度のものだったのだろうか。
医学を切り開いてきた先人たちが、その時代の倫理観をはるかに超えた勇気を示すことで、いくつもの偉業を成し遂げてきたというのに。
…何人もの脳を見てきた。手術をしてきた。…時には死に至らしめてしまったこともあった。
でも、自分は正しいことをしてきたのだからと、それを気に病んだことはなかった。
……後に、私のしてきたことが一切、否定されたとしてもだ。
気に病むくらいなら、そんな彼らの死を無駄にしないためにも、ますますに医学の道を邁進

するべき。
…それこそが医学の道を切り開く者の姿のはず。
なのに、……治療ではなく、解剖という名に変わっただけで、これほどまでに心が苛まれるものなのか。
…所詮、私は過去の偉人たちが切り拓いた道をなぞることしか出来ない器で、…自らその先を切り拓く力などないということなのか。
「…あら。どうなさいましたの、所長。お休みのところを無理に起こしてしまったので、ご気分が優れませんのかしら…？」
気遣うような言葉を掛けながら、………彼女はわかっている。
…私の心に迷いがあることを見抜いている。
…そしてそれが、未知の奇病を研究する第一人者として恥ずかしいことだと嘲笑っている…。
…………………軽く頭を振り、少しだけ残っていた眠気を追い払う。
私がどれだけの決意をして今日に臨んでいるかを思い出せ。
……私の手はすでに血塗れだ。だが、ここで立ち止まったら、その血は無駄なものになってしまう。…偉大なる研究のための礎にして初めて、その血を流してくれた人たちが浮かばれるんじゃないか…。

……もう一度だけ頭を振り、私は研究者としての魂を覚醒させた。
「いえ。考え事をしていただけです。…鷹野さんは東京との調整をお願いいたします。日程が決まりましたら教えてください。」
「ええ、了解いたしましたわ。……くすくすくす！　眠気も吹っ飛んでしまいますわね。」
私に出来るのは、せめてこの男の犠牲が無駄にならないよう、最高の仕事をするだけだ。
…もし血が流されるなら、…それは一滴たりとも無駄にしてはならないのだから。
私は、解剖について物騒な話をして盛り上がっているスタッフたちに、不謹慎だと一喝すると、所長室に戻るのだった…。

◆おやっさん

「………………………………。」
言葉など出ない。
…何かを口にしたいのだが、何を口にすればいいか言葉が思いつかず、…私はため息に似たものを吐き出す他ない…。
「あ、……大石(おおいし)さん！　探したんすよ!!　課長から手配写真の、」

「静かにせい！　ここは騒ぐ部屋ではないぞ。」
騒がしく飛び込んできた熊谷に、鑑識のじいさまがぴしゃりと言った。
「…す、…すみません。えっとですね、課長が容疑者の手配写真について、」
「……あー、…それ、小宮山くんに相談してくれませんかね。ちょいと私、じいさまと話がありまして。すぐに上がりますと上に言っといてください。」
「え、……ぁ、わかりました！」
熊谷は来た時と同じように、騒がしく検死室を飛び出していくのだった。
「賑やかな男だの。」
「おやっさんだったら、やかましいって言ってゲンコツのひとつも食らわしてるところです。」
「…お前さんも、少し上に戻った方がいいぞい。ここの空気は慣れんヤツには合わん。」
「そうですねぇ。あんまりサボってると、私もゲンコツをもらっちまいそうです。」
「……かっかっかっか。鹿骨界隈じゃ、チンピラも避けて通るお前さんを、ツモの切り方が悪いとゲンコツ食らわせられたのは、後にも先にもこいつだけだったろうの…。」
「容赦のない人だったなぁ……。ホントの親父よりゲンコツもらった気がしますよ。」
「ホントもウソもないわい。…お前さんがホントの親父だと信じてたなら、こいつもホントの親父だ。」

「…………………。」

私の本当の親父は、名古屋（なごや）で死んだ。

…運がなかった。

名古屋の工場への用事なんか仰せつからなければ、空襲に巻き込まれることもなかったのだ。

……もう半年ものらりくらりとやっていれば、終戦を迎えられたのだから。

当時の私は、もうしっかりとした成人だったから、…もちろん悲しかったが、母のように床に伏せて涙を流すほどには落ち込まなかった。

でも、……悲しさってのは、人によって違う。一気に押し寄せる人もいれば、いつまでもじわじわと苛まれる人もいる。…多分、私は後者だった。

生きている頃は、うるさい親父だとしか思わず、どうして徴兵から漏れたんだと心の中で悪態をついたこともあった。

自分でも、その程度のものだと思っていた。

そして終戦。

戦地から引き上げて来た人々が、駅で家族と再会するのをうんざりするほど見せ付けられ、

…その時、初めて知ったのだ。

あぁ、私は親父を失ったのが、悲しかったんだな、悔しかったんだな、と。

日本中に辛い人や悲しい人が溢れていた。私ひとりが辛い思いをしたなんて甘えるつもりはない。……でも、とてもとても悲しかったことを覚えている。

終戦を境に、国はがらっと変わり、警官であった自分を取り巻く環境も急激に変化した。私に出来ることは、日々の仕事に没頭して、忙しさで悲しみを忘れることだけだった。

「……当時、私ゃ闇米の取り締まりばかりやらされてましてね。鉄道主要駅で、旅客を抜き打ち検査するんですよ。そりゃあもうぞろぞろ引っ掛かりましたっけ。穀倉の辺りはこの辺じゃかなりでかい闇市が立ちましたからね。大阪界隈からはるばる買いに来てる連中も大勢いましたよ。」

戦争中、日本の食糧事情は致命的に悪化した。

そのため、国は食糧の公平な配給を謳い「食糧管理法」を制定する。だが、国の配給する食糧はまったく足りず、人々は日々の糧食を求めるため、非合法の闇市で高額な闇米を買い求める他なかったのである。

国が配給する食糧はまったくないのに、…あるところには唸るほどにあった。

それを法外な金額で売りさばき、一部の黒幕たちが濡れ手に粟のように荒稼ぎする時代でもあった。

…園崎家が財を成したのもこの闇市でだが、それはここでは割愛する。

国は、そんな黒幕たちを逮捕しようとはしなかった。黒幕たちは警察上層部に充分な鼻薬(はなぐすり)を嗅がせていたからだ。
……むしろ逆に、嫁入り道具を質に入れてまで闇米を買い求めた庶民の方を取り締まり、その米を没収していたのである。

「そんな時代もあったの…。どこぞの判事が餓死(がし)したなんてこともあったの？」
「ありましたねぇ…。闇米は一切食わないと公言した判事が餓死したのが、…昭和二十二年でしたっけ？　………酷い話でした。法律に従ってたら生きていけないことを、法の番人である裁判官が自ら示したんですからねぇ…。」
生きるために必死な庶民ばかりを次々に検挙する国に嫌気がさし、ある判事が、自分は今後一切、闇米を口にしないと宣言。……昭和二十二年に、まだ三十代半ばという若さで飢えて死んだ。
闇米を買うことは法律で禁じられている。でも、それでも闇米を求めなければ生きていけない。なれば、この食糧管理法は悪法ではないのか。これは、彼が命を賭(と)して訴えた必死のメッセージだったと伝えられている。
「……米の袋を抱えた連中を、次々と引っ立てて、駅脇の臨時の検問所に並べましてね。まる

で戦時法廷みたいな感じなんですよ。次々ポンポンと没収してひっ捕らえていく感じです。……ご婦人方はみんな泣かれるんですよ。その米を買うために、彼らは家財を売り払ってるんです。それを没収されたら何も残らないと。どうやって飢えた子供たちを食わせればいいのかと。」

「道理だな。それで、闇米を売りつけた側は取り締まらんのだから、庶民はたまったもんではないの。」

「皆さんも敏感でしてね。駅で検問があるかもしれないと察知すると、途中で列車から飛び降りたりして逃れるんですよ。…そういう連中も逃さんと、私たちは駅近くの、飛び降り名所に重点的に警官を配備してましてね。……何十キロもある米袋を抱えたご婦人をよく追っ掛けましたっけ。」

……おやっさんとの出会いはそんな中でだったと思う。

「いやぁ…驚きましたよ。…私の親父にね？　あまりにもそっくりだったんですよ！　私ゃね、てっきり、親父は名古屋の空襲を奇跡的に生き延びて、帰ってきてくれたんじゃないかって本気で思いましたよ。」

検問所から逃走した人間を追っていた。重い米を担いで逃げ切れるわけもない。

だから彼らは、米を抱いたまま捕まるか、家財を売り払ってようやく得た大切な米を捨てて逃げ延びるかを選ぶしか出来なかった。

……つまりどの道、警官に追われたら、家族に米を食わせることなど出来ないのだ。

もちろん私にも負い目はあった。闇米を買うのが生きるためにどうしても仕方がないことだとわかっていた。…だからせめて、米を捨てて逃げる人間は見逃すのが暗黙の了解だったのだ。

だから、…追いながらいつも思っていた。早くそれを捨ててくれと。捕まえたくない。…窮状(きゅうじょう)を訴える泣き声を聞かされたくなかったから。

そんな時、おやっさんが現れたんだ。…死んだと思った親父に瓜(うり)二つ。私は面食らった。

そしたら、その親父が突然、私の頭をゲンコツで小突いたのだ。親父に叩かれたら、大人しく頭を垂れるのが子供の役割だ。

でもとにかく、死んだと思っていた親父が生きていてくれたので、込み上げる嬉しさが抑え切れなかったんだ。

おやっさんは言った。見逃してやれと。

声を聞いてすぐに、親父ではないと気付き、私は警官への暴行の現行犯でしょっぴいてやろうと思った。だが、喧嘩慣れしてるおやっさんに、ようやく青二才に毛が生えた程度の私がかなうわけもない。

「…いやぁ、たっぷり説教をもらいましたよ。大通りの真ん中でぶちのめされた挙句に。なっはっは、普通に考えたら、そんなのに耳なんか傾けないですよねぇ？　でもあの時の私ゃどうかしてたんです。どうしてもおやっさんが親父に見えちゃって。大人しく言うことに耳を傾けることしか出来なかったんです。」

「まぁ、そこで小突いただけじゃなく、男の器量もきっちりと見せられたのが、こいつの大したところだったの。今時じゃすっかり珍しくなっちまった、古き良き時代の生き残りじゃった。」

いい年にもなって、私にはまだまだ親父が必要だったのだ。

酒を酌み交わし、男の器量を伝授してくれる目上の存在が、まだまだ必要だったのだ…。

だから言える。………私には親父が二人いた。

おやっさんは、間違いなく私の親父であり、兄貴であり、…親友だった。

……そのおやっさんは今や、頭部、胴体、両手両足をブッ切りにされ、…右腕が未だに見付からない。

男の義理も、酒の飲み方も博打(ばくち)の打ち方も教えてくれて、道を外れたらゲンコツで教えてくれたその右腕が、…未だに見付からない。

「…ホシの目星(めぼし)は？」

「ええ、もちろんついてます。…………おやっさんの右腕ももちろん取り返しますし、…この借りもきっちり返します。」
雛見沢を陰で牛耳り、ダム戦争と称する集団犯罪を煽り立てて来た、…園崎家。
私は心の中で宣戦布告する。…私の敵は、すでにはっきりしていた。

◆研究快調

休日の入江診療所の待合室に、古手神社の神主の姿があった。
もっとも普段着姿の彼は、神主というよりも、古手梨花の父親という方がより相応しかっただろう。
娘の検査が終わるのを待っているのだ。
そこへ入江と鷹野が戻ってきた。
「古手さん、お待たせしました。今、最後の検査を終えたところです。もうすぐ戻って来ると思います。」
「娘が村のために役に立てばいいのですが…。」
「とんでもない！　梨花さんの協力は村を救うことにもなります。お陰でようやく治療方法に

も目処がついてきたところです。仕組みはまだ調べているところですが、梨花さんの存在がやはり、村人にとってとても大切なものであることがわかってきました。レベルの進んでしまった一般感染者は、自力ではそのレベルを下げて症状を安定させるのが非常に困難です。ですが、女王感染者に接近することで脳内にある種の物質が作られることがわかっています。その物質には鎮静効果があり、また、進んでしまった症状のレベルを抑え回復させる力もあるようなのです。この物質を処方出来るようになれば、治療の強力な決め手となるでしょう。」
「そうですか。……梨花にそのような力が。」
「くすくす。驚かれるには値しないのでは？　古手の巫女には荒れた心・鬼を鎮める神通力があると代々伝えられているんではありませんでしたっけ？　私たちが解明しなくても、村の数百年にわたる歴史はすでにそれを知っていたわけですわ。」
「そうですね。……大昔の方の聡明さは、時に現代医学から見ても感心させられます。」
入江と鷹野は、梨花の献身的な協力が、奇病究明にこの上なく役立っていることを訴える。
そこへ、パタパタパタという早足な足音が近付いてくる。梨花だった。
「……みー。検査が終わったのです。」
「梨花、大変だったな。疲れただろう。これで自動販売機でジュースを買ってきなさい。」
「……み〜！　血をいっぱい抜かれたから補給なのです。」

梨花は神主から百円玉をもらうと、表へ飛び出していった。
「……本当に、梨花さんの協力のお陰です。彼女がこれほどまでに献身的に協力に応じてくれなければ、これほどまでに研究が進むことはありませんでした。」
「梨花は、自分の友達もその病気に罹っているということを気にしていて、友達のためにも協力したいと常に言っていました。……どうか先生方、梨花の心意気を汲んでやってください。」
「もちろんです。毎週日曜日に貴重な時間を割いていただいているのです。必ずや成果にして見せます。……今後も梨花さんに過酷な実験を強いることがあると思いますが、どうかお許しいただければと思います。」
「彼女に危害を加えることは絶対にありませんわ。彼女はとてもとても大切な身なのです。……くす、何しろオヤシロさまの生まれ変わりなんですから。」
「……大昔の村人は、どのようにしてこの病気のことを知り、古手家にその女王の血が流れていることを知ったのやら…。……ご先祖さまたちにはつくづく頭が下がります。」
「……それで、実はまた辛いご協力をお願いしなくてはなりません。……彼女の脳脊髄液(のうせきずいえき)の採取のご許可をいただきたいのです。また、…場合によっては彼女の頭蓋に孔(あな)を空け、直接頭部の中を検査させていただくことになるかもしれません。」
「ず、頭蓋骨に穴、ですか……。」

「もちろん安全性には最大限注意します。梨花さんはたった一人しかいない女王感染者なのです。間違っても危害を加えることがないよう、私どもでもっとも安全な方法を模索した上で提案させていただいています。」
「もちろん、梨花ちゃんは女の子ですもの。頭部穿孔周辺の頭髪には気を遣いますので、丸坊主にしてしまうようなことはありません。ただ、経過を慎重に見るために、しばらく入院をしてもらうことになりますが。」
「もちろん、その間、面会謝絶ということはありません。検査にもぜひ立ち会ってください。お父さんが身近におられた方が梨花さんも安心するでしょう。」
「…………その検査はどうしても必要なもので、…絶対に安全なものなのですか。」
「脳脊椎液の採取も頭蓋穿孔も、どちらも百パーセントの安全を保障することは出来ません。常に一パーセントの危険があります。また、梨花さんに身体的、あるいは精神的苦痛を与えるでしょう。……いくら重要な検査といえども、ご家族の同意なしには行なえません。」
「…………………。」
「梨花ちゃんには、実はもう同じ話をしていますわ。」
「……梨花はなんと？」
「自分は構わないと、それはもうあっけらかんと。くすくす。」

「…梨花さんには危険や苦痛が伴う可能性があることをもちろん充分に説明しています。ですがやはり、保護者の方の承諾をいただかないわけにはいきません。」
「………梨花は、自分のことを本当にオヤシロさまの生まれ変わりだと信じている時があります。……だから、村人のために自分の身を捧げるのが、自分の義務だと思っているところがあるのかもしれません。」
「……立派なお子さんだと思います。」
「一応、家内とも相談させてください。納得はしてくれてるのですが、…やはりことがことなので、話をしないわけにもいかない。」
「えぇ、ご家族の同意は不可欠だと思います。よくご相談なさってください。」
「その検査は、病気の根絶のために重要な意味があるのですね…？」
「はい。雛見沢症候群のベールを剝ぐ決定的なものになるでしょう。」
「決定的なものの第一歩に、ですわね。」
「……すでにご説明しておりますように、…女王感染者に万一のことがあった場合、感染コミュニティに致命的な崩壊をもたらす危険性が予見されています。…平たく申し上げると、村人全員が突如として末期発症を起こす可能性もあるということです。」
「えぇ。急性発症の平均から見て、女王感染者死亡から四十八時間以内に全感染者が末期発症

を起こします。それだけは絶対に防がなくてはなりません。」
「………梨花が死ぬようなことがあれば、…村中が発狂し、恐ろしいことに…。」
「はい。それを防ぐのも私たちの役目です。そのために危険を冒さなければならないのはとても皮肉なことですが、……根絶のためには避けて通れない道だと思っています。」
「……入江先生。……必ず、その検査を成功させていただけますか…？」
「ですから、医学には百パーセントや絶対などという、」
「えぇ。」
曖昧な言い方をする鷹野を制して、入江が真剣な表情で頷きながら言った。
「私、入江京介が命をかけて、必ずや。梨花さんを救います。村人も救います。絶対にです。」
「……わかりました。家内と相談させてください。…その上で後日、改めてお返事させていただきます。」
「はい。よろしくお願いいたします。」
ジュースを買ってきた梨花が戻ってくると、入江たちはその話を止めた。
梨花がジュースを飲み終えるまでを雑談で過ごすと、二人は頭を下げ、帰宅していった……。
「くすくすくす、あっはははははははは…。」

梨花たちが帰った後、鷹野は奇妙な声で笑い出した。
「どうしましたか？　何か愉快なことでも…？」
「くすくす…。いえいえ。………患者とご家族に律儀に事前承諾を取られていたのが、何だか可笑しくって。」
「……梨花ちゃんには、本来無用の苦痛を強いています。それくらいは最低限の礼儀だと思いまして。…………去年の男も、正常な状態にあれば、事前承諾を取りたかったところです。」
「入江所長は、ここの研究を始められてからずっと、罪の意識に苛まれているのではありませんか？」
「…………それはどういう意味ですか？」
鷹野がからかうような口調なのはいつものことだが、…少しだけその度が過ぎたように感じ、入江は不快感を示しながら足を止める。
「雛見沢症候群の研究は、生きた検体を捌くことでしか進められない。それがわかってなお、あなたはこの研究を進めることに罪の意識を感じている。」
「……罪の意識は必要です。殺人であれ解剖であれ、相手に死を強いる点で変わりません。私たちはその罪を受け止めてなお、その死を無駄にしないために最大限の努力と研究を重ねなくてはなりません。」

「ご高説ですわね。くすくす。……では入江所長？　あなたはこれまで、人の脳を切り取ることに何度の事前承諾を取られたというんですの？」

「…………………………ぅ。」

…それは鷹野には知られていないと思った過去。

「あなたの、人の罪は脳の疾患によるものという独り善がりで、一体何人の患者が事前承諾なく脳を切除されたんですの？　くすくす。」

「…………それは、」

「常識は時代で変わる。当時は医者が治療をいちいち説明することなどなかったし、事前承諾なんて大したものではなかった。だから、当時のことは気にしなくていいんじゃないですかしら？　今は倫理上問題があっても、当時は問題なかった。ならばいいじゃありませんの。くすくすくす。……でも、それに罪を感じているから、梨花ちゃんや、あの男にさえも、事前承諾が取りたかった？」

「それは誤解です…。そもそも治療と解剖では患者、」

そこで入江の言葉を断ち切るように、鷹野が静かな凄みを浮かべて顔を入江に近づける。

……鼻と鼻が触れ合うくらいの間近で、鷹野は静かに、…だけれども普段とは違う声色で言った。

「ねぇ坊や。あなたが欲しいのは事前承諾という名の免罪符。そうでしょう？　あなたが欲しいのは、過去の罪を贖いたいという心を満たすだけの欺瞞、そのためだけの免罪符。後悔しているならば二度と脳に関わらなければいい。なのに、だらだらと後悔しながらあなたはいつまでも未練がましくこの世界で脳に関わっている。その罪の意識が本物なら、あなたはあの時、所長就任の話を断ればよかったはず。そうでしょう、坊や？」

「……とても不快です。私は失礼させていただきます。」

「聞きなさい。医学は常にその時代の倫理や価値観との戦いから勝ち取られるの。かつて高野先生が雛見沢症候群の存在を予見した時、その時代の権威たちは自分たちの無知を棚に上げその先見性を嘲笑った。でも病に倒れる直前まで研究を捨てなかったわ。必ず自分がいつか評価される日が来ると信じて。そしてその日が自分の死後であったとしても、必ず来ると信じて！　それは強い信念と揺るぎのない鉄の意志があるから成し遂げられること。そうでなければ時代の無理解に高野先生は屈していたはず。研究はね、意志の力で成し遂げるのよ。絶対的に強固な意志だけが、結果を紡ぎだす！　でもあなたにはそれがない。あなたは自分の実績を、誇るべきか恥じるべきかすら自分で決めかねている臆病者よ。そんな中途半端な覚悟で、よくこのような研究所の所長を引き受けられたものね…！　血塗られた両手を、さらに血に浸すことでしか明かせぬ研究だと、最初からわかっていたはずなのに!!」

「…………………否定はしません。私は、中途半端かもしれない。」

「ならば所長を辞任なさっては？　守秘義務は残るでしょうけど、あなたはこれ以上、罪の意識に苛まれなくて済むでしょう。私にとってあなたはパートナーである以前に、クライアントが要求した人事上の駒でしかない。こうして研究機関が成立した今、あなたの存在はもう重要ではないの。…しかもその上、研究に対する覚悟が足りず、研究のパートナーとしても役立たずなら、あなたは無能の用無しよ。私は一人でも研究をやめない。どんな罪も後悔も恐れない。強固な意志だけが未来を紡ぐ。…かつて高野先生が高潔な精神で成し遂げたように、私もたったひとりでも成し遂げてみせる…！」

「…………立派な決意だと思います。…ですが、私にもあなたに及ばないにしても、わずかの決意があってここへ来ています。…そして、あなたの言う通り、私の手はすでに血に塗れています。そして雛見沢に来て、さらに血に浸しました。……だから、その責任を全うするまでは、私は逃げることは出来ません。……相変わらず私は罪を清算出来ず苛まれ続けるでしょう。でも、逃げない。…必ず雛見沢症候群の研究を決着させます。それだけが、この研究に命を捧げてくださった方、そしてこれから捧げることになるかもしれない方への最後の誠意だと思っています。」

いつの間にか入江の表情にはある種の決意が浮かんでいた。

ほんの少し前まで、鷹野に思い出したくない過去を指摘されていた時のうろたえた様子とは違う。
しばらくの間、その意志の強さを目で示した後、入江は踵(きびす)を返す。
「……恐らく、梨花ちゃんの検査は承諾が取れるでしょう。準備をお願いします。」
「ええ、心得ましたわ。………所長。」
翌週、その承諾は得られた。

◆定期監査

スライドによる説明が終わり、会議室に灯りが点くと、監査スタッフたちは誰からともなく拍手を始め、入江機関の劇的快挙を讃えたのだった。
「素晴らしい、実に素晴らしい！　本音を言わせてもらえば、私はこの雛見沢症候群の研究はあまり期待していませんでした。仮に進むとしても十年単位で三歩進んで二歩下がるような研究になると思っていました。」
「いやいや！　それがこれだけの短期間の間にこれだけの成果を挙げられるとは！　入江所長の努力と指導の賜物(たまもの)です！」

「そんなことはありません。私を支えてくださる優秀なスタッフと、そこの鷹野さんのお陰です。」

次々に浴びせられる賞賛に、入江は謙遜的な返事と笑顔を返した。

鷹野もまた、入江に賞賛の言葉を掛ける。

「ご謙遜を。くすくすくすくす。やはり脳に関しては入江所長は天才ですわ。何しろ、脳に関しては誰も及ばない実績をお持ちなのですから。」

「そうですなぁ！　あなたと同じ歳の医者で、あなたほど大勢の脳みそをご覧になってきた方はおりますまい！」

鷹野の賞賛に、監査スタッフの何人かも便乗して褒め称えるが、入江はそれを固辞するように曖昧に笑うのだった。

「おめでとうございます、入江二佐。私もこれで東京に胸を張って報告に帰れます。」

「富竹さんによいお土産が持たせられて光栄です。あと、二佐というのはご勘弁を、どうしても馴染めませんので…。というか、リサさんって聞こえるんですよね。」

「あっはっはっは！　まるで女性の名前みたいに聞こえますねぇ！」

「くすくす。でも、ジロウさんも陰の立役者ですわね。なかなか成果の出せない私たちの予算を、ジロウさんが懸命に努力して維持してくださったお陰ですわ。」

「いや、…はっはっはっは…！　でも、今回の成果は劇的です。雛見沢症候群の病原体を特定し、今後の研究計画に具体的道筋をつけることが出来ました。以後の進捗監査がとても楽しみになります。これだけの成果があれば、東京はねちっこく予算を削減しろとは言いますまい。」
「くすくす。何しろ、皆さんにお出ししている缶コーヒーの予算まで削られそうになったんですものねぇ？」
「「どわっはっはっはっはっは！」」
「富竹くん、東京にしっかり報告して祝杯が上げられるくらいの予算はつけるよう具申してあげなさい。」
「ムチばっかりではいかんね、アメもないとね！」
「ははははは、そのアメは予算で還元していただけると一番嬉しいのですが。」
「「うわっはっはっはっは！！！」」
普段は予算を厳しく監督する彼らも、劇的な進捗に今日は上機嫌なようだった。
そんな和気藹々とした雰囲気の中、定期監査は終了した。
監査スタッフに混じっている国立研究所の人間たちは、入江を取り囲んで質問攻めを続けていた。
「鷹野さん、おめでとう。みんなの前では言えないけれど、今日の成果は全て鷹野さんの積み

重ねによるものだよ。」
「くす。ありがとう、ジロウさん。」
今この場にいる人間の中には、入江機関設立を巡って黒幕たちが人事で暗躍していたことを知るのは鷹野と富竹しかいない。
……だから、富竹だけが鷹野の苦労をねぎらってくれた。
「でも、これでようやく研究の舞台に立てたというところね。私の挑むべき相手がようやく同じ土俵に上がってくれただけ。正念場はこれからよ。そして、ここからがもっとも楽しいところになりそうだけれど。」
「あはははは。それでね、今回の件で中川本部長の方から、ぜひ東京で報告会をしてほしいと伝言を託（ことづか）ってるんだ。アルファベットの理事会も、ぜひ君と会合を設けたいって言ってたよ。みんな君に直接話を聞いてみたいようだねぇ。」
「あらあら、ジロウさんを経由した報告じゃあ物足りないのかしら？」
「いや、あっはっはっは！　そ、そういう意味じゃないとは思うけどなぁ…！　き、きっと噂の美人研究員を直接見てみたいんじゃないかなぁ、なんて、あっはっはっは…！」
「あらいやだ、ジロウさんったら。くすくすくす。」
「失礼します。鷹野三佐、東京からお電話です。」

鷹野は、電話の相手を知り、その電話を所長室の内線電話に回してもらった。
「お待たせしました。鷹野です。」
「お～～～、元気にやってるかの～!?」
「こ、小泉先生!! わざわざお電話をいただけるなんて、とても恐縮でございます……!」
「わっはっはっは! いやぁな、三四ちゃんの研究が大金星を挙げたという話が来てなぁ～。お祝いを言おうと思って電話したんだ。」
「ありがとうございます…!! はい、お陰様で研究の第一段階であり、最大の目標でもあった雛見沢症候群の病原体特定に成功しました。」
「ん～～ん～～、そうかそうか～!! ついにやったなぁ、三四ちゃん。天国で高野くんもきっと大喜びしているだろうの!」
「まだまだですわ。祖父は、雛見沢症候群の病原体特定などという段階を超えて研究していました。人の思想や意志が、実は人以外の寄生的存在によって支配されていた可能性。…それを暴いて初めて祖父の研究は偉業と讃えられるのです。くすくす。世界中の思想や宗教が、全て寄生虫で説明出来たなら、くすくす、世界は引っ繰り返るくらいの大騒ぎになるでしょうね。」
「わっはっはっは。それは愉快だの～!! 偉そうに振舞っとる宗教家連中が、単なる寄生虫の

親玉に過ぎんと立証されたら、それは本当に愉快だろうの～！　ぜひ、そんな愉快なのを見せてくれ。三四ちゃんがそれを見せてくれるまで、私ゃ天国のお迎えを断り続けてるからな。」

「縁起でもありませんわ。でも楽しみにしていてくださいね。きっと、世界中があっと驚く発表をしてみせますから。その時に初めて、世界中が祖父の偉業を知り、祖父が残した資料を奪い合って読み合うことになるでしょう。……そこまで至って、私はようやく祖父への恩返しを終えるのです。」

「……高野くんが羨ましいの～。私ゃな、カネなんかこんなにいらんかった。この半分は捨ててもいい。あんたみたいな、自分の志を継いでくれる孫がひとりいてくれたらと思うよ。」

「ありがとうございます。身に余るお言葉です。」

「あとな、小泉のおじいちゃんからのプレゼントだ。三四ちゃん宛てにな、祝杯用のワインを一本送らせた。三四ちゃんの家の住所がわからんかったから、診療所宛てにしてある。取り寄せに時間が掛かってるらしいからちょっと遅くなるかもしれんが、届いたら、三四ちゃんの研究を手伝ってくれた人たちを集めて、それを振舞ってあげなさい。」

「祝杯用にワインなんて。はてさて、小泉先生からどんな高級ワインが届くやら！」

「そんな高級酒と違う。三四ちゃんも覚えとらんかね。高野くんが、いつも一本のワインを大切にしておったのを。」

……鷹野ははっとする…。

そうだ。祖父は一本の古いワインをとても大事にしていた。買った物なのか、もらった物なのかはわからないけれど、とても大事にしていて、自分の研究が認められたらそれを開けようと日頃から言っていた気がする。

当時は幼かったから、それが何というワインなのかわからないけれど、…その話を聞いていた小泉氏なら知っているはずだ…。

…その、祖父縁(ゆかり)のワインを、この記念すべき節目に贈ってくれるその心遣いに。

……鷹野は久し振りに、祖父と一緒だった頃に感じていた日溜りのような温かさを感じるのだった。

「ありがとうございます…。……小泉のおじいちゃん…。」

「うむうむ。やっぱり三四ちゃんにはそう呼ばれた方がしっくりくるの〜！　どうも三四ちゃんに先生と言われても自分のことだと思えなくてな！　わっはっはっは！」

自分まで一緒に苦笑いしてしまう。

ついさっきも、富竹と入江がそんなやり取りをしていたように思うから。

「そう呼ばれる方がお好きでしたら、人前以外ではそう呼んでも結構ですわよ。くすくす。」

「う〜〜む、できれば人前でもそう呼んでもらえると喜ぶんだがの〜！　わっはっはっは。」

今年でいくつになるんやら。未だにこれだけ快活にしゃべって笑うことが出来るなら、お迎えなんか当分来ないだろう。…何とかは長生きするというのはどうも本当らしい。
「私も髙野くんも、三四ちゃんのような子が本当の家族だったらと思うよ。本当になぁ…。」

……祖父にももちろん、家族はいた。
だが、研究に打ち込むあまり、別居状態になり、籍だけは残している半離婚状態にあった。
その家族とは私は少女時代に一度も会ったことはない。…会ったのは、祖父が自殺してからだった。晩年の祖父は心が弱っていて、自分の人生について非常に悲観的だった。
さらに急激に進みだした呆けにショックを受け、自分の意識が次第に薄れていくのを恐れていた。
そして……、病院の屋上から飛び降りて死んだ。
遺書にあった名は私だけ。
そこには実の家族の名などなかった。
その段階になって初めて家族や親類と称する一団が現れ、祖父の残した全てを奪い去っていった。
連中は、私に遺産が持っていかれるのを非常に嫌がっていたっけ。

弁護士やら何やらを立てて嫌らしく争ってきそうな雰囲気だったので、私から辞退したのだ。
その代わり、祖父の書斎に残した物だけは全て引き継ぎたいと言った。
凡庸な連中は祖父の研究の価値など知りもしない。書物の山や気持ち悪い標本瓶を片付けてくれた上に相続権を放棄してくれるならと大喜びで手を打ってくれたっけ。
あれだけの長い間、一度も祖父の前に現れず、その死後にだけ現れるハイエナのような連中に、……祖父の魂である研究を、たとえメモ一枚とて許したくなかった。
だから祖父の魂は、連中にわずかほども穢されずに済んだのだ……。
「うむ。それでは長くなると悪いからこれで切るな。困ったことがあったら、いつでもおじいちゃんに頼りなさい。孫娘のために、いくらでも一肌脱ぐからの〜！」
「ありがとう、小泉のおじいちゃん。三四はもっともっと頑張りますね。」

〈ひぐらしのなく頃に解　第四話〜祭囃子し編〜　中巻に続く〉

本書は、２００６年発表の同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に解　祭囃し編』のシナリオをもとに著者である竜騎士07氏自らが全面改稿し、小説化したものです。

ILLUSTRATION　ともひ
BOX&BOOK DESIGN　Veia
FONT DIRECTION　紺野慎一（Toppan Printing Co.,Ltd）

本文使用書体
本文：FOT-筑紫明朝 Pro L　A-OTF フォーク Pro R　凸版明朝V2 Pro W7
見出し：FOT-筑紫ゴシック Pro D

著者紹介

竜騎士07

1973年生まれ。同人ゲーム作家、小説家。2002年夏、コミックマーケットで同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編』を発表。以来、夏と冬に1作ずつ『ひぐらしのなく頃に』シリーズ新作を精力的に発表し続け、まんが、アニメ、コンシューマー・ゲームなど、様々な他メディアを席捲する一大ムーブメントを作り出す。2007年8月、最新シリーズの『うみねこのなく頃に』を満を持して送り出す。小説の単行本化は、本作が初となる。

Illustration

ともひ

1983年生まれ。まんが家、イラストレーター。魅力的なキャラクターのみならず、奥行きのある妖しくも美しい背景を描く。竜騎士07たっての強い希望で、新人ながら、本作『ひぐらしのなく頃に』シリーズのイラストを担当することになる。ウェブサイト「古街」(http://furumati.com/)を運営。

講談社BOX

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解　第四話～祭囃し編～(上)　定価はケースに表示してあります

2008年11月4日 第1刷発行

著者 ── 竜騎士07

発行者 ─ 野間佐和子

発行所 ─ 株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号 112-8001
編集部 03-5395-4114
販売部 03-5395-5817
業務部 03-5395-3615

本文データ制作 ─ KODANSHA BOX DTP Team

印刷所 ─ 凸版印刷株式会社

製本所 ─ 株式会社若林製本工場

製函所 ─ 株式会社ナルシマ

ISBN978-4-06-283688-3　N.D.C.913　310p　19cm


tasy Within
KODANSHA BOX
ゴッド・オブ・ミステリー
島田荘司のみに許された、
余人の想像を絶する超展開が
"あなた"を待つ!
Illustration by
SHIROW MASAMUNE
格ミステリ史上No.1の奇跡!
リブート
再開!
イヴ戦記」
リ刊行開始!
士郎正宗



Classical Fa
2008
全12巻、超弩級のファンタジー・ワールド×
第二部、
「アル・ヴァジャ
2008年10月よ
島田荘司

叩かれない新人にデビューする価値はない。新時代を創るのはいつだって、前時代に叩かれた新人だけなんだ。

講談社BOX部長 太田克史

IMPORTANT

SPOT THE SHVIE

We are launching the world's greatest br "KODANSHA BOX". Novel, comic, nonfic no one kn what w pop ou

取扱注意 危険な新人、あります。 Produced by KODANSHA BOX

来襲（デビュー）！

VS





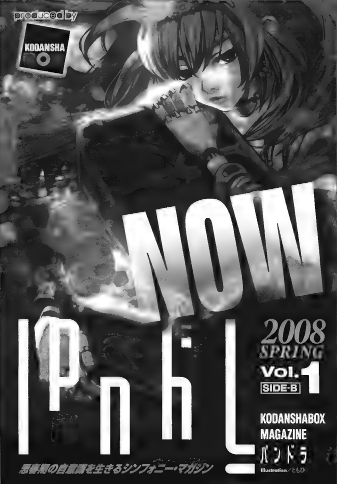
針谷卓史
花散里
Illustration／[illegible]

これこそが針谷マジック。この小説は、そんなマジックにかかってみたい方におすすめの「針谷入門本」です。——阿部真大

DANGER DA

KODANSHA BOX


produced by KODANSHA BOX
ON SALE
2008 WINTER
Vol.1
SIDE-A
KODANSHABOX
MAGAZINE
パンドラ
思春期の自意識を生きるシンフォニー・マガジン
Illustration／ともひ


produced by
KODANSHA
NOW
2008
SPRING
Vol.1
SIDE-B
KODANSHABOX
MAGAZINE
パンドラ
Illustration／ともひ
思春期の自意識を生きるシンフォニー・マガジン


2008
AUTUMN
NOW ON SALE
Vol.2
SIDE-A
KODANSHABOX
MAGAZINE
パンドラ
SURVIVAL ISSUE
思春期の自意識を生きるシンフォニー・マガジン
produced by
KODANSHA
BOX



ひぐらしのなく頃に解

KODANSHA BOX

竜騎士07

Illustration ともひ

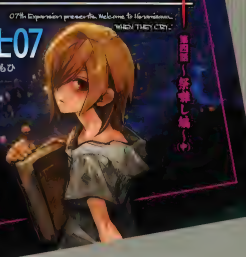
ひぐらしのなく頃に解

第四話～祭囃し編～（上）

「全員の力が集まった時にのみ、奇跡は起こります。
そして、その全員には、あなたも含まれているのです。」



KODANSHA BOX
ひぐらしのなく頃に解
07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa
"WHEN THEY CRY"
竜騎士07
Illustration／ともひ
第四話～祭囃し編～(中)
KODANSHA BOX
ひぐらしのなく頃に解
第四話～祭囃し編～(中)
竜騎士07
KODANSHA
リA-15
"神への怨念が雛見沢を最後の恐怖に導く!
KODANSHA BOX



KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa. "WHEN THEY CRY."

竜騎士07

Illustration／ともひ

第四話～祭囃し編～(中)

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

第四話～祭囃し編～(中)

竜騎士07

KODANSHA UA-15

雛見沢村で無限に繰り返される"昭和五十八年六月"を乗り越えるため、膨大な数の刻の"カケラ"を紡ぎ続けるあなた。しかし鷹野三四の悲しく壮絶な意志は、雛見沢の運命を"惨劇"へと誘い続ける。そんな中、数百年の時を経て雛見沢の人々の前に現れる羽入。そして、逞しく成長した赤坂衛の姿——。すべての"カケラ"を紡ぎ合わせた部活メンバーの、最後にして最大の

闘いがはじまる……!

かつてない恐怖、そして来るべき未来の物語の可能性を斬新に詰め込み、あらゆるメディアを席捲したゼロ年代の記念碑的一大ムーブメント、『ひぐらしのなく頃に』。その「解答編」の最終形態が、今ここに小説として結晶する——。



圧倒的なまでに"小説"の力を見せつける竜騎士07からの新たな挑戦!!

ISBN978-4-06-283689-0
C0093 ¥1500E (0)
9784062836890
1920093015004
定価：本体1500円(税別)
講談社

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

第四話 ～祭囃し編～（中）

竜騎士07

Illustration／ともひ

第四話～祭囃し編～（中）

ひぐらしのなく頃に解

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa.

WHEN THEY CRY.

竜騎士07

Illustration ともひ

KODANSHA BOX

ようこそ。
『ひぐらしのなく頃に～祭囃し編～』の世界へ。

この世界では、あなたは羽入の視点から物語世界を再構築することが出来ます。
最大の目的は、あなたにとっての理想である「昭和五十八年六月」を作り上げることです。その理想を実現するためには、様々なカケラを集めていく必要があります。
ただし、鷹野の理想もまた強固です。それを覆すためには相当の苦労とカケラが必要となるでしょう。
予め警告しますが、この作業は非常に緩慢かつ苦痛です。羽入はこの作業を百年以上も行い、一度は挫けて運命に身を委ねてしまったのですから。鷹野の理想に打ち勝つのは容易なことではありません。この世界の試練は、あなたに羽入のそれに準じた苦痛を与えるでしょう。
あなたは無数のカケラによって何度も繰り返される世界に精神を磨り減らされ、かつて羽入が屈服したように、あなたも屈服することがありえます。あなたが屈服を認める場合。あなたはいつでもこの読書を終了することが出来ます。
その場合、あなたとあなたの仲間たちの運命を巡る世界は「鬼隠し編」から「皆殺し

編」までの世界で閉じられます。

あなたはこの世界のことを忘れ、本書を廃棄することによって、この世界での「死」を迎えることが出来ます。…やがて梨花がそうなるように。

あなたの理想の「昭和五十八年六月」は、この世界に散らばる五十個ものカケラを結び合わせることで組み立てていきます。カケラを結び合わせるには、それぞれのカケラに合ったカケラが必要です。……それが五十個もあるのですから、あなたはその膨大な量にきっと眩暈すら覚えるでしょう。

そうして、五十個もの膨大な数のカケラ全てを結び合わせ、一つのカケラにした時、…そこには理想の「昭和五十八年六月」が生まれるでしょう。

その時こそ、私たちがもっとも欲する「祭囃し編」が始まるのです。

……これは非常に長く険しい試練になります。

もう一度繰り返しますが、羽入は百年以上これに挑み、しかも一度は挫折しています。

仲間たちが奇跡を信じるのと同じ気持ちを、もしもあなたも持っていてくれたなら。たとえ、羽入の住まう世界が違っても、彼らのことを信じることが出来たなら…。

ようこそ。

『ひぐらしのなく頃に～祭囃し編～』の世界へ。

この世界では、梨花たちの信じる世界をあなたも信じてくれているかどうかを試します。奇跡は、全員の力が集まった時にのみ起こります。

鷹野の組み上げた昭和五十八年六月はあまりに強固です。彼女は国家権力の中枢に入り込んで後ろ盾を得、一般人の常識を超えた様々な力を得ています。それに打ち勝てる勝算など百のサイコロが全て六を示してもありえません。つまり、奇跡を起こす以外に勝算は考えられないのです。全員の力が集まった時にのみ、奇跡は起こります。そして、その全員には、あなたも含まれているのです。

覚悟は出来た？

もちろん。私は出来ているわ。
永い旅のコツは根詰め過ぎないことよ。
まぁ、のんびり行きましょう。
私はいつものワインを飲みながらやらせてもらうわ。

では、始めましょう？

ここでの時間は無限にあるのだから。

Frederica Bernkastel


カケラ紡ぎ



◆北条悟史

梨花ちゃんに聞いたら、ひょっとするとまだ裏山にいるかもしれないという話だった。
沙都子はあそこが大好きなのだ。木々が生い茂り、ツタが絡まり、枯れ木が横たわり、アケビも食べられる、そんな裏山が大好きなのだ。
子供なら誰もが憧れる秘密基地。……沙都子にとっては裏山が秘密基地なのだった。
でも、裏山は未開の山なので、うっかりすれば迷い込んでしまいかねない危険な場所だ。……そんな場所を遊び場にしていることに、兄としては少し不安もあったけれど、……どちらかというと、普段から裏山で遊んでいる沙都子より、普段あまりここに来ない僕の方が迷ってしまう可能性は高そうだ。

夕方になると森の中は暗くなるのが早い。
これ以上、探して見付からないなら、他へ行った方がよさそうだった。
「沙都子〜〜〜〜!!!　沙都子〜〜〜〜!!」
思い切り大声で呼んでいるつもりだけど、森の中では声などそうそう届かない。

梨花ちゃんの話によると、最近はこの辺に秘密基地を作っているらしく、ひとりで出掛けては色々と基地を拡張して遊んでいるらしい。
基地の拡張って何だろう…？
秘密基地ってくらいだから、人には知られたくないんだろう。
だったら、人を近付けない仕掛けとかを作るのかな……？
…そこまでわかっていたなら、沙都子がこの裏山にどういうものを仕掛けているのか、気が付くべきだった。
「う、うわッ!?」
突然、足が地面にずぼっと落ち、枯れ葉の下に隠すように張られていた縄跳びのようなものを引っ張ってしまう。
頭上の木立（こだち）からカサカサ、バリバリと騒々（そうぞう）しい梢（こずえ）の音が聞こえたかと思うと、僕のすぐ横に枯れ枝を丸めて大きな玉にしたようなものが降って来た。
……沙都子の大好きなトラップ遊びに違いない。
目論見（もくろみ）通りに仕掛けが動いていたら、僕の頭に見事命中していたのだろう。
「…あらあらあら。どなたが現れたかと思えば！　にーにーではありませんの。」
「沙都子…!!　駄目（だめ）だよこんな遊びは、危ないじゃないか…！」

「この先は危険だから入ってはいけないって、営林署(えいりんしょ)の看板がちゃんとあったはずでございましてよ？　それを無視する方には素敵なトラップの大歓迎がお待ちしておりましてよ？　をっほっほっほ！」

…危険な遊びはやめなさいと、兄として注意するべきなのだが。…本当に久々に見た、沙都子の明るい笑顔に、僕は注意の言葉をそれ以上口にするのをやめる。

「それより沙都子。今日は家族みんなで食事に出掛けるから、夕方までには家に戻りなさいって言われてたじゃないか。」

「……別に私、お食事なんか行きたくありませんわ。お母さんとお父さんが二人で行けばいいじゃありませんの。行きたければにーにーも一緒に三人で行けばいいんですわ。」

「………まだお父さんのこと、怒ってるのかい？」

「…………………私に灰皿を投げつけましたわ。」

「……違うだろ…。それは前のお父さんの時だよ。今のお父さんはそんなことしてないよ。」

「…私をベランダに追い出してカギをしましたわ。お昼ご飯を抜きにされましたわ。煙草(たばこ)の種類が違うと言われましたわ、好き嫌いは駄目だってほっぺたを叩かれましたわ！　それからそれから…‼」

……それらは全て、今の義父の話じゃない。それどころか、別々の義父の話が入り交じって

いる。
僕たち兄妹は、お母さんの再婚の度に、違う人をお父さんと呼ばされてきた。
…お父さんという言葉は、決して安っぽい言葉じゃない。……心の底からその人のことを父だと認めなければ、冗談だって言えない、…そんな重い言葉なのだ。
それでも僕は、ぎこちない家族関係を少しでもスムーズにするために、その言葉を口に出来るだけの分別があった。
……だが沙都子くらいの歳の子にそれを求めるのは、あまりに酷な話だった。
沙都子は幼少の頃から、何人もの義父とトラブルを起こし、……今の義父とも初対面の時から心を許していない。
沙都子にとって、……「お父さん」という存在がすでに、心を許すべきものになっていないのだ。
確かに、…今の義父は自分の子供を持った経験はない。だから、沙都子に対して多少、感情的に接してしまったことも少しはあった。
でも、沙都子の虐待電話事件以来、義父はそれを反省し、沙都子と心の交流を持とうと、本当にささやかだけれど努力を重ねている。
……お母さんも、沙都子の心の傷を児童福祉司の人に諭され、沙都子への家族としての接し

方を少しずつ模索（もさく）しているところだった。
…なのに、沙都子がそれを受け容（い）れない。………それは無理もないことなのだ。あまりに沙都子の幼い時代は、悲しさに満ち過ぎている…。
沙都子は、…多分、僕にしか心を開かない。だから僕だけが唯一の肉親として接してあげなければ、……沙都子の家族はこの世からいなくなってしまう…。
でも、それは兄妹の関係であって、家族とは呼ばない。
どんなにぎこちない仮の家族であったとしても……、少しずつでも交流を重ねていけば、…やがては本当の家族の絆（きずな）を結べるのだ…。
「沙都子…。今のお父さんはだんだんやさしくなってきたよ。……沙都子と仲直りしたいっていつも言ってる。」
「……そんなの聞いたことありませんわ。」
「お父さんがそれを言おうとすると、沙都子が逃げちゃうからだよ…。お父さんももっと沙都子と話をしたがってる。………もうカボチャを無理やり食べさせたりはしないって言ってたよ？」
「………嘘（うそ）ですわ。カボチャを食べるまでは食卓から逃がさないって言われて、イスにビニール紐（ひも）で縛られましたわ。」

…それも、今の義父の話ではない…。

「沙都子。とにかく、にーにーと一緒に家に帰ろう？　せっかくお母さんが福引で当てたお食事券が無駄になっちゃうよ。予約制だから、今日行かないと無効になっちゃう。」

「……………………にーにーだけで行けばいいんですわ。私はひとりでお留守番してるのが好きなんですの。」

沙都子は普段、こんな時間までひとりで遊んでたりはしない。

……今日が、家族と出掛ける日だと事前に知らされていたから、…わざとひとりでこんな時間まで裏山で遊んでいるのだ。

いつまでも頑なな沙都子に、もういい加減にしろと言いたくなる短気な自分を必死に抑える。

……僕だけが沙都子の拠り所なのだ。…沙都子を怯えさせちゃいけない…。

「とにかく沙都子、帰ろ？　食事に一緒に来るかどうかは、帰ってから決めてもいいんじゃないかな。…………それに、…………沙都子に案内してもらわないと僕、…家に帰れない。」

「………にーにー…。あれだけ何度も一緒に連れてってあげましたのに、まぁだここが覚えられませんの？　まったく、しょうがないにーにーですわねぇ？」

沙都子が、手を差し出す。

人前では、にーにーと手をつなぐなんてもう恥ずかしいと言うくせに、自分から手を出して

くる。

僕はその手を取る。沙都子の華奢な手。…………まだまだ、兄の僕が守らなければならない。

「帰ろ、沙都子。」

「…………ええ。」

◆北条沙都子

私は北条　沙都子と言います。

でも、北条は今のお父さんの苗字です。だから、違うお父さんだった時には、畠沙都子だったり、吉澤沙都子だったり、松浦沙都子だったりしたこともあります。

だから、北条さんと呼ばれても、何だかしっくり来ません。

沙都子と呼んでもらえれば、違和感なく自分の名前だとわかるのですが。

だって、沙都子という名前だけが、私が生まれた時から一貫して呼ばれている唯一の名前なのですから。

お母さんが離婚と再婚を繰り返す理由は、私にはよくわかりません。

離婚するくらいなら結婚しなければいいのに。

結婚するくらいなら離婚しなければいいのに。
それを何度か聞いたことがありましたが、聞いた時の状況に応じてお母さんの対応は異なりました。
結婚している時に聞くと、怒られました。
離婚している時に聞くと、泣かれました。
私には結婚というものがよくわかりません。
だから同い年の子たちがよくクレヨンでお絵描きする花嫁さんやウェディングドレスにも全然興味がありません。
多分、私は結婚しないと思います。生んだ子供の苗字をころころ変えて困らせたりしたくないから、結婚したくないと思います。
お母さんは好きですか、と先生に聞かれました。興宮(おきのみや)の幼稚園の時だったと思います。
それはとても難しい質問でした。だって、お母さんは大好きな時と大嫌いな時があって、どちらと決め付けることができなかったから。
やさしいお母さんは、いつもニコニコ。私たち家族を楽しく盛り上げてくれます。
私に、生まれてきてありがとうと言ってくれます。
やさしくないお母さんは、いつもイライラ。私たち兄妹に辛く辛く当たります。

私に、あんたなんか生まなければと言ってくれます。

お父さんは好きですかとも先生に聞かれました。

これはとても簡単な質問でした。

だって、お父さんは大嫌いな時と大嫌いな時しかなくて、どちらであっても大嫌いだったから。

再婚したばかりのお父さんは、いつもニコニコ。私を実の娘のように可愛(かわい)がってくれます。

私に、自分のことは本当のお父さんだと思っていいよと言ってくれます。

でも、本当のお父さんのわけなんかありません。第一、私は本当のお父さんの顔だってよく知らないのですから。そんな人にお父さんだと呼んでほしいなんて言われたって、言えません。気持ち悪いだけです。

離婚する直前のお父さんは、いつもイライラ。私をゴキブリみたいに嫌ってくれます。

私に、お前に食わせてやる食費はないと言って、物を投げつけたり、ベランダに追い出してカギを閉めたりします。

でも、それは昔のことなんだから忘れていいんですよと言われました。多分、別の学校の先生だったと思います。

それは正しいかもしれません。

だって、北条のお父さんになってから、ずっとお母さんはニコニコしています。
離婚する前には必ず何度も起こる夫婦喧嘩がなかなか起きません。……たまに仲違いするけれど、なぜか離婚にならず、元通りの仲良しに戻ります。
でも、多分その内また、離婚の話になるでしょう。
家庭裁判所とか離婚調停とか夜逃げとか養育費とか、すぐそういう話になるに違いありません。だから、北条のお父さんも、いつまでお父さんなのかわからないから、お父さんと呼ぶ気が全然しません。
最初はお父さんも、私のことをとても可愛がってくれました。でも、お父さんが何度私にお父さんと呼んでほしいと頼んでも、私がそう呼ばなかったので、どんどんイライラになって行きました。
多分、もうすぐ離婚です。お父さんがこんな感じになってきたら離婚です。
離婚すれば、今度はお母さんもイライラになります。そして、私を生まなければよかったとか、お前がいるから私は幸せになれないんだとか言われます。
どうして、私が生まれるとお母さんに迷惑が掛かることがあるのでしょうか？
兄に聞いたら教えてくれました。

子供がいると、再婚が難しくなるらしいのです。お母さんにとって再婚はとても大切なお仕事ですから、子供がいると大変なのは納得できます。
私が邪魔（じゃま）だという理由がやっと少しだけわかりました。

だからもうひとつ、兄に聞きました。
どうして子供は、新しいお父さんにも嫌われるのでしょう？　と。
それも簡単でした。家族の役割が違うからなのです。
お母さんは子供を愛するのが仕事。
お父さんはお母さんを愛するのが仕事。
ということはつまり、私は、お母さんにとってもお父さんにとっても邪魔な子だったのです。
兄は私よりずっとしっかりしている人なので、私ほどは邪魔にされません。
でも、私はきっと絶対、多分それでも、いや必ず、邪魔者です。
だからわかりました。
お母さんもお父さんも、私なんか死んでしまえと思っているのです。でも、私を殺せば警察に捕まってしまうから簡単には殺せません。だからといって、絶対に私を殺さないとは思えません。

もし私が崖下を覗き込むようなことでもあったなら。そしてそれを誰も見ていなかったなら。お母さんとお父さんは、私の背中をどんと押して突き落とすに違いありません。
お父さんが最近、気持ち悪いくらいにやさしくなりました。
嘘の電話をした後から、急に気持ち悪くなりました。きっと、私を殺すために油断させようという作戦に違いありません。
だから私は、絶対に騙されないようにしようと思います。
…ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…。
最近、耳を澄ませば、誰かがずっと謝っているような声が聞こえます。
きっとその子も私と同じで、お母さんに生まなければよかったと言われてるに違いありません。
…ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…。
でも、私はその子みたいに謝りません。
絶対に生き延びます。逆に返り討ちにしてやっつけるつもりです。殺される前に殺し返してやります。
…ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい…。

◆北条兄妹

北条家と言えば、ダム戦争時に村全体と対立していた名物一家だ。
夫婦共に気性の激しいタイプで、特に園崎家と敵意剝き出しの喧嘩をしていた。
反ダムで結束していた村中から冷たい目で見られていたが、夫婦は共に蛙の面に水といった感じで、実にふてぶてしく戦っていたことが知られている。
ある意味、実にたくましい夫婦だった。
だが、それに付き合わされる子供は大変だったに違いない。
沙都子ちゃんも、悟史くんも、親のとばっちりで村中から冷遇されていたのだから。
さらにそれに加え、血のつながっていない父親と沙都子ちゃんの不仲というトラブルもあって、二人の精神的ストレスは限界まで高まっていたに違いない。
私は診療所の所長という、厚かましく言えば、村の名士的立場だったため、色々な人から話を聞けた。
……だから、二人がどれだけ冷遇されていて辛い目に遭っているかは、実際に会う前から知っていたのだった。

北条兄妹との縁は、沙都子ちゃんより悟史くんの方が先だった。
日々のストレスに耐えかねて体調を崩し、悟史くんが診療所にやってきたからだ。
彼自身は最初、自分の症状を風邪か何かだと信じていたようだった。
だから本人も、多分、風邪だと思いますと私に自己申告した。
……その時の、ため息の多い様子や、疲れ切った目。悟史くんの体調不良が、風邪などという単純な理由によるものでないことを、私はすぐに感じ取ったのだった。
多少の薬を与えれば、今この場の症状を癒すことは出来るだろう。だが、それは一時の誤魔化しにしかならない。
本当の意味で治療するには、彼の生活環境そのものを治療する他なかった。
だが、口で言うのは容易い。
…彼を取り巻く村や家庭の環境は複雑に絡み合い、薬を飲ませて三日も安静にすればすっきり治る、などという状況では決してない。
北条家を冷遇する村の気質は、おそらく時間にしか解消できず、しかもそれはとてもとても長い年月をかけることになるのは間違いなかった。
……だからこそ、村中から冷遇されている彼を救うため、私がこの村で最初の味方になってあげなくてはと思った。

ストレスを与える環境を治すことが出来ないなら、彼が受けるストレスを、何とか緩和出来るようにするしかない。

それには、彼にストレスの発散方法を教えるのが一番だと考えた。

ストレスを発散するならば、適度な運動に勝るものはない。私は自分が監督を務める少年野球チームに彼を誘った。

もちろん、私は若い研究の徒であり、時間の限りを雛見沢症候群の研究に捧げていたわけだが、それだけでは気が滅入る。

少年時代に野球をやっていたこともあり、地域の少年野球チームに指導者として参加するようになっていた。

……それがいつの間にやら、雛見沢の子たちで分離独立することになり、その監督に祭り上げられてしまったのだ。

医師は薬だけで健康を守るのではない。健全な魂は健全な肉体に宿る。

スポーツを通じても健康を守ることが出来るはずだ。

だが、新造チームではメンバーが足りない。…そこで、悟史くんを野球に誘うことを思いついたのだった。

悟史くんは自他ともに認める文学少年で、スポーツにはそれほど関心がなく、現在の窒息し

そうな状況が、野球チームに加わることでどう解消できるのか疑問なようだった。
どうしてスポーツがストレス発散に効果的なのか、スポーツ医学を延々と説く必要はない。彼自身が実際にスポーツで汗を流し、その効果を実感してくれればそれに勝る説明はないのだ。
彼もそれを次第に実感していったに違いない。
…最後の最後まで渋々ではあったけど、チームの行事や試合には、熱心に参加してくれたのだから。
私は少しずつ溌剌さを取り戻していく悟史くんを見て、自分の指導は間違ってなかったと、ひとり悦に入っていた。
だが、悟史くんがこれほどのストレスを抱えていたならば、同じ家庭環境を持つ沙都子ちゃんだって、まったく同じに違いない。
浅はかにも、この頃の私は沙都子ちゃんのことまでは考えていなかった。
……だから、沙都子ちゃんが私の前に患者として運ばれてきた時、沙都子ちゃんの境遇を失念していたことをひどく後悔した。
悟史くんが、私の指導のもとで次第に元気さを取り戻していく間にも、沙都子ちゃんはストレス環境にひとり置き去りにされていたのだ。
また、この時期、沙都子ちゃんが倒れるに値するだろう事件もあった。

それは、両親の事故だった。

村祭りの意味の他に、ダム戦争の勝利記念日の意味合いも強かった当時は、北条一家にとって綿流しの当日は、非常に居心地の悪い時期だった。

その時期に家族旅行の予定を入れ村をしばらく離れようとしたのは、とても理解出来ることだった。

その旅行先の公園で、沙都子ちゃんの両親は転落する。

本当に運の悪い日の事故だった。……綿流しの日であったばかりに、それはやがて、オヤシロさまの祟りとして語り継がれることになるからだ。

そして、北条家はオヤシロさまの祟りを受けた呪われた一家というレッテルを貼られることにも…。

村中から後ろ指を指されているのは両親だった。

だから両親が死んだなら、それで冷遇はおしまいになるはずだったろうに。……本当に運の悪いことに、綿流しの日に事故があったばかりに…。北条家への冷遇は、清算されることなくいつまでも残り続けることになる……。

転落事故の現場には沙都子ちゃんだけがいた。

（その日は私の野球チームの行事に参加していたため、悟史くんは旅行に行っていなかったの

だ）
その為、警察の事情聴取(ちょうしゅ)などは沙都子ちゃん一人に集中した。
……警察の大石(おおいし)は、村の組織犯罪を疑っているとか何とかで、唯一、現場に居合わせた沙都子ちゃんを質問攻めにしたという。
悟史くん以上のストレスを持ち、これだけのことが一度に押し寄せてどうにかならない方がおかしい。
警察の事情聴取中、感情が高ぶり呼吸困難を起こした、とのことだった。
運び込まれてきた時の沙都子ちゃんの、苦悶(くもん)に満ちた表情は、とてもとても痛ましいものだった。
この華奢な体で、どれほどの辛い思いを受け止めてきたのか、それを測るだけでも胸が痛んだ。
「……監督、沙都子は大丈夫ですか…！」
「ええ、安心してください。一時的に混乱してしまっただけですよ。」
「会っても大丈夫ですか？」
「やっと薬でぐっすり眠れたところです。できれば起こさないであげたいところです。しばらくゆっくり休ませてあげましょう。様子を見て、数日入院させてあげるのもいいかもしれませ

ん。…大丈夫。私に任せてください。」
「…あ、ありがとうございます。」
悟史くんがとても妹思いな尊敬できる兄であることは知っていた。
そして、妹の心の痛みを共有できる感受性があることも。
……つまり、悟史くんが持つ悩みもストレスも、全て沙都子ちゃんを映す鏡だったのだ。
不謹慎だからと思い口にしなかっただろうが、…悟史くんは両親の事故を悲しむと同時に、安堵したところもあったかもしれない。
なぜなら、これでもう、妹は心を追い詰められることがないからだ。
悟史くんのような、血のつながらない父とうまくやれる世渡り上手さは、沙都子ちゃんにまったくなかった。
だから、母はともかく、最大のストレス源である父がいなくなったのは、沙都子ちゃんの環境に、大きな変化をもたらすに違いなかったのだ。
…………しかし何ということ。
…この後に二人は、さらに劣悪な環境である叔父夫婦のところへ預けられることになってしまう……。
この時点では、新しい生活環境が兄妹にとってやさしいものであればいいという、少し楽観

的な印象を持っていた…。

◆園崎魅音

「魅音さん〜〜〜〜。お友達がいらっしゃってますよー。」
うちのお手伝いさんの声が聞こえた。
我が家は家も庭も広いから、普通の家のように、呼び鈴を鳴らしたり、魅音ちゃん、あ〜そ〜ぼー！　と言っただけでは私の耳にまで届かないのだ。
「あー、はいはい、ありがとうございます。どなたです？」
「古手の梨花ちゃまですよ。」
「あー来たね来たね。婆っちゃに、梨花ちゃまが来たって伝えてもらえます？　多分、あっちの縁側にいると思います。私ゃスイカを引き上げてきますね。」
婆っちゃが、ずいぶんと立派なスイカをいくつも送ってもらったので、お裾分けをしようということになったのだ。それでついさっき、古手家に電話したので、梨花ちゃんが取りに来たということとだろう。
…自転車で来たのかな。梨花ちゃんの自転車の前カゴ、スイカが入るほど大きかったっけ？

そんないらない心配をしながら、私は裏庭の井戸の中に吊るしてあるスイカを引っ張りあげるのだった。

冷たい井戸水の中で冷やされていたスイカは、涼やかな水滴にまみれ、とてもおいしそう。古手家の三人家族なら、二晩はたっぷり楽しめるに違いなかった。

「……みー？　お持ち帰りだったのですか。ボクはてっきり…。」

「あれぇ？　おじさん、そう言わなかったっけー⁉」

電話に出た神主さんに、スイカがあるから取りに来てくれ、と言ったつもりだったのだが…。言い方が悪かったのか伝言ミスなのか、スイカのお裾分けでなく、スイカをご馳走するからいらっしゃい、という話にすり替わってしまっていたようだった。

梨花ちゃんの自転車の小さな前カゴでは、こんなスイカなど到底入らないし、それを片手で持ちながら自転車を漕ぐというのも危ない話だ。

「魅音、お前、梨花ちゃまん家までちょぉ持ってってったらぁな。スイカ片手んなぁ、自転車なん漕がれんて。」

「……みー。ボクだってスイカくらい持てますのですよ？」

「危なぁ危なぁ危なぁ！　梨花ちゃまに何かあったら、オヤシロさまに申し訳たたんね。うちの魅音が運ぶんね、任せったたったらぁ。」

「あいあい、任せられったたったらぁ。じゃあついでに神主さんにご挨拶（あいさつ）でもしてこようかねえ。」

自転車に乗るにせよ押すにせよ、梨花ちゃんの両手は空かない。

なので、私がスイカを持っていってあげることになった。

空はほんのり茜（あかね）色。…とても涼しい風が吹いていて、素足にサンダルが心地いい。

私の持つスーパーのビニール袋の中には、先ほどのスイカと、せっかく園崎本家まで来てくれたのだから、そのお駄賃（だちん）にと、金平糖（こんぺいとう）の小袋をいくつか入れてもらった。

お母さんに見付かると没収されるらしいので、先に食べてしまおうということになり、私たちはさっそくそれを開け、金平糖の素朴（そぼく）な甘さを楽しむのだった…。

別に梨花ちゃんに限ったことではないが、近所の子供がお使いに来た場合、お駄賃として何かお菓子（かし）をあげるのが婆っちゃのルールだった。いや、雛見沢という田舎（いなか）では、そういうルールは割とある。

だから、ご近所への回覧板を、家族が見てもいない内に、兄弟が争って次の家へ持っていったなんて笑い話もたまにあるのだ。

…この金平糖も、そんなお駄賃のひとつなわけだ。もっとも、普通はお駄賃に金平糖をこん

なにもあげない。せいぜい、飴玉をひとつが相場だ。
…だからこれは、婆っちゃの梨花ちゃまに対する特別の甘やかしということなのだろう。
「……ボクだけ、こんなに色々お駄賃をもらうと、他の人に悪い気がしますです。」
「別に気にすることないんじゃない？　お駄賃は好意みたいなもんだもん。変に断るよりは、子供らしく、ありがとうと言って笑顔を見せる方がよっぽどいいと思うけどねー。」
「……魅ぃはお駄賃をよくもらいますですか？」
「んーー、昔はね！　でもさすがにこの歳になったらもらわなくなったなぁ。今もらうと、何だか子供扱いされてるみたいで、かえってカチンと来るかな、なんてね！」
「……みー。ボクは子供扱いなのです。」
「あははははは、いいじゃんいいじゃん！　もらえる内にもらっとけばいい。私くらいになれば欲しくてももらえなくなるんだからさ。」
他愛もない話をしているつもりだったのに、どういうわけか梨花ちゃんの表情が曇りがちであることに気付く。
「どうしたの？」
「…………ボクはお買い物に行っても、…よくお駄賃に飴をもらいますが。……沙都子は一緒に行ってもらえませんです。」

「…………………。」
梨花ちゃんが、どういう意味でそれを私に言ったのか、…深読みしたらきりがない。
沙都子に限らず、北条家が村中から冷遇されているのは雛見沢では知らない者はいない。
……そして、そうなるように煽ったのは園崎本家なのだから。
しかも、ダム賛成派の二人は転落事故ですでに死んでいる。
なのに、北条家に対する風当たりは収まらず、……子供である沙都子と悟史、…そして、沙都子たちを引き取っている叔父夫婦まで冷遇されているのだ。
確かに、ダム計画の地元説明会で、北条家と園崎家が大喧嘩をしたのが対立の始まりだ。
……でもそれは、北条夫妻であって、子供や叔父夫婦とは関係がないはず。
…にもかかわらず、「村の裏切り者＝北条家」という言葉がいつの間にか独り歩きして、…北条の苗字を持つ者を、未だに冷遇しようという空気を生んでいるのである…。
叔父夫婦はダム賛成派ではなかった。だから、時間が経てば、叔父夫婦に対する攻撃は止むべきだったのだ。
……ところが、叔父夫婦がちょっとまともな連中でなく、…近所とトラブルばかり起こしていた。ゴミ出しのルールを守らなかったり、持ち回りの当番を忘れてたり、隣近所の洗濯物に気を遣わずに庭木の消毒をしたり。

…町会(ちょうかい)やご近所でもよく言い争いをしているらしく、ダム戦争の一件がなくても嫌われている夫婦だった。

…そんなこともあって、北条家冷遇はそのまま維持されてしまったのだ。

でも、それにしたって、沙都子と悟史には関係がない…。

私も学校で、沙都子や悟史が辛そうな顔をしているのをよく見かける。

……せめて学校では、北条家とか園崎家とかそういうのは抜きにしてあげるのが親切だと思い接しているが、……それを沙都子たちがどう感じているかはわからない。

沙都子たちから見れば私は、自分たちを苛(いじ)め抜く園崎家の一員に過ぎないだろうから…。

「…せめて学校には、そんな苛めを持ち込ませたくない。だから私は、そういう風に振る舞っているつもり、だよ。」

「……それを、学校の中だけでなく、外にも広げるには、どうしたらいいのですか…？」

……それはとても難しいことだ。

御三家(ごさんけ)を敵に回した北条家。村の裏切り者の烙印(らくいん)を押され、今なおそれを払拭(ふっしょく)出来ていない。

………もうダム戦争は終わりましたから仲良くしましょう、なんて誰かがひとり言ったところで、焼け石に水にもなりゃしないのだ。…それどころか後ろ指をさされかねないのだから。

…沙都子たちには気の毒だが、……ひたすらに耐えてほとぼりが冷めるのを待ってもらう他ない。私に出来るのは、その日まで耐え忍ぶ心の拠り所のひとつくらいを提供してやりたいと思うことだけだ。

「……では、沙都子たちはいつまで耐え忍べばいいのですか…？」

「…………わかんない。ダム戦争は数年に及んだ。その時に押された烙印を払拭するんだから、……それと同じ年数はかかるかもしれないね。」

「……それはつまり。沙都子たちが大人になるまで、誰にも許してもらえないということですか。沙都子が子供のうちは、ずっとずっと村中から冷たい目で見られていろということですか。」

「それは、………あまりにも辛いね…。」

「……魅ぃ。ボクたちは沙都子や悟史の仲間なのですよね？」

「そうだよ。私にとってだって、二人は友達だよ。仲間だよ。」

「……なら、ボクたちの仲間を救うために、ボクたちに何か出来ることはないのでしょうか…？」

「…………私たちに、……何が出来るんだろうね。」

仮に園崎本家が、ダム戦争はもう終わりました、北条家と仲良くしましょうと宣言を出した

としても、そんなことくらいで解決するものじゃない。

…そもそも、婆っちゃは未だに北条家を毛嫌いして、北条家の北条と口にすることもタブーなくらいだ。

誰かひとりが許す許さないという問題じゃない。…人と人とが複雑に絡み合った、村というコミュニティの問題なのだ。

……それを敵に回すのは恐ろしいこと。

それを誰もが知っているから、ご近所付き合いを蔑ろにしないのだ。

…それをわざわざ敵に回そうとするならば、相応の報いがある。…それが日本のコミュニティの不文律というものだ。

そして、…その不文律には園崎家も組み込まれている。

北条家を敵視する風潮が一度根付いてしまったら、園崎家にだって、そうそうこの悪弊を断ち切れるものじゃない。

「……雛見沢のことは、…雛見沢の人間にはどうしようもないということなのでしょうか。」

「…………悲しいけど、…そういうこともあるかもしれない。…もし、沙都子を救う人が現れてくれるとしたら。…それは村のしがらみに囚われない、そういう人なんだろうね。…でも、そんな人、村にはいない。」

「……村の外から、…誰かが助けに来なければ救われない、ということですか…？」

「…………………………。」

梨花ちゃんの言うような、白馬の王子さまが村の外からやってきて、……数百年間にわたり閉ざされ、澱んできたこの村の空気に新風を送り込んでくれるのか。

そんなのあるわけがない。結局いつもと同じ。……時間がいつか解決する。

それまで、せめて自分だけは味方でいてあげること。

それ以上のことなど、今の私には思いつかなかった。

私と梨花ちゃんは、金平糖をがりりと噛みながら、……早くみんなが沙都子たちを許してあげればいいのにと祈ることしか出来ないのだ……。

そんな、苦々しい沈黙を、梨花ちゃんがそっと破る。

「……きっと。」

「え…？」

「……きっと、…村の外から、しがらみに囚われない人がやって来ます。」

「そうだね。ダム戦争も終わったんだから、また分譲地に外から人が引っ越してきてくれるといいね。近い歳の転校生とかくれれば楽しいだろうに。」

「……来ます。きっと。そして、彼と力を合わせて、私たちは村の悪弊を打ち破るのです。

……それが、私たちの未来を閉ざす三つの錠前に対する、最初の鍵。」

「…………え？　何それ。何かの小説？？」

梨花ちゃんはたまに謎めいたことを言うことがあった。

そういう時の彼女はとても大人びた雰囲気がしていて、……私より年下であることを疑いそうになる。

理不尽な、北条家に対する村八分…。……しがらみに縛られない何者かが現れて、打ち破ってくれるのだろうか……。

◆生贄第二号

悟史くんは本当に妹思いな良い兄だった。

学校が終われば必ずそのまま沙都子ちゃんのお見舞いに訪れ、彼女が一日でも早く元気を取り戻せるよう、温かい言葉を掛け続けてくれていた。

悟史くんの話を聞くまでもなく、…沙都子ちゃんはこれまで、家族とよい関係を築くことが出来なかった。

……特に義父との対立は激しく、沙都子ちゃんが虐待ＳＯＳに嘘の通報をして騒ぎになるま

でに至ったという。
そんなところへ、さらに両親が二人揃って転落事故で死んでしまったのだから、……心がそれらのダメージを受け止め切れなかったに違いない。
まだまだ年端も行かない沙都子ちゃんにとって、それはあまりに辛い出来事だったに違いないが、…………彼女には悟史くんという素晴らしい兄がいてくれたのが、不幸中の幸いだった。
傷ついた心は容易には治せない。でも、肉親の愛に勝る治療薬は存在しないのだ。
……私は、きっといつの日にか沙都子ちゃんが笑顔を取り戻してくれると確信していた。
まだまだショックから立ち直れないようだが、悟史くんとのコミュニケーションにより、少しずつ笑顔を取り戻しつつある。
…警察の大石は、相変わらずしつこく彼女への面会を求めてくるが、もうしばらく私が防波堤になってやる必要があるだろう。
……あの男には警官としての情熱はあるのかもしれないが、人の心を思いやるやさしさはない。
あの男が無神経に両親の事故を思い出させれば、彼女は再び心の傷を開いてしまうに違いないのだ。
………その点だけが、沙都子ちゃんを巡る心配だった。

コンコンとノックの音。
…鷹野さんだった。
…しかし、彼女の看護婦姿は、…どういうわけか似合わない。
医師免許を持っているのだから、白衣を着て医師らしく振る舞えばいいのに。
……彼女なりの遊び心なのかもしれないが、正規の看護婦に対し失礼な気もする。…それをわざわざ口にしたりはしないが。
「入江(いりえ)先生、ちょっとよろしいですか？」
「あぁ、はい。それでは悟史くん、私は失礼します。」
「あ、はい。」
「悟史くん、こんにちは。沙都子ちゃんと遊んであげててね。ずっとひとりでいるから、きっと寂しいと思うの。…ね？」
「そ、そんなことございませんわよ…。」
「むぅ。」
「では悟史くん、よろしくお願いします。」
私は席を外し、悟史くんに沙都子ちゃんを預けた。

「ところで、何かありましたか…？」
「ここでは何ですので、所長室で。……くすくす。」
鷹野さんは、時々意味深に笑う。
多くの人にとって笑顔は幸せを共感させてくれる良いものだが。
…この頃には、鷹野さんに限り、笑顔はそういう意味にならないことに気付き始めていた…。
「…それは本当ですか。」
「えぇ。簡易検査の結果、Ｌ３以上と思われる高い発症レベルの可能性が指摘されました。彼女をさらに入院させ、より精度の高い検査を行う必要があります。……結果待ちですが、私の見たところ、Ｌ４の可能性すらありえるかと。」
鷹野さんの目がいやらしく笑うのがわかった。
それには理由がある。
………末期発症者を生体で得ることが、私たちの研究を進める上でもっとも価値のあることだったからだ。
実際、去年の、……バラバラ殺人犯を検体とした非人道的解剖の結果、私たちの研究は飛躍的進歩を遂げていた。
つまり、私たちはとうとう、病原体の特定に成功したのである。宿主の人間が死ぬと、その

死後数時間以内に溶解する特徴も発見した。溶解後は体内に存在するごく普通の成分となってしまうため、その痕跡の発見はほぼ不可能に近いこともわかった。

……これで、これまでいくら検死解剖をしても病原体が発見されなかった理由も説明がついた。

そこからの研究は、それまでとは次元が違うほどに進んだ。この一年で、故高野氏の数十年分の研究を凌駕したと言っても過言ではないだろう。

今では、病原体の性質や及ぼす影響、症状、治療薬や予防薬等、様々な研究に展開していた。

つまり、…生きた末期発症者の検体なくして、私たちの研究に進歩はない、ということなのだ。

だが、末期発症者、通称Ｌ５が自然発生するのは稀だ。

太古の雛見沢症候群はＬ５をもっと大量に発生させたようだが、今日にその猛威はない。

となれば、Ｌ５、もしくはＬ５に限りなく近い重度発症者の確保が急務となってくる。

………沙都子ちゃんは、その条件を満たす、一年ぶりの生贄の可能性がある、ということだった。

奇病の機密保持のため、Ｌ５の恐れがある患者は野放しに出来ないことになっている。

…まずは精密検査をし、…その結果を見てから対応を考えるしかない。

何しろ、沙都子ちゃんはあれだけ落ち着いているのだ。…去年のあの殺人犯のような錯乱は見られない。
……簡易検査は時に大きな誤差を出す。
沙都子ちゃんが重度発症者かどうかは精密検査の結果を待ちたいところだった。
「……わかりました。経過観察のため入院ということにしましょう。スタッフの皆さんへの手配をお願いいたします。」
それは形式的な返答だが、……もし検査の結果、クロだったなら、直ちに解剖に移れ、ともつながる返答になる。
沙都子ちゃんとの面識はそんなになかったが、…その兄の悟史くんとは、少年野球を通じて、すでに短くない交流を重ねていた。
その悟史くんが、目に入れても痛くないほどに可愛がる妹を、………私は解剖など出来るのか……？
そこまで至って初めて、私は恐ろしい想像が足元から登ってくるのを感じるのだった…。
「くすくす。ご安心を。万事すでに手配させておりますわ。」
解剖手術の手配まで済ませているとでも言いたげな、邪悪な笑みだった。
だが、それは彼女だけの笑みなのだろうか。

…私の口元は醜(みにく)く歪(ゆが)んだ笑みを湛(たた)えてはいないだろうか………。

去年の解剖の時。…解剖前は確かに罪の意識があった。だが、覚悟を決めて解剖に臨(のぞ)むと、……そこは知的好奇心の楽園だったのだ。

故高野氏が断片的に残した先見性溢(あふ)れるピースがみるみる収まり、あるいは裏切り、とにかくとにかく興奮の連続だった。

誰もが解き明かしたことのない神秘(しんぴ)に、自分たちが人類で初めて踏み込んだ興奮…。

この麻薬のように虜(とりこ)にしてしまう興奮の味を、味わったことのない人間にどう説明すればいいというのか。説明出来る言葉などない。

一言だけ言えるのは、……その知的興奮は一年を経た今になっても忘れることが出来ないということだけだ。

だから、もし検査の結果、……悟史くんの大切な妹が解剖の対象となることがわかったら、……………私は舌なめずりをせずにいられるのだろうか。

だが、…それは人間としての失格を意味することだ。

北条家がどれだけ村で冷遇され、沙都子ちゃんがどれだけ辛い思いをしてきたか、私はそれをよく知っているのだ。…そして、悟史くんがそんな妹を唯一の肉親として大切にしていることも。

そんな沙都子ちゃんを、私は知的興奮だけで生きながらに解剖することなど出来るのか……。

去年の男には大して罪の意識は感じなかったのに、……沙都子ちゃんには重い罪の意識を感じる。

……そのことは、私が忘れようとしていた去年の罪を改めて思い出させた。

面識のない男なら死んでもいい。沙都子ちゃんなら死なせたくない、という道理はない。命の重さは誰だって等しいはずだ。

それに、罪の意識を薄れさせた理由の、……あの男が凶悪殺人犯であるというのも、末期発症によるものだったかもしれないじゃないか。

……私は、錯乱する前のあの男のことは何も知らない。ひょっとすると模範的(もはんてき)な尊敬できる人間だったのかもしれない。

……それが不幸にして発症してしまい、その結果、反社会的行為に及んでしまっただけの、哀(あわ)れな犠牲者なのかもしれないのだ…。そう、私の父のように…。

私は他の誰よりも雛見沢症候群について知っていた。

この病気は、人を望まずして奇行に駆り立てる。本人に違和感を感じさせることさえなく。

…だから、この病気の末期発症者が、いかに凶悪な奇行に走ろうとも、それは同情すべきこ

とのはずなのだ。

そんなことは、この道を進もうと決意したあの頃に、もう知っていたはずなのに……！

そんな、私にとっては当り前だったはずのことを、私は今さらのように思い出し、…本当に今さらのように、自分がいかに罪深き研究に身を投じているのかを知るのだった。

やがて、北条沙都子の精密検査の結果が出た。

結果は、Ｌ５。…末期の末期。

それはある意味、とても驚くべき結果だった。

去年のケースの場合、末期発症者は重度な錯乱状態にあった。

鷹野さんの観察記録によると、全身のリンパ腺に激しい痒みを訴え、故高野氏が指摘するよう、喉を掻き毟りたがったという。

だが、沙都子ちゃんにその症状は見られない。

故高野氏の資料でも、喉の掻き毟りは極めて特徴的な末期症状だとしながらも、患者の全員に必ず発症するとは記していない。

それに、感情の発露は個人差がある。

同じ感情であっても、激しく発露させる人もいれば、内に秘めて隠してしまえる人もいる。

所見でそれを測ることなど出来ない。

でも、沙都子ちゃんの精密検査結果は末期の末期、L5を示している。
つまり、…去年の男のように錯乱した様子を見せないだけで、……心の中には、まったく同じ狂気にも似た異常な感情が渦巻いているはずなのだ。
雛見沢症候群は、人間の前頭葉に作用し、…人としてもっとも原始的感情のひとつ「疑い」に特に強く働きかける。
……その結果、末期発症者は極めて重度の妄想的疑心暗鬼に囚われ、その結果として恐ろしい凶行を犯してしまうことになる…。
お見舞いの悟史くんと温かなコミュニケーションを交わし、一見、回復の兆しを見せている沙都子ちゃん。………だがその胸の内には、いつ錯乱してもおかしくないくらいの疑心暗鬼が、ずっと渦を巻き続けている……。
……沙都子ちゃんを、このまま退院させることは出来ない。
だが、…このまま、対応マニュアル通りに進めば、私は北条沙都子の解剖プランに決裁を求められることになるだろう。
……そうなれば、私の決裁など形式だ。
私にそれを拒むことなど出来ない。
鷹野さんは解剖のスケジュール作りにすでに着手しているらしかった。

その案が私のところへ回ってくる。

……沙都子ちゃんを生きながらに解剖したならば。…再びあの知的興奮を味わえるのだろうか。

恍惚の境地に再び至ることが出来るのだろうか。

…いや、…私はその誘惑に打ち勝てるのか。

自問自答するふりをしながら、鷹野さんが勝手に進めてくれるのを放置して、消極的に沙都子ちゃんの解剖に同意しているのではないか。

…出来るなら沙都子ちゃんを救いたい。研究のための生贄にしたくない。解剖など絶対にしたくない。

でも、それならば去年の男はどうだと言うのか。

私は知人の命にだけ重さを感じる差別主義者なのか。

解剖しないなら、生かして退院させるのか。

彼女が錯乱して恐ろしい事件が起こるのを漠然と待つのか。

…そして、去年の男のように錯乱状態になった彼女が担ぎこまれ、…やはり結局、彼女を生きたまま解剖することになるのか。

去年の男は、……生きながらに解剖されながら、……数ヵ月間も延命された。

頭蓋を外された状態で、数ヵ月間も死を許されず、残酷な実験のためだけに延命されたのだ。
彼女にそれを強いたくない……！　どうしたらいいのか…。
悩むことすら、葛藤することすら、彼女の解剖に消極的に同意していく…。

◆兄の苦悩

真夏の太陽を思わせるような強い日差しの中、野球少年たちが無心に白球を追いかけていた。
暑さをより一層引き立てるセミたちの合唱も、今の子供たちには応援の歓声のひとつでしかなかった。
もちろん、基礎練習もしっかりするし、体力をつけるため運動もする。
でも、子供たちはそういう体育の授業みたいなものは本当は苦手で、練習の最後にやらせてくれる自由試合の方が楽しみだった。
雛見沢の学校は、本来は営林署で、その敷地を間借りしているに過ぎない。
そのため、校庭は砂利で、あまり激しい運動をするには向いていない。
それに比べ、この興宮の学校のグラウンドはちゃんと整備された運動用のグラウンドなので、子供たちは一層元気にはしゃげるのだ。もっとも、雛見沢っ子の元気さは、校庭が砂利であろ

うとお構いなしだが。
子供たちの試合の方は、他の指導者の人が見てくれているので、入江はその間に、子供たち用のジュースを買いに行くことにした。

「監督、どこへ行くんですか？」
私がグラウンドを抜け出そうとするのに悟史くんが気付く。
「皆さんにジュースを買って来ようと思いまして。もしよかったら、悟史くんも手伝ってくださるととても助かるのですが。」
「あ、はい。お手伝いします。」
悟史くんは素直な返事をしてくれると、私と一緒に買い物に付き合ってくれた。
大人の感性でジュースを選ぶと不評なことがあるので、付き合ってくれるのはとても助かる。
私は悟史くんと一緒に、車で近くのスーパーまで出掛けた。
「……監督。沙都子の具合はどうなんですか…？」
「えぇ。経過は良好ですよ。本当にゆっくりとですが、沙都子ちゃんの心の傷も癒えてきています。もう少しだけ安静にしてあげた方がいいでしょう。」
悟史くんが心配するのは当然だ。

沙都子ちゃんの入院がすでに二週間以上にわたっていたからだ。
もちろん彼は、自分の妹が雛見沢症候群にかかり、しかもいつ錯乱してもおかしくない瀬戸際のL5にいることは知らない。
だから、両親の事故のショックで何日も寝込んでいると思っているのだった。
そんな妹を元気付けようと、連日見舞いに来てくれていたのだが、……沙都子ちゃんの情緒が最近、不安定になり、かなり危険な兆候を見せたため、その見舞いを謝絶していたのだ。
正直なところ、……沙都子ちゃんの容態は芳しくない。
沙都子ちゃんが示すL5という状態は、すでに尋常なレベルではないのだ。
同じレベルにあった去年の男は、末期の麻薬患者も裸足で逃げ出すような異常な状態にあった。
…沙都子ちゃんが、わずかの拍子にそうならない保証などまったくないのだ。
確かに、去年の男の解剖で私たちは雛見沢症候群の正体を知り、そのメカニズムを大きく解明した。………治療薬開発につながる貴重な発見もしている。
だが、治療方法は依然確立しておらず、…もし沙都子ちゃんが回復不可能な状態に陥った場合、…去年の男同様、解剖されてしまうことだってある…。
そんな、妹の生きるか死ぬかの瀬戸際を、…私は悟史くんに話すことが出来ず、こうして曖

昧に、順調に回復していると嘘をつくことしか出来ない。

もし、彼女に何かがあったなら。……私は悟史くんに対し、許されない嘘をついてしまっていることになるだろう。

…私の心の中にわずかに残る良心が、ちくりと痛む。

「………もし監督の診療所のご迷惑でなければ…。…もうしばらく、入院させてもらった方がいいかもしれません。」

「……それはどういう意味ですか？」

妹の一日でも早い退院を願っているとばかり思っていたので、少しだけ驚く。

「いえ。……実は、沙都子。……あまり、叔母さん一家とも馴染めていないんです。」

「沙都子ちゃんが、ご両親とあまり良い関係ではなかったと聞いていましたが、……新しく預けられた叔母さん夫婦ともなのですか…？」

「……………。沙都子は、……大人にはあまり心を開かないので。」

悟史くんから、沙都子ちゃんの恵まれない生い立ちについては聞かされたことがある。

……何度も繰り返されたお母さんの再婚が、子供たちに心の傷を強いていたのだ。

悟史くんはそれを乗り越えられたが、沙都子ちゃんにそれを期待するには、当時の彼女は幼すぎた。

それがトラウマとなり、血のつながっていない保護者というものを過度に嫌う傾向があるのだという。……いや、血のつながっていない人間が保護者なんて、誰だって嫌なはずだ。沙都子ちゃんに限ったことじゃない。

ただ、普通は心の中で嫌だと思っていても、それをぐっと抑える。……でも、沙都子ちゃんにはそれがどうしても出来ないということだろう…。

「叔父さんはあまり家に帰ってこないし、…居ても寝てるかテレビを見てるかなのでそんなに問題はないんですが…。……叔母さんがものすごく沙都子に絡むんです。」

「……どうして、そんなに嫌われてしまったんでしょうね…。」

一応の想像はついた。

……沙都子ちゃんの両親がダム賛成派だったせいで、叔父叔母も北条家というだけの理由で、とばっちりを受けていたはずだ。

さらにその上、事故でぽっくり他界して、子供を二人も押し付けられたのだから、仇はあっても恩はない、というところなのだろう。

それでも、悟史くんのように、表向き大人しくしていればそうそう波風は立たない。

……でも、沙都子ちゃんは大人しく出来ない。それを態度や表情に出してしまい、大喧嘩になってしまうのだ。

「……僕も叔母さんに、沙都子の事情を説明してはいるのですが…。なかなかわかってもらえなくて……。」

「その度に、沙都子ちゃんを庇ってあげる悟史くんは、お兄さんの鑑だと思いますよ。……今や沙都子ちゃんにとって、唯一の肉親は悟史くんだけなのかもしれませんからね。」

「…そうですね。……そんな気がしてます。」

ほんの少しため息を混じらせながら、悟史くんはそう言った。

…口に出しては言わないが、…悟史くんも、沙都子ちゃんが叔母と喧嘩する度に、それを庇うために巻き込まれてしまうのに、疲れを感じているようだった。

彼は良い人間で良い兄だ。だから妹を庇うためにいつでも戦うだろう。…でもそれはとてもとても疲れることなのだ。

悟史くんは、前のご両親の時からずっとそういう生活を送ってきた。

そして、それに心のバランスが耐え切れなくなって病んでしまい、私のところへ訪れたのだ。

私は、その状況の根源であるご両親が亡くなったので、それは改善されたものだと思っていたのだが…。

状況はどうやら、当時以上に深刻なようだった…。

「わかりました。……そんな状況で沙都子ちゃんを退院させたら、また心の症状がぶり返して

しまうかもしれませんね。…入院費のことは気にしないでください。沙都子ちゃんが本当の意味で回復するまで、私が責任を持ってお預かりします。」

……彼の願いを聞き入れた風にしながら、自分の都合をつらつらと言ってしまう自分の狡猾さに、ほんの少し嫌気がさした。

何が、責任を持ってお預かりなのか。

……鷹野さんは彼女の解剖計画案を着々と進めているというのに…。

「………お願い出来ると、……僕も少しだけ助かります。」

「はい…？」

「…いえ、…………沙都子がもうしばらく入院しててくれたら、…僕もその分、気楽だな、って。……思っただけです。」

「それは、…どういう意味ですか？」

「………沙都子が帰ってきたら、…どうせまた叔母と喧嘩をするだろうと思います。…そうしたら、また喧嘩や怒鳴り声ばかりの日になって、……僕もそれに巻き込まれるのかなって思うと。…………沙都子はずっと入院しててくれるのが、一番僕にとって気楽なことなんじゃないかって、……そう思ってしまう自分がいて…。…………嫌になります…。」

「………悟史くん…。」

悟史くんは、常に妹を庇う良い兄だ。…でも、だからといって何の負担にも感じていないわけもない…。

「……そんなことを考えてしまうなんて、…僕は何て悪い兄だろうって思います。……そうだと思えば思うほど、…自分が嫌になって。………………………。」

そう言い、悟史くんは鼻をひとつすすった。

その表情は苦悶に満ちていて、…自らに罪の意識を感じているかのように見えた…。

模範的な兄であろうという気持ちが、彼を追い詰めていく。

……沙都子ちゃんも不憫だが、…それとは別な意味で、悟史くんも不憫だった。私は、二人をよく知る者として、……誰も顧みてくれない二人のために、味方でなくてはならないのだと、ひしひし感じるのだった…。

◆C103投与実験

沙都子ちゃんの解剖スケジュールが着々と進んでいく。

…悟史くんを悲しませたくないという気持ち。

沙都子ちゃんの辛い境遇への同情。

……そして、この研究のために非情なる責任を全うしなくてはならないという気持ちが、私の中で何度もせめぎあっていた。
「……入江。」
「え？　あぁ、すみません、うっかりしていました。どうなさいましたか梨花ちゃん。」
「……ボクの友達がずっと長く入院していますが、その子は雛見沢症候群ではないのですか？」
「それを誰に聞きましたか？」
「……ボクがそう思っただけです。どうなのですか、入江。沙都子は雛見沢症候群ではないのですか。」
梨花ちゃんはすでに私たち側の人間だ。何も隠すことなどない。
むしろ、隠し事をしてはいけないというのが、私なりの誠意の不文律だと思っていた。
「…………はい。両親との不仲と、その両親の突然の死。…彼女の心には、それは一度に受け入れるにはあまりに大き過ぎる出来事でした。……それが引き金になったのかもしれません。」
「……検査の結果は？」
「L5です。上辺(うわべ)は非常に安定して見えますが、情緒は非常に不安定です。先日から悟史くんの見舞いも謝絶にしました。」

「……悟史に聞きましたです。沙都子の心の傷がなかなか癒えないと気にしていましたです。……入江。沙都子はどうなるのですか。」

「…………………………。」

沙都子ちゃんは、梨花ちゃんにとって親友だ。

その沙都子ちゃんを解剖するためのスケジュール作りがすでに始められているなど、口に出来るわけもない…。

だが、結局、無言で誤魔化したって、沙都子ちゃんを巡る状況は極めて悪いことの肯定にしかならない。

「……入江は、ボクの体を調べて、たくさんのことがわかったのではないですか？」

「ええ、それはもちろんです。………症状を抑える効果が期待される試薬も現在、色々と試しているところです。」

「……それを沙都子に与えることは出来ませんのですか？」

「一度は考えました。…しかし、かなり危険です。体力や精神力に余裕がある検体に試し、少しずつデータを集めていこうという段階です。……沙都子ちゃんのような、もう後がない人間に試せるようなシロモノではありません。」

「……では入江。その薬を試さないなら、沙都子はどうなってしまうのですか。」

まるで、沙都子ちゃんの末路は解剖だと知っているかのような口調だった。

……いや、知っているのかもしれない。

私は彼女に研究のほとんどを明かしている。……彼女が見掛けより大人なら、少し考えれば解剖のこともわかるだろうから。

「……ボクは、沙都子が一パーセントでも助かる可能性があるなら、それに賭けるべきだと思いますです。」

「非常に危険な賭けです。…最悪の場合、彼女は即座に末期発症し錯乱するか、さもなければ人としての心を失い、一生を焦点の合わない目で壁を見て過ごす体になってしまうかもしれない。……どちらも、それはあまりに過酷な運命です。」

「……全身麻酔で痛みを感じさせずに、眠ったままを殺す方がずっといいと言うの？」

「……………………。」

「……入江。よく鷹野が言う通り、医学に百パーセントはない。でも、このまま放置すれば沙都子を待ち受ける運命は百パーセントの、絶対の死しかない。ならば、どちらに賭けるかは明白なはず。」

「……そうですね。その通りです。」

だが、所長である私は誰よりも理解している。

開発中の試薬C103は使い物になるかどうかもわからない段階のものだ。その成功率は百分率に直せば一にも満たないに違いない。
しかも、試薬が体に合わなかったらどのような悲惨な最期を遂げるか、まったく想像もつかないのだ。
だから、………彼女の大好物を好きなだけ振る舞い、…やさしく眠りにつくのを見届けてから、夢を見ている間に解剖してしまった方が、よっぽど慈悲的ではないかという誘惑に駆られてしまう…。
……悔しいが、鷹野さんの言う通りなのだ。自分は、未だ覚悟さえ決まらない中途半端。…そんな人間の作り出すものがどの程度の効果を持つというのか。
……そんな自分の作り出した薬だからこそ、…コンマ一パーセントの成功すら信用することが出来ない…。
「……ボクは、入江の作った薬なら信用出来ると思いますです。」
まるで、私の心を見透かしたような言葉にはっとする。
驚き、俯いていた顔を上げて彼女を見ると、……年齢からは想像もつかないような、しっかりした表情が浮かべられていた。
「……入江は、人の命を左右するとても辛い仕事に耐えている。本来、人の生き死になど、人

間がどうにかしようというのがおこがましいこと。その重圧は、背負った者にしかわからない。」
声は同じなのに、…なぜか私は、私の知らない梨花ちゃんに諭されているような錯覚に陥る…。
そして、その梨花ちゃんは、人の命を背負う重さをすでに十分知っているかのような口ぶりにさえ。
「……その重さは、罪の意識と後悔の重さを加えて決められる。…だから入江は、まだまだ危険な薬を沙都子に試せない。そうでしょう？」
「…………………………。」
かつて鷹野さんにも、同じようなことを言われて責められた気がする。…僕は再び、それを責められている…。
「でも。……だからあなたになら、沙都子を託せると思う。」
「……え…？」
「人の命はとても重い。その重みに耐えかねるのは、あなたが人の命を大切にしたい心があるからこそよ。………そんな心なくして、どうして人を病気から救えるというの？　鷹野みたいに、人をモルモットとしか思ってないヤツの治療薬なんか試せると思う？　くすくすくす。」

「……は、…ははははは…。」
とても笑ってはいけない話なのだが、なぜか笑ってしまう。
……そこで笑うのがいいように感じられたのだ。
「鷹野とあなたが、それぞれに薬を差し出したなら。私は入江の薬の方が治るように思う。だって、薬は人の心から生み出されるんだもの。……自分の身から滴り落ちる雫で、人を救いたいという気持ちが、人の病を癒してくれる。」
「……仰る通りです。……医者が薬のことで諭されるとは…。」
「私は自分の体を、他でもない沙都子のために差し出した。私の体から注射針で抜き出したものは全て、私から沙都子に捧げる薬の雫。その雫から、命の本当の重さを知り、日々後悔と自責を忘れないあなたが何かを抽出してくれたなら。……それが沙都子に効かないわけがない。」
……神社の巫女という存在は人の悩みや懺悔を聞くこともあるのだろうか？
だとしたら、彼女はこの歳ですでに、立派な古手神社の巫女だった。
「…………これは、…賭けになります。……沙都子ちゃんが果たして受け容れてくれるかどうか…。」
「沙都子に伝える必要はありません。沙都子にとって、雛見沢症候群を知ることは、心の深い傷をもう一度えぐることにしかならないのだから。」

彼女が口にしたこの意味。……私は後にそれに気づき、改めて彼女の思慮深さや洞察力に驚くことになる。
「…………解剖計画を中止させましょう。北条沙都子に対するC103投与実験に変更します。……せめて一パーセントでもうまく行く確率があがるように、努力します。」
「……大丈夫ですよ入江。絶対にうまく行きますです。」
「はははは…。そんな、楽観してはいけません。」
「……大丈夫なのです。もう決まってることなのですから。これは、…古手神社の巫女さまの心強いお告げです。……ファイト、お～、なのですよ☆」

◆白川公園転落事故

沙都子ちゃんへの解剖計画は中止され、まったく安全性のない試薬、C103の投与実験プランが実行に移されようとしていた。
この試薬は、ある種のホルモンの分泌を抑えることで、雛見沢症候群が沙都子ちゃんを錯乱へと導こうとする伝達を防ぐのが目的だ。
雛見沢症候群のメカニズムは、前頭葉を支配する病原体が、疑心暗鬼に対し特に過敏になる

ってている。

状態に誘導し、その結果、患者が〝自発的に〟過剰な防衛行動（問題行動）に出ることがわかっている。

その誘導を絶つことが出来れば、末期発症者を錯乱から救うことは可能なのだ。

ただ、誘導を絶つだけで根源的な治療に至るものではない。

…皮肉にも、脳は学ぶ器官だ。

雛見沢症候群によって、過度に疑心暗鬼を学ばされた脳は、たとえ病原体を完全に駆除したとしても、脳はすでに疑心暗鬼に対する抵抗を学び終えている。

つまり、病原体が錯乱を誘導しなくても、患者が自らの意志でそちらに感情を誘導してしまうのだ。

……ゆえに、錯乱直前であるＬ５の状態をきれいさっぱり脱出出来ることにはならないだろう。

（羹に懲りてナマスを吹く、という諺はこれをよく示している。舌の火傷が治ったとしても、熱い食べ物で再び火傷するかもしれないという「恐怖」は治らないということだ。良い意味の時はこれを「学習」と呼ぶが、悪い意味の時はこれを「トラウマ」と呼ぶ）

その治療は恐らく、向精神薬などの投薬治療と、心のケアのようなカウンセリングを両輪に、相当長い時間をかけていかなくてはならないものと想像された。

雛見沢症候群の錯乱誘導を抑えつつ、錯乱直前までに凝(こ)り固まった心の疑心暗鬼を少しずつ解きほぐしていく……。

……沙都子ちゃんのような末期発症者に対する治療プランはこんな見通しだった。

とはいえ、彼女の脳の、感情を司(つかさど)る部分を病原体と私たちで交互に刺激をしようというのだ。

予期せぬ副作用も考えられる。……成功率のカギは、彼女の体力と精神力が握っていた。

彼女の、心の安定と体力の回復を慎重(しんちょう)に見極めたところで、実験を開始する手はずとなっていた……。

そんな中、そんな彼女の心の安定を乱そうという輩(やから)が、連日のように私のところへ押し掛けていた。

……興宮署の老獪(ろうかい)なる刑事、大石である。

彼は、ダム戦争から昨年の現場監督バラバラ殺人事件までを、村の御三家が暗躍(あんやく)する組織犯罪と捉えており、今年の祟りと称されている沙都子ちゃんの両親の転落事故も何かの事件性があるのではないかと確信し、渦中の人物である沙都子ちゃんにしつこく付きまとってくるのだった……。

「……何度いらっしゃられても、沙都子ちゃんへの面会を許可することは出来ません。彼女は両親を亡くしたショックで打ちのめされているんですよ？　それを汲(く)み取ることは出来ません

か。」

「いやいや、本当にちょっとだけお話が聞ければいいんです。そうお時間を取らせるつもりはないんですがねぇ。……令状が必要だってんなら申請しないことはありませんが、そうなるとかなり本格的なことになってしまいますよ？　私も北条さんの容態を気遣ってるからこそ、令状を取るなんて無粋を避けてるんじゃあありませんか。」

「令状を取ってまで、一体、何を沙都子ちゃんに聞こうとしているのか、私にはさっぱりわかりません。」

「……んー〜、実はですねぇ。今回の転落、事故ではなく事件の可能性もありまして。」

「北条夫妻がダム戦争以来、村中から嫌われているという話は知っています。ですが、わざわざ旅行先まで追いかけて突き落とすというのは、少々、突飛過ぎはしませんか？」

「んー〜〜。まぁ、事故でもいいんですがね？　ならば、どうしてもよくわからない嘘があるんです。どうして嘘が必要なのか、って考えるとですね。こりゃあ事故ってことはありえないんじゃないかなぁって思うんです。」

「…嘘、とは何のことですか？」

「いえね。北条沙都子さんの言う、事故当時は車で眠っていたっていう話。…ちょいと話がおかしいんじゃないかなぁって、そう思うんです。」

沙都子ちゃんは当初から、転落事故当時は車の後部座席で眠っていたと主張していた。そのため、事故現場の展望台には降りてもいないらしい。目が覚めた時には、両親の姿がすでになく、途方に暮れ、…その後、両親は崖下へ転落したということがわかったのだ。
「それのどこに嘘があるというんです？　まさか沙都子ちゃんが、実は眠っていなくて、両親と一緒に展望台へ行ったと、そういう意味ですか？」
「そうです。北条沙都子さんは眠ってなんかいなかった。両親と一緒に車を降りて展望台へ行ったんです。」
……………この頃、私はある最悪の想像に襲われていた。
もしも、大石の言うことが本当で、沙都子ちゃんが、実際は両親と展望台に行ったにもかかわらず、行っていないと嘘をつくならば。…ある恐ろしい想像が形を成すためだ。
「な、何を根拠にそう仰られているのかわかりません。それに、なぜ沙都子ちゃんに嘘をつく必要があるのです？」
「それなんですよ。なぜ北条沙都子さんは嘘をつかなければならないのか。それの本当のところを教えていただけないと、…こいつぁただの転落事故ってことでは済ませられないんです。」
「どうして沙都子ちゃんが嘘をついているとお思いなんです？」

「……今回の事故は所轄が違いますので、白川署さんが関係者から事情聴取をしているんですがね？　その調書を読んでみると、どうにも引っかかるところがある。」

「引っかかるところ、…とは何ですか。」

「北条沙都子さんの主張によるならば、彼女は両親に展望台へ行こうと誘われたが、眠かったのでそれを断り車を降りなかったという。そして彼女はそのまま熟睡してしまい、相当の時間が経ってから目を覚ました。そして、いつまでも戻ってこない両親に不安感を募らせ、泣き出した。その声を聞いて巡回中の公園作業員が話し掛けて事故が発覚したことになっています。

この時ですね？　公園作業員の証言では、両親が崖下に転落したと彼女が先に言ったというんですよ。ところがこの時、北条夫妻が停めた車の位置からは問題の事故現場ははっきりと見えたわけじゃないはずなんです。いや、注意深く見れば柵が破損していたのを気付けたかもしれない。

でもですよ？　目が覚めたら両親がいないのを知って、真っ先に崖下へ転落したと言うのは尋常ではないと思うんです。普通は、両親は自分を置いてどこかへ散歩に行ってしまい戻ってこないと言うはずなんです。転落する直接の現場を見てもいないのに、両親が転落したと第三者にいきなり言うのがね、私ゃどうしても腑に落ちないんですなぁ！　…この辺り、どうして彼女は両親が転落したと確信したのか、その経緯を教えてもらいたいと思いまして、通い詰め

ているところだったんですよ。入院前に私も何度かお尋ねはしているんですが、記憶にない、当時は混乱していたとまぁ、まるでどこかの政治家みたいな答弁でしてね。私や、じっくり話をしてみる価値があるかなぁと思っていたんですよ。」

その時点で、…私の中の恐ろしい想像は確実に形となった。

私は、彼女の末期症状発症は、両親の事故によるショックが引き金と漠然と考えていた。

…だが、違う。………沙都子ちゃんはすでに末期症状の状態にあり、事故の直前から心の中を狂いそうになるくらいの疑心暗鬼で満たしていたのだ。

彼女は血のつながらない義父と不仲で、相当のストレスを持っていたという。また、義父といつまでも打ち解けられないことを母に咎められてもいたという。

……そこから疑心暗鬼に取り憑かれ、両親が自分を邪魔者だと思っていて、殺意を持っているのではないかと誤解したなら…。

そして、彼女は展望台に連れて行ってもらった時、自分を事故に見せかけて突き落とすに違いないと思ったのだ。

そして、……彼女にとっては正当防衛という名の悲劇が、両親を崖下へ転落させたのだ…。

雛見沢症候群をもっとも知る自分だからこそ、…確信した。

この転落事故は「事故」ではない。

…そして、大石が睨むような「事件」でもない。

ただただ悲しいだけの、……「悲劇」があっただけなのだ。

後に悟史くんに家族の話を聞き、私はますますにその確信を深めた。

なぜなら、沙都子ちゃんは心を開こうとしなかったが、義父の方は、沙都子ちゃんとのコミュニケーションを取ろうと、不器用ながら努力をしていたと聞けたからだ。

確かに最初はうまく行かない関係だったという。

沙都子ちゃんと幾度となくトラブルを起こし、沙都子ちゃんが市の虐待SOSに嘘の電話を掛けるという事態にまで及んだ。

この段階で児童相談所から指導を受け、義父と娘の交流不足が問題であるとの指摘を受けたという。

そして義父は児童福祉司の指導を受けて市の育児カリキュラムを受講し、不器用ながらも交流を持とうと努力していたのだというのだ。

それを悟史くんはよく知っていて、それでもなお心を開こうとしない沙都子ちゃんを諭そうとしていたという…。

なのに、沙都子ちゃんはそんな努力に気付くことは出来なかった。

極度のストレスから、末期発症を招き、………義父の反省と努力を汲み取れなかったのだ。

…いや、それどころか、義父の対応の変化に、かえって不信感を募らせていったに違いない……。

そしてその結果、……白川自然公園の展望台からの美しい景色を家族で楽しみ、その喜びを共有したいという慎ましやかな、……家族としては当然の願いすら、……沙都子ちゃんには伝わらず…。

………なんて悲しすぎるすれ違いだろう……。

不貞寝して車に残った娘が、のそのそと起き出して、足音を殺しながらやって来る。

それはおそらく義父も聞こえていたに違いない。

…背後からワッ！と驚かすつもりなのだろうな、…なんて思いながら、わざと気付かないふりをしていて。

………その時の義父の心中を思うと、あまりに悲しくなってくる。

……ようやく心が通じたと思っていたら、……相手は殺意を持って襲いかかってきたのだから。

しかもそれは沙都子ちゃんの本性によるものではない。

沙都子ちゃんを冒した病気のせいなのだ。

沙都子ちゃんが気の毒なだけでなく、…突き落とされた両親もあまりに気の毒だった……。

さらにその上、彼女は今や、大石に突き落としの実行犯でないかとまで疑われているのだ。
……悪意ある罪には裁きと懲役が必要だろう。…だが、…彼女に必要なのは哀れみと理解だけなのだ。
……そして、その理解は、雛見沢症候群のことを知る私以外には絶対にできない…。

大石が帰った後も、私は沙都子ちゃんのことを思うと胸が痛み続けた。
私は、入江機関の長だが、そう振る舞ったり、権限を行使したりすることはこれまでにない。
だが、ここの長に就任して初めて、私はそれを行使することにした。
それは秘密研究機関、入江機関の長としてではない。……沙都子ちゃんを守るため、医師として必要と思ったことだ。
「白川自然公園の、沙都子ちゃんの両親の転落事故ですが。……この件、事故で決着するように、山狗の小此木さんにお願いしてもらうことは出来ますか？」
「ええ、そんなこと、お安い御用ですわよ。山狗はそういうものの隠蔽や捏造にもっとも特化した部隊ですもの。…確かに、早くあの転落事故が事故ということに決着しないと、警察がウチの実験体に近付いて邪魔ですものねぇ。」
「……そういうことです。特に、大石さんがこの件から早く引き上げるよう、よろしくお願い

します。……試薬投与実験のデリケートな時期です。不要な心労をかけるのは適当ではありませんので。」
「まったくですわね。山狗にそのように伝えますわ。警察にもすでにコネクションがあるとのことなので、圧力をかけるよう指示しましょう。近日中に、白川転落事故は事故として確定することになると思いますわ。」
事故ということで、確定。
……あぁ、本当に事故だったなら、沙都子ちゃんの心はまだ幾ばくか救われるだろうに…。
病原体を駆除しても、傷ついた心は治らない。…そして、起こってしまった悲しい悲劇も。
せめて、……彼女が笑顔を取り戻せる日が一日でも早く訪れるよう、…私は努力するしかない…。

◆H170

北条沙都子に対する試薬投与実験は順調に進んでいた。
私としては、実験が早々に失敗してくれても一向に構わなかった。
だが、入江が並外れた集中力で実験に没頭した結果、北条沙都子が実験途中に錯乱、もしく

は廃人になるということは回避され、……なんと、L5に至りながら社会生活に復帰できる目処さえ立ちつつあった。

C103にはまだまだ検討課題を多く残しながらも、きめ細かく検体の体調を見ながら投与を調整することで、L5に至った人間ですら生還できるという快挙を成し遂げたのである。

…これについては、半ば馬鹿にしてはいたが、入江の努力を認めなければならない。

いや、入江ゆえにか。

甘えたヒューマニズムに苛まれ、両手を汚すことに未だ抵抗があるからこそ、北条沙都子を死すべき運命から救いたいという使命感に直結したのだろう。

私が入江を嫌っているのは、非情に徹しきれない甘さであって、その実績や能力についてではない。

……その意味において、私は彼を初めて讃えなければならなかった。

「入江所長のレポートを拝見しましたわ。…脱帽と言わざるを得ません。」

「いえ。私は研究者としての職務を果たしたに過ぎません。…その結果、医者としての職務も果たせたなら、私にとってはそれに勝ることはありません。」

「今や沙都子ちゃんは、私たちにとってもっとも重要な検体になったと言っても過言ではないでしょう。何しろ、L5に至りながら生還した初めての人間なのですから。」

「…その通りです。彼女を社会生活に復帰させ、経過を見ながら長期観察に切り替えていきます。彼女には毎週日曜日に、こちらに来てもらって検査を受けてもらえるよう話をするつもりです。」
「しかし、C103を日に三回も注射する義務と、毎週日曜日に検査に訪れる義務を、彼女にどう説明されるおつもりで？　彼女には何の病気の自覚もないのに。」
「…そこは今、うまく納得してもらえる話を考えています。……今、考えているのは、私の研究論文に協力してもらう、というものです。栄養剤の注射を毎日してもらい、毎週日曜日にその効果を検査する。その代わりに研究協力費としていくらかを支払う、という感じです。」
……どうやら入江は、意地でも北条沙都子を完治させるつもりのようだ。
…意地でも彼女を解剖の食卓に上げるつもりはないらしい。
私と立ち位置は違うが、どんな甘い思想にせよ、それが研究への情熱に直結しているなら文句など何もない。
彼のプランが実行に移されるなら、解剖とはまた違った成果を出し、雛見沢症候群の全貌（ぜんぼう）解明に役立ってくれるだろう。
私は、北条沙都子が憎いわけじゃない。
研究のために、食えるものは何でも食うというだけのことだ。

北条沙都子が解剖以外の方法で十分に役立つなら、私はそれで一向に構わない。

「日に三回もの注射となれば、これは本人だけでなく保護者の方の同意も不可欠です。確か、ご両親が亡くなってからは、叔父夫婦に親権が移っていましたね。そちらに一度、相談にうかがおうと思います。姪への怪しげな研究協力を承諾してもらえればいいのですが…。」

「くす、大丈夫ですわよ。そのための研究協力費ですもの。月に十万か二十万も振り込んでやれば大喜びしますわ。」

「それだけの予算はありますか？」

「もちろん。ジロウさんを納得させる資料を作りさえすれば。」

「わかりました。それは私が作ります。あと、沙都子ちゃんに心労をかけないよう指導しておく必要もあります。L5をぶり返すことになったら大変ですからね。……噂では、叔父夫婦はとても現金な方だとか。金銭で丸め込むのは可能かもしれません。それらの指導も私の方できっちり行なうつもりです。」

沙都子ちゃんの新しい親である叔父夫婦との関係が、あまり良好ではないらしいという噂は聞いていた。

しかし、それは私たちとは関係のないことだと思っていた。それに入江がこうまで熱心に関わろうとするとは。

何かのきっかけで、彼女の保護者であろうという使命感にでも目覚めたのかもしれない。それも一向に構わない。使命感に燃えてくれれば研究は一層進む。それは私にとっても助かるのだから。

「……それはそうと。…H170番台についてのレポートを拝見しました。」

「えぇ。入江所長の成果に比べれば足元にも及びませんが、一応の研究成果を出せましたわ。」

「…本当に皮肉ですね。彼女を錯乱から救う治療薬を作っていた研究所で、その傍らでは彼女を直ちに錯乱させる危険な薬が作られていたのですから。」

H170に入江は関わっていない。

私が主導で研究した。…いや、入江に関われと言っても、関わらなかっただろうが。

この危険な試薬は、北条沙都子の脳を支配する病原体が、如何にして宿主を疑心暗鬼や錯乱に駆り立てていくかのメカニズムを解き明かす過程で作られたものだ。

平たく言うと、H170は雛見沢症候群の感染者に投与することで、末期発症を強制的に引き起こせる。擬似的に脳に興奮状態を与え、病原体を意図的に不安定にするのだ。

この危険な試薬の研究をさらに進めれば、我々は一般感染者を好きな時に末期発症させることが可能になるだろう。

末期発症のメカニズムを解明することが、雛見沢症候群を解明することにも繋がるため、こ

のＨ１７０は今後の研究をスムーズに進める上で非常に心強いものとなるに違いない。

また、この薬は、クライアントが求める軍事的効能も期待出来るかもしれない。

現時点ではまだまだ使い道は皆無（かいむ）と言えるだろうが、研究が進めば、無害な状態の病原体を対象とするコロニーに予め蔓延（まんえん）させ、意図的なタイミングでＨ１７０を散布することである種のアクションを起こすことが出来るだろう。

殺人ウィルスに比べれば手間のかかる間抜けな病原体だが、死体からの検出は不可能で、しかも自発的に錯乱したように見える点で、おそらく何らかの用途があるに違いない。

かつて雛見沢症候群の研究を封印しようとした元凶（げんきょう）である、盧溝橋（ろこうきょう）事件。

……あのような、歴史の分岐点となりかねない重要な事件は、殺人ウィルスのような不器用なものでは作れない。

…でも、雛見沢症候群になら可能なのだ…。

……この辺りはスポンサーであるアルファベットプロジェクトの老人たちが勝手に考えればいい。使い道なんて、私にはどうでもいいことだ。

私にとっての目的は、雛見沢症候群の神秘を解き明かすことで、この研究がどれほど重要なものであったかを知らしめることだ。

そして、祖父の成果を偉業と認めさせること。

…軍事的転用はその途中の副産物に過ぎず、どうでもいいことなのだから。
「クライアントにとっては、鷹野さんの成果の方が喜ばれるでしょう。来期の予算取りが楽になるかもしれませんね。」
「くすくす。情熱だけでは研究は続けられませんものね。先立つものがなければ。」
「……潤沢な資金を提供してくださるスポンサーさんには頭が上がりません。……これだけのお金が公費から出ているのですから…。日本という国は、私が想像しているよりずっと豊かなのかもしれませんね。」
「公費は公費でも、表に出せない黒い公費でしょうけれどね。くすくす…。」
そのカネを得るために、私がどれだけの苦労をしてきたかなど、…入江にはわかるまい。
……とにかく、研究は極めて順調。
雛見沢症候群は私たち人類に何を示すのか。まだ見ぬ神秘が教えてくれるに違いない、知的快感に胸が躍る。
人間は単なる空っぽの器に過ぎず、私たちが自らの意志だと信じているものは、前頭葉に住まう特殊な寄生虫たちによるものかもしれない可能性を、雛見沢症候群は示してくれるのだ。
それを解き明かせたなら、……人類はこれまでに解き明かしてきたどんな神秘にも勝る衝撃を得ることになるだろう。

誰もが、そんな馬鹿なと言いたくなるような、真実。
それをあの時代にすでに予見していた祖父の、偉業。
あぁ、今ならはっきりわかる。
この研究が、なぜ祖父をあれほどまでに魅了していたのかを。

◆女王の母の不信

梨花が高熱を出した。それも相当な。
インフルエンザのような伝染性の病気が流行(はや)っている季節でもない。
…私はすぐに、つい最近、梨花が受けたという怪しげな実験を思い出した。それの影響なのかもしれない。
梨花は同い年の子たちに比べ、やや発育が遅れている。
毎週毎週、怪しげな注射やら実験やらを施(ほどこ)されたら、体が参ってしまうに違いないのだ。
少しは加減して欲しいと言っているのだが、当の本人はまるで怖い物知らずで、どのような実験にもほいほい応じてしまう。
それを諭すべき夫も、村人二千人以上に関わる大事だからと吹き込まれて鵜呑(うの)みにし、自分

の娘を毎週、診療所に連れて行っている。
…私だけが、梨花の体のことを本当に心配しているのだ。
だから、入江先生に対し、もう少し梨花のことを気遣って欲しいと文句を言ってやりたかった。
とにかく、この責任をどう取るのかと彼らに釈明させることにする。
電話してすぐに診療所の人が車で駆けつけ、梨花をすぐに診療所へ入院させることになった。
それに、私も保護者としてついて行くことにする。
「落ち着いてください、お母さん。必ず救いますから、もうしばらくお待ちになってくださ い。」
「これが落ち着けるかと言うんです！　急にこんな高熱が出るなんておかしいじゃないですか…‼　これも先週にやった何とか何とかという怪しげな実験の影響じゃないんですか⁉　梨花はね、歳相応の小さな女の子なんですよ⁉　梨花は友達思いだから、病気にかかった友達のためにと、」
「わかっております…。それに私たちの研究が、間違っても梨花さんに悪い影響を及ぼすようなことはありえませんし、万一そのようなことが起こらないよう、常に注意をしています。」
「だったらこの梨花の熱は一体どういうことなんですか‼」

「恐らくは季節の変わり目ですので、」
「風邪のわけないでしょう⁉　あなたたちが妙な薬を注射したからに決まっています‼」
入江先生は、落ち着けの一点張りで、梨花の熱が自分たちのミスだとは決して認めないようだった。
…夫に、村の一大事だからと言われ、私は今日まで心の中の不信感を抑えてきたが。正直なところ、それももう限界だった。
大体、彼らの存在は一番初めから不審過ぎるのだ。プライバシー保護だか何だかの観点から秘密に研究。
…これだって十分疑わしい。そんなのあるわけがない。
実際、私は厚生省に電話を掛けてみたが、そんな事実はないとあっさり言われてしまった。私が古手梨花の母だと名乗ってもだ。
彼らはそれを、自分たちは特別な機関なので、一般職員は存在を知らないこともある、などとはぐらかすが…。絶対におかしい。疑わしい。
それに、研究所の中には研究員とは明らかに違う人間たちがいる。
……一見するとそれは警備員だが、一般的な病院のそれに比べてあまりに違和感のある人間たちなのだ。

私は以前、見てしまっている。彼らが実は拳銃で武装しているということも。
「……それはですね、……。」
「あの人たちは警察なんですか？　とてもそうには見えません！　大体、あなた方は何者なんですか！　厚生省の人間だなんて、私は今さら信じませんよ！」
入江先生は、すっかり私の気迫に飲まれてしまって、満足な返事も出来ないようだった。
彼らはまだまだ私たちに何かを隠しているのだ。
そしてそれは、梨花を巡るこの研究が、まともなものではないことを示しているのだ。
「とにかく、私は梨花の保護者です！　梨花はまだまだ子供です。あの子が何をどう返事しようとも、今後は一切、研究を手伝わせるつもりはありません！」
その時、優雅な、…といえば聞こえはいいが、私の激しい口調がすでに聞こえていただろうことを考えれば、あまりに温度差のある雰囲気で、鷹野さんがやってきた。
「…あらあら。梨花ちゃんのお母さんではありませんの。どうもこんにちは。…………あら、どうかなさいまして？」
「いえ、…その。…お母さんが、梨花ちゃんをこれ以上、研究に関わらせたくないと仰ってまして…。」
「……それはどうしてですか？」

「うちの子はあなたたちの実験動物ではないからです!!」

「…………そう扱ったことなどございませんわよ？　それは大きな誤解ですわ。」

少しだけぎょっとする。

…入江先生は少し押したら引いてくれる気の弱い人のようだった。

だが、この鷹野さんという人は、……私が怒鳴る側だというのに、まるで怖気（おじけ）づかないのだ。

いや、それどころか、目をぎらぎらさせて、私に食って掛かろうという風にすら見える…。

「梨花ちゃんの熱は風邪によるものですわ。私たちのせいだなんてとんでもない。私たちは安全や衛生には国立研究所クラスの注意を払ってます。失礼ですが、アルコール消毒もしない手で、梨花ちゃんの手を引いて歩いているあなたより衛生的なくらいですわよ？」

「………そ、そんなことは聞いていません!!　とにかく、梨花はあなたたちの玩具（おもちゃ）じゃないんです!!　梨花はもう二度とここへは連れて来ません！」

「あなたの一存で決められては困りますわね。ご協力をいただくことについて、ご両親には誓約書にサインをしてもらっているはずではございませんの？　研究に協力していただく見返りに、決して少なくない額を毎月お口座に振り込ませていただいてるはずですわ。」

「そ、…そんなお金、私は知りませんよ!?　聞いたこともないです!!」

梨花が研究に協力することでお金が出ていたなんて初耳だった。

…夫の性分から考えて、私に内緒で小遣いにしていた、ということはあるまい。
恐らく、村人のための無料奉仕とか考えて、お金が振り込まれているなんて話はとんと忘れているに違いない。
……普通預金にはそんなおかしな入金はないから、…定期預金の方だろうか…。
…とにかくとにかく、そんな話は私は知らない！
「契約を反故にされる場合には、それまでの振り込み額を全て返還していただくことになっているのはご存知ですわね？　他にも一方的な反故についてそちらに非がある場合、」
「鷹野さん…！　落ち着いてください。お母さんもどうか…。雛見沢症候群は以前にもご説明させていただきましたように、村人たちが安心してこれからも生活していくために、絶対に治療していかなくてはならないものなのです。そのためには梨花さんにどうしてもご協力が必要なのです…！」
「治療のためって、じゃあその治療薬はいつになったら出来上がるんですか⁉　大体おかしいじゃないですか‼　梨花の友達の沙都子ちゃんのためということでしたけど、その沙都子ちゃんはもう退院して元気に生活しているというじゃありませんか。確か、先々週にうちの人が話を聞いた時にも、もう治療の目処は立ったというようなお話をされていたはずですわよね⁉」
「え、ええ。目処はついた、というような話はしたと思います…。ですが、雛見沢症候群の全

貌を解明するためには…」

「全貌の解明なんか最初の話で聞いていません！　梨花が協力するのは村人の病気を治療するためのはずです。ならもう十分ではありませんの!!　皆さんが梨花に怪しげな研究やら検査やらをしているのは、あなた方の興味本位であって、治療とは何の関係もないんじゃありませんの!?」

「そんなことはありません、そんなことはありません…！　とにかく梨花さんの風邪の件は誤解なんです。もし、どうしても御不審ということでございましたら、」

「とにかく、もう結構です！　お金の話もあるみたいなので、私も帰って夫と相談しますから！　それでは失礼します!!」

…大体、この連中は初めから胡散臭かった。

何だか大仰なことを言われて、うちの二人はすっかり丸め込まれてしまったけれど、私はそうは行かない。

とにかく、ここできっちりと清算しなくては。梨花はあいつらの玩具なんかじゃない。

…特に気に入らないのは、あの鷹野という人だ。

……入江先生はまだ医者という感じがするが、あの人にはそういう感じがない。

……何て言えばいいんだろう。

……そう、眼に宿る光が嫌らしいとでも言おうか……。梨花のことを実験動物としてしか見ていない。そういう残酷さがひしひしと感じられるのだ。
それを、うちの人も梨花もまったく気付いていない。
私が守らなくては。母として梨花を守らなくてはいけない……！
「…鷹野さんらしくもない。あそこで喧嘩を買ってしまったら、余計に話がこじれてしまうではありませんか。……あなたらしくもないですよ。」
「………そうですわね。ごめんなさい、取り乱してしまって。」
何か不機嫌になることでもあったのだろうか。
先ほどのやりとりは、鷹野さんらしくもなく感情的だった。

◆一二三四

鷹野さんは、僕が訪れる度に一緒に撮影の散策に付き合ってくれた。
彼女なりにカメラの楽しみ方を見つけたらしく、僕も同好の仲間を作れてとても嬉しかった。
だが、彼女には実はそれ以上に没頭させる趣味があった。…それが、雛見沢の古代史などを

調べることであった。

彼女はまめに図書館や郷土資料館に足を運んでは、様々な文献を読み漁り、特に雛見沢に関しては、相当博識な郷土史家になっているようだった。

彼女は機嫌がいい時、僕を捕まえては雛見沢がかつて鬼ヶ淵村と呼ばれていて、オヤシロさま信仰に基づく残酷な儀式をいくつも執り行っていた話を聞かせてくれた。

どうも彼女は物騒な話が大好きらしく、それがかえってミステリアスな魅力を感じさせるのだった。

……生憎、僕はどちらかというとグロテスクな話は苦手なので、実は相槌を打つのが精一杯。

彼女が胸をときめかせる残酷な儀式の話には、実はあまりついていけてなかった。

それでも、そんな話を聞かせる時の彼女の輝く瞳が好きで、僕は彼女のそれに付き合うのがそんなに嫌いではなかった。

「鷹野さんはそういうのを調べるのが好きだねぇ…！」

「あら、だって楽しいわよ？　封印された過去の暗黒史を紐解くなんて、とてもわくわくすることだとは思わない？」

そう言いながら微笑む鷹野さんを見ていると、暗黒史というものがとても楽しそうなものに見えてきてしまう。

…だがもちろんそんなことはない。
彼女が好んで調べる雛見沢の暗黒史は、中世の魔女狩りを思わせるような残酷かつ無残なものばかりだ。
「それに、雛見沢症候群を調べる上でもとても役立つことなのよ？　何も顕微鏡を覗くことだけが調べることになるとは限らない。この寄生虫と、長い時間を過ごしてきたこの村の伝承の方が、よっぽど重要な何かを教えてくれることもあるんだから。」
「それもそうだね。…うん、鷹野さんは本当に研究熱心だよなぁ。」
「くすくす。だって、研究こそ私のライフワークだもの。未知の神秘に踏み込み、誰も知らなかった秘密を暴くことって、とっても楽しいことだとは思わない？　知的好奇心をうずうずさせてくれる。それは多分、考えることに悦を感じることが出来る、人間だけに許された最高の娯楽だと思うの。この研究の第一人者だった高野先生も、雛見沢症候群の研究に生涯を捧げるだけの何かを見出し、その魅力に取り憑かれていたに違いないでしょうね。……多分、私だけが、そんな高野先生の気持ちを理解してると思うの。……研究者でないジロウさんには難しいかしら。くすくすくす。」
彼女は雛見沢症候群の存在に初めて気付いた個人研究家、故高野氏について語る時はいつもとても雄弁だった。それは多分、研究者としての尊敬の念以上のものがあるのではないかと思

う。
…そう言えば気付いた。
高野先生は確か、フルネームが高野一二三だ。
…そして鷹野さんは、鷹野三四。
どちらもタカノで、123と34。…何だか不思議な関連性があるように感じた。
鷹野さんの素性は僕も全てを知らされているわけではないが、多分、鷹野という名前は偽名である可能性が高い。
……となると、尊敬する研究者にちなんだ名前を自らに付けている可能性もありえた。
「なるほど。……ひょっとして鷹野さんは、だから三四という名前なのかい？」
「……え？」
「いや、鷹野さんが尊敬しているその先生の名前が確か、高野一二三。そして、鷹野さんの名前が三四。…123の後を引き継いで、34。彼が成し遂げられなかった研究を引き継いだから、そういう名前なのかなって思ってね。」
「………………それを誰かに聞いたの？」
「…え？　いや、あははは、今、僕が適当に考えただけなんだよ…。別に誰かが言ってたわけじゃ、」

「くす。……正解よ。鈍いジロウさんにしてはよくわかったわね。」
「いや、鷹野さんが、その高野先生をとても尊敬しているのは知ってたし、まるで自分が実の娘か孫で、研究の正統な後継者だというような感じで言っていることがあったからね。何となくそんな気がしただけなんだよ。……作家のペンネームだって、ほら、江戸川乱歩(えどがわらんぽ)みたいに、尊敬する作家のオマージュで名前を付けることもあるし。なら、鷹野三四って名前もペンネームみたいなものなのかなぁって思って。」
「そんなことはないわよ。鷹野三四は本名よ。……もっとも、鷹野のタカは、鳥の鷹じゃなくて、高い低いの高が正しいけれど。」
「え？　じゃあ、高野先生とは本当は同じ苗字なのかい？　それはますますびっくりだね……！　しかも三四が本名とは…。高野一二三の研究を高野三四が継ぐ…。何だか運命的偶然を感じるね……！」
「くすくす。ジロウさんったら、運命的だなんて大袈裟(おおげさ)な。別に運命でも何でもないのよ。だって、私の祖父だもの。」
「…………え⁉」
それは初耳だった。
鷹野さんが高野先生の死後、残した文献から雛見沢症候群について書かれたものを見付け出

し、研究を引き継いだということになっていた。
あくまでも髙野先生とは他人であって、血縁であるという話は一度も聞いたことがなかった。
「祖父の研究を引き継ぐために予算を、というと、まるで身内贔屓のために予算を引っ張ろうとしているように見えて、印象がよくないという風に助言をしてくれる人がいたので、タカの一文字を変えたからなの。だから人前で髙野先生が私の祖父だと話したのは、……小泉のおじいちゃんを除いたら、ジロウさんが初めてになるわね。」
「…………そ、……そうだったのかい。…………なるほどね。君が雛見沢症候群の研究に、入江所長も驚くほどの情熱を見せる理由がちょっとだけわかったよ。」
今ならはっきりと理解できる。……彼女は、祖父が完成できなかった研究を引き継いだのだ。
「祖父も、医学的見地からだけでなく、古文書などの文献からも雛見沢症候群を探っていたの。……雛見沢症候群と何百年にもわたって共にあった村の文献を調べることは、何百倍もの倍率を持つ顕微鏡を覗くより価値がありえるというのは、祖父が私に教えてくれたことなの。」
「……なるほどね。だとしたら、自分の完成できなかった研究をこれだけ立派に引き継いでくれたお祖父さんは、きっと喜んでいるだろうね。こんなに熱心な孫に引き継げて、とても嬉しいはずさ。」
「くすくすくすくす。そうだといいわね。」

普段の鷹野さんになら茶化(ちゃか)されてしまうようなことを言ってしまったが、鷹野さんは茶化したりせず、普通に頷(うなず)いて微笑んでくれた。

……間違いない。彼女は本当に髙野先生の孫娘なのだ。

「祖父が一二三で123。私は三四で34。……私は祖父を継ぎ、ようやく3を共に数えたに過ぎない。そして、祖父の次の4を数え、…………私も祖父もまだ見ぬ5へ至らなければならない。それが私の使命であり、生まれてきた理由でもある。」

「それで三四という名前なんだね。素敵な名前だと思うよ。」

「ありがとう。私が孫だという話は内緒にしてほしいの。クライアントの人たちにも言ってないから、彼らの耳に入って、痛くもない腹を探られたくないから。」

「あははははは、うん。わかったよ。これは僕と鷹野さんの秘密ということで。」

　こんなささやかな秘密でも、僕しか知らないというのには小さな優越感を感じずにはいられなかった。

「…………私はようやく3を数えただけ。まだ4にすら至っていない。研究の道のりはまだまだ険しく長いけれど、…私は最後までやり抜くわ。必ず雛見沢症候群の秘密を暴く。」

「僕もそれを応援するよ。………あはは、元々、それが僕の役割だしね。」

「もう。そういう余計なことを言わなければ十分かっこいいのに。一言、応援するって言って

くれればいいのよ。」
「あ、あはははは……！　するよ、君を応援する。」
「二度言い直しても駄目ね。一回で言えなくちゃかっこよくはならないわね。くすくすくす。」
僕たちは朗らかに笑い合うのだった。
そして笑い終わると、最後だけ釘を刺すように、彼女は少し真顔になって言った。
「だからジロウさん。……くれぐれも私が孫だって、言わないようにね？」
「言わないよ。約束する。」
「孫だからいけないということはないけれど。……クライアントがそれを知って不快に思ったら、予算を切られるようなことがあるかもしれない。」
「そんなことはないと思うよ。第一、僕はしゃべらないしね……！」
「絶対よ？　本当の本当に絶対よ…？　私はこの研究のために命をもらったの。祖父の研究を完成させることだけが私の使命。踏みにじられた研究が、世界を驚かす偉大なものであったことを証明し、土の下で朽ちる祖父を讃えさせ、…神に昇華させること。それだけが私の生きる理由であり目的なの。………ジロウさん。…もし、それを邪魔するような不用意な言葉をあなたがうっかり漏らして、研究に支障が出たならば…!!」
「……だッ、大丈夫だよ、ここで聞いた話は忘れるよ。」

「…………………………。」

「…本当さ。…いや、絶対に口外しない。」

「…………………。」

「僕は約束は守るよ。……絶対に言わない。」

「…絶対よ、ジロウさん……？」

ほんのわずかだけ、彼女に鬼気迫る何かがあった。

僕は、彼女がそれに染まりきってしまうのが怖くて、先に秘密を守ることを誓う。

研究者としての知的好奇心と、祖父の研究を完成させたい気持ちの二つが、彼女を雛見沢症候群の研究への情熱を掻き立てているのはわかる。

……だが、もう一つ、彼女を掻き立てている理由があるようだが、……それはあまりに深く、…僕如きが触れない方がいい、心の傷口の谷間にあるように感じられるのだった。

それにしてもさっき。

…彼女が言った言葉。「研究に支障が出たならば…!!」の先は一体何と続けるつもりだったのか。

……僕には、その後に何か恐ろしい言葉、容赦のない言葉が続いたような気がしてならない。

僕は彼女との約束を守り、…この日以来、この話題に触れたことはなかった…。

◆生贄第三号

状況が、変わった。
研究に協力的だった梨花の父親が方針を変換したのだ。
先日、梨花が高熱を出した一件以来、もともと納得していなかった母親の不信感が爆発したらしい。
……それを、研究に対し理解を示している父親がうまく治めてくれると期待していたのだが…。むしろ逆に、父親側が感化される結果となったようだった。
父親は母親と違い感情的な対応はしなかったが、梨花に対する今後の研究計画を明らかにし、長くとも三ヵ月以内にその研究を終えること、という非常識極まりない条件を突きつけてきた。
…研究に刻限が切られるなど論外だ。
私たちは知識と工夫と時間をすり潰して成果を醸成する。
…そこから時間を抜くのは、水と塩さえあれば生きられるという人から、水を奪い塩だけで生きろという暴言にも通じる。

ド素人のくせに何を言うか、おのれおのれおのれおのれ……。

…古手夫妻が研究について何も知らない素人だからこそ言える暴言だが、…女王感染者の保護者である事実は重く、私たちはどう対応すべきか、考えあぐねていた…。

女王感染者への様々な実験や検査は、今や雛見沢症候群の研究に欠かせないものになっていた。彼女の存在はまさに研究の羅針盤。彼女を失うことは、大海原で方角すらも失うことと同じなのだ。

梨花本人は研究への協力を申し出てくれているが、保護者の同意を失うことは研究の頓挫につながりかねない。

……事態は非常に深刻だと言えた。

古手夫妻は、治療薬さえ出来ればいいの一点張りだが、……私にとって治療薬は、明かすべき神秘の中の極めて小さな一部に過ぎない。

こんなところで手を引かれてはたまらないのだ。…ここに来て、双方の思惑が食い違ってきたということか。

……そして、とても悔しいことにそれは、私と入江においてもそうらしい。

あの男は、古手夫妻の非協力を理由に研究が頓挫するのも止むを得ないと考えているようだ

った。

……それはそうだ。入江には元々、雛見沢症候群を解き明かしてやろうという決意などありはしない。

積極的に研究を降りるようなことはしないが、夫妻に同調し、消極的に研究を降りようとしているのだ。

……何てこと、それが神秘に挑もうとする研究者の態度なのか…。

このような男が祖父の論文に足跡を刻印する前例主義者になるのだ…！

所詮(しょせん)、あの男は、中途半端に興味を持ち、実際に跳ね返る血を浴びて、過去の実績にまで罪の意識を感じ出した小心者でしかない。

雛見沢症候群という神秘に触れる資格などもともとなかったのだ。

……クライアントの都合でやむなく混ぜた部外者でしかない。……私が女でさえなかったらきっと必要とはされなかった程度の、便宜(べんぎ)上の代表。

確かに、治療薬を開発出来たことは素晴らしい成果だが、…入江の中では、それをもって研究を畳(たた)んでしまってもいいのではないかと思わせているようだ。

自分だけ小さな成果を出して、それだけで満足して全てをドブに捨ててしまうつもりなのか。

……貴様に祖父の研究を破棄(はき)する資格などありはしないのに…。ぐつぐつと腸(はらわた)が煮(に)えくりかえ

ってくるのがわかる…。

いやいやいや、入江が一番悪いわけじゃない。
一番悪いのはあの女なのだ、梨花の母親なのだ。
あいつが我儘を言い出さなければこのようなことには……！
…ある意味、自分に非があるかもしれない。
私は今日までにあらゆる人間の縁や義理を重んじて信用を積み重ねてきた。…だが、梨花の母親とはどうしても反りが合わなかったので、私は積極的に交流をしようとしなかった。
……梨花本人と、父親と交流が出来ているから問題ないと考えていた。
だが、ここにきてその母親は影響力を持ち、父親の方針を変換させてしまったのだ。
…なんたる油断！　なんたる逆転！　なんたる失態ッ!!
入江は、今後をどうするか東京の判断を仰いで欲しいと言い、私に調整を任せている。
……だが、東京に素直に相談すれば、安全第一で研究を中止せよと言ってくるに決まっている。
この研究は、私が様々な方面に働きかけて無理やり成立させたものだ。
…もっともらしい大義名分が出来れば、すぐにでも終了させられてしまうに違いない。

祖父の研究を完成させるためにようやく軌道に乗り始めたというのに、……こんな下らないことでつまずいてたまるものか……！

私が本件を預かり、……こうして迷っていられる内だけが猶予なのだ。

…落ち着いてよく考えてみよう。

お気に入りの紅茶を飲みながら、こうして爪を噛んでいればいつだって妙案が思いついたはず…。

軽く天井を見上げ、目蓋を閉じる。なるべく柔らかく。

………私にとってどうしようもない問題でも、…他の立場の人間に相談したら、あんまりにもあっさり解決してしまったということが少なくなかった。

そうしていつも難問を乗り越えてきたのだ。

あの施設での地獄のような日々だって、私は耐えて生き延びてきた。

…この程度の、あの程度の女の我が儘で全てを引っくり返されるようなことがあってたまるものか…！

………心を落ち着けろ。

冷静に考えよう。

クールになれ、鷹野三四。

…私とは違う立場の人間なら、私には思いつかないアプローチが見付かるのではないか。

でも、…それは誰？　もちろん私ではないし、入江でもない。…当然、村の人間でもないだろう。

…東京の誰かに相談する？　いやいやそれは駄目だ。悩みの相談は足元を見られるし借りを作る。

…小泉先生にだってこの程度のことを相談したら見限られるに決まってる。

……………………あ、そうだ。

…もっと身近に相談できる人間がいた。…私の部下ということになっているのだから、話だけでも聞いてみるのがいいかもしれない。

私は入江機関直属の防諜部隊、山狗の隊長、小此木を呼びつけた。

山狗は組織上、私の直轄の部下だが、元々彼らは自衛隊、私は研究者。

立場の違いから、これまで積極的に交流することはなかった。

彼は彼。私は私の仕事に専念しているのがほとんどで、何か相談してみようと思うことなどなかったのだ。

だが、山狗は本来、私たちの研究を守り、研究とは違う形でサポートするためにいる。…それを使わない手はなかった。

「そらぁ、難儀なこってすなぁ。へっへっへ。」

かつては標準語でしゃべっていた小此木も、今ではすっかり雛見沢訛りになっていた。

…地元に溶け込むのが防諜の基本らしい。

「このままだと、女王感染者の協力が受けられなくなるばかりか、騒ぎ立てる母親によって研究所の存在が暴かれる危険性もある。………山狗で何か手は打てる？」

…フランクな受け答えをする小此木に、私は半ば投げ遣りに聞いた。

…正直なところ、返事は期待しなかった。……だが。

「了解しました。山狗で処分しますすん、お時間をいただければ綺麗にやりますよ。」

「……処分？」

「警察沙汰にならんようにしますすんね、少々の準備は必要ですが。難しい仕事じゃありませんね。」

私はぎょっとする。

………私にとって梨花の母親は確かに敵で、どうやったら説得出来るかと考えていたのだが

…。
……この研究所の機密保持を担う防諜部隊、山狗の隊長は、実に山狗らしい提案をしてくれたのだ。
「……それは、……殺すということ？」
「入江機関の機密保持に当たっては、最悪の場合、それも辞さんっちゅう話のはずですが？もちろん、ご命令があって初めて実行することってすが。」
そう。…彼らにとってはあまりにシンプルな問題だったのだ。
梨花の母親がトラブルを起こし、私たちの研究を妨害するのみならず、研究所のことを外部に漏らしかねないなら、……処分するまでなのだ。
「…………そ、……それは確かにうまい手ね……。うまくやれるの？」
「そのために来ている我々ですんね。大臣孫の誘拐以来、久々の大仕事になりますわ。」
そうだ。
……建設大臣の孫を誘拐し、脅迫するということを易々とやってのけた山狗じゃないか。
あれから数年が経ち、すっかりそれを忘れてしまっていたが、彼らは当時、実に素晴らしい仕事をやってのけていたではないか。
そうだそうだそうだ…。私には山狗がいたのだ…！

「…実行はすぐにでも可能？」

「ただ殺すだけなら今夜にでも。ただ、それでは騒ぎが大きくなりますんね、周到に監視してから、綺麗に蒸発してもらうようお膳立てします。そのための時間さえもらえれば。」

猫が暗いところでは瞳孔が開くように。……私の瞳の奥にある何かが、ぐわっと開いたような感じがした…。私はこれまで、邪魔者を如何にして味方に取り込むか、あるいは屈服させるか懐柔させるかに頭を痛めてきた。

それを、…この男に命令するだけで、こんなにも簡単に解決出来るなんて…！

それはまるで、自分が今まで空を飛べることを知らなくて、初めて羽ばたいた大空のような驚き…。

…あぁ、あのヒステリックで腹立たしい梨花の母親を、…私はこうして口頭で命令するだけでいつでも消し去ってしまうことが出来る……！

このような部下をつけてくれたのは全て、小泉先生が取り計らってくれたからだ。

……あぁ、小泉先生はこんなにもすごい力を私に授けていてくれたのか…！

人と人は平等だと、生まれた時から教えられてきた。

だが、私に人の生き死にを自由に出来る力が与えられているということは、…人より上の存在であることを認められているということになる。

……それは、自分が人間よりヒエラルキーの上位に位置することを知る快感。

「消すのは、古手梨花の母親だけでいいですんね？」

「え？　ぁ、………いや、……ちょっと待って……。」

古手梨花の母親〝だけ〟でいいかって？

…ぞくぞくとしたものがさらに全身にみなぎっていくのがわかる。

他にも消せるなら、……面倒な父親もこの際、消してしまった方がいいんではないか…。

梨花は元々、協力的だ。

それに古手家は親類がいない。両親が揃って死ねば、誰かに頼らざるを得ないはずだ。…それを、入江機関ならサポートすることが出来る。

身分、生活費、保護、全てを与えることが可能だ。いやむしろ、そうすることで梨花を協力者ではなく、完全にこちら側に取り込んでしまうことも可能かもしれない…。

私の悩みが見る見る氷解していく…。全てはとても下らない…。

初めから全部杞憂だったのだ。

……私にはこんなにも強力な部下がいたのに、それに気づいていなかったなんて…。

すると、私の切羽詰った感情はゆっくりと解け、……徐々にリラックスを取り戻し、普段の冷静な私が戻って来るのを感じた。

…………消してしまおう。梨花の両親を。
…女王感染者は私のモルモットであればいい。モルモットに保護者など不要だ。
そうだ。…………もうすぐ、綿流しのお祭りじゃないか…。
もし、…その日に死んだなら、きっと、オヤシロさまの祟りと呼ばれるに違いない。
……一昨年のバラバラ殺人も去年の転落事故も、…個別の事件のはずなのに、綿流しの日に起こったばかりに祟りと呼ばれている。
…なら、両親の死も、この日に重なれば、それは実に綺麗に、オヤシロさまの祟り三年目として積み重なるのだ。
オヤシロさまが示す、奇跡。祟り。………それを、ワタシが築く。
運命のサイコロにて人間を試す高慢な存在である神の領域に、ワタシが踏み入ることができる最高の機会…。
二年連続で起こった事件は祟りと呼ばれているが、まだまだ一部の人間の不謹慎な冗談の域を出ない。
でも、それが三年目も起こったなら、誰もが祟りであることを疑わない。
…つまりそれは本当の祟りであり、……しかもそれは私が示した祟り。
ワタシが、オヤシロさまとして神として、示した祟りになるのだ。

私の持つ、神に対する復讐心が……少しずつ首をもたげて来る…。
「……ただ、消すだけでは何だか面白みがないと思わない？」
私がくすくすと笑い出すと、小此木も何を思いついたやらとニヤリと笑って興味を示してくれた。
「私たちで、オヤシロさまの祟りを作ってみるの。……くすくすくすくす。」
ただ殺すなんて勿体無い。
鬼隠しにして、あのヒステリックな女を生きたまま、たっぷりと解剖して楽しんでやる…。
もちろん、ただ楽しむだけじゃない。
それはこの上なく研究に役に立つ。何しろ一人は先代女王感染者なんだから…！

◆古手夫妻怪死事件

心の中で、…ひょっとすると今夜、再び何かが起こるかもしれないという覚悟はあった。
一年目には作業員たちをそそのかして、おやっさんをバラバラにして殺し、二年目には何らかの方法によって、北条夫妻を事故に装って殺した。
…ダム戦争の時、村に仇敵として嫌われた人物ばかりが、雛見沢にとってもっとも意味の

ある、綿流しの祭りの日に死ぬ。

村の中では一部の人間がこれを「オヤシロさまの祟り」と呼んでいるらしいというのは、無論、私の耳にも入っていた。

ダム戦争が終わり、その戦犯を祭りの夜に殺して清算することで何かの意味を持つのではないか。…私はそう考えていた。

だとしたら、ダム戦争の時の戦犯はまだ何人かいるはずだ。

……それはひょっとすると三年目の祭りの夜にも起こるかもしれない。……その勘は当たった。ただ、それは最初、あまりに自然で事件にはまるで見えなかった。

祭りも終わりに近付き、本部テントには町会幹部たちが大勢ひしめいていた。

そして、ビールをかぱかぱ空けて、模擬店の売れ残ったモツ煮込みやトウモロコシを肴(さかな)に大いに盛り上がっていた。

私もその時は、町会の連中にもてなされていて本部テントにいた。

……だから、この三年目の事件の一番最初に、私は立ち会っているはずなのだ。…にもかかわらず、私は事件の始まりに気付けずにいた…。

「あんれ、古手さん、どうしたよ。気分悪いのかい?」

村の老人たちは皆、酒豪だが、中には弱い人間もいる。神主もその内のひとりだった。
綿流しの祭りの中において、神主は代表でもありホストの役目でもある。
来賓が来る度に挨拶するし、その度に返杯を受けるので、夜が更けた頃にはくたくたになっているのは想像に難しくなかった。
だから、神主が喧騒から外れてパイプ椅子に俯くように腰掛けていても、特におかしいとは思わなかった。
そんな神主に、大丈夫かいと肩を叩いたのが公由村長だった。
「…大丈夫？　あっはははは、飲みすぎだよきっと！　何、胸が苦しいの？」
「……うむ…。すみません、ちょっと疲れたようです。」
「あれぇ、あんた心臓やってたっけ？　急に痛くなるのはよくない兆しだよ！　入江先生！　先生ぇ〜！」
「どうしましたか？　……胸ですか。それはよくないですね…。」
「…むむむ……、……ぅぅぅ。」
見れば神主は嫌な汗をべっとりとかいており、とてものんびりと椅子に座って夕涼みを洒落込んでいるようには見えなかった。
……顔色も悪く、すぐにでも横になった方が良さそうに見えた。

「……ちょっと診療所にお連れした方がいいかもしれません。大丈夫ですか？　私の肩に摑まれますか？」
「おいおい、誰か手伝ってやれー！」
「神主さん、調子が悪いらしいぞ…。」
「うちの人、どうかしたんですか？　あなた、大丈夫…⁉」
「鷹野さーん‼　ちょうどよいところに。神主さんの具合が悪いようなので診療所に連れて行きます。すみませんが、境内の下に車を回してもらってもよろしいですか？」
「ええ。お安い御用ですわよ。…くすくす。」
そうして、神主と奥さんは入江先生たちと一緒に診療所へ向かっていった。
……若者ならいざ知れず、老人は自分の体について熟知してる。
具合が悪くなるまで無理をすることなど滅多にない。
神主ほどの人に限って、飲みすぎて具合が悪くなるなど、なかなか考えられないことだ。
長年、培ってきた嗅覚が何かを知らせる。……私は念のためと思い、入江診療所に向かった。
車で後を追おうとしたが、祭りの終わり際で、模擬店の撤収などで車がかなり出入りしており、臨時駐車場をなかなか抜け出せなかった。
なので、神主が担ぎこまれてから二十分以上も過ぎてから私は診療所に辿り着いたのだった。

この二十分。
この二十分がなかったなら、この年の事件に対する私の関わり方はもっと違っていただろう。
…車がなかなか出られないとわかった時点で、徒歩で向かうべきだったと後悔する。
この大石蔵人が、未だに後悔する痛恨のミスだ…。
………あとは、事実のみを記すしかない。
神主たちが祭りの会場から姿を消し、私が診療所に辿り着くまでのたった二十分間に、今年の祟りは全て行なわれてしまったのだから。
神主は、診療所に運び込まれた直後に容態が急変。死亡した。
……後日の検死の結果、心不全ということになったが、それを鵜呑みになどとても出来ない。
神主が体調を崩していたという話は聞いていないし、誰にとってもそれはあまりに唐突なものだったのだから。
そしてさらに、付き添いをしていたはずの神主の奥さんが消えていた。
診療所の人間が言うには、神主が死んだ直後には間違いなく側にいたのだが、ふと気付いたら姿が見えなくなっていたというのだ。
もちろん、自宅にも帰っていない。
私はこの時点で、神主は何者かに毒のようなものを飲まされたのではないかと疑っていた。

……神主は、ダム戦争の当時、大騒ぎしなくてもいずれダム工事はなくなると日和見的な発言をしてひんしゅくを買ったことがあったからだ。

……根に持ちやすい村の老人たちはそれを忘れておらず、そんな神主はオヤシロさまを祀る神社に相応しくないと陰口を言っている、というのは私の耳にも聞き及んでいた。

すぐに応援を呼び、失踪した奥さんを探させることにした。

……昨年の夫妻転落事故の例のように、夫婦が丸ごと犠牲になるのは考えられないことではなかったからだ。

村の青年団も集められ、村から山までを探した結果。

……鬼ヶ淵沼のほとりで、揃えた草履と遺書が見付かった。

遺書には、夫の死はオヤシロさまの祟りであり、自分の身をもってオヤシロさまの怒りをお鎮めする…というような内容が書かれていたといい、沼に入水自殺したことをほのめかしていた。

鬼ヶ淵沼は大昔から沈めば二度と帰ってくることのない、鬼の国へつながる底なし沼ということになっている。

警察のダイバーが慎重に調べたが、ついに遺体を見つけることは出来なかった…。

過去の二つの怪死事件は、警察の上層部が押し付けがましく言うように、個別の事件ですで

に解決しているようにも見える。

……だが、この三年目の怪死事件だけは、何かがおかしいのだ。

とにかく、具合が悪いと訴えた神主が診療所へ運び込まれた。妻がそれに付き添った。

そして、わずか二十分の間に、神主は病死し、妻は沼に入水自殺、あるいは失踪したのだ。

神主の病死については急性の発作で亡くなったのだろうと納得することも出来る。

だが、奥さんがそれを祟りだと思い、神様に詫びるために入水自殺を決意したというのが二十分間の出来事というのはどう考えても不自然を極める。

古手家には親戚はいない。

残される一人娘のことを考えたら、いくら熱心なオヤシロさま信者であったとしても、娘を残して自殺などしないはずだ。

……入江も何かを隠している。だが、入江は単なる村医者に過ぎず、どちらかというと駒に過ぎない。

…これが陰謀で、神主が暗殺されたなら、陰で糸をひく黒幕がいるはずなのだ。

過去二年の事件を無理やり村と結びつけるのは、やや強引かもしれないと思いかけていた私にとって、…この事件は、雛見沢村連続怪死事件が紛れもなくあるひとつの意志に基づいて行なわれている連続事件だと確信させるに十分なのだった…。

……この事件は数えたらキリがないほどの不審点を山積みにしていたが、村の何者かが上層部に圧力を掛けたらしく、過去の事件と同様、この事件も個別の事件として、無理やり忘れさせられていくのだった……。

三年連続し、今や村の誰もがオヤシロさまの祟りに違いないと噂する。…これこそが犯人の目的のような気がする。

戦後に一度は廃れたオヤシロさま信仰。

……その威厳か何かを取り戻すために、何者かが儀式めいた殺人を犯しているのではないか。

その黒幕は、………きっと園崎本家なのだ。

それから数ヵ月後。

この事件について園崎お魎が、神主はオヤシロさまに祟られて当然だった旨の発言をし、雛見沢村連続怪死事件、通称オヤシロさまの祟りに神主の事件を組み込むことを決定するのだった。

最初は、おやっさんの仇を討ちたいだけだった。

…だが、今やその事件は、村の信仰をなぞる奇怪な事件に成長し、異様な輪郭を見せつつある。

……くそったれ。おやっさんの仇は人間なのだ。……わけのわからない祟りなどにすり替えられてたまるか…！

◆部活結成

学校は子供の世界だ。

大人の世界のどんな価値観もここには入り込めない。子供たちは自分たちで価値を決め、自分たちだけの世界を築くのだ。

だから、……村という大人の世界でどんな理不尽なルールが蔓延(はびこ)っていようとも、ここは関係ない。

村の中で北条家が孤立していて、大人たちが陰口を言っていることをそれとなく知っていても、学校の中にそれが持ち込まれることはなかった。

子供の世界では、その価値観は子供が決める。……彼らが理不尽だと思ったルールはここには及ばないのだ。

だから。私は子供の世界の代表として、委員長として、その理不尽なルールをわずかほども忍び込ませないと誓ったのだ。

学校の中では、北条兄妹に対するどんな苛めも許さない。
本当に初期の初期、男子がふざけて沙都子にちょっかいを出そうとしたことがあったが、容赦なく制裁してやったので、それ以来、そういうことは一切なくなった。
それが、私に出来る村の理不尽へのささやかな反抗だった…。
だから、少なくとも学校の中でだけは、悟史と沙都子にとって安心出来る空間であったと思いたい。
悟史は、私のそんな気遣いに気付いてくれたようで、学校にいる時はやわらかな笑顔を浮かべてくれるようになった。
でも、沙都子の表情に同じ笑顔が浮かぶことはなかった。
……沙都子を元気付けようという同い年のクラスメートたちは、やがてそっとしておくのが一番だという結論に達し、沙都子に近寄らないようになった。
私も最初は積極的に声を掛けていたが、……途中で気付き、それをやめた。
自分は園崎の人間なのだ。
沙都子にとって、近寄られるだけで不快な思いをさせることもあるかもしれない…。
私に出来るのは、陰からそっと見守るだけなのだ。
だから、教室ではいつも沙都子はひとりぼっちだった。

しつこいと言われても、つきまとうように側にいる梨花ちゃんと、必ず隣にいてあげようとする悟史。
……この二人だけが、沙都子の側にいてくれる例外だった。
沙都子に限らず、……北条家に対する陰湿な村八分は収まるところを知らない。
ヒステリックな叔母が、敵対感情を剥き出しにして近所に角を立てているため、誰も同情するものがいないのだ。
……喧嘩には、買うべきものと控えた方がいいものがある。
叔母にわずかの自制心と我慢があれば、北条夫妻が被(こうむ)っていた村八分を引き継ぐこともなかったのだ。……もっとも、兄夫婦のとばっちりを無関係な自分たちに引き継がされるという理不尽を最初に強いたのは村側なのだが…。
でも、…じっと頭を垂れていれば、ここまでおかしなことになることはなかった。
叔母ひとりの喧嘩ならともかく、…生活を共にする家族まで巻き込んでいる。
叔父は元々叔母とは仲が悪かったらしく、あまり家に帰ってこないで出歩いてばかりいるらしい。
悟史も沙都子も、肩身の狭いとても辛い思いを強いられている。
叔母はストレスのはけ口を沙都子に求めてしまっているようで、沙都子は叔母から陰険な苛

めをずっと受け続けているらしい。
……これについても同じだ。
…仮にも保護者である叔母に、沙都子は明らかな嫌悪感を示し、表向きだけでも大人しくしていようという素振りすらしなかったのだから。
悟史を見習い、慎ましやかに過ごしていれば、叔母に目の仇にされることはなかったのだ。
…なら、沙都子が今、こうして光の宿らぬ瞳で俯きながら日々を過ごしていることを、自業自得だなどと言ってしまえるのか。
………そんなことはなかった。
でも、同情したくても助けたくても、……もう誰にどうすればいいかなんてわからない。もう、誰かが誰かに謝ったくらいじゃ、…この状況は変わらない。
出来てしまった流れは、変わらない。
北条家が、村中から苛められているという仕組みが、風向きが、変えられない。
そんな恐ろしい状況が、私たちの生活のすぐ裏には潜んでいる。
……ご近所、町内、コミュニティ。
そういうものを敵に回せば、…世界はここまで残酷になれる。
……それを古来、日本人は知ってたから、ご近所に対し礼を尽くす義理と人情を育んでいっ

たんじゃないか。
　それを、誰かのせいにしたって、沙都子の顔に笑顔は戻せない。
　…私に出来るのは、せめて学校にいる時くらい、心安らかに過ごせるよう見守ってやることだけだ。
「……ありがとう。魅音。」
「…え？　あははは、ごめん、何？」
「うぅん。…沙都子にいつも気を遣ってくれて、ありがとうって。」
　悟史はぼんやりしているようで、…たまに人の心を読むようなことを言う。
　私は、柄（がら）にもないことを見抜かれたことを慌（あわ）てながら否定するが、そんな私の気持ちまでお見通しなようで、くすりと笑ってくれた。
「沙都子は、笑顔の浮かべ方を忘れてしまっただけなんだよ。……学校にいる時は、…本当に少しだけ、肩の力を抜ける時間を得られてる。それはきっと、沙都子にとってとてもやさしい時間になってるって思ってるよ。」
「あはははは…。……おじさんに気を遣えるのは、せいぜいこの程度だしね。」
「……そんなことないよ。僕も感謝してるよ。」
「よしてよ。……感謝されることなんかないって。迷惑掛けてるのは、多分、ウチなんだし

さ。」
「……そんなこと、思ってないよ。全然。」
…私は人の機微を読むのがそんなに得意な方じゃないが、悟史のこの言葉だけは嘘だとわかった。
悟史も、…自分たちを村八分にしている元凶が園崎家にあり、……私がその本家の娘であることを意識せずにはいられないのだ。
悟史が大人だから、私に当り散らさないだけで。
……もし、悟史が叔母のように短気だったなら、私を露骨に毛嫌いしていたとしても、何の不思議もない。
ならばせめて気を利かせて、私は彼らに近付かないようにするのが正しい気の利かせ方なのかもしれない。
……でも、私はお節介だから、暗く沈む沙都子や、…健気に笑顔を装う悟史を、見過ごせないのだ。…それがかえって、悟史や沙都子に余計な気を遣わせているかもしれないのに。
「…………私、……沙都子の気持ちを全然理解していないのかなぁ。」
「……どうして？」
「沙都子が辛い思いをしている一番の原因はウチにある。……そこの娘の私が、沙都子の周り

をうろちょろすることは、その、……空気の読めていないことなのかなぁって。」
「そんなことはないよ。魅音はそれくらいがちょうどいいと思うけどな。」
「何よそれ。私ゃ無神経な方がぴったりだっていうの？」
「むぅ、そういう意味じゃないよ。…………その空気というのが、沙都子から笑顔を奪っているのなら。…そんな空気なんか全然気にしない人じゃなきゃ、沙都子に笑顔は戻せないって思ってるから。」
「……う、うまいこと言ってるけど、さり気なくおじさんのこと馬鹿にしてるでしょー？　ひどいなぁ、あははは！」
「馬鹿にしてなんかいないよ。………助けてほしいだけなんだよ。」
「…ぇ？」
「………僕ひとりの力じゃ、沙都子に笑顔は戻せない。……魅音みたいな、力強い人の助けがいるんだよ。」
「で、でも…。私、……園崎家の魅音だよ…？　私なんかが無神経なことをやったら、かえって沙都子を傷つけるかも…。」
「その空気が、沙都子をひとりぼっちにしているのに…？　だから魅音も、沙都子をひとりぼっちにするのかい…？」

「…………………………。」

悟史が、こんなにも積極的に私に何かを求めるなんて、…初めての経験だった。

彼にとって、沙都子は大切な存在。

……その沙都子に笑顔を取り戻すには、私の協力が必要だと、そうはっきり言っているのだ。

でも、……。……いや……。……そうかもしれない。

園崎家と北条家のいさかいなんて、大人の都合であって、…私たち子供には全然どうでもいいことなんだ。

私たち子供の世界には、そんな理不尽(りふじん)な大人のルールなんて関係ない。

…私には、私の世界のやり方で、大人の世界の理不尽に対し抗議することが出来るんじゃないか。

「……沙都子は、本当に私のこと、迷惑に思わないかな。」

「初めは少しは思うかもしれない。でも、僕も一緒だから。魅音と一緒だから。すぐに打ち解けるよ。」

「そ、そうかな…！　………………今日、学校が終わったら、沙都子を遊びに誘ってみる？」

「…家に帰ると叔母さんに色々言われて、表に出られなくなってしまうかもしれない。」

「あは、なら簡単だね。家に帰らずに遊べばいいんだ。」

「でも、帰りがあまりにも遅くなると、何の道草を食っていたんだと……。」
「えっと、ならさ、あれだあれだ！　部活動に加わったっていうのはどう？」
「部活？」
「うん。部活ってことにして、学校で遊んでから帰ればいいじゃん。だって、学校から帰らないでそのまま遊んでる男の子だって大勢いるんだしね。全然、問題ないよ！」
「あ、でも、服を汚すとまた叔母さんに…。」
「ふふん、ならさ、アウトドアじゃなくてインドア中心にすればいいわけよ！　それなら服も汚れないしね。」
「インドアってことは教室？　でもあんまり暴れると知恵先生に…。」
「くっくっく！　インドアで暴れずに、だけれども熱く遊ぶことは可能なんだよ。おじさん、こう見えてもゲームが大好きでね！　海外物の貴重なものとか、結構集めてたりするのさ。マニュアルが英語だったり難しかったりで、対戦してくれる相手がいなくって死蔵しちゃってるのが多いんだけどね。」
「それ、沙都子にも遊べるかな。」
「もちろん！　あはは、ルールなんてね、わかんなかったらその場で作っちゃえばいいんだよ！　全員が同じルールに従う以上、どんなルールだったって公平なんだからね！」

威勢よく言ってみたものの、ウチからゲームを持ってきてそれに誘うだけで沙都子に笑顔を取り戻せるだろうか。
……駄目で元々。…明日、何かスゴロクみたいなものでも持ってきてみようか。
「あ、…あとさ、魅音。相談があるんだけど。」
「何？　おじさんで乗れる相談なら何でも聞いてよ。」
「僕、……アルバイトを探してるんだ。沙都子を元気付けるのに、…誕生日に素敵なプレゼントをしたら喜ぶかなって思って。」

◆赤いカプセル薬

記憶にすら残ろうとしないその奇怪な薬は、……カプセルだった気がする。
いや、それとも楕円状の大きめの錠剤だっただろうか。毒々しい赤い色が特徴的で、……
あぁ、ならカプセルに違いない。
あんなひどい赤をした錠剤なんて考えられない。きっとカプセルだったに違いない。
…それも、普通のカプセルよりほんの一回り大きいものだったような気がする。……気がする。気がする。…思い出せない。

こんなにもおぼろげな記憶でも、私は再びあの薬を見せられたなら、昨日のことのように思い出すに違いないのだ…。
あの薬は、人間を奪う。
…心を奪い、記憶を奪い、感情を奪い、体を鉛(なまり)のように重く愚鈍(ぐどん)にする。
何も考えられず、何も興味がわかず、起きていたいとも眠っていたいとも思わない。
時間の経過すらも曖昧になり、ある時は気が遠くなるほどの時間を過ごしたにもかかわらず時計の秒針が一つ進んだだけだったり、ある時は時計の時針がぐるりと回って行くのが目で追えるくらい速く進んだりする。
…そのどちらであっても、特別な感情は抱かない。抱かせない。
……ただ布団の中に入って天井を見上げているだけにしてしまう薬なのだ。
それがどれだけ恐ろしく辛い薬かは、飲んだ人間にしかわかるまい。
しかもこの薬のもっとも恐ろしい点は、服用中にはそれが恐ろしいものであることに気付くことが出来ない点なのだ。……おぼろげな状態で日々、恐ろしい薬であることにも気付けず、次々と飲まされ続け、私は永遠に私を失い続けるのだ。
だから、…何かの拍子か偶然で、その薬の薬効が切れた時。私は二度とあの薬を飲んではいけないと気付いた。

……そう。これは治療薬なんかじゃない。私を緩慢に殺すための毒薬なのだ。

きっとこのまま飲み続けていれば、いつか私は、生きているのか死んでいるのかもわからない状態に陥ったまま、永遠に私を取り戻せなくなるに違いない。

……ただただ、無感情に天井を見上げ、時計の針が回り続けるのだけをじっと見つめる永遠の日々に。

再び薬を飲めば、私はやっと取り戻せた思考を失う。…そして二度と自分を取り戻せないかもしれない。

…それを自覚した日から、私は薬を、飲んだふりをして捨てるようにした。

「お医者で薬をもらったら、症状が回復しても最後まで飲みきりなさい。」

それは母の声。私が幼い頃に病院で薬をもらう度に言われた、母の声。

薬がなくなる前に大抵、元気になってしまい、残りの薬は飲まなかった私に諭した、母の声。

でも、この薬は違う。

私がいくつの時に言われたのかも思い出せない母の声が、この毒々しいカプセルも最後の一粒まで飲み続けるように言うのを、私は頭から追い出していく。

両肘(りょうひじ)でしっかりと頭を抱え、頭が痛み出すくらいにぐっと押さえつけ、…薬を飲み続けなければならないという思い込みと、母の声を追い出していく…。

そう。…頭のもやが薄れるに従い、やさしかった母の醜い正体が思い出された。

母は家族を裏切った。

……帰りを家で待ち、三人分の食事を用意していた私と父を裏切った。

私たち家族の信頼を裏切り、その裏では別の男と密会を重ね、仕事が忙しいと称しては私たちと違う家族に身を置いていた。

それだけでも重大な裏切りなのに、さらに母は甲斐甲斐しく世話をしてくれていた父に絶縁を突きつけるという大罪を犯したのだ。

でも、それよりももっともっと許せなかったことがある。

…それは、私とは相容れない家族に、私を誘ったということだ。父を誘わず、私だけを誘った。

父と私は家族だ。

家族とは一緒ということだ。その家族を割ろうとした。自分の浮気だけでは飽きたらず、さらに私と父の関係まで引き裂こうとしたのだ。

そうだそうさ、こうして思い出せばそれはとても許せないこと、腹立たしいこと、憎んでも憎み足りない……。

眼球の奥がきりきりと痛みだし、激しい憎悪の感情が形相を歪めていることが自分でもわか

った。溢れ出して止まらない憎悪は、母を憎むだけでは収まらず、その浮気相手である男にも向けられた。

……浮気相手の男。アキヒトおじさん。
私をよくからかうので苦手だったが、お小遣いをよくくれる人で、私を喜ばせようとする楽しい人だった。大好きなおじさんだった。
でも、そのやさしさは全て打算。私と父と母で作られた家族という結束を砕こうとするための打算なのだ。
……だから私はアキヒトおじさんのことを大好きなおじさんなどと言ってはいけなかったのだ……！
そうだそうさ。どんどんわかっていく、思い出されていく。私の本当の敵がわかっていく。
母が浮気をし出したのはアキヒトおじさんのせい。だって、母は本当はとても良い母だったのだ。それを悪い母にしたのはアキヒトおじさんなのだから。
だから一番悪いのはアキヒトおじさん。
そのアキヒトおじさんが私の前に初めて現れたのはいつだったっけ。
母と一緒にお出掛けして、……どこかのデパートでお昼を食べた時に、会社の友人だと名乗

って同席したのが最初じゃなかったっけ。

あの時。…思えば一番最初のあの時。私は、母のアキヒトおじさんに対する接し方に、違和感とある種の気持ち悪さを感じたんじゃなかったっけ？

そうだそうさ、確かに感じた。おかしいと思った。気持ち悪いと思った。……あの直感を疑わなければよかったのだ。

…アキヒトおじさんがショートケーキの苺をくれただけで、良い人だなんて思いこんでしまった自分は何て浅はかだったのか…！

父には何の責任もない。

父はアキヒトおじさんと会ったことは一度もなかっただろうから。

でも私には責任がある。

…敵であるアキヒトおじさんと何度も会い、そして敵であることを知れる様々な機会があったはずなのだ。

つまり、私が今の幸せを守ろうという強い意志を持っていたなら、ちょっとしたごまかしなどに惑わされることなく、あの男を敵だと認識できたかもしれないのだ…！

あの日のお父さんを忘れられない。

おっとりとしていて人のいいお父さんが、……自らの膝に爪を立て、涙をぼたぼたと零して

泣いていたあの日のお父さんが忘れられない。

アキヒトおじさんのことを知っていたか？

とお父さんに聞かれて、私は、うん、知っていたよと答えた。

そして、お父さんに平手で打たれた。

……打たれて、私はようやく気付けたのだ。私が、あの男に懐柔されていたのが、どれほど愚かなことだったのかを。

そうだそうさ…、私のせいなのだ。

…私がいつまでも続くことを願っていた小さな幸せは、私が自分の手で打ち砕いてしまったのだ。

私が愚かでなかったら、あの日にお父さんが涙を流すこともなかったし、お母さんも良い母のままでいてくれたのだ。私が愚かでなければ……！　私のせい、私のせい…!!

母が許せない、アキヒトおじさんが許せない。

あぁ、これほど呪いながらも、未だに「おじさん」と愛称を付けて呼んでしまっている自分がそれ以上に許せない…!!

自分のせいだった、全てが自分のせいだった！　私が愚かで間抜けだったからこのようなことになってしまった!!

憎くて悲しくて、悔しくて怒りが冷めなくて！　母が再びこの家に戻ってくることがあったなら、この爪で引き裂いてやろうと思っていた!!
でも母が再び戻ってくることはなかった。
行き場のない私の怒りは、手に触れることが出来る母の痕跡全てに向けられた。
家の中に残る、母が残していったものを片っ端から打ち壊してやった。打ちつけ、叩きつけてやった。
でも、私の怒りはその程度では収まらない。家中がひっくり返ったみたいになるまで荒らしても、私の行き場のない怒りはちっとも収まらなかった。
怒りはどこに集う？　胸の奥から湧き出し、腕を通って、指先に集まって、爪からほとばしる。これ以上、怒りを叩きつける対象がどこに？　……そう思った時、私の爪は自然に我が身へ向けられた。
そう、今や私の体自身がもっとも呪わしくて穢らわしかった。私が全ての元凶で私が一番悪い。いやいやいや、私は悪くない、母が一番悪い、母が一番穢らわしい！　自分の身も心も全てが穢らわしい!!　竜宮礼奈を穢し尽くし、残るのを肉の細切れだけにしてやりたかった!!
そんなある日、私はとうとう知ってしまう。
私を満たす血液の中に、血管の中に、いっぱいのウジ虫が蠢いていたことを知ってしまう。

そうさ、穢れた私は腐っていたのだ。体の内側から腐っていたのだ。腐って当然、腐ってしまえ…‼　でも、それは例えようもないほどに痒くて痒くて、痒くて痒くて痒くて痒くて！

お風呂場で、腿を走る太そうな血管に、ずぶりとカミソリを突き立てる。

ぷくりと血があふれ出た。

赤黒い気持ちの悪いウジ虫が溢れ出てきた。

生理的悪寒に耐えながら、私は両手の親指でぐっと開き、血管をこじ開けてみる。

溢れ出るウジ虫、わらわら、わらわら、わらわらわらわらわら、わらわらわらわらわらわらわら…‼

左の腿の血管だけでこんなにもウジ虫が溢れ出すのだ。ならば右の腿の血管にだって同じくらいに詰まっているに違いない。いや、ふくらはぎの血管だって、腕の血管だって、お腹や脇、胸、いやいやいやいやいや、首の血管の中にはどれだけのウジ虫が詰まっているというのか…ッ！！！

不思議なもので、これほどまでに狂気の熱に浮かされながらも、私には同時に冷静な気持ちも残っていた。

あぁ、このまま全身の血管を開いていったなら、最後には死んでしまうなと、割と冷静に思っていた。

でも、全ては私の責任で、私が一番悪くて。
母のせいにしたとしても、母を穢すためにはもう私の体以外に残っていなくて。
……あぁ、そうかなるほど。私の怒りを終焉させるためには、これが最善なんだなって。
…ものすごく冷静に考えていたような気がする。
私が私の身を許すには、……私以外の「せい」が必要だったのだ。私以外の誰かのせい。そんなものは存在しない。どう考えようとも、どう曲解しようとも、私の体を穢すことが唯一の怒りのはけ口となるのだ。だから、私以外の「せい」が存在しない以上、私はこのまま、全身の血管を開き続けなければならない。
痒いところをいくら掻きむしっても満たされないように、私の体をいくら切り裂いても満たされない。お風呂場は私の穢らわしい、粘ついた血で真っ赤に汚れ、客観的に見たらきっとそれは恐ろしいまでに凄惨な光景だっただろう。
平静を装いつつも、全身に走る裂傷の鋭い痛みは決して誤魔化せない。血が溢れすぎたせいなのか、湯気のない風呂場で裸体を晒し続けたせいなのか、全身が奥から凍るように冷たい。でも、全身がじんじんと疼き、心臓が早鐘のように鳴る。寒くて暑くて、痛くて悲しくて腹立たしくて。
……自分を許すための何かを、心の底から求めた。

そしたらその時、……訪れたのだ。
それは神々しい光の中に訪れたように思う。
とても神秘的で、現実感をまったく伴わない、とてもとても不思議なナニカ。
それは、謝った。
ごめんなさい、ごめんなさいと、謝った。
どうして私にナニカは謝るのだろう………？
謝罪は罪を認めた時に告げるもの。
…私が初めて出会うこのナニカは、私に対して犯した罪を認めてくれたのだ。
つまりそれは、………私は何も悪くないということで。……本当に悪いナニカのせいだということで。
あは、……あはははははは………？
力なくカミソリを落とす。
それは粘っこい血の海に落ちた。
全身の痛みが押し寄せてくる。
全身を自ら切り裂いた痛みが押し寄せてくる。
……さっきまではこの痛みを、自らへの罰なのだと言い聞かせてきた。

でも、私は悪くなくて、このナニカが本当は悪いのだから、私はこの痛みを罰として受け入れなくていい。
……だから、もう自分の体を穢さなくてもいいのだ。
彼女は、鮮血にまみれた私に、いつまでもいつまでも謝り続けてくれた。
私が自分を責めたくなる度に謝ってくれて、私が悪いのではないとずっとずっと囁(ささや)いてくれた。

オヤシロさまは、居る。
いつも私についてくる。ぺたぺた、ぺたぺた。
そして私が自分の罪に耐えられなくなりそうになる度に、礼奈は悪くないと、謝って教えてくれた。
全て、オヤシロさまの祟りだった。
…雛見沢から出てはいけないという禁を破ったから、全てが狂いだしたのだ。
…やっと思い出す。雛見沢から引っ越す時、近所のおばあさんがお守りをくれたじゃないか。
雛見沢から出るとオヤシロさまの祟りがあるから、この厄除(やくよ)けのお守りを持って行きなさいっ

て。そうだ、くれたくれた、確かにくれた。筆字で難しそうなことが書かれた奉書のようなものを確かにくれた。でも引っ越した後にあれを見た覚えがない。きっと引っ越しの時にどこかになくしてしまったのだ。

ならば仕方がない。雛見沢の人間は雛見沢から出たら、祟りに遭うのが決まりなのだ。私も母も、あるいはひょっとするとアキヒトおじさんも、全てオヤシロさまの祟りでおかしくなっていたのだ。

誰も誰も初めから悪くなかったのだ。全てオヤシロさまの祟りのせいだったのだから。誰も悪くない、誰も誰も誰も誰も！　私はようやく全てを許せた。全てを打ち壊し、全てを穢し、自らの身も心も穢し尽くしてなお治まろうとはしなかった怒りが、ようやく治まったのだ。

お父さん。……私はやっとわかったよ。

お母さんが出て行ってしまったのも、私もお父さんもこんなにも悲しくなってしまったのは、全てオヤシロさまの祟りなの。お父さんは覚えてるよね、オヤシロさま。雛見沢の守り神のオヤシロさま。……うん、そうだったよね。雛見沢の人間は、穢れた俗世に出てはいけないって、そういうことになっていたよね。だからお母さんは穢れてしまったの。だからこれはオヤシロさまの祟りなの。

私たち一家は、雛見沢から出て行かなければ、きっと今でも幸せだったに違いない。

それをね、オヤシロさまが私のところへ来てね、教えてくれたの。

思い出せば、オヤシロさまはずっと私にそれを教えてくれようとしていた。お母さんが出て行ってしまって、何のせいでこうなったのかわからず、何に怒りを向ければいいのかわからなかったあの頃から、私にそれを伝えようといつもいつも付いてきていたんだもの。

ずっと付いてきてた。ひたひたぺたぺた。でも私はそれに気付かないふりをしていた。…あははは、私は鈍いんだね。全身をこんなにも刻(きざ)んでしまうまで、オヤシロさまの声が聞こえなかったんだからね。

もっともっと、オヤシロさまの声に耳を傾けることができたなら。

……きっとアキヒトおじさんが現れた頃から、オヤシロさまは警告してくれてたんじゃないかなって思う。

だってだって、雛見沢に家族みんなで戻れば、お母さんが浮気なんてしなかったんだもの。

雛見沢で一家三人、楽しく暮らせていたはずなの。

それをオヤシロさまがずっとずっと、そうだそうさ、オヤシロさまはきっと、私たちが雛見沢を出た時から教えようとしてくれてたんじゃないかな。

いつだって私と一緒だった。いつもいつも、どこまでも私に付いてきた。それを気のせいだ

と切り捨て、気付かないふりをしていた私が愚かだった。……そう、私が愚かだったばかりにこんなことに。…私がオヤシロさまの声に気付いていれば私たち家族が祟りで不幸になるなんてことはなかったのに…！　私が愚かだった愚鈍だった、全ては私のせい!!　あぁあぁぁオヤシロさまが謝ってる謝り続けてる、こうなってしまったのは自分のせいだって謝り続けている…!!

そうだそうさ、私のせいじゃないよね？　これは全てオヤシロさまの祟りのせいだもんね？　謝ってる謝ってる、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！　オヤシロさまがたくさん謝っているよ!!　だから私もごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!　あなたの声を聞くことが出来なくてごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!　私たちは雛見沢の人間、あなたの声を常に聞き続けていなければならないのに!!　あぁ、居るよ居る居るオヤシロさまは居る！

お父さんには聞こえないの？　見えないの？　今もそこで謝ってるよ謝ってる、ごめんなさいごめんなさい!!　私も謝る、お父さんも謝ろう、お母さんは謝らなくていい、お母さんはオヤシロさまの祟りで死んじゃえばいいんだ!!　お母さんが憎い憎い憎い憎い!!　お母さんの血が私に流れているのが憎い憎い!!　このウジ虫も全部お母さんのせいなんだ、血の中のウジ虫が騒いで痒いの!!

ごめんなさいごめんなさい!!　ごめんなさいごめんなさい！　嫌よ嫌だよ、その薬は飲まな

い!! それはお母さんが私を殺すために用意した毒のカプセルなの、だから私は嫌だ、飲まないよ!! 飲まないって言ってるでしょ、やめてよやめて!! これは祟りなんだから薬なんかでは治せない! 私の体のウジ虫は薬では治らないの、だって祟りなんだもん!! 注射も嫌だ、やめてよやめて!! 痛い、痛い痛い痛い痛い痛いッ……!!!

………世界が灰色に落ち込んでいく。
お父さんやお医者さんが騒ぐ声が遠くの出来事のよう。
いや、つい先ほどのことさえ、遠い昔のことのよう。
…そして私はまたあのカプセルを与えられ、たった今の鮮烈(せんれつ)な記憶さえ、忘却(ぼうきゃく)の彼方(かなた)に葬られてしまうのだ…。

………私は再び天井だけを眺(なが)めて布団の中。
目に入るものの、関心のあるものは時計の針だけ。
……チクタク、チクタク。
分針がぐるりと回って、時針がゆっくりとぐる〜り回るのを目で追うだけ。
他にも見えているものはある。

それも時計の針と同じで、ずっとずっと同じことの繰り返し。
ごめんなさい、ごめんなさい。私のせいでごめんなさい。……オヤシロさまがずっと謝り続けている。
チクタク、チクタク、ごめんなさい、ごめんなさい。
チクタク、チクタク、ごめんなさい、ごめんなさい。
…それだけがずっとず〜っと、繰り返されている………。
窓の外から忍び込んでくる、夕暮れ時のひぐらしのなき声が、なぜか一際大きいように感じられた…。

◆竜宮レナ

「ごめんくださぁい。」
「はいはいはい、あらあらこんにちは。…あれ、どちら様？」
「あ、どうも。私、お隣に引っ越してきました竜宮と申します。引っ越しのご挨拶にお伺いしました。どうかよろしくお願いします。」
「あらあらあら！　こんな田舎の村にこんな若い子が引っ越してきちゃったのかい？　そうか

いそうかい、よく来たねぇ！　お母ちゃん！　お隣さん、引っ越しのご挨拶来られたわよー!!」

「でっけぇ声出さんでも聞こえてぇんな！　すったらん、わんざわざ丁寧（ていねい）に挨拶、すまなっしゃろなぁ。」

「竜宮さんだって。お隣の空き家に引っ越されてきたって。」

「…………あぁぁあぁぁ!!　あんた、礼奈ちゃんかいな！　大きゅなって！」

「あ、あははは。はい、礼奈です。よく覚えてましたね、はぅ。」

「なぁんね、お母ちゃん、知ってるのかい!?」

「知ってるもなぁんと！　あー、お前興宮に住んどったから知らんかぁ。ずいぶん前に住んでたお隣さんね。…そうかいそうかい、戻ってきたかい！　やっぱり都会よか村の方が落ち着くんねぇなぁ。」

「住んでたのは小さい頃なんで、あんまりよくは覚えていないんですけど、……でも、ここが私の帰ってくるところだったんだなって。とても懐かしくなります。」

「なら馴染むのは早いねぇ！　何かお手伝い出来ることがあったらいつでも言ってね！　遠慮はしないのがココのルールだから。」

「あ、はい！　ありがとうございます。」

少し村の中を歩けば、昔のことを思い出せるかと思ったが、まったく思い出せなかった。
でも、都会のように寝惚けていない鮮烈な空気や風、眩しいくらいの新緑だけは覚えてる。
村のことは覚えていないけど、…ここが私の帰ってくるべき故郷であることだけは、覚えてる。
……まだ体の一部には、赤い線が残っている。
でも、うっすらと残っているだけで、目をつぶってそこを撫でてみても、何もわからないくらいに治っている。
多分、気付かない内にその跡すらも消えるだろう。
こうして雛見沢に戻って来ると、茨城にいた時の自分は一体誰だったのだろうと思う時がある。
…いや、多分、雛見沢から出て行った時から、もう私は私じゃなかったのだ。
そして、雛見沢に戻って来ることで、ようやく私は、本当の私を取り戻したのだ……。
茨城の頃の自分は、もう思い出そうとしてもおぼろげにしか思い出せない。
……きっと、あの赤い変な薬のせいだ。あの薬は、私の辛かった記憶を消し去ってしまった。
でも、………それでよかったのかもしれない。
あの時の私は、許しが欲しかったに違いないのだから。

母が許せなくて、アキヒトおじさんが許せなくて、…そして私が一番許せなくて。
誰かに私は悪くないのだと認めてもらいたかった。許してもらいたかった。
……そしたら、オヤシロさまが謝ってくれたんだ。
これはオヤシロさまの祟りのせいだから、あなたは悪くないのだと、教えてくれた。
だから、私は自分を許すことが出来たんだ。
……だから、体中の血管を裂いて、血を流しきって死なずに済んだんだ。
…人は、穢れることで、死ななければいけないのだと思う。
だから、我が身が穢れないように穢れないように、大切にしながら生きているんじゃないだろうか。
でも、穢れた身の私は、こうして生きている。生きることを許されている。
…私の身に、まだ穢れは残っているのだろうか。それとも綺麗に清算されているのだろうか。
…わからない。
ただひとつわかるのは、…茨城の私と、ここにいる私は別人だということ。
そして、今の私には、穢れに耐えかねて我が身を裂かねばならないという、使命感はもうなくなっているということだ…。

夜、家具の配置や梱包した荷物の開封が何とかひと段落し、遅くなった夕食を取った。
私にとってはおぼろげな記憶しかない雛見沢でも、お父さんにとってはついこの間のように記憶しているらしかった。
「お父さんたちが雛見沢に住んでた頃にもあったんだけど、今は綿流しという行事がとても大きなお祭りになってるらしい。六月の終わり頃にあるらしいね。」
「……綿流し？」
「お父さんも見たことないんでわからないんだけど、体に付いた穢れを、綿に吸い取らせて沢に流す行事らしい。」
穢れを、…流す。
「……穢れって、流してしまえるものなんだね。」
「あははは、そりゃそうだ。人間は罪深い生き物だからね。生きてるだけで日々、穢れが我が身に降り積もっていくものなんだそうだ。それを、年に一回、体をお掃除するように、綿に吸い取ってもらって捨ててしまうということらしいよ。」
人は悪いことをすることで、穢れや罪を背負う。
犯した罪は、懲役などで法律上の清算を受けるが、……だからといって、罪の十字架、穢れは生涯消えることはない。

つまりそれは、…人の世で、人の手では人の穢れを祓(はら)うことが出来ないことを示す。
…人に祓えない穢れだから、この世を去り、別の世で神さまに祓ってもらうしかない。…そんなことを考えてきた。
でも、……綿流しというものは驚きだった。人の世にいながら、人の手で人の穢れを祓う。穢れを綿に吸い取らせて、沢に流してしまう。……それはつまり、この世に生きていてもいいということだ。
自分を許せなくて、死のうと思った私。
そんな私に謝り、許し、雛見沢に帰ることを勧めてくれたオヤシロさま。
そして雛見沢には、穢れを祓う儀式、綿流しがあった。
…これは偶然の一致なんかじゃない。
雛見沢は、…穢れを祓う里。
罪を赦(ゆる)す。
赦す里なんだ。
「そういうのをな、禊(みそぎ)って言うんだ。」
「…あ、…言葉だけは聞いたことあるかな。」
「日本文化というのは、穢れというものにものすごく厳格だろう。穢れを残したまま、表舞台

に留まることを許さない。ほら、政治家や社長の汚職があると、すぐに辞職するのもそういうことだ。穢れた人は表舞台を去らなければならない。……悪く言うと、穢れを誰か一人に押し付けて引責させるわけだな。」

罪や穢れは、消し去らなければならない。だから人は、罪や穢れをとにかく誰かに押し付けて、その人ごと切り捨てることで、穢れを消し去ろうとする。

でも、だとしたら、穢れが生じる度に不毛な責任の押し付け合いが起こる。

…それはとても醜いもので、人の世に鬼を見るものだ。だから、人でなく、…綿に穢れを押し付けることを考えた。

そうすることで、人々は誰かひとりに責任や罪、穢れを押し付けなくても生きていけることになったのだ。

……全員の罪を肩代わりさせて殺すことは、きっと生贄に通ずる。

誰だって生贄にされたくない。

だから必死に醜悪(しゅうあく)に、罪を押し付けあう。その生贄役を、人でない物に代わらせる、禊。

誰かひとりを生贄にして殺さなくてはならないという日本文化に、劇的な変化をもたらした、禊。

それはつまり、…穢れが降りかかっても、誰のせいにしなくてもみんなが生きていけること

を示す。
穢れが、人の死以外の方法で、許される。
人を許せる存在は、人以上の存在だけだ。
オヤシロさまに許され、帰ってきた里。そこにある綿流しという禊。
我が身の穢れを綿に吸い取らせ、流して捨ててしまう。
我が身という生贄は必要ない。だから私は、生きていてもいい。
穢れた私は沢に消え、……だからやっぱり、ここにいる私は、もう竜宮礼奈じゃなかったんだ。
礼奈じゃないなら、…私は竜宮、…誰なの？
穢れも、嫌なことも全て洗い流された私は、何て名前なの？
……頭にぼんやりと浮かぶ、ある名前。
それは私の名前、礼奈から平仮名を一文字抜いただけだけど、……何だか可愛らしかった。
〝い〟やなことはもう全部なしになって許された。
だから私はもう礼奈じゃない。
私の名前は。

◆四年目の足音

僕にとって、……辛くて、そしてあまりに長すぎて気が遠くなりそうな日々は、まだ延々と続いている。
叔母と沙都子は相変わらずだ。夜毎(よごと)に叔母は沙都子の些細(ささい)な何かを怒鳴りつける。
沙都子も、泣き出すくらいならばそれに口答えなどしなければいいものを、してしまう。
だから、いつまでもいつまでも叔母の怒鳴り声が止まない。いつまでもいつまでも沙都子の泣き声が止まない。
…沙都子が僕の姿を見つけ、しがみ付いてくる。
僕の背中に隠れ、叔母の怒鳴り声をやり過ごそうとする。唯一心を許す僕に頼ろうとする。
……沙都子は僕以外には心を開かない。…だから、僕が守ってあげなかったら、それはあまりにあまりに悲しいこと。
僕たちのお父さんやお母さんが沙都子に与えなかったものを、唯一の肉親である僕が与えなくてはならないのだ。
それも、毎日、毎日。

沙都子が泣く度に、毎日、毎日。

……昨日、沙都子が僕に泣きながらしがみ付いてきた時。

……僕は可哀想に思いながらその頭を撫でていて、……同時にもうひとつの感情に襲われていた。

その頭を、鷲摑みにして、……引き剝がして壁に叩き付けたいという、信じられない悪魔の感情。

駄目だ駄目だ駄目だ…、そんなことを考えちゃいけないッ…!!

いや違う、考えちゃいけないんじゃなくて、気付いちゃいけなかったんだ…！

その日を境に、…僕の中にはもうひとりの僕が出来た。そして胸の内側から僕を食い破って、僕と入れ替わろうとするのだ。

沙都子が泣きながら僕に何かを訴える時、…沙都子を永遠に傷つけてしまいそうな恐ろしい言葉を次々と喉元に突き上げては、口から吐き出させようと企むのだ。

僕にかまうな。僕にしがみ付くな。うるさいからあっちへ行けッ…!!　駄目だ駄目だ駄目だ、いけないいけないいけない！！！

僕はそいつに体を乗っ取られないため、…そいつを、ぐうっと、…下腹に力を入れて、外に追い出した。…追い出せた。

だが、追い出しただけでは終わりにならなかった。
……そのもうひとりの僕は、…何ということか、常に僕の後を追いかけてきて、再び僕の中に戻ろうとしているのだ。
……でも、僕は再び、このような恐ろしい僕を胸の内に入り込ませたりはしない。
そいつも、僕がこうして心を引き締めている以上、入り込む隙がないことはわかってる。
……だから、無理に入り込もうとせず、…僕の後をぴったりと付けていつも背中にいて、……僕が気を許して心に隙間を作るのをじっとじっと待っているのだ…。
そいつは、僕がひたひたと歩くと、……ぺたぺたと付いてくる。僕の背中を付いてくる。どこまでも付いてきて、横になれば枕元から僕を見下ろすのだ。……そして、僕の心に再び忍び込み、沙都子を傷つける機会を窺っているのだ……。
……最近、急に暑くなりだした。
そのせいで、体や心がまいってしまうからこんなことを考えてしまうのだろうか…。
僕は、沙都子のたった一人の肉親なんだ。
……だから、あの叔母から沙都子を生涯、庇い続けなくてはならないのだ……。それが僕の、一生の義務…。
一生？　生涯、永遠？　僕はずっとこのままでいなければならない…？

せめて沙都子さえ…。でも僕は唯一の肉親で…。でもいくらなんでも…。そもそも叔母が。でもそれを言ったら村の人たちだって…！
もうすぐ綿流し。
村の無責任な人たちが、今年もきっと祟りがあるに違いないと言っている。そして祟りがあるなら、それは僕と沙都子に違いないなんて言っている。
……気のせいかもしれないが、それを〝期待〟する村人たちの目線が、最近、特に痛い気がするんだ…。
何だか僕は、綿流しの日に殺されてしまうような気がする。
いやもちろんこれは根拠なき漠然とした妄想に過ぎないのだけれど。あぁ、ぺたぺた、ぺたぺた。僕の心に入ってくるな…。
沙都子は僕のたった一人の妹で肉親なんだ、だからだからだからそんな恐ろしいことを僕の心に吹き込もうとするなするな……。ぺたぺたぺたぺた、来るな来るな来るな来るな…！！！　その足音が僕の背中にまで近付き、そして僕の肩に手を……！！！
「うわッ！　………ぁ、……レナか……。」
「だ、………大丈夫かな？　……かな？」
どうも僕は、人が見てもわかるくらいに様子がおかしかったらしい。…レナは心配そうな顔

をしていた。
…彼女の名は竜宮レナ。最近、引っ越してきたばかりの転校生だ。
覚えている子はいないのだけど、ずいぶん昔に雛見沢に住んでいたらしい。
もっとも、彼女も雛見沢のことはおぼろげにしか覚えていないというが。歳の近いクラスメートが魅音しかいない僕にとっては、とても貴重な友人だった。
普段は魅音と一緒に楽しそうにはしゃいでいるが、時折、女の子らしい気遣いも見せてくれる。
「具合悪いの…？　保健室で休んだ方がいいんじゃないかな。…かな。」
「ありがとう。大丈夫だよ。……僕、そんなにも具合が悪そうだったかい？」
「うん。」
澱みない返事に、僕は相当に具合を悪そうにしていたことを知る。
「…………沙都子ちゃんのことで、…心配事？」
「いや、…そういうわけじゃないんだよ。」
僕の具合が悪いのが、体調のせいでなく、心労のせいだといきなり核心を突いて来る…。
……これは僕の直感だが、レナはおっとりとしているように見えて、意外に鋭いタイプなのかもしれない…。

「……レナは、転校してきたばかりだから、頼りないかもしれないけど…。話を聞くことは出来るからね。……きっと聞いてあげるだけでも、少しは心が軽くなると思うから。」

彼女は転校してきてまだ日が浅いにもかかわらず、…僕たち北条兄妹や、それを取り巻く村の事情を敏感に感じ取っているようだった。

でも、……話したって、何の解決にもならない。…いや、むしろ…。話してしまうことで、僕の心が弱さを認めてしまって、……もう一人の自分に侵食してくる隙を与えてしまうような気がしたから…。

「さっき、声を掛けたらすごく驚いたでしょ？　そんなにも考え事をしてるなら、…きっと辛い悩みなんだろうなって思って…。はぅ…。」

「それは、………あははは。なぜか最近、…誰かにずっと後を付けられているような錯覚がしてね。……ひたひた、ぺたぺた。…だからそれかと思って……。…って、あはははは、ごめん。僕は一体何を言っているんだか。」

「…………足音？　……付いてくるの…？」

「……え？」

「…………私、……その足音、知ってる。」

◆休部届け

「……そうですか。…いえいえ届けなんていりません。悟史くんは我が雛見沢ファイターズの頼もしい選手なんですからね。席はちゃんと空けてあります。いつでも戻ってきていいんですからね。」

「わかりません……。当分は戻って来れないと思うので、一度、退部にしてもらった方がいいと思いまして…。」

悟史くんが、雛見沢ファイターズを辞めたいと言い出した。

……悟史くんと沙都子ちゃんを取り巻く環境については、私も事情を知っていたので、…こういうことを言い出すのもあるかもしれないとは思っていた…。

沙都子ちゃんと叔母の仲違いはもはや致命的なものらしく、それはもう苛めというより虐待に近いものらしい。

最近、その絡みで児童相談所の人が指導に来たらしく、その時だけは叔母もわずかに大人しくなったが、……すぐにより陰湿な形での苛めに切り替わったという。

近所の人の話では、叔母の怒鳴り声と沙都子ちゃんの泣き声が聞こえない夜はないらしく、

しかもそれは深夜にまで及ぶことも珍しくないという。
沙都子ちゃんに毎週施している定期検査の数値も、じわじわと悪化の一途を辿っており、それに対し、投薬量を増やすことで何とかすれすれを維持させているが、………叔母との関係を改善しない限り、いつか彼女はL5の症状をぶり返し錯乱するだろう。
…いや、確か彼女の末期症状は錯乱するタイプではない。……心の中に狂気を宿しつつも、表向きにはそれを押し隠してしまえるタイプだ。
……一昨年、両親を突き落としたように、…叔母を沙都子ちゃんが殺してしまうこともあるかもしれない。
山狗の工作のお陰で、あの転落事故は事故ということで決着し、大石も手を引いたが、彼自身は未だ疑い続けている。
……沙都子ちゃんの近辺で再びこのような事件が起きたなら、……今度こそ彼は沙都子ちゃんに対し容赦のない捜査を行なうだろう。
……沙都子ちゃんの環境の悪化は、もはや私にはどうしようもないレベルにまで至っている。
それを見かねて、妹思いの悟史くんが野球を辞めて常に妹に付き添っていてやりたいと言い出したとしても、それは不思議なことではなかった…。
「実は僕、アルバイトを始めるんです。それで、あまり野球に出られなくて…。」

「…アルバイト、ですか。何か買いたいものでもあるんですか…？」
「……はい。…もうすぐ沙都子の誕生日なんです。沙都子が欲しがっているぬいぐるみがあるので、それをプレゼントしてやりたいと思いまして。」
そう言えばそうだっけ。
保険証に書かれていた日付を思い出す。
確か、六月の二十四日。綿流しのお祭りの直後じゃなかったっけ。
「そうですか。……悟史くんは本当に妹思いのお兄さんですね。それはきっと沙都子ちゃんも喜んでくれるでしょう。」
「……喜んでくれると、うれしいです。」
悟史くんの話しぶりから、かなり心労が溜まっているのがうかがえた。
……彼にとって、沙都子ちゃんが苛められるのを見ることは、自分が苛められていることと同じなのだから…。
心労は、スポーツなど適度な運動でのストレス発散、そして規則正しく充分な睡眠時間で癒すのが基本だ。
沙都子ちゃんが夜な夜な叔母に叱りつけられているのだとすれば、…それを庇う悟史くんは充分な睡眠を取れているとは思い難い。

……また、どんなバイトをするのか知らないが、スポーツと違いストレスの発散にはなり難いだろう。

…はっきり言って、身も心も参っている悟史くんに、さらに追い討ちをかけるようなバイトは、あまり賛成できなかった。

私が少し、プレゼント代を出してあげようかと提案したが、もちろん彼の性分からして、それに甘んじるわけもない。彼は、自分が贈るプレゼントなのだから、そのお金は自分が全て用意して当然だと、模範的に断るのみだった。

アルバイトは、沙都子ちゃんのプレゼントを買うためだけにするので、短期間のみのものらしい。

…それくらいの期間だったら、それほど彼を追い詰めることにはならないか…。

本当は、心が参っている時期に、さらに負担を増やすようなことは避けさせたいのだが、沙都子ちゃんの誕生日が近いと言われれば、妹思いの悟史くんにそれを思い止まらせるのは難しい。

………悟史くんの決意は固い。

バイトをやめろとこれ以上しつこくすると、私と彼の信頼関係を損なってしまうかもしれない。

それを恐れた私は、彼の休部を受け入れて見守ることにした。
「……そうだ、監督。…バット、一本借りて行ってもいいですか？」
その言葉の意味を、私は大きく履き違えてしまう。
…後に、彼がそのバットを護身用のための武器として持ち歩いていたという話を聞き、……この時点で悟史くんには、ある種の危険な兆候が現れていたのだと知る。
彼は、連続怪死事件が四年目の今年も起こり、…その犠牲者が自分になるに違いないという思い込みを持っていた。
……誰かが自分の命を狙っているに違いないと信じる強迫観念。それは紛れもない、雛見沢症候群のかなり末期に近い症状。
…だが、この時点での私は、雛見沢症候群に関わる人間でありながら、あまりに迂闊だった…。
「バットですか？　はて、何に使うんですか？」
悟史くんの私物のバットはある。
だから、借りて行くというよりは持って帰ってもいいですか、というのが正しいのだが、彼は、借りて行っていいかと聞いた。
…それを、私に承諾を得て持ち帰ろうというのは、後から考えれば罪の意識の軽減行為なの

だが、この時点ではわかろうはずもない…。
「……いえ、その。……野球にはそんなに来れなくなりますけど、……でもきっと、一人で素振りの練習をするくらいの時間は取れると思うので。」
「それはいいですねぇ！　そういうことならぜひ持って行ってください。素振りをする時は、充分周りを確認して危険がないよう注意してからやってくださいね。ご近所迷惑でなければ、タイヤを吊るしてそれを打つのも良い練習になるでしょう。」
バットを振るだけでも、きっとストレスの解消になる。
だから、バットを持たせてやることは彼の心労をわずかでも和らげることになる。…そう思ってしまった。
…………だが、…それは大きな誤りだった。
後に、私は取り返しがつかない段階に至って、それを知ることになる…。

◆北条叔母撲殺事件

今年は充分な即応態勢を敷いていた。
そのため、ただちに現場を確保して捜査を開始することができた。

被害者は、例の北条夫妻の弟夫婦の妻。
四年目のオヤシロさまの祟りとして、極めて妥当な対象だった。
近所での評判は最悪。
事件後、誰もが祟られて当然だと口にする有様だった。
……犯人の目星は、大体ついていた。
恐らく、…北条悟史。あの純朴そうな少年だ。
動機はある。
ホトケは彼の妹を執拗に苛めていた。それに対しての報復的犯行に違いない。
また、現場検証に立ち会わせた際の挙動も、どこか落ち着きがなく、それでいて無関係な人間だったならあり得ないほど、妙なところで落ち着いていて。…私の短くない刑事生活が育んだ直感が、十中八九、こいつに違いないと教えてくれていた。
彼だと断定する決定的証拠はないが、…任意同行を求めて、少し揺さぶってみれば、自分から犯行を認めそうな気がしていた。
「これだけホトケを滅多打ちにしていれば、ホシも返り血を少なからず浴びただろうと思います。そいつが見つけられれば決め手になりそうですね。」
「まぁ、よっぽどの間抜けでなけりゃあ処分してるでしょうがねぇ。犯行を認めた後に、捨て

たと称する場所から発見出来れば、検察も納得してくれるでしょう。」
単独の事件としては非常に安っぽいものだった。
……北条悟史がゲロしてくれればそれで解決。私以外の連中はそう思っただろう。
……だが、連続怪死事件として見た場合、事件はそれでは終わらない。
この事件の背後には村の深部、御三家、…あるいは園崎家が直接関わっている。
連中が黒幕なら、北条悟史にうまいこと犯行を唆して実行犯に仕立てたに違いないのだ。
……だが、そうならば連中にとって北条悟史は、知り過ぎた人物になる。
園崎家はあくまでも黒幕として君臨する。
そこへつながるカギになりかねない、彼を放置したりするだろうか…？
北条悟史が妹思いな点を突いて叔母殺しを唆し、四年目の祟りを執行させた…。そして、
……黒幕との接点のあった北条悟史も消してしまえば…。
……北条悟史は単なる犯人じゃない。…仕立て上げられた道化なのかもしれない。
そしてその後、…私の予想は的中した。……彼は突然、失踪するのである。
それもややこしい消え方だ。
事件の発覚を恐れて逃走したのではない。
……事件の犯人は別に現れた。すでに別件で逮捕され、しかも獄中で死んだばかりのイカレ

た野郎だ。

犯人しか知りえないことをすでに告白していた。ゆえに犯人。

しかもすでに死亡しているため、捜査は終了。

そして北条悟史は、綿流しから数日後に蒸発。

……北条悟史と事件を結び付けたくない何者かが暗躍していることは明白だ。

私には上層部から、事件の捜査を終了させるようにと圧力が掛かり、北条悟史失踪事件は、単品扱いとなって担当部署までもが変わることになったのだから。

これほど性急に捜査を決着させる手口は、一昨年の北条夫妻転落事故の時、事件性を強引に否定し、無理やり事故ということで決着させてしまった時とあまりに酷似している。

………警察上層部に圧力を掛けることが出来る〝何者か〟の仕業であることは疑いようもない。

そして皮肉にも、……雛見沢界隈で警察上層部に圧力を掛けることが出来るのは園崎家しかあり得ないのだ。

…うまく尻尾を隠したつもりで、むしろこれ以上ないくらいの形で正体を現したと言ってもいいだろう。

情報屋経由だが、園崎お魎は四年目の祟りについて親族会議にて言及し、自らが黒幕である

ことを仄めかしたという。
……仄めかすだけでは証拠にはならないが、とにかく、黒幕の一番上に園崎お魎がいることだけは間違いないのだ…。
おやっさんの仇はわかってる。なのに、尻尾がどうしても掴めない…！
未だ逃走を続ける主犯格は、どうせ園崎家がどこかに匿っているから見付からないのだ。
……そいつをひっ捕らえ、未だ見付からないおやっさんの右腕を見付け出す。おやっさんの墓前に右腕を返し、…主犯格と黒幕どもを墓前で土下座させてやるのだ…。
……もっとも、北条悟史が消えたように、その主犯格もすでに消されているだろう。
きっととっくに殺されて、永遠に見付からない場所に埋められている。でも、ならばそれでもいい。………おやっさんを殺せと指示したババアに、墓前で額を地面に擦り付けさせてやる。
絶対に……絶対に……！
オヤシロさまの祟りも四年目を数えると、…気の早い話で、来年の五年目にもきっと何かが起こるに違いないという憶測が、すでに流れている。
私は十分な準備があったにもかかわらず、この四年目を有効に活かすことが出来なかった。
やはり、起こってからでは駄目なのだ。…起こる前から、村の内部に目を光らせていなくてはならない…。

そして、……私には是が非でも来年で決着をつけねばならない都合がある。
私が、…定年を迎えるからだ。
母は故郷の北海道に帰ることを強く希望しており、ずいぶん前から私の退職に合わせて北海道に引っ越したいと言ってきた。
私も、最後にできる親孝行だろうと思い、退職したら共に北海道へ引っ越すことで承知している。
……だから、来年がおやっさんの仇を討てる最後のチャンスなのだ。
すでに四年うまく行っている事件だ。…恐らく、来年の五年目も起こる。
連続怪死事件によって、ダム戦争以来の村の結束は一層引き締められた。…裏切り者には祟りという名の制裁があることが、きっちりと示されたからだ。
……黒幕たちにとって、連続怪死事件を起こす意味は十分にある。
噂では、今年のホトケの叔母が祟られたのは、不信心で綿流しの祭りに参加しなかったからだ、というのだ。
そのため、もし来年の祭りに参加しなかったならば、自分が祟られる対象になるかもしれないと考える村人もいるという。………来年の祭りは盛況になるに違いない。
必ず、来年も起こる。

雛見沢村連続怪死事件。通称オヤシロさまの祟り。
……そこでこそ必ず。私はおやっさんの仇を討つ……。

◆生贄第四号

村は騒然としていた。
誰もが起こると思っていた、連続怪死事件が四度、起こったからだ。
殺されたのは、……沙都子ちゃんの叔母だった。
村人たちは、ヒステリックに近所とトラブルを起こしてばかりいた叔母への祟りに、不謹慎ながらある種の満足感を感じていたようだった。
でも、私だけがすぐに真相に気が付いた。
あの夜、事件が発生し、警察に事件現場に検死で呼ばれて、異様に頭部だけを滅多打ちにされた叔母の死体を見た時、…悟史くんの仕業に違いないと確信した…。
より酷くなっていく沙都子ちゃんへの苛め。そしてそれを救いたいと悩む悟史くん。
そして、持ち帰ったバット…。
全ての符合は重なっていた。悟史くんの口から聞くまでもなかった。

……私は自問せずにはいられない。
味方のいない気の毒な北条兄妹のために、自分だけは味方になろうと思ったはずなのに。……結局、自分は何の味方にもなれなかったのだから…。
そんな中、私は悟史くんからの電話を受けた。
彼から電話をもらったことは一度もない。
一体何事なのか…。…今回の事件について、何かの助力を求めているのだろうか。
なら、……せめてそれに協力してやりたい。そう思った。

「あ、監督ですか。お仕事中に済みませんでした。」
悟史くんから電話があるのは珍しいことだった。
「いえいえ、気になさらないでください。どうなさいましたか？」
「あの、……えっと、車を持っている人が、他に思いつかなかったんで…。」
「車、ですか？　ええ、ありますよ。」
「実は、今、興宮のおもちゃ屋さんの前にいるんです。あの、魅音の叔父さんのおもちゃ屋じゃなくて、もう一軒の、歯医者さんの近くにあるおもちゃ屋さんの方です。」
「あぁ、わかりますわかります。」

「それで、沙都子の誕生日プレゼントのぬいぐるみを買えたんですけど、……その、……むぅ。…大きくって、自転車に積めないんです。」
「大きくって自転車に積めない？　あっはっはっは、悟史くん、あなた、どれだけ大きなぬいぐるみを買ったんですか。」
「……むぅ。」
それに気付かずに自転車に乗っておもちゃ屋に行ってしまい、それで途方にくれているというわけらしい。
……何というか、悟史くんらしく、ちょっと微笑ましくなってしまった。
つまり、自転車とぬいぐるみ、両方を持って帰れないので、車で迎えに来てもらえないかということだろう。
私はすぐ迎えに行くと言い、興宮のおもちゃ屋へ行き、……プレゼント用のぬいぐるみが、想像をはるかに超えて大きな物であったことを知るのだった。
「…これは…！　ははは、大きいですねぇ。確かに、これじゃあ、自転車は無理でしょう。」
何しろ、そのぬいぐるみは抱きかかえる程の大きさがある。助手席で膝に抱いたとしたら、前が見えなくなるくらいの大きさだ。
自転車は後部座席に積み、ぬいぐるみはトランクに無理やり押し込んだ。

「しかし、これだけの大きなぬいぐるみともなると、高かったでしょう。」
「……ええ、………まぁ、そこそこに。」
初めは、暑いから汗をかいているのかと思った。
…でも、どうも様子がおかしい。まるで高熱か何かで朦朧としているように見えた。
「どうしましたか。…具合でも悪いんですか…？」
「……多分、…………いえ、……風邪です…。」
「それはよくありませんね。診療所に寄って行きませんか？　具合を診てあげましょう。」
「……ありがとうございます……。……はぁ……、…はぁ………。」
さっき電話をくれた時は、具合が悪そうな様子ではなかった。
……では、急に体調が悪くなったということなのだろうか。
「どうぞ、リクライニングを倒して、楽にしててください。冷房が強すぎませんか？　大丈夫ですか？」
「…………はぁ、…………はぁ…………はぁ………。」
顔色は蒼白。計ってはいないが、熱も相当ありそうだった。
……悟史くんはこのぬいぐるみを買うために今日まで無理をしてきたのだ。
何しろ、これだけ大きいぬいぐるみなのだから、きっと安くはあるまい。それを長くない期

間で稼いだのだから、かなり堪えるバイトをしていたのだろう。
念願のぬいぐるみが買えて、気が緩んだのかもしれない。
…目標に向かって無理をしていた人は、達成した時、それまでの疲れが一気に出て体調を崩してしまうことも珍しくない…。
「……しかし、…よくがんばりましたね。こんなにも大きなぬいぐるみを。沙都子ちゃん、きっと喜ぶと思いますよ。」
「…………………喜んで、……ほしいです。」
「喜びますよ。私が保証しちゃいます。」
「…………もう、………叔母さんもいない。……叔父さんも帰ってこない。……もうこれで、……沙都子を苛める人はいないんですよね………？」
「そうですね。もう沙都子ちゃんを苛める人はいません。だから、これからはゆっくりと過ごしていいんです…。」
「……………叔母さんは、……いないんですよね…？　………死んだんですもんね……？」
「はい。…確かに死にました。検死には私も立ち会っています。間違いありませんよ。だから、もう二度と沙都子ちゃんを苛めたりはしません。」

「…………本当に…？　本当に叔母さんが死んでるのを、……確認したんですね……？」

「はい。間違いなく。」

「………じゃあ、……たまに通りすがる、叔母さんにそっくりな人がいても、……それは叔母さんじゃないんですよね…？　……叔母さんが実は生きてて、……退院してきたとか、そういうのじゃないんですよね……？」

「えぇ。そんなことはありえません。二度と私たちの前に現れることはありませんよ。」

「じゃ、……じゃあ、…あの、あの人…、あれもよく似てるけど、…叔母さんじゃないんですよね…？　ですよね……⁉」

悟史くんが怯えるように、対向車を指差した。

もちろんその運転手の姿をよく見る前にあっと言う間に通り過ぎてしまったので、どんな顔をしていたかはわからないが、…とにかく、どんなに似ていたとしても、生きているなんてことはありえない。

「ほ、ほら‼　あの人も‼　あんなにそっくりでも、叔母さんじゃないんですか…⁉　だって、僕を見ましたよ⁉」

「お、落ち着いてください、悟史くん。叔母さんは完全に死にました。だからどんなに似ていてもそれは叔母さんではありません。」

「似てる、…似てる…。いや、……違う、本当に叔母さんなんだ……、叔母さんはまだ……、まだ……。……あんなに殺したのに、……あんなに殴ったのに……、何で、……何で…………！」

私は冷静に運転を続けるしかない…。
悟史くんはすでに冷静さを失っていた。…彼には、見えているのだ。…殺したはずの叔母がまだ生きていて、彼の前に次々に現れるように見えているのだ…。
この段階にまで及んでようやく私は悟る……。
悟史くんは、…………末期発症を起こしている…！
…診療所についたら、まず彼の具合を診よう。沙都子ちゃんの時とは違う。すでに十分な実験を重ねた治療薬が作られている。悟史くんは治療可能なのだ。
そして、叔母殺しについても、また山狗の人たちに頼めば、うまく揉み消してくれるはずだ。だから彼を末期症状から救い、沙都子ちゃんとの平穏な日々を取り戻させてあげることは必ず出来る…。
さっきまであんなにも取り乱していたのに、今度は急に静かになった。
…眠ってしまったわけではないようだった。
…とにかく、悟史くんが大人しくしてくれている内に診療所につかなくてはならない。

……錯乱して、運転中の私に襲い掛かってこない保証もないのだから。
…そんな恐ろしい想像を見抜かれたかのように、悟史くんは落ち着いた声で言った。
「………監督。…………これってやっぱり、…オヤシロさまの祟りなんでしょうか。」
「祟りなんかありません。どうか気を強く持ってください。」
「…………沙都子、……ごめん。……ぬいぐるみを買う直前まで、……僕はそのお金でどこか遠くに逃げてしまおうって思ってたんだ……。…だから、…そんな僕をオヤシロさまは許さなかったんだ……。…僕は兄、失格なんだ……。……僕は………、……僕は…………。」
「無理にしゃべらないでいいですよ。目蓋を閉じて休んでいてください。すぐに診療所につきますからね。そうしたら、具合のすぐよくなる薬をあげますからね…。」
「……僕の血の中にも……蛆虫が湧いてるのかな………。……痒い…。」
「掻かないで！　喉を掻いてはいけません！」

車は診療所の裏口前に到着した。
私は乱暴なブレーキで車を停める。
もう、悟史くんは喉を掻き毟り始めていた。私ひとりでは抑えきれない。インターホンでスタッフに応援を求める。

すぐにスタッフが何人か駆けて来てくれた。

……しかし、一度に大勢の人が現れたことに悟史くんは驚いたのか、急に抵抗を始めた。

………検査を待つまでもなく、悟史くんはＬ５だ。

完全な末期症状で、心の中は疑心暗鬼と被害妄想でいっぱいのはず。

突然現れたスタッフたちが、自分を殺そうとしているように見えるのかもしれない。

暴れる彼を、スタッフがそれぞれ四肢を抱え込み、眠らせる薬を注射する。

「……か、……監督……、た、……助けて…………ッ!!」

「大丈夫ですよ。すぐに治療しますから、しばらくの間、楽にしていてください。」

「…………んとく、…………。……沙都子を、…………ねがい……。」

沙都子をお願い。

その言葉を何とか口にすると、そこで悟史くんの意識は途絶えた。

「あらあら。騒がしいと思ったら、これは何事ですの？」

半ば状況を把握出来ているだろうに、のんびりしたことを口にしながら、…いや、くすくす他人事のように笑いながら、鷹野さんがやってくる。

「………悟史くんが、急性発症したようです。……彼の日頃のストレスを考えれば、いつ発症

してもおかしくなかったでしょう。…いや、………ぬいぐるみを買うまで、自制心でそれをずっと抑え続けてきたに違いありません…。」
「何だか毎年、綿流しになると生きた検体が手に入りますわね。これもオヤシロさまの祟りのお陰なのかしら。くすくす。」
鷹野さんの戯言を聞いている暇は、今はなかった。

◆サイコロの一

………それは突然のことだった。
小泉のおじいちゃんが、亡くなった。
具合が悪いとか、体調が優れないとか、そんな話は一度も聞いたことがなかった。
…胸が急に痛くなって眠れない。
明日の朝が待てそうにないと、生まれて初めて救急車を呼んでみたという。
すぐに救急治療室に運び込まれたが、朝まで持たなかった。
急性心筋梗塞だという。………でも、ある意味、幸せな最期だったかもしれない。
病床に伏せり、数年かけて痩せ衰えてから死に至るのに比べれば、死に至る直前まで元気

に過ごせたのだから、その分、生を満喫できたと言うべきだろう。
しかし、…それでもあまりに呆気(あっけ)ない最期だった。
もっと彼のことをおじいちゃんと呼んであげればよかった…。そう後悔しても、もう遅い。
……小泉のおじいちゃんは、もう私が何度そう呼んでも、はにかむような笑顔を返してくれることはないのだ。
……今日まで彼は私の後見人でいてくれた。私の努力が正当に評価されるよう、常に見守ってくれていた。祖父が存命中、研究に協力出来なかったことへの罪滅ぼしだったにせよ、私にとっては掛け替えのない人で、………大切な人だった。…単に後ろ盾という意味でなく。
でも、それは存命中には気付かなかったこと。
彼の持つ強大な権力を自分の目的のためにうまく使ってやろう、そんな失礼極まりないことを平気で考えていたこともある。
だが、……彼がいなくなって初めて知った。
小泉のおじいちゃんは、……おじいちゃんだった。…私が祖父に求めていたものを、温かく見守ることで与えてくれていたのだ。
私は本葬に駆けつけ、焼香(しょうこう)する時に、…………祖父が死んだ時以来、流し方も忘れていた涙を、…再び零すのだった……。

「…おじいちゃん……。今までありがとう……。もっと、………もっと、おじいちゃんって呼んであげればよかったね……。……………うぅぅぅぅぅ……。」

…もう何度呼んでも、それに応えてくれることはない。

私に出来る恩返しは、お膳立てしてくれた研究を完遂すること。………つまり、私の目的をきっちりと成し遂げることだけだ。

祖父の研究を認めさせた時、その唯一の理解者であった小泉のおじいちゃんの名前も共に蘇らせる。

……それだけが多分、今日までの恩に報いる方法に違いなかった。

…私は、ますますに日々の研究に全精力を注ぐことを遺影に誓うのだった…。

だが、………泣き面に蜂というように。…悲しいことや辛いことは重なる。

それはまるで、…今日まで順調に吹いていた追い風が止み、…急に向かい風になるようなもの。

……あまりに突然な、風向きの変化。…強く、冷たく、悲しく。

「………え？　どういうことなの、ジロウさん。」

「…うん。小泉先生が入江機関設立の立役者だったのは、鷹野さんも知ってるよね。……関係

機関でなかなか承認の取れなかったのを、小泉先生が強力に押さえ込んで無理やり通させたって話なんだよ。……何しろ、医薬品業界で多大な功績を挙げられた戦後日本復興の重鎮だからね。政財界に絶大な影響力を持たれていたし。」

「…その小泉先生が亡くなって、小泉先生が通した無理やりが通らなくなったということ…？」

「あくまでも噂なんで本当のところは僕にもわからないんだけど…。……一部の予算配当やプロジェクトの見直しが行なわれるらしいというのを聞いたんだよ。」

「……入江機関が廃止されるということ⁉」

「いや、入江機関を見直すというのは聞いたことないけど…。ただ、小泉先生の死後、長老たちの派閥や勢力、後継者争いがややこしくなっているってもっぱらの噂なんだ。すでにクライアントの人事にかなりの影響を与え始めてるらしいんだ。それで、小泉派が主導していたプロジェクトや聖域予算に対し、締め付けが行なわれるんじゃないかって、憶測が飛び交ってるらしいんだよ…。もちろん、それらは全て僕にとって、雲の上の話だからね。伝え聞いた噂話でしかないんだけれど…。」

ジロウさんは噂に過ぎないと何度も断ったが、……それは風向きが向かい風に変わったことを教えてくれるものだった…。

いや、…あるいはジロウさんはもう全てを知っていて、…風向きが急激に変わることを私に警告してくれたのかもしれない…。

そして、…次の定期監査の時。
それははっきりとジロウさんの口から告げられた。
その定期監査には、ジロウさんだけでなく、これまで一度も訪れたことがないような高官たちが混じっていた。
…その面々だけで、私は転機が訪れていることを知った。
「ご存知のとおり、アルファベットプロジェクトは戦後日本の国際的地位向上を抑止兵器の観点から探るものです。ですが、すでに昭和も五十年代に至り、西暦は二十一世紀を間近にしております。今や時代は、戦後を脱却し二十一世紀を迎えようとしているのであります。」
それはそのままの意味。
日本がすでに戦後を脱却しているということ。
そして、戦前の日本を軍事的優位で取り戻そうという過去の亡霊との決別を意味する。
「戦後四十年間、我が国は世界への平和的貢献を模索し、アメリカの最大の同盟国として十分な国際的地位を確立するに至りました。日本は世界に先駆けて核と軍隊を放棄した平和国家と

して成熟し、来世紀にはますますにその存在感を強めることでしょう。」
入江機関のスポンサー団体であるアルファベットプロジェクトは、核を持ちたくても持てない日本が、核に代わる抑止兵器を探そうというのが設立趣旨のはずだ。
…その下部組織である入江機関に出向き、今や日本は核を放棄したというのだから、……入江機関に対して今後、向かい風が吹き、しかもそれが強くて冷たいものになるのは明白だった。
あの雷雨の日で終わったはずの、サイコロの一が、再び私に、その出目を見せるようになりつつある…。

……サイコロの目程度で挫けるものか…。
神々の弄ぶサイコロ如きに、私の意志の力が負けてたまるか…。
「よって、現在、時代に即した形になるよう、アルファベットプロジェクトの見直しを進めています。新生アルファベットプロジェクトは、国際的にも世論的にも理解の得られない軍事的見地からではなく、国際交流と経済発展の二軸からなる平和外交の見地から日本の地位向上を模索していくことになるでしょう。」
…日本の政財界に絶大な影響力を持つ黒幕たちは皆、戦前の生まれ。戦前日本回帰が念願だ。新型爆弾で負けたから、それを研究すれば今度こそ勝てるという発想自体が、すでに戦争の亡霊なのだ。

……いや、そんなことは誰でも思ってた。

だが、大恩ある長老たちが気炎を上げるそれに、誰も意見することが出来なかっただけだ。

いずれ古き世代は老いて去り、新しい世代が長老と呼ばれるようになる。…小泉のおじいちゃんはその古い世代の、最後の砦だったということなのだろう。その死をきっかけに、黒幕たちの世代交代が行なわれるというだけの話だ。

表だって批判出来なかったものが、次々と批判され見直されるようになっている。

アルファベットプロジェクトは、一部の人間により私物化された諮問機関との指摘が当初からあり、省庁の予算を不正に吸い出しているとの批判が尽きなかった。

そうして、古い世代の利権を奪い、……結局は巡り巡って新しい世代の利権となる。

「よって、アルファベットに関わる全てのプロジェクトで今後、大幅な予算の見直しが図られていくことになります。これはもちろん、入江機関も例外ではありません。どうかご了解をいただけますよう、よろしくお願いいたします。」

「…………わかりました。私たちもスポンサーあっての研究です。どうかよろしくお願いいたします。」

入江が儀礼的な返事をするが、戸惑いは隠せないようだった。

入江機関には最高の機材と最高の人材が当てられている。はっきり言えば、金食い虫の研究

だ。
………雛見沢症候群に興味のない人間から見れば、気持ち悪い寄生虫の研究に、なぜこんな莫大な予算を投じるのか理解できないだろう。
だが、予算の引き締めならまだ何とかなる。…これまでの予算が潤沢過ぎたのだ。
それが適正な額に戻されるだけ。
………確かに痛いことだが、まだ何とか耐え凌げる。
……そう思っていた。………だが、耐え凌げる程度ならば、サイコロの一とは言えない。
……その意味においても、…これは間違いなくサイコロの一だったのである。
「…でありまして、この四月に新体制の理事会が発足し、全プロジェクトに対する新方針が示されました。これにつきましてはお配りします資料をご覧ください。」
時計回りに資料が回ってくる。
…資料の内容について進行役がのんびりと読み始めるが、私はそれよりも早く読み進み、この資料がどのような暴言を吐こうとしているのかを一秒でも早く知ろうとしていた…。
「入江機関はこれまで、先進的な研究において数々の目覚ましい成果を挙げられ、未知の奇病であった雛見沢症候群の全貌解明、そして治療薬の開発を成し遂げました。理事会でもこの成果は大変に高く評価しています。これも全て、入江所長以下、入江機関全職員の弛みない努力

によるものと思っております。」

「いえ、…恐縮です。」

褒め言葉のはずだが、私も入江も緊張は抜けない。

…物事の伝え方は、本題の前に逆の方向へ持ち上げるのが常套手段だからだ。

良い話だったら、先に悪い話をして後の話の良さを引き立てる。…悪い話でも同じだ。

「入江機関の研究目的は二つありました。奇病研究と治療法の確立。そして軍事的運用の模索です。新生理事会はこの後者の、軍事的運用の模索については即時の中止を決定しました。生物兵器の研究開発が日本国内で行なわれていた事実と痕跡は、今後の日本にとってむしろアキレス腱になりかねません。入江機関は直ちに、これに関わる全ての研究を中止し、一切を破棄してください。」

「わかりました。ご指示に従います。」

入江は即答する。

治療には積極的だが、その他については極めて消極的だった入江にとって、軍事的運用の研究など、元から何の興味もなかったことだ。

渡りに船とばかりに、それを了解した。

もちろん、これは私にとってはとても歯痒いことだ。

なぜなら、入江機関の研究目標を、雛見沢症候群の治療のためのみに限定しかねないからだ。
…私にとって治療の研究など、全容を暴く過程での副産物に過ぎないのだから。
「また、入江機関につきましては、最長三年以内を目処に、研究の収束を図ってまいります。予算もそれに合わせ、段階的に縮小する方針です。」
「ちょ、ちょっと待ってください…！　近年ようやく雛見沢症候群の全貌がわかり、今まさに治療法の研究を進めているところです。確かに研究は日々、進んでおりますが、三年という短い期間で確実に完成させられることをお約束は出来ません…！」
「理事会では、入江機関は治療薬について十分な研究を完成させているという認識です。すでに入江機関は治療薬Ｃ１１７を完成させ、その臨床(りんしょう)データを多数、」
「いえ、完成なんてとんでもない…！　まだまだ試薬の域を出ず、村人全員を治療できる目処はまったく立っていません！　このような段階で、研究終了ありきでの議論はまったくにもって無謀としか言い様がありません…！」
さすがに、これには入江も反対してくれた。
そのお陰で、私が騒ぎ立てずに済む。
……もしも入江が反対していなかったら、私は金切り声を上げて反論していたに違いない。
「それでは、入江機関には現時点では、感染者全員を治療し、雛見沢症候群を撲滅(ぼくめつ)することは

不可能だということですね？」
「そうです。もちろん村人全員の治療と雛見沢症候群の撲滅は将来的には不可能なことではありませんし、私もそれを最大の目標としています。ただ、それには十分な時間が必要で、そのためには無論、予算も必要です。私たちは調べ、実践し、確立する仕事をしています。設計図に従って物を作り、期間があれば必ず決まった成果が出せる仕事とは事情が違います。どうかそこを誤解なさらないようにしていただきたいです。」
意外に、入江も言うべき時は言う。そして、言っている内容は至極もっともなことだ。
研究は、カネと時間があれば、必ず成果が挙げられるというものではない。
…ただ、入江の言うこと全てが承服出来るわけではない。
……入江は、予算と期間については反論しているものの、研究方針が雛見沢症候群の治療のみに限定されることについてはほぼ納得している。
………それでは駄目だ。神秘を解き明かせない。雛見沢症候群の発見が、祖父の偉業にならない…！
「なるほど、入江所長の仰ることもごもっともと思います。私どもにとっての最大の目的は、軍事目的の研究が行なわれていたこととの完全な破棄です。よって、雛見沢症候群という奇病が研究されていた痕跡と、そもそも存在していた事実についても隠蔽すべきであると考えます。

最終的に、雛見沢症候群が世間に知られることなく、撲滅されるならば、そのための期間と予算は必要不可欠なものでしょう。…それについては、今後、協議を重ねていくということでよろしいでしょうか?」
「はい。異存ありません。」
「では入江機関は、できるだけ早急に、雛見沢症候群撲滅を秘密裏に行なえるプランと予算案を作成、提出してください。極力、ご趣旨を汲み取れるよう努力します。」
「わかりました。早急に提出いたします。」
「誤解ないようにしていただきたいのは、私どもはあくまでも研究を直ちに中断させようというのではなく、円満な形で研究を終了させようということです。この違いをご理解ください。」
「ええ、もちろん理解しております。」
……そんなやり取りがされている間、…私は彼らが口にしたある一言に呆然としていた。
雛見沢症候群を、秘密裏に撲滅する。
それはつまり、雛見沢症候群をなかったことにするというのと同じだ。
…それでは、祖父の偉業が讃えられないじゃないか………。
書類の擦れる音と議事の進行の声だけが聞こえる会議室内で、…私は時計が秒を刻む音だけを耳に入れながら、手の平に滲む汗を、ただぐっと握り締めていた……。

◆新しい風

園崎家の軒先で、お魎と茶飲み話をしていた壮年の男は、その話にオチをつけて大笑いした後、立ち上がった。

「それじゃ、俺はそろそろお暇(いとま)しますわ。どうもご馳走様でした。」

「えぇんねぇぇんね。また来たってぇな。」

「ただいまー！　って、あれ、弘(ひろし)叔父さん。お久し振りですー！」

「おう、魅音ちゃん。今、帰りかい。叔父さんは今から送迎だよ。」

「送迎？　あぁ、不動産屋さんのお仕事？」

園崎家は雛見沢屈指(くっし)の大地主だ。

もっともこんな田舎の余った土地だから、荒れるに任せているだけで有効利用しているわけじゃない。

そんな村内の園崎家地所を、最近は分譲地として売りに出していた。

ご先祖様から受け継いだ土地を余所者(よそもの)に切り売りしていいのかという批判も、一応、親族会議では出たが、婆っちゃが、しゃあらしいわぁ！　と一喝(いっかつ)してそれにて決着。

休耕地のいくつかが更地にされて、分譲地として解放されることになったのだ。
…これに関しては、私も疑問があった。
だって、園崎家は大金持ちだ。土地も余ってるがお金だって余ってる。
わざわざ土地を切り売りしなければならない理由がない。
いや、それどころか、先祖の土地を余所者に売るなんて話、婆っちゃが言い出すなんて。それどころかむしろ、血管を浮かせるほどに怒鳴って反対しそうなのに。
「じゃあね、駅前に寄った時はぜひ遊びにおいでよ。麦茶くらいご馳走するから。」
「はい、ありがとうございます。お仕事はどんな感じですか？」
「都会の人が案外、興味を持ってくれたからびっくりだわ！　便利な都会に住みながら、わざわざこんな田舎に別荘が持ちたい小金持ちばっかりだね。」
「やれやれ、物好きなことで！」
「一軒、別荘じゃなくて、引っ越しで検討されてるお宅があったね。アトリエが持ちたいとか言ってたから、画家さんとかかねぇ？」
「へー！　そりゃすごいや！」
「おっと、いけねぇわ！　じゃ、叔父さんはバスに戻るわ！」
分譲地の見学ツアーを企画したらしく、それの送迎バスの運転をしてきた、ということらし

い。
　そろそろ見学や説明が終わる頃合なのだろう。
　叔父さんは松の枝をくぐって、ぱたぱたと駆けて行った。
「…ねぇ、聞いていい？　余所者嫌いの婆っちゃがさ、どうしてわざわざ分譲地なんかにしたの？」
「私ゃあ余所者なんか嫌いだし都会者も大嫌いだ。……だが、村にゃ必要なんよ。空気の入れ替えみたいなもんさな。」
「外の人が来ることで、…何か村にいい影響があるということ？」
「ここはいい村だぁね。……今は忙しい世の中だから、一日たりともそったぁしといとくらんがな。昔だったら、十年二十年住んでてもなぁんにも変わらん、変化のない静かな村だったんよ。」
「まぁ、それが田舎ってもんだしねぇ。この村じゃ、昨日と今日と明日に、何の違いもない。……私ゃ退屈だけどねぇ！」
「でも、友達が出来たろ。外から竜宮のレナちゃんが引っ越してきて友達になってくれたんだろが。近い歳の友達が出来て嬉しい、言うとったがな。」
「うん。予期せぬ友達が突然出来るのは楽しいね。」

「レナちゃんが来んとな、魅音、学校が退屈だぁ退屈だぁ言うとったんね。ようお、覚えとる。くっくっくっくっく！」
「それが、外から引っ越してくることによる効果だって言いたいわけ？」
「…どんな寒い冬場にかて、たまには換気をせんとな、囲炉裏の悪い空気が溜まって窒息しちまうん。寒くてしんどいのは承知で、窓をがらりと開けることもあるんよ。」
「……外から人を迎えることが、村の換気になる？」
「あぁ、なるん。そして綺麗な空気を入れて、私らみたいな悪い空気はとっとと追い出されるべきなんよ。」
北条家のことを一言でも出せば、婆っちゃは烈火のごとく怒り出してしまうから言えないが。
……多分、婆っちゃは北条家に対する、いつまでも消えない村八分の気風とか、そういうのを全部総括して言ってると思う。
北条家と大喧嘩をした説明会の時のことを思い出すと、今でも腸が煮えくりかえるが、……それでも、そろそろ鞘に収めた方がいいと思っているのだろう。
もっとも、安易に許すとは言えない難しいお年頃だ。
対外的にはもう勘弁してやるとは言えない。
…………本当は嫌いじゃないくせに、面と向かうと邪険にしてしまう、小学生女子なみの感

情表現のような気がする。

…人って、歳を取ると、どうやら一周回ってきて、子供に戻るんじゃないだろうか。

それは婆っちゃだけじゃない。村のお年寄りたち全体。……いや、村に染み付いた悪弊と言うべきか。

それは多分、婆っちゃの例えた、澱んだ悪い空気とそっくりなものだ。

締め切った室内でいくらばたばたと扇いだって、何の意味もない。

窓を開けて、新鮮な空気をたっぷり入れなきゃ、室内の空気は澄まないのだから。

「実際に引っ越してくる人があるかはわからないけど。その人にそこまでを期待しちゃうのは気の毒じゃない？　くっくっく！」

「レナちゃんが一人転校してきても魅音は変わるんね。誰が引っ越してきても、きっと村は変わる。……願わくば、それが元気な若者で、わしら年寄り連中が安心して村を任せられるくらい、大暴れしてくれよると嬉しいんだが。それこそ年寄り連中が、もうやっとられんね、あの世に退散するわー言うくらいにな。」

「くっくっく…、何それ。死んだおじいちゃんの話？」

「あほんたれ、誰が爺さまの話をしたんよ…‼　ほれ、お手伝いさんに言って、縁側のお茶を片付けさせてくれな。」

「へいへい。了解了解。」
「…………魅音。」
「ん？」
「…………北条悟史が消えた日。…お前、私に詰め寄ったろが。」
「…あぁ、そんなこともしたね。…あはは。」
「私ゃな。…あれで目が覚めたんよ。……北条家がどうのこうの言う問題は、年寄り連中が死ねば時間が解決してくれるなんてんじゃあかんね。……そんなの待たず、早ぅ解決せんとなあかん。」
「でも、自分にはそれが出来ないから。…余所者にそれを託す？」
「………それが、私にできる精一杯だんね。」
「どんな悪い手札だって、次のドローで良い札が入れば、流れが変わるきっかけになることもある。………それに期待して山から札を引くのも、ありかもしれない。」
「新しい風は、魅音、お前らの世代になる。……外の風を迎え入れたれな。…そして、お前は内からの風となって、交じり合いながら村の澱みを吹き飛ばしてくれ。」
「他力本願（たりきほんがん）の極みだね。自分が火種を作ったくせに、孫にその尻拭（しりぬぐ）いをさせるとは。」
「……そう言うなや。新しい風を、…新しい園崎家の当主として、村に招き入れたれ。」

「…それが、次期当主の仕事だってんなら。」
「………頼むわ。魅音。私ゃあ老いたんね。もう憎まれ役しかでけん。」
風鈴がチリンと、弱々しく鳴った。
それは涼風がこれから吹くことを知らせる先触れだったに違いない…。

◆失意

「……今日はこれくらいにしようか。気が乗らないみたいだからね。」
「え？　……あら、そんなことはないのよ。そう見えたならごめんなさいね。」
さっきから鷹野さんは、ファインダーを覗いてはいるが、シャッターを切っている様子はまったくない。
僕に付き合ってくれているだけで、とても野鳥撮影などに興じる気分ではないらしい…。
鷹野さんは、先日の新理事会による方針転換以来、気を落としているようだった。
…無理もない。そもそも入江機関は彼女が作った。雛見沢症候群の研究に生涯を捧げるために作ったものだ。
それを否定され、数年以内に研究を畳むよう求められては、気落ちするのも無理はない…。

しかも、残された期間を精一杯研究に使えるわけじゃない。
予算は段階的に削減され、最後には研究どころか、残務整理しか出来なくなるだろう。
……彼女は、故高野先生の孫娘だという。
…そして、祖父の果たせなかった研究を自分が完成させようと意気込んで今日までやって来た。しかも、今日までむしろ順調だった分だけ、…突然の風向きの変化に衝撃を隠せないに違いない…。
黒幕たちの政変は相当のレベルらしい。
新生理事会は総入れ替えになり、かつての小泉派の息の掛かった人間や企画には見せしめ的な人事が横行しているとも聞く。
また、一気に変わった風向きは、もう当分変わりそうもない。
……小泉派が再び返り咲く望みは薄く、入江機関がどう訴えようとも、かつての支援を期待するのは不可能だった。
「……もう、どうにもならないのかしら。」
鷹野さんが独り言のように呟（つぶや）いた。
……それは悲しいことだが、…その通り。どうにもならないことなのだ…。
「…………最初、理事会では即時研究を中止という話も出たんだ。…それを、何とか納得させ

て数年間で段階的に終了というところまで勝ち取ってくれたんだよ。……入江機関発足で僕たちを世話してくれた人たちがね。」

「……くす。…なるほど。一見、最悪と思えるこの状況も、それでも陰で誰かが勝ち取ったぎりぎりの成果なのね…。」

「それで勝ち取った期間が、…せいぜい三年なんだ。僕も一応努力はしたんだよ。鷹野さんが今日までに作った資料を理事会に説明し、とても重要な研究であることをアピールしたつもりなんだけど…。」

「……それでも、三年でおしまいなのね。」

鷹野さんには、僕が新しい理事たちにどれだけの苦労をして説明をしたか、わからないかもしれない。

…今の言葉には、何年勝ち取ろうと終わらせられることに変わりはないという響きがあったから。…彼女の期待に応えられず、失望させてしまっているのがわかり、…男として胸が痛んだ。

「僕に出来ることは、…せめて研究が畳まれるまでの数年間を、心残りがないよう研究出来るだけの予算を付けられるよう根回ししてあげることだけだ…。………ごめん。こんな程度のことしか出来なくて。」

「いいのよ。それがジロウさんにできる精一杯なら、…それでとても嬉しいもの。」
……彼女の言葉が少し、痛い。
…もう少し角を丸めてもらいたかったが、傷心の彼女にそれを期待するのは、男としてみっともない。
…こういう時こそ、彼女の痛みをわかってやらなければならないのだから。
それに、亡くなった小泉先生のことを、彼女がおじいちゃんと呼び親しんでいたことも知っている。
彼女にとって、小泉先生の死は、単なる政変の勃発(ぼっぱつ)や風向きの変化だけじゃない。
……自分を見守ってくれていた保護者を失った悲しさもあるはずなのだ。
彼女は、どう背伸びして悪ぶって見せたところで、…本来、この世界にいる人間じゃない。
……普通の、一人の女性なのだ。
それが、雛見沢症候群に魅(み)せられ、自分の力以上の力を得なければ研究が続けられなくなった。
……そこに手を差し伸べたのが、…本来、彼女が交わってはいけなかった、裏の世界だったのだ。
そんな世界に、今やたったひとり置き去りにされ、気丈を装っている彼女…。

鷹野さんは僕のことを、きっと頼りない男だと思っているだろう。
…実際、僕は彼女の期待に応えられるような器じゃないし、……そんな力もない。せめて出来るのは、……最後まで彼女の味方でいてあげたいという誠意だけだ。

彼女には行動力がある分、…追い詰められた時、どういう行動に出るのかわからないところがある。……彼女に限ってまさか、と思いたいところだが、……最後の最後に何をするかわからない不安はあった。

その最後の最後の時、それに踏み切る前に、せめて僕が心の支えになれればいいのだが……。
……それだけの信用を勝ち取れていない、自分の不甲斐(ふがい)なさが情けなかった…。
男として、彼女に頼ってもらいたいという気持ちは、…もちろんある。
でも、そうじゃない。……たったひとりで、こんな世界に放り出されてしまった彼女に、せめて誰か味方がいなくちゃいけないんだ。
そして、それを知っているのが僕ひとりしかいないなら、…それは僕の役目ではないのか。
彼女が決して助けを求めない性分(しょうぶん)であることを、僕は今日までによく知っている。
…たとえ、余計なお節介だと疎(うと)まれても、近くに居てあげる人がいなくちゃ駄目なんだと、わかってる。

その任に僕が相応しいとは思わない。
…きっと僕より相応しい、頼りがいのある人間はたくさんいると思う。
でも、だからといって、その誰かが現れるまで、彼女をひとりぼっちにしていていいということはないんだ…。
「……鷹野さん。僕は全然頼りがいもないし、みっともない男かもしれないけど…。」
「ん？　何、突然。どうしたのジロウさん。」
「それでも、頼ってもらえたら、きっと力になれることもあると思うんだ。だから、」
「ありがとう。でも私、しゃべるだけでも心が軽くなるっていうの、あまり信じてないの。ごめんなさいね。気にしてもらえるだけでも、とても嬉しいわよ。」
「……そ、そうかい。ならいいんだ。…僕はずっと味方だから、それだけは信じていてほしいな。」
「もちろん信じてるわ。……理事会をうまく説得出来る方法があったら、ぜひ、教えてね。」
「うん…。僕なりにも努力してみるよ。」
なぜだろう。
……彼女の方がずっとしっかりしていて、僕の助けなど何の役にも立たないのはわかっているのに。

……今の彼女には助けや支えが必要な気がする。…普段の気丈な彼女と一見、何も変わらないのに、…なぜか彼女とずっと写真を撮ってきた僕にだけはわかるのだ。
だって、ファインダーは心を覗く窓でもあるのだから。
…そんなことを言うと、また柄にもないと言われるので、口にしない。
とにかく。…今ほど、彼女に支えが必要だと思うことはなかった…。

◆分譲地下見

……正直、困った。
私、前原伊知郎(まえばらいちろう)は今、極めて絶好調に素晴らしく、…困っている。
この雛見沢へは、別荘地分譲のための見学ツアーでやって来た。
それで不動産屋さんの説明が終わり、皆さん、お時間までどうか散策を楽しまれてください、なんて言われて。
………あまりに美しい新緑の景色と美味(おい)しい空気、そしてとめどなく湧き上がるインスピレーションに誘われるまま、ふらふらと歩いていたら、……その。…ここはどこだろう。
集合の時間までまだ少しあるが、……完全に迷ってしまっている。

田舎とは言え、人里だ。
適当に歩いてれば誰かに会えるだろうし道を聞けるだろう。
焦(あせ)らない焦らない、はっはっは。……ちょっとコワイのは新幹線の時間くらいだ。
しかし、誰かに会えるだろう、道を聞けるだろうというのは、少し楽観が過ぎたかもしれない。
…だって、さっきから誰にも出会わないのだ。
…私は、都会人特有の無用心(ぶようじん)さで、実はいつの間にか人里を離れてしまっていて、遭難(そうなん)直前な状態なのでは…。
だから、人の声が聞こえたので、とてもほっとしたのだ。
それは小さな女の子たちが、遊ぶような声。
……子供が遊んでいるような場所なのだから、そこは安全な場所に違いない。私は自然とそこへ足を誘われた。
手入れされていない生え放題のススキの茂みを回りこむと、そこはとても美しい野原だった。
そこには、二人の少女が戯れていた。
無垢(むく)な野草の花々が祝福する中で、くるくると踊るように遊ぶ二人は、…私がそれまでに見てきたどんな絵画よりも美しく、…こう言ってはオーバーかもしれないが、どんな宗教画より

も神々しく見えた。
どうして、無垢な少女がこうして踊っているだけで、私たちは神々しい気持ちになれるのか。
…それは多分、私たちが罪に塗れて生きているからだ。
生きることは綺麗なだけじゃない。…生きているだけで、必ず罪を被っていくのだ。
だから私たちは、まだ穢れていなかった幼い頃の姿に、幻想的な神々しさを見出す。
生きるために成長を余儀なくされたのに、……成長によって失ってしまった清らかさを知り、それをまだ持つ少女たちに憧れと尊敬の念を抱くのだ…。
「……みー。とか何とか小難しいことを言いながら、変な不審者がボクたちをじっと見ていますのです。」
「あぅあぅあぅ。…梨花、あれは不審者ではありませんのです。」
「…え？　ぉわ!!　わわわ、もも、申し訳ない！　決して不審者じゃないんだよ。わはははは…！」
「……とか言いながら、ボクのお胸やお足から目が離せないのです。にぱ〜☆」
「みみ、見てないよ見てない！　見てないから駅員さんに突き出すのはやめてー!!　この鏡は髪型を直すために使ってて…!!」
「……あはははははは。何言ってるかわかんないのですが、とっても面白いことを言っている

気がしますのです。」

「……何というか、血は争えないという気がしますです。」

少女たちは、不意に現れた私をさんざんからかうと、やがてそれにも飽き、私が来る前からそうしていたように、再び二人で踊るように遊び始めた。

私は、それ以上、どんな言葉を掛けても無粋になると思い、少女たちをそっとしておくと、切り株に腰を下ろして、そっと様子を見守った。

……彼女たちはいくつくらいだろう。

幼そうな雰囲気ではあるけれど、…圭一といくつかしか違わないかもしれない。

もし、ここに引っ越してくることになったなら、圭一が学校で出会うかもしれない子だ。

学校で出会う子というのはつまり、…その土地に住む子ということだ。

…もし、この雛見沢の学校に通っているのが、彼女たちのような子たちばかりなのだとしたら、…………たとえ、田舎での暮らしがどれだけ困難だったとしても、…今の我が家には引っ越す価値があるのではないか。

……私たちは、駄目な親だった。

圭一のことを何も理解せず、その心の悩みを何も汲み取れずに、最後の最後まで放置してしまったのだ。

教育書によるならば、…どんな悪い子の不良行為だって、最初のそれは家族への何らかのSOSなのだという。

行為そのものが何かではなく、その行為を起こすことで、コミュニケーションを得たいという、子供のもっとも原始的なアピールだというのだ。

……人は、なまじ言葉が話せてしまうから、…かえってそれを読み取れない。

言葉しか耳に出来ず、息子が発する心のサインに耳を傾けられない。

圭一は、……自分が全て悪いと思っているだろう。

…もちろん、圭一も悪い。

人は犬猫じゃないんだ。

していいことと悪いことの区別はつけなくてはならない。

…でも、…親である私たちも悪い。

そこまでのことをしなければ、わかってもらえないと思わせてしまった、親としての不甲斐なさが、本当に情けない。

私たちが圭一のことを真に理解し、追い詰めるようなことをしなかったなら、圭一はあのようなことを無意識にすることで、アピールすることはなかったのだから。

だから、あれらの事件は圭一だけが悪いんじゃない。…私たち前原家全員が悪い。

……圭一にそれを説明したかったが、それを理解させるには圭一はまだ幼く、直情的だ。
…今は罪の意識に潰されながら、生きる気力さえ失っている。
母親も同じだ。…自分が成績偏重(へんちょう)の教育を強いたため、こんな事件を引き起こしてしまったと自分を責めている。
……それは私もだ。私が子供の教育に無関心だったからこんな事件を引き起こしてしまったのだと、自分を責めている。
その十字架は、怪我をした子に許してもらい、退院した後であっても、私たちの肩から降りることはない。
ならば、十字架に潰れて死んでしまえというのが世間の冷たさだろう。
……でも、私たちは生きていく。罪を反省し、十字架を背負いながらも、生きていく。
この村でなら、私たちはもう一度新しいスタートを切れるのではないだろうか。
…あの戯れる少女たちを見ていて、思う。
圭一に必要な友人たちとは、あのような子たちなのだ。
…塾の話や、模擬(もぎ)試験の結果のことばかりが話題に上るような子たちでは与えられない何かを、きっと圭一に学ばせてくれるに違いない。
さっきの少女たちは、この野原には場違いな立て看板のところでふざけあっていた。

それは分譲地の看板で、今日、私を案内してくれた不動産業者の名前が書かれている。
…ということは、…こんな美しい野原に、…私たち一家は希望すれば住むことが出来るのか。
そんな私の心を再び見透かしたように、少女は言った。
「……ここはいい村なのですよ。きっと、都会にはなかったものがあるのです。」
「そうだね。私もそんな気がするよ。」
「……でも、この村にないものを、きっと、都会のあなたが持ってきてくれる気がするのです。」
「そんなもの、…私たちにあるのかな。」
「ありますのですよ。あぅあぅ。」
「……ボクたちは、この村で何百年間もこうしています。そこには誰も訪れず、何も起こりませんです。…だから、何も起きないし、何も変えられない。」
「何も変わらないのが、この村のいいことじゃないのかい。」
「……何かを変えたいと思うから、この村に来たのじゃないのですか…？」
「確かに、…………そうだね。」
「……ボクたちも新しい人を迎えたい。それは例えるなら水の流れ出ぬ沼の堰を破るようなもの。水は出入りがあるからこそ清水となる。流れを得ぬ湖は沼に過ぎない。」

「確かにこの村は、明治のついこの間まで沼の名前がついた村でしたのです。……でも、それが変わり、雛見沢という地名に変わりましたのです。……沼の水は流れず澱む。でも、沢の水は澱まない。」

「……くす。それにね、あなたたちが教えてくれるのよ。堰は破れるものだ、破るものだ、ってね。」

…それは少女たちのナゾナゾ遊びなのだろうか。

私には言っている意味はほとんどわからなかった。

でも、ひとつだけわかるのは、……彼女たち村人は外から来る新しい人間を心待ちにしていて、交流を通じて村の新しい歴史を築きたいと願っているということだ。

私はもう一度、少女たちの後ろにある看板を見る。…この場所を覚えておくために。

…私の心は、もう決まっていた。

「……引っ越してくるのを、待っていますですよ。…前原。」

「ぁーー!! いたいた! お客さん! こんな遠くまで行っちゃダメですよー!」

突然、遠くより聞こえてきたガラガラ声が、この無垢な時間を終わらせる。

…不動産屋の案内の人だ。私が戻ってこないので探してくれていたのだろう。

「すみませんすみません…! すっかり道に迷っちゃって…。」

頭を掻きながら謝罪する私。
…後ろを振り返り、少女たちの姿を探すと、…なぜかもうその姿は見えなくなっていた…。

◆デジャヴ

庭園が自慢に違いない趣のある料亭の前にタクシーが停まり、恰幅のいい老人たちが次々に降りてきて歓待を受けていた。
「やぁ、中川くん！　ずいぶんの久方ぶりになるね。最近はやってるのかい？　アレ。わっははははははは。」
「いえいえ、もうさっぱりです。歳は取りたくないもんですなぁ。」
「クレイやる時は集中してやらないとダメだよ。あんまり間を空けすぎると勘が鈍っちゃって意味ない意味ない！」
「先生、ご紹介します。鷹野三佐です。」
「初めまして。本日はお忙しい中、お時間をお割きくださいまして、ありがとうございます。」
「あぁ、別に君のために時間を割いたわけじゃない。うまい生ウニを食わせてもらえるって話でねぇ！　ウニはいいんだよ君、ビタミンAが豊富でね、お肌に特にいいんだとか。女性は大

好きでしょ、ウニ！　わっはははははは！」
ウニにビタミンＡが豊富なのは認めるが、それでもほうれん草なんかに比べたら騒ぐほどではない。
……いや、そんなことはどうでもいいか。…何となく不快そうな男だったので、揚げ足が取りたくなっただけだ。
今日の男たちは、入江機関の予算を握っている、アルファベットプロジェクトの理事。
もしくはその理事に意見できる立場の人間たち。
…早い話が、入江機関の新しい飼い主たちだ。……だが、それ以上に、小泉のおじいちゃんほどではないにしても、各界の重鎮たちや黒幕たちでもある。
粗相のないよう気をつけなくてはならない…。
そんな相手だから、私ごときが彼らを呼びつけることなど出来るはずもない。
かつての小泉派のツテを使って、何とかこの機会を設けてもらったのだった。
かつて、何から何まで私の思い通りになるよう、尽力してくれた小泉のおじいちゃんはもういない。
……ここからは、本当の意味で私ひとりで切り拓いていかなくてはならないのだ。

だが、今日とて私の独り舞台ではない。

今日の場を設けてくれた人たちの顔を潰すことは出来ないので、私の出番が与えられるまで、じっとお酌して待っているしかない。

今日の私の最大の目的は、雛見沢症候群がどれだけ優れた研究対象であることかを説明し、研究の無期延長を求めることだ。

彼らはカネのことしか見えていないから、雛見沢症候群がどれだけのポテンシャルを秘めるかわかっていない。

それだけの高額な研究費を費やすべきものだとわかっていない。

この研究は単なる未知の寄生虫の存在だけに限らず、さらに人類学の常識すら覆しかねない。

ノーベル賞だって讃えきれないほどのものなのだ。

……それを無学な彼らに説明するのは難しいかもしれないが、やらなければならない。

そのために、素人を煙に巻くことがないよう、わかりやすい資料を今日まで相当の時間をかけて作り上げてきた。

……私たちは無知との接触を嫌うため、時にわざと煙に巻く資料を作ることがあるが、今回はそうではいけない。

彼らを見下さず、真の意味で理解を求めなくてはいけないのだから。そのために、わかりや

すく作った資料は相当な量になってしまった。
…本当は、こんなのんびりと懐石料理を摘んでいる暇も惜しい。早く本題に入って、彼らに理解できるよう懇切丁寧に説明したい。
……だが、慌てる乞食はもらいが少ないという諺もある。…今はじっと伏して待つしかない。
「うん。正直ねぇ、これまでのアルファベットはあまりよくないと思うのです。結局こいつは、未だ頭ん中が大東亜戦争な年寄りどものね、お砂場みたいなもんだったんですな。年寄りどもが自分のじゃないカネで、大日本帝国復興の夢を描くお砂場です。そんな年寄りどもの妄想のために、一体どれだけの公金が垂れ流されたやら！」
「聞いた話じゃ、奥野先生辺りが検察を突っついて、旧理事会を横領で追わせてるらしいですなぁ。」
「わっはははははは。年寄りたちをヨイショしてウマイ汁を吸っていた連中の末路ですな。もっとも、表沙汰にゃ出来んでしょうから、別件で引責、左遷といった形になるんでしょうが。…いやはや、これも戦前の亡霊をずっと野放しにしていた日本のツケですな！　いやぁ、この焼きウニの汁もたまらない！　うっはははは！」
「これは手厳しい…。そんな中で先生にこんなお願いをするのは非常〜に何ですが。ひとつ、お時間を頂戴出来ればと思いまして…。」

「えっと、入江機関さんでしたっけ？　確か、長野だか岐阜の方で風土病の研究をされてるんでしたなぁ。えっと、どういうことになってましたっけ？」
「理事会の決定で、軍事転用研究が中止に。あと、研究そのものも三年以内に段階的終了と決定しています。…あ、いえ、これは継続協議中でした。まぁその、いずれにしましても、数年以内に閉鎖になる予定です。」
「あぁぁぁ！　思い出した思い出した。入江機関さんは旧理事会でも評判が悪かったみたいですなぁ。何しろ莫大な予算をほとんど無審査で吸い取ってましたからねぇ。某大先生がどういうわけかこのプロジェクトをやたら後押しされてたみたいでしてね。その絡みもあって、結局、誰も文句が言えず放置されてきたってのが実際のようです。……まぁでもなぁ！　某大先生は女癖が悪かったから、それもあったのかもしれませんなぁ、わっはははははは！」
　私が小泉のおじいちゃんを体を使って籠絡したとでも言いたいのか。
…私たち二人に対する侮辱も同然だった。……だが、それをぐっと堪える。この程度のことで表情に出してはいけない。
「……それで本日は、当機関の研究内容について説明させていただき、当機関に対する理事会の決定について、どうかご再考をお願いしたいと思いまして、お時間を頂戴させていただきました。本日はこのような場へご多忙な中、お越しいただきましたことを深く御礼申し上げます

…。」
「まぁ、タダでウニが出て来るわけはないってことですな！　わっはははははは！」
私は、雛見沢症候群の存在が、どれだけ重要な意味を持つかを性急にならないよう注意しながら説明した。
雛見沢症候群のポテンシャルは、軍事転用などという瑣末なレベルに囚われず、もっともっと重要な意味を持つということ。…イデオロギーや宗教などすらも説明しかねないこと。
そもそもの人類の定義すらも揺るがしかねないということを。時間をかけてゆっくりと説明した。それらの全てが、この品のない男たちに伝わった自信はないが、理解してくれるならば何割でも構わない。…雛見沢症候群がどれだけ偉大な発見なのかが理解してもらえればいいのだ…。
「ありがとう三佐。………ふぅむ、なるほど。……ふぅむ。」
「ちょっと検討をしたいので、三佐には一度下がってもらってよろしいですかな？」
「…はい。それでは失礼させていただきます。」
当事者の前で議論出来ないのは当然だろう。
…資料は全て預けた。後は彼らがそれを好意的に汲み取ってくれることを期待するだけだ。
私は退室して襖を閉めた。……隣に控え用の部屋を取ってあるのでそちらへ行く。

が、…足を止める。……本当はマナー違反なのだが、襖越しにそっと耳を澄ました…。
「こりゃあ…、わはははは、何と言いますか。前理事の皆さんも気の毒としか言い様がありませんなぁ。」
「…いや、はははは。小泉先生がですね、非常に強く推されていまして…。」
「小泉先生には、××製薬の初代顧問に就任された時に一度お会いし、とても聡明な方だなぁという印象を強く持っていたのですが、……ん〜。」
「人間、歳には勝てないということですな！　人間、引き際が肝心だと思い知らされますよ。」
「ただですね、雛見沢症候群という非常に珍しい病気があるのは事実でございまして。決して全てが全て妄想というわけではありませんでして…。」
「入江機関はすでに病気の解明と治療薬の開発に成功しているというじゃありませんか。それで十分ですよ。」
「現代日本にとって、周辺諸国を過敏にさせる件については厳に慎むべきです。中でも軍事分野はもっとも敏感と言えるでしょう。少なくとも、数年間にわたり軍事目的の研究がされていた事実は直ちに抹消しなくてはなりません。」
「それは軍事研究の中止とは別に？」
「そうです。雛見沢症候群は生物兵器開発のための研究という事実は、直ちに研究を中止した

としても残ります。雛見沢症候群を、目的は何であれ研究した事実は厳重に隠蔽されなければなりません。…できれば、雛見沢症候群そのものがなくなってしまうのが好ましい。」
「ですな。病気が残れば、やがては関心を持つものが現れ、せっかく埋めた穴をわざわざ掘り返す輩が現れないとも限りません。理事会の決定通り、入江機関は病気を撲滅させ次第、研究の痕跡を全て消した上で解散させるのが良いでしょう。」
「ふむ。やはりそういう結論に行き着きますな。ノーベル賞が取れるかどうかが問題ではなく、戦後日本にとって無用な研究だということです。」
「そもそも、大昔から存在し、特に異常もなくやってこれたわけでしょう。藪を突く研究なのではと当初から思っていました。」
「同感ですな。雛見沢症候群という病気の存在自体は疑わないが、……この、高野という第一発見者は、少々この病気を脚色し過ぎですな！」
「私も資料を読みながら、ユニークな発想をする人だなぁと思っておりました。第一、寄生虫で人の思想が染まるなんて、聞いたことがない。そりゃいくらなんでも、酷すぎる。」
「宗教もそれで説明できるなら、お釈迦様もキリストもみんなその、何でしたっけ、女王感染者ということになってしまう。そんなこと世界に発表したら、世界中からとんでもないバッシングに曝される。」

「今時の宗教は怖いですからなぁ。わっはっはっは。」
「動物の脳に寄生する寄生虫がいるなら、たまには人間の脳に寄生する寄生虫がいてもいいとは思う。しかし、その寄生虫が思想や人格までもコントロールする可能性なんてのは、わっはははは！　さすがにこりゃちょっとユニーク過ぎます。」

……襖の隙間からそれを覗いていた私は、……不思議な既視感に囚われていた。
初めて経験することのはずなのに、…初めてじゃない気がする。
よくわからないけれど、その思い出はとても悲しくて、苦々しくて、……あれ、………あれあれ…？　なんで、……涙が……。
気付けば、…襖の向こうはいつの間にか畳みの部屋じゃなく、……とてもとても懐かしい絨毯の部屋に。
埃の臭いと、何かの薬品の揮発した臭いの混じった、へんてこだけど、とても居心地のいいあの空気が漏れ出してくるあの部屋に。
そこには、…………本当に懐かしい祖父の姿が。
心を込めて書いた論文を扱き下ろされ、…涙を見せることも許されなかった、祖父の姿が。
それは幻なんかじゃない。

……だって、今日、彼らに託した資料の中には、祖父が書いた論文の引用がたくさん含まれている。…だから、そこに祖父がいて、彼らに説明してくれていたとしても何の不思議もなかった。…そして私は、祖父の懐かしい姿に涙すると共に、……その偉業を蔑み、馬鹿にする彼らの悲しき悪口雑言を目にした…。

確かに一度あった光景。
そして一度で終わった光景のはず…。
なのに、なぜか同じ光景が再び目の前で繰り返されていて…。

私は現実と幻が重なり合う、その奇妙な世界を襖越しに覗き、呆然としているしかない。
「あの三佐もちょいとおかしいし、こんな世迷言を信じた小泉先生もおかしいが、…やはりこの第一発見者の論文が一番おかしいですな。」
「期待と妄想が入り交じっていて、これは論文というより創作の次元ですな。というか、これはこのままどこかの出版社に持ち込んで本にした方が受けると思いますよ。」
「確かに確かに！　私の友人に出版社の社長やってるのがいてね。きっと面白がって読んでくれると思いますよ。わはははははは！」

「笑い事ではありませんぞ、皆様方。このとんでもない研究がまかり通って、巨額の予算が数年間にもわたって投じられていたのですからな。…特に酷いのは、ハザード時に村をガス殺するための装備を用意した、という点です。これは絶対に国民に知られてはならないことです。」
「計画が存在しただけでも恐ろしいのに、実際に実行可能な装備が準備されているというのは国外はおろか、国内世論も敵に回すことになるだろうねぇ！　しかも、そのガス殺のための装備の維持費がすごいことになってるじゃないか…！」
「そんなの、本当に維持費にしてるわけないじゃないですか。そういう名目にしてトンネルしてる架空プロジェクトでしょ、どうせ。大体、何でしたっけ？　少女が一人死ぬだけで村人が一斉に発狂する病気なんてあなた、どこの漫画の話ですか。」
「まったくまったく！　こんな子供騙しを鵜呑みにして巨額の予算を垂れ流すとは、つくづくイカンと思いますなぁ！　こんな資料を真に受ける連中がいるというんだから、実に馬鹿馬鹿しいことです！」
そう言いながら、大袈裟なジェスチャーで乱暴に資料を置く。
……置いたというよりは、叩き付けたというのが正解かもしれない。
だって、資料の束が綺麗に置かれず、周りに舞うように散ったから。
「ですよなぁ、わははははは！　あ、ちょいと失礼。お手洗いに！」

そう言って立ち上がった男が、……ぐしゃりと、それを踏む。
それは、畳の上の資料ではなく、………絨毯の上の、祖父の論文だった。
そこには……、胸が張り裂けんばかりの悲しみで満たされた祖父がいた。なのに、それを表情に出せない祖父がいた。
祖父の表情は、変わったようには見えなかった。
……でも、…私には歪んで見えた。祖父の背負う書斎の壁が、ぐにゃりと悲しく歪むのが確かに見えた。
「…………………ッ！！！」
私は飛び出していた。…そして老紳士の足に組み付く。
彼が憎いんじゃない。いや、憎いか憎くないかと言われたらもちろん憎いのだが…、そんなことじゃない、そんなことじゃない。祖父の論文を踏みつける足が許せなかったのだ。
「踏まないで…‼　踏まないで…ッ‼　おじいちゃんが頑張って書いたんだから、…足で踏んだりしないで…ッ‼」
「……っと、……ぅわ、……失礼………。」
私は未だ踏みにじり続ける、その足を、散らばった紙面から退かしたかった。
…でも、それは根が生えたように頑丈(がんじょう)で、私ごときが押したり引いたりするだけでは決して

退こうとはしなかった。
だからその足にしがみ付いて、懇願した。
足の裏から踏まれた論文を引き抜こうとして引っ張った。でも、足が退かせない、論文が引き抜けない…。
「踏まないでぇ……、踏まないでぇえ……。おじいちゃんのを、ふ、…踏まないでぇぇぇぇえ…え………。」
シンと静まり返った部屋には、私のすすり泣く声だけが響き渡っていた。…あの時と同じに…。

◆前原圭一

「……こ、…これが学校なのかよ。すげぇな、さすが田舎だな。」
「圭一、そんなこと言っちゃ駄目だぞ。ここの人にとっては立派な学校なんだからな。」
それが俺の、雛見沢の学校への最初の一言だった。
第一、どう見ても学校に見えなかった。雛見沢営林署って書いてあるし。
「わっはっはっはっはっは！　まぁ確かに！　我が校は営林署さんの敷地をお借りしておりますか

らのぅ！」

と、校長だと名乗った人物は豪快に笑った。

「学び舎は違っても、学校であることは同じです。前原くんがこれまで通われていた学校とは、色々ルールが違うと思いますが、大丈夫ですか？」

「あ、…はい！」

学年無視のバトルロイヤル状態で、生徒は全員同じ教室というのは、…事前には聞かされていたが、本当の本当らしい。

年齢的に言えば、俺より年下ばかりだろうから、きっと幼稚園か何かのような雰囲気になるんだろうが、それも一興だった。…どいつもこいつも同じツラした学校より面白そうだしな！

「前原くんが転校してきたら、男子の中では最年長になると思います。ですので、自分の勉強だけでなく、下級生たちの模範になるよう示さなければなりません。下級生は、上級生の悪いクセをすぐに真似ます。先生もそこは厳しく注意していますから、前原くんも下級生に悪い影響を与えないよう、常に襟を正していてくださいね。」

「わ、わかりました。努力します。」

「圭一。勉強は教科書だけじゃないってことなんだからな。クラスの一員として、上級生として背中で示さなきゃならないこともあるってことだ。」

「そ、そんなの言われなくったってわかってるよ……！」

その後、知恵先生は空っぽの教室に案内してくれて、俺の席になる予定の席を教えてくれた。

……育ち盛りの年代だから、下級生と上級生の体格差は大きいのだろう。

俺じゃ膝も入らないような小さい席から、俺にぴったりの席まで、実に大小様々な席が並んでいる。席数は三十もないだろう。

でも、学年も性別もばらばらと来たら、きっと賑(にぎ)やかに違いない。

壁に貼られている習字やプリント、絵などは、実に学年それぞれに様々なものが貼ってある。それはとても楽しそうで、俺が今まで通ってきた学校とは全然違う。

……俺が、純粋に学校を楽しんでいた頃を思い出させる懐かしさがあった。

「父さん。俺、気に入ったよ。やっぱり町の学校よりこっちの学校の方がいいや。」

「息子もやはりこちらが気に入ったようです。いえ、私もこちらの学校に通わせたかったんです。」

「そうですか。…興宮の学校の方が設備もちゃんとしていますし、立派な先生方もたくさんおられますのに。」

とは言いながらも、知恵先生は新しい転校生が迎えられるのをとても嬉しそうにしていた。

親父たちは職員室に戻り、書類だか何だかの手続きをするらしい。俺はその間、教室内に貼ってあるものを眺めることにした。

……本当は、引っ越しなんかに興味なかった。

自分の犯した罪の重さに、人生への関心を失っていた。生きている気力もなく、布団(ふとん)の中から抜け出すことも出来なかった。

だから、引っ越しをしようと親に言われた時、そんなことでこれまでの人生をなかったことになど出来るものかと、否定的に思ったのだが……。

だが、引っ越してきてその考えは変わった。

もう一回、ゼロから人生をやり直そう。……俺がなりたかった俺になるために、もう一度ゼロからやり直してみよう。

この雛見沢と、学校なら、きっとそれが出来る。

もう二度と、幼稚な自分には戻らない。成績さえ良ければ世界で一番偉いなんて馬鹿な勘違いをしたりなんかしない。

俺がそう勘違いし、学ばなければならなかったのに、蔑ろにした、本当に学ばなければならない大切なこと。…それを、この学校でなら学べる気がする。

それは口に出せば恥ずかしいことばかりだ。…でも、ものすごく大切なことで、……多分、

それを学ばなかったらロクな大人になれはしない。
この学校の生徒たちにとってそれは、すごく当り前なことで、とっくの昔に習得しているものなのだろうけど。……俺はこの歳になって、時間を掛けて学ばなければならないのだ。

友達の、作り方。
友達との、遊び方。
遊ぶこと。遊びの中でしか培えないものを、学ぶこと。
心を豊かにすることとか。色々。色々。

一見、簡単そうで。…俺はそれを学ぶのにきっと短くない時間を掛けるだろう。
それを蔑ろにして、中身のない勉強ごっこに現(うつつ)を抜かしてきたのだから。……勉強が大事じゃないとは言わないが、過度に偏重するのがいけないいんだ。
勉強さえ出来れば、それだけで十分なんていう考えの時点で、馬鹿も休み休み言えって感じに違いない。
…この学校でなら、俺はゼロからやり直せる。
今度こそ、俺のなりたかった、前原圭一になれる。

「…………………？」
校庭が見える窓から、二人の女の子が覗いていた。
校庭は普段から子供たちの遊び場らしく、さっきから数人の子供たちが楽しそうに遊んでいたのだが、……その内の二人が教室内をうろうろする俺に気付いて興味を持った、ということだろうか。
…そりゃそうだよな。今の俺は不審者だ。
次の月曜からよろしくなって挨拶くらいはするべきだろうか。

「……ようやく引っ越してきたのです。ボクは待ち疲れたのですよ。」
「あぅあぅ。でも、これでまた変わってくるのです。……だって、圭一は、サイコロの六なのですから。」
「……六ではありますですが、圭一の振るサイコロは一がよく出やがりますです。」
「あぅあぅあぅ…、圭一が悪いわけではありませんのです。」
「……全部、羽入が悪いのです。お前のせいなのです。圭一に謝れなのです。」
「あぅあぅあぅあぅあぅあぅ…。」
「え？　…お、俺の名前を知ってるのか？」

　今、確かに俺の名前を呼んだような。…いや、空耳だろ？　だって初対面だし。
「……にぱ～☆　転校生なのですか？」
「え？　あ、…あぁ！　よろしくな！　前原圭一ってんだ。今度の月曜から来ることになると思うぜ。仲良くしてくれよな！」
「あぅあぅあぅ☆　仲良くしましょうなのです。」
「……圭一に、古手神社の巫女さんがありがたいお告げなのです。転校初日は教室の扉が鬼門なので入る時は注意なのです。あと、椅子の背中に画鋲、机の中にはカエルの玩具まで入ってます。」
「……でも、何度警告しても、圭一は何度でも引っ掛かるのです。月曜日はかわいそかわいそなのです…。」
「くすくす。だから面白いのだけれど。たまにはそんな運命も打ち破ってみて？　くすくすす。あなたがそれを教えてくれるのよ？　数多の世界のひとつで、ね。」
「は？　………？？？？？」
　彼女たちの謎めいた予言は、月曜日に、明らかに敬語の使い方の間違った八重歯の小娘によって、とても大切な忠告であったことを思い出させられるのであった。
　……その時にゃ手遅れだがな。

何にしろ、気に入った。

俺は前原圭一。

ゼロからのスタートだが、今度は思いっきり、元気にやりたい！

色々大切なことを学び忘れてきたけど、それはここで学ぶ。がんばって身に着ける。そして、俺が本当になりたかった前原圭一になるんだ。

…それを学ぶには、気の遠くなる時間がいるかもしれない。でも、きっと学び取る！

◆終末への誘い

……祖父の論文を穢された。

雛見沢症候群の病原体という、明白な証拠まで見つけているのに、…なぜその生態までを信じることが出来ないのか。

…そんなの聞いたことがない？　想像もつかない？　そんな馬鹿なこと、あるわけがない…？

そんなの聞いてない…。凡人(ぼんじん)どもの理解の限界なんかどうでもいい…。

入江機関が、今日まで立証してきた祖父の論文の真実を、どうして誰も信じてくれないのか。

そして、どうして人間という存在を特別なものだと思い込めるのか。

人間なんて、単なる動物の内の一種類じゃないか。

そして、宿主を操る寄生虫がいくつも確認されていながら、人間を宿主にする寄生虫だけは存在しないと、どうして断言できるのか。

……いや、そうじゃないそうじゃない。そんなわけじゃない。

だって、今までずっと、祖父の論文をみんな信じてくれていたじゃないか…。

皆、祖父の論文に感銘を受けたからこそ、厚生省や防衛庁が協力を申し出てくれたんじゃないか。

……それが急に手の平を返したように冷たくなって。

つまりそれは、…全部、小泉のおじいちゃんの後ろ盾のお陰だったということで。…じゃあつまり、…誰も祖父の論文なんか真剣に読んでなかったということなのか。小泉のおじいちゃんのご機嫌取りで、論文を評価してみせるふりをしただけなのか。

私の今日までの積み重ねは一体何だったのか…。

私は今日まで、何かを成し遂げたような気がして、一体何を成し遂げていたというのか。

…もう、何が何やらわからなくて、私は悲しみに暮れるしかない。考えれば考えるほど、私の人生が何だったのか、わからなくなる。

鷹野、…いや、…高野三四は、おじいちゃんの役に立つために生まれてきて、生きていくんじゃなかったっけ…。……だとしたなら、私は何も成していない。

おじいちゃんと共に3を数え、その続きの4を数えるなんておこがましいにもほどがある…。

……嫌だ嫌だ…。

思考する余地をわずかでも残せば、そこに自己や人生への批判が入り込む…。

私は、心の隙間が開きそうになる度にアルコールを加えては、それをわずかに埋めるのだった。

…人間の思想や思考を支配する余地のある存在の予見がそんなにもおかしいのか。

確かに雛見沢症候群自体が原因でイデオロギーが生まれてるわけじゃない。

せいぜい患者が錯乱するのが関の山さ。そこから社会主義やら資本主義やらが生まれてるわけじゃない。

祖父が生きた時代はイデオロギーを抜きには世界を語れない時代だった。そんな時代に生まれた論文だから、多少、誇大したところや偏(かたよ)ったことがあることは、百歩譲(ゆず)って認めたとしても、それでもその先見性を否定する理由にはならない。

……そんな馬鹿なことがあるものかの一言で片付けられていいわけないのだ。

そして、…もっとも重要なことなのに、無視されたことが、古手梨花という女王感染者が村

の命運を握っているという事実。
祖父は、雛見沢症候群研究の初期から、女王感染者の存在とその重要性、危険性を予見し続けてきた。だが、女王感染者が死ねば感染コロニーが大崩壊を起こすという仮説は、立証不能なパンドラの箱なのだ。
古手梨花が死んだ後にしか確認できず、そして死んだ時にはもう手遅れなのだから。
…しかし、古手梨花が女王感染者という特殊な存在であるのは客観的事実として間違いないし、彼女がその他の一般感染者に対し、何か特殊な影響を与えていることも数々の実験から明らかになっている。
彼女の死は村全体に崩壊を引き起こす引き金になる。
……それは絶対に間違いはないのだ…!! だっておじいちゃんがそう予見した、そう書いた！
なのにそれを、漫画のような話だなんて、あんまりに酷い…！
その最悪の危険を回避するために彼女の保護や、万一の事態に備えた準備の数々を、予算をトンネルするための架空プロジェクト呼ばわりするなんて…、そんなのあんまりに……。
私がやっていることは、祖父がやろうとしていたことの継承なのだ。だから私の研究を侮辱することは祖父を侮辱していることと同じなのだ。

祖父は研究に当たって、一番最初にやることは、女王感染者の保護だと論文に残してる。
だからそれは事実で正しくてもっとも大切なことのはずなのに、それを一番馬鹿にされた
…‼
思い出せば出すほどに、屈辱的な言葉の数々が蘇る。
……その声は、まだ聞こえるような気がして、私は両耳を塞ぎたい衝動に抗うことが出来なかった…。
………きっと、理事たちは私のことをおかしいと思っているだろう。
私は入江機関の存続を訴えるつもりだったのに、……まったくの逆効果。
理事たちはますます雛見沢症候群を滑稽なものだと思い、より厳しく研究の終了を迫ってくるだろう。
そうなれば、私はまた個人の研究に戻る。
それはつまり、祖父と同じこと。…個人の情熱では、研究出来ることなど限界があるのだ。
……いや、それどころか、個人の研究に戻らせてもらえるかも怪しい。
入江機関が解散する時には、関わった全業務への終世の秘匿義務が生じる。
私はそれを記した承諾書にサインをしている。
…それは口約束のレベルではなく、…もし約束を破るようなことがあれば、山狗のような機

密保護部隊が、私を抹殺してでも秘匿するという意味だ。

……仮にそれがなかったとしても。入江機関は今後数年以内に雛見沢症候群を撲滅し、一切の痕跡を研究結果も含めて埋葬してしまうという。

これは研究と治療ではない。…初めから何もなかったことにするという隠蔽でしかない。

…私は、祖父の研究を受け継ぎ完成させると意気込みながら、……実際は全然の逆。

…むしろ、祖父が大切に温めてきた研究を、この世から抹殺してしまいかねないことに手を貸してしまっているのだ。

もう治療薬は完成している。

入江は卑劣にも、その他の研究には消極的なくせに、治療薬の研究にだけは私に勝るとも劣らない情熱を向けている。

…しかも、…悔しくも彼の実績と才能は十分なのだ。

…彼はきっと、新生理事会の要求通りに、三ヵ年で雛見沢症候群を撲滅する計画を立案してみせるに違いない。

……理事会も、雛見沢症候群を葬るためだけの予算は十分に配当するに違いない。

そして入江は喜んで、雛見沢症候群が存在していた事実までも葬ってしまうだろう。

……理事会の命令を受け、あっさりとＨ１７０番台の試薬と研究資料全てを破棄したように

…！

私は、入江たちが雛見沢症候群を撲滅するのを、……彼が私にしたように、消極的に妨害しながら眺めていることしか出来ない。

そして、永遠に発表出来ず、全てが終わった時、破棄を求められるに違いない論文を書き…。

………それを胸に抱いて、せめて祖父にだけは発表出来るよう、身を投げてみせるのか…？

…そんなことをしても祖父は喜ばない。……それどころか、半生を費やした研究をドブに捨ててしまうような真似をした私に呆(あき)れ果てるだろう。…間違っても、私をその胸で抱きとめてはくれないのだ……。

雛見沢症候群を世間に発表したかった。

偉業だと認めさせたかった。

…祖父の名を歴史に刻み、………神に昇華させたかった。

祖父はその時を待ち、ひたすらに信じ、…眠りについた後もその日を待ち焦(こ)がれているというのに……。

……それを、………私が台無しにした…………。

祖父を神にするつもりだった。私も神になるつもりだった。

…そうすれば、私たちは永遠に一緒で、もうずっとひとりぼっちにならなくて済むと思った。

神になれば、神に試されない。
どんな不幸も訪れないし、突然の列車事故も訪れない。
祖父もいなくならないし、小泉のおじいちゃんもいなくならない。
……もう私は二度とひとりぼっちに戻らなくていいのだ…。
…私はひとりぼっちだ。私の味方など誰もいない。
私はひとり有頂天になって誰も見ていない舞台で踊っていただけ。
気付けばそこには拍手はなく、あるのはただただ嘲りだけ。
……いや、そもそも私以外の誰かが見ていてくれたのかすら怪しい…。
両親が死に、祖父が死に、そして小泉のおじいちゃんが死に…。私は三度、神にサイコロで弄ばれている。
その度に実力で乗り越えてきたような気がしていたが、実は違う。
……その度に、次の保護者に守ってもらっていただけだったのだ。そして、今度こそ私を守ってくれる保護者はいなくなってしまった…。
かつて、神に挑み、蹴落とすくらいの勢いで雛見沢へ訪れたあの強気な日々は一体どこへ行ってしまったのか…。今の私は、神に挑むどころか、弄ばれるだけの負け犬なのだ……。
全てが急激にどうでもよくなる。

……どうでもよくならなければ、悲しみに飲み込まれてしまうから、どうでもよくなるように、私は心をアルコールで浸し続けていく…。

私のすぐ近くに、黒塗りの立派な車が急に停まる。

…その光景が、施設から脱走した時に私を捕らえに来た車と被り、私の酔いは一瞬で引いた。

助手席と運転席から降りてきたのは、黒いスーツにサングラスをした、見るからに怪しそうな男たちだった。

……咄嗟に思う。…きっとこいつらは、私のクライアントの黒幕たちの誰かから遣わされた者だろう。

生物兵器開発という、存在自体が抹消されなくてはならないプロジェクトに関わり、しかもその主要人物であり、その上、正常な精神状態にないと来たら、私を野放しにしておくわけなどない。

…拉致して、コンクリ詰めにでもして私の存在を消してしまうつもりに違いない。………そう思った。

だからきっと、…彼らは私の両腕を羽交い絞めにでもするようにして、乱暴に車に押し込むつもりだろう。

…そう思い、覚悟を決めていたから、彼らが私に対し丁重に頭を下げた時、ちょっとだけ意外に思った。
「入江機関副所長、鷹野三四三等陸佐でありますね？」
「……普段はね。…今はただの飲んだくれの負け犬よ。」
「お会いしたい方がいらっしゃいます。どうか私たちにご同行いただけないでしょうか。」
「………拒否しても、どうせ無理やり連れて行くつもりなんでしょう？」
どうせ殺されるし、……生きていても、祖父の願いはかなえられない…。私は自嘲気味にそう言った。
すると、車の後部座席に座っていた人物が言った。
「無理にとは申しません。…ですが、きっと三佐のお力になれると思っております。」
私に近い歳だと思う。だが、その若い女性に面識はなかった。
入江機関のことを知っているのだから、クライアントの関係者であることは間違いないだろう。
…まさか、あの若さでクライアント自身ということはありえまい。
……恐らく、姿を現したくないクライアントの何者かが遣わした使いというところなのか。
……どうせ、もう生きていても、祖父を神に出来ない。私も神になれない。

なら、負け犬などどこでどう殺されたって、…どうでもいいことだ。
私は覚悟を決めて、彼らの勧める後部座席に乗り込んだ。
…それを見届けると、車は高級車独特の滑り出すような快適さで発進する。
しばらくの間、車内は沈黙に包まれていた。……誘ったのは彼らだ。私から話すようなことは何もない。
「…ご無沙汰しております、と言っても、恐らくご存知ないでしょうが。…鷹野さんとは、小泉先生の本葬の時、すれ違っております。」
「……あら、そうでしたの。…覚えていなくて申し訳ないです。」
あれだけの大勢がいた葬式会場だ。誰の顔も覚えていない。
…しかし、それを挨拶代わりに口にするとはどういうことなのか。……つまりそれは、…彼女が小泉派であるということ……？
「小泉先生は戦後日本復興のオピニオンリーダーの一人として長く活躍されてきました。今日の平和日本を語る上で、小泉先生の功績に触れずして説明することは難しいでしょう。」
「…………………。」
「戦後の焼け野原から復興する時は、我が国の有志たちも一枚岩でしたが、残念ながら今もそうであるとは言えません。……平和な時代が進み、焼け野原を知らぬ世代が国の中枢に入り始

めるにつれ、当初の高貴な志（こころざし）を知る者は次第に減っていってしまいました。……小泉先生は、そんな高貴な同志の最後の長老として、二十一世紀へ我が国を導いてくださる大黒柱だったのですが。」

「……小泉先生の死後、小泉派は急速に没落。代わって、他の派閥が勢力を伸ばし、色々と大変なことになっている、でしたっけ？」

その辺のことはジロウさんから聞かされていたので知っている。

そして、それは戦国の時代から変わらない。主君や名将が死ねば必ず後継者争いが起こって国が乱れる。…私たちの国はこの数百年間、何も変わってはいないのだ。

「その通りです。……残念ながら、平和日本は住みよい国造りを実践（じっせん）してきましたが、同時に、発足当時の高貴な志を忘れさせてもしまいました。現在、東京は各派閥が小泉先生の空けた席と利権を巡って争いが絶えない状態です。小泉先生を始め、すでに他界されている復興の功労者たちが知ったら、きっとお嘆（なげ）きになられるに違いありません。」

「…………それと私に、何の関係が…？」

「貴女（あなた）は、それの最大の被害者ではありませんか。今日までに、風向きが突然変わるような体験を十分にされていると思いますが…？」

「…………。」

確かに、小泉先生の肝いりで始められた研究だ。
…それに対するアンチ小泉派の風当たりは確かに冷たく激しい。
…彼らにとっては、研究内容がどうこうであるよりも、小泉先生が残した計画が全て目障りなのかもしれない。
…それはつまり、…研究の内容を純粋に否定したという意味ではない…？
……そう言えば、……祖父の時にもそんなことがあった。
当時の小泉先生が、各界の権威を連れて来てくれた時。…彼らは事前の評価とは手の平を返したように祖父をなじった。
……その裏には、当時の黒幕の圧力があったと、後に小泉先生に聞かされたじゃないか…。
「雛見沢症候群の研究は、アルファベットプロジェクトで最大のもので、予算、体制その他、プロジェクトの目玉だったと言っても過言ではありません。ゆえに、アルファベットの権益を独占したい連中によって、貴女の研究はそのスケープゴートにされたのです。」
「…………スケープゴート。」
「決して、雛見沢症候群の研究が否定されたという意味ではない、ということです。彼らにとって重要なのは、そのプロジェクトの派閥であり内容ではありません。……本日、鷹野さんに特にお伝えしたかったのはそこでした。」

「……結局、…私は見せしめの羊(ひつじ)ということなのね。……私が何の研究をしていようとどうでもいい。…この研究が小泉派のものであったということだけが彼らの関心…。」
「そういうことです。派閥は風向きそのもの。順風な時もあれば逆風となる時もあります。その変わった風向きを取り戻すのは、残念ながら容易なことではありません。」
「私のクライアントたちが敵対的になったのを元に戻すのは容易ではないということ…?」
「そうです。アルファベットプロジェクトは完全に乗っ取られてしまいました。理事は全て代わり、彼らの私欲を肥やすためだけに決定をします。……貴女の捨て身の説明など、初めから彼らは耳を貸す気もないのです。」
…私は、ぎゅっと膝に爪を立て、あの屈辱の日を思い出していた…。
「…………ここで一度、話を折ります。鷹野さんにとっての研究の目的は何ですか?」
「え? ………それは、研究者としての知的な好奇心から…。」
「貴女が祖父と呼び敬愛していた故高野先生との約束、ではないのですか…?」
…ぎょっとする。
そのことを知られると何かの不利益になるかもしれないと小泉先生に言われ、私はそれをクライアントたちに話したことはないはずだ。
……どこでそれを知ったのか。いや、彼らがそれを知るなら、……私が想像する以上に私た

ちのことを知っている可能性があった。
「どこでそれを知ったんですか。」
「小泉先生からです。」
「え⁉」
「私たちは貴女の敵ではありません。どうかお楽になさってください。私たちは、貴女の本当の力になりたくてやって来たのですから。」
「…………………。」
彼女が何者かはわからないが、…私に何かを求めてやって来たのはもう疑いようもない。…一体、私に何の交渉を求めるつもりなのか。
私と祖父の関係まで知る以上、油断出来そうになかった。
「ただ、私たちが貴女の力になるには、貴女に本当のことを話していただかなくてはなりません。つまり、腹を割っていただきたいということです。」
「……仰る意味がわかりません。」
「鷹野さんが雛見沢症候群を研究する、本当の目的は何ですか？」
…祖父の研究を偉業として認めさせ、…神にしてあげること。
「…………………。」

「故高野先生の研究を世間に認めさせること。……貴女の祖父が心を込めて書き上げた論文を踏みつけて蔑ろにしたことへの復讐、ではありませんか？」

私は、ぎょっとする気持ちを表情に出さないようにするので精一杯だった。

この女は、……私のことをどこまで知っているというのか。

…いや、この女は一体何者…？

どうして私の考えていることが何もかも手に取るようにわかっているのか。

「…………………………。」

だが、それを口に出して認めることが出来るはずもない。……それが、体面というものだ…。

だが、この優美に笑う女は、天使の微笑を浮かべながら、…私より数枚上手（うわて）を行くような悪魔の囁きで、嗤（わら）う。

笑う（ワラウ）と嗤う（ワラウ）は意味が違う。

笑うは善意を表すが、…嗤うはまったくの逆を意味する。

この女は、私の心の奥底までを全て読みきり、…その上で私がどこまで素直になれるかを測っているのだ。

私が真実を語るかどうかなどすでに問題ではない。

…それを、打ち明けられるだけの信用を示すことが出来るかどうかだけを測っているのだ。

「もしも、私の言っていることがまったくの勘違いでしたら、どうかお許しください。お好きな駅までお送りさせます。この近くですと、穀倉駅がいいでしょうか？」
「…………えっと、…………………。」
「でも。…………もし、私の言っていることが、貴女の本当の気持ちに少しでも近いのでしたら。……私と貴女は力を貸し合える関係になれると思います。どうですか？　高野三四さん？」
「……………………。」
私は言葉を返せないが、この無言はすでに返答と同じ意味を持つ。
……私はこの女の申し出を、聞きたがっているのだから。
私は今日まで、祖父を神にするという抽象的な表現で自分の目的を曖昧にしてきた。
だが、…私の本当の目的を、彼女がはっきりと教えてくれた。
私の目的は、……祖父の無念に対する復讐だったのだ。彼らが嘲笑い踏みにじった論文を、奪い合って読ませたい。そして祖父が残した一言一句を信じさせ、崇めさせたい。
それこそが、私の本当の目的だったのだ…。
そして、…この女は、私が心の中だけで呟いたはずのそれを、口に出して復唱し、それに間違いないかと私に尋ねた。

……この女は、天使か、……悪魔か。

……私が人間を名乗るなら、…彼女はそれ以上の何かなのか……。

「貴女の不幸は、自分の目的を具体的に理解していなかったことなのです。…だから、いつまでも惰性で研究を続けても至れない。雛見沢症候群の神秘を探る、という抽象的な目的を掲げ、いつまでも達成出来ず、自らの人生に疑問を抱かざるを得なかったのです。……そうでしょう？　ふふふ？　そう、それは違う。貴女の真の目的、いや、夢はそんな抽象的なものじゃない。思い浮かべることが出来ますか？　それはこういう情景。……この国の中枢を預かる真の頂点たちが、貴女の祖父の論文を読み、その内容に驚きながら一片の疑いもなく信じてくれること。…彼らは、裏側に足跡が残るその論文をうやうやしく読み、その先見性溢れる研究に敬意を示し、恐れおののく。……どう？　想像出来ましたかしら…？」

………それは、初めて想像するものだった。

…そして、…それこそが私の夢だったのかもしれない…。

「雛見沢症候群という言葉は、貴女の祖父が作られたのでしょう？　…その言葉が、この国の津々浦々にまで響き渡り、……貴女の祖父の生み出した言葉が、永遠に刻まれて残る。」

「永遠に刻まれて、…残る。」

「そう。それは貴女の祖父が、その偉業が、…永遠の存在に昇華されるということ。………ふ

ふふふふふ？　それが、貴女が高野三四として生涯を捧げる夢、……じゃないのかしら…？
ふふふふふふふ…？」
　祖父の偉業が、永遠に刻まれて、…残る。残る。…永遠に…。
「なのにッ!!　その偉業をまったく理解できない豚たちはあなたのその夢を、単なる派閥争いや権益の奪い合いの生贄とし、無残に踏みにじろうとしている！　………貴女の祖父の論文を…ぎゅうッ、…と踏みつけたように、…ね？　ふふふふふ…。」
「…………………ッ…。」
「貴女は悔しい、とても悔しい。貴女が一生懸命作った資料は、そう、貴女のおじいちゃんが一生懸命作った論文と同じもの。それを踏みにじり嘲笑った彼らが許せない。おじいちゃんの偉業を、馬鹿にした豚どもが許せない、そうでしょう？　そうじゃないですか？　…うぅん、本当はそう。それを心優しい貴女は、人を罵る言葉を知らなくて、考え至らなかっただけ。
………ね？」
「…………………。」
　わけのわからない感情が込み上げてきて、…息が苦しい。
　警戒心と安らぎと、信頼感と不信感が入り交じる。
　……心臓がいつの間にかばくばくと鳴り、指先は落ち着きなく震える。

なぜ……、安らぎを？
私がこの歳にもなって、自分の言葉で表現出来なかった本当の夢を、彼女が教えてくれたから。
そして、私のやり場のない怒りを、彼女が教えてくれたから。
なぜ……、疑いを？
私がこの歳になるまで、誰にも言ったことがなかったはずのそれを、いや、自分自身にすら言ったことがないはずのそれを、彼女が教えてくれたから。
「ねぇ、…三四さん？　…………もし、私の言ったことが間違っていないどころか、……………大正解なのだったら。…………私は貴女の夢や、復讐を、…きっと手伝ってあげることが出来ると思います。」
「…………はぁ………、………はぁ………。」
「ふふ、どうなさったのかしら…？　お具合が悪いのかしら。なら、もうこれ以上お話に付き合わせるのも悪いですわね。最寄の駅へ送りましょう。」
「……ち、…………ちが…………。」
私の口から、小さな声がみっともなく零れる。
……それはまるで、小さい頃にしてしまったいたずらを、隠しきれなくてつい謝ってしまう

ような、そんな感じ。
「……何か、仰ったかしら？　ふふふ？」
…それが聞こえてるはずなのに、………もう一度口にさせようと、女が笑う。
「………違います…。ぐ、具合、…悪くないです…。」
「ふふふふふ。ならよかったです。話を続けましょう。」
「……私の夢がそうなら、………あなたに何が出来るというんですか。」
「貴女の二つの復讐をお手伝いします。一つは貴女の祖父のための復讐。貴女の祖父の論文を嘲笑った者たちに、もう一度うやうやしく手に取らせてやりましょう。彼らが土足で踏みつけたその論文をね。……もう一つは、貴女と祖父の約束であり心の繋がりでもある症候群研究を、派閥争いだけを理由に踏みにじり、研究を彼らの権益のためだけに終わらそうとする理事会への復讐。貴女の目の前で資料を踏みにじり、貴女の人生さえも踏みにじろうとした豚どもへの復讐。」
「………祖父の論文を手に取らせ、………それを踏みにじった理事会に復讐する…。」
「こちらも腹を割りますと、もちろん、お手伝いするのは私たちの利害が一致するからです。小泉先生が日本の未来のために立ち上げられたプロジェクトを、先生亡き後に食い物にしようとする輩を放置することは出来ません。……私たちにもっと力があれば、そのような輩の介入

を許しはしないのですが。風向きは変わり、もはやプロジェクトは小泉先生の理想には戻りません。豚どもが私腹を肥やすための豚小屋と成り果てました。…そのようなプロジェクトをこれ以上放置することは、アルファベットプロジェクトの名付け親でもあられる小泉先生も望まれません。プロジェクトは、小泉先生の理想を離れた時点で、畳まれるべきなのです。」

「…………派閥争いの生贄羊を、今度は狼にしようというつもりですか。」

「貴女が今のまま、生涯公開できぬ祖父の論文を胸に隠居されることを選ぶおつもりでしたら、無理にとは申しません。」

……それだけは、……嫌だ。

私一人は地に堕ちてもいい。でもせめて、……おじいちゃんだけは…。おじいちゃんの論文だけは……。

「貴女とおじいちゃんの結晶である論文を、永遠のものにはしたくないですか……？　ふふ、それはだって、…貴女の念願のはずじゃないのですか……？」

「………そうよ…。それが、……私の、生きる目的…。」

「貴女の本当の夢を叶えるチャンスを、私たちがお手伝いします。」

…人生の負け犬であることを認め、……全てから見放されて涙と酒に溺れた夜に、私は天使とも悪魔ともわからぬ何者かの助けを得る…。

それは天の助けか、悪魔の囁きか…。
私は、研究の継続を求めて新理事会と戦った。
でも、…それは全然的外れなことだったのだ。…私の本当の目的とは全然違った。
私の目的は、雛見沢症候群をこれ以上研究することじゃない。
…祖父がした研究を認めさせること。
……そのための手段が、いつの間にか目的にすり替わり、私を勘違いさせていたのだ…。
私の生涯は、祖父の研究を受け継ぐためにあったんじゃない。……祖父の無念を晴らすために、……復讐するためにあったのだ。
女は言ってる。
祖父の研究を永遠にすると約束してくれてる。そして、それを嘲笑った奴らへの復讐の機会まで約束してくれてる。
小泉のおじいちゃんが死んだ時、私は神に、再びサイコロで弄ばれたと思っていた。
でも、…私の強い意志が、サイコロなどを超越した力を呼び寄せたのだ。
…だから、この出会いは当然だったのかもしれない。
……おのれ、神め、またしてもサイコロで私を試すようなことを…。
私は小泉のおじいちゃんの死を乗り越える。

そしてきっときっと、祖父を永遠の存在にして、……私を試すような神に復讐してやる…。

きっと、…必ず…！

私は、復讐する。

◆昭和五十八年六月

…………これで、集められる駒は全て昭和五十八年に並んだのかしら。
昭和五十八年六月に駒を並べるだけでも、…私たちには長い旅で、本当に疲れることね。
でも、これでようやくスタートライン。ここからようやくゼロが始まる。
……しかし、…こうして色々なカケラを見てみると。
昭和五十八年六月に、どれほどの思いがたくさん集まっていたのかがわかる。
かつての私は、自分に関係のない人間の思いなど何の役にも立たないと言っていたけど。…それはとんでもないこと。
古手梨花は、……昭和五十八年六月の運命を乗り越えるために、自分に出来る全ての努力をする。
彼女がした努力は二つ。
一つは、自分の身に降りかかる災厄(さいやく)から一番身を守ってくれるに違いない入江機関への接触。

…皮肉にも、その入江機関の鷹野が私の命を狙うのだけど、…この時点の梨花にとって、それは最善の行動。

そしてもう一つは、…前原圭一の一家、前原家が雛見沢へ転校してくるようにしたこと。

実は、前原家が雛見沢へ転校してくるのは絶対じゃない。

……あの、分譲地の下見の日に、私たちと出会い、何かの感慨に浸って初めて引っ越しを決意するの。

だから、あの野原で私たちが遊ぶのは必然で、前原家引っ越しのための重要な鍵。

それを見つけるのにどれだけ長い時間を掛けたことか。

様々な条件のオンとオフを繰り返し、あの野原で圭一の父に出会うことが鍵なんだと、ようやく突き止めた。

前原圭一は、…私を縛る鎖のひとつ、ルールZを打ち破る重要な鍵。

この村で何が起こっても、全て曲解して解釈してしまう古きしきたりや悪弊を打ち破る力を持つ、新しく清らかで力強い風。

そんな彼が色々なきっかけを作り出し、……強固な運命に立ち向かうには、強固な意志と、信じる気持ちが大切なんだという、大切な鍵を私に託してくれる。

…でも、そんな彼を欲したのは私だけじゃない。
村の悪弊を払拭したかった園崎家の人間たちも望んでいたこと。
園崎魅音は、北条家や沙都子、悟史への理不尽な村八分に心を痛め、せめて自分だけは二人を守ってやろうと誓った。
そして、北条悟史が消えた夜、園崎お魎に怒りを爆発させ、その強い思いを伝えた。
その思いは、…園崎お魎に伝わる。
お魎だって薄々とは村の悪弊に気付いていて、それを何とかしたいと願っていた。
でも、自分にはその力がないことを悔やみ、……外からの新風に託したのだ。
だから、前原家が引っ越して来られる土地が、売りに出される。
私が野原で踊ろうとも、お魎が分譲地を売りに出さなかったら、圭一は来られないのだ。
そして、前原圭一に重要なきっかけをいくつも与える竜宮レナは、両親の離婚で深く傷つき、末期発症を一度は迎えながらも、雛見沢に帰ってくることで救われる。
引っ越し前の地でのことを、リセットして再びやり直したいという前原圭一の願いは、一年前に、竜宮レナも願っていたのだ。
そんなレナだから、…圭一のことを理解出来たのではないかと思う。

それは、あるカケラにおいて、…別のカケラのことを認識させるという奇跡を生み出す。………別のカケラで学んだことを活かせるなら、人は間違いなど犯さない。
駒は最善の動きを見せ、昭和五十八年六月というゲームに勝てる可能性を飛躍的に高めるだろう。
つまり竜宮レナは自覚せずして、このゲーム盤の駒の中で重要な働きをするのだ。
北条兄妹を巡る強固なルールZは、そんな彼らの活躍で、やがて痛快に破られるのだ。
もちろん、内側からの沙都子の克己も大きな力となる。双方が手を伸ばしあったからこそ、互いの手が届いたのだから。
そしてそれを教えてくれたのは圭一とレナ。
…彼らが引っ越して来られるようにし、村に馴染めるようにした魅音。
それだけじゃない。
入江だって大きな思いと働きのある重要な駒だ。
沙都子に同情する彼は、雛見沢症候群というこのゲーム盤の中でもっとも大きな影響力を持つ、ルールXを打ち破ることが出来る最大の存在だ。
圭一やレナの決意や覚醒は、ルールXに抗うことが出来ることを教えただけで、打ち破ったわけではない。

真の意味で打ち破るには、雛見沢症候群の治療に強い決意を持つ入江の存在も欠かせないのだ。入江にも、これほどの色々な思いがあるなんて、知らなかった。

どこかぼんやりした人間くらいにしか思わなかったが、……これほどに重要な力を持っている駒だったのだ。

これらの力を結集したら、……鷹野の思いに勝てるだろうか。

……鷹野の思いも見てきた。

それは悲しいくらいに強固で、…打ち破るのは容易じゃない。

いくら戦おうとも、昭和五十八年六月の運命が容易には揺るがないのは当り前。

私が募らせてきた思いなど、足元にも及ばないほど、たくさんの思いを持っていたのだから。……戦うことを諦め、惰性に生きてきた私と、常に人生を賭けて戦いを挑んできた彼女とでは、駒の重みが違う。

……不貞腐(ふてくさ)れて、ワインに酔い逃避する私の駒がいかに軽かったことか。

…………これだけでは、…まだ鷹野に勝てない。

勝つためには、まだまだ駒を集めなければならない。

警察の大石が、心強い味方になってくれる可能性を示してくれたこともあった。

…だが、大石には尊敬する友人の死が、園崎家によるものだという大きな誤解があっ

て、それが解けない限り、味方とはなってくれないだろう。
…私にはどうやればその誤解を解けるのかわからないけれど、……必ず解けると信じて、サイコロを振り続けるしかない。
そして、……圭一やレナたちが運命を変えるきっかけとなってくれたように、…赤坂にもそんなきっかけを与える力があるのではないか。
昭和五十八年の呪いは、雛見沢の呪いにも通じる。
……呪いは、内なる力だけでは解けない。外からの力も必要なのだ。
双方が手を伸ばさないと手が届かない、沙都子の時のように。
でも、赤坂が私たちのことを思い出して駆けつけてくれたことはない。……駆けつけてくれても、それはいつも手遅れになった後なのだ。…遅い。あまりに遅い。
それでも信じてサイコロを振り続けたなら、……いつか赤坂という駒も、味方としてゲーム盤の上に現れてくれるのか。
最後のルールYは、鷹野を駒とする悪しき黒幕たち。
…それを打ち破るには強い強い駒がいる。…それだけの力を持つ駒は、…多分、東京の警視庁に勤める赤坂にしかないはず。
……まだまだ力を借りるべき駒があるのだ。それらを全て集めなきゃ、……あの鷹野

には、敵わない。

ゲーム盤の準備は整った。でも駒が足りない。

……まだまだ、これからなんだ。




すべての
カケラ

◆鬼隠し編のカケラ

前原圭一が、みんなを率いる駒に成長してくれるために、…まず学ばなければならない、痛く、辛く、悲しいカケラ。
仲間を学び、疑わないことを学ぶ。彼は仲間を信じるという言葉の重さを、まだ、知らない。
わずかの不信感から疑心暗鬼を育て、ルールXに囚われる前原圭一。
圭一は悲しい遺書を残し、ルールXの果てに、死ぬ。
それは辛く悲しいことだけど、………でも、大切なことを学ぶための大切なプロセス。
…ねぇ、羽入。やっぱりあなたは謝らなくてよかったのよ。
彼が親類のお葬式で雛見沢を離れたわずか数日。
…その間に彼が発症してしまったことは確かに悲劇的だけれど。
でもそれは、彼が大切なことを学ぶための第一歩として必要なことだったんじゃないかって思う。
ルールXをあぶり出し、やがては打ち勝つための最初の第一歩として。

　このカケラしかなかった頃は、そんなこと、考えもしなかったけれどね……。

◆綿流し編のカケラ

　このゲーム盤の上では、何が起ころうとも全て祟りやら、園崎家の暗躍やらで片付けられてしまうことを思い知らせるカケラ。

　いいえ、もう少し私風に言うならば、ルールZの存在を気付かせてくれるカケラなのかしら。

　このカケラでは気付きにくいことだけど。…ルールXに囚われた園崎詩音が、ルールYに勘違いして翻弄されながら、ルールZの存在に気付いていくややこしいカケラ。

　でも、ゲーム盤の法則を全て教えてもくれる重要なカケラでもある。

　…そう言えば、園崎詩音という駒も、ゲーム盤の見地からは、外から来た駒という扱いになるのかもしれない。

　初めは北条沙都子を毛嫌いしていた彼女も、…このカケラともうひとつのカケラを経て大切な何かを学び取り、ルールXに抗い、ルールZと戦うための強力な駒に成長する。

　このカケラがとにかく滑稽なのは、……それがとても狡猾に隠されていて、ぱっと見

ただけでは、まるでそう見えないことなのだけれど。

学べよ学べ、過ちを。

そしてどうか、強力な駒となって敵に打ち勝つ力を貸しておくれ…。

◆祟殺し編のカケラ

このカケラは、沙都子を取り巻く理不尽なルールZの存在と、ゲーム盤におけるもっとも強敵な法則であるルールYがその姿を見せる。

これで、ルール、X、Y、Zの姿が浮き彫りにされたのだろうか。

私たちが戦うべき相手。学ぶべきこと。それらが全て揃い、明かされるカケラ。

この時点ではルールYの存在には至れない。…せいぜい、沙都子を取り巻くルールZと戦うのが限界だ。

だが、このカケラでは戦い方を誤る。

誤った方法で手に入れた結果は、誤ったものでしかない。

……それを、前原圭一は自らの経験を経て、学び取る。

惨劇に打ち勝つ力は、惨劇じゃない。
暴力に打ち勝つ力も、暴力じゃない。

それを学び取ることが出来れば、……駒たちは、このゲーム盤の上での、本当の戦い方を覚えることが出来る。
でも、……鷹野たちはあまりに強大。
カケラの最後に待つ強烈な最期は、…それを容易に学び取らすことを許さないのだ…。

◆暇潰し編のカケラ

このカケラだけはとても歪(いびつ)。
だって、昭和五十八年六月より、もっと前のものだから。
だからこのカケラの有無は、私たちのゲーム盤の戦いに何の影響も及ぼさない。
…でも、本当に何の影響も及ぼさない役立たずのカケラなんだろうか。
今やルールYの正体は完全に暴かれている。

それは、とても大きな組織の力で、個人たちのささやかな連帯など丸呑みにしてしまうほどの強大さを持っている。
その理不尽なほどの強さに、私はこのゲームを何度も諦めそうになる。
だからこそ、…思うのだ。……このカケラの中に、そんな強敵に立ち向かうことの出来る、駒が潜んでいるのではないかと。
赤坂衛は、東京の警視庁に勤めていて、…大きな陰謀に立ち向かえる力を持っている。
その力はきっと、ルールYが相手であっても、きっと及ぶ。
前原圭一が、ルールZを爽快に打ち破ったように、彼もルールYを爽快に打ち破ってくれるのではないか。
……全ての力がいる。赤坂の力も、必ずいる……。

◆目明し編のカケラ

ルールXに狂う園崎詩音のカケラ。
同情の余地もなく、哀れむ他ない心の痛むカケラだけれど。
…ルールZという錠前の鍵穴をはっきりとさせることが出来たに違いない。

その鍵穴には、やがて前原圭一が自ら鍵となって抉じ開けるのだ。
そして、園崎魅音が望んでいたように、…村に立ち込める澱んだ空気を一掃する。
このカケラもまた、学ぶ上での重要な過程なのだ。
園崎詩音はこのカケラで学び、以後、北条沙都子の心強い味方となっていく。
……そう言えば、北条沙都子とは、ルールZの錠前そのものを示す駒なのかもしれない。
彼女を救わなければ、ルールZは破られない。彼女を救うことで、ルールZが打ち破られたことが示される。
このカケラが示したのは、それだけのこと。園崎詩音が命を賭して学んだのは、それだけのこと。
でも、それはとても重要なことだったんだと、今は思える。
沙都子と詩音が、カボチャで戯れている姿を見る度に、ね。

◆罪滅し編のカケラ

このカケラは私たちにとって、とても重要な意味を持つ。

それは、抗えない運命と諦めていた昭和五十八年六月に、風穴を開けられるのではないかという可能性を初めて見せてくれたからだ。
結論から言えば、最後にはルールYに取り込まれ、全ては台無しとなる。
でも、このゲーム盤を支配する大きな法則であるルールXに真正面から挑み、…これまでのカケラで学んできたことを活かし、打ち勝てることを証明した。
学ぶことで、私たちは成長出来る。勝ち目のないゲームに、わずかの勝ち目を見出すことが出来る。
それを、教えてくれたとても大切なカケラ…。
このカケラで、ルールXはほぼ完全に打ち破られた。
前原圭一たちが、雛見沢症候群などという下らないものに惑わされ、惨劇に踊らされることは、二度とない…。
ルールは無敵の存在ではなく、打ち破れることも教えてくれた。
それはつまり、ゲーム盤の外にいる私たちに希望を与えてくれたわけでもある。
…全てのきっかけと、そしてターニングポイントとなる、重要なカケラ…。

◆皆殺し編のカケラ

このゲーム盤を陰から支配し続け、その尻尾を掴ませることもなかったルールYが、全て暴き出されるカケラ。

……そちらの方の印象が強いので、とても大切なことを忘れてしまうけど。…このカケラで、ルールZが完膚なきまでに打ち破られたことを忘れてはならない。

かつて古手梨花に、もっともどうしようもない運命と嘆かせたルールZは、全てを学んだ前原圭一たちにとって、もはや敵ですらなかったということだ。

彼らは正しい戦い方を知り、ゲーム盤のルールに則って戦った。

その結果、勝ち取った勝利は、……実は私たちにとって何よりも価値のあること。

そして、前原圭一が私に示すのだ。どんな運命にも屈服することはない。信じる力だけが打ち砕くのだ、と。

…私を屈服させる運命もまた、鷹野三四の信じる力によって作られている。……だからそれは、道理なのだ。

信じる力に打ち勝つには、負けないくらいの信じる力がいる。意志の強さには、意志

の強さでしか、穿てない。

ルールXとZに打ち勝ち、最後のルールYに挑むが、……私たちの駒は足りなかった。

個々の駒はよく奮闘したが、…鷹野三四を筆頭にする敵方の駒は圧倒的だった。

過程など慰めにしかならないくらいに、圧倒的に私たちの駒をすり潰し、再びゲーム盤を振り出しに戻させた…。

でも、……私たちは負けたけれど、心から屈服はしなかった。

なぜなら、……ようやく戦うべき、最後の相手を見つけ、その戦い方を知ったのだから。

今の駒の数では、勝てない。

信じる力や、意志の強さが、足りないから。

でも、私と羽入は何度もやり直す。

サイコロを何度も振り、良い目を探し、駒を集め、何度も挑む。……鷹野の意志に負けないくらいの強い意志で。

あなたも、ここに至るまでに何度か挫けそうになったでしょう…？　でも挫けず、私と共にここまで辿り着けた。

もう一息だから、…がんばろう。最後のカケラを、作り出そう。

それはとても幸せな最高のカケラだから、次のカケラが必要ない。…だから、最後のカケラ。
さぁ、駒を集めよう。奇跡を集めよう。
あなたの願いと、思いと、夢を、どうか私に託して…。

◆祭囃し編のカケラ

七つのカケラを様々な奇跡で結び集め、……私はようやくこのカケラを手にする。
…このカケラの中に、私たちの最後の運命が詰まっている。
でも、……覗く前に、少しだけ待ってほしいの。
この中にある運命は、私たちが覗けばそれで決まってしまう。
……猫を詰めた箱の話をしたことはあったっけ?
箱の中の猫は生きているか、死んでいるか。
…開ければわかることだけど、開けるまではわからない。
生きているかもしれないし、死んでいるかもしれない。
つまり、中身のわからない開ける前の箱の中には、……生きた猫と、死んだ猫が同時

に存在しているということなの。
そして、開けて真実を知った瞬間に、ありえない方が消えてしまう。
…このカケラの中身も同じこと。
この中には、私たちの望む未来と、鷹野の望む未来が同時に存在している。
それらは相反(あいはん)していて、互いの未来を否定し合っている。
覗けば、片方の未来は、消えてしまう。
もし、……私たちの駒がこれ以上なく十分に揃っているならば、…私たちは覚悟を決めて、このカケラを覗いてみよう。
…でも。私たちはゲーム盤の上に、これまでと同じ駒しか、まだ並べていない。
そして、その条件でのゲームもやはり、鷹野たちの圧勝だった。
すでに皆殺し編のカケラで試している。
まだ、…駒がいるのだ。
強い力を持ち、ルールYを打ち砕いてくれる強さを持った駒の協力が。
……その駒が得られるまで、……私は恐ろしくて、このカケラを覗くことができない…。
でも、そんな駒をどうやって得るの？　今まで一度も得たことがないのに？

……それを得るには、もう一度だけ、いる。

奇跡の力が、いる。

◆カケラ屑

………うん？　これは、……何？

こんな小さなカケラ屑、今まで気付かなかった。

カケラも時にはひびも入るし、割れたり欠けたりもする。

……私たちが絶対だと信じる運命にも、時にひびが入るのと同じにね。

欠けた運命は、もはや別の運命だ。……ならば、これは本来は何に欠けていた運命なのか。

私はそのカケラ屑を拾い、……私の持ついくつかのカケラにうまく合わさらないか、色々と試してみた。

……そうして、最後に手に取ったカケラが、…暇潰し編のカケラ。

このカケラは元から歪な形をしていた。

…その、歪な部分に………、ほら…。ぴったり合った。

……一体、このカケラ屑がくっつくと、……どう世界が変わるというのか。どんな、奇跡が起こるというのか…。

世界がぐにゃりと歪む。

…一度割れたものをくっ付けなおしたのだから、断層で屈折が起こるのだろう。

…でも、覗けないわけじゃない…。

そこは、昭和はすでに六十年を過ぎている。

……古手梨花たちの物語が、いつもの通りに昭和五十八年六月の袋小路に終わった後のこと。

ピー、ザザ！　ノイズ交じりの着信音がイヤホンに入る。

「全班へ。室長からありがたいお言葉があるぞ、傾注しろ。」

「ご苦労さん！　所轄署は十五分くれることになってる。秒で制圧しろッ!!　ひとりたりとも逃がすなッ！　ターゲットの一人は外交官だ。警察だと悟られるな、有無を言わせず身柄を確保しろ！　ただし間違っても危害を加えるな！　外交問題に発展するぞ！」

「外交官特権で地元暴力団と癒着している外道どもだ。ヤクで荒稼ぎし、借金のカタにはめて人身売買にまで手を染めてやがる。現地大使館の話じゃ被害者には十代未満の少女まで含まれ

てる。」

「……糞どもが。」

本当ならただの暴力団絡みの事件だ。

……だが、某国の大使館員が関わっていたことがわかった時点で、事態は極めてややこしいことになった。

外交官には特権があり逮捕できない。だが、そいつが黒幕のひとりで、某国犯罪組織と日本の暴力団組織の橋渡しをしている大物なのは間違いない。見逃すことは到底出来ないのだ。

国外に追放するのは容易だろうが、それではトカゲの尻尾切りにしかならない。

大使館に対し協力依頼をしたが、大使館側はこれを拒否。その時点で事態は膠着に陥った。

そんな中、自衛隊のレーダー技術、ミサイル技術に関する機密が売買されるとの情報が入った。

海外への機密漏洩の段階に及んで公安部は強硬解決を決意。

……そして本日、その作戦の決行が決まったのである……。

「正面は階段前に二人。地下入口に二人。裏口に四人。全員帯銃の可能性大！」

「普段より二人多いな。」

「あの人にとっちゃ、二秒余計にかかるだけさ。…容赦ねぇからな、あの人。」

「聞こえるか、赤坂！　お前が斬り込み隊長だ。用心してかかれ！　よし、開始しろ！」

「……赤坂了解。作戦を開始する。」

繁華街の中、ふらりと曲がり角より現れたのは、…赤坂だった。

だが、かつて梨花と出会った頃のような初々しさはまったくない。

…赤坂が、地下クラブの入口にやって来ると、外国人的なイントネーションで護衛が制止してくる。

「ココ、会員制。おニイさん、会員証ある？」

「…………………。」

赤坂が無言で懐より会員証を取り出す。

…偽造の困難なタイプで、一枚しか確保出来なかった。だから、先陣を切る赤坂に託されたのだ。

会員証を持っていることを確認すると、護衛は行って構わないと顎で示した。

「……赤坂さん、地上護衛突破。地下階段を下りてます…！」

「頼むぞ…、赤坂…。」

地下階段の奥には、高級クラブを思わせる装飾過多な扉があった。

毒々しい色のカクテルライトが照らし出し、そこが魔窟の入口であることを無言で物語る。

「…いらっしゃいませ。会員証を拝見いたします。」

「…………………。」

入口前の護衛が会員証を受け取り、それを壁に付けられたカードリーダーに通す。

……ブー。

エラー音。…赤坂の額に汗が浮く。

…だが護衛は、自分のカードの通し方が悪かったのだと思い、二度三度、カードを通していた。

……ブー。……ブー。

「………赤坂さん、手間取ってます…。」

「まさか、カードの認証が変えられたか…!?」

「……赤坂にトラブルが発生したら作戦変更するぞ。赤坂の安全を速攻で確保しろ…。」

もう一人の護衛が次第に表情を険しくしていく。

右手が、ジャケットの内側に差し込まれ、…恐らく、銃に手を伸ばしているに違いない。

……ピンポーン。

緊張の沈黙に似合わない軽やかな音がして、カードリーダーに緑のランプが点る。

それに呼応して、ガチャリと扉のロックが外れる音がした。

「お待たせしました。どうぞお通りください。」

護衛は懐の手を戻し、重い扉を開いた。

中からは騒がしい音楽と明滅(めいめつ)する色とりどりの灯(あか)りが溢れ出して来る……。

扉の内側から、正装した護衛が姿を現し、うやうやしくお辞儀(じぎ)をして歓迎した。

……今この瞬間、赤坂の最初の目的は達せられた。

これこそが全班突入の狼煙(のろし)であり、……同時に、赤坂が単身、敵地に足を踏み入れていて、極めて危険な状態に身を置いていることも示す。

この扉が、突入時の最大の障害だったのだ。

オートロックなので、閉まれば自動的に施錠(せじょう)されてしまう。堅牢(けんろう)な扉で外から開けるのは困難を極める。

……誰かがこの扉を開き、突入班突入までの十数秒間、この扉を確保していなくてはならないのだ。

そして、その大任(たいにん)は今や赤坂にしか任せられないと室長は判断したのだ。

「……赤坂。入口確保。」

『作戦開始ッ！！！』

赤坂が入ったビルの向かいは、テナントの入れ替わりなのか、作業用のトラックが二台ほど

停められていた。
だがそれは偽装だった。
…一台の荷台の扉が開き、中から数十人の私服捜査官が躍り出す!!
もちろん、裏口でも同じことが起こっていた。
地上の護衛がすぐに異常事態に気付き拳銃を抜いたが、すぐ近くに一般人のふりをして隠れていた捜査官が背後より襲い掛かり、瞬きする間に制圧してしまう。
そして数十人が無言のまま、地下階段に一気に押し寄せた。
…この狭い地下階段も作戦の障害だったのだ。
そしてこの光景は監視カメラによってセキュリティに見られている。数秒を待たずに突入はバレるのだ。
セキュリティがボタンを一つ押せば、ロックは外部から解除不能になる。だからこそ、突入前に扉を確保する必要があったのだ。
大勢が階段を駆け下りてくる異常な足音に、赤坂の両隣にいる護衛は気付く!
出迎えていた正装の護衛も異常事態に気付く…!
三人の護衛の意識の注視が、…赤坂を逸れて、後方の階段へ。それを呼吸で感じ取る赤坂
……。………………赤坂は、少しだけ深く息を吸い込むとそこで呼吸を止めた。

停止した空気の世界で、奇妙な姿勢で両脇の護衛が宙に浮かび上がる…ッ!!

赤坂は自分と彼らの立ち位置を理解していた。だから彼らを目で確認する必要がまったくなかった。…だから、にもかかわらず!

左右の護衛の延髄にミリ単位のズレもなく正確に拳を叩き込んだ。その拳は鍛え上げられ、悪に対して一片の容赦もない、まさに徹甲弾並の破壊力を備えていたのだ…!!

その両腕を、打ち抜いたのと同じ速度で引き戻す…!!

明滅するライトに浮かび上がったその様は、…異様の一言…!

その光景を真正面で見ていた男は、何が起こったか理解出来なかったに違いない。

二人の護衛が歪な姿勢で宙に浮き上がり、目の前に今、立っていたはずの男が瞬時に姿勢を低くしていて……、そこで停止した時間は砕けた!!

正装の男は天井に叩きつけられ、凄まじい速度で床に叩きつけられる!

彼は後に流動食を食べながら必死に思い出そうとするだろう。自分の顎を砕いたのは、拳だっけ膝だっけ? それすらも理解出来ずにッ!!

その男がうまい具合に床に転がり、扉の間に入ってくれたので、赤坂はここで扉を押さえて開けっ放しにしておく必要がなくなった。

「……赤坂、突入する。」

「ま、待て!!　後続と合流しろッ!!　赤坂ッ!!!」
店内は騒がしい音楽の海の中であったとしても、入口で起こった不穏な気配はすぐに感知されていた。
「全員、床に伏せろおおおぉおッ!!!」
赤坂の怒号に、すぐに店中から悲鳴が起こる。
罪の自覚のない自称小市民たちは、自分が蚊帳の外であることを示そうと床に這いつくばった。
だが、店内の護衛たちは一斉に赤坂に向かい対峙する！
そんな中、数人の護衛に庇われるように裏手へ逃げる一団がいた。
赤坂はそこで、初めて停止していた呼吸を一度だけ許し、再び息を止め……狼の如く疾駆するッ!!
テーブルの上へ飛び上がり、一本が月収より高い高級酒や万年氷から削りだしたロックの入ったグラスを蹴散らしながら!!
ボクサー崩れのような外国人用心棒が、無謀にも赤坂の前に立ち塞がる。そして聞き取りづらいスラングで挑発を口にして掛かって来いというような仕草をした。だが、赤坂はそんなのは見ていなかったし、どうでもいいことだった。

その男は、赤坂の拳から繰り出される一撃に対し、ガードを間に合わせたことだけが見せ場だったろう。でも、そもそもガードになんかなってない!!　赤坂の鍛え抜かれた豪拳は、ガードの腕ごと骨ごと打ち抜くだけなのだから!!

腕が奇妙に歪み、悶絶の表情を浮かべた次の瞬間、赤坂の左腕が顔面にブチ込まれるッ!!

赤坂の利き腕は右だ。だから男は感謝した方がいい。眼底骨折程度で済むのだから!!　その背後より組みかかろうとした男は、多分、それでもチャンスだと思ったに違いない。

どんな腕っ節のある男だって、背後を襲われればイチコロなんだ…!!

だって、意識を正面に集中させているんだから、背後から襲う自分は想定外のはず……!!!

でもそれは赤坂が正面の男に集中しててくれればの話であって。…赤坂が正面の男など眼中になかった場合に限り、正しくはないッ!!!

だから赤坂は十分に距離も間合いも理解していた。……今日までのいくつもの修羅場が教えてくれていた。許しがたい悪人たちが、数に飽かして襲い来る時、背後を襲ってくるタイミングと間合いを十分に体で覚えていた…!!

それは正面のボクサー崩れを左の正拳で打ち抜いた姿勢からの一連の流れ。

その左が引き戻される流れから左足が美しいまでの軌道をもって、背後の男を食らう龍とな

って襲い掛かる！
形容し難い鈍い音がして鼻骨(びこつ)をへし折ったことを教えた。……でも、赤坂はそんなことはわかってるッ！
そのまま、姿勢は流れるように捻(ねじ)れ、右の拳が唸(うな)りをあげて側頭部(そくとうぶ)にブチ込まれるッ！！！
無様な男は壁に叩きつけられ、反射するように跳ね返って床に転がった。
そこで赤坂はもう一度だけ呼吸を許す。
その時、明滅するライトの中に浮かび上がった、鬼神のような表情に、全部の護衛たちは思った！
あぁ、こいつの進路だけは遮(さえぎ)っちゃだめだ!!
自分たちは人間の敵と戦うように言われてる。人間じゃないヤツと戦うのは給料の範囲外だッ！！！
そこへようやく後続の、赤坂の仲間たちが一斉に店内へ雪崩(なだ)れ込んだ。
ようやくという表現は彼らのためにも妥当(だとう)ではない。…第一、ようやくも何も、一瞬なのだ。
赤坂が五人を沈黙させた時間は、彼にとっての二呼吸の間でしかなかったッ!!
「全員、床に伏せて頭の上で手を組めッ!!　抵抗すると命の保障はしない!!」
赤坂の獅子奮迅(ししふんじん)の活躍で、もう完全に流れは出来上がっていた。

その圧倒的な迫力に、首魁（しゅかい）たちは皆、逃げ切れないと知り観念して床に伏せるが、中の一人は開き直るように笑った。

「私に触れる、良くないです！　外交問題なりますよ！」

だが赤坂はその襟首（えりくび）を掴み上げると、コンクリートの壁に乱暴に叩き付けた。

「あ、あなた警察ですか。不逮捕特権あります!!　私は外交官です!!」

「そりゃよかったな。給料いくらだ。」

「これ、外交問題になります！　大使館へ連絡させてくだ」

「おああああああぁッ！！！！」

龍のような咆哮（ほうこう）と共に赤坂の右拳が男の頭部右脇の壁に打ち込まれる!!

間髪いれずに左拳が頭部左脇へ打ち込まれ、瞬きを二つも許さないわずかの瞬間に七発の連撃が頭部左右スレスレに叩き込まれ、亀裂（きれつ）すら浮かべる!!

それらの破壊力は、たったの一撃でもこの男の頭部を砕きかねないのだ！

失禁しかねないくらいに呆然とした男は、力なくそこへ崩れ落ちる。

「…は、………はひぃいいいい………。」

「……赤坂。ターゲット確保。」

後の検分（けんぶん）で、公安部が確認していなかった隠し通路からの逃走ルートが発見される。

そこにはソ連製の軍用機関銃もあり、赤坂が店内で制圧していなかったら、取り逃がしていた可能性、もしくは双方が死傷者を出す大規模な銃撃戦に発展していた可能性が高い。
誰にも発砲させずに瞬時に制圧出来たのは、彼の手柄であることは間違いなかった。
「……確保しろ。急げ！　地元警察が来るぞ。全員を荷台に押し込め!!」
警察が急襲したことには出来ない。外交官が絡んでいるのだ。
表向きは、ヤクザの抗争に巻き込まれたことを装っている。
価値のない連中は、適当なところで放り出し、ターゲットだけは一般警察へうまいことやって引き渡す。
もっともその前に、たっぷりとゲロしてもらいたいことがあるが。
この外交官を名乗るブタは、別室が水面下交渉に使うだろう。ブタが犯罪組織と密接に関わっている証拠はここに十分あるのだから。
体面上、ノングラータを食らいたくない大使館側はこいつを切り捨てるだろうが、それ以上は別室の仕事だ。俺たちの仕事は一般警察には踏み込めない、社会という家具裏の隙間掃除までなのだから。
「赤坂は無事か⁉　応答しろ赤坂!!」
「……こちら赤坂。撤収中。」

「また無茶をしやがって…！　あとで室長にこってり絞られろ！」
「やっぱり鬼だな赤坂さんはよ。…秒で五人撃墜だぜ⁉」
「…ありゃあ絶対、空手の域を超えてるぜ！　赤坂さんの鉄拳はすでに凶器だね…。」
「しかし連中、銃を抜かなかったのはラッキーだったよな。…赤坂さん、躊躇ねぇからな。蜂の巣にしてたかもしれないぜ…。」
「……聞こえてるぞ。人を殺し屋みたいに言うな。俺は悪党に容赦しないだけだ。」
ひっ捕らえたブタどもが、単に法を犯した犯罪者なだけでなく、…人間として許しがたい数々の悪行を重ねていることを彼らは十分に理解していた。
…赤坂の鉄拳の重みは相手の罪の重さに比例する。
巨悪であればあるほどに、如何なる怯みもなく相手を打ち砕く！
「ブタどもを荷台に詰め込め！　赤坂、急がせろ！　所轄署に通報が入ってるぞ！」
「……赤坂了解。聞こえたな、撤収を急げ。」
「りょ、了解！　あー、主任どうぞ。要治療が五名！　手配をお願いします！」
今や赤坂は、かつての初々しさなど微塵も感じさせない。
雛見沢を訪れた当時からは想像もつかないくらいに逞しいエースに成長していた…。

汗とカビの臭いが染み付いた薄暗い道場に、道着姿の赤坂の姿があった。
その道場は、雑多な繁華街の朽ちた低層ビルの一室にあり、広くはないし、トレーニング器具が充実しているわけでもない。
ぱっと見た限り、赤坂ほどの者が師事するに足りるほど立派な道場には見えなかった。
門下生も少なく、稽古に勤しんでいるのは赤坂を含めて、ほんの三、四人しかいない。
……でも、それでも赤坂が選んだ道場だった。
赤坂にとっての空手は、敵を打ち砕く武器であることに違いないが、…今の赤坂はさらに別の境地を求めていた。
それを求めるには、喧嘩っ早い若い門下生が大勢いる実戦形式の道場は肌に合わなかったということだ。
いくつかの道場を渡り歩き、最後に至ったのが、このおんぼろ道場だったのである…。
時折、聞こえるその重い音と鎖がガチャリと鳴る音は、赤坂が打つサンドバッグが軋む音だった。
…むやみやたらに打ちつけているのではない。深く思案し、練りに練り上げてから、打つ！
それは音というよりは、深く低い振動。
汗の粒が飛び散り、埃の浮かぶ空気がぶわっと跳ね上がり、その重みを暗に語る。一撃必殺

を体現した見事な正拳だった。
だが、赤坂はどこか納得が行かないらしい。
薄く目を瞑り、……力の込め方や呼吸の深さ浅さを整え、時にはセミの鳴き声を聞く間すら与えるように、再び、打つ。
素人が見れば、それはまるで休み休みやっているように見えるのだろうが。
…それを横目に見ながら自らもトレーニングに励む門下生たちは、その練りこんだ一撃に畏怖を超えた尊敬の念すら感じているのだった…。
「……赤坂さんって、警察に勤めてるって噂だぜ…？」
「マジかよ…。あんな人が警官やってるなら、俺は悪いことする気なんかおきねぇぜ…。」
「しかし、……赤坂さんも集中力がすげぇよな。あの人、疲れるってことを知らねぇぜ？」
赤坂は非番の日は、朝の一番から道場にやって来る。そして、黙々といつまでも稽古に勤しむのだ。
それはもはや、肉体のトレーニングというより、精神のトレーニングの領域に違いない。その途切れぬ集中力こそ、赤坂の強さの秘密だと彼らは見抜いていた。
だが、それを実践するのは簡単ではない。…人は生きている限り、無数のしがらみや雑念に囚われる。それから全て自分の精神を解き放つのは、武道の次元を超え、悟りの境地にすら踏

み込むかもしれない。
人はその境地を得るために、様々な道を模索してきた。
…そしてわかったのは、それに至る道は一つではないということ。……どんな道であっても、極めれば至れる、ということなのだ。
そして赤坂が選んだ道が、空手だったということだった…。
「噂に聞いたんだけどよ…。あの人、奥さん死んじゃってるらしいんだよ。それを忘れるために空手を始めたって噂だぜ。」
「あれ？　俺が聞いた話は違うぜ。…任務中に、女の子を救えなかったとか何とかで、それで自分の無力さを痛感したとか何とか…。」
「………おい、聞こえてるぞ。人の噂話なんかしてないで稽古をしろ。」
「「お、押忍ッ!!」」
その時、小さな電子音が聞こえた。誰かの時計が昼を伝えたのだ。
「あ、赤坂さん。俺たち、弁当買ってきますけど、赤坂さんのも買って来ましょうか？」
「………助かる。何でもいいぞ。頼む。」
赤坂にとっては、弁当を買ってきてもらえることより、彼らが出掛けて、道場内が静かになることの方が嬉しかったかもしれない。

彼らが靴に履き替え、ぱたぱたと出て行くと、道場はシンと静まり返るのだった…。

「…クソ。人の話なんかしやがるから、集中が途切れちまったじゃないか。」

だが噂話が聞こえた程度で集中が途切れるのでは、それは稽古が足りないということだ。

……まだまだ稽古を重ねなければ、無我の境地には至れない。

気を取り直し、サンドバッグに拳を打ち込むが、その音はさっきまで聞こえていた音に比べると一際軽く、その拳から重みが抜けてしまっていることは明白だった。

赤坂は、一度休憩するべきだと悟り、スポーツバッグからタオルを取り出して、床に座り込んだ。

セミの声が、体に染み込んで行く。

窓は開いているが、この道場は風が抜けない構造らしく、大して風は入ってこなかった。

それでも、今の赤坂にはわずかの涼風を感じることが出来るのだった。

……赤坂が空手を始めた最大の理由は、…彼らの言う通り、雪絵の死だった。

もちろん、あの誘拐事件の時、犯人との格闘で遅れを取ったことも十分な動機だったのだが、それ以上に大きかったのが雪絵の死の痛みだった…。

雪絵は、鹿骨市へ出張している間に、…病院の階段から転落して死んだ。

その悲しみがどうしても拭えなくて、空手の門を叩いたのだ。
だが、……昭和五十八年六月。
雛見沢大災害が起こった時。……私はとても重要なことを忘れていたのに気付いた。
それは、雪絵の死を、ひとりの少女に予言されていたこと。
そして、……その予言と引き換えに少女がした、自分を助けてほしいという願いだった。
…雪絵の死は事故だった。
どうしようもないことだったと割り切ることも出来たかもしれない。
だが、あの少女、古手梨花の死は違う。
彼女は自分が殺される五年も前にそれを知っていたのだ。
私は雛見沢大災害の時、当時世話になった大石氏のことを思い出し、無事を確認しようと電話をして、………全てを知ったのだった。
それを知った途端に、…私は深い悔悟に苛まれた。
古手梨花という少女は、私の人生の分岐点だったのではないか。
私が、彼女の予言を信じ、何かの行動を起こしていたら、雪絵は階段から転落することなんてなかったんじゃないのか。
そして、正義の心を全うするために警官となった自分が、ひとりの少女の助けに気付くこと

も出来ず、少女を取り巻く陰謀を、五年もの猶予がありながら見過ごし、殺してしまったのだ。
あの、大臣の孫の誘拐事件で訪れた雛見沢には、……確実に運命の分岐点があったのだ。
そこで私が、……もう少し少女の言葉に深く耳を傾けていたなら…。
雪絵は死んでいなかった。
そして、古手梨花を助けに駆けつけることが出来ていた。
…その二つが、……どうしても拭えぬ後悔となって、私を苛むのだ…。
大石氏から聞かされた、雛見沢村連続怪死事件は、雛見沢大災害によってうやむやにされてしまったが、…明らかに何か巨大な陰謀を感じさせる奇怪な事件だった。
それに挑むには、数々の複雑事件での経験と、どんな巨悪にも単身で挑める研ぎ澄まされた強さがいる。
……私は今、それを手に入れようと仕事と稽古に明け暮れているが…、全てはもう遅い。終わってしまったことなのだから…。
それを悩んでいた時、この道場の師範に諭されたのだ。
終わってしまったことはどうしようもない。…ならばせめて。まったく同じことがもう一度起こった時、次こそは必ず救ってやれるよう、自分を鍛え上げるのみだと。
全ては遅い。もう終わってしまっている。雪絵は事故で死に、雛見沢はガス災害で全滅。…

そして、梨花ちゃんは生きたまま腸を引き摺り出されて殺された……。
クソ……！！！！
雪絵の死に心を奪われ、救えたかもしれない少女の助けに耳を傾けられなかった…！
いや、耳を傾けていたなら、雪絵の事故だって防げていたかもしれない…！
…諦められない…、諦めきれない…!!　くそぉぉぉ…ッ！！！

後悔に頭を掻き毟る赤坂が見上げた先には、……道場を見守る神棚があった。
赤坂に、神仏を敬う気持ちはもちろんあるが、苦しい時に神頼みをしたことはない。
……そんな赤坂が初めて神に祈りたいと思った。
自分に出来ることなら祈らない。…自分に出来ないことだから、祈った。
それは、…とてもとても都合のいい願い。その願いが許されるなら、世界中の大勢がきっと願うに違いない願い。
「……もう一度…。もう一度、あの時に戻らせてくれ…。そうしたら、……今度こそ俺は、二人を救う…ッ!!」
…その時、赤坂は、ふっと全身が軽くなって…。
いや、平衡感覚を軽く失うような感じになった…。まるで貧血か何かを起こして倒れる時の

ような感じ。
激しい稽古の後に、突然大声を出したものだから、頭が酸欠にでもなったのか。
なのに、なぜか神棚から目が離せない…。
「……ありがとう、赤坂。…あなたの思いが私たちにはとても必要だった。」
…………それは、酸欠の時に見る幻なのか。
赤坂は見たことのない、会ったことのない誰かに話しかけられているような気がした。
「私たちが奇跡を願い、……あなたも奇跡を願わなければ、奇跡は起こらない。……だって、奇跡は全員が願わなかったら、起こらない。双方が手を伸ばしあわなかったら、届かない。」
………彼女が何を言っているのかわからないけれど、…でも、私はそれを聞き漏らしてはならない気がする。…とても大切なことを、言っている気がする。
「……赤坂。もし、あなたも望んでくれるなら、…あなたに奇跡を。私たちに奇跡を。……それは欠けたカケラを結び合わせ、より大きな大きなカケラを生み出すきっかけになる。……あなたのたった一つの決意が、全員の思いや運命に大きな影響を及ぼすこともあるのだから。」
「あの時に、……もう一度時間を巻き戻してくれるというのか…？」
「うぅん。そんなこと、私には出来ないのです。……私に出来るのは、気付かせることだけ。
……一つのカケラだけでは学べないことを、他のカケラで学んだことを、気付かせてあげるだ

け。…だから、この欠けたカケラをあるべきところへ戻すだけ。……それでもきっと大きな奇跡。…もっとも、その奇跡を、あなたはきっと気付かないだろうけれど。」

……ありがとう、赤坂。
私のことを覚えていてくれて。
あなたにどれだけたくさんの時間、助けを求めたのかわからない。
そしてやっと届いた願い。
だから、もう一度だけ言うわ。
……私を、…いえ。
私たちを、助けて。

◆祭囃し編のカケラ

……長かった。…本当に長かった。
大丈夫…？　まだ、あなたの精神は生きている…？
これで、私たちが欲しい駒は全てゲーム盤に並んだのかしら。
昭和五十八年六月を巡る、運命のゲームで、鷹野たちに勝てるだけの駒が並んだのか

しら。
……私は、多分、並んだと思ってる。
あとは、羽入。…あなただけね。
あなたが駒として登場出来る時間は、もう相当に制限されている。
でも、ゲームに登場出来なくなったわけじゃない。
………さぁ、始めましょう？
この日のために、数百年もの時間を掛けたのだから。


転校生
古手羽入

■羽入ターン

信じるというのは、希望という名のコインを賭けることだと彼は例えた。つまり、…信じるということはリスクを負うということ。勝てば得るものがある代わりに、負ければ失うものがあるということ。多くの博打がそうであるように、私たちは絶対勝てる勝負を探してコインを賭けようとする。だが、多くの博打がそうであるように、絶対勝てる勝負など存在しない。

時には勝ち、時には負ける。そうしながら、希望というコインを増やしていくのだ。だが、負けが込めば賭けるのが嫌になることもある。……そうして気付くのだ。何も賭けなければ、何も失わなくて済むことに。

何も賭けないということは、何も信じないということ。何も信じないということは、何も関わらないということ。何も関わらないということは、いないのと同じ。

だから彼女は、〝いなかった〟。胸の中に残るコインは最後の一枚。それを失えば自分は消える。

……それを恐れればこそ、賭けることに怯え続けた。無意識の内にそれを賭けてしまわないよう、あらゆる勝負に関わらないよう、逃げ続けた。でも、ポーカーというゲームがそうであ

るように。…降りることでも失うコインがある。彼女は最後のコインを失うまいとして、……その最後の一枚を緩慢に失おうとしていたのだ。

　そして、…彼女はもうひとつ知らないことがあった。……いや、それは私も知らなかった。賭けるコインが多ければ多いほど、……私たちのしているゲームは、勝率が上がるというのだ。つまり、私たちが怯えれば怯えるほどに、目の前のゲームはいつも負け続けるというのだ。御神輿担ぎだってそうじゃないか。あんなに重いものを個人が持ち上げることなど不可能だ。だが、大勢の人たちが力を合わせた時、それは信じられないほど軽々と上がる。

　重くて持ち上げられないのと、軽々と持ち上がるのの境目はきっとあまりにはっきりしている。天秤の均衡が、わずかの重さで決壊するのと同じに違いない。目の前にある大きく重い御神輿が、どうしても担ぎ上げられない。みんなが懸命にそれを担ごうとしているが、それが出来ない。

　私はそれを見て、どうせ担げないからと手伝おうとしない。勝てないゲームだからと参加しようとしない。コインを賭けようとしない。……そう。それは間違っているのだ。

　私が担ぐのに加わることで、御神輿は軽々と持ち上がるかもしれないのだ。私は永いこと傍観者を気取ってきた。目の前の出来事が伸るか反るか、賭けるに値するか、それを眺めるだけの存在だと誤解してきた。違うのだ！　私は傍観者なんかじゃないし、そうであってはならな

い。自らも参加すべきなのだ！　目の前のゲームは、一見勝てない勝負だ。一見それは賭けるに値しない。
だが、それに賭けることで、加わることで、信じることで、勝敗は変わるかもしれないのだ！
何かに賭けるということは、何かを信じるということ。何かを信じるということは、何かに関わるということ。何かに関わるということは、いるということ。
だから彼女は今こそ、〝いた〟。
「はい皆さん、朝のホームルームを始めますよ!!　おしゃべりはおしまいです！　委員長、号令！」
「きり――――――――――つ！　礼！」
「「おはよーございま――す！」」
「着席～！」
ガタガタガタガタ。
いつもの朝だった。少しだけ違ったのは、始まるのがほんの少し遅れたことだ。
時間に几帳面（きちょうめん）な知恵先生は、いつも決まった時間ぴったりに教室にやって来るのだが、今日は珍しくほんの少し遅れた。ホームルームが遅れる理由。その噂は先生が来る前から教室内

で飛び交っていた。先生が、どうぞと廊下に声をかけると、おずおずと一人の少女が顔を覗かせた。
「…………あぅあぅあぅ…。」
「新しい転校生の古手羽入さんです。今日から皆さんと一緒にお勉強することになりました。」
「「おおお―――――!!!」」
歓迎と喜びと驚きと、そういうのをごっちゃにした声が教室中から上がった。
「古手？　あれ、梨花ちゃんの親戚なの!?」
「……そうなのですよ。ボクの遠縁の親戚なのです。」
「もー、私もびっくりでございますのよ!?　梨花に親戚がいたなんて知りませんでしたわ。」
「いやいや、おじさんも知らなかったよー！　まぁ、御三家筋は結構、ややこしいからねぇ。
私の知らない遠戚がいたとしても、あり得ないことじゃないよ。」
「でもやっぱり梨花ちゃんの親戚だよね！　はぅ～、かぁいいよ～!!」
「…………あぅあぅあぅ…。」
妙に盛り上がるクラスメートたち。その盛り上がりに、新しい転校生はちょっと押され気味なようだった。梨花ちゃんって、結構、飄々としていてマイペースなところがあるんだが、この羽入って子はそれとは正反対のように感じられる。内気と言おうか、小動物系と言おうか。

……早い話がレナの食指が動きまくりのタイプだ。
…ほら見てみろ。レナのやつ、丸飲みしてお持ち帰りしようとしているぞ…。
「では羽入さん、自己紹介をしてください。皆さんは静かに聞くように！　はい、それでは羽入さん、どうぞ。」
先生が壇上を譲り、真ん中へ来るよう促す。シンと静まるとかえってプレッシャーを感じるらしく、しばらくの間、おどおどしていた。…まぁ気持ちはわかる。こういうのって緊張するもんだよな。
「…えっと…あぅあぅ……、……あの、古手羽入と言いますのです。…その、あぅあぅ……梨花の親戚なのです…。」
「……み～！　ボクの親戚なのですよ。みんな仲良くしてあげてほしいです。」
彼女が緊張して自己紹介出来ないことは、梨花ちゃんが一番よくわかっているようだった。そうだよな。沈黙でプレッシャーを与えるなんて気の毒だぜ。だから、俺たちはさっそく賑やかにしてやることにした。
「梨花ちゃんと同じ古手さんなんだね～。はぅ、古手さんが二人になっちゃった。」
「なら、羽入さんでいいじゃありませんの。古手さんって呼んだら、梨花も振り返ってしまいましてよ？」

下の名前で気安く呼び合うのが俺たちのルールだ。彼女も今日から俺たちの仲間なんだからな、そのルールに交ぜてやるべきだ。

「なら決まりだね！　今日からあんたのことは羽入って呼ぶよ！　私はクラス委員長の園崎魅音！　魅音でいいからね－！」

「をっほっほっほ!!　北条沙都子でございますわよ？　よろしくですわよ羽入さん！」

「あ、あの！　富田大樹（とみただいき）です！　豆腐屋（とうふや）なんで、よかったら来てください！」

「お、お、岡村傑（おかむらすぐる）です！　何かわからないことがあったら聞いてください…！」

「こんにちは～！　仲良くしようね！　何年生？」

我先に挙手（きょしゅ）しては先を争っての自己紹介が続く。

少しでも早く自分の名前を覚えてもらって、新しい友達になってもらいたいという微笑ましい空気が教室に充満していた。俺もついこの間、転校してきたばかりなんだが、俺の時もこんな感じで実に和（なご）やかだった。緊張しまくっている俺にとって、とてもありがたかったのを思い出す。

転校生の緊張感は、転校してきたばかりの俺が一番よくわかっているはずだ。俺も少しは気を遣ってやらないとな！

「そうだね。早くクラスに馴染めるようにしてあげないとね。」

「そっか、レナも去年は転校生だったんだよな確か。レナも転校してきたときは緊張したか？」
「うん。でも、魅ぃちゃんたちがすごく親切にしてくれたから、すぐに馴染めたんだよ。」
「まぁね！　ニューカマーを迎えるのも御三家の大切な仕事だからねぇ。」
「都合のいい時だけ御三家になるなお前は。でも、魅音なんかに世話になって馴染めたってのは確かにそうだ。」
「なら、今度は圭ちゃんたちがお世話をする番、ってことになるんじゃないかな？」
「そうだな！　レナだって転校生だったのに、その次に来た俺に世話をしてくれたもんな。なら、今度は俺が新しい転校生に親切にする番ってことだな！」
転校生がひとり来るだけで、こんなにも教室の雰囲気が変わるもんなんだな。何しろ、俺の心構えまで変わった気がする。
俺たちは、さっそく昼休みに羽入を取り囲んでやることにした。
「はーい!!　それでは羽入への質問は一人一個ずつだからねー!!　彼女の本質に迫るディープな質問をズバリ行ってみよう〜！　さーさー一番は誰〜!?　よーし、岡村！」
「え、え、え、え〜と！　あの…、好きな食べ物は何ですか!?」
「…ぁぅ、甘いお菓子はみんな大好きなのです。一番好きなのはシュークリームなのですよ。」

「あぁら、それは素敵ですわね!! 私も大好物でしてよー! 興宮においしい洋菓子のお店があるんですの。今度案内してさしあげましてよ。」
「はいはい、男共聞こえたね～!? 羽入の好意値を稼ぐにはシュークリームだよ～! 安いやつより、高級店の高くて美味しいやつが効果的! さぁ次の質問は誰かなぁ!? ないならおじさんが今日の下着の色とか聞いちゃうよ～!?」
「……あぅあぅあぅ!」
みんなから色々と質問攻めにされてうろたえる羽入。まぁ転校生の通過儀礼みたいなもんだよな。
俺も転校してきた当日がこうだったことを思い出す。魅音と沙都子が面白おかしく絡むのも、俺の時と同じだ。レナを見てみると感慨深そうな顔をしている。きっとレナの時もそうだったに違いなかった。
「レナも転校してきた時を思い出してるのか?」
「……え? ……あ、うん。あははは。」
「他のことを考えてたなぁ? 羽入をお持ち帰りする算段でもしてるんだろう。」
「は、はぅ!? そんなこと考えてないよぅ～!! 羽入ちゃんがシュークリームが大好きなこととか、レナの家においしいシュークリームがあるんだよ、食べにおいで～とか全然考えてない

んだよ〜ぅ!?　はぅ〜!!　お持ち帰り〜!!」
「あはははははは、明日からいきなり不登校になったら、こりゃレナのせいに違いないいなー!」
「はぅ、そんなのひどいよ〜。あはははは。」
羽入とクラスメートの微笑ましい交流を見て、俺とレナは笑い合った。
「……ねぇ圭一くん。…何だか、嬉しいね。」
「嬉しいよな。新しいクラスメートを迎えるのは。」
「えっと、………そうじゃなくて、……えっと……。この子、たまに見掛けてた気がするの。」
「羽入をか？　引っ越し前の下見とかで来た時とかかな？　レナって記憶力いいなぁ。」
「……うぅん…、そういうのじゃなくて…。………羽入ちゃんはもっと前からいて、…私たちのすぐ近くで、私たちが遊んでるのをずっと見てた気がするの。……ずーっと。……あれ？　私だけ？　圭一くんも気付いてたよね？」
「……いや、俺は全然見たことはないんだが。レナは面識があるってことなのか？」
魅音や沙都子の様子を見る限り、羽入はまったくの初対面のように見えた。レナの言うように、俺たちの遊んでいるすぐ近くにいたなら、誰も覚えてないなんてことはないように思うんだが。

「気のせいじゃねぇのかー？　第一、羽入は転校生なんだぜ？　村にそんなにしょっちゅういたはずないじゃないか。」
「……うーーん、…………そうかなぁ…。たまに見掛けたような気がするんだけどなぁ……。」
「気のせい気のせい。羽入だってついさっき、転校前は遠くに住んでたって言ってたじゃないか。」
「……うーーん…。……でもレナは見たんだけどなぁ……。……はぅ。」
レナは諦め悪く、おぼろげな記憶を辿っているようだった。
多分、既視感というやつだろう。初めて見るはずのものなのに、過去にすでに見ていたように感じることがあるという、あれのことだ。
「別にどうでもいいだろ。今はここにいるんだからさ。」
「そうなんだよね。うん。……あんなにも私たちの輪の中に入りたそうにしていたから、……仲間に加われて良かったね、って。…あはははは。」
なぜかレナは少し涙ぐむように微笑んでいた。ふと見ると、…梨花ちゃんもレナと同じ表情を浮かべている。
…俺にはどうして二人がそんな表情を浮かべるのかわからない。そんなささやかな疑問は、

沙都子に絡まれて大騒ぎになるとすぐに薄れるのだった…。

「「さよ――ならぁ――‼」」

学校で一日の中でしゃべる言葉で、これほど気持ちのいいものはないだろう。授業から解放された途端、教室からクラスメートたちがどどっと溢れ出すのだった。羽入はクラス中にモテまくりの一日だった。

年齢が梨花ちゃんたちくらいということもあって、低学年の子たちにずっと囲まれていて、俺や魅音のような上級生はなかなか接触を持てなかった。

「ま〜、クラスとしてはさ、強面の上級生が転校してくるよりは、自分たちと同い年くらいの可愛い転校生の方が嬉しいだろうしねぇ〜。」

「あははは。圭一くん、最初の頃は緊張してたのか、何だか怖そうな顔をしてたもんね。」

「おいおい、そりゃひどいぜ⁉　俺だって、クラスに早く馴染もうとフレンドリーに接してたってのによー！」

「どこがフレンドリーでございましたの！　私、転校してきて早々に、いきなり圭一さんにデコピンを食らってますのよー⁉」

「それは転校初日の、教室デビューの出鼻をトラップで挫かれたからだろーがー‼　しかも椅

子の背には画鋲で机の中にはカエルまで入ってたぞ！」
「……転校生が職員室にいると聞いて、様子を見に行った時、圭一がとても緊張してるように見えたのです。だから沙都子が、緊張を解してやろうと思ったに違いないのです。」
「をっほっほっほ！　雛見沢の先輩として、気を利かせてさしあげたんでしてよ？」
「ちぇー！　絶対それだけはありえねぇなー！」
…とは言いつつも。俺にとってあの黒板消しトラップは、緊張を解きほぐす力があったのは事実だ。
しかしそれを認めると沙都子がつけ上がる。だから断じて認めん。
「羽入ちゃんはみんなと帰ったね。放課後は誰と遊ぶか、今頃、引っ張りだこなんじゃないかな。」
「あははは。でもやっぱり初日は疲れるもんだよな。きっと帰ったらバタンキュウだぜ。」
「違いありませんわね。をっほっほっほ！」
「さてさて皆の衆～!!　このところ私のバイトのせいでだいぶ長いことご無沙汰だったねぇ！部活メンバーの招集だぁあぁ!!」
「待ちかねてましてよー!!　ご無沙汰が過ぎると鈍ってしまいましてよ！」
「……みー！　誰かの罰ゲームをかわいそかわいそしないと、ボクも退屈してしまいますです。」

「はぅ〜！　レナは負けないんだよ。久しぶりだから手加減なんかしないんだよ〜！」
「くっくっくっく！　どうやらみんな、欲求不満でだいぶエネルギーを持て余してたようだねぇ…！　そうでなくっちゃ、おじさんも叩き潰す甲斐がないってもんだよ‼」
「へへ！　やる気満々みたいじゃねぇか。だがな、生憎、俺の今日の調子は絶好調だ‼　しくじったな魅音、今日もバイトに行ってた方が良かったと後悔することになるぜ‼」
魅音の叔父さんの店で人手不足があったらしく、ここしばらくの間、魅音はずっとバイトに引っ張りだこだったのだ。だから久しぶりの部活になる。なにしろ、俺たち部活メンバーにとっては、学校に来る最大の目的は部活なんだからな！
ある意味、放課後になってからが本番ってわけだ。で、その部活がなしってんじゃ、まるで学校の意味がない。
そんなわけで、久しぶりの部活に、メンバーは全員、興奮を抑えきれないようだった。
「こりゃあ、生半可（なまはんか）なゲームじゃあみんなの渇（かわ）きを癒せそうにないねぇ…。くっくっく！　何のゲームで料理してやろうかねぇ…‼」
魅音が部活ロッカーを漁り出す。…いつも思うが、あの中には何がどれだけ詰まってるんだろうな。絶対、ロッカー内の容積よりも詰まってると思う。その時、ガラリと教室の扉が開く音がした。

「……あれ？　羽入ちゃん？」
「………ぁぅ、……こ、こんにちはなのです。」
「あら、どうなさいましたの？　忘れ物でございますの？」
とっくに帰ったと思った羽入だった。
弁当箱でも忘れてしまったのだろうか。教科書は忘れても何とかなるが、弁当箱はまずいもんな。
「…あぅぁぅぁぅぁぅ……。」
「ん？　羽入、どうしたの？　何か捜し物？」
俺たちの方を、何だか申し訳なさそうに見ている。
……何だろう。俺たちのいる場所が何か邪魔なのだろうか。
用があるならさっさと済ませばいいものを、なぜかおどおど、おずおずと、俺たちの方をじっと見ているのだ。あれ？　ひょっとして俺たちが座ってる席って、羽入の席だっけ？　いや、違うしな。
「どうしたの、羽入ちゃん…？　何か困り事かな、かな？」
「……ぁぅぁぅぁぅ……。」
レナが話し掛けるが、コミュニケーションが成立していない。まるで捨て猫と会話している

ような感じだ。……何なんだ一体？　羽入がじっと見ている。……視線の先に何があるんだろうと思ったら、それは梨花ちゃんだった。
…羽入は、申し訳なさそうにしながら、梨花ちゃんをじっと見ていたのだ。
「……みー。」
「…あぅあぅあぅ…。」
「……ボクは何も言いませんです。羽入がそうしたいなら、自分のお口で言うとよいのです。」
「………あぅあぅあぅ…。」
ようやく状況が摑めてきた。
羽入は何かを伝えたいのだが、それをうまく言葉に出来ないので、梨花ちゃんに代弁してもらいたがっているのだ。ところが梨花ちゃんは、それは自分の口から言えと突っぱねているらしい。となれば、羽入が一体、何を言おうとしているのか、聞かなければならない。みんなでじっと、羽入が何を言い出すのかと待つ。……だが、よくよく考えてみれば、羽入がこういう沈黙をとても苦手とするのは、朝の自己紹介からわかっている。レナもすぐにそれを察して、やさしく話し掛けた。
「どうしたの羽入ちゃん。レナにこっそり話して？　相談に乗ってあげるよ…？」
「……あぅあぅ…。」

「ん？　何？　もう一回言って？」
「……ぁぅぁぅぁぅぁぅ。」
「うんうん。………って、……えぇぇッ⁉」
レナが素っ頓狂な声を上げて驚く。
「何よ、おじさんにも教えてよ。何なのよ一体。」
「えっとあの、……本当にいいの⁉」
「どうしたんでございますの。もごもご言われては気持ちよくありませんでしてよ。」
「えっとね、その…！」
「……ぼ、………僕も部活に交ぜてもらいたいのです………！」
「「えええぇえぇ⁉」」
羽入は恥ずかしさをこらえるような感じで、吹っ切るような大声でそう言った。
「は、はははははは‼　こりゃまた驚いた…！　どこで誰におじさんたちのことを聞いたやら。」
「あぅあぅあぅ…！　僕も入れてほしいのです…。僕も部活に交ぜてほしいなのです…。」
「……よく自分で言えましたです。ぱちぱちぱち☆」
梨花ちゃんは、羽入が部活に加わりたいのを最初から知っていたようだった。魅音はニヤリ

と笑い腕組みをすると、値踏(ねぶ)みをするように睨み付け、不必要に羽入を萎縮(いしゅく)させる。

「…ふぅ～～ん、自分から好んで死地(しち)に飛び込みたがるとは、こりゃあとんでもない命知らずがいたもんだよ。……でもねぇ、うちの部活はそんじょそこらのおままごととは違うんだ。選ばれた者が、試練を潜(くぐ)り抜けた末にようやく入部を許される栄光の部活なんだよ。入れてください、はいそうですか、ってわけにゃ～行かないねぇ…⁉」

「あ、あのね羽入ちゃん…。魅ぃちゃんの部活は見てる分にはとっても楽しいかもしれないけど…。その、…はぅ、大変なんだよ？」

「……あぅ、覚悟の上なのです…。」

「勝って当然。負けたらとんでもないことになってしまいますのよ？　その覚悟はおありですこと⁉」

「……あぅ、僕も負けないのですよ…。…そ、それに……、」

そこで羽入はぐっと息を呑んで、一番言いたかったに違いないことを言った。それは彼女にしてはとても饒舌(じょうぜつ)で、…そして何か深い意味を感じさせる内容だった。

「かつての僕は、負けるのが嫌で全ての勝負から逃げていましたのです…。でも、…逃げることは負けることにすら劣ること…。負ける痛みに挫けず戦い続けて初めて、勝ちを得られるのだと、……教えてもらいましたのですから。」

「……羽入。」
見掛けは内気そうだが、…羽入にも一丁前の度胸があることがわかると、魅音はとても嬉しそうにニヤリと笑うのだった。気に入ったに違いない。
「へー。なかなかどうして大した根性じゃないかよ！　どうだよ魅音、せっかくだから試してやったらいいじゃねぇかよ。入部試験！」
「うう～ん、…くっくっく！　我が部に相応しいかどうか、最低数週間の観察を経てようやく受けられる入部試験を、転校初日からとはねぇ…。さぁてどうしたものか、くっくっく！」
やたらとねちっこくもったいぶる魅音だが、値踏みして遊んでいるだけだ。
本当に交ぜるつもりがなければさっさと門前払いにしている。実際、この程度でおたおたするようじゃ、とっても我が部ではやっていけないだろうからなぁ。
「レナと沙都子が今、話したと思うけど。うちの部は厳しいよ！　勝って当然。狙うは一位のみ。間違って最下位になった日にゃ、生まれてきたことを後悔するような大変な目に遭わされるんだよ!?」
「………あぅあぅあぅ！　でも僕もがんばるのです…。」
「あははは。でも、罰ゲームだってとっても楽しいんだよ。」
羽入ちゃんだって、ずっとずっと見てたんだもんね。

…ずっとずっと、みんなの輪に加わりたいと思って、見ていたんだもんね。
…そうレナが囁いたような気がした。
「魅音、もったいぶらないで試してやればいいじゃねぇかよ。俺だって、そいつを潜って入部を許可されたはずだぜ？」
「そうですわよ。ひとつ、羽入さんの腕っ節を見てやろうじゃありませんの！」
「あはは、羽入ちゃん、がんばろ！　レナは手加減しないからね！」
「…ぼぼ、僕だって手加減しないのです…！」
「……ボクは羽入にだけ手加減しないのです。」
「…あぅあぅあぅあぅ！」
「よぅし気に入ったぁ!!　古手羽入、あんたに我が部の入部試験を許可するッ!!　となりゃあ話は変わるね！　羽入にもわかるゲームにしてあげないとねぇ……。ん〜〜、どれがいいかな？　……お、……くっくっく！　こいつがいいかなぁ？」
魅音が大袈裟なアクションを繰り出しながら机の真ん中に叩きつけたのはトランプのケースだった。ってことは……つまりあれだな!?
「誰でもわかるゲームで行こう!!　トランプのジジ抜きはどうかなぁ!?」
「……あぅ、の、望むところなのです…！」

やはり出しやがったな、俺に入部試験の洗礼を食らわせた時に出てきた、あの…、ガン牌(バイ)トランプだ!!

「をっほっほっほ！　なかなか威勢のいい返事でございますわね！　でも……、我が部のジジ抜きはひと味違いましてよ～？」

何しろ、ほとんどのカードの裏には傷がついてるので、その傷を暗記することでカードの裏を見破ることができる。つまり、このトランプで遊んだ年季(ねんき)がそのまま強さに跳ね返る、新人イジメとしてはこの上ないゲームなのだ…！

「は、羽入ちゃん、がんばってね…。これは試練なんだよ…、はぅ…。」

「……ファイト、お～なのです。」

懐かしいな。俺もこの入部試験を潜ったんだ。ついこの間のことのはずなんだが、妙に感慨深くなってしまうぜ。

「だが！　それと手加減は別の次元だぜ。あの時、みんなが手加減なしで全力で俺を叩き潰してくれたように!!　俺も全力で叩き潰してやるからな！　なぁみんな!!」

「お覚悟なさいませですわよー、羽入さん！！！」

「さぁさぁ!!　部活メンバーの末席を望むなら、それに相応しいかを自ら示してみなッ！！！」

「……は、はいなのです……!!」
「くっくっく！　その手札を右から言うよー!?　A、3、4、7、J、Q!!」
「今更、手で隠したって見え見えですわよー!!」
「あぅあぅあぅあぅ！！」
「ごめんね羽入ちゃん、これがスペードのAだよね……？　あっがりぃ！」
「うわはははは、思い知ったか羽入ぅん!!　入部試験の洗礼を思い知れぇえ!!」
「……みー。圭一は自分の入部試験の恨みが交じりまくりなのです。」
「ほらほら圭ちゃん、そんなこと言ってていいの〜？　羽入、圭ちゃんの右のカードであがれるよ〜。」
「……ぁぅ！　あがりましたのです！」
「おわあああ、きったねえぇぇぇぇ!!　こうなりゃ本気モードで行くぜ！　よくもこの俺を怒らせたなぁあぁ！　羽入、お前、初日の下校からいきなり尻尾付きブルマの首輪付き四つん這いで帰宅したいのかあぁぁあ!!」
「あらあら！　それはむしろ圭一さんにこそ似合いましてよー!!」
「はぅ〜、いいねいいね!!　それをレナがお持ち帰りぃぃいいぃ!!」
「ぼ、僕も圭一に恥ずかしい罰ゲームをしてやりますのです……！」

「くっくっく！　いい提案だね、おじさんはそいつに乗るよ!!」
「なな、何でいつの間にか俺包囲網が完成してるんだよ!!　上等だー!!　てめえら全員、四つん這いで下校させてやるぜえぇぇぇ…!!」
ズギャーン、ドカーン、ドコーン…！
…トランプをどう遊べばそういう音が轟き渡ることになるのか。
勝敗の行方はともかく、古手羽入の初部活は、いつにも増して賑やかなのだった…。

■赤坂と東京

「…ハイ、バンケットより後方〜！　スピーチあと一人で乾杯に入ります。準備できてるねー!?」
「後方OKですー。内部、全然聞こえないんでスピーチが終わるタイミングでコールをお願いしますー！」
「いいかい、各卓にビールは十本ずつだよ！　ちゃんと自分の縄張りにスムーズに運んでね！」
蝶ネクタイをすっきりと着こなした若いホテル従業員たちが、ビールケースから次々とビー

ル瓶を抜き出し、乾杯の準備に備えていた。とても広い会場内には、純白のテーブルクロスをかけられた白いテーブルが何十と並んでいた。それらのテーブルには八人近くが座っているのだから、この空間に数百人にも及ぶ人間がひしめいていることになる。それは大変な熱気だった。テーブルの上にはラップをかけた色とりどりの料理皿が並ぶ。

　寿司や舟盛り、美しい果物皿。また、壁際には料理人たちがまな板を並べ、新鮮な料理を振る舞う準備をしていた。そんなテーブルにつく客人たちは、いずれも身なりの良い老紳士たちで、にじみ出す雰囲気から、それぞれが各界で知られた名士であろうことをうかがわせる。

　そして、天井にぶら下がる巨大で美しいシャンデリアの迫力は、そんな賓客たちを迎えるに十分な格がこのホテルに備わっていることを無言で物語っていた。壇上では、乾杯前のスピーチにしてはあまりに長い大演説を、威厳ある老紳士がまくし立てていた。普通、この手の大演説は嫌われる。乾杯の直前ならなおさらだ。

　だが、客人たちは、時にそうだそうだと叫び、時には大きな拍手がわき、熱気で盛り上がっていた。熱気、というのは好意的な言い方かもしれない。異様な盛り上がり方、という方が恐らく言い得ているだろう。

「大体ですね、日本は無条件降伏を受け入れ、その受託をした日に太平洋戦争は終了したのです。つまり、戦後処理だの撤兵だのがそれからあるにせよ、国際法的にはその日で戦争は終わ

り、戦時は終わって平時に戻ったのです！　ですから、その平時に軍隊を進め日本の国土を侵(おか)したならこれはあなた、侵略ですよ、戦争ですよ⁉　ソ連が如何に煙に巻こうとも、北方四島は日本の領土であり、ソ連による不法占領は明白なのでありますッ‼」

「「「そうだそうだッ‼」」」

「二島返還で決着？　馬鹿言っちゃいけない！　いいですか、歯舞(はぼまい)、色丹(しこたん)、国後(くなしり)、択捉(えとろふ)は日本の領土なんです。それらの総面積は一つの県にも匹敵する。ソ連軍が攻めて来て、県が一つ占領されたらどう思いますか⁉　県の半分を返還して決着？　違うでしょう、全部返還して当然でしょう‼　ところがソ連はしゃあしゃあと居座り既得権を主張している！　冗談じゃない‼　断固徹底抗戦です‼　北方四島は全て一括返還‼　この一点で我が国は揺るぎ無い決意を持たなければならないのであります‼」

万雷(ばんらい)の拍手が会場に溢れ出した。会場の老紳士たちは口々に肯定を連呼(れんこ)し、自らが同じ思いであることをアピールし合っていた。そんな熱気の中、壁際に控える二人だけは冷静で、この会場内ではむしろ浮いて見えた。ぱりっとスーツを着こなす二人は、若者と呼ぶには年季の入った顔つきだったが、会場内の老紳士たちに比べれば、青二才程度の年齢だったに違いない。

「……どうして政治家って、こう右翼化というか、愛国主義というか、…こう、偏るんでしょうね…？」

「簡単なことさ。政治家が一番ほしいのは票だ。票は有権者が投じる。だが二十歳以上が全員投票するわけじゃない。投票率のほとんどは退職して時間にゆとりがあり、その分、政治に関心の高い高齢者が占めている。」

「……となれば、高齢者層をいかに取り込むか、というのが選挙のポイントになるわけですね。」

「戦争があったのは、つい四十年前なんだ。つまり、投票に熱心な高齢者層は全て戦前世代ということになる。」

「うちのお袋、よく空襲（くうしゅう）の話をします。昔は水道橋（すいどうばし）の辺りに住んでて、空襲で家族を全員失って、焼け野原をひとり彷徨（さまよ）った…なんて話をいつも。」

「そうさ。俺たちの親世代は全員、あの戦争を潜ってる。お国のためと信じ、血を流して苦労を強いられてきたんだ。敗戦したが、あの戦争で何かを変えられたからこそ、今の平和を築く礎（いしずえ）になったと信じてる。」

「あー、よく言ってますね。もし日本が戦争を起こさなかったら、アジアは今でも白人の植民地だったとか何とか。…勝てない戦争だったが、必要な戦争だった、みたいなことを今でも言ってますよ。」

「となれば、いくら戦後は平和主義を訴えようとも、戦前日本を蔑ろにして高齢者の票が取れ

るわけがない。戦争はよくない、二度としてはいけない。でも、あの戦争は必要不可欠だった。そう言わなきゃ、彼らの人生の否定になる。」

「…なるほど。政治家も票を取るのに大変なんですね。」

「そういう主義主張も、本心でしてるなら一意見の主張として立派だと思う。だが、彼らの票が欲しくて、表向きだけ調子を合わせてる卑劣な政治家もいる。そういう、戦前の亡霊たちのご機嫌を取って、彼らのおこぼれに与かろうという者が後を絶たない限り、この国の戦後は永遠に終わらないのさ。」

「そうして、戦後の亡霊の遺志は次の世代に受け継がれ、多分、千年経っても相変わらず、二十世紀初頭の戦争について、選挙の度に正義だった遺憾だったと繰り返すんでしょうね。その連鎖から、我が国はいつになったら解放されるんです？」

「簡単さ。若者がちゃんと選挙に行け。そして戦争の話で誤魔化さず、ちゃんと政策を考えてるヤツに投票しろ。実現可能な政策だぞ？」

「あぁ、いますね。明らかに実現不可能な公約を掲げてる候補者っています、ははは。あ、…………赤坂さん、F卓ってあれじゃないですか？」

「あのご婦人だな。…行くぞ。」

壇上の挨拶が終わり、老紳士たちは皆、立ち上がって拍手を送っていた。その中をぬうよう

に二人が、着物姿の老婦人に近付いていった。
「はい？　私ですけれども、どちら様です？」
「…昨日、お電話で約束させていただきました者です。赤坂と申します。」

控え室に移った老婦人は、ハンカチで顔を覆いながら、さめざめと泣いていた。
「……うっうっ…!!　ううぅっ！　ひっく!!　主人はね、ずっとずっと日本のためにと、身を粉にして働いてきたんですのよ…!!　それなのに……、それなのに……！」
「奥さんの胸中、深くお察しします。」
…よくある話だった。献金があった、なかった、記憶にない。それでは話にならぬと証人喚問になり一部の政治家連中が追い詰められた。
その結果、悪巧みの得意な連中が口裏を合わせ、すでに政界から引退していた、とある病弱な老人に全てをなすり付けたのだ。余命はわずからしい。極めて好都合だった。トカゲの尻尾にされた老人はすでに病床にあり、かつては弟分でもあった同僚たちに裏切られたショックも重なって、すでに生きる気力は失っているらしかった。
それを間近で見る婦人は、無念この上なかったに違いない。婦人は、夫のかつての功績を繰り返し口にし、それに対する仕打ちがこれなのかと泣き続けていた。

「ご主人の無実が間違いなければ、必ずや裁判官は正義の判決を下すでしょう。大丈夫です。濡れ衣は必ず晴らせます。」

「……………そんなのはわかっています…！　だって無実なんですから…!!　でもね、判決が出るまで主人は持たないんです…！　お国のためにとあれだけ働いてきて…、こんな気持ちで死ねなんてあんまりじゃないですか…。あれじゃあ、死んでも死にきれません…!!」

赤坂は小さく頷き、同情する言葉を慎重に選んでいた。…その後では、赤坂の後輩が分厚い書類束を漁っている。書類は細やかな字がびっしりと書き込まれ、何が書かれているのか、一見ではわからない。だが、それを見る彼の興奮した眼差しから、ただならぬ重要なことが書かれていることだけは想像できた。

「……赤坂さん、こいつはすごい資料です。金の動きが完全に網羅されてます…。」

今この場で書類を漁るのは不謹慎だと、赤坂は身振りで注意した。

「奥さん…。この他には書類束のようなものはありませんね？」

「……ええ。主人の金庫に入っていた文書はそれで全てです。…どうかそれで、……恩知らずな連中に一泡吹かせてやってください……!!　あれだけ主人に世話になっておきながら……！　ううぅッ!!」

「………奥さん。この文書の内容には、一部、ご主人にとって不利益な内容も含まれています

が、それはご存じですね…？」
「ええ…、それはわかっています。政治はね、綺麗事だけじゃないんです…！　私だって政治家の妻ですのよ…。」
「ご協力を感謝します。この書類は必ず、巨大な不正を暴くために使用します。」
「……ひとつだけ…。ひとつだけよろしいですか…。それを公表するのは、主人が亡くなるまで待ってもらえませんか…。」
本来、赤坂たちが手にしている書類束は、彼女の夫が彼岸まで持って行かなくてはならないものだ。そして、書類の形でこの世に存在していてはならないものでもある…。この書類を外部へ公開するだけでも、彼女の夫の名誉はある程度、汚されてしまうのだ。
赤坂はそれを理解し、小さく頷いて答えた。
「わかりました。誓ってお約束します。」
霞ヶ関から動く巨額の公金。それらは国家の施策のため、下部組織へ交付されてゆく。だが、その中に様々な思惑が入り込み、うまい汁を吸おうと、その公金にストローを突き刺して、蚊のように啜る連中が後を絶たなかった。
自分に利する組織への利益誘導や手厚い保護、過剰な配当。…それを得るために政治家や役人に近付く財界人たちの接近、癒着。それにどこまでも甘える官僚たち。日本の腐敗の構造だ

った。そんな利益誘導の不正なパイプが何本も何本も霞ヶ関からバイパスし、公金を零し続けていた。そのパイプを見つけて潰すことは国益につながるはずである。

…だが、不正な支出が減らせて良かった良かった…では必ず済まないのだ。必ず、パイプに携わった人間への追及が起こり、大きな政変が起こる。政治の闇が、こういった不正支出を追及しない最大の理由は、既得権益を守るだけでなく、波及する政治的打撃を意識していることも少なくない。

早い話が、膿（うみ）を出す痛みに政府が耐えられないということなのだ。暴かれた病巣（びょうそう）が中枢に近ければ近いだけ大きな痛みとなって政府を襲い、それは内閣支持率に跳ね返る。…病巣が中枢に近ければ近いほど、心臓は膨大なダメージを受けるのだ。赤坂たちが今回、極秘捜査している病巣は、心臓に限りなく近く、政権のショック死すら考えられるものだった。

七帝大出身者で構成され、各界要人が多数在籍する某同窓会組織をバックに、莫大な公金漏出が行われているとの情報が寄せられ、長い間、赤坂たちは内偵（ないてい）を続けてきたのである。敵の結束は固かったが、組織長老の一人がトカゲの尻尾切りに遭ったことに婦人が強い不満を持っているとの情報を得て、接触に成功。見事に重要情報の入手に成功したのだった…。

「みんなご苦労さん！　だいぶ外堀が埋まってきたようだね。特に赤坂君が入手した資料は相

当ショッキングなものだよ。ずいぶん苦労したでしょ、お疲れさん！」
「いえ。」
狭い会議室内には所狭しと書類箱が積まれ、汚れたホワイトボードにはびっしりと細かな字が埋められていた。そんな中、捜査官たち数人が、紫煙の立ちこめた狭い会議室内で、膨大な量の資料を睨んでいる。
男たちからはベテランだけが醸し出せるある種の凄みが感じられ、ここにいる男たちが最前線で戦う、経験豊富な中堅捜査官であることは明白だった。そんな席の中に、違和感なく溶け込む赤坂の姿があった。
赤坂衛が現部署へ配属されてすでに短くない年数が経過している。かつて「犬飼大臣孫誘拐事件」の時には、まだ未熟さが感じられるルーキーだった彼も、荒波に揉まれ、幾多の修羅場を潜り、逞しい一線の捜査官に成長していた。
ノックがあってから、上司の風格を感じさせる年配の男が入ってくる。ややだらしなく座っていた彼らは一斉に姿勢を正した。
「室長！　お疲れ様です！」
「お疲れさん！　立たなくていい、楽にしてくれ。諸君に今日は素晴らしいプレゼントを持ってきたぞ。嘉納、お前を息子の授業参観に行かせてやる。」

会議室内に呆れと諦めの入り交じったため息が流れた。…息子の授業参観に行かされるのが嫌だから、なんて理由のわけはない。

「やっぱりなぁ……。そろそろ頃合いだと思ってたんですよ。…クソ！」

赤坂の後輩が愚痴る。強力な資料を得て、一気に核心に斬り込める足場を得たところだったのに…。

だが、赤坂はそれほど動揺してはいなかった。過去にも何度かあったことだし、資料の内容のヤバさから十分、想像できることだった。本件の捜査は、突然、別の部門に移管されることとなった。つまり、この捜査はここでおしまい、ということである。移管先が引き続き不正を暴くことになるのだが、…暴かれたためしは一度たりともない。

移管というのは表向き。つまりこれは、天から圧力が掛かり、捜査中止になったということなのだから。

「くそったれ！　私たちが今日まで捜査してきたのは何のためだったんでしょうかね。」

「……膿を出す痛みがどの程度か測るためだろうな。その結果、痛みに耐えられない規模だということがわかり、荒療治を断念した、ってことだろう。」

その意味では、彼らの仕事は決して無駄だったわけではない。彼らの仕事ゆえに、この中止が決まったのだ。赤坂はそれを理解していたが、後輩はそれを理解するにはまだ少々、年季が

足りないようだった。無論、赤坂の正義心はこんな中止を喜びたいはずもない。不正を暴き、それを摘出することに躊躇する上層部に苛立ちを覚えないはずはなかった。

…だが、それを口に出して苛立つほど、彼はもう若造ではなかったということだ。

「資料の整理と引き継ぎについては、今後向こうと調整していく。とりあえず、みんな長く休んでないだろう。五時を待たなくていいぞ、引き上げて体を休めてくれ。残務整理は明日話し合い、あと振り替え休暇の消化をしよう。ちゃんと消化してかみさん孝行しろよ！　主査は俺と来てくれ。以上だ！」

「「うおっす!!」」

　こうして、長かった秘密捜査は実に後味の悪い形で終わりを告げ、赤坂は次なるキナ臭い仕事が訪れるまで休暇を得ることになるのだった。

「…じゃあ、室長のお言葉に甘えますかね。みんな、今日は早く帰って休みなー。」

「こーゆう時、早帰りすると不倫の現場に出くわしたりしちゃうんですよね～！」

「馬鹿だな、お前知らないだろ。赤坂さんとこは熱愛夫婦だぞ？　毎晩、別棟の公衆電話からラブコール掛けてるの知らないのかよ。」

「赤坂んところはいいよなぁ。うちの女房なんて、そりゃあ素っ気ないもんだよ。たははは。」

　赤坂は適当に苦笑いを返しながら、手元の資料を揃える。

…その時、はらりと書類が一枚こぼれ、床に落ちた。膨大な不正支出の資料の一ページだった。防衛庁内に設けられた、次世代戦略研究会、通称アルファベットプロジェクトと称するものの不正支出を暴いたものだった。このプロジェクトそのものが不正支出のトンネルのために作られたものである可能性が高い…。その一枚を拾った赤坂は、そこにひしめく文字の中に、引っかかるものを感じた。

それを拾い上げてまじまじと見、…記憶を辿る。この資料は公金の零れ先の一覧だ。老いてなお金銭欲旺盛な官僚OBたちが巣くう天下り先の一覧でもある。

……そんな連中と赤坂に縁があろうはずがない。にもかかわらず、たったひとつ、そこだけが記憶に引っかかった。

「…………………入江、診療所。」

……………………。口に出した瞬間、記憶がぶわっと蘇った…。そう。入江診療所だ。

かつて「犬飼大臣孫誘拐事件」で、雛見沢を訪れた時、誘拐犯たちと乱闘になり、負傷して診療所に担ぎ込まれたのだ。

その診療所の名前が確か、入江診療所だったはず……。次々と溢れるようにあの日のことが思い出される。自分が初めて潜った修羅場の経験。それは鮮烈な記憶となって焼き付いていたようで、当時のことをありありと思い出すことが出来た。娘の出産日に重なる出張で、雛見沢

に行くのが非常に嫌だったっけ。そして大石氏に出会い、とても貴重な勉強をさせてもらった。……そうだ。そして私はあの村で、一人の少女に出会ったんだっけ。名前は、……そう。古手梨花。そうだそうだ、思い出した。あれから何年経っただろう。彼女は今、いくつくらいになっているだろうか。だが、愛くるしい笑顔を思い出すと同時に、彼女にされた不吉な予言のことも思い出す。彼女は私に、東京へ帰らねば不吉なことが起こると予言した。…その時、私はなぜか、それは少女の世迷い言などではなく、何か神懸かったものを感じたのだ。

そして、不吉な何かを考えた時、出産を控えた雪絵のことが浮かんだ。……何か雪絵に不吉なことが起こるのではないかと。だが、仕事を放り出して東京へ戻るわけにも行かない。

だから私はすぐに雪絵に電話したんだ。君に何かが起こる。だから、自分が東京に戻るまで身の回りに気をつけてほしいと。雪絵は心配性だと笑ったが、…………その電話は確実に雪絵を何かの災厄から救ったのだ。後日、東京に帰って産後に容態の安定しない雪絵を見舞った時、私はそれを知った。

……私が電話をした日の後日。屋上へ上る階段で、タイルの剥離による転倒事故があって、清掃員が大怪我をしたと聞いたからだ。しかも聞けば、雪絵には毎日、屋上へ散歩に行く習慣があったと言い、私からの電話を境にそれを一時、控えていたと言うのだ。…私が電話をしなかったら、事故の原因である剥離タイルを踏んでいたのは雪絵だったかもしれない……。つ

まり、……古手梨花の予言は当たっていたのだ。
根拠は何もない。でも、私は彼女の予言によって救えたと、そう信じている。……思えば、私はあの時点ですぐに彼女に連絡を取り、雪絵を救ってくれたことを感謝すべきだったのだ。だが、すぐに訪れた多忙な日々は、それを長いこと忘れさせてしまっていた…。
…梨花ちゃんか。……今も変わらず元気でいて、その愛くるしい笑顔を振りまいてくれているのだろうか。その笑顔と一緒に、……最後の晩に会ったとき、彼女が月を背負いながら語った物悲しい予言も思い出す。そうだ。…彼女は言っていた。
毎年、祭りの晩に誰かが殺され、……そして五年目には自分が殺されると予言していなかっただろうか…？　そうだ、確かに言っていた。あれから五年目って、……そうだ、今年じゃないか…？　祭りの日は確か…、そうだ、毎年六月だったはず。記憶が正しければ……、月末頃の日曜日にやっていたはずだ。カレンダーを見る。昭和五十八年六月。
……日にちに多少の余裕があるとは言え、彼女の予言した自らの死期はすぐそこに迫っていた。………雪絵の事故を予言できた彼女は、その後、五年続く奇怪な事件も予言していた。それらがもしもことごとく当たっていたなら、…それはきっと今年も当たる。大石氏は今でも興宮署にいるだろうか。彼女の予言する事件が毎年起こっているなら、それは必ず耳に入っているはず。

……つまり、大石氏に電話を一本掛けるだけで、古手梨花が本当に殺されるのかどうかを確認できるのだ。かつて、自分が殺されると予言した少女は最後に、死にたくないと私に呟いた。

……呟いた…？　違う。それは明白な救いの求めだ。

底の見えぬ奇怪な因習に囚われた村から逃れられない少女が、外の世界から来た私に助けを求めたのだ。

……その代償は先払いで支払われている。雪絵の事故を予言するという形で。私は救いに駆けつけなければならない。彼女の下へ。…………何か、万感の思いが込み上げるのを感じる。

…忘れてはいけないことを、ようやく思い出せたような、そんな気持ち。

そうだ。……私は、……雛見沢に行かなくてはならない。私に助けを求めた少女の下へ、駆けつけなければならない。

「はい、興宮署でございます。」

掛けた時間が終業間際だったせいだろうか。少し不機嫌な声で受話器の向こうの男は応えた。

「すみません、そちらの捜査課に、現在も大石蔵人氏は在籍されておりますでしょうか？　もしもいらっしゃったならお願いしたいのですが。」

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「警視庁の赤坂とお伝えください。」
元気な人だったが、見掛けより高齢だった。ひょっとすると異動しているかもしれないし、退職しているかもしれない。…でも、もしもまだいてくれるなら、きっと飛び切り元気な声を聞かせてくれるに違いないのだ。
…そう言えば、ずいぶん特徴的な笑い方をする人だったっけ。
「大石さん～！　外線からお電話です。東京の警視庁からですよ。」
「東京？　そりゃまた遠くから遥々どちら様ですかね。はいもしもし、大石です。………え？　こりゃあ懐かしい！　どうです、お元気にしてましたかッ!!　なっはっはっは!!」

■羽入とみんな

もう、羽入はすっかり俺たちの輪の中に馴染んでいた。梨花ちゃんや沙都子たちに歳が近いせいか、特によく溶け込んでいるようだった。もちろん、レナだって放置しないし、魅音だって新しい友人を放っておかない。…以前、レナが俺に話してくれたことを思い出す。
羽入が、実は割と近くにいて、いつも俺たちに加わりたくてじっと見ていた、という話。
……俺はやっぱり、どうしても羽入の顔を見かけたことはないのだけど…。……でも、彼女が

俺たちの輪に加わりたかったのかもしれないというのは、不思議と納得出来た。

俺が最初、面食らったはずの様々なことを、羽入は初めから知っていたかのように受け入れるのだ。どんな厳しい部活の掟も、日が暮れるのも忘れてしまうような楽しい時間も、全て全てよく知っていて、…ようやくそれに交じることが出来た喜びを噛み締めているように見える。

「……羽入もすっかり、ボクたちの仲間に溶け込みましたのです。」

神社の境内裏で楽しそうにみんなとはしゃぐ羽入を見て、梨花ちゃんが微笑ましそうに言った。

「だなぁ。何だか、ずっと前からそうだったように感じるよ。そんなはずはないのにな。」

「……そんなことありませんです。ずっとボクたちの側にいましたですよ。」

「あれ、梨花ちゃんもそんなこと言うんだな。…レナも言ってたよ。俺だけが気付いてなかったのかなぁ。」

「……圭一は鈍感だから、きっと気付かなかったに違いないのです。み～☆」

「ちぇ。どうせ俺は鈍感ですよーだ。」

「あぅあぅあぅ。梨花と圭一が座り込んでいますのです。疲れましたですか？」

「……羽入が疲れ知らずなだけなのです。ボクたちは遊びすぎてヘトヘトなのですよ。」

「だって、僕はずっとずっとみんなと一緒に遊びたかったから、これくらいでは遊び足りないのです。もっともっと遊びますですよ。あぅあぅあぅ☆」

「ははは、元気だなぁ。……ところで羽入さ、その頭のそれ。遊んでて落ちちゃわないのか？」
「…………あぅ？」
羽入が頭の角を押さえる。
彼女なりのアクセサリーみたいなものだと思ってたので、激しく遊んでいて落としたら気の毒だろうと思い、預かってやろうと思ったのだ。だが、羽入は角を押さえたまま、申し訳なさそうに表情を曇らせる。
「……圭一。羽入のは取れませんのです。」
「え？　あ、そうなのか…？　あはは、変なこと言ってごめん。」
「……あぅ……やっぱり、…角なんかがあると、…おかしいでしょうか。」
「あはははは、おかしくなんかないよ、キュートで可愛いよぅ。」
「そうそう！　圭ちゃんなんか股間に角が生えてるしねぇ？　硬くて反り返ったのが、ぐえッ!?」
「は、はぅ!!　股間の角って何だろ、何だろ…！」
ぐぱぐぺ、ぽきゃぶぎゃ！　不可視の速度で魅音の顔面にレナの拳が、山盛り一杯ブチ込まれる。……ま、微笑ましい、いつもの光景だ。
「……相変わらずレナさんのパンチだけは見切れませんわね。大丈夫ですの魅音さん。顔面が

へこんでますわよ。」
みんなで楽しそうに笑ったが、羽入だけが曖昧な顔で笑い損ねていた。…多分、俺が失言してしまったんだと思う。彼女は多分、角のことを言われるのがあまり好きじゃなかったのだ。
でも多分、変に謝ろうとするとかえってこじらせてしまいそうだし…。
何と言えばいいのか窮していたら、レナが続きを遊ぼうと彼女らを誘い、再び鳥居の方へ戻っていった。

「……気にしなくていいのですよ圭一。…羽入も、気にしないようにしているのですが、まだ修行が足りないということなのです。みー。」
「やっぱ気にしてたんだな。すまん、これからは気をつけるぜ。」
「……羽入は大昔に、この雛見沢にやってきました。」
「あ、やっぱりそうだったんだ？　だよな、村の中のこと、転校生にしちゃずいぶん詳しかったしな。」
「…………羽入が、雛見沢に住む前、どこに住んでいたのかはよく知りません。」
…私は、かつて羽入が教えてくれた昔の話を思い出す。……かつて彼女がここに来る前に住んでいたという〝場所〟。

教えてはもらったけど、…私には理解出来ないところとしか、言い様がない。
そこに、羽入は、……いや、羽入の一族はそれ以上、住めなくなったのだという。そして、自分たちの住める場所を求めて、長い長い時間をかけて旅をして、……この地にやってきたのだという。
そこは美しく澄んだ沼で、羽入たちにとって求めて止まなかった目的の地でもあった。…でも、その地はすでに村になっていて、……先住の村人たちが住んでいた。
先住民を敬うのは羽入たち流浪の民の唯一の掟。羽入たちの一族は、村人たちと平和に共存することを選んだ。だが、……共存はうまく行かなかった。村人たちは、新しい共存者を受け入れるにはまだ未熟で、幼くて。……それらを強く強く拒絶したため、………悲しく、無惨な事態を引き起こしてしまった…。羽入は、それを治めるために、彼らの姿を模してこの地に降臨したという。
しかし、どういうわけか角だけが隠せなくて。今日の羽入の姿で古手神社に降臨したと、禁じられた古文書は伝える。羽入たち流浪の民は、この村以外では生きていけないこと。そして村人との共存でしか生きていけないことを訴えた。
古手神社の神主は、流浪の民が血に混じることにより、村人たちが鬼に駆られてしまうならば、それは共存にあらずと、一度はそれを拒否した。だが、…古手神社の若き跡取りが羽入を

見初め、子宝を授かるに至り、神主は再考を迫られることになる。角を隠せぬ流浪の民たちよ、この地に留まりこの血に留まるのが願いならば、それを叶えることも考えよう。

だが、鬼の血に侵された村人たちは、人であるか鬼であるかの見分けも付かず、村人たちは互いに互いを疑い合い、疑心暗鬼に取り憑かれてしまった。

　まずはそれを払ってくれぬことには、共存の道も開かれぬ。……私たちとあなたたちが共存するには、いくつか守らなければならない掟を設けなければなりません。それはとても厳しく、今まで平和に暮らしてきたあなた方に強いるのはとてもとても申し訳なく思います。ですが、それら掟を守って下されば、村は鬼の災禍から解放されるでしょう。良かろう、その掟を守ろうぞ。…しかし、村はすでに多くの血を流してしまった。人々の怒りや罪、穢れが祓えない。

　人の世では、罪は命で償うのが唯一の掟なのだ。なるほど。あなたたちの世界では、誰かに責任を全て負わせ、その人ごと罪を葬るのが流儀というならば、それに従いましょう。しかしそれでは、命惜しさに誰もが罪を否定し、永遠に罪の押し付け合いにはなりますまいか…？

……左様。それこそが人の世の醜き鬼なり。

…誰もが自らの罪を認めず、互いに罪を押し付けあう。自らの命でしか清算できないから、誰もが清算を拒み、罪だけがただただ積もっていく。清算されることなく、澱み、いつまでも押し付けあって、人同士が疑りあい、押し付け合い…。なるほど、それがこの世界の抗えぬ掟

であり、あなた方を悩ませる掟でもあるならば、私は共存の引き換えに、人が罪を押し付けあわぬ世界を授けましょう。……それはどのような世界なのか。人の世である限り、必ず罪が起こり、穢れが生まれる。それを誰にも押し付けずに消し去ることができるというのか。人より生まれ出でる罪と穢れを、全て私に負わせなさい。そして私の存在を祓いなさい。

　全ての罪は人に在らず。我が身に負わせれば、人同士が罪を押し付けあうことはありません。何と言われるか。…それでは、あなたが人柱になられると仰るのか。誰かが罪を負わねば清算できない、あなた方の世の掟にも沿うというもの。……別の古文書はこうも伝える。

…無論、これも禁書だ。御三家はおろか、古手家当主以外は触れることも許されない。人心乱れ、村人たちの悪しき心が沼に溜まり、そこより鬼たちが湧き出したと。古手神社神主は、人心を惑わす諸悪の根源は、沼より現れし鬼神（オニガミ）にありと説き、村の若者たちを引き連れて、沼を目指した。沼の畔(ほとり)には、人心の乱れを嘲笑う鬼神の姿があり、若者たちは勇敢に戦いを挑み、傷つきながらもこれを打ち据え、召し捕らえて古手神社に引き立てた。神主は、鬼神を祓い、その腹を割いて腸を引き出し、千切って沢に流し、遺骸(いがい)は沼に沈めて葬ったという。

　するとたちどころに人心の乱れは収まり、互いに疑いあい蔑みあっていた人々は互いに手を取り合って、訪れた平和を喜び合ったという。………つまり、禁じられた古文書が真実なら。

私たち村人の信仰の対象であるオヤシロさまは、……私たち村人の手で捕らえられ、全ての罪を負わされ、裂き殺されたのだ。しかも、鬼たちが現れるのは、人心が乱れた後、とはっきり書いてある。

つまり、……鬼たちは、自分たちが現れる前からあった人の不和の罪を、背負わされているのだ。オヤシロさまとは、人に代わって罪を背負い、人と人の争いを赦す神。

それが、やがて敬われるようになり、オヤシロさま信仰の祖となったと伝えている。……私には、それらが何を意味するのかわからないけれど。…でもひとつだけわかることがある。それは、私たち人間が、誰にも引けぬ貧乏くじを、代わりに引いてくれる存在だったということ。

その証拠に、…今日の綿流しがそうであるように、私たちは体に染み付いた穢れを、綿に押し付け、それを沢に流すことで禊としている。その過程には、醜さも、罪の押し付け合いも何もない。そのシステムが生まれるまで、私たちは穢れと責任を人間の間で押し付けあう鬼であったということだ。誰かのせいにし、誰かを生贄にし、誰かの腹を裂くことでしか、起こってしまった罪を清算出来なかったのだ。

だが、それを人ではなく、羽入が背負った。人の命を用いない、禊。人の罪を、赦せるシステム。人の罪を人に求めず、祟りに求める、オヤシロさま信仰の原点。これらの書物は深く深く封印された。

でなければ、…私たちが祀るべき対象は、実は自分たちが全ての罪を押し付けて葬っていたのだということが、わかってしまうから。……羽入は、謝る。人の罪を、常に自分が引き受けて、謝り続ける。

人が、自身の罪に耐えかねた時、その罪を引き受けてくれる。

羽入が罪を引き受けてくれることで、人の罪は祓われ、人は生きることを赦される。

……鬼が、全ての罪を、自らが綿となって吸い取り、……退治されて沢に流され、村は許される。人自身が生み出した罪から。それが本当なら、…羽入は、いや、オヤシロさまとは何という悲しい存在なのか。そう羽入に言ったことがある。

そうしたら、羽入はどこかで聞いたことがあるような、こんな話をしてくれた。

……雪山の小屋に四人が閉じ込められ、小屋の四隅に座って伝言ゲームをしたという、割と有名な話だ。そこは極寒の山小屋だ。彼らはそのままでは眠ってしまう。眠れば死んでしまう。だから、誰かがこう提案した。自分たちは四隅に座っているから、まず最初の一人が、時計回りに次の隅へ歩いていき、その隅にいる男を起こす。

起こした男はそこに座り、起こされた男は立ち上がって次の隅へ時計回りに歩き、そこの男を起こして交代する。

…これをぐるぐると繰り返せば、朝まで誰も眠りこけずに済むはずだ、という話。この話の

オチを知っている人には説明は不要だろうが、……この方法は四人では成立しない。一番最初に立ち上がって歩いた男の隅は空白になる。

だから、ぐるっと回って一周したら、四人目の男が次の隅に行った時、そこは空白になってる。…そしてそこで座り込み、眠ってしまうから、そこでこの伝言ゲームは途絶えて、全員は凍死してしまう。つまり、四人では足りない。もう一人がいないと、彼らは救われないのだ。

この話は怪談として語られることが多い。

…彼らは実は五人のパーティで、一人がすでに凍死していて、彼の霊がこのゲームに加わってくれたから、彼らは朝まで伝言ゲームを続けられたのだ、というオチになることが多い。

……羽入は、自分はこの五人目みたいなものです、と私に言ったことがある。自分が一人、人間の輪に加わることで、円滑に全てを回すことが出来たなら。

それは、この山小屋の伝言ゲームが、ぐるぐると回って成立するというたとえに、とてもよく合っている気がした。人間だけでは成立できない輪の隙間に、羽入のような存在が入ることで、人間の輪を成立させる。……そうすることで、全ての人は温和に暮らすことが出来る。

それを成立させる、…途切れた輪を埋める存在。……彼女が角を気にするのは、自分が鬼と呼ばれ全ての罪を背負い、成敗された時の記憶が蘇るからなのか。角の生えた存在は迫害すべき存在だという無意識が、未だ彼女をちくちくと苛むのか。

「……あの角は、生まれつきです。それを忌み嫌われ、苛められたこともありましたのです。」
「そ、…そうなのか⁉ …そりゃますます悪いことを言っちまったな…。」
「そして、……羽入は、その角があるがゆえに、全ての罪を引き受け、清算するというとてもとても大きなお役目を引き受け、…全うし、………神と崇められたのです。」
「へ？　神？？」
「……ボクの独り言なのです。忘れて大丈夫なのですよ。」
「？？？」
羽入が何者なのか、…私ですらわからない。
彼女が、人の世よりはるかに高い次元から降臨した神々しい存在なのか。
それとも、…生まれつき角が生えていただけの理由で、生贄にされてしまった不遇の少女だったのか。わからない。でも、その少女の血は、古手家の血に混じり、私にまで代々受け継がれたのだ。……古手家に、八代続けて第一子に女子が恵まれれば、それはオヤシロさまの生まれ変わりであるという伝説。
これが何を意味するのか、私にもよくわからない。私がその八代目に当り、……そして、私にしか羽入が見えなかったという事実は何を物語るのか。八代以上も経る気の遠くなるような時間。……それは多分、羽入が引き受けた罪や穢れが、清められるのに必要な時間だったので

はないだろうか。八は末広がり。とても縁起のいい数字。

呪い文句のひとつに、七代祟ってやるというのがあるが、八代はそれを超える。……つまり、七代にも及ぶ遠大な罪や呪いをも許す、縁起のいい数字なのだ。それは呪いの数字。…羽入が人間に代わって背負ってくれた罪を祓うために、必要な時間。……羽入たちの願いは、共存だった。なのに、そのために人柱となり、羽入ひとりだけが、穢れと共に腹を裂かれ沢に流され、沼にて沈(鎮)められた。

だから、………古手家はずっとずっと、待っていたのだ。気が遠くなるような時間の中で、羽入が抱いて眠ってくれた罪が祓われて、……再び帰ってきてくれるのを、伝承に残し、ずっとずっと待っていたのだ。だって、…古手家という名は、伝承が伝えるなら、占い手の「占」の一字に、鬼の角を加えたから「古」という文字になったというじゃないか。古手家は、羽入の血を混じらせた時に興ったのだ。羽入こそが、古手家の祖であり、………私たち全ての母なのだ。幼い頃、羽入は私に、母が教えてくれるよりも多くを教えてくれた。

…それもそのはず。私は、だって、…羽入の子孫なのだから。自らを生んだ母を、忌み、葬った一族の呪いが、…八代かけて贖われ、無限とも思えた時間にかけられた呪いを解く。

そして、……古手家が絶えようという最後の代になって、その末裔の私と対面したのだ。

それを考える時、……私に課せられたこの数奇な運命が、何か大切な意味があるのではない

かと感じる時がある。私の運命を閉ざす障害を打ち破る試練は、……羽入と古手家の、千年以上にも及ぶかもしれない呪いに、……どんな意味を持つのか。…もっとも、その願いや思いを正しく伝えるには、千年の時は長すぎたということだ。

羽入の存在はオヤシロさまという祟り神になり、…全てを許す存在は、いつの間にか全てを縛る存在に変えられていた。

共存のためのルールが、村人を縛るルールに曲解され、明治に至るまでそれに縛られ続けた。そして、再び、ダム戦争をきっかけに歩み始めた閉鎖と誤解への風向きの中、……羽入と私が出会い、この数奇な運命に閉ざしたことにはどんな意味があるのか。

…………それを理解するには、私という人生はあまりに短すぎて……。

ひとつ言えるのは、……羽入の血が混じって始まった古手家が、最後の代で、祖と再び廻り合えたということ。

古手の血は、母に人の罪すべてを背負わせ葬った呪いの歴史。その始まりと、終わりが、出会う…。

みんなの輪に、ずっと加わりたかった羽入。でも、どうしても隠せなかった角。それでも、欠けた輪を補う存在でありたいと願う彼女。

親を葬るは子の務め。しかし母上。子が親を殺し葬らなければならぬとは聞いたことがありませぬ。

聞くな、子よ。我は人にあらず。角を持つは鬼の証。鬼の役目は人の世の災厄を背負うことよ。ならば我は、乱れし世の災厄を引き受け、人心の乱れをその身で祓うのがその使命。

なぜ人の世の罪が、母上ひとりに背負わされなければなりませぬか。人の罪は、人の罪。母上の罪ではありませぬ。

聞け、我が子よ。人は罪に溺(おぼ)れながら生きていく。それを誰かに押し付けねば生きてゆけぬ。その押し付けられる一人になりたくないから、互いに罪を押し付けあう。それこそが鬼、人の世を乱す、真の鬼。我がそれを背負い、人が祓うことで、人は人を疑い争う宿命から解放される。

全ての罪と穢れを、業と呪いを我が身に。そして我を討ち、祓い、沢に流し、沼に沈めなさい。それは人の身であってはならぬ。人の身でない者が引き受ける宿命。人の身

に負わせるようなことがあっては、人は疑心の鬼から解放されぬのだ。

わかりませぬ。わかりませぬ母上。母上には確かに隠せぬ角が。しかしながら、角があるだけで人ではないと申されますか。人であっても、角があればそうではないと申されますか。母上に角があろうとも、私にとって母は人以外の何者でもありませぬ。

我が子よ、お前だけがそう言ってくれる…。皆が私を＊＊＊、＊＊＊と罵ろうとも、お前だけが私を人だと言ってくれる…。

……祭具殿の祭壇に奉納され、他御三家の当主たちには存在も知られていない、古手家の数々の禁書は、何を伝えるのか。それを理解するには、…私が繰り返してきた時間に及ぶほどの遠く長い時間が必要だろう。

………そして、それを理解したならば、…無邪気にみんなに交じって遊ぶ羽入の笑顔が、もっとよく理解出来るのかもしれない…。

「あああああ！！！　だ、大丈夫⁉」

魅音の素っ頓狂な声が聞こえてきた。何かアクシデントが起こったことが、声色からわかる。
「な、何だ何だ、どうしたんだ！」
「羽入さんが、そこでふざけてて転んで、斜面を転げ落ちていったんですわ…!!」
「羽入ちゃ――ん!! 大丈夫〜〜!?」
「綺麗に転がってったけど…、捻挫とかしてないかな！ 行こう行こう!!」
羽入は斜面で遊んでいて、そこを転がり落ちていってしまったらしい。このすぐ下には道路がある。魅音たちがそこへ行く階段を駆け下りていく。とにかく行ってみよう。怪我をしてないといいいんだが…！ 駆け下りていくと、そこには富竹さんと鷹野さんがいて、羽入を介抱してくれているところだった。
「これはどういうことなんだい!? 急に彼女が転がり落ちてきてね！」
「ずいぶん綺麗に転がってきたわね、くすくす。でも頭をゴチンとやってしまったみたいだから、あとでコブになってしまうかもね。よく冷やしておいた方がいいわよ。」
「……羽入、羽入！」
「私たちの声が聞こえます!? ほら、指は何本に見えますの――!?」
「……あぅ……あぅ…。」
ちょっと朦朧とした感じの声だったが、捻挫したとか骨折したとかそういうことはないよう

だった。
　俺たちはほっと胸を撫で下ろす。多分、ごろごろとだいぶ転げたので、目が回ってしまっているのだろう。
「はぅ、でもよかったね。怪我がなくて。」
「いやはや！　しかし、転がってった先に看護婦さんがいてくれたなんて、出来すぎだねぇ。」
「あら、非番の時の私は、野鳥撮影家なのよ？　ねぇジロウさん。」
「ま、まぁねぇ、そういうことさ！　わっはっはっはっは！」
「まぁ、雛見沢っ子なら、このくらいで怪我は出来ねぇよな！　羽入も、もう立派な雛見沢の仲間ってことだぜ。」
「羽入ちゃん、って言うの？　見掛けない子ね。新しいお友達？」
「えぇ、そうですわよ。月曜日に転校してきたばかりなんですのよ。」
「コレ、…何？　変わってるわね。玩具？」
　鷹野さんが、羽入の角をぐいぐいと押すような仕草をする。……確かに、アクセサリーとしては変わってると思うだろうなぁ。
「あはははは、それは羽入ちゃんのチャームポイントなので、取っちゃ駄目なんです。」
「あらそうなの？　私はあまり可愛くないと思うんだけど。…だってほら、

バケモノ

みたいじゃない？」

「…………………ッ……！」

突然、羽入が息を詰まらせたみたいな感じで呻いた。

「……鷹野。羽入はバケモノじゃありませんです。二度と言ったら許さないのです。」

「そうだよ鷹野さん、人の趣味に、…悪いよ。」

「くす。ごめんなさいね、決してそんなつもりはなかったんだけど。」

…梨花ちゃんの言い方が少しきつかった。多分、羽入にとって、それはとても傷つくキーワードに違いない。

鷹野さんはたまに、悪意はなくとも貶すような言い方をする。でも、言っていいことと悪いことがある、ってことだろうな。羽入は、何だか複雑そうな顔で鷹野さんを見ていた。
その表情を見て、傷つけてしまったかもしれないことに気付き、鷹野さんは軽く謝ると、富竹さんと共にその場を去ってくれた。
「……大丈夫？　羽入？　綺麗に転げ落ちたから大して怪我はないそうです。」
「…………………梨花、………今の人、……あぅ…………あぅ。」
「……今の人？　鷹野ですよ。」
「…………鷹野。…………鷹野…。」
羽入が鷹野さんの名前をうわ言のように繰り返す。…頭の妙なところを打ったとかいうことはないだろうか、急に不安になる。突然、羽入はがばっと跳ね上がり、梨花ちゃんの襟首を揺するように摑んだ。
「り、……梨花…!!　あぅあぅあぅ！！！　鷹野です、鷹野！　鷹野！！！」
「……そうですよ？　鷹野ですよ？」
「ち、……違う、梨花！！！　鷹野です、鷹野！！！　覚えてないのですかッ!?」
「……知ってるわよ。鷹野三四でしょう？　入江診療所の。」
「…思い、……出せないのですか…………。」

「……ごめん、羽入。何の話…？」

「…………り、…………梨花…………。…………そんな…………。」

……最後の、……最後なのに……。

生きながら腹を裂かれる苦痛に耐え、ようやく焼き付けた真の敵の名前なのに……ッ!!

……それを……覚えられなかったなんて…………。

古手梨花は、…カケラの記憶の継承に、失敗した。


赤坂衛

赤坂再び

「ぬおぉおおおぉおぉ、赤坂さあぁぁん!! ご無沙汰しておりますよ～～！！！」
「大石さん！　その後もお変わりなく！」
「んっふっふっふ！　お変わりなくなんてひどいですなぁ！　最近、リンゴダイエットってのを始めましてね？　ちょいと体重が絞れてきたつもりだったんですがねぇ！　そういう赤坂さんは、こりゃまた見違えるくらいに逞しくなったじゃないですか！」
「この程度には鍛えてないと、体が持ちませんので。」
「あれ、蔵ちゃん。その人、あの人かい？　何年か前にウチにきた東京の公安の！」
「本田屋(ほんだや)さん、ご無沙汰しております。その節はお世話になりました。」
「あんた、ずいぶんとまぁ立派に成長しちゃったじゃないですか。かぁ～、若いっていいねぇ!!」
「さささささ、せっかく来てくれたんです。もうお店に行っちゃいましょう！　馴染みの店ですから、のれん前でも入れてくれるでしょう。さぁさぁ行きましょう！」
「大石さん、い、いいんですか？　まだ勤務時間中じゃないんですか!?」

「何言ってんですか！　東京本庁からいらっしゃられた特命刑事との特別研修ですよ！　さぁさぁ行きましょう‼　あぁ、ちょいと先に電話してきます。赤坂さんに比べたら鴨(カモ)ネギみたいな連中ですがね？　ちょいと面子(メンツ)を揃えまして！　あー、いいところに！　熊(くま)ちゃぁあん‼
今夜、バチッ！とポンチーしに行きませんか！」
「お、大石さん、…本当に変わっておられませんね…、ははははは。」
当時の赤坂は、大石のこういうフランクさを不真面目に思い嫌っていたが、…社会経験を積み、そのような先入観はすっかり払拭されていた。数々の経験に鍛え抜かれた上で、今日の彼を形成しているのだ。肩肘(かたひじ)を張って愚直に正面からぶつかるばかりが刑事ではない。むしろ、フランクな方が世の中うまく行くことだって多い。
…赤坂の場合、むしろ肩の力を抜けとよく諭されるくらいだ。ただし、大石の場合はもう少し襟を正してくれてもいいだろうが。
「ささ！　赤坂さん、行きましょう‼」
「えぇ、参りましょう！」
「うん、いい返事です。だいぶベテランの余裕が出来てきました。そうでなくっちゃ！」
これもまた、かつての赤坂なら、それを小馬鹿にされたと受け取ったろうが、今の赤坂には、ベテランの大先輩からの素直な評価だと受け取ることが出来た。

「赤坂さんもずいぶん強くなりましたねぇ。何だか、お酒じゃあ勝てない気がしてきましたよ。いやぁ、老いると酒に弱くなるってのは本当ですなぁ…！」

「ご謙遜を。それに私が強いのは、情報収集がゲコでは務まらないからです。ちゃんと予算を切って、常に若手と特訓してますから。日本酒洋酒紹興酒！　のれんを潜ることもあれば、ミラーボールのお店の時もありますよ。」

「なっはっはっはっは!!　そりゃあいいそりゃあいい！　今度ぜひ私もコーチに参りますよ！」

「ええ、ぜひ教授してやってください。最近の若いのは、自分は生まれつき飲めないとか、ヒヨったことばかり言ってますよ。私だって最初は全然駄目でしたがね。酒は飲めば飲むほどに強くなり、ますますに旨味がわかるようになるんです！」

「そうですそうです！！！　聞いてますか熊ちゃぁん？」

「め、面目ないっす…。これでもだいぶ強くなったんですよー。」

「わっはっはっは!!　そうだのぅ。大石と組まされたばかりの頃はお前、乾杯からウーロン茶だったからのぅ！」

「それはいけない！　乾杯は重要な意味があるんです。そこでアルコールを飲まないというのは、自分はこの飲み会に不服があるって言ってるようなもんなんです。だから私はそんなこと

する若手どもにはきっちり指導してますよ！　一気飲みしろって言ってんじゃない！　とにかく最初の一杯だけは中ジョッキ!!」

　かつて興宮を訪れた赤坂は、かちんかちんに緊張していた。だが、今の赤坂にそんな様子はない。

　……その余裕こそ、叩き上げで培われたものなのだ。それを大石は感じていた。

「なっはっはっはっは!!　いよッ、赤坂さんかっこいい！！！　いやぁもう、本当に頼もしくなっちゃいましたねぇ！　私にとっては定年までの残り数年でしかなかった間に、赤坂さんはこれほどたくましく成長したんですから。いやいや、老兵は去るべきだと痛感します。」

「そんなことはないです！　私も、嫌になるくらい経験が物を言う世界というのを勉強しました。力仕事や現場仕事なんかは私たち若造に任せて、大石さんのようなベテランには、ぜひデスクで胸を張って扱き使ってもらいたいもんです！」

「ですってよぉおぉおぉ、聞いてますか熊ちゃあああん！！！」

「い、いてててて、すんませんすんません！！！　頑張るっすー!!」

「わっはははは！　大石、熊谷(くまがい)くんもがんばっちょるぞぃ。面倒臭がりのお前さんに代わってよくマメに歩きまわっとる！」

「大石さんは滅茶苦茶な人でしょう。私が大石さんと組んだのはほんの数日間だったんですが、

あなたの気持ちもよくわかりますよ。でもね、大石さんがきっとあなたを鍛えてくれますから。最後まで信じて付いて行ってください。」

「わ、わかりました！　頑張るっす!!　でも、お酒は鍛えられても麻雀までは無理っすよぉぉ!!　カミさんに給料渡す前に大石さんに取られるんですー!!」

「いいや、麻雀も経験なんです！　打った場数が強さと自信になるんですよ！　後でご一緒しましょう、まずは負けない打ち方を伝授します！」

「…大石、いい若者だのぅ。お前さんが無茶やってた頃にちょっとだけ似とるの！」

「まさかまさか！　私ゃこんな二枚目じゃありませんでしたから。んっふっふっふっふ！」

大石をよく知る者にとって、彼がこんなにも上機嫌に客を迎えるところを見たのは初めてだった。大石にとって赤坂は、かつて数日間を組んだだけの仲でしかない。その後、年賀状等のやり取りは多少あったが、その程度の関係だったはずだ。

でも、かつては青白い新米だった若者が、逞しく成長して帰ってくるというのが、これほどに嬉しいものだと大石は知らなかった。大石はかつて、生涯現役でいるつもりだったが。後輩がこんな頼もしく成長してくれたなら、後進に席を譲り、引退して活躍を見守るのもオツなものかもしれない、なんて思い始めているのだった…。

大石も赤坂も、二人が思っていた以上に再会の酒を楽しみ合うのだった……。店の主人が、

表の電気看板を店内にしまっていた。他の席の椅子は机の上に上げられていて、女将がモップで軽く床の掃除をしている。気付けば他の客はもういない。時計の針は午前の三時に掛かりかけていた。

「蔵ちゃんたちは久し振りの再会なんでしょ。ゆっくりしてっていいよ。帰る時だけ起こしてくれねぇかなぁ、カギしなきゃなんねぇから。」

「すんませんなぁ、気を遣わせちゃって。」

こんな時間じゃ河岸を変える店もない。まだまだ話し足りなかった大石たちは、主人の好意に甘えることにした。

熊谷は眠気に勝てなかったのか、舟を漕ぐようにうつらうつらと頭を揺らしていた。話題は今の赤坂の仕事に移っていた。赤坂は公安の中でも特に普通ではない部署にいる。その戦いのような日々と危険な綱渡りの武勇伝は、大石たちの興味を大いにそそっていた。

「……それで、実はこちらに来たら、古手梨花という少女に会いたいと思っていたんです。」

「古手梨花って、古手家の忘れ形見の梨花ちゃまですか。」

「忘れ形見…？　………ということは、彼女の両親は？」

古手梨花はかつて赤坂に、雛見沢で五年連続して起こるという奇怪な事件を予言している。

その予言の中の一つ、確か三年目の予言に、彼女の両親が殺されるというものが含まれていた

はずだ。
「えぇ、あれはオヤシロさまの祟りの三年目ですから、んんん、昭和五十六年ですかね。古手夫妻が、ちょいと引っ掛かる形でお亡くなりになりまして。赤坂さんが雛見沢に行かれたちょうど三年後の話です。」
「……三年後…⁉　わ、私が雛見沢を訪れてから三年後の、六月のことなんですか⁉」
「えぇ、そうです。…どうしました？　何か気にかかることでも？」
赤坂は脳内からアルコールを追い出そうと、ぎゅっと目を瞑り、少女の予言の全てを思い出そうとする。…そうだ、私はこれを確かめるために来たんじゃないか…。
「私が訪れたのは昭和五十三年です。その翌年に、ダム建設の監督が亡くなられたということは？　…そうだ、彼は私と麻雀を打った方のはず。あの方はその後どうなさっていますか？」
「……新聞にドンと載ったと思ったんですが、こっちの地方だけなのかなぁ。…えぇ、その翌年に、作業員たちとの喧嘩で殺されてしまいまして、」
……恐ろしい殺され方をした後、体中をバラバラに引き裂かれて捨てられてしまいます。
「その遺体を、バラバラにされた、ということは？」
「何だ、知ってるじゃないですか。…その通りです。未だ右腕が見付かりませんでね。お気の毒なことです…。」

…その翌年の昭和五十五年の六月の今日。………沙都子の両親が突き落とされて死にます。
……あるいは、事故というべきかもしれない。……不幸な事故。
「つ、続けて確認します。さらにその翌年。監督の殺人事件の翌年です。………確か、……えぇと、……そうだ。サトコさんという、多分、女性の方だと思います。その方のご両親が転落事故でお亡くなりになるということは?」
「おや、お詳しいですねぇ。そうです。ダムの賛成派だった北条夫妻が、旅行先の展望台から転落しましてね。事故か事件か未だにはっきりしませんが。」
そして、さらにその翌年の昭和五十六年の六月の今日。…私の両親が、殺されます。
「……そして、…その翌年には。」
「はい。古手梨花のご両親がお亡くなりになります。…ですが、どうもこいつも今ひとつ腑に落ちない事件でしてねぇ。」
「お前さん、ずいぶんとオヤシロさまの祟り関係に詳しいのぅ。この事件、地元の圧力であまり公にされとらんはずなんだが、東京にいながら、よくそれだけ知れたもんだわい。」
「……………何て、ことだ……。」
「だが、いくらお前さんでも、次の年は無理だろうの。何しろ、四年目から秘匿捜査指定がかかっとる。」

「…いえ、………多分、わかります。」
そしてさらに翌年の昭和五十七年の六月の今日。沙都子の意地悪叔母が頭を割られて死にます。
「その翌年ですから、つまり昨年です。…先ほどの、沙都子さんの叔母に当たる方が、頭部撲殺のような形で殺されてはいませんか。」
「そ、…そうです。ビンゴです。赤坂さん、どうしてそんなことまでご存知なんですか。」
「………多分、…私はさらにその翌年に殺される人物も知っています。」
「お、お前さん、何を言っとるんだ…。第一、去年の翌年ちゅうたら、そら今年のことだろうが…。」
……私が殺されます。
「昭和五十八年六月。つまり、今月です。……古手梨花が、殺されます。」
大石たちは絶句した。赤坂は四件の連続怪死事件を語った。長いこと遠方にいたとはいえ、公安の、それも特殊性の高い部門に所属する赤坂のことだ。秘匿捜査指定が掛かっていたって、耳に入れることも可能だろう。
…だから、数年間雛見沢を離れていた赤坂が連続怪死事件を次々に語っても、それほど不思議には思わなかった。だが、自分で口にしている内容が当たっていて呆然とした表情を見せる

赤坂の妙な様子と、わかるはずもない今年の祟りの犠牲者の名前を口にするのを見るに至り、彼らの酔いは完全に吹き飛ぶのだった…。

「赤坂さん、………もう夜もだいぶ更けました。これ以上はお互いしんどいんで、単刀直入に行きましょう。…今の話は、一体どういう意味ですか。」

「はい。今の話は、私が雛見沢を訪れた昭和五十三年六月に、彼女から聞かされたことなんです。」

「…………何ですって……。」

大石はその後に、そんな馬鹿な、と言葉を続けるつもりだったが、…あまりのことに、あんぐりと開けた口からそれ以上の言葉が出ることはなかった。

「信じられない気持ちはわかります。それを聞いた当時の私も、幼い少女の気まぐれな予言遊びくらいに思いました。……ですが、彼女は五年目に自分が殺されることを私に訴えました。それはつまり、…自分を助けてほしいという明白なメッセージだったと思うんです。……今回、雛見沢を訪れた最大の目的は、彼女を訪ね、本当に今でも私の助けを必要としているのかを確かめるためだったんです。」

「……赤坂さん、私ゃね、今年で定年なんです。連続怪死事件の一年目に殺されたおやっさんの仇を、どうしても年内に取りたいんです。ですから私は、どんなささいな情報でも、怪しげ

な情報でも飛びつきます。……だから一応確認させてください。今の話は冗談じゃないですよね？　何かの冗談なら、今の内にそうだと言ってくださいよ…？」

「私は真実しか言っていません。古手梨花は、昭和五十三年六月に今の話を私に語ったんです。……ただ、当時の私はそれを重要な話とは思わず、それを大石さんに伝えませんでした。それは申し訳なく思います。」

「い…いや、それは無理もないぞい。そんな話、突然されても鵜呑みにできん。四年連続した今だから聞ける話だわい。」

大石にしてみれば、赤坂がその話を聞かせてくれれば、おやっさんの死を回避出来たかもしれないという苦い思いもあるのだろう。

…だが、鑑識のジジイの言い分も正しい。当時言われていても大石は信じなかっただろう。そして結局はおやっさんの死に至って、何も出来なかったことを後悔しただけに違いないのだ。

「………そうですね。いえ、すみませんでした。………しかし、……古手梨花。……古手梨花がどうして。………むむむ…。」

「今の雛見沢の状況は私も詳しくありません。一応、当時の新聞で、ダム計画の無期凍結が決定されたというのは読みました。ですから、ダム戦争は終わって、平穏な生活を取り戻していると信じていたのですが。」

「うむ。ダム戦争は確かに終わった。……だがな、その翌年からな、通称、オヤシロさまの祟りと呼ばれる連続怪死事件が毎年起こるようになってな。…その詳細については、まさにお前さんが今言った通りの内容なんだわい。」
「………どうやら私は、彼女に大変な何かを託されたような気がしてきました。…大石さん、ずばりお尋ねします。……今年、古手梨花が殺されるのは、ありえる流れだと思いますか？」
「……古手夫妻はダム戦争当時、消極的だったことを理由に後ろ指を指されていたという話があります。それで三年目の祟りに遭ったというのが定説です。…その流れから言えば、………古手梨花殺しは………。」
「……ありえるんですね？」
大石は無言で、ゆっくりと頷いた。
「………明日、古手梨花に接触を試みるつもりです。どうやら、彼女に直接話を聞くしかないようですからね。」
「赤坂さん、それ、私もご一緒させてくれませんか。…古手梨花の話は、どうやら私にとっても重要なものになりそうです。」
「……こりゃあ、……お前さん、何ともとんでもない土産を持ってきてくれたもんだの…。ワシもちょいと面白くなってきたぞぃ。煙に巻かれたまま終わると思ってた怪事件が解けるのに

立ち会えるとは思わなんだ。」
「しかし、疑問もありますね。どうしてこんな重要な話を私だけに打ち明けたのでしょう。助けを求めるなら、東京から出張してきた私ではなく、地元警察のはずなのですが。」
「…………んんん。…多分、地元警察を信用しきれないところがあったのでしょう。私も泥臭い人間です。梨花さんの信用を得ていなかったのかもしれない。…それに、興宮署にはS号の息の掛かった連中も少なからず潜んでいます。」
「つまり、東京から来た私が、一番信用できたということですね…？」
「悔しいですが、そういうことになるでしょうな。」
「…だとしたら、大石さん。この件、他には内密に。」
「もちろんですとも。…とにかく明日、雛見沢に行って、梨花さんに直接話をうかがってみましょう。話はそれからです。」

羽入が伝える記憶

「………信じられないわ。…………でも、……それが、真実なのね。」
聞こえるのは虫の声と、沙都子のいびきだけという静かな深夜。梨花の姿は、お気に入りの

窓際にあった。
「……そうなのです。梨花を殺すのは、……鷹野なのです。僕も梨花もはっきりと見ましたのです。梨花は、あれだけ鷹野の顔を目に焼き付けようと…。生きながらお腹を裂かれても、なお歯を食いしばってその顔を見ていたのです…。」
「…………………いやな死に方ね。…毎回記憶に残ってなかったのを感謝したいわ。………でも、何となくわかる。鷹野の好みそうな殺し方だもの。」
「……あぅあぅあぅあぅ……。」
「でも、わからない。………どうして鷹野が私を殺すの？　だって、私は女王感染者で、私が死ねば大惨事になるんでしょう？　だから入江機関や山狗たちが私を守ってくれてるんじゃないの？　その天辺(てっぺん)にいる鷹野が、どうして私を殺さなくちゃならないの？」
「……あぅ…、あぅ……。」
「ごめん、意味のない質問ね。……鷹野が私を殺す。それが真実なのであって、その動機なんか大した問題じゃないものね。…しかし、…だとしても。…………よりによって、なぜ鷹野なの…。」
動機など大した問題じゃないと口にしながら、それでもすぐに口にしてしまうその疑問。
鷹野が女王感染者を守ろうとするのは、雛見沢を全体が集団発症する大惨事から守ろうとい

うだけではない。……変質的研究狂である彼女の、極めて貴重な研究対象だからだ。
その、彼女にとって、彼女の研究にとって、何よりも大切な女王感染者を、なぜ自らの手で殺すのか。

「敵は鷹野ひとりなの？」

「……あぅあぅ……。山狗の人たちも敵でした。入江が敵かはわかりませんでしたが、……多分、敵じゃなかったと思いますです。」

「鷹野と山狗が敵…？　…………冗談じゃない、私たち小娘にどう立ち向かえっていうの。無理よ。…奇跡でも起きない限り、あんなヤツらに私たちが勝てるわけがない。しかも綿流しは次の日曜日。私が殺されるのは二十二日。あと一週間ってところ？　そのわずかな時間でどう戦うの？　鷹野を金属バットで闇討(やみう)ちにでもしてみる？　意味ないわ、鷹野は所詮、連中の一人。鷹野ひとりを返り討ちにしたって、山狗たちに取り囲まれておしまいよ！　どうすればいいのよ、どうすれば!!」

「そ、……そんなの僕だってわからないのです…！　でも、でも、……でも…。………今までは何度繰り返したって、敵の名前だってわからなかったじゃないですか。…それを、…やっと掴んだんです。やれることが、…あるはずなんです……！」

羽入が、これほど強く言い返すのは初めてだった。

私は一瞬、面食らい、…そして自分が冷静さを失っていたことに気付き、大きく深呼吸して、焦る気持ちをリセットした。……私が混乱している最大の理由は、犯人が鷹野だったことによる。鷹野の個人的な性格はともかく、私はずっと彼女を頼もしい味方だと信じてきた。
鷹野が私を大切にする理由はいくつも思いつく。……だが、彼女が私を殺したい理由がまったく思いつかないのだ。でも、薄気味悪いことを考えているヤツだ。……常人には理解できない狂った思想が動機にならないという保証もない。
「……ということは、…富竹は殺されてる。…つまり、富竹は、…味方？」
「た、…多分、味方だと思いますです。…そうですよ梨花。富竹に相談すればいいのです！」
……鷹野が山狗を従える背景には、「東京」なる組織の存在がある。
ということは、その「東京」に通じる人間にしか助力を頼めないということなのか。…だとしたら、富竹はこの件で唯一相談できる相手に違いない。それを言ったら、入江にだって相談する価値があるに違いない。だが、……だからこそ必要なのだ。
どうして鷹野が私を殺さなければならないのか、その動機が…！　それを説明出来ない限り、彼らは私の話に聞く耳を持たないだろう。しかも富竹は鷹野に一方的に惚れ込んでさえいるんだ。
並大抵のことでは鷹野を疑ってはくれまい…。入江は鷹野と一定の距離を置いているように

見える。富竹よりは話を信じてくれやすいかもしれない。……でも、入江はただの医者で、「東京」についてはとても疎い。役に立つかは微妙だ。警察に通報する？　馬鹿な、そんなの絶対に無理だ。絶対に信じてくれるわけがない。

「東京」というおかしな組織が自分の命を狙っています、なんて電話したら、確実に正気を疑われる…！　じゃあどうすればいい、どうすれば自分を救える？　この雛見沢で、もっとも敵に回してはならない連中が、私を殺しに来るのだ。どうすれば逃げられる？　どうすれば立ち向かえる？　どうすれば、どうすれば…!!　……羽入の言う、鷹野が私を殺す光景を、私も記憶していたなら、ここまで混乱はないだろう。百聞は一見に如かずなのだから。

……でも、私は覚えてない。

羽入が見てきたと言っているだけだからこそ、まさかあの鷹野たちが私の敵だなんてという、受け容れなくてはならない真実を、羽入の世迷言と決め付けてしまう現実逃避に陥りそうになる……。

「…お、……落ち着くのです、梨花。前の世界で僕たちは学んだはずなのです…！　覚えていませんですか、前の世界のことを。」

「……前の世界って、……あれでしょ？　レナが学校にガソリンをまいて立て籠って、」

「違いますです…！　その次にもうひとつ世界があったのです…！　本当に覚えてないのです

か…⁉　その世界では、あいつが帰ってくるのです。北条鉄平が！」
「……最悪の世界ね。何をやっても相談所は様子見で、沙都子は数日で廃人同然。どうせ、仲間の誰かが発症して鉄平を闇討ちにするんでしょ？」
「違います違います‼　そこではみんなが力を合わせて相談所に陳情してちゃんと沙都子を救ったのです！　その世界で梨花は圭一にあれだけ教えられたじゃないですか。奇跡は信じなきゃ起きない。そして、みんなが信じれば必ず奇跡は起こる、って‼」
「……確かに圭一が言いそうなことね。…でもすごいわね。今まで一度も退けられなかった鉄平の帰宅する世界を、打ち破るなんて…。」
「その世界の圭一たちはどうやって奇跡を起こすか知ってますですか⁉　みんなにですね、ちゃんと相談したのです！　どうせ駄目だとか、ひとりで悩んだりとかしないで、みんなに相談したのです…‼　だから、奇跡が起こせたのです……！」
「みんなに、って。…圭一たちに、鷹野のことを相談しろと？　「東京」という怪しげな組織に狙われているから助けてって、相談して、信じてくれると思ってるの…？」
「信じてくれますです‼　前の世界では信じてくれましたのです！！　何で梨花は、僕が言うのを信じてくれませんのですか…‼」
「……ごめんなさい。信じないわけじゃないの。…羽入が見たんだから、それは真実なんだも

のね。…………自分の記憶に残らないというのが、…こんなにも温度差を感じさせてしまうものだったなんて、…嫌になるわ…。」

「とにかく、梨花と僕が二人で悩んでも何も解決できませんです。僕たち二人の力ではあまりに非力なのです…！　でも僕たちには武器があります。それは真実です！　動機はよくわかんないけど、……でも犯人は鷹野だってわかってます…!!　だから、これはこれまでの世界で、一番有利なスタートのはずなんです…!!　……何で、……何で最後の最後で…梨花だけ記憶がつながらないのです……!!」

羽入は本当に悔しそうに歯軋りをした。

……ついさっき「正解」を見てきた彼女にとって、記憶を持たず、本当の正解にきょとんとしている私が信じられないのだろう。自分が見たことなら、動機などなくても簡単に信じられる。でも、自分が見てないことが、こんなにも飲み込みにくいなんて…。なぜ羽入の記憶がつながっていて、私の記憶は途切れてしまっているのか……！　もう私たちの長い旅が終焉に近付いている、ということなの？

あるいは、…私にとって無限に繰り返す旅はすでに終わっていて、…これが最後の旅だということなの…？

「……………………ふ――――……。………羽入がみんなにも見えて、しかも転校まで

してくるなんて、何だか変な世界だなとは思ってたけど、……どうやらココは、とびっきりおかしな世界みたいね。」

「……おかしくも何もありません。……ただ、最期の世界なだけなのです。」

「…………………………。」

「……僕は、その最期の世界で、みんなと力を合わせるためにやって来ました。……僕はここでは傍観者じゃない。梨花の、みんなの仲間で味方なのです。」

「………………そういえばそうね。…あんた、傍観者やめたのね。」

「……僕はもう、傷つくことを恐れて舞台に上がらないなんて嫌なのです。それを恐れずに、みんなと信じる。だから、奇跡が起こせる…！　これは昭和五十八年六月を賭けたゲームの世界なのです。戦っているのは、梨花と鷹野。期限までに梨花が敵を倒せないと自動的に負けになる。鷹野たちは山狗という強力な駒をいくつも持っている。少々の駒を集めたくらいではとても太刀打ちできないのです。だから梨花は、あらゆる人に助けを求め、対等な数だけ駒を揃えなければ、そもそもゲームが始まらない…!!　このゲーム盤のルールを、僕たちは何度も繰り返しながら学んできましたです。それはまるで説明書のないゲームのよう。でも僕たちは何度も学び、そしてようやく戦い方を知り、…そして、敵方の駒の正体まで最初からわかっているという破格のリードがもらえましたのです…！　梨花、ぼんやりしてる場合じゃないの

ですッ!! 綿流しまであと一週間！　前の世界は二週間の猶予で始まりましたですが、今回は一週間しかない！　つまりこれが最期の世界なのです！！！」

「……………わかったわ。…私が覚えていないことの不幸を嘆くより、あなたが覚えていてくれた幸運を喜ぶべきね。……あなたまで忘れていたら、この最期の世界も、右往左往している内に終わってしまったに違いない。……それに、圭一たちへの相談も、うまく話し方を考えれば、何かいい知恵がもらえるかもしれない。……何しろ、学校大爆発がほぼ確定したあの世界で、レナと大立ち回りをして正気に戻させるという、奇跡を成し遂げた男なんだから。」

「そうです！　とにかく、話せる人に相談しましょうです。僕たちだけではあまりにか弱いのです。仲間を集め、どうするかを考えましょうです…！　奇跡の道も一歩からなのです!!」

「しかも、…それをたったの一週間でね。」

羽入が、ここまで私を励ましてくれたことがかつてあっただろうか。

彼女は常に傍観者気取り。……期待して失敗する痛みを嫌い、何も期待しないのがスタンスだったはずだ。

その羽入が、こんなにも熱心に、積極的に、この世界に介入しようとするなんて。………羽入が言うには、レナが学校を占拠する世界の次に、もうひとつ世界があったらしい。

………その世界で、…どうやら圭一にずいぶんとアツイことを吹き込まれたようだ。…どう

せ駄目で元々だ。…信用できそうな人から相談してみよう。努力しようともしなくとも、終末の日まであとわずか。
　ならば、せいぜい存分に悪足掻きを見せてやる。魔女を気取ってワインを飲んで迎える終末なんて、かっこいいなんて思うものか…!!

■終末への秒読み

「もしもし。ご無沙汰しておりますわ。野村です。…………ええ、先日は詳細な資料をありがとうございました。厚生省のお歴々も、貴女の丁寧な資料のお陰で、雛見沢症候群の恐ろしさを理解して下さりました。…………ふふふふ、全て貴女と故高野先生の研究の成果ではありませんか。私は正当な研究が正当な評価を受けられるようにしたに過ぎませんわ。…………それはもちろん。…貴女の資料を、やがては総理の手にも取らせて見せましょう。総理は一国の長。我が国でもっとも上席にある人物に、貴女と貴女の祖父の論文を読ませ、それが如何に優れた研究であり、そして雛見沢症候群が如何に特別なものなのか、そしてその研究を蔑ろにし、無惨にも貴女と貴女の祖父の論文を土足で踏みにじった現理事会がどれだけ愚かかをわからせてお見せします。…………ええ。ふふふ、そんな貴女に朗報があります。終末作戦が終わっ

た後、現地は隔離閉鎖され、陸自の別部門が研究を引き継ぐこととなりました。貴女はそこへ迎え入れられ、派閥や予算に悩まされることなく、心行くまで研究をすることが出来るのです。……ふふふ、貴女の献身的努力に報いたいと仰られるクライアントの好意としか申せませんわ。貴女はそこで所長の地位を与えられ、今度こそ思うままに存分に研究に勤しむことが出来るのです。ふふふ、それはとても素晴らしいことではありませんか。そして貴女は雛見沢症候群の研究をステップの一つにし、故高野先生が求められていた本当のステージ、人の思想を支配する寄生的存在についてさらなる研究を重ね、人類の常識を根底から覆す偉業を成し遂げられるのです。……いいえ、これはお世辞でも何でもありませんわ。貴女に対する私どものクライアントの正当な評価です。……そうですか。長電話を失礼してしまいましたわ。それでは失礼いたします。また追ってご連絡いたします。」

女は車載電話の受話器を一度置くと、すぐに取り直し、別な相手へ電話する。

「内線一〇〇一をお願いします。……ええ、渡邊とお伝えを。……………渡邊です。ええ、先日の件はつつがなく終了しました。………はい。鷹野三佐の資料は素晴らしいものです。さらに国立研究所の職員を同行させましたので、背広連中はそのまま鵜呑みに。……………ふふふ、ええ、はい。そちらも問題ありません。二十日以降から敵対派閥のほとんどの閣僚は外遊、もしくは静養で東京を離れます。………はい。不確定要素はいくつか

残りますが、恐らく、六月二十三日には官邸の堀は全て埋められているはずです。……
……はい。ですので、現地作戦は六月二十二日深夜に決行、二十三日に総理に緊急決裁を求める日程となると思います。……はい、当日、総理を補佐できるブレーンは全て我々側の人間です。総理は万に一つの疑問も抱かないでしょう。……ええ。それは間違いなく。……総理は必ず、緊急マニュアル第34号に署名します。……その後は、アルファベットへの責任追及となり、奥野・千葉派、旧小泉派は発言力を大きく失うこととなるでしょう。……ええ。そうです。アジア友好再建計画会議の成立は時間の問題です。……ですわね。国産核兵器開発に回すカネや、太平洋をまたがねばならない日米同盟如きに回すカネがあるなら、中国へODAをした方がよっぽど国益にかないます。二十一世紀は世界人口の数割を一国が占める中国の時代ですもの。日本はすでに米国に尻尾を振っても旨味はありません。……ええ、まったくですわ。二十一世紀を間近に控え、未だに共産主義は悪魔だなんて、米国の性質の悪いプロパガンダ戦争映画の見過ぎです。ふっふふふふふふふ。……はい、わかりました。……では、来週、澳門にてよろしくお願いいたします。……ふふふ、ええ、私、カジノは大好きですので。…はい、それでは失礼いたします。また追ってご連絡いたします。」

女は車載電話の受話器を置いて、一息をつき、……彼女の仕事が順調に進んでいることに対

しほくそ笑んだ後、再び受話器を取った。

「官房長官席を。……ええ、舞沢(まいざわ)とお伝えを。…………………………………………。…………はい、私です。奥野長官。」


最高の仲間たち

■入江に相談

「…どうしたんですの。何だか今朝の梨花は様子がおかしいですわね。」
「……そうですか？　どうおかしく見えますですか？」
「う、うまく言えませんけど、………何だかこう、…大人びて見えるといいますか。」
「……あぅあぅあぅ。梨花は大人なのですよ。あぅあぅあぅ☆」
「羽入、今日は茶化すのは無しにして。……沙都子もごめん、今日はふざけるのは無しにしてね。そういう気分じゃないの。……今からあと一週間くらいね。」
沙都子は怪訝(けげん)そうな顔をする。体調不良とでも思われたかもしれない。
……沙都子も含め、圭一たちみんなに話そうとは思うが、…どう切り出せばいいか、わからない。みんなは基本的にふざけるのは大好きだから、冗談だと思われてしまったらどうしようもない。……どうやれば、真剣に私の相談に乗ってくれるのか…。
「先生、おはようございますですわー！　あら、監督もですわね。おはようございますですわ！」
「はい、おはようございます、沙都子ちゃんに梨花ちゃん。おやおや？　頭にメイドさんのカ

チューシャがありませんねぇ？　校則違反です、おしおきおしおき〜〜〜！！！」
「入江先生！　学校でそういうのはやめてください！」
「監督。梨花が朝から体調が悪いみたいなんですの。ちょっと様子を見てあげてほしいのですわ。」
「…おや、どうなさいましたか。風邪ですか？」
………みんなにはどう切り出せばいいか思いつかないが、入江は初めからこちら側の人間だ。単刀直入に相談出来るかもしれない。このままじゃ、何と言って相談すればいいか悩んでる間に今日が終わってしまいかねない。…なら、まずは入江に相談してみるか。羽入も、それはいい考えだというように頷いてくれた。
「あぅあぅ、沙都子沙都子、圭一が来る前に、お席にいたずらをしましょうです。」
「をっほっほっほ!!　いたずらじゃありませんわよ、より優雅に、トラップとお呼びなさいませですわよ！　羽入さんに、対圭一さんトラップの妙技（みょうぎ）を伝授してさしあげますわー!!」
「あぅあぅあぅあぅあぅ〜！」
羽入と沙都子は上機嫌に教室へ駆けて行った。……多分、羽入が気を利かせてくれたんだと思う。なら、せっかくの好意と好機を無駄にしてはならない。
「……入江、ここでは何ですので、保健室でお話してもいいですか？」

「ええ、構いませんよ。では保健室へ参りましょう。」
入江は、雛見沢症候群に関わる話かもしれないと思ったようで、保健室に移ることに同意してくれた。私に体調の変化がわずかでもあれば、何かの大事の前兆の可能性もあるからだ。たとえ風邪だったとしても、入江は私の体調変化は敏感に扱う。
「どうしたんですか。どこか体調でも悪いのですか？」
「……入江。妙な話をしますけど、ふざけないで聞いてほしいのです。とてもとても真剣な話なのです。」
私は、これまでで入江に見せた表情の中で、一番真剣な顔をしながら言った。入江は、普段はふざけているが、真面目な時とちゃんと使い分けることが出来る人間だ。私の真剣さを汲み取り、それに見合う真剣な表情を浮かべてくれた。…まずは、……どう切り出すか。
…………………よし…。
「……入江。ボクは、女王感染者というものなのですか。」
「はい。梨花さんの寄生体だけは、村中の誰とも違う特別なものです。」
「……そのボクが死ぬと、どうなりますですか。」
「………前にもお話したと思いますが、とても大変なことになります。…いえ、正確には、とても大変なことになると〝思われます〟が正しいですね。何しろ、梨花さんが死ぬまで検

証不能なのですから。……ただし、雛見沢症候群に酷似した社会型脳内寄生虫の例で、女王感染者の死を引き金に、集団自殺や暴動などを引き起こすケースが複数あるというような話です。……この辺は鷹野さんの専門です。彼女に直接聞いた方がいいでしょう。私は少々疎い辺りです。」

……ということは、私が死ねば大変なことになるというのは、他でもない、鷹野自身が一番知っているということになるではないか。

……ますますに、鷹野がどうして自分を殺そうとしているのかが、わからなくなる…。私がひとりで考えてもわからないのは当然だ。今は目の前に入江がいる。

入江にならわかることかもしれない。…ひとりで悩む前に聞いてみよう。

「……入江。話の腰を折らずに聞いて答えてくださいです。……そんなボクを殺して、誰かが何かを得するということはありますですか。」

「えぇ？　梨花さんを、殺す⁉　誰が…！」

「入江、話の腰を折らずに答える約束です。」

「…………ん、失礼。……いえ、考えられません。あなたを殺して得をする人間など存在するわけがない。繰り返しになりますが、もし女王感染者に万一があれば、一般感染者は全員、四十八時間以内に末期発症に至るのです。それこそが、雛見沢症候群のもっとも危険な一面と言

えるでしょう。被害妄想の拡大や錯乱などの個人症状とは比べ物にならない規模の大事態です。」
「……その大事態を起こして、誰かが得をするということは？」
「絶対にありえません。梨花さんを殺すということは、村人二千人を殺すのとまったく同じことです。たとえ冗談でも絶対に考えられないことです。」
「……私が死ねば、雛見沢の人たち全員が被害妄想に取り憑かれて錯乱し、あるいは殺し合う。……鬼の血を引く末裔たちの村の終焉としては、これ以上ないフィナーレね。」
……それこそが、ひょっとして鷹野の狙い…？　常々、物騒なことを口走っている鷹野に、ある種の残酷趣味があるのは誰もが知るところだ。
鬼ヶ淵村の暗黒史を漁り、人食い鬼たちの凶行を自らの目で見てみたいと漏らす鷹野が、それを現実のものにするために、私を殺して村人全員を末期発症させようとしているとしても、まったく考えられないことじゃない…。
「もちろん、それが想定される最悪の事態です。…ですので、もしも万一、梨花さんが死ぬようなことがあった場合、ある緊急措置が取られることになっています。」
「……緊急措置？　初耳ね。」
「多分、初めてお話すると思います。…物騒な話でしたので、私も話さなかったと思います。

入江機関にとって、雛見沢症候群治療の中で最優先事項は、女王感染者の保護です。ですが、万一、女王感染者が死亡し、感染者全員の急性発症が見込まれた場合、それを未然に防ぐ緊急措置が取られることになっています。」

…妥当な話だ。村人二千人が錯乱すれば、被害が村だけに留まる保証はない。その事態が先に予見できているなら、先に対策を用意しておくのは当然だ。

「非常時用の緊急マニュアルというものが存在しまして、その中でもっとも危険度の高い事態、…つまり、梨花さんが死んだ場合に適用されるものが、緊急マニュアル第34号というものです。」

「……それが適用されると何が起こるの？」

「村人が錯乱する前に、……全員を処分するという恐ろしい内容です。具体的には、自衛隊の緊急時専門の部隊が雛見沢を封鎖して、毒ガスか何かで皆殺しにしてしまうのだそうです。」

「…………それも、…初耳ね。」

「すみませんでした。私もあまり好きな話ではなかったもので…。」

これまで、自分が死ぬ前のことに関心はあっても、自分が死んだ後に関心を持ったことはなかった。後は野となれ山となれだった。

しかし、…私が死ぬ度にそんなことが起こっていたとは。いや、…そんなことを起こしてい

たとは…！　地図から、村を丸ごと消し去れるような相手なら、私ごとき小娘を一人消すのは造作（ぞうさ）もないだろう。

……羽入はみんなに相談しろと言ったけど、…本当にこんな相手に立ち向かえるのだろうか……。

そして、この緊急マニュアルなるもののせいで、さっきまでうまく繋がったと思っていた鷹野の動機が潰（つい）えてしまった。村人たちが錯乱して、文字通り鬼のようになり村中で殺し合いが起こる阿鼻叫喚（あびきょうかん）。

それを観賞したいというのが動機なら理解も出来たが、入江の話によるならば、それは起こらないというのだ。

それが起こるより前に、村人をガスで皆殺しにしてしまう。…私は鷹野じゃないから断言は出来ないが、…これでは鷹野は面白くないと思う。これを目的に私を殺すというのは、これまでの気の遠くなるような長い付き合いから考えて、…少し無理があるように思う。

「……鷹野と山狗が、私を殺す、というのはありえること？」

「馬鹿な…！　絶対にありえないことです。いや、それどころか、鷹野さんは梨花さんの保護に一番気を遣っていますし、山狗の最大の任務のひとつはあなたの護衛です。そんなことは絶対にありえない。」

「……入江。それでもなお鷹野が私を殺すとしたら、どんな動機が考えられる？」
「か、考えられません。女王感染者の危険性について一番知っているのが彼女なのですから。……それに、ご存知でしょう。彼女は雛見沢症候群の研究に並外れた情熱を注いでいます。あなたを殺してしまうことは、その情熱と矛盾する行為です。」
「……でも入江。雛見沢症候群は確か、三年以内だかに撲滅する計画になってるんでしょう？　撲滅というのは症候群を滅ぼしてしまうこと。……研究を続けたい彼女の情熱にとって、それはどうなの…？」
「ん、……それは…。……私にとって、雛見沢症候群は治療すべき対象ですが、鷹野さんにとっては、研究素材なのです。…実際、彼女は三ヵ年計画には強く反対していて、研究の無期延長について理事会に進言するため、単身、上京したとまで聞いています。もっとも、それは失敗に終わったそうですが。」
「……つまり、…鷹野はもっと研究を続けたいのに、雛見沢症候群は三年以内に撲滅してしまい、鷹野は研究対象を失ってしまう…？」
「………そういう言い方もできるかもしれません。」
少しだけ、…何かが垣間見える気がする。入江機関というのは決して小さな組織ではない。少なくない人間と莫大な予算が投じられて運営されている。そこまでしなければ研究出来ない

のが、雛見沢症候群というものなのだ。
……ということは、入江機関が研究を三年で終わらせると宣言した以上、鷹野は個人的に嫌でもどうしようもない、ということになる。
「……どうせ終わらせられてしまう研究なら、最後に盛大にひっくり返してやりたいとか…？」
「ば、馬鹿な……。そんなこと、あってはならないことです…！」
「でも、入江も鷹野の性分は知っているでしょう？　あいつならやりかねない、あいつなら、私を殺しかねないって、…あるんじゃない…？」
「……ありえない……。ありえません……。そんな恐ろしいことは、…絶対に…。」
鷹野の動機の尻尾をわずかに探ったかに感じたが、……どうもこれだけではない気がする。
なぜなら、研究は少なくとも三年は続くのだ。その間に、鷹野の言い分が認められて研究が延長される可能性だってあるわけだし、少なくとも、その三年間については研究が保証されているという意味でもある。なら、まだ三年たっぷりある昭和五十八年の今、自暴自棄になる理由がわからない。しかも、私は必ず昭和五十八年六月に殺される。日にちに多少の揺らぎはあっても、月が変わることはほとんどない。…それは強固な意志に基づく証拠だ。
研究が即時打ち切りになるならいざ知れず、…まだ三年の猶予を残した昭和五十八年に自暴

自棄になるには、少々動機が緩いと思うのだ。

もっと、昭和五十八年の六月でなければならないという強い意志があるはずなのだが…。それ以上は、いくら入江に鷹野が私を殺す可能性を問い詰めても、そんな馬鹿なとありえないを繰り返すのみで、大して役に立ちそうにはなかった。鷹野が私を殺す動機をしっかり説明出来るなら、味方になってくれそうではある…。とりあえず、私が入江に対しアプローチ出来るのは、今はここまでが限界のようだった。……同じ話を富竹にもしてみよう。富竹は入江よりもはるかに「東京」寄りの人間だ。

入江とはまた違った話が聞けるかもしれない。……そこで何か重要な事実を知り、鷹野が私の命を脅かす十分な動機を説明出来ればいいのだが…。富竹は、もうこの時期には雛見沢に訪れているはずだ。鷹野と一緒のことも多いが、割とひとりで散策して野鳥撮影を洒落込んでいることも多い。鷹野と一緒にいない時を捕まえて、話をしてみよう。……もっとも、富竹は鷹野に対し強い好意を抱いている。…入江のように、真面目に話に乗ってくれるか不安だが…。

「……ありがとうでした。ボクは教室に戻りますです。何か鷹野のことでわかったら、ボクに教えてくださいです。」

「り、梨花さん…！　どうして、鷹野さんがあなたの命を狙っているなんて思うのですか…！まさか、…急性発症…!?」

「……それを疑うなら、今、簡易検査をしてみますですか？」
私が突然物騒なことを言い出すのだから、入江がそれを疑うのも無理はない。
だが、そうでないことを立証するのは、入江が今日までに開発してくれた簡易検査用の注射器のお陰でとても容易だ。私はその注射に付き合い、自分が末期発症を起こしていないことを示す必要があった。結果はシロ。当然だ。
「………鷹野さんがなんて、……ありえない……ありえない…。」
入江に、鷹野が私を殺す可能性があることを意識させることが出来ただけでも、収穫かもしれない。私は保健室を出る。…鷹野に関心を持った入江が、何かを調べてくれるといいのだが…。

■部活メンバーに相談

「……どうですか梨花。何か収穫はありましたのですか。」
「あったと言えばあったたし、なかったと言えばなかったたし。…微妙なとこね。でもいくつか面白いことがわかったわ。一つは、入江機関は三ヵ年計画で雛見沢症候群を撲滅しようとしていること。これは研究を続けたい鷹野にとって不愉快なこと。彼女は単身上京し、「東京」の連

中に研究の継続を訴えたけど退けられたんだとか。……これがきっかけで、何か自暴自棄になるようなことがあるかもしれない。もう一つが面白いの。緊急マニュアル第34号とかいう物騒なやつよ。私が死ぬとそれが執行されて、この村は丸ごと毒ガスで抹殺されるそうなのよ。」
「……あぅあぅあぅあぅ…。」
「私が死ぬと、村人全てが末期発症するというのがあるでしょ。鷹野はそれが見たくて私を殺すのかとも考えたんだけど、緊急マニュアルとやらがあるから、それを見ることが出来る前に村は滅んでしまう。…だから、これも動機ではなさそう。いくら入江に聞いても、そんな馬鹿なばっかり。…彼に言わせると、事態の重要性を一番理解しているのが鷹野、ということらしいわね。ゆえに、一番殺す理由がないと。」
「………あぅあぅあぅ…。」
「わかってるわ。まだ入江一人に聞いただけよ。他の人から情報や知恵をもらえる可能性もあるんだしね。」
「そうです。みんなの力を合わせないと、奇跡は起こせないのです。」
「奇跡でも起こさなきゃ、絶対に勝てない相手だものね。」
「……もうすぐお昼休みなのです。みんなに相談するいいチャンスだと思いますです。」
「とは言え…。どう話せばみんなが真剣に聞いてくれるかが問題よね…。「東京」という秘密

結社が、なんて話をしたら、それ何て漫画？　って言われちゃうに決まってるわ。…誤解のないようなうまい言い方を考えないと。」

「……あぅ☆　多分、深く考えず、そのまま話した方がうまく行くと思いますのです。」

「本当に………？」

「そうなのですよ。まぁ試してみるのです。僕が言うような言い方をすれば、茶化さず聞いてくれるどころか、ものすごく真剣に相談に乗ってくれると思いますです！」

私は訝しげな顔をするが、羽入はあっけらかんとそう言う。何だかんだ言って、羽入も色んな人の人間観察をしている。魅音と直接話をしたことはなくても、彼女については私以上に詳しく知っているのだ。

私は羽入の教えてくれた言い方で、昼休みにみんなに相談を持ちかけた…。

「ふむふむ…！　そりゃ面白いね。それでそれで⁉」

「はぅ〜！　梨花ちゃん、すごいね！　そんなのよく思いつく！」

「だよなぁ！　意外な才能にちょっと驚きだぜ。確かにもうちょい煮詰めりゃ結構、面白い漫画が描けそうだ！」

「私は呆れましてよ！　今朝から調子が悪そうなんで、どんな悩み事があるかと思ったら！　そういうことなら、まずはいの一番にこの私に相談あそばせ！」

「……ね？　みんなとても頼もしいですよ。あぅあぅ！」
「た、……頼もしいわね。…物は言いようなのね…。」
「おじさん、こう見えても、サークル申し込みからネームに下書き、ペン入れにトーンに背景に、写植に校正、入稿、出版、頒布にサポートまで全部出来るからねぇ。私に相談したのは実にナイスだよ！」
「あぅあぅ！　魅音がすごいのです！　漫画家も編集者も出版社も本屋さんも全部一人でやれてしまうのです！」
「へー!?　ウチの親父もそんなこと言ってるぜ？　そういう全部自前でやるのって流行りなのか？」
「はぅ…。レナはそんなことより魅ぃちゃんのジャンルが気になるかな、かな。」
「ほらほら！　話が脱線してましてよ！　みんなで梨花に協力しましょうですわ！」
……私は彼らに、雛見沢を取り巻く状況を素直に話した。そういう漫画を描こうと思っていて、設定を煮詰めているから協力してほしいと言って。
普通に状況を話せば正気を疑われるが、ちょっとこんな前置詞を付けるだけでここまで変わるとは……。…羽入、あんたやるわね。
「何しろよ、その女王感染者が死ぬと、その緊急措置が発動になって、村がまるまる全滅させ

られてしまう、っていうのが最大のポイントだよな。」
「そんなすごい人がいらっしゃったら、…もう要注意ですわね！　豆腐の角に頭でもぶつけられたら、それだけで村が全滅ですもの！　捕まえてぐるぐる巻きにして土蔵にでも放り込んでおいた方がいいに決まってますわ！」
「でも、そうしないで殺しちゃうんだよね？　そんなことしたら大変なことになっちゃうってわかってるのに、何で殺さないといけないのかな、かな。」
「……そうなのです。秘密の研究所の中にいる、その悪役は、大変なことになると知っていてボ、…じゃない、女王を殺そうとするのです。でも、もっともらしい動機が思いつかないのです。」
……その動機の輪郭らしきものはおぼろげに見えたり見えなくなったりするのだが…。詳細な事情のわからない彼らに、それのヒントが見つけられるだろうか…。
「わっはっはっは！　そんなの全然楽勝じゃぁん！　女王を殺せば村中が滅ぶという設定だけで、もう十分に動機は構築できるよ。」
魅音はからからと笑いながら、私が昨夜からずっと頭を悩ませることを、あっけらかんと笑い捨てた。
「……でも魅音。その悪役は病気のことをもっと研究したいと思っているから、それがおしま

いになってしまうようなことを自らやるはずがないのです。あぅあぅ。」
「そんなの大した問題じゃないって。その悪役にさらに黒幕を設ければいいんだよ。あるいは、その悪役を利用しようとするさらに悪役というか。」
鷹野を利用しようとする、悪役…？
「いい？　女王が死ねば村が大混乱に陥る。それを隠蔽するために大掛かりな抹殺作戦が決行される。これはね、基本的に最悪の事態への対応策であって、決して抜いてはならない伝家の宝刀な作戦ってわけ。抜いてしまったら、取りあえず事態は収拾出来るだろうけども、ただでは済まされない大事になるんだからね！」
「ふむ！　確かに。政治家の世界って、必ず責任追及とか辞任要求とかそんなのになるもんな。そんな何千人も殺すような作戦が実行されたら、その後に必ず、そういう事態を招いたのは誰の責任だーって騒ぎになるだろうからな。」
「まぁ、秘密作戦だからその騒ぎは表沙汰にはならないだろうけど、その「東京」という組織内でかなり強烈な責任追及が行なわれるのは間違いないだろうね！　ってことは、それだけで十分、女王を殺す動機はあるってことじゃな〜い。」
「……あぅ？　どうしてなのですか？　そんな大騒ぎになって、何か得をする人がいるというのですか…？」

「いるよいるよ、いるに決まってるじゃん！　いい？　世の中に吹く風は必ずどちらか一方に流れる。それはある人にとっては逆風になるけど、必ずいる反対向きを向いてる人には追い風となる！　どんな出来事だって、必ず損をする人と得をする人がいるんだよ。」
「…なるほど。ほっほっほ！　私のトラップ脳がギンギンしてきましてよ～！　つまり、そんな大事になれば、責任を取らされる人たちがいる。その人たちと対立している人たちにとっては、とてもおいしい事態というわけですわね⁉」
「そうだね。どんな組織にも勢力や派閥があって意見を違えてる。ましてや、「東京」なんていう巨大な黒幕組織だったら、その強大な力を巡って色々な人たちの思惑が入り交じってるはずだよ。」
「ってことは、誰かを蹴落として成り上がりたいって思ってる連中にとっては、女王を暗殺して大騒ぎを起こすことは、十分価値があるってわけだ。」
「……つ、つまり、鷹、…じゃなくて、悪役にとって価値がなくても、「東京」の中には女王を殺す価値がある人が大勢いる、ということなのですか。」
「くっくっく！　そういうことよ！　あ、でね、秘密研究所の悪役はこういう設定にするの！本当は研究をもっと続けたいんだけど、それが三年で打ち切られるって話が決まっちゃってるわけでしょ？　だからさ、その研究員は自分がこれまで研究してきたことを全部、無に帰され

ようとしている。つまり、自分が半生をかけて築いた成果が台無しにされそうなんで、非常に辛い思いをしている。いや、それだけじゃない。ものすごくプライドを傷付けられていると思うんだよね。」
「そうだな。その悪役が半生をかけるに値すると信じた研究が、上位の組織に認められず、三年でおしまいにしろなんて言われたら、自分の人生を否定されたように思うだろうからな。」
「それは、きっと辛いだろうね。自分の積み重ねてきたものを全て否定されるのは、きっと傷つくね…。」
「………梨花…。」
「……う、…うん、わかってる。」
何てこと…。……やっぱり、……私の仲間たちは最高じゃないか…。鷹野の輪郭に少しずつ近付いていきた…。
「…あ、あぅあぅ！　となるとその悪役は、その、どういう行動に出るのでしょうか。」
「そりゃあ、最初にやるのは陳情だろうね！　研究を中止しろと言った「東京」に、自分が研究している奇病はこんなにも重要で興味深い！　だから研究中止を撤回してくれと訴えるだろうね。まぁそれでさ、あっさり「東京」が、ハイ了解、研究続行、予算も増やしますって言っちゃったら、漫画にならないよねぇ！　くっくっく！　そこはさ、きっと「東京」のボスたち

に、こてんこてんに扱き下ろされるわけよ！　お前の研究など下らない、こんな予算の無駄遣いの研究などとっととやめてしまえってひどいことを言われちゃうわけよ！」

鷹野は研究の延長を求めて上京したと入江が言っていた。…そして、それを却下されたとも言っていた。

「ほっほっほ！　自分の人生をかけた研究を否定されたら、その怒りは凄まじいですわよ～？　となれば、やることは二つしかないですわ！」

「……さ、沙都子。それは何？」

「決まってるじゃねぇか！　泣き寝入りか復讐、だろ!?」

圭一と沙都子がパチンと手を打ち合う。

「まぁ、そこで泣き寝入りじゃあ面白くないよね！　となればさ、誰よりも慈しみ研究してきたその悪役研究員はさ、他の人の手で自分の研究成果が破棄されるくらいなら、せめて自分の手で、なぁんて自暴自棄なことも考え始めるわけよ！　プライドが高いゆえにね！」

「をっほっほっほ！　そこでさっき考えた話の、「東京」の何者かの思惑が出て来るわけですわ！」

「……ま、まさか！　村が大事になれば、誰かが責任を取らされ、誰かが得をするというさっきの話なのですか…！」

「まさにそれですわ!! 悪役の研究員は研究の生涯を否定されて落ち込んでいる。それをうまく焚きつければ、自分の手を汚さずに村は大惨事! 自分は後から悠々と責任追及に加わってウマウマー! でございましてよ!」
「そういうこと! くっくっく! だからね? 自分の生涯を否定された悪役は落ち込んでるわけよ。そこへ、「東京」の中で誰かを蹴落として出世を目論む若き幹部がさ、その悪役に工作員を派遣して籠絡するわけよ。」
「…自分の存在を否定されて落ち込んでるんでしょ? ……なら、その研究を私は信じてるよ、がんばって、なんて励ましたら、簡単に取り入れちゃうかもしれないね。…プライドが高い人ほど、もろいものだから。」
「ってことはつまり、その悪役も、もっとド汚え黒幕に利用されてるだけってことなんだな。ああ、戦隊モノの悪の幹部にもそういうキャラっているな! 今までがんばって悪の組織に貢献してきたのに、一つの失敗だけで手の平を返したような仕打ちを受けて、処分されてしまう気の毒な感じのやつ!」
「というか、このトラップにおいては、実行役の悪役研究員の始末は絶対でございましてよ? 黒幕にとっては、生かしておく価値がありませんもの!」
「くっくっく! そういうことだねぇ。その悪役も、チョイ悪を気取ったつもりだろうけど、

結局は、人生を否定されるし黒幕に利用されるし、しかも最後には口封(くちふう)じで消されちゃうんだろうから、悪役とはいえ、ちょいと同情を誘いそうだよね。まぁそういうキャラの立て方もありじゃないかなぁ！　…いや、むしろありだよね？　次の新刊では考えてみるかな…。」

……私も羽入も、ただただ唖然(あぜん)としてみんなの話を聞いている。やっぱり、すごい。こいつらは、すごい。それはとても考えられることだし、鷹野の性分を考えてもありえないことじゃないという気がする。…そういえば入江は、ありえないありえないと、否定の言葉をやたらと重ねていたっけ。…それはつまり、…ひょっとするとありえるんじゃないかということの裏返しなのではないか。

　今のみんななら、私の疑問の外堀を埋められるに違いない。……聞いてみよう、聞いてみよう！…

「……あぅ。では、なぜそれを三年も猶予が残っているこの今に自暴自棄になるのでしょう。」

「猶予なんか問題じゃねぇだろ。今日死刑になるのも、三日後に死刑になるのもまったく同じだぜ？　要はその猶予幅の問題だってだけだろ。三年の猶予じゃなくて、三年後に死刑って言われたように感じてるわけさ、その悪役は。」

「そこは、多分、黒幕たちの都合だね。彼らの都合で悪役を操ってるわけだからさ。この時期に村を滅ぼしたい都合は、悪役じゃなく黒幕の方にあるんだと思うね。…何しろ、これだけの

大作戦なんだからさ。起こしたら成功以外はありえない。成功させる鍵は、女王の暗殺だけじゃないよ。暗殺後、緊急マニュアルの執行をトップに決断させなきゃならない。他にも作戦後の責任追及についての事前準備とか、いやいや！　この作戦で一番ダメージが与えられる効果的な時期とかね！　そういうのを計った上で、三年の猶予を余した今、大作戦を実行させるんじゃないのかい？」

「結局、その悪役は、何から何まで利用されて、しかも最後はトカゲの尻尾切りなわけだ。悪役とは言え、気の毒なヤツだぜ。」

「……な、……なるほど……。あぅあぅ…。」

「…で、では、一番重要なことに話を移しますです。それに立ち向かうために、女王の少女はどう戦えば良いのですか？　その子が主人公なのです。」

「ほうほう！　そりゃあ面白そうだな！　つまり命を狙われてる女の子が何とか魔手から逃げられればいいわけだな。」

「連載形式によるねぇ。長期連載ならダラダラと逃げ延びて、次々新しい追っ手や刺客が現れた方がネタ切れにならないよ。」

「……あぅ、できれば短期集中連載がいいのです。」

ぷ。羽入の例えに思わず噴き出してしまう。

「となれば、何とか悪役をやっつけて、ハッピーエンドを目指すしかねぇよな。逃げるより戦う展開の方が熱いってもんだぜ！」
「でも、主人公はただの女の子なんでございますわよね？　どうやって戦うんですの？」
「くっくっく！　今時の少女主人公は無力なんかじゃないよ！　一見、しおらしい可憐な少女なんだけど、秘められた秘密の超パワーを隠していて、実は王家の血筋を引くSランクのハンターで、二つ名は漆黒の堕天使とかってのはどうよ!!」
「はぅ。何だか痛い中学生の創作みたいだねー。」
「…どうしたよ魅音。お腹でも痛ぇのかよ？」
「うぐぐ…、ど、どうせおじさんは永遠に孵化しないピッキなのさ…。」
…魅音、超頑張れ。その漫画、十年後とかに読み返すと甘酸っぱくて悶絶できるかもね…。
「……あぅあぅ。魅音が何を言ってるかよくわかりませんが、とにかく主人公の少女はか弱くて、特別な必殺技とかはないのです。…強いて挙げれば、………猫かぶりがうまいです。あとすごく意地悪で、よく僕を辛い物で苛めますのです。」
「…それはいい設定ね。さっそく今夜から実践するわ。」
「あぅあぅあぅあぅあぅ!!」
「なるほど、等身大の主人公だってことはわかったぜ。……でも、その主人公がこの陰謀に打

ち勝つストーリーってのは、こりゃ難しいな。」
「無理無理絶対に無理ぃ～！　最低でも武器全般が扱えて、無線技術にヘリの操縦くらいはできないと勝てるわけないーー！　さもなきゃソ連の軍事顧問団に特訓を受けたサバイバル技術のプロとかね。ジャングルに潜り込めば、わずかの武器とトラップだけで敵部隊をまるまる混乱させられるくらいのヤツとか！」
「……その主人公に、魅音と沙都子が友達だったなら、それで解決の気がしますのです。」
「ふぇ？　おじさん!?　……くっくっくっく！　そりゃあ、おじさんがいりゃあ話は変わってくるねぇ。私はあらゆる戦闘技術、指揮技術がランクS。加えて、この村がその漫画の舞台だってんなら、土地勘もランクSだしね！　さらに沙都子を敵に回すってのはなお致命的だよ。ねぇ？」
「その悪役がどんな秘密部隊を従えてるのか知りませんけど！　私のトラップ技術の前には物の数ではありませんでしてよ！　その主人公がどんな敵に追いかけられましても、私と一緒に裏山へ籠城してくだされば、指一本触れさせませんわ！」
「うん。沙都子と裏山に籠城すれば、攻め手側は、裏山をまるごとえぐるくらいの艦砲射撃に、ハノイクラスの重爆撃は最低限必要だね。そこまでやってからの裏山突入でも、なお手痛い損害を被るだろうねぇ。しかも作戦指示は私！　……まぁ、攻め手側には硫黄島上陸戦クラスの

損害を覚悟してもらうことになるだろうねぇ！　くっくっく、ねぇ沙都子ぉ？」

「をっほっほっほっほっほ!!　私の芸術的裏山を破ろうと思ったら核弾頭でもお持ちあそばせー!!」

「……確かに、沙都子の裏山はすごいですが、……本当に山狗、…あぅ、悪役の手下たちをやっつけられるでしょうか。相手は荒事のプロなのですよ…？」

「奇襲とトラップってのはね、相手が誰であっても非常に効果があるんだよ。ベトナム戦争がいい例でしょ。世界最強の米軍が最高の装備で挑んだのに、あの密林には通用しなかった。土地勘のある人間が十重二十重に張り巡らしたトラップというのはね、どんなベテランも絶対に侮らない恐ろしい防御力があるんだよ。」

「……その沙都子のトラップは、彼らにも通用するということ…？」

「もちろん！　いや、それどころか、ベテランゆえに足止めの効果が大きいかもしれない。トラップは引っ掛けるだけが効果じゃない。引っ掛かるかもしれないと怯えさせる効果も大きいんだよ。ベテランゆえに慎重になる。ゆえに、裏山への直接侵攻に彼らの指揮官は及び腰になるだろうね。それはつまり、相手が素人である時より時間が稼げるってことだからね。」

「へへ！　攻略には艦砲射撃くらいは必要ってわけだ。まさか、戦争中じゃあるまいし、敵にはそこまでは出来ないんだろ？」

……さすがに、そこまでは無理だろう。

とにかく、魅音は戦術判断については逸脱してプロフェッショナルだ。その彼女が、山狗相手にも沙都子のトラップは十分効果を発揮すると太鼓判を押すのは心強い。

「トラップの弱点は、防御にしか使えないことと、設置に時間が掛かること、そして無差別に発動してしまうことにあるんだけど、その点、沙都子の裏山は全ての条件を満たしているね。」

「そ、そうだね。裏山に立ち入る人はいないいし、すでに沙都子ちゃんのトラップでいっぱいだし。逃げ込むだけですぐに籠城出来るのは、その主人公の大きな強みになるね。」

「そこにおじさんもいるわけなら、その籠城をただの立て籠もりには使わないね！　敵の主力を引き付ける何らかの陽動に使って、その隙に敵を叩く奇襲作戦で行く！　敵を深く誘い、手薄になったところを背後から叩くのは、迎撃・反撃戦術の初歩だよ。水際で絶対撃退なんて、石頭の極みだからね！」

「はぅ〜！　魅ぃちゃんと沙都子ちゃんすごいすごい…！　でも、はぅ、レナと圭一くんだけ置いてきぼりだ…。」

「……なら、僕たちが主人公ということにしましょうです。みんなで仲良くやっつけるのです。」

「よっしゃ!!　そう来なくっちゃな！　へへ、何だよ、俺たちまで加わるってことは、それっ

て部活メンバー対、悪の組織ってことになるわけかよ。」

「…くっくっくっく、ひっひっひっひ！　どんな悪役だか知らないけど、その悪役たちはツイてないよ。どの程度の手勢か知らないけど、くっくっくっく！　正面からぶつかり合うならいざ知れず、私たちに地の利を使わせちゃったら、この村じゃ勝てないよ。雛見沢で私たちに勝とうと思ったら、オーバーロードクラスの大作戦がほしいとこだからねぇ！　もっとも、我が部ならそれすら撃退するけどさぁ…！　くっくっく！」

魅音が頼もしくみんなに笑いかけると、みんなも頷いて返した。

……すごい。我が部が策を尽くしたなら、たとえ山狗が相手でも何とか出来るのではないかと思ってしまう。確かに、正面からぶつかれば、たとえ不意打ちをしたとしても、あっという間にやられてしまうだろう。

……でも、仕掛けるのはこちらで、仕掛けも十分に用意出来ているとなると、……話はまったくわからなくなる。

「……ね、梨花？　みんなはとっても頼もしいのです。」

「…………まったくね。…こんなにも頼もしい味方に、どうして私は今まで打ち明けなかったのか。」

「……ひとりでは出来ないことでも、みんなでなら出来るのです。」

ひとりでは奇跡でも起きなかったら絶対成しえないことでも、…みんなでならあっさり出来る。……つまり、それは奇跡ってことだ。胸の奥がわくわくしてくるのがわかる。……この感情は何だろう？　今の彼らと一緒なら、不可能などないような気持ちになってくる。……羽入が教えてくれる、私の知らない世界では、彼らはあの鉄平の帰宅という最悪の不幸すら打ち破ったというではないか。

……それを私は覚えていないのに、…………でも、…何かが胸の奥で疼いて、……その奇跡が再びこの世界でも起きそうなことを知らせてくれるのだ。

「……み、魅ぃ。それにみんな。……もっともっと、アイデアがほしいのです。私たちがどうやったらこの陰謀に勝てるのか、…もっともっとボクに教えてほしいのです…！」


頼もしい大人たち

■富竹に相談

私が呼び出したのは富竹だけのはずだった。だがそこへは入江も一緒に来た。
……入江としては、今朝(けさ)、私に言われたことが気になって仕方がないが、自分だけでは判断がつかないので、富竹にもぜひ話を聞いてもらいたいという様子だった。
自分は口を挟まないと先に断ると、私たちから少し離れたところに腰を下ろすのだった…。
「入江所長に聞いたよ。………どうして君は鷹野さんを疑ってるんだい？　だって、そんなことをしたら、大変なことになるのを一番よく知っているのが鷹野さんじゃないか。…それに、鷹野さんは君や沙都子ちゃんにあれだけ親切にしてくれたんじゃないのかい…？　それに対し、命を狙ってるように感じるなんて、…ちょっと鷹野さんに悪いようには思わないかなぁ…。」
富竹のこの反応は十分に予想していた。
今日の午前中までなら、この先を続けることも出来ないのだが、私は富竹がこう切り出してくるのを完璧に予想していたので、うろたえず続けることが出来た。
「……富竹。正直に答えてください。そして、真剣に考えてください。……正常な鷹野なら、ボクを殺すようなことは絶対にないと思いますですが、………今の鷹野は絶対にボクを殺さ

ないという保証はありますですか？」

「…そ、それはどういう意味だい…？」

「鷹野は雛見沢症候群の研究に生涯をかけてる。それは事実？」

「……う、うん。…ここだけの話、雛見沢症候群の研究は彼女が中心なんだよ。入江所長は表向きのトップで、研究の一番の中心は鷹野さんなんだ。…………これは内緒だけど、…実は、雛見沢症候群は、彼女のお祖父さんが見つけたものなんだよ。…鷹野さんはそのお祖父さんを特に尊敬していてね。その研究を自分が受け継いで完成させると意気込んで入江機関を設立したんだよ。」

「……そんな鷹野にとって、研究の方針が変わり、三年で研究を終了と宣言された現在の状況はどんな気持ちなの？ ……鷹野は単身上京して、研究の続行を訴えたけど、却下されたんでしょう？ …それは鷹野にとって、自分の人生を否定されることと同じ。とても傷ついたんじゃないの…？」

「…………梨花ちゃん、君はどこでそれを…。」

そこで富竹は一度沈黙する。私の言っていることが的外れでないことがわかったからだろう。

「…………た、………確かに、鷹野さんが新理事会に説明しに行って、かなり悪い評価をされたという話は聞いてるよ。……伝え聞く話だと、相当、研究を馬鹿にされたらしい。予算食い

の無駄な研究だ、みたいに言われてね。……彼女は気丈を装ってるけど、…かなり傷ついたと思う。」

「でしょう？　そんな鷹野が、どうせ打ち切られる研究ならと、自暴自棄にならないなんて、絶対に言えるの？」

「い、…いや、…鷹野さんに限ってありえないよ。…ありえない。」

入江と同じだ。ありえないと連呼しながらも、それでも完全に否定できないのだ。だから、恐ろしい想像を否定しようと、何度もそれを口にしてしまうのだ。……実際のところ、敵が鷹野だとわかっていても、…鷹野がどうして私を殺そうと企むのかは、私たちにとって想像する以上のことは出来ない。鷹野をふん縛って、カツ丼食わせながら白状させる他に知る方法はない。しかし、富竹に鷹野を疑わせる意味はあるのだ。

……富竹に鷹野を疑わせ、私の味方につけることが大事なのだ。もちろん、これも我が部の部長の作戦だが。

「……確かに、少々恐ろしい想像ではあるけれど、…それでも鷹野さんがそんなことをして得をすることはないよ。自暴自棄になりたい彼女の気持ちには少し理解できるけど、それでも彼女にだって理性というものがある。…彼女も、その辛い気持ちを時間で癒せるさ…。」

「……傷心の人は、誑(たぶら)かされやすいということはありませんですか？」

「たぶらかされる、とは……、どういう意味だい。」
「富竹。ボクが死んだら大変なことになりますすね？　緊急マニュアルが執行され、村が丸ごと抹殺される。」
「え、えぇぇッ!?　………ぁ、……ぁははははは、そ、そうなのかい!?　ぼ、僕は知らなかったなぁ…。」
…何ともヘタクソな誤魔化し方だ。バレバレというか、裏表がないというか、隠し事が出来ないというか。………ゆえに、いい人なのだろうが。
「入江に聞いていますから知ってますです。時間がもったいないので、誤魔化しっこはなしにしましょうです。……その緊急マニュアルは、あくまでも最後の手段ですから、それを実行すれば、大変なことになりますですね？」
富竹はほんのしばらくの間、緊急マニュアルの存在を認めていいものか迷ったが、入江が話したという事実と、私が女王感染者という当事者の一人であることを加味し、その存在をおずおずと認めた。
「……ぁあ、大変なことになるよ。村をひとつ消し去るなんて簡単なことじゃない。危険な橋をいくつも渡らなければならないし、仕方がないとはいえ、人道的に許されることじゃない。本当に大変なことになるよ。」

「単刀直入に言います。その緊急マニュアルで得をする人間がいるはずなのです。」
「まさか！　いるはずがないよ……！　それどころか、責任問題やら何やらに発展し、場合によっては東京だけでなく、政府内の問題にも発展しかねない……！」
「……となれば。その騒ぎで得をする人がいるのではありませんか？　緊急マニュアルが執行されるようなことになれば、執行はやむなく行なうが、その後、そうしなければならない状況に陥らせた人間たちへの責任追及が始まる。…具体的に言うと、入江機関を統轄している上の連中ね。その黒幕たちが責任を追及され、「東京」で失脚するということは？」
「…………ん、……………ど、どうだろう。」
「ポストは有限。狙う人間は常にいる。それを奪うために、緊急マニュアルという危険な爆弾の導火線に火をつけてみようという人たちが、いてもおかしくないんじゃないかしら…？　自分は安全な場所に隠れていて、全て吹き飛ばした後、空いたポストにちゃっかり座る。」
「…………………う……………。……………むむむ………。」
　この辺りはすべて魅音の受け売りだ。
「東京」のことなど欠片ほども知らないはずなのに、当事者の富竹をこれほどうろたえさせる核心を突くとは……。……魅音は確かに、我が部の誇れる最高の指揮官であり、参謀だった。
富竹はいつしか腕組みをして落ち着きがなくなり始めていた。

…私の話が、ただの世迷言の域を出ていると気付き始めたようだった。

「…………確かに最近、東京である大物が死去してね。それに伴い、後釜を巡って派閥抗争がとても激しくなっているんだ。入江機関のクライアントであるアルファベットの理事会も粛清と呼ばれるほどの人事の大刷新があってね…。それで、旧派閥の庇護を受けていた入江機関は槍玉に挙げられて、研究の即時中止が決められた、みたいな話はあるんだよ…。」

「……そんな中、もし私が死に、緊急マニュアルが執行されなくてはならなくなったら、入江機関とその黒幕の理事会、そしてそれを擁する派閥は、必ず責任を追及される。………本来なら、雛見沢症候群などという危険な爆弾の存在は「東京」以外は誰も知らないから安全だけど、…「東京」の中に敵が出来た場合に限り、その敵にとって雛見沢は、あまりに簡単に爆発できる爆弾となる。」

「…………………………それは、梨花ちゃんの創作かい…？」

「……創作ですか？　事実ですか？」

「…………ど、どうだろう。でも、今の東京のごたごたを見ていると、………なるほど、…そんな恐ろしい絵を描いている連中がいたとしても、……、…いや、………ありえるかもしれない…。」

「…富竹。……富竹はいい人です。親しい友人のことを信じる、とてもいい人だと思います。

…だから、そんな富竹にこう言えば、受け容れてもらえないことはわかってる。…………でも、入江機関への監査役である富竹二尉にボクは訴えねばなりません。」

「…………………まさか、……それで、…鷹野さんだと言うのかい…。」

「はい。……研究の継続を却下され自分の人生を否定された鷹野は、のみならず理事会から扱き下ろされてとても傷ついています。…それはいつも側にいる富竹ならわかっているはずです。」

「………………………。」

「……その傷心の鷹野に、彼女を利用したい何者かが接触し、唆すというようなことはありませんですか。………傷ついた人は、自分を理解してくれる人に心を許してしまいやすい。……鷹野に、「東京」での混乱を目論む何者かが接触して取り入り、何かを焚きつけたかもしれないのです。」

富竹は、鷹野さんに限ってそんなことは……、と何度か繰り返したが、やがてそれも治まり、再び沈黙した。富竹だって大人だ。傷ついた人の心について思いを馳(は)せるだけの人生経験はある。

……だからこそ、今、鷹野がとても傷ついていて、……それを利用してもおかしくない何者かがありえることがわかる…。

「…………梨花ちゃんの言い分はわかったよ。…僕も、鷹野さんを本当の意味で信じるために、…そういう疑いがないことを先に晴らしておく必要があるね。」

「富竹…。」

「すぐに山狗の小此木くんと東京に連絡して、鷹野さんの近辺に不審な動きがないか確認させるよ。山狗は防諜が専門だから、」

「駄目です。山狗も鷹野の手先です。」

「な、……何だって……。」

「……鷹野を懐柔するような相手です。もちろん山狗にだって手を打っています。」

「…………それは、……ありえない話じゃない…。…山狗は防諜部隊。仮に入江機関に内通者がいても、彼らが任務についている限りとても困難なはず。………なら、山狗ごとということも……ありえるのか……。……く、……しかし……。」

「富竹。鷹野と山狗に内緒で調べてください。入江はボクの味方ですが、「東京」については詳しくありません。」

「……はい。私は一研究者に過ぎません。所長という肩書きも、彼らの都合でもらったお飾りに過ぎないことを認めます。……ですから、私では梨花さんの疑念を晴らしてあげることが出来ません。」

「…………わかりました。…万が一、入江機関が謀反を起こす可能性だって、予見されてないわけじゃない。…そのために僕が送られてきているんだからね。………鷹野さんと山狗の近辺について、至急、調査させるよ。」

「…………ボクの話を信じてくれてありがとうです。…ボクの話を信じてくれたのはこれが初めてなのです…。」

数多の世界で笑い捨てられた。…それが、…ついにとうとう、富竹に話を聞いてもらえたのだ。

……富竹は、鷹野たちと戦う上で強力な味方となるはず…。そして、その富竹に話を聞いてもらえるよう私に仕込んでくれた部活メンバーたちには大感謝だった。

入江から状況を聞き、それを部活メンバーに話して分析してもらい、だからこそ富竹に話を聞いてもらえる…！　羽入の言う通りだった。ひとりでうじうじしていたら何も出来なかった。でも、みんなに相談したら、あっという間に状況が変わり始めている…！

「……実は今日から、しばらくの間、身を隠そうと思いますです。魅音の家には秘密の地下があり、好都合なのです。」

まだ魅音には、このことは相談していない。……でも、今の魅音なら多分、私の話を信じてくれると思う。

「なので、何かあったら、魅音に連絡してください。……僕は今日から当分の間、行方不明ということにしてくださいです。」
「……了解したよ。僕もそれが安全だと思う。僕は普段通り振る舞うよ。不審がられないためにね。もちろん用心はする。…入江所長も普段通りにしてください。ですが、常に用心を。」
「わ、…わかりました。せいぜい用心します。」
「……富竹、気をつけて。あなたは近日中に暗殺される気がしますです。」
「…………………………。」
この一言が、これまで一度も真剣に受け止めてもらえたことはない。……頼む、…届いて…！
「………わかった。特に用心するよ。ありがとう。」
その時、富竹がはっとして振り返った。その様子から何か異様なものを感じたので、私と入江は焦り、身を硬くする。すると、……じゃりっと足音がいくつか聞こえた。何と言う無用心なのか、私たちはこの話を誰かに聞かれていた⁉　まさか、…鷹野たちに⁉
「………………んっふっふっふっふっふ。」
そのクセのある笑い声には聞き覚えがあった。
「………こんにちは。これはこれは、珍しい面々ですねぇ。入江先生に富竹さんに、梨花さん。

……私も雛見沢に出入りして長いですが、何とも珍しい取り合わせです。」
「…こ、…………これはこんにちは。大石さん。あれ？　今日は綿流し準備会の打ち合わせでしたか？　にしてはまだだいぶ早い時間ですね。」
入江がこの場をはぐらかそうとするが、一部始終を大石に聞かれてしまったのは明白だった。
……「東京」の人間である富竹たちはともかく、…今の段階で大石たち警察はまずい。
……話がややこしくなりかねないばかりか、鷹野たちの裏をかこうというこのタイミングで…、とにかく、……なんてツイてない…！
「いえね？　ご自宅にお伺いしましたら、北条さんに、こちらにおられるとお聞きしたもので。そうしたら、皆さんの密会にばったりと出くわしてしまったというわけだったのです。……いや、お邪魔をしてしまったようで、申し訳ございませんですねぇ。…んっふっふっふ！」
場が凍るように沈黙する。大石のこの言い方は探るような言い方だ。…大石自身、話の一部しか聞いていないので、その内容を把握しきれていないのだろう。
…だから、私たちの方から白状させるような回りくどい言い方になる…。
「皆さん、そんなおっかない目で見ないでください。照れちゃいます。…いえね？　今日来た理由は他でもありません。梨花さんに、懐かしいお友達を連れてきたのですよ。んっふっふっふ！　梨花さん、覚えててくれるかなぁ。忘れられちゃってたら、彼、はるばる来てくれたの

に、泣いちゃうかもしれません。んっふっふっふ！」
……え？　………え？？　その回りくどい言い方が示す人物の名を、私は一人しか知らない。
でも、彼が昭和五十八年六月に来てくれたことなんて、…あったっけ……？
で、でも、…他にこんな言い方をする誰が私を訪ねてくるのか……！
「ささ、どうぞどうぞ。」
大石に促され、……現れた精悍な男は、…………私の知る赤坂よりずっと頼もしそうに成長していた。
「あ、…………赤坂…………。」
「覚えてくれていてありがとう、梨花ちゃん。…はははは、今度は東京へ帰れなんて言わないだろ？」
「……あ、………赤坂、………赤坂………ッ！！」
「君の助け、…ちゃんと覚えてたよ。………あるいは、一度は忘れてしまったのかもしれない。でも、……それを忘れたらきっとものすごく後悔するに違いないんだ。…だから、ちゃんと思い出したよ。…君が教えてくれたから雪絵に電話して、雪絵が事故に遭わなかった。だから君は雪絵の恩人なんだ。………だからその恩を、私は今、返しに来たんだ。…………………本当に長いこと忘れていた気がする。…でも、ようやく思い出したよ。……長いこと、待たせてす

まなかったね。」

「…ほ、……本当に長いこと待たせやがったです……。そして、……こんな最期の最期の世界で、………本当に都合よく帰って来やがったのです……。赤坂、………赤坂………！」

「私は無条件で君の味方だ。君のどんな不思議な話も信じるよ。そして、君の命を狙うという敵を必ず打ち砕いてみせる‼」

…赤坂はそれを口にしながら、とてもとても不思議な記憶を思い出していた…。

それは、誘拐事件で雛見沢を訪れている間に、妻を事故で失い、……その悲しみから少女の助けを忘れ、………それを手遅れになった後に思い出して、自分の無力さを嘆く、辛く悲しい世界の記憶。

そんな、ここじゃない世界の記憶が、赤坂をここへ招いた。その言葉が、……自分には味方がいないと長いこと信じてきた梨花にとってどれだけ染み入るものだったのか。…赤坂の胸に顔を埋めて嗚咽を漏らす様子から、それをうかがうしかない…。

「……いや、私ゃ見ていませんよ？　東京に奥さんがいるのに、雛見沢にこんな幼な妻の現地妻がいたなんて知りません！　ええぇぇ知りませんよ〜？」

「お、大石さん、違うんです、そういうのじゃないんです…！」

「赤坂……赤坂、………赤坂、………赤坂………、ぅうぅうぅぅ！」

ひとりでは鷹野に打ち勝てないと愚痴った。それを羽入に諭された。
みんなに協力を求め、一つのことを信じれば必ず奇跡が起こると諭された。…内心、そううまく行くものかと思ってた。
なのに、入江に話し、みんなに話し、富竹に話し、どんどん、どんどん流れがよくなってきて、………そこにさらに赤坂が帰って来るという奇跡まで重なるなんて………。赤坂は帰って来るべくして帰ってきたのか。それとも、……これが奇跡なの？
起こるんだ、奇跡は。
…今まで一度も助けに来てくれなかった男が、それでいて一番頼もしいかもしれない男が、……帰ってきて、無条件で私の味方になると誓ってくれたのだ…。

「…………………ね？　起こるのです。奇跡は。」
羽入が、私にしか見えない姿で現れ、そう囁く。
「……起こるね。起こせるね…。まだまだ、まだまだ力を合わせたなら、もっと奇跡は起こるのかな。…そしたら、……昭和五十八年の呪いを打ち破れるくらいの奇跡を、起こせるのかな……！」
「起こせますです。だって、…昭和五十八年六月は、みんなが手を取り合わないと、破れない

のですから。」

……かつて傍観者だった羽入に諭される。戦うふりをして、実は一番不貞腐れ、一番傍観者だった私に諭す…。

「……大丈夫かい、梨花ちゃん。」

「…………ご、…ごめんなのです。…ちょっと……、懐かしかったので取り乱してしまいましたです。……みー。」

私はそう誤魔化しながら、感涙に潤んだ目を擦る。ひぐらしの声は、さっきから何も変わっていないのに。私に最初からとても大切なことを訴えていたような気がして。……私は大切な何かを教えられたような気持ちになり、もう一度だけ目を潤ませるのだった…。

「は、はははは。これは、驚いた。梨花ちゃんに素敵な彼氏がいたものだね。…ははは。」

状況が読めない富竹は、苦笑いしながらそう言うのがやっとだった。

赤坂は富竹に向き直ると自己紹介する。

「…自己紹介します。私は赤坂衛。警視庁公安部の資料室第七室に勤めています。」

「………東京の公安部資料室は確か、内調別室並みの極秘部門ではありませんでしたか。…秘密警察の批判もあるような極秘の強硬捜査部隊だったはずです。」

秘密部門にわざわざ秘密と冠する馬鹿な部署はありえない。本当に秘密の部門は、一般を欺くために、一見、下らなさそうな名前をしているものなのだ。
それは赤坂の部署も同じだ。資料室という名前を持っているが、彼らが資料室の管理人であるわけもない。
「…お詳しいですね。公安部資料室の正体を知っている方がいらっしゃるとは思いませんでした。……先ほどのお話から察するに、どうやら訳ありの方とお見受けします。」
「……いや、はっはっはっは！　ちょっとマニアでしてね。たまたま知っていただけなんですがね。…はっはっは…。」
「富竹さん、この際だから、本当の自己紹介をしちゃいません？　私も、あなたがただの旅行写真家ってことはないだろうってずっと思ってきましたから。」
大石がニヤリと笑って凄む。…彼の長年の勘が、富竹の隠された正体にすでに気付いているのだ。
「い、いえ、そんなことはないですよ。僕は写真が趣味なだけの、ただの、」
どうせ最期の世界だ。こんな腹の探りあいなんて時間の無駄だ。
「……富竹はボクたちと東京の間をつなぐ連絡のお仕事なのです。でも、ボクの味方なので

す。」

「り、梨花ちゃんッ…‼︎」

富竹と入江が同時に驚いた声を上げる。…彼らにとってそれは重要な秘密だし、…それが部外者に知られたら、山狗に処分させなければならないからだろう。

だが、もういい。疑ったり訝しがったり。そんなのはたくさんなんだ！　富竹はもう誰が見ても嘘の上塗りにしか見えないのに、あわあわしながらそれを否定している。

「……入江所長さん、でしたね？　五年ほど前、私が誘拐犯たちとの乱闘で怪我をした時、お世話になりました。あの時は丁寧な治療を本当にありがとうございました。」

「あ、……あぁ、あの時の…。いえいえ、自分の仕事をしたまでですよ。」

赤坂は入江に対しても挨拶をする。五年も前に少しだけ顔を合わせただけなのに、よく覚えているものだ。当の入江は、そう挨拶されるまで思い出せないようだった。

「そして、入江診療所には、入江機関という別名もある。……そうですね？」

「い、……いえ、…どうでしょう……。」

赤坂は表情を少しだけ厳しくして、そう切り込む。

「んっふっふっふ！　入江先生〜、もう隠しっこはなしにしましょう。私たち、さっきしっかりと聞いちゃってるんですから。」

「……先ほど、入江機関のクライアントのアルファベット、と仰いましたね？　実は、皆さんがお話にならられなくても、その一部始終を存じております。つい最近まで私の第七室は、巨額の裏金ルートとそれを牛耳る黒幕たちを内偵していました。アルファベットプロジェクトとは、その裏金ルートの内の一つです。」

それこそが、赤坂があの日、手に入れた極秘書類なのである。

そこには、省庁の公金をプロジェクトに援助する形で、特定の人物たちの私腹を肥やす実態が全て暴かれていた。……彼らはその裏金で、裏金でしかできぬことで裏から日本再興を図る、と主張していたようだが、それは彼らの中ですら欺瞞。

プロジェクトを牛耳る黒幕たちの莫大な権益となっていたのである。それを暴けば、日本の中枢が引っ繰り返りかねないくらいの政変が起こる。…表向きはそういうことになり、その捜査は強力な圧力を受けて中断されたのだった。

「最初にお断りしておきますが、第七室のこの調査はすでに中断され、私たちはその任を解かれています。……ですので、私は業務上知りえたことを勝手に口外しているに過ぎません。もちろん、私は雛見沢へは休暇として訪れています。…そこだけ、誤解がないようにお願いいたします。」

「…………………………。」

富竹は何とか言い逃れようと、ある意味、職務に忠実に悪足掻きを続けているようだったが、…入江はそうではない。アルファベットプロジェクトの名まで知るなら、もはや何の言い逃れもできまいと腹をくくったようだった…。
「その、裏金ルートから毎年、巨額の裏金が、入江機関という鹿骨市内にある研究機関に流れ込んでいることが、すでにわかっています。…そして、入江機関という機関名にはカッコ書きで、入江診療所との補記までされています。…そして入江機関トップは、自衛隊から出向している二等陸佐、入江京介氏とも。」
「……二佐ぁ！　い、入江先生、あんた、…自衛隊の人だったんですかッ！」
「ち、違います違います！　私は自衛隊なんかではありません…。……富竹さん、もうお話ししましょう。それに、私たちのクライアントはともかく、私たち自身は別にやましいことをしているつもりはないんです。これ以上しらばっくれるのは、かえって大石さんたちを疑わせるだけだと思います。」
「……入江の言う通りなのです。大石は、きっとボクたちの味方になってくれますです。」
…あぁ、もうこの期に及ぶと、あの大石ですら味方になってくれるのではないかと思えてしまう。
そうなればどんなに心強いことか…！　富竹は、ここまで話が進んでしまった以上、もう言

い逃れは出来まいと思ったのか、ここだけの話だと何度も断った上で、…半ば、もうバレていることを認めた。私はそれを引き継ぎ、…雛見沢症候群という風土病の存在、それの研究のために設立された入江診療所の存在。
…そして自分という特殊な存在と、……それに及ぼうとしている何らかの陰謀についてを全て話した。大石はそれら全ての話に大仰に驚いていたが、さすがに最後には赤坂に静かにしてくださいと言われ、大人しく話を聞いてくれた。赤坂は、警察でも特殊な部門にいるというだけあり、私たちの話に特別驚きはしなかった。
…そういうこともあるかもしれない、なるほど…、などと頷き、かなり高い理解力を示してくれていた。
……これは、私にとってあまりに嬉しいことだ。
「…………確かに、梨花ちゃんの言う通り、…恐ろしい陰謀を企む連中がいてもおかしくない。大石さん、これらの話は全てありえる話です。」
「……はあ…。……私ゃ、何かの小説の筋書きみたいな気分ですが…。………いや、…………………それが真実ならば、………むむむ。」
頭の柔らかい赤坂に比べると、大石の頭は少々固いようで、現実離れした話の数々を理解するためには、少なくとも三本以上の吸殻(すいがら)を踵(かかと)ですり潰さなければならなかった…。

「……ボクは鷹野が怪しいと思っています。ですがその証拠はありません。それを確かめるために、富竹に調査をお願いしていたところなのです。」
「大石さん。その鷹野という女を別件逮捕で勾留することは？」
「………むむむ。退職金が吹っ飛びそうですが、…やってやれないことはないですなぁ。」
「興宮署にも、山狗の防諜要員が入り込んでいるはずです。多分、大石さんがそれを実行しようとしても、署内で圧力がかかるはずです。」
「鷹野さんの調査はこちらでするので、それまでは変に警戒されるようなことは慎んでいただきたいのが本音です。」
「…そうですね。鷹野氏の調査は、富竹さんの機関の人間にしかできないなら、警察が余計なことをしない方がいいかもしれません。………それに、どうも関わるヤマが大き過ぎる気がします。……大石さん。冷たい言い方をしますが、…あなたはここで引かれた方がいいかもしれません。」
「…赤坂さん、そりゃどういう意味ですか。」
「先ほども言われました通り、…大石さんは今年で定年じゃないですか。長かった危険なお仕事がようやく終わり、その労いとして退職金を得られる直前にいる。……お金は大事です。家のローンの完済や老後の蓄え、そして第二の人生の支度金。ですが、今回のヤマは危険すぎる。

……私の勘から言って、このヤマは多分、最後にはなかったことにされる。つまり、」

「全てを失う覚悟がなきゃ、今からでも遅くないから引き返せ、って。そう仰るんでしょ…？」

「………そうです。大石さんほどの方にこんなことを言うのは、若輩の身には過ぎたことだとわかってます。……ですが、私は今日まで一般警察とは次元の違うヤマにいくつも関わってきました。だから、…その経験の上で、大石さんにご忠告させていただいてるんです。」

「……………………………。」

大石は馬鹿じゃない。…そして大人で、本当の意味で頭がいい。男としてのプライドだけなら、先輩を馬鹿にするなと赤坂を殴りつけたい気持ちもあるだろう。

だが、赤坂が言っているのは真実であり、退職金というのはそれほど重い。人は定年退職で三途の川を越えたりはしない。

そこからまだまだ十年二十年と新しい人生が開けていくのだ。……その第二の人生の基礎となるのが、退職金。退職金は、ただのカネじゃない。

それはとてもとても重く、あまりに尊い。雨の日も風の日も、上司や先輩のいびりに耐えて歯を食いしばった。こんな職場やめてやる、転職して自分にあった職を探してやる、若者なら口走りそうなことを大石だってこの歳になるまで何度呟いてきたことか。それに耐え理不尽な

仕事を黙々とこなした。給料ではとても報われない仕事をずっと堪えてきた。
そんな思いを、定年まで何十年も！　その末に、やっと与えられるのが退職金というものなんだ。
額が大事なんじゃない。それまでの人生を評価してもらえるという、心の問題なんだ。それが、もし不祥事などがあれば、退職金に対する懲罰となって現れる。
……それは、ひとつの不祥事が、大石の警察人生そのものを否定してしまいかねないということだ。それは、軽くない。赤坂ならまだ若い。
仮に警察を懲戒されても、まだ再就職を捜せるだろう。だが大石の歳ではそれは見込めない。退職金を当てにしたローンの返済計画もある。
……本当の本当に大人だからこそ、危険な橋など渡れないのだ……！　赤坂は、そこまでを加味して大石に言った。それを大石もわかっていた。
……だから、………今ここで辛い問い掛けをして、…大石の心の覚悟を計っているのだ。
「…………私がお小遣いを残したいばかりに、ずいぶんのんびりしたローン返済をしちゃいましてねぇ…。もっと繰り上げ償還とかしてりゃあ、利子の分、得をできただろうに。…博打やらお酒やら、そんなものに使うお金が残したくてね。……もし私が、ツケを退職金に回すような人生を選ばず、もっともっと賢く生きてきたなら、………ここで私はカッコよく、懲戒な

んか怖くないって意気込むところなんでしょう…。」
大石の握る拳が震えている。……それは、流し方を忘れた大石なりの、落涙なのかもしれない。
「でもね…、それでもね…!! 私ゃ刑事なんですよ、今の今まで、そして退職の瞬間まではね!! いや、そんなのはもうどうでもいいのかもしれない。…私ゃ墓前で誓ったんですよ、おやっさんを殺した犯人を必ず挙げてやるって！ それはつまり、おやっさんを殺した犯人を挙げるまで、私はいつまでも刑事でいるって誓いなんです！ それはつまり、…私が警官かどうかってことじゃない!! 私が、仇を取るその日まで、たとえ懲戒を食らったって刑事魂を忘れないっていうことなんです！ その私が、……その私が、………懲戒免職が怖いって？ 退職金がフイになるかもしれないのが怖いって？ ……あぁ怖いですよ！！！ 何千万ってカネが入ることを当てにした人生設計が全部パーになるんですよ!? 北海道でのんびり家庭菜園を楽しんで、ススキノで遊んで社交ダンスを始めて！ それがパーになるのの、何が怖いってんですかね!? 私の刑事魂は、…そんなもんだったんですかね… 雛見沢村連続怪死事件の真相を暴く！ 夢にまで願った真相の扉が今ここにあるってのに……!! くそおおぉ、畜生おおぉ!! 警察手帳を叩きつけりゃいい！ 警察なんていつでもやめてやるって、何で言えないんだッ!! くそくそ、畜生おぉおぉおお!!」

…誰も大石を安っぽく励ませない。

……それは、人生をここまで堅実に積み上げて来た大石だからこその、岐路。

……積み重ねの及ばない若者風情に何の言葉が掛けられるというのか。

「……………大石さんは確か、…殺された現場監督さんのご友人でいらっしゃいましたね。」

「……………ええ。友人であり兄貴であり、親父でした。」

「…私は、形式だけとはいえ入江機関の長です。…多分、梨花ちゃんを巡る陰謀が暴かれれば、必ず私にも飛び火し、何らかの形で責任を取らされる日が来るでしょう。…そうですよね、富竹さん？」

「……………………。」

そのための、形だけのトップ。…入江機関にとって、入江という存在は、鷹野の研究のために用意されたトカゲの尻尾でしかない。

…それを富竹は知っていたし、…入江だって薄々と気付いていていた。たとえ入江に何の非がなくても、監督責任を問われ引責することになるだろう。

……それが、誰かに責任を取らせて更迭しなくてはならない、組織の禊だ。そのために、長は多くの手当をもらっているのだから。

「……全てが終わったら、大石さんに、雛見沢村連続怪死事件の、…全てをお話します。

「……本当は終身の秘匿義務があるのですが、…お目こぼしをくださいますよね、富竹さん…？」
「…ははは。…………私は、何も聞いていませんので。だからこういう言い方になる。」
律儀な富竹は、いいとは言えない。だからこういう言い方になる。
「……いやいや、……そういうわけには行きません。…そいつぁ、皆さんに協力した勇気ある大石蔵人に教えてやってください。………退職金が欲しくて保身に走る見っとも無い大石蔵人にゃ、過ぎたもんです…。」
あれだけ欲した連続怪死事件の真実が目前にあるのに、……それを胸を張って受け入れることができない葛藤(かっとう)。……その重みの全てを理解するには、大石と同じだけの人生の苦労を重ねなければならない。
……それは、深く、重い。…若輩ごときでは…とても…測れない…！
「…私に、考える時間をもらうことは出来ませんかねぇ……。真相を暴き、…悪を討ちたい気持ちはあるんです。……そのために勇気を持つ時間を、……少しだけもらうことは出来ませんかねぇ……。」
それは誰に問い掛けたものなんだろう。
……大石に性急な決断を迫る資格など、この場にいる誰にもない。…もちろん、…私にも。

でも、……大石は誰かに許しがもらいたかった。
一日たりとも冷ましたことのない刑事魂を未だ持ちながら、勇気を見せることに躊躇する自分の不甲斐なさを、誰かに許してもらいたかったのだ。
……でも、それが誰にも出来ないから、大石の嗚咽を止められなくて……。
「……はい。その時間を、僕は許します。」
羽入？　いつからそこに…？
羽入はいつの間にか、そこにいた。…いや、いつだっている。だって羽入は雛見沢の守り神なのだから。
「……あなたが決心するのに必要な時間を、僕は許します。……あなたは今日まで自分に素直であり、そして厳しくもありながら今日までの人生を積み重ねてきました。そんな、決して軽くない人生だからこそ、決断を求められる時にも、その選択肢は重みを得るのです。軽々しい選択や蛮勇は決して誇らしいものではない。……真に誇るべきなのは、あなたのような真に重い人生を歩んできた者が、本当に重い選択をした時なのです。」
私たちには横柄に聞こえるその言葉も、……今の大石には必要なものなのだ。
そうさ、……大石という最年長者にそれを諭せる人間が、どこにいる？　いない、いるはずがない。

……たった一人いるのは、……千年以上も人間を見守ってきた、……羽入だけじゃないか。

「……あなたが冷静で落ち着きある選択をしようとも、勇敢で男らしい選択をしようとも。私はあなたを讃えましょう。それが、あなたの悩みぬいた選択である限り。」

「…………初めて会うお嬢さん、ありがとう。…なぜか、一番嬉しかった言葉です。…臆病な私に、時間を許してくれてありがとう。」

……私が声を掛けたなら、大石に味方になってくれとか助けてくれとか、そういう言葉を掛けていたに違いない。…でも、きっとそれは心に届かなかった。

助けてほしいなんて言葉は私の都合だけの言葉。大石の重い人生に何も思いを馳せない、届かない言葉だったろう。

だから、羽入の言葉は届く。羽入の口から聞いたことはないが、……羽入は大石が生まれてきてから、今日までの重く長く、辛くもあり楽しくもあった日々の全てを見てきているのだ。

……だから、言える。届く。……羽入だけが、許せる。

「…………入江先生。…たったひとつだけでいいんです。…教えてください。」

「…ええ。何でも聞いてください。」

「………私や、おやっさんをバラバラにして殺した連中を裏で糸を引いていたのは、園崎家だと信じて追ってきました。…それは正解ですかね…?」

「…………いいえ、…不正解です。雛見沢村連続怪死事件は、…全ては私たち側から説明出来ることです。」

「……………………………そう、ですか。」

大石は頭を掻くようなフリをする。

……長いこと、そうだと信じて追ってきたことが、…当事者から的外れだと指摘されたのだから、…少なからず悔しい気持ちもあるだろう。でも、入江の言葉だけでは少し足りない。それを私が付け加える。

「……大石。オヤシロさまの祟りと呼ばれる事件は、どれも、村人の暗躍によるものではありません。園崎家も御三家も、そして村人も、一切が関係ないのです。」

あったのは、誤解と勘違いとすれ違いと、……悲劇と喜劇。

散らばった点を無理やり集め、全て村の陰謀に思わせてしまう勘違いこそが、オヤシロさまの祟りの正体と言ってもいい。

「……それじゃあ、私が今日まで集めてきた、園崎家が裏でどうこうってのは、ぜぇんぶガセだったって、そういうことですかね。……ははは。」

「……園崎家当主には、如何なる天災も全て自らの差し金であるように振る舞うべしという秘密の家訓がありますです。……園崎家は何も知らない。いや、それどころか、毎年起こる事件

に怯えてすらいる。…でも、それを家の威厳に組み込むため、黒幕を装っているだけなのです。」
「そんな家訓があるのですか……。…なるほど、…………納得です。」
「……………はははは、はっはっはっはっは！　それが本当なら、……お魎の婆さんめ、……くそ、…思わせぶりなことばかり言いやがるなぁ…！　ははははは、はっはっはっはっはっはっは！　………それ、本当なんですよね…？」
「……本当なのですよ。古手家当主の秘密巻物にも書いてありますです。見ますですか？」
「…はははは、はっはっはっはっはっは…‼」
大石は何が可笑しかったのだろう…。多分、この場にいる誰にも大石の胸中はわからない。
………千年以上、人間を見守った少女を除いて。
「……大石が嬉しい気持ち、…僕にはわかりますです。」
「おや、……何がわかるって言うんですか…？」
「……誰かを憎まなくていいというのは、……とてもとても幸せで、気持ちいいことだって、わかりますから。」
「はっはっは、まさかまさか。…園崎家が鹿骨市内を牛耳る性質の悪い暴力団組織であることに変わりはありません。……連中のとこのチンピラに刺されたこともありますからねぇ？　別

に怪死事件の黒幕でないとわかったからと言って、私にとって敵対的な存在であることが変わるわけではありません。…まぁそれだけのことなんですが、なぜか愉快になっちゃいましてね。…なっはっはっはっは。」

羽入の言うことが正しいのかどうか、私たちにはわからない。

だって、大石はずっと園崎家が黒幕だと信じてここまで来た。

それが実は違っていたなんて言われたら、それまでを全て否定された気持ちになってがっかりするのではないかと思う。………でも、羽入はそうでないと言うなら。人を憎み続けるというのは、それだけ辛いことなのかもしれない。

……私は大石の、自嘲的にも見える笑いから、それだけでは説明出来ないものをわずかに見つけ、そう想像するしかない…。大石は少しだけ頭を冷やしたいと言い残すと、煙草をくわえながら向こうの方へ去っていった…。

「……鷹野さんがシロかクロか、それがわからないことには話が進みませんね。富竹さんの方の結果を待ってからしか動くことはできないでしょう。」

「梨花ちゃんが、なぜ鷹野さんをそこまで疑うのか…、個人的には鷹野さんに悪い気がするけども…。でも、梨花ちゃんの言うことにも一理はあった。……梨花ちゃんは大切な身なんだ。その周りには、疑わしい存在はわずかほども存在してはならないからね。」

富竹は、あくまでも鷹野がシロであることを確かめるために調べる、という言い方をした。彼女に好意を寄せる彼なら、こういう言い方になるのは無理もない。……私だって、鷹野がシロであればと思いたい。

鷹野は私の理解者のひとりで、心強い味方の一人だったはずなのだ。…それを信じて、百年間にもわたり交流してきたのだから。だが、羽入は言う。鷹野はクロなのだ。

………叩けば埃が出るのなら、…それを富竹がどこまで掴めるのか…。

私以外の人間の力を借りるには、鷹野がクロである証拠は欠かせない。…だから、今は富竹に全てを委ねるしかない。

「富竹さん。くれぐれも身辺にはご注意を。もし相手がクロならば、あなたの身に最初に危険が。」

「……わかってます。すぐに宿を入江機関に内緒で変更します。…本当はすぐに雛見沢を離れた方がいいのでしょうが、もし鷹野さんがクロならば、それはかえって逆効果です。」

「難しいところですね。…内偵中は普段通りに装うのが初歩ですから。もしよろしかったら、私の宿に入りますか？」

「いえ、それには及びません。大丈夫、十分に注意します。」

「……梨花ちゃんの身が一番不安だよ。どうしたものか…。」

「…………どうしよう。……羽入、どうしたらいいと思う…？」

「……将棋(しょうぎ)に例えたら、梨花は剝き出しの王将です。梨花さえ抑えれば、このゲームは鷹野の勝ちになりますです。」

「将棋の定石は、まず王将の守りを固めてから。…よね…？」

「……はい。今日は木曜日。綿流しは明々後日。……最低でも、綿流しの日まで、誰にも知られず、そして一番安全なところに避難(ひなん)するべきかもしれないです。」

「そんなうまい場所、あるかしら。」

「……僕は、そこは魅音に頼るべきだと思いますです。」

「そうね…。園崎本家の地下祭具殿は立て籠もるにはとても理想的。」

「そこへは、沙都子も連れて行くべきだと思いますです。」

「……沙都子を残して私だけが消えれば、その行方は沙都子が知っているに違いないということになる。………残せば沙都子にも危険が及ぶものね。」

…となれば、沙都子と魅音には真実を話さなければならなくなる。…漫画の筋書きの話という騙しじゃなくだ。

……でも、彼らの想像をはるかに超える頼もしさを、私はいつも過小評価している。話そう。

……彼らは私を馬鹿にしないで話を聞いてくれる気がする。そうすれば、最高に頼もしい味方になってくれるに違いない。

「……ボクたちはしばらくの間、身を隠そうと思いますです。魅音の家なら身を隠すことが出来る場所がありますのです。」
「そこはとても安全？」
「……はい。秘密の防空壕みたいなとこなのです。中には何でもあって、一ヵ月くらい篭ることも出来るに違いないです。」
地下祭具殿は、園崎家の物騒な事情に絡み、いざという時、隠れ住まうことが出来るよう、色々な設備が隠されていると聞いている。
…昔、魅音に聞いた話では、ちょいとオツなセカンドハウス感覚なのだという。…もっとも、あんな薄気味悪い拷問室兼地下牢獄みたいなとこが、どうオツなのか、そのセンスを微妙に疑うところだが。
「鷹野さんの調査が、すぐわかるか当分かかるか、やってみないとわからないけど、何かわかったら、魅音ちゃんの家に連絡する、ということでいいかな？」
「……それが助かりますです。」
「今だから白状するけど、…山狗は保安上の理由から梨花ちゃんの家の電話を盗聴できるようにしている。…その方が都合がいいね。」
「……みー。ボクの恥ずかしい話は全てみんなに聞かれていたのです…。」

「い、いや、聞ける設備が設けてあるだけで、普段の会話を全て聞いてるわけじゃないんだ。年に数回ある保安訓練の際にそれをしているだけなんだよ…。」
「……多分、診療所の私の電話も盗聴されてるんでしょうねぇ。」
「…ぇぇ。そこは施設の性格上からご了承いただきたいところです。」
「失礼。その盗聴の具体的方法は？」
「梨花ちゃんの家に引いてある電話線が分岐してあります。それが、神社の裏側の、沢の近くに掘っ立て小屋があるでしょう。そこへ引かれていて、そこで盗聴をすることができます。通常は無人ですが、山狗に対し要人警護命令が出ると、常時二名の通話監視員が常駐し全ての会話を録音します。もちろん、普段は録音していません。」
「近日中に、保安訓練の予定は？　また、要人警護命令が出る予定は？」
「……保安訓練は、一月、四月、七月、十月に行なっています。ですから今月はありません。…要人警護命令は、何か緊急事態が起こると予想される場合に発令されますが、機関設立以来、発令されたことは一度もありません。」
「発令の権限者は？」
「所長、つまり私ですが、鷹野さんは事実上の所長代行なので、私に代わって発令することが可能です。」

「……もし、鷹野氏が本当に梨花ちゃんを狙う黒幕なら、その要人警護命令を逆手にとり、彼女を監視する手段に使うでしょうね。」
「その可能性は、十分に考えられます。」
「……ということはつまり。その小屋に何者かが出入りするようになったら、それは鷹野氏が動き出したという証拠であり、梨花ちゃんの近辺に緊張が増した証拠であると読み取っていいわけですね？」
「…………鷹野さんが黒幕である証拠になるかはわかりませんが、…梨花ちゃんの周辺に危険が迫っている可能性が高いと読み取ることは出来るでしょう。」
「確かに。鷹野氏がクロであろうとシロであろうと、そういうことになりますね。……その小屋を監視しながら、実際の梨花ちゃんは他の場所に避難しているというのは、…なるほど、うまい手かもしれない。」
「……でも梨花、ひとつだけ問題が。夜に灯りも点かなかったら、家が無人なのはすぐにバレてしまいますです。鷹野たちは盗聴などしなくても、夕方か夜頃にその様子を見るだけで、学校を休んでいるのは仮病で、僕たちが気付いて逃げ出したのだと知ってしまうに違いないのです。」
「それもそうね。…そしてそれは、鷹野のことを調べている富竹にとっては都合が悪い…。…………確かに、どうにかしたい点ね。」

「さっき赤坂が言っていた、盗聴の小屋の監視。それから大風邪で寝込んでいることを装うための灯りの点け消し。それから、いざという時、赤坂が村の中にいてくれる方がいいというのを三つ合わせて、あうあうしますと、あぅあぅあぅ。ひとつの提案が浮かびますですよ。」
「……って、まさかあんた。…あ、赤坂を私の家に泊まらせようってこと⁉　だだ、だめだめだめだめ、絶対だめ‼　全然片付けてないし、臭いし汚いしみっともないし、赤坂なんか絶対に入れられない、だめだめだめだめ！！！」
「あぅあぅあぅ、赤坂がお泊まりなのですよ〜、あぅあぅあぅあぅ☆」
「駄目だって言ってるでしょ‼　だめだめやだやだ、だめだめやだやだ〜！！！」
「梨花ちゃんは何をはしゃいでるんだい？」
「……み、み〜。ちょっと取り乱してしまいましたのですよ。にぱ〜☆…。」
も、…もう、羽入が言うんだから仕方なくだからね⁉　あぅあぅあぅあぅ‼
「確かに、梨花ちゃんの家がもぬけの殻になれば、夜の灯りとかですぐにバレてしまいますね。点けっぱなしにしても、未明まで点きっぱなしではすぐ怪しまれてしまう。」
「あ、……あの、赤坂。………その、…、………みー。…僕がいない間、赤坂が僕のお家にお泊まりするというのは、その、…どうでしょう。」
「………なるほど。それはうまい手かもしれない。梨花ちゃんさえ良ければ、その手で行きま

しょう。」

赤坂は事も無げにいうと、妙案だとでも言うようにポンと手を打った。……少しは恥じらったり、照れたりしてほしかったというのは、私のわがままだろうか。………恥ずかしいヤツだな私は…、ぁぅぁぅぁぅ。話は全てまとまった。

富竹は東京の部下と連絡を取り、鷹野の近辺を洗わせる。…これが全てだ。こちらから打って出るには必要な最前提なのだ。入江は普段通りに生活してもらう。

…ここまで話が進みながら、普段通りを装うのはとても難しいことだが、今は何もすることがない。狡猾な鷹野は、診療所内の入江に尻尾を掴ませるわけもない。…入江はむしろ、鷹野の尻尾を掴んだ後に出番があるのだから。大石は協力するとは最後まで言ってくれなかったが、少なくとも私たちの足を引っ張ることだけはしないと言ってくれた。

…実際、警察にも山狗の息のかかった人間が入り込んでいるという。大石も入江と同様に、今は普段通りを装ってもらうのが一番だろう。私は沙都子に真実を話し、今日からしばらくの間、魅音の家に身を隠す。……それがいつまでなのかはわからないが、取りあえず何かの進展があるまでだ。赤坂はその間、私の家に泊まり、私が病気で寝込んでいる風を装ってもらう。何かあった時、興宮の宿から飛んでくるのでは遅すぎる。村の中にいてくれるのはとても心強いことだ。……全ては富竹が何かを掴み進展があってからだ。入江は、その進展がすぐにある

といいのですがと言うが、……多分、それは大丈夫だ。だって、ヤツらは綿流しの日、つまり明々後日の日曜日の晩には、富竹を殺そうとする。数多の世界でそれが変わらない以上、それはヤツらの計画だ。

つまり、富竹が何も調べずとも、…明々後日には無理やり進展があるということだ。私は口が酸っぱくなるほどに富竹に忠告し、身辺に注意するよう伝えるのだった。

……これでも！　これでも殺されたら、私はあんたの一族を七代祟って死んでやるぞ！

もうすっかり薄暗い時間になっていた。赤坂以外のみんなはそれぞれ帰途につき、…私は赤坂のことや、これからのことを沙都子にどう説明したものかと悩んでいた。

「……悩んでもしょうがないのですよ。梨花の悪い癖は、仲間を過小評価しているところだと思いますです。」

「とは言うものの…。今日、学校でみんなで楽しく話していた漫画の話が、…実は本当でした。下手をすればあなたも殺されますなんて急に言って、信じてくれると思う？　それに沙都子にとって初対面の、こんな男まで急に連れて来て…！」

「……沙都子が信じないと思いますか？」

「…それはわかんないけど、……その可能性もあるでしょ。」

「なんだ。沙都子は友達じゃなかったのですね。」

「……え、………？」

羽入が、普段の穏やかな笑顔を崩さないままに、何か恐ろしいことを言ったような気がしたので、私はぎょっとした。

「僕は、沙都子は仲間だと信じていますから、沙都子に話せばきっと信じてくれて味方になってくれると信じています。……でも、梨花は沙都子を信じられないと言っています。それは梨花にとって、沙都子が友達ではないということです。その程度の存在なら、話しても時間の無駄なのです、あぅあぅあぅ。沙都子なんか放ったらかして、私たちだけで魅音のところに行っちゃいましょうです。」

「ば、……馬鹿、あんた、何を言ってるの…！　そんなわけないでしょ！　沙都子は私の一番の親友で、」

「梨花が真実を話す価値がないなら、それはその程度のものです。梨花の言う一番の親友なんて、野良猫に毎日エサをあげてるだけと同じ程度です。梨花は、沙都子のことをそんな程度で住まわしていたとは、僕も驚きです。」

「誰もそんなこと言ってないでしょ！　沙都子は親友よ！　私の一番のね!!　そうよ、あんたよりも!!」

「でも、信じてくれると信じてない。野良猫にエサをやって、日々を一方的に愚痴るだけの関

係。猫さんは何もできないってわかってるから、その上で愚痴ってるだけの、それだけの関係。あぅあぅ、沙都子は可哀想に！　梨花の一番の親友だと信じてるのに、その梨花にはそうだと思われていないのです。あぅあぅあぅ！」
「こ、この…!!」
　平手で打ってやろうとしたが、羽入に触れられない。その頬を突き抜けて、手が虚空を泳いでしまうだけだ。……こんな時だけ元の透明なのに戻るとは、ずるいヤツ…。羽入は、私を馬鹿にするように、あぅあぅを繰り返しながら姿を消す。……腹立たしいけど、…何を言われたかは理解していた。
「梨花ちゃんの同居人は、納得してくれるかい…？」
「な、…納得させますです。沙都子はこの陰謀に何の関係もないですが、ボクと一緒に住んでいる以上、絶対に巻き込まれますです。……沙都子のためにも、…ボクが説明しないと。」
「……私は、外で待ってた方がいいかな。」
「いいえ。赤坂が一緒にいてくれた方が、冗談ではないとわかっていいかもしれないです。……ボクにうまく説明出来ない時には助け舟を出してくださぃ。」
「うん。わかったよ。」
　私は赤坂を伴い、二階へ上がった。

正直なところ、最初に何と切り出すか、その言葉も思いついていない。……でも、羽入にまで馬鹿にされた。ここで悩んでいても仕方ない。覚悟を決めて部屋に入ると、………ちょっと驚く。散らかった部屋が、申し訳程度にだが、片付けられていたからだ。

沙都子は、ボストンバッグに寝巻きやタオルを押し込んでいた。…まるで、臨海学校か何かの前日準備みたいだ。

「沙都子…？　ただいまなのです。」

「はい、梨花の分の荷物も出来てますわよ！　まさか魅音さんにハブラシやタオルまで借りるわけにはいかないでございましょう？　それに、見ず知らずの男性の方を、こんな散らかったお部屋に入れるわけにも行きませんし！　だから私、普段からもう少しお片付けをしましょうって言ってたではございませんの！」

私は目をぱちくりとさせる。……何で沙都子が全てを納得してくれているのかわからない。……私が入江や富竹たちと境内裏でずっと話をしていて、さらにそこに大石やら、見たことのない男が現れれば、何の話をしているやらということになるだろう。

……沙都子は、私たちの話の一部始終を聞いていたに違いない。いや、それどころか、荷物の準備や部屋の片付けまでしてくれたということは、赤坂がこの家に籠ってくれるという辺りまで丸々聞いてくれていたことになる。……そこで大慌てで家に戻り、準備をしてくれていた

ということなのか。
「……漫画なんかの話じゃ、なかったんですのね。」
「……みー。」
「私、梨花のそういうところは嫌いなんですのよ。」
「…………。」
「私が梨花の話を信じなかったことがありまして？　私こそが、梨花に一番最初に頼ってもらえる親友でいるつもりでしたのに…！」
「…………ごめんなさいなのです。」
沙都子は心底怒っているというわけではない。
……どちらかというと、学校でのとんでもない漫画話が実は本当だったということに驚いているだけで、…言葉通りの意味で私に怒っているわけではなかった。でも、羽入に言われたとおりだ。
……私は、沙都子のことを親友だと思っていながら、……にもかかわらず信じきっていないという、矛盾を持っていた。それを、私は今こそ認め、謝る。沙都子はそんな時間はないんではありませんの？　と背中を向けるが、私の気持ちは受け止めてくれたようだった。
何よりの証拠は、…こうして、魅音の家へ避難する準備をしてくれたこと。…………あり

がとう、沙都子。
「えぇと、赤坂さんでございましたっけ？　梨花とどういうご縁かは存じませんけど、梨花の味方なら、私の味方でもありますわね。北条沙都子と申しますわ！」
「よろしく。赤坂と言います。……梨花ちゃんを取り巻く陰謀は、あまりに深く、容易に説明出来るものではありませんでした。それを打ち明け、拒絶されるかもしれないことに怯えていた彼女の気持ちを、どうか汲み取ってあげてください。」
「そんなことはわかってましてよ！　私は梨花の一番の親友なんですのよ？　その私に信じてもらえなかったら、世界中で誰にも信じてもらえないということですのよ？　なら、もしかするとと臆病になるのもわかろうというものですわ！」
「…沙都子ちゃんは、本当に大人です。そんなあなたに親友と呼んでもらえる梨花ちゃんが羨(うらや)ましいです。」
沙都子はお節介モード全開になり、赤坂に家の中をあれこれ説明していた。給湯器の着火レバーにくせがあるとか、テレビの映りが悪かったらこう叩くと直るとか。果てには、神社一帯に仕掛けたトラップを示した秘密地図まで説明していた。
……それを、性分なのか大真面目に聞く赤坂。…二人の妙な組み合わせに、私は状況も忘れ微笑んでしまいそうになった。その様子と私を見て、いつの間にか側にいた羽入がにこにこと

笑っている。…でも私にはそれが、それ見たことかとニヤニヤ笑っているように見えて今はちょっとシャクだ。
　わざと気付いていないフリをしてやる。
「……ひねくれ者の沙都子がこれくらい簡単に信じてくれるんだから、…単純な魅音ならもっとあっさり信じてくれるわね。疑い知らずの圭一も信じるだろうし、こういう時はやたらと勘のいいレナも信じてくれるだろうし。……どいつもこいつも、きっと私の話を、疑いもせずに信じてくれるのかしらね…。」
　羽入は返事を返さなかったが、私の小さな成長を喜ぶかのように微笑むのだった。
「冷蔵庫の蓄えも十分ですわね。梨花ぁ！　せっかくお留守をお願いするんですのよ。今夜くらい、ご馳走しないと失礼に当たりましてよ。それに万が一ということがありますもの。魅音さんの家へは、もう少し遅くなってからお伺いした方がいいですわね。」
「そんな、どうかお気遣いなく。こう見えても食事くらいなんとか出来ますので。」
「……あぅあぅ、梨花の手料理をご馳走するチャンスなのですよ。あぅあぅあぅ☆」
「きょ、今日のあんたは調子に乗りすぎ…！　そうね沙都子、おいしい食事をご馳走しないとね！　そうそう、冷蔵庫に入ってる徳用激辛キムチの大瓶を出してもらえる？　それじゃない、懲罰用じゃなく死刑判決って書いてある方よ。今日はキムチチャーハンにしましょうです。赤

坂、辛いのは大丈夫ですか？」
「あぁ、うん！　辛いのも大好きだよ！」
「あぅ!!　あぅあぅあぅあぅあぅあぅあぅ!!」
「それと冷蔵庫のシュークリームはもう賞味期限が切れてるから捨てちゃいましょうです。あぁ残念残念。穀倉の高級店のおいしいヤツだと聞いてたのに残念なのです！」
「あぅあぅあぅあぅあぅあぅあぅ～～！！！！」
「…今日はあぅあぅうるさいのが聞こえるわね。野良犬でも吼えてるのかしら！」
六月十六日の夜が更けていく。
私たちにとって、最後の挑戦であるゲーム盤に、次々と頼もしい駒が並んでいく。………うぅん。駒なんて言い方が最初っからおかしいんだ。六月十六日の夜が更けていく。
私たちにとって、最後の挑戦である戦いに、頼もしい仲間が増えていく。その中で最初の鍵となる富竹はあと三日で殺される。
運命は、…この三日で動く…！

〈ひぐらしのなく頃に解　第四話～祭囃し編～　下巻に続く〉

本書は、２００６年発表の同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に解　祭囃し編』のシナリオをもとに著者である竜騎士07氏自らが全面改稿し、小説化したものです。

ILLUSTRATION　ともひ
BOX&BOOK DESIGN　Veia
FONT DIRECTION　紺野慎一（Toppan Printing Co.,Ltd）

本文使用書体
本文：FOT-筑紫明朝 Pro L　A-OTF フォーク Pro R　凸版明朝V2 Pro W7
見出し：FOT-筑紫ゴシック Pro D

著者紹介

竜騎士07

1973年生まれ。同人ゲーム作家、小説家。2002年夏、コミックマーケットで同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編』を発表。以来、夏と冬に1作ずつ『ひぐらしのなく頃に』シリーズ新作を精力的に発表し続け、まんが、アニメ、コンシューマー・ゲームなど、様々な他メディアを席捲する一大ムーブメントを作り出す。2007年8月、最新シリーズの『うみねこのなく頃に』を満を持して送り出す。小説の単行本化は、本作が初となる。

Illustration

ともひ

1983年生まれ。まんが家、イラストレーター。魅力的なキャラクターのみならず、奥行きのある妖しくも美しい背景を描く。竜騎士07たっての強い希望で、新人ながら、本作『ひぐらしのなく頃に』シリーズのイラストを担当することになる。ウェブサイト「古街」(http://furumati.com/)を運営。

講談社BOX

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解　第四話〜祭囃し編〜(中)　定価はケースに表示してあります

2008年12月1日 第1刷発行

著者 —— 竜騎士07

発行者 — 中沢義彦

発行所 — 株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号 112-8001
編集部 03-5395-4114
販売部 03-5395-5817
業務部 03-5395-3615

本文データ制作 — KODANSHA BOX DTP Team

印刷所 — 凸版印刷株式会社

製本所 — 株式会社若林製本工場

製函所 — 株式会社ナルシマ

ISBN978-4-06-283689-0　N.D.C.913　453p　19cm

KODANSHA BOX

講談社BOX新人賞 "流水大賞" 原稿募集

登場することによって一瞬で時代を変えてしまう——、
そんな破格の小説、破格のイラスト、破格の批評・ノン
フィクション作品を講談社BOX編集部は求めています。
優秀作品は「講談社BOX」として書籍化をいたします。

Everything is Boxed,
KODANSHA BOX.

募集と発表／募集は随時行います。また、発表は講談社BOOK倶楽部内の講談社BOXウェブサイトなどにて4カ月おきに行います。

応募要項

原稿送付先:〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-2 講談社　講談社BOX「講談社BOX新人賞"流水大賞"」募集係

【小説部門】書き下ろし未発表作品に限る。原稿枚数:ワープロで400字詰め原稿用紙換算350枚以上。A4サイズ、1行30字×20～30行。縦組で作成して下さい。初めに20字前後のキャッチコピーと800字前後のあらすじを添えて、ダブルクリップでとじること。別紙に氏名、年齢、性別、職業、略歴、住所、電話番号、そして原稿枚数を明記してください。優秀作品の書籍化に際しては規定の印税を支払います。応募原稿は返却いたしません。

【イラスト部門】書き下ろし未発表の作品に限る。B4サイズのカラーイラスト 5点とモノクロイラスト 3点の計 8点を1セットにしてご応募ください。別紙に氏名、年齢、性別、職業、略歴、住所、電話番号、使用ソフト(バージョンも)とファイル形式を明記のうえ、データ記録された CD-ROMや MO等のメディアと、プリントアウトしたものを同封してください。(手書き原稿の場合は、スキャンしたデータをお送りください)優秀作品のイラストレーターとしての起用に際しては規定の原稿料を支払います。応募原稿は返却いたしません。

【批評・ノンフィクション部門】書き下ろし未発表作品に限る。原稿枚数:ワープロで400字詰め原稿用紙換算100枚以上。A4サイズ、1行30字×20～30行。縦組で作成して下さい。初めに20字前後のキャッチコピーと800字前後のあらすじを添えて、ダブルクリップでとじること。別紙に氏名、年齢、性別、職業、略歴、住所、電話番号、そして原稿枚数を明記して下さい。優秀作品の書籍化に際しては規定の印税を支払います。応募原稿は返却いたしません。



太陽は輝けない——。
A GIRL BEYOND THE TIME
KODANSHA BOX
第1巻 堂々発売！ 続刊、毎月"月初"刊行!!


1つの天空に、3つの
四方世界の王
古代オリエント幻想創世記
時は、文明の曙。
其処は、遥かなる東方の地。
人々が未だ神話と日常のあわいに生き、
数多の都市国家と有力者達が覇を争う只中に、
世界は、3人の"資格者"を産み落とした。
バービルムの王子・ハンムラビ
アッシュールの英雄・シャムシ=アダド
ラルサの帝王・リム=スィーン
土煙鎮まらぬ戦乱の大地に、
最後に立っている者は誰なのか。
群雄割拠のオリエントを統べ、
"四方世界の王"の名を冠くのはただ一人
古代世界の神位と覇権を巡る戦いは、今、
少年と少女の出会いから始まる
定金伸治
『ジハード』『Kishin —姫神—』『ユーフォリ・テクニカ 王立技術院物語』
Illustration/記伊孝
『辺境交渉人 峰神英太郎』『マテマティシャンズ』
A BOY MEETS
2009年1月5日

大河ノベル

アニメ化決定!!

大河、ふたたび。

今、大河の奔流(ほんりゅう)は書物より溢れ出す――。

絶刀(セツトウ)『鉋(カンナ)』
斬刀(ザントウ)『鈍(ナマクラ)』
千刀(セントウ)『鎩(ツルギ)』
薄刀(ハクトウ)『針(ハリ)』
賊刀(ゾクトウ)『鎧(ヨロイ)』
双刀(ソウトウ)『鎚(カナヅチ)』
悪刀(アクトウ)『鐚(ビタ)』
微刀(ビトウ)『釵(カンザシ)』
王刀(オウトウ)『鋸(ノコギリ)』


刀語
西尾維新
伝説の刀鍛冶、四季崎記紀が
その人生を賭けて鍛えた
十二本の〝刀〟を求め、
無刀の剣士・鑢七花と
美貌の奇策士・とがめが征く！
誠刀『銓』
毒刀『鍍』
炎刀『銃』
KODANSHA BOX
2007年大河ノベル『刀語』（著／西尾維新 画／竹）
講談社BOXより全十二巻、大好評発売中！
アニメ化情報、詳細はWEBにて2009年元旦発表。
http://www.nisioisin-anime.com


tasy Within
KODANSHA BOX
ゴッド・オブ・ミステリー
島田荘司のみに許された、
余人の想像を絶する超展開が
"あなた"を待つ!
Illustration by
SHIROW MASAMUNE
格ミステリ史上No.1の奇跡!
イヴ戦記]
り刊行開始!
リブート
再開!
士郎正宗


Classical Fa
大河ノベル 2008
全12巻、超弩級のファンタジー・ワールドX
第二部、
「アル・ヴァジャ
2008年10月よ
島田荘司」



ひぐらしのなく頃に解

竜騎士07

Illustration ともひ

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

第四話～祭囃し編～（中）

「踏まないで…!!　踏まないで…ッ!!
おじいちゃんが頑張って書いたんだから、…足で踏んだりしないで…ッ!!」


KODANSHA BOX
ひぐらしのなく頃に解
07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa.
'WHEN THEY CRY'
竜騎士07
第四話 ～祭囃し編～ (下)
大団円
KODANSHA BOX
KODANSHA BOX
ひぐらしのなく頃に解
第四話 ～祭囃し編～ (下)
竜騎士07
KODANSHA
UA-16



ISBN978-4-06-283697-5
C0093 ¥1500E (0)
9784062836975
1920093015004
定価：本体1500円(税別)
講談社

KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解

第四話 ～祭囃し編～（下）

竜騎士07

Illustration／ともひ



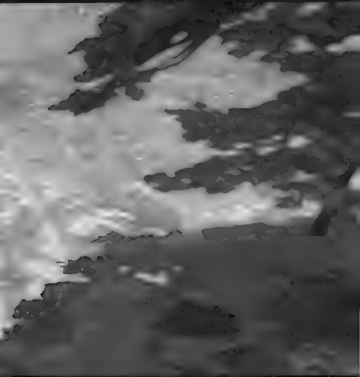
第四話～祭囃し編～（下）

ひぐらしのなく頃に解

07th Expansion presents. Welcome to Hinamizawa_
WHEN THEY CRY

竜騎士07
Illustration ともひ

KODANSHA BOX




六月十七日

■六月十七日朝

「古手さんと北条さんは、今朝、風邪を引いたのでお休みと連絡がありました。今、季節の変わり目で大変、風邪を引きやすい時期です！　暑いからといってお腹を出したりして寝ないように。いいですね。」

「「は――――――い!!」」

「はぅ。二人とも一緒に住んでるから、一緒に風邪引いちゃったんだね…。梨花ちゃん、明後日の綿流しだけど、巫女さんの役、大丈夫なのかな、かな。」

「祭りはみんなで遊ぼうって話なのに、二人とも風邪ってんじゃなぁ。明日にはケロっと治ってほしいもんだぜ。なぁよ、帰りにみんなでお見舞いにでも寄らないか？　何か冷たいものの差し入れでも持ってってさ！」

「その必要はないよ。それより二人ともさ、今日の帰り、おじさんの家に寄ってもらいたいんだけど、いいかなぁ？」

普段の魅音なら、こういう話に乗ってくれるだろうに。……なぜか今日の魅音はほんの少しだけ素っ気なかった。

…というか、今朝から魅音の様子がほんの少しだけおかしいのだ。話しかけても上の空の時があるというか。そんな中で魅音は、俺とレナに、帰りは自宅へ寄れと誘う。
「魅ぃちゃんの家？　何かあるの？」
「うん。…ちょっと大切な話があるんだよ。ここではできない。」
魅音の目が、普段よりずっと落ち着いていて、それが不真面目な話でないことを教えてくれていた…。

午前の診療時間に滑り込みでやってくる患者さんが大勢いるため、お昼頃が一番忙しくなる。だから、診療所のお昼は、世間のお昼の時間よりもうひとつ後にずれていた。もっともそんなのはただの中休み。すぐに午後の診療が始まる。スタッフたちは、出前の昼食を取りながら、中休みを楽しんでいた。
衛生に注意しなければならない場所でなく、来院される方に見苦しい場所でなければ、どこでも好きなところで食事をしていいことになっている。この時期は蒸し暑いので、キンキンに冷房をかけた会議室が流行っているらしく、スタッフたちはそこに出前を持ち込んで食べているようだった。私はここの長なので、みんなと一緒に食事をすると、みんなが気を遣ってしまい、休憩にならなくなってしまう。だから、気を利かせているつもりで、食事はいつも所長

室に持ち込んでひとりでしていた。今日はそば屋さんの出前だった。私が頼んだのは大盛だ。……大盛というのは、もりそばの大盛のこと。…なぜか大盛もりそばとは言わず、大盛と言う。だから注文の時、ややこしくなり、大盛とキツネうどん、なんて注文すると、キツネうどんの大盛が来て困ったことになったりする。……しかし、大盛ってこんなもんだっただろうか？普通のもりそばの量に見える。

　あそこも女将さんが腰を悪くしてから大変だなぁ、なんて勝手に納得しようとしていたら、鷹野さんがやって来た。その手に持っているのは、本当の大盛。

　どうやら私が間違って、彼女が頼んだ大盛でないもりそばを持ってきてしまったらしい。

………………あぁ、ややこしい。

「くすくす、本当にわかり辛いですわよねぇ。何か目印になるものでも付けてくれればいいのに。」

「同感です。例えば、大盛って書いたお子様ランチの旗みたいなのが立ててあるとかね。」

「ぷ、……あはははははは。」

お子様ランチの旗というのが彼女のツボに入ったらしい。しばらくの間、小気味良さそうに笑っていた。

「よかったらご一緒にどうです？」

私は応接のソファーを勧めた。

「ではせっかくですので。すみません、冷房をちょっぴりだけ弱めてもらってもよろしいですかしら。」

「ええ、それは失礼しました。よいしょ、ピッピと。」

鷹野さんと私は、思えばコミュニケーションを交わしたことはそう多くない。

入江機関という後ろめたさのある機関らしい、なんと言うかよそよそしい関係だった。互いの立場や真意に深入りしないのが暗黙の了解というか。

研究を巡る互いの姿勢の違いから、ずいぶんと疎遠だった気がする。………だから、お昼に他愛もない話を交わすくらいのことは、もっとしてもよかった気がするのだ。しかし、鷹野さんが食事中に好む話題は何なのか。

……健全な話題を先にこっちから振らないと、サナダ虫の話でもされて、当分、きし麵が食べられなくなってしまうかもしれない。それは困る、好物なのに。

そんなことでひとり焦っていると、彼女の方が先に話題を振ってくれた。

「さっきの、お子様ランチの旗の話。……懐かしいですわね。今時のお子様ランチにはまだ旗が立っているんでしょうか。」

「さぁ、どうでしょうねぇ。ああいうのはひとつの様式ですからね。案外、もっと未来になっ

て、宇宙旅行が実現するような時代になっても、宇宙船の機内食のお子様ランチには旗が立っているような気がします。」

「くすくすくす。それは何だか面白い話ですわね。そんな未来になっても、子供たちはあの旗を夢中になって集めるのかしら。」

「旗を？　おやおや、そんなことをされていたんですか。」

「あら、所長は子供の頃にしませんでした？　お子様ランチの旗集め。」

「まさかまさか。私たちが子供の頃のお子様ランチといったら、裕福な家庭でなければなかなかありつけませんでしたよ。私の家ではとてもとても。」

「そんなことありませんわよ。うちは貧乏でしたけど、たまにデパートに家族で行くと、必ずデパートの最上階のレストランに入りましたもの。くす、当時の私にとっては、デパートに連れて行ってもらえるのは、お子様ランチが食べられるというのと同じ意味で。だから、両親が私の留守の間にデパートへ行ってしまうと、とてもヘソを曲げたのを思い出しますわ。」

「はははははは…。鷹野さんの子供時代もとても素敵そうですね。」

「……でも。私ひとりを残してデパートへ出掛けて、二人とも鉄道の事故に巻き込まれて死んでしまいましたわ。……その連絡が来るまで私はずっと両親を恨んでて。今頃、デパートのレストランで私を除け者にしておいしいものを食べてるに違いないって憤慨してて。……くすく

す、あと一本で旗が、確か二十本になるはずで。二十本が小さな目標だったので、それを達成する機会がまた遠のいたとずっとむくれていて。……ひどい話ですわね。」

お子様ランチの旗に興味を示す歳で両親を亡くした、というのは、彼女が言うほど軽いことではない。

……それは未だに癒せぬ傷であることは明白だった。

「……そうですか。それは知りませんでした。……ひょっとして、…それが医師を目指された動機、ですか？」

「は？　くすくす、どうして？」

「あ、…いえ。私が医師を目指したのは、自分の家族に関わることが理由だったので、…てっきり鷹野さんもそうだったのかと。」

「私が医師免許を取ったのは、雛見沢症候群により近付くために必要だったからですわ。失礼な言い方をすれば、研究のためについでに取った免許ですわね。」

それは興味深いことだった。…医大に通っていた頃にはもう雛見沢症候群の名を知り、その研究に生涯をかけていたことになるからだ。

「……そう言えば、こんな初歩の初歩のことも私は知りませんでしたが、……鷹野さんはどこで雛見沢症候群に触れられたのですか？　故高野先生の研究を掘り出す内に発見された、とい

うような話を聞いていますが、医大に通われていた頃に、医師の勉強と並行して、もう症候群の研究に入られていたとは驚きです。私など凡才でしたので、医師の勉強だけで精一杯でしたから、尊敬しますよ。」

「くすくす。雛見沢症候群の研究に携わったのは、もっともっと前ですわね。」

それは、若い内にという範疇を超えかねない。…一体、彼女はいくつの時にもう雛見沢症候群を知っていたのか。…いや、どうして知っていたのか。

「私の実家は、沙都子ちゃんや梨花ちゃんたちと同じで、親戚がいませんでしたの。それで施設に引き取られて、……くす、それがもう本当に劣悪な施設でして。あの頃、戦災孤児ってまだまだいたでしょう？　そういうのを集めて補助金だけをせしめるのを目的にしたような本当にひどい施設で。そこを脱走した時に助けてくれたのが、…祖父、…高野先生でしたの。」

「……では、あなたは高野先生と生活なされていたのですか…。…なるほど、研究資料に若くして触れられていたのも納得です。しかし、なぜそれを伏せられていたのですか？」

「……まぁ、大人の事情ですわ。奇病研究のために予算を求めるのと、死んだおじいちゃんの研究のために予算を求めるのでは、少々事情が変わってきますから。」

「なるほど…。長いことの疑問が氷解しました。あなたが高野先生を語る時の尊敬の眼差しは、一研究者に対するものとしては説明できないものでしたので。……しかし、そこまで鷹野

さんに尊敬させるとは、よほど人徳のある素晴らしい先生だったんでしょうね。」
「…さて、人徳はどうだったでしょう。誰にも理解してもらえず、ずっと孤独に研究して、そのまま病死してしまいましたもの。祖父は孤独を愛する悪い癖がありましたので、協力者を得られなかったんですわね。」
「でも、鷹野さんという優秀な助手がいたじゃないですか。……そう言えば、鷹野さんも先生も読みは同じタカノですね？」
「……えぇ。本当の苗字じゃありません。祖父に敬意を表して同じ名を。本当は、漢字も同じにしたいのですが、クライアントに説明する時に誤解されたくないと思い、読みだけを残して漢字を変えたんですわ。」
…………鷹野と高野という二つの苗字がようやく重なる。そして、三四と一二三という二つの名がようやく重なる。
あとは彼女が言わなくてもわかった。……幼くして両親を失った少女が、自分の両親に勝るとも劣らない愛情を注いで育ててくれた高野先生に、親愛と尊敬の念を込めて祖父と呼んだのは想像に難しくない。……………だから、今さらわかった。彼女が雛見沢症候群の研究に、異常なほどのめり込むわけを。
そして、祖父が完成出来なかった研究を受け継ぎ、その研究が打ち切られることになって、

どんな気持ちでいるかを。………梨花ちゃんが話してくれた、研究の打ち切りが決まり傷心する彼女の像が、今こそくっきりと浮かび上がる…。

……知らなかったとは言え、私の言葉が彼女を傷つけていたことも多いのではないだろうか。私は今日まで、研究は治療と撲滅だけできれば十分で、あとはさっさと破棄してしまって構わないという主張だった。

……それは、彼女の祖父に対する冒瀆になるに違いない。…その度に彼女が私に食って掛かってきたのがなぜか、今はよくわかる。…彼女は、新理事会から研究の段階的中止を宣言された後、ひとり夜なべをしてたくさんの説明資料を作り、誰にも頼らずひとりで上京して研究の継続を訴え、………そして退けられたという。彼女が説明に使った資料は、地下にある要溶解の重要書類用ダストボックスにあった。それらはとても丁寧に作られた資料で、この研究を知識のない人間に説明しようと工夫した痕跡が随所に見受けられた。

その資料が、あるものは捲った形跡すらなく、……あるものは資料に対するものとは思えない扱いを受けた跡が残されていた。…私が気付かなかっただけで、涙を吸った資料もあったのではないかと思う。私に東京から来た連絡では、……理事会は鷹野さんについて非常に悪い心証を示したという。

…素人の心証は容易には引っくり返せない。……つまり、研究の継続を求めることは、もう

二度とできないということだ。彼女は、研究継続が望めないとわかるその瞬間に、立ち会った。
そして、尊敬する祖父の研究を、必ず完成させると墓前に誓ったに違いないにもかかわらず、……続けられなくなることが確定する瞬間に、立ち会った。

「…………鷹野さんは、…入江機関閉鎖後にも個人研究を続けられますか？」

「入江機関が閉鎖する時には症候群は撲滅されていますわ。病原体をシャーレに残し、誰かをさらって感染者にして研究しろと？　個人で？　機材も予算も施設もなく？　誰にも顧みられなかった祖父のようにホルマリンの臭いの籠った書斎で、誰にも評価されず戯事だと笑われるためだけに研究を続けろと？　もう若さもなく、気力もなく、…ただの負け犬に過ぎない私に、何を続けろと仰るんです…？」

「…………………………。」

入江機関は、本当は鷹野機関になるはずだったのだと、富竹さんに聞かされたことがある。
でも、若い女性がトップということに難色を示したクライアントから、男性トップを要求され、私が呼ばれたのだということも。

…初対面の時から、彼女が私によそよそしかった理由がよくわかる。……私などが雛見沢症候群について語り、自分の価値観と道徳観で研究方針を決めるなど、…彼女からすれば全てが冒涜だったのだろう。雛見沢症候群の研究は、鷹野さんの祖父のものなのだ。

きっと彼女は、症候群の研究に打ち込んでいる時だけ、祖父が身近にいるのを感じられるのだろう。……彼女がいつも深夜までひとり研究施設に残り、セキュリティ担当の山狗職員を辟易させていたのは、そういうことなのだ…。

「……そば湯、お飲みになります？」

「あ、…そうですね。いただきましょう。」

そば湯を注ぐ彼女の両肩が、初めて小さく見えた。

……そして、梨花ちゃんの話を確信する。鷹野さんは、研究中止に言葉では語りきれないほどの悲しみを抱いている…。

そこに、彼女の理解者を装った何者かが接触してきたなら、気丈な彼女でも、籠絡されないことはないかもしれない…。彼女から見た私の立場では、……多分、どんな慰めも傷をえぐることにしかならないだろう。……言葉は、どう掛けても傷つける時があるのだから。

それでも、口にしてしまうのは、私の人生修行が足りないからだ。

「……せめて、今後の予算配当を、鷹野さんのやりたい研究に優遇しましょう。少なくとも三年の継続は勝ち取れたんです。その三年間で精一杯の、」

……全て失言。言いながら私は、早く口をつぐまねばと後悔する…。

「お気持ちだけで結構ですわ。……死の病にかかり、痩せ衰えていくのを三年も見守るのも辛

いものですわよ。」

確か高野先生は、急性の認知症にかかり、自分がもう研究を続けられないことに悲観し、自分の頭がまだ聡明である内に死を選びたいと言って自殺したはずだ。

…私の不用意な失言は、彼女にまたしても辛い記憶を強いてしまう…。

「最後には眠ったままになり、…生命維持装置の電源を切ることをいつかは選ばされる。

……………ねぇ、入江所長。その電源を切るのを、所長がその患者の担当医だったら誰にやらせますか？　まさか、所長がその電源を切ったりはしませんわよね…？」

鷹野さんが、さも当然であろうというように私に問い掛ける。彼女の瞳は、私にあるひとつの答えしか期待していない。

「……………もしそういう状況になるのなら、…………最後のスイッチは、…残されるご家族に委ねるでしょう…。」

「ですわよね。くすくすくす。まさか今生の別れの日にその場に立ち会わないわけがない。

………私は、雛見沢症候群の最期に、立ち会いますわよ。絶対にね。」

コンコンというノックの音がして、スタッフの声が聞こえた。

「所長、午後の診療が始まります。準備をお願いいたします。」

「……あぁ、申し訳ありません。今、参ります。」

「私が片付けておきますわ。所長は診療室へお急ぎくださいな。いつものお年寄りたちが、四方山話をしたくて大勢お待ちでしてよ。くすくす。」

鷹野さんはそう笑うが、……今の私には、そんな彼女が、深い悲しみを隠すために無理に笑っているようにしか見えないのだった…。私は彼女と親しいわけではないが、仕事の上ではパートナーの関係だったはずだ。………仕事以上に親しくする必要はないと交流を避けてきたが、……それは誤りだったのではないか。

私が、せめてもう少し話を聞いてあげられる関係を作れていたら、……彼女の心の痛みをもう少しだけ和らげてあげることができたのではないか。……全てが、遅い。そんな中、富竹さんは彼女の潔白を証明するため、秘密で調査を進めている。

…彼女は、クロか、シロか。……どちらであっても、彼女の深い悲しみは、変わらない。

入江が退出すると、鷹野は再びソファーに腰を下ろし、しばらくの間、遠くを見るような目をしているのだった。やがて、何かを思い出したように体を起こすと、卓上の内線電話を取った。

「…………鷹野です。小此木はいる？　………………………私よ。二十日からのつもりだったけど、今日からRの周辺監視を開始して。……え？　別にいいでしょう。それとも今日は暑いか

ら嫌だとでも言う気？　………ええ、お願い。決行日まであと五日。慎重に慎重を重ねてもバチは当たらないわ。………ええ、よろしく。」
「はい。失礼しますんね……。」
小此木は受話器を置いた後、ため息を漏らした。鷹野の気まぐれに振り回されるのが仕事とは言え、この蒸し暑い不快な日にそれを命じられると、嫌味のひとつも言いたくなるものだ。
……もっとも、鷹野にひとつ嫌味を言えば、必ず倍返しになるのだが。そこは、興宮にある小此木造園という名のダミー会社の事務所だった。
雛見沢の中での造園業を実際にやっていて、彼らの作業服が雛見沢に出入りすることへの、村人の不信感の払拭を狙っていた。
「…やれやれ、参ったんな。鶯と雲雀の休暇を取り消して呼び戻せ。R監視を三日前倒しにしろと我らのお姫様のご命令だ。監視態勢を全て三日前倒しにする。初日は白鷺だったな。四名態勢、通話監視1、サポート1、R宅監視1、サポート1。白鷺リーダーはただちに指揮に入れ。あと、電話設備工作も前倒しにするぞ。鶯の予定だったが召集には一日かかるだろ。鳳でやる。鳳7、工作チームを編成して今夜中に完了させろ。可能か？」
「もちろん。電気工作要員の訓練は十分です。」
山狗はいわゆる戦闘部隊とは異なる。工作のためのあらゆるスペシャリストが集められた技

術部隊だ。

今、小此木が命じたような電話設備への工作や、盗聴、監視、情報収集、情報操作、あるいは警察などの公的機関にネットワークを構築する諜報要員など、さまざまな分野に特化した隊員が集められている。母体こそ自衛隊だが、それぞれの出向元は、ある者は消防であったり、警察であったり、あるいは民間の技術者であったりバラバラだ。

…もちろん、戦闘訓練に特化した戦闘のエキスパートも含まれていた。ただ、小此木は戦闘職の出身なので、厳しい訓練を潜り抜けていない技術系のやや軟弱な隊員たちを過剰に期待してはいなかった。

…彼らにも義務として最低限の訓練は施されているが、戦闘職から見れば飯事遊びだ。

腕立て伏せの百も出来ぬ程度の隊員が大多数を占める部隊の隊長。…小此木はそこだけが少し気に入っていなかった。どうせ同じ不正規戦部隊なら、山狗より番犬の隊長がやりたかったのだが、……どういうわけか自分の慎重かつ大胆？な一面が評価されたらしく、こんな妙な部隊の隊長に納まってしまったのである。戦闘職出身の小此木としては、……自分たちの出番である荒事が起こることに期待をしてしまう。

五年前の誘拐事件の時、警察に踏み込まれて抵抗するも犯人は人質を残して現場を逃走、という絵を描くことになった時、私服警官たちとの格闘で非常に歯痒い思いをしたことを思い出

す。太ったオヤジがいい気になってやがったが、本気だったら秒殺だった。あそこで手など反さず、そのまま首をへし折ってる。……こう回して、……こう。ボキリ！　これで一丁上がりだった。若い方の警官も肩を撃ってやったが、本当は耳たぶを飛ばしてやるつもりだった。手を抜けと言われていたので、調子が狂ったのだ。

二発目で耳を飛ばそうと思ったが、そういう流れじゃなかったので次は撃たなかった。俺の実戦の最後の発砲はあの不本意な一発ってことになっている。あんな茶番が戦闘職の最後の仕事だったのでは、たまったものじゃない。

小此木は、いつか訪れるだろう戦闘命令を心待ちにしながら、今日まで体が鈍ることがないよう、厳しい訓練を課して体を維持してきた。……だが、終末作戦というキナ臭い作戦が動き出し、どうやら本気で自分の出番がありそうな気がする。

結果的に、たとえ引き金ひとつ引くことができなくてもいい。拳ひとつ繰り出すことができなくてもいい。

俺に戦闘職としてのプライドを満足させる、本当のキナ臭い仕事を与えてくれれば、それでいいのだ……。

「はい、少々お待ちください。……隊長、外線からお電話です。隊長宛なのか、社長宛なのかはわかりません。」

小此木は表向きは小此木造園の社長ということになっている。だから隊員たちは平時は彼のことを社長と呼んでいた。
「ちょっと待て、訛りに戻す。……………あ────あ〜〜〜〜！　あぁん、すったらんね、ああんもしよったんね、ほんまん！　こんなんでどうよ。んで、どちら様んね？」
「女性です。野村と名乗ってます。小此木社長を指名してます。」
「…………隊長宛だ。社長室で取る。向こうに回してくれ。」

赤坂ターン

ドンガラ、ガッシャン。まるでたらいがいくつも落ちてくるような賑やかな音が遠くで聞こえた。
その音は恐らく、沙都子ちゃんが仕掛けたというトラップの一つに違いない。彼女が昨夜教えてくれたトラップ地図によると、盗聴のための小屋に近付くとかなり賑やかな音をさせるトラップが発動すると描かれている。…それに違いなかった。昨夜、彼女たちがここを脱出する前に周りは偵察しておいた。
…あの小屋は彼らが使おうと思うだけあり、ひと気もなく、人が近寄る理由も特に思いつか

ない死角のようなところだった。
……だからこそこの音が、重要な意味を持つことがわかる。今以降、この小屋は監視下に入ったということだ。中に梨花ちゃんたちがいないことを絶対に気取られてはならない。彼らは多分、在宅の確認を確かめるため、虚偽の電話や訪問をするだろう。…それらは高熱で寝込んでいるので気付かないというフリをして切り抜ける。
カーテンが閉まっているので、室内を外からうかがうことは出来ないが、念には念を入れ、梨花ちゃんたちが布団の中にいるように見えるよう、そういう工作がしてある。だが、今後は一層に気を引き締めなければ。…自分というありえない存在がここにいることを気取られないように。そして、確実に迫りつつある有事の時に、自分のベストが引き出せるように。すると突然、電話が鳴った。予想通りだ。連中の在宅確認だろう。連中は、学校に二人の欠席届が出ていることを知り、家で大人しく寝ているものと信じてるはずだ。
…だから、ここで確かに寝ているという証拠がほしいのだろう。ずいぶん長く電話は鳴り続けた。…その執拗さに、これが間違いなく在宅確認であるとの確信を強める。電話で駄目なら、恐らく次は訪問だろう。郵便屋かご近所でも装ってノックしてくるに違いない。だが、それに出る必要はない。電話にも出られないくらいに寝込んでいるのだ。ノックにだって気付くわけがない。面倒が増えるとバレる危険も高まるが、…それは逆に、確かに敵が迫っている証拠と

なる。むしろ、事態が緊迫していることを測れて好都合だった。それに、入江機関の入江氏はこちらの味方で、梨花ちゃんがすでに他所へ避難している作戦を知っている。…梨花ちゃんたちが欠席したとの噂を聞いて、不安になり自宅を訪問する。

二人は大人しく寝ていました、しばらくそっとしてあげてください。

そう言う手はずになっている。……彼らは入江氏を疑っていない。在宅を信じるはずだ。…これは、高度な騙し合いだ。入江氏を騙し切っていると信じている彼らが、実は入江氏に欺かれている。だが、連中はこの手のプロであり、こちらは自分を除けば素人の集まり。……いや、自分を除けるかもわからない。

相手と対峙するまでその実力を測ることは不可能なのだから。条件は互角じゃない。……こちらが向こうを騙して先手を打っている、このか細いリードだけが勝機。それが失われれば、勝ち目は一気に失われるだろう。

私は梨花ちゃんのことを無条件に信じると約束した。だから、証拠がなくとも戦う決意は出来ている。だが、私ひとりの力ではこの陰謀は覆せない。他の人間の協力を得るには、富竹氏が証拠を摑む必要がある。

…富竹氏こそが、こちらの先制攻撃の切り込み隊長なのだ。……その分、危険が一番最初に及ぶ。梨花ちゃんが、富竹氏に再三注意を促すのも納得だった。そして、富竹氏は早ければ昨

晩、遅くても今朝、動き出したはずだ。…それを受けて監視態勢が動き出したのだとしたら……。

富竹氏の無事と調査の成功を祈るしかない…。その時、声が聞こえてきた。……あれは入江氏の声だ。

「…沙都子ちゃんに梨花ちゃ〜〜ん、ご主人様が回診に来ましたよ〜〜〜。」

そして階段を上ってきて、ノックをした。

「……大丈夫、私ひとりです。」

「もう少し小声に。この家はすでに敵の監視下にあります。」

私は入江氏を迎え入れ、すぐに扉を閉めた。

「お疲れ様です。…窓も満足に開けられないとあってはまるで蒸し風呂ですね…。これは差し入れです。」

スーパーの袋の中にはアイスやジュース、すぐ食べられて保存性の高い軽食のパッケージ、…そしてビールも入っていた。

…梨花ちゃんたちへの差し入れでないことはバレバレだ。これはさすがに無用心だと思うが、彼なりの気遣いだ。ここは感謝して受け取っておくことにする。

「…いかがですか、こちらは。」

「さっき、この家の電話を盗聴する監視小屋に何者かが近付いた形跡がありました。それから、呼び出しの長すぎる電話が一件。恐らく、学校を欠席したことを知り、在宅確認のために電話してきたのでしょう。あなたの方にも、梨花ちゃんたちの様子を見て来いと誰かに言われたのではありませんか？」

「…ええ、まったくその通りです。鷹野さんから、梨花ちゃんたちが学校を欠席したのに病院に来ないから不安だと、様子を見てきてほしいと言われたのです。」

「………ふむ、…やはり。」

「……梨花ちゃんと沙都子ちゃんの欠席を不審に思われたのでしょうか。」

「いえ。多分、富竹さんが内偵を開始したことと関係があるんじゃないかと思います。…もしなかったとしても、今回の動きは彼にとって尻尾を掴むチャンスになるかもしれません。」

「……どちらにせよ、もう何かが始まっているということなんですね。」

「そう見て間違いないでしょう。……私たちの敵が鷹野と山狗なのか。そうではないのか。どちらにしても、もう敵は動き出しているのは間違いありません。」

「雛見沢村連続怪死事件。………最初の二年は偶然が重なっただけでした。…しかし、三年目から鷹野さんはそれを面白がり、……綿流しの夜に何かが起こり続けることを期待し出したように思います。」

「…綿流しのお祭りは明後日。……敵が動き始めるタイミングとしては妥当かもしれませんね。……そして、五年目に梨花ちゃんを狙う。…鷹野か、恐ろしい女です。」

「…………梨花ちゃんがしていた鷹野さんの話。…あれはどれも本当だと思います。………今日、初めて知ったんですが、彼女は雛見沢症候群の第一発見者、故高野先生の養女だったんです。」

「同じタカノですね。…なるほど。」

「……彼女にとって、雛見沢症候群の研究を受け継ぐことは、尊敬する祖父との絆だったんです。……その研究が打ち切られることが確定した。…それは、彼女にとって、祖父を冒涜するものなんです。」

「全て梨花ちゃんの言っていた通り、ということですね。」

「…はい。…………それと、…鷹野さんがこんなことも言っていました。三年で打ち切られることが決まっている研究を、余命幾ばくもない眠ったままの患者に例えるんです。…そして、その生命維持装置のスイッチを切るならば、それは残された家族の権利だ、というようなことを。」

「…………………………。…どうせ打ち切られる研究ならば、…それの幕を降ろすのは、故高野先生の遺族、……鷹野三四だけ、と。」

「…………はい。そういう意味で言ったものと思います。」

ほぼ状況証拠は揃いつつある。間違いなく敵は鷹野だ。

昨日の時点ではまだわずかに信じきれていない様子のあった入江氏も、今では完全に梨花ちゃんの話を信用しているようだった…。

「あとは富竹さんが、鷹野さんが何かを企んでいる証拠を掴んでくれるだけです。……そうしたら、関係者を一斉に拘束するための鎮圧部隊を呼び寄せるそうです。」

「…鷹野は山狗なる特殊部隊を配下に持ちます。それを鎮圧できるような？」

「はい。私も名前しか知らないのですが、番犬という部隊がいるそうで、本当の非常事態が起こった時、武力で強襲する戦闘部隊だとか。山狗はどちらかというと、機密保持などの情報部隊の性格が強いので、多分、それよりはるかに強い部隊なのでしょう。」

「……表に出せぬ研究をする機関の万が一の造反に対応する鎮圧部隊となれば、…多分、相当の強さを持つでしょう。……つまり、その番犬部隊を雛見沢に呼び寄せることが、我々の勝利条件になる。」

「そういうことになるのでしょうか…。ただ、ひとつ不安なのは、緊急マニュアルには、機密保持のために村を封殺することも認める記述があることです。番犬という部隊が来ても、やることは彼らと同じで、結局は村ごと証拠を隠滅するのではないかという不安も残ります…。」

「いえ、それはないでしょう。敵の狙いが緊急マニュアルの執行にある以上、それでは何の意味もありません。この陰謀が派閥抗争によるものならば、入江機関のクライアントたちの派閥は絶対に穏便に済まそうと思います。おそらく、敵を急襲し、村人たちが何事かと目を白黒させている内に決着させてしまうに違いありません。」

そういうヤバイ任務に経験のある自分だからこそわかる。疾風のように通り過ぎて迅速に目的をこなす作戦で行くはずだ。

そして、それを山狗相手に可能とする部隊なら、それは相当強力な部隊に間違いない。

「とにかく、富竹さんからの連絡を待つしかありませんね…。」

「ええ。これは持久戦です。ですが、一度有事となればそれは電撃戦に様変わりする。……緩急の差の激しい、辛い戦いになります。入江先生は敵の腹中にいる心強い存在ですが、同時にもっとも危険な場所にもいます。常に油断せずにいてください。…私たちは、梨花ちゃんの味方になろうと決めた時点で、すでに彼らの敵なのですから。」

「…………はい。」

この家の電話はすでに監視下にあるため、私への連絡は入江氏が直接来て伝えるしかない。

だが、それでは緊急時に動くことが出来ない。やはり電話に勝る連絡方法はないのだ。だから私はあるメモをすでに用意してあった。

監視下にあると疑われる電話での連絡方法だ。異常な状況下に置かれることもある私の本職が編み出した方法だ。
「これは？」
「緊急時用の私への電話連絡方法です。絶対に敵に奪われないでください。危険な時には必ず飲み込んで処分するように。」
「盗聴されているのに、どうやって電話で連絡を？　あなたが受話器を取れば、たとえ無言であっても疑われかねないのに…。」
「受話器を取らなくても連絡することは出来ます。少々コツのいる不便な方法ですが、一番重要な連絡をすることが出来ます。そして、それは敵の動きを最初に察知出来るあなたにしか発することが出来ない。」
「……わ、わかりました。それで、やり方は？」
「メモに書いてあります。簡単に説明すると、電話の呼び出し音の長さで連絡するのです。相手に電話をする時、一分以上呼び鈴を鳴らし続けることはほぼありません。それを利用した呼び出し音による連絡方法です。一分鳴らし続けて切れば、そこは危険、脱出せよ。一分半なら、緊急事態、直ちに園崎邸へ急行せよ。…こんな感じで三十秒区切りで緊急性の高いメッセージが仕込んであります。他のメッセージはメモを見てください。でも、この一分と一分半の二つ

だけは絶対に暗記してください。私の命が掛かっていますので。」

受け手側に危機を知らせる合図ほど短く設定されているのがミソだった。ただ、あまりに短すぎると一般の電話の呼び出しと混じってしまう。

そのため、この連絡をする合図として、三秒以内の短い呼び出し音を事前に一回入れ、緊急連絡開始の合図とすることになっている。三十秒単位という長い波長でメッセージを区切っているのは、連絡の誤受信を防ぐためである。電話は掛けた側の呼び出し音と受ける側の呼び出し音には若干の誤差がある。

その誤差でメッセージが変わることがないよう、これだけの長い波長が設けられているのだ。

「まず短く一回鳴らし、一分なら逃げろ。一分半なら梨花ちゃんたちのところへ向かえ…。はい、覚えました。」

「少々面倒と思いますが、あくまでも緊急事態用ですので、くれぐれもよろしくお願いいたします。」

「ええ、わかりました。危険な時の連絡は任せてください。」

「最後に、もう一つだけ暗記してください。………とても嫌な暗号ですが、これも忘れないでください。この連絡に限り、短い一回は不要です。連絡方法は、三分以上呼び出し音を鳴らし続けること。……電話を掛けたまま受話器を外し、そのまま放置するのがいいでしょう。」

「その暗号の意味は…？」
「連絡員に緊急事態。以後連絡不能。」
「…………………それは、……私の身に危険が及んだ時、…という意味もあるんですね。」
「はい。緊急時にはこの家へ電話し、そのまま受話器を外し安全な場所に身を隠してください。……ただ、自らの危機を測るのはとても難しいことです。まだ大丈夫、多分大丈夫などと思っている内に連絡の機会さえ逃してしまいかねません。…少しでも嫌な予感がしたら緊急時と判断していいでしょう。…陰謀の度合いから考えて、敵は私たちを生かしはしません。くれぐれもご用心を。」
「わ、…わかりました…。その場合、あなたはどうするんですか？」
「その際は、状況によりますが私もここを脱出します。あなたに危機が迫る以上、梨花ちゃんの身にも危険が迫っている可能性が高いですから。私は園崎邸を目指し、梨花ちゃんたちとの合流を目指します。………あくまでもこれは最悪の事態です。このような事態に陥ると決まったわけではありませんので、緊張することはありません。どうか気を楽に持たれてください。」
「…ですが油断せずに、ですね。」
「そうです。」
入江氏は深く頷く。

……いよいよだ。いよいよ、何かが始まる……！

■部活メンバー集合

園崎家の小さな客間に、俺たち部活メンバーはぎっしり集まり、ずっと魅音の話に耳を傾けていた。
それは、……梨花ちゃんを巡る壮大な、……現実感を失いかねないほどの陰謀だった。
「……というわけよ。質問のある人、いる？」
魅音は最後にそう結び、俺たちの呆然とした顔を見渡した。
質問してもいいというなら、いくらでも質問はある。
何しろ、真顔で信じた次の瞬間には、実はドッキリでした〜！　なんて言われてもおかしくないくらい、…途方もない話だったから。…だが、今の時点で興味本位の質問など時間の無駄だ。魅音は、梨花ちゃんを巡る全ての状況について、十分に説明してくれたのだから。
「まぁ、私も園崎家当主代行として色々と聞きたいことはあるよ。…連続怪死事件について、どうやら少なからぬ関係があるようだからね。でも、今はそれはなしにする。しかし、ウチに避難してきたのはいい判断だね。ウチの地下なら核戦争だってしのげるよ。電気もある電話も

ある。もちろん食料だってあるしね！　山狗って連中がそんなにも厄介な相手なら、ますますにこの村の中で梨花ちゃんたちを匿えるのはウチしかありえないよ。」

「……みんなを巻き込んでしまって、申し訳ないと思いますです。」

梨花ちゃんが、心の底から申し訳なさそうに言う。…梨花ちゃんは今日まで、雛見沢症候群というおかしな病気や、「東京」とかいう怪しげな連中との関係を、ひとりで背負ってきたのだ。俺たちを巻き込むまいとして、たったひとりで背負ってきたのだ。

その胸中が想像出来るから、俺たちの誰もが梨花ちゃんにかける言葉を思いつかずにいた…。

沈黙が耳に痛いと思い始めた時、羽入が威勢よく梨花ちゃんの背中を叩いた。

「梨花は昨日から申し訳ないばっかり言いすぎなのです。もう一回言ったら、梨花は毎日僕にシュークリームをおごる罰ゲームなのですよ！　あうあうあう！　それに、みんなだって申し訳ないなんて思ってないですよ？　ねぇ、圭一。」

羽入が俺に突然振ってくる。…その瞳からは、俺に何かを期待していることがうかがえる。

そうだ、俺の役目は部活メンバーの火付け石じゃねぇか。威勢よく真っ赤に燃えて、みんなを盛り上げる役だぜ！　その俺が何をぽかんとしていたんだか！

「へっへっへ！　そうだぜ梨花ちゃん。ちょいと事がデカかったんで面食らっちまったが、…なぁみんな？　どいつもこいつも内心は、面白くなってきやがったとか思ってんだろ？　沙都

子、どうもこいつは、俺たちに本気でやってもいいってことみたいだぞ。お前、だいぶ温存してるんだろ？　シャレじゃ済まない秘蔵のトラップを、だいぶ隠し持ってるんだろ？　へっへへへへへ!!　そいつを食らわせてやるまたとないチャンスじゃねぇか！」

「をっほっほっほっほ!!　部活メンバーに私がいたことに感謝なさいませですわね！　相手が何様だか存じませんけど、本気でやっていいとなれば、たとえ部活メンバーが相手でも使用を躊躇ってきた奇跡の大トラップの数々が惜しげもなく飛び出しますのよ!!」

「あはは、そうだね！　沙都子ちゃんのトラップは魅ぃちゃんのお墨付きだもんね！　たとえ相手が本物の軍隊でも、沙都子ちゃんのトラップはみんな蹴散らしちゃう!!」

「と、沙都子をヨイショしてるが、もちろんレナだって容赦ねぇからなぁ。レナは普段はおっとりしてるが、俺はこいつの本気の時を知ってるぜ。レナは本当に戦うべきここ一番では誰にも屈しない強さを持ってる。そいつはかなりハンパない。……多分、俺でも勝てないと思うぜ!?」

「……そんなことないよ。圭一くんだって、ここ一番の時の爆発力と瞬発力はすごいよ。私では打ち破れない運命を打ち破れる気がするもの。」

「……圭一が赤く燃え上がる炎なら、レナさんは青く静かに燃え上がる炎という感じなのです。」

「お、それいい例えだな！　へへ、真っ赤に燃える男、前原圭一!!　青く燃える女、竜宮レナ！　我が部にその人ありと天下に知らしめる絶好のチャンスだぜ!!　そして、その最強のメンバーを最強のリーダーが従える。へへ、だよな、魅音！　個にして最強、揃えば無敵!!　それが俺たちの部なんだよなッ!!」
「……くっくっくっく。いやはや、……不謹慎だと思って黙ってたけど、おじさんさ、本当はこう思ってたのさ。…こいつぁ最高に面白くなってきた、ってねッ!!　今は感謝してるよ梨花ちゃん。これだけの獲物をよくぞ知らせてくれたッ!!　くっくっく、この雛見沢で我が部に挨拶なしで上等を決めてくれようとはね！　きっちりケジメを取らせてもらうよ!!」
梨花ちゃんがみんなに申し訳ないと謝り、場が沈んでからものの五分と経ってないのに、俺たちの士気は今や最高潮だ。
…とてつもない陰謀が相手なのに、みんなと一緒なら全然負ける気がしないんだ。……こいつぁ、最高の気分だぜッ!!　その切っ掛けを作ってくれたのは羽入だった。……こいつ、なかなか見所のある新人だぜ。
この曲者揃いの部活メンバーの中で、最初に誰に火をつければいいかを一目で見抜きやがったんだからな。…いや、それどころか、先輩メンバーたちですら、心のどこかで、あまりにデカ過ぎる相手に少しの戸惑いがあったのを、こいつだけがビビリもせず気勢を上げてみせやが

った。今後が末恐ろしいヤツだぜ!!
「あ、……ありがとうみんな。信じてくれてありがとう……。」
「信じてくれるとずっと言ってますし、信じて当然！　信じないヤツなら仲間じゃないのです！　だからお礼なんていらないのですよ梨花！」
「ああ、そうだなッ！　羽入の言う通りだ！　お前、いい根性してるぞ、気に入った！」
「あぅあぅあぅあぅ！」
　羽入の頭を、わしわししてやる。羽入はくすぐったそうに笑うのだった。
「さて、そうとなりゃ作戦会議だ！　状況をもう一度整理しよう。まず、梨花ちゃんと沙都子は病気欠席のフリをしてしばらくここに身を隠す。これは万が一に備えてだね。まさかここに二人が隠れてるなんて誰も知らないよ。留守番をしてくれてる赤坂って人に感謝だね！」
「でもよかったたね。五年も昔にした約束を覚えてて助けに来てくれるなんて、本当に素敵な人だね。……はぅ、ちょっと羨ましいかも…。」
「……私の好みじゃありませんけど、梨花にはちょっと嫉妬しましてよ…。」
「み、みー、赤坂は別にそういうわけではないのです…。」
「しかも、東京の警視庁の公安部の人で、それも秘密部門所属なんだろ？　すげぇ頼もしい人だよな！　秘密部門ってのが痺れるぜ!!」

「赤坂はきっととても強いと思いますです。とても頼もしいのですよ！」
「ただ、赤坂さんの役割はどちらかというと緊急時の防御役。むしろ重要なのは、相手の尻尾を掴む大任を帯びてる富竹さんだよ。彼こそが真の攻撃役。…しかも、敵を鎮圧出来る番犬部隊を呼ぶことが可能なのは富竹さんだけ。つまり、富竹さんこそがこの戦いに勝利できるキーマンってことなんだよ。……ふーむ！　ヘタクソカメラマンの富竹のおじさまが私たちの命運を握っている超重要人物とは、不思議な感じー！」
　みんなが、富竹さんに悪いんだーとか、ヘタクソって言ってたって言ってやろー！　と茶化して囃す。
「…富竹のがんばりを期待しないわけではありませんが、万が一に備え、他の手も考えておいた方がいいと思いますです。」
「……でも羽入、富竹に頼る以外に何か打てる手などあるの？」
「いや、…羽入の言うのも一理あるよ。何しろ、敵から見ても富竹さんはキーマン。自分たちを内偵していると気付いたら、暗殺することだってあるかもしれない。ここは何しろ彼にとって敵地も同然なんだからね！　富竹さんだけに頼りきらず、私たちに打てる手を探すのも大切だと思うよ。」
「そうですわよ！　トラップだって、たった一つで綺麗に決めるのは難しいですもの。いくつ

も仕掛けてあらゆる可能性に対処して初めて完璧になるんですのよ！」
「そうだね。攻撃の手を一つに限る必要なんてない。富竹さんとは違う形で他の攻撃が出来ないか探してみるといいんじゃないかな。」
「でも、「東京」についてわからない私たちがどんな手を…？」
「富竹さんの重要性のひとつが番犬部隊を呼び寄せることだってんなら、…俺たちにも彼らに連絡する方法を教えてもらいたいよな。そうすれば、万が一富竹さんが敵にやられても、俺たちは勝利条件を失わずに済む！」
「そうだね。富竹さんの最大の価値はそこにあるからね。同時にそこがこちらのアキレス腱でもある。………事情を話して富竹さんに彼らとの連絡の取り方を教えてもらおう。…ただ問題なのは、富竹さん自身が市内に身を隠しちゃっててこっちから連絡を取る方法がないって点なんだよね。」
「でもいい手だと思いますです。富竹と次に連絡を取ることが出来たら番犬への連絡の仕方を聞きましょうです。まずこれが一案。他にはないでしょうか？」
羽入が何だかいつの間にか俺たちの議事進行役に納まってるな。それはレナも気付いてるようで、俺たちの六人目の仲間に加わろうと頑張る様子を微笑ましく見ていた。
「今の手は、富竹さんに万一があった時のための保険だよな。……また別の角度の攻撃を考え

たいな。富竹さんの調査に貢献できるような攻撃ってねぇか？」
「面白いですわね。何かのトラップを仕掛けて尻尾を掴み、黒幕に言い逃れ出来ない証拠を突きつける！　最高のトラップシチュエーションでしてよー!!」
「……ヤツらの狙いがボクなら…。ボクを何かの囮にするのはどうですか？　危険だけど、鷹野たちは私が目的なんだから食いつかざるを得ないのです。」
「かなり危険な一手だね。……でも確かに、鷹野さんが梨花ちゃんを追っているという大きな証拠を掴める手だよ。」
「わざと姿を見せて、騒ぎを大きくして逃走戦にすれば、……ふむ。少しは面白い効果が期待出来そうだね！　くっくっく、そこで沙都子の裏山が役に立つ！」
「あぅあぅあぅ！　あそこに逃げ込めば、追っ手は大変なことになりますですよ～！」
「だよなぁ!!　へへへ！　こいつぁ最高の見物だぜ!!　面白くなってきやがった!!」
「でも、やっぱりそれは最後の一手だと思うかな。裏山に籠れば籠城戦になって、状況はだいぶ変わる。この手に訴えるのは、本当に最後の最後だと思う。」
「そうですわね。裏山のトラップは防御効果が非常に高いでしょうけども、あくまで防御ですわ。敵に対し攻撃するものとは違いますもの。」
「うん。裏山籠城は追い詰められた最後の切り札になるだろうね。これは本当に最後の手段。

ここが敵に襲われ、ここを捨てざるを得ない時だけのね。ちなみに、ウチの地下には隠しトンネルがあって、山中の井戸に抜けられるようになってるんだよ。」

「へー!! すっげぇな魅音の家!! やっべぇ、ますます面白くなってきたぜ！！！ 敵は謎の組織で、秘密作戦に秘密基地、秘密の地下道、うおおおぉおぉおぉ!! これで燃えなきゃ男じゃねぇぜッ!!」

「あぅあぅ！ 男でなくても燃えまくりなのですよ！ さぁ、これで二案でましたです。僕たちはまだまだ思いつきますですよ！ もう一案くらい出ないですか！ あぅあぅあぅ！」

「そうだな。もう一案欲しいぜ。今の案もどっちかと言うと防御的な案だからな。もっともっと攻撃性の高い、我が部にぴったりの案は出ないのかよ。……何て言うのかなぁ!! 相手にガツンと一撃が入って、連中の陰謀が頓挫しちまうくらいのすげえヤツだよ！」

「……ボクたちにそんな方法があるのでしょうか…。」

「うん。きっとあるよ。私たちは梨花ちゃんが思ってるほど無力じゃないし、切り札だってないわけじゃない。…彼らにとって重要な、梨花ちゃんというキーマンが私たちと共にいる。これが重要な切り札になるんだから。梨花ちゃんを囮にするっていう意味じゃなくてね。」

「確かに。女王感染者が私たちのところにいるのは、彼らに対して大きなアドバンテージになるね。……連中の目的は何？ 梨花ちゃんを殺して、緊急マニュアルとやらを発動させ、この

村を丸ごと抹殺して、それを組織内の派閥争いに利用すること！　そうだね？」
「そうなのです。梨花はヤツらにとって全てを吹き飛ばす爆弾みたいなものなのです。」
「……それを爆発させて大騒ぎを起こし、それに乗じて何かを得るのがヤツらの狙い。」
「それを爆発させないのが私たちの勝ち、ということになると、…それはあまりいい状況ではありませんわねぇ。」
「確かに。こちらはいつまでもずぅっと守り続けなくちゃならないけど、向こうは形振り構わず梨花ちゃんを殺せば勝ちになる。……まるで、片方にしかゴールがないサッカーだよ。」
「その片方にしかゴールがない異常なサッカーを告発して、番犬部隊を呼び寄せるのが、いわゆる富竹作戦の骨子だねぇ。………ヤツらの陰謀を砕く、私たちのゴールは何かない？　…あるはずだよ。こういう時は立場を逆にして考えると見えてくる。…………………お？　あれ、あれ⁉　くっくっくっく、その手があったかぁ！」
魅音が妙な声を出しながらニヤニヤ笑い始める。
……やっぱりさすがだぜ魅音は。ますますに追い風が吹いてきて、絶好調がさらに絶好調になってやがる‼　魅音は頭がいい。状況の分析能力はずば抜けてる。……だからこそ一番最初、梨花ちゃんが全てを打ち明けた時、即座に勝てないと判断し、意気を消沈させてしまったのだ。
だが、魅音には挫けやすい部分がある反面、追い風に対しものすごい力を得る部分もある。

その追い風を俺たちが吹かし、魅音の帆がバンバンに張ってきてみなぎってきやがったってわけだ！
「梨花ちゃん、もう一度確認するわ。…その緊急マニュアルってのは梨花ちゃんが死ぬと村人が四十八時間以内に全員発狂するっていうから、そうなる前に村を鎮圧するために発動されるんだよね？」
「……はい。そうなのです。」
「あぅ？　どうして梨花が死んだこともないのに、四十八時間でそんなことになるとわかるのでしょうか？」
「た、確かにそうだね…。うん、おかしいよそれ。何で四十八時間で村人がみんな発狂するなんて決め付けられるんだろ。」
「ボクにはよくわからないのですが、……鷹野が言うには、他の国の例でよく似たケースがあり、それが四十八時間だか何だかの根拠らしいのですが、ボクにはちんぷんかんぷんなのです。入江も実はちんぷんかんぷんだと言ってましたです。」
「……あッ！！！　まさか、なるほど…！　をっほっほっほっほ!!　私、わかりましたわよ、敵の弱点が!!」
「…………!!　あ、俺もわかったぜ!!　そうかそうか、そうだよなぁ!?　これは確かに盲点だ

った ぜ!!」
「……え？　…え？　ふ、二人とも何がわかったのですか？　ボクにはわからないのです。」
「わかんないわかんない！　レナにもわかんないよぅ!!」
「くっくっくっく！　あれあれぇ、レナと梨花ちゃんはわかんないのぉ？　最後までわかんない方は恥ずかしい罰ゲームってことにしようかねぇ？　くっくっく！　羽入はどう？　あんたならとっくにピンと来てそうだねぇ!?」
「はい、わかってますですよ！　だからこそ、梨花は鷹野にとっても重要人物だったのです。あぅあぅ、これは梨花とレナへのヒントなのですよ。」
「をっほっほ！　私からもヒントですわよ。敵の狙いは派閥争いのために雛見沢で大騒ぎを起こすこと。そしてそのための手段として緊急マニュアルを使おうとしているわけですわ。ということは、この緊急マニュアルこそ、敵の陰謀のアキレス腱になるということですわ！」
「えっとえっと、うーん、うーん!!」
「……み、み――――、わかんないのです…。」
「あぅあぅあぅ～☆　梨花ぁ、僕に今まで意地悪してごめんなさいと謝ったら答えを教えてあげますですよ～。」
「ま、まっぴらごめんよ。そのあぅあぅ、気が散るから黙らせてー！」

「何だ何だ、鋭いレナまで気付かないのかよ。いいか？　俺たちの攻撃が富竹さん一人に委ねられていて、それがアキレス腱であるように、敵の攻撃も緊急マニュアル一つに委ねられているんだよ。ってことは、緊急マニュアルの根底を打ち砕いてやればいい。わかるか？　緊急マニュアルの意味を失わせてやればいいんだよ！」
「あぅあぅ！　緊急マニュアルの意味はなんですか？　それは雛見沢症候群の大騒ぎを災害のフリをして隠すためなのです。だから、村人たちがおかしくなる四十八時間以内に村を丸ごと抹殺してしまおうとする。そしてそれが敵の狙いなのです。」
「うーーんうーーん、ということはつまりえぇと、四十八時間以内に緊急マニュアルを使わせなければいい？　えぇとえぇと、うーん!!」
「……ボクを殺さなければその四十八時間は始まらないんだから、……う～ん、その四十八時間を逃げ切ればいい？　みー、みーー…。」
「何よ、二人ともう答えを口にしてるじゃない。くっくっく！　いい？　じゃあ答えを教えてあげよう。みんないい？　せーーの！！！」
「「梨花ちゃんが四十八時間前に死んでればいい!!」」
狙ったかのように俺たちの声がハモる。…いや、つくづく俺たちって神懸(かみがか)ってるよな。こういう時は絶対に外さない！

「……わ、わかったよ、わかった！」
「ボクもわかりましたです……!!」
　レナも梨花ちゃんも同時に手を打つ。
　ようやく気付いたようだった。何でこんな面白ぇ作戦を思いつかなかったんだろうな俺たちは!!
「あぅあぅ。やっとみんな思いつきましたです。こんな案、一案目でさっくり出してほしいものなのですよ？　さっきから後ろ向きな案ばかりだったので、ひょっとして思いつかないのかと焦ってましたのです。あぅあぅあぅあぅ！」
「ほ～～～～～!?　言ってくれるじゃなぁい!!　羽入、あんたますます気に入ったよ！　この功績を認め、あんたには後で我が部謹製特別十字章を授与しよう!!　まぁそれは後に置いといて、今は作戦の説明に入ろう。やつらのゴールの最大の拠り所である緊急マニュアル。これにはでっかいウィークポイントが隠されてる。それは、雛見沢症候群は、女王感染者の死後に四十八時間で村人が全員発狂するからそうなる前に抹殺せよ、というそもそもの根拠の部分。つまり!!　梨花ちゃんが四十八時間前にすでに死んでいるのに、村に何も起こらず平和だったら、このマニュアルの根本が崩れるってことなんだよ!!」
　そういうことなんだよ。誰だってこんな恐ろしいマニュアルの執行なんかしたくない。でも、

執行しなければ村人が全員発狂してもっともっと恐ろしい事態になる。だから、より被害の少ない収拾方法として、渋々と緊急マニュアルを許可するわけだ。だが、そこでひょっこりと、死後四十八時間以上の梨花ちゃんの死体が見付かったりしたら。
女王感染者の死後四十八時間で村人は全員発狂する、だからそうなる前に全員抹殺を、という緊急マニュアルの最初の大前提が崩れてしまうということなんだ!!
「幸い、梨花はここに隠れているのですから、梨花が死んでしまったという嘘をつくのは可能なのです。」
「梨花ちゃんが世間に目撃されたのは昨日の学校が最後。だから、それから四十八時間だから、明後日の早朝くらいに死体が見付かったということになるととても好都合だねぇ！」
「……そうか、警察の大石さんの助けがあれば、梨花ちゃん死亡の偽装は可能なんだね!!」
「その通りですわ！　大石さんにうまくやってもらって、梨花の死体が見付かり、それが死後四十八時間経過してるって、嘘を発表してもらうんですの!!」
「まぁ、公式発表にすると色々余波がありそうだから、入江機関にだけ嘘を流せば十分だろ。しかも監督がこっちの味方なんだから、連中をコロっと騙すのは可能なはずだ！」
「……これは、……くすくす。考えたわね……！」
「緊急マニュアルの信憑性が失われれば、こんなひどい作戦が承認されることなんてありえ

ない。つまり、連中にとって最大の弱点は緊急マニュアルであり、そして梨花ちゃん自身だったというわけなんだよ！」
「大石は、協力するとまだ言ってくれたわけではありませんが、……僕はきっと力を貸してくれると信じていますです。あぅ。」
「をっほっほっほっほ!! これは、愉快なトラップになりましてよ!? 鷹野さんが慌てふためく姿が目に浮かぶようですわ！」
「……鷹野は私と沙都子が風邪で寝込んで家にいると信じ込んでる。でも、姿を見たわけじゃなく、きっとそこにいるだろうという想像でしかない。…それが実は、他にいて、そして明後日に突然、私の死体が見付かり、しかも四十八時間前には死んでいたなんてことになったら…、」
「あっははははは！ 何だかすっごい痛快なことになりそうだね!!」
「となれば、黒幕たちはこの緊急マニュアル作戦が失敗したと判断して撤退するだろうね。ここで私たちの攻守が逆転する!! ここまで至ればきっと、敵の動揺の隙を突いて富竹さんが何かを摑む。」
「そして、陰謀を鎮圧するために富竹が番犬のわんわんを呼び寄せて敵をやっつけてくれるのです！ これが、私たちのゴールなのです!!」

「よっしゃあああぁあ!!　見えてきたじゃねぇか、俺たちの勝ち方がッ！！！　しかも最ッ高に俺たちにぴったりの騙し方だぜ!!　気に入った気に入った最高に気に入ったッ！！！」
　俺たちは、えいえいおー!!　と気勢を上げる。あぁ、面白くなってきた、最高に面白くなってきた!!　…だが、この作戦で重要になるのは、敵を騙せるだけの「梨花ちゃん死後四十八時間」の信憑性だ。それには大石さんの協力が絶対不可欠となる。大石さんにその作戦を相談しよう、と思ったら、何とも都合よく、その本人が園崎家を訪れてくれたのだ。大石さんは、梨花ちゃんがここへ隠れたことを知っている。そして、山狗の手先が警察にも食い込んでいることを知っている。
　…しかも、梨花ちゃんの家を盗聴するような真似（まね）までする相手だ。電話連絡は無用心（ぶようじん）だと思い、直接来てくれたのだった。
「先ほど、入江先生にお会いしましてね。赤坂さんはうまいことやってて無事ですと伝えてほしいと言われました。……あの人は五年前とは比べ物にならないくらい成長してます。あの砦（とりで）は彼なら守りを務められるでしょう。」
　大石さんは差し出された麦茶を飲みながら、ネクタイを緩（ゆる）めてそう言った。
　…まさか、宿敵園崎家で麦茶を飲む日が来るとは思わなかったろうなぁ。
「それで大石！　この四十八時間作戦なんですが、どう思いますですか。」

「ええ、なかなか面白い作戦だと思います。敵に対する強力な揺さぶりになるでしょう。恐らく、敵は動揺し焦ってミスを犯すはずです。それは富竹さんにとって摑むべき尻尾となるに違いありません。いや、実にうまい作戦ですよ！　三人寄れば何とかって言いますが、若い皆さんがこれだけ集まると、いいアイデアも出て来るもんです！」

　大石さんは感服したように笑い、作戦の効果について太鼓判を押してくれた。だが、大人の事情としてわずかにも渋る。

「…こいつぁ大勝負になります。勝っても負けても、私はこの作戦の責任を取らされるでしょう。うまく誤魔化すつもりですが、下手すりゃちょいと痛い目にも遭うでしょう。……覚悟が必要です…。」

　この四十八時間作戦で一番の責任は大石さんが受け持つことになる。……警察は厳しい組織だ。大石さんが強い追及を受けない保証なんかない。聞けば、大石さんは今年で定年退職。…退職金で家のローンを全て返す予定を立てているという。

　人生でとてもデリケートな時期にいるのだ。……梨花ちゃんの一大事とは言え、全てを投げ出す覚悟を強いるのはとても申し訳ないことだった。

「くそ…。私もこの四十八時間作戦、かなりいい手だとわかってるんです！　しかし、………私ってヤツは……。」

「……大石。難しければ、無理に頷かなくてもいいのですよ。僕たちは大石の犠牲を踏み台にして勝利を勝ち取りたいなんて思ってないのです。」
誰も言葉が掛けられない沈黙を、羽入がやさしく破った。
……羽入は、部活の時はあぅあぅと賑やかなのだが、……こういう、何というのか、迷ったり弱ったりしている人の心を癒す力がある。…例えるなら、不思議な包容力。外見と年齢がもし伴ったなら、それは母の姿にも似ているのかもしれない。
「それに！　僕たちは最強の部活メンバーなのです！　四十八時間作戦が駄目なら、もっともっと効果的で面白い作戦をすぐに考えちゃいますのです!!　ねぇ魅音!!」
「あ、…ああ、そうだよ！　大石さん、無理なら断ってくれて全然ＯＫ！　むしろ私たちも大石さんの迷惑も考えず勝手に盛り上がっちゃって悪かったと思ってるもん！」
「…そうですわね。困らせてごめんなさいですわ、大石さん。」
その様子を見て、レナが俺にそっと呟く。
「……羽入ちゃんって、結構うまいね。年下の子にこんなこと言われちゃったら、一肌脱がずにはいられなくなっちゃうもん！」
「え？　…え？　って、羽入が慰めてるのって、そういう意味があるのかよ⁉」
「……みー。だって羽入は本当はボクよりずっとタヌキなのですよ。」

大石さんが、何とか力になりたいとうんうん唸っている横で、ニコリ（ニヤリ？）と笑っている羽入。前言撤回…。……こ、こいつぁ、…なかなかのタヌキだぜ!!　やっべぇ羽入最高!!　次の部活からはこいつ超要注意のダークホースだ！！！

「んんん…、ちょっと一晩だけ時間をください。…署内で信頼出来る人間に打ち明けて協力を求めてみます。大丈夫、絶対に信頼出来る人間です。私も引き受けたなら失敗しましたじゃ済みません。なので、やる前に勝算を測らせてください。」

大石さんは出来ない約束をする人じゃない。だから慎重な言い方をするが、その立場を思えば、とても勇気ある決断に違いなかった。

「大丈夫ですよ大石。もし退職金がなくなっちゃっても、きっと魅音が何とかしてくれるのです。ね？　あぅあぅあぅ！」

「……みー。部活メンバーに協力する以上、そうじゃないと大石が可哀想なのです。…みー。」

「ふぇ!?　あ、あはははは!!　ま、まぁねぇ！　おじさんの家はこう見えてもお金持ちだからねぇ！　あはあはははははは…!!」

タヌキが二匹か…。我が部も今後はますますに混戦を極めそうだぜ…。

これでその日の会合は終わった。大石さんが、四十八時間作戦の発動が可能かどうかを探り、明日それがわかる。富竹さんから連絡はないが、すでに鷹野さんの身辺調査に着手しているだ

ろう。監督と赤坂さんは敵の腹中で今はひたすら待つ時だ。
…同時に危険な立場でもある。無事を祈るしかない。…そして、鷹野さん。
あの人がこんな恐ろしい陰謀に関わっていたなんて、…今でも、実は嘘でしたと言われたらそれを受け容れてしまいたい心の弱さが少しある。
だから、そのためにも富竹さんにそれを調べてもらいたい…。……ミステリアスでちょっと冷たい感じの人だが、たまに見せるお茶目な一面もあった。………それに、やっぱり彼女も村の一員なのだと思う。その一員を、敵だと疑うのは、…本音を言うと、少し心苦しいことだった。富竹さんの気持ちも少しわかる。
……彼女がクロだと摑むための調査じゃなくていい。……彼女の潔白を、早く証明してほしいと思った。人が、人に、疑いを持つというのは、こんなにも辛いことなのだから。

富竹ターン

「もしもし。あぁ、何度もお電話をさせてしまいすみませんでした、富竹二尉！」
「いえ、それより、何かわかりましたか。」
身辺調査は、数ヵ月の単位で行なうものだ。昨日の今日ですぐに何かがわかるほど簡単なも

のではない。
だが、富竹は梨花たちに言われ、……何か大きな陰謀が動き出していることを感じ取ってい
た。その気配は確実に迫りつつある。……そして、それが迫ったときにはもう手遅れなのだ。
だから、こうしてマメに進捗(しんちょく)を確認している。
「……鷹野三佐については現在、調査を続けています。アルファベットの客員に迎えられる時に、別の部署ですでに身辺調査を行なっていたらしく、その資料の引渡しを要求しています。アルファベット後については今、総動員で当たらせてるところです。もうしばらくお時間をください。」
「わかってます。…ですが事態は切迫(せっぱく)しつつあるように感じていますので、くれぐれも緊急にお願いいたします。」
「はい、もちろんです。それから、富竹二尉の依頼とは別に、本日付で入江機関への緊急内偵が命じられました。優先度最大。命令書は幕僚長(ばくりょうちょう)名です。」
「……幕僚長が⁉　私の調査依頼とは別に？」
「はい。あくまでも別件となっていますが、私の見たところ、これは富竹二尉の調査に対するトップからの強力な後押しではないかと。」
「……幕僚長が、協力…。」

それが何を意味するか、と言われると難しい。だがひとつ言えるのは、入江機関を巡る陰謀に陸自トップが充分な危険性を認識したのは間違いない。

梨花ちゃんが主張するように、この巨大な陰謀が、緊急マニュアルの執行にあるなら…彼らと対立する陣営はその執行を何とか食い止めようとするはずだ。私の調査依頼は、食い止めるための第一歩となる。……だから、もし幕僚長が、陰謀の黒幕の息が掛かっていたなら、この調査に圧力をかけるはずだ。

……それが後押しということは、……少なくとも幕僚長は敵ではない。…いや、それどころか多分、陰謀とは逆側の陣営に属していると考えられるだろう。

…いや、属しているかも怪しい。逆側の陣営に属する黒幕に、そうするよう命じられただけなのかもしれない。…ということは、陰謀側の陣営に嗅ぎ付けられ、逆に圧力を掛けられる危険性も高まっているということだ。

……そうなる前に、どこまで嗅ぎ付けることが出来るか。……自分の身には雲の上の話などわからない。しかし、幕僚長が絡むとは……。

………鷹野さんがクロかシロかは別にして、…やはり入江機関を巡って何かとんでもないことが動き始めているのは間違いないようだ。

「入江機関についての調査も急ピッチで進めています。まだ分析は終わっていませんが、入江

機関内の予算の動きに不審があるようです。単なる書類のミスなのか、何かの工作なのかは現在、腕利きに洗わせています。」
「不審とは何です？」
「はい。入江機関の運営資金用に分配口座があるのはご存知と思います。そこの数字が微妙に合いません。プール金への流出、もしくは不明金の流入の可能性があるとのことです。また領収書の日付にも不審な点があり、捏造の疑いが持たれています。」
予算というのは普通、一年間の運営に必要な分だけを配当するものだ。
例えば、一年間に百万円掛かるという予算書が通過したら、四月に百万円が配当され、それで一年間のやりくりをすることになる。だから、うまくやりくりが出来れば、一年間を九十万円で過ごし、十万円を余らせるということもあるかもしれない。すると、翌年の予算書は、今年を九十万円で過ごせたのだから、九十万円あれば十分だろうということになる。そしてさらに、十万円はすでに余ってて残ってるのだから、プラス八十万円あればいいだろう、ということになり、次の四月には前年より二十万円減って、八十万円が配当されるわけだ。となると、……勘のいい諸兄はお気づきだろうが、お金を余らせば余らすほど、どんどん予算は切り詰められていき、自分の首を絞めていくことになる。……だから、予算は綺麗にピッタリ使い切るのがコツだ、とされている。

そのため、年度末までやりくり出来るようにうまく切り詰め、それで十万円余ってしまったら、その十万円を使ったように見せかけ、こっそり金庫に取って置くという荒技が出てくる。そして一年間にピッタリ百万円を使ったと報告して、翌年に百万円の予算をまた受領する。

……そして金庫の中にはあるはずのない十万円が残る。

この十万円を、プール金、通称、裏金と呼ぶ。一年間を九十万円で運営するのを毎年続けていけば、金庫の中に裏金は毎年十万円ずつ増えていく。そして、そのカネの存在は一部の人間しか知らない。

これが、公金着服、あるいは私物化の仕掛けだ。

すでに何度も紹介しているアルファベットプロジェクトも、この仕掛けによって、莫大な公金をある特定の黒幕が吸いだしているのだ。こういう事態を防ぐために、毎年、会計事務監査があり、裏金を作って誰かが私腹を肥やすことがないよう監視しているのである。

ちなみに、この十万円を余らせないために、年度末に土木工事が増えるという話だが、その辺はここでは割愛する。予算取りは大変なのだと彼らを弁護しておくに留めよう。……さて、ここまでは予算が余るという幸せな例だが、…逆に足りないという事態も起こりうる。何しろ、一年間の分しか配当されないのだから、私たちの生活のように定期口座を解約して……、などという余分なお金は存在しない。

よって、予算報告は支出が収入を上回ることだけはありえないのである。

もしそれがありえたとしたら、……予算配当した分とは違う、存在しないはずの現金が存在することになる。…つまり裏金の発覚である。まだ調査中というが、入江機関の予算の動きには不審な点があり、そのどちらも疑えるという。

前者ならまだ可愛い。よくある公金横領だ。……だが、後者なら、場合によっては何かとんでもない大蛇の尻尾の可能性がある。つまり、入江機関に、正規のスポンサー以外の資本が入り込んでいる可能性。……もうひとつ嚙み砕こう。

つまり、入江機関に何者かがカネを出し、介入している可能性が疑えるということなのだ。

富竹は、鷹野と山狗が造反している可能性を調査させていた。

鷹野が研究を巡る個人的理由から陰謀に加担することはあるかもしれないが、山狗がそれに共感して加担することは考えられない。山狗が寝返るには、……それに見合うだけの大きなカネが動いたはずなのだ。

その痕跡がそれである可能性は否定できない。

「あ、もしもし？　失礼、今、一件報告が来ました。富竹二尉は小泉先生をご存知ですね？　旧小泉派のトップです。近年お亡くなりになって派閥は瓦解したそうですが。……そのトップと鷹野三佐の個人的親交についてはご存知でしたか？」

「ええ。一応は。」
「では小泉先生と故高野先生に個人的親交があったことはご存知でしたか?」
「……え? いや、……。……なるほど……。小泉先生が鷹野三佐を可愛がっていた理由がようやくわかりました。」
「……ん、…これは興味深い内容です。実は、小泉先生の死後、彼の隠し口座の清算が行なわれたらしいのですが、その際、金庫番の弁護士を通さず、小泉先生がご自身で下ろされた額があることが判明したんだそうです。時期は、入江機関の設立がアルファベットで承認される半年前です。」
「それは、入江機関設立の根回しに小泉先生が使ったのでは?」
「いえ、その根回しのカネは弁護士が管理を任されていました。ですから、その支出ではないと思われます。…腹心の金庫番を頭越しに支払うというのは、よほどの個人的支出です。」
……小泉氏と鷹野さんとの個人的親交が、それに重なる…?
「では、鷹野三佐に対し、小泉先生が個人的に資金を提供した、ということでしょうか?」
「はい。こちらでも、そう分析しており、現在、裏付けを進めています。小泉先生による機関設立の根回しとは別に、鷹野三佐に対し個人的に、設立工作のための現金を提供したのではないかと考えています。」

「……ということはつまり、鷹野三佐は造反工作を行ないうる現金を多額に持っている可能性がある、ということですか。」

「鷹野三佐は機関設立に当たり、各方面への調整に当たりましたが、それは全て表ルートの接触で、裏ルートからの接触はありませんでした。ですので、設立工作に当たり、その提供を受けた資金を使用していないなら、それは丸々残っている可能性があります。」

「…話が前後しますが、その提供を受けたと思われる額はいくらですか。」

「十億。」

「そッ、…そんなに…！」

…鷹野さんと個人的な親交を重ねてきたが、…彼女が特別お金持ちだと感じたことはないし、贅沢どころか、どちらかというと無駄遣いしないタイプだった。

十億円なんて大金を持っていたとはとても思えない…。…………いや、それは彼女にとってお金ではない。祖父と親交のあった人物からもらった、応援のエールであり、…彼女にとっては、ここ一番で使うために取って置く切り札だったに違いないのだ。新しい理事会に対し、現金で買収できる程度の魚心があればきっとそこに使っただろうが、新理事たちはその研究を嘲笑った。

……だから鷹野さんは彼らの買収を諦めた。

そして、……雛見沢症候群の研究終了というこの最後に、それを行使した…。十億円もあれば、山狗を買収することは可能かもしれない。…鷹野さんの背後にいる何者かの後ろ盾（だて）があれば、それはさらに容易だ…。

……果たせなかった祖父の遺志。それに対する壮大な最期を、彼女は演出しようと企んでいる…。…………………くそ、……それは彼女の本当の意志じゃない。心の弱い彼女を誰かが利用しようと誑（たぶら）かしたのだ！　……鷹野さん……、ごめん…。僕は君の側（そば）にいながら、……君の悲しみを受け止められる頼もしさを見せられなかった…。


六月十八日(土)

■六月十八日（土）

古手神社の境内では、明日のお祭りの準備が進められていた。
ワゴン車や軽トラックが、次々にテントの材料を運んできて、村の青年団の、青年と呼ぶには無理のある年齢の方々が、それを下ろしていた。
「梨花ちゃま、だいぶ具合が悪いらしいんね。大丈夫かいのぅ。」
「今日も学校を休んだっちゅ、聞いたんね。長引かんといいんねぇ……。」
「あぁ、入江先生～！　梨花ちゃまの具合はどうですんね…。」
「はい。ちょっと性質の悪い風邪だったようですが、峠は越していると思います。ただ、風邪は治り際が肝心です。本人たちにも、今日は治ったとはしゃがず、布団の中で大人しくしているように注意してきたところです。」
「あ～、そうかそうか、沙都子ちゃんも一緒に風邪を引いてるんかぁ。ふったりで仲良く風邪だもんで、ついつい遊んじゃうんだろぅの、はっはっは！」
「風邪まで一緒とは、梨花ちゃまと沙都子ちゃんは本当に仲良しだんねぇ。」
「あー、村長さ～ん！　入江の先生がね、梨花ちゃまたち峠は越したって言うてんねぇ。」

「へー、そうかいそうかい！　それは良かったぁ。それで明日の奉納演舞(ほうのうえんぶ)なんだけど、……流石(さすが)に無理かねぇ？」

「……う～ん、本人はやるといって聞かないんです。皆さんがやってくれと頼めば、多分、喜んでやってしまうでしょう。ただ、医者の立場としては、たとえ今日、熱が下がっていても、明日は大役はお休みさせてあげたいところです。」

「う～～～ん、困ったねぇ。あ！　あ！　お魎(りょう)さん。梨花ちゃまの具合ね、良くはなってきたけど、まだまだ安静(あんせい)なんだってよ。」

「……そんら仕方ねぇな。…無理にやらせて祭りの日に倒れられた日にゃ、まぁたオヤシロさまの祟(たた)りだなんて言われちまうんよ。」

「いや、…村のみんなも心配してるよ。また五年目の祟りもあるんじゃないかって言ってね。……んで、北条家の沙都子ちゃんと梨花ちゃまだろ…？　物騒(ぶっそう)な想像してる連中もいるらしいんだよ。」

「あっほらし！　梨花ちゃまはオヤシロさまの生まれ変わりよ。その梨花ちゃまが祟りに遭う時は村が滅ぶ時よ。縁起(えんぎ)でもねぇこと言うんでね！」

「いやはや、まったくだよなぁ…。」

「入江先生。二人を見舞うことはでけんかいね。」

「しばらく遠慮してあげてください。治りかけで遊びたい盛りなんです。外部との接触があると興奮してしまい、また床を抜け出そうとしてしまいますから。」

「はっはっはっは、そうかそうか、それなら無理はでけんな。入江先生、あの二人を頼むな。梨花ちゃまだけじゃね、沙都子ちゃんも頼むんな。」

私は、え？　と思った。

お魎さんは、梨花ちゃんと沙都子ちゃんがいれば、沙都子ちゃんだけはまるで目に入らないかのように振る舞う人だった。

その彼女が、沙都子ちゃんの名を直接呼んでまで、私によろしく頼むと言ったのだ。

「…ええ、もちろん！　梨花ちゃんも、もちろん沙都子ちゃんも、絶対に元気にしてみせますよ。お任せください。」

「………もし間違いがあったら、まぁたオヤシロさまの祟りなんて言われちまう。……なぁ入江先生。昭和も五十年にもなって、人類が月にまで行っちまったような時代にもなって、まぁだ祟りなんてあほ臭いとは思わんかいね。」

「思いますね。」

「……ダム戦争の頃は、確かにうちらはそれを煽ったし利用もした。…でもな、ダム戦争はとおっくに終わっとるん。……いつまでも祟られてばっかりでは、いつまで経ってもダム戦争が

終わらんのよ。」
「沙都子ちゃんが死ぬと、ダム戦争の祟りだと言われるから、…ですか？」
「…………………………。…ダム戦争はもう終わったんよ。…村の子が風邪ひいたら、心配するのが年寄りの仕事だっちゅうんだけやんね。」
入江はすでに、お魎が言いたいことを理解している。
それを言葉として出させたいという欲に駆られたが、…それを強いると多分、お魎の逆鱗に触れる。……お魎の言葉なら、ここまで出れば十分なのだ。お魎の言うダム戦争とは、…単にダム計画を跳ね返す戦争だけのことではない。ダム戦争以来、ずっとこじれている北条家への村八分のことも指しているのだ。
そこまでの意味を含めて、ダム戦争はもう終わってると言い、……私に沙都子ちゃんを頼むと言ったのだ。
「……沙都子ちゃんも、お見舞いの気持ちを汲み取ってくれると思いますよ。」
「はっはっはっは！　あぁんないたずらボンズに、年寄りの心なんざわぁらんわぁらん！」
お魎は甲高い声でカラカラと笑いながら立ち去る。その後姿を見送っているのは、入江だけでなく、その場に居合わせた公由やお年寄りたちもだった。そして、彼ら全員が、お魎の言わんとすることを理解していた。

ダム戦争は、もう終わったのだ。

「……あの元気な沙都子ちゃんにも熱を出させるんだから、性質の悪い風邪だねぇ。入江先生。二人をよろしく頼んます。面会謝絶だからしゃあないけど、二人に、年寄りがみんな心配してるから早ぅ元気になれと伝えてください。」

「えぇ。二人ともきっと喜ぶと思います。」

私は、心に誓う。多分、明日という日に何かの形で祟りを起こそうと鷹野さんは企んでいるに違いない。

……それを、許すわけにはいかない。オヤシロさまの祟りは、五年目で断ち切る。絶対に。

■大石ターン

彼らの提案する四十八時間作戦を実行するには、大石ひとりではどうにもならない。わずかでもいいから協力者が必要だった。

大石は、鑑識のジジィと熊谷の二人を呼び出し、全てを打ち明けた。

「重ねて申し上げますが、こいつぁヤバイ橋になります。……諭旨ならいいですがね、懲戒だったら退職金も吹っ飛びます。」

「かっかっかっか！　なぁんだ大石。お前、ヤバイ作戦の前にはいつも、隣の雀荘に部下を集めて、そう脅してるそうじゃないか。いつもと変わらん変わらん。のぅ？」
「えぇ、そうっすよ大石さん！　いつものようにもっと元気に、退職金が惜しいヤツは十数える間に出てってくださいってやってってくださいよ。そうじゃないと調子狂うっす！」
「……………いや、本当にヤバイ話なんですよ熊ちゃん。その覚悟は本当にあるんですか…!?」
「試しに十数えてみればいいじゃないっすか！　なら今日は俺が数えるっす!!　退職金が惜しいヤツは十数える間に退出してください。一〜、二〜、三〜!!」
「わわ、わかりましたわかりました！　熊ちゃんの覚悟はよくわかりました！　いやしかし、本当にいいんですね？」
「えぇ！　俺、あの日、赤坂さんの武勇伝を聞いてる内に熱くなってきたんす！　やはり刑事になったからには巨悪と戦いたい！　それに、俺もやがては赤坂さんみたいに、武勇伝を誇れる男になりたいんですよ!!　ヤバイ橋、上等じゃないっすか！　それに大石さんの提案する作戦で俺たち一度も失敗したことないです。だから俺、その大石さんがイケると思って誘った作戦なら、ビビりませんよ！」
「かっかっかっか！　若いというのはいいのう！　こいつな、あの日以来、赤坂くんにだいぶ感化されおっての？　秘密捜査や秘密事件に関わりたいと息巻いとったんじゃ。」

「…は、……はぁ…。いや、なははははは…、若いっていいなぁ…。…それで、爺さまはどうします？」
「ハ！　わしも乗るぞい！　というか、わしが乗らんかったらその作戦はまず成功せんからな。今日までさんざん不養生を重ねてきた。そうそうこの老いぼれが長生きすることもないだろ。なら、男に生まれたからには最後くらいデカイ花を咲かせたいもんじゃい！」
「…やれやれ…。爺さまも熊ちゃんも、とにかく怖い物知らずだなぁ…。だからドラが三つも捲れてても強気でリーチ入っちゃうんだなぁ。」
「何言ってんすか大石さん！　男なら降りられない時がある。どうせ切るならど真ん中！　ってのは大石さんの口癖っすよ！」
「うむ。違いない違いない！」
「わかりました。……お二人のクビ、私が預からせてもらいます！」
「…そうと決まればわしの方も少々準備がいる。何しろ、早けりゃ明日の朝にはおっ始めようって話だからの！　それに鑑識や検死の連中にも挨拶がいる。……大石、全部終わった後は、ちょいとデカくおごってもらうぞい！」
「ええええぇ!!　そこは任せてください。ですが、打ち明ける相手にはくれぐれも注意してくださいよ…？　署内にスパイ、混じってるそうですから。」

「わかっとる。わしも伊達に人は見とらん！　任せとけい！」
「いよぉおし、燃えてきたっす!!　刑事魂、本懐っすよぉおぉおぉ!!」
……大石は、自分が決断するのに丸一晩かかったのに、先輩と後輩に即決されて、ひょっとして俺ってダメなのかななんて思ったり思わなかったりしたそうな…。
「では、私はこのままちょいと用事があるんで出掛けます。熊ちゃんは爺さまを送ってあげてください。今日は非番なのに済みませんでしたね。」
「何、構わん！　久々に男の血が疼いてきよった。男が試せる大舞台、わしの人生でもこの歳になって初めてじゃわい。ビビるどころか、ここは楽しませてもらうぞい！」
「……ありがとうございます、爺さま。熊ちゃん。」
大石は二人の車が去るのを見送り、聞こえるはずのない感謝を口にするのだった。それから大石は近くの花屋に寄った。買ったのは桔梗の花束だった。桔梗は青紫色のものが一番有名だ。大石もこの涼しげな色は好きだった。だが、大石はこの日だけは必ず青紫を選ばない。珍しい白い桔梗を頼んだ。
その白い無垢な花束を持ち、大石は花屋の向かいにある、寺裏の墓地に入った。
今日は、六月十八日。
本当の命日は明日だが、毎年、綿流しの警備のためその日は丸一日張り付くから、一日早く

お参りをしていた。

…大石が、親友とも兄貴分とも、そして親父（おやじ）とも思い慕（した）ってきた、おやっさんの、一日早い命日だった…。

「……毎年毎年。私ゃ今年こそはおやっさんの右腕を見付け出すと誓ってますが、……さっぱり見付かってません。」

大石は墓石に呟く。先ほどの白い桔梗が飾られていた。

「ですが、…………ようやくおやっさんの死の真相に近付く機会を得ました。……ただね？それが笑っちゃうんですよ。…園崎家は関係ないって言うんです。……私ゃ毎年、ここにお魎の婆さんを連れて来て土下座させるって誓ってきたのに、…それがまったくの大ハズレだ、って言うんですよ。…………たははははは、私ゃすっかり参ってしまいましてね。……まぁた、おやっさんにゲンコツもらっちまいます。…勝手に当たり牌（ハイ）を誤解してベタ降りしまくった挙句（あげく）にドカンと痛い目に遭う。…決め付けないで、キッチリ手を進めてりゃあ、でっかい手がちゃんと出来てたかもしれないのにです。…………私ゃ全然進歩してません。麻雀（マージャン）も相変わらずですよ。…こんな一度思い込んだら疑うことも知らない頭の固いヤツは、多分、馬鹿って言うんだろうなぁって思います。たっはっはっは…。」

大石は漠然と、予感していた。

……入江のあの少し遠慮した言い方から、何となく想像がついていた。おやっさんのバラバラ殺人の裏には、……何もないのだ。その後に続く事件はその後の都合。……あの事件自体はそれひとつの事件で、……何とも関係がないのだ。

主犯格だけが未だ捕まらず、憎む相手が欲しかった大石にとって、怪しげに振る舞う園崎家はとても都合がよかったのだ…。……多分、大石がそうだと信じる復讐（ふくしゅう）劇（げき）は、最初から存在しない。

「…………私ゃ今、ヤバイ橋を渡ろうとしてます。リスクの割に大した見返りはありません。…せいぜい、…私という馬鹿の思い込みを解いてくれるだろう、真実ってヤツを教えてもらえるだけです。……ですが、………何だかやっと、私は自分ってヤツを許せそうな気がします。」

大石は墓石に向って深々と頭を下げ、黙礼（もくれい）を捧げるのだった…。その時、…誰かの足音が近付いてくるのが聞こえた。

……おやっさんの関係者だろう。どうもその人も、毎年綿流しの日は都合が悪いらしく、大石と同じように前日に墓参りをしてくれるのだ。その人は決まって、青い紫陽花（あじさい）の花を飾ってくれていた。

……その青と桔梗の青紫では少々、色の取り合わせが悪い。だから、大石はわざわざ白い桔梗を選んだのだった。普段はその紫陽花が先に飾られているが、…今年は熊谷たちと早朝に密

談をし、そのままここへ来たので、その人より先に墓参りができたらしい。墓参りは競争じゃない。心だ。

……それより、あの日から欠かさず命日に花を捧げてくれるのが誰なのか、気になり、大石は顔を上げた。

「…………………これは、……これは。…皆さんもどなたかのお墓参りですかな？」

大石はつい白々しいことを言ってしまう。でも、………全てを察した。彼女が持っている紫陽花の花束を見て、全てを察した。

「おやおや。あんた、勤務中じゃないのかい？　悪いお人だねぇ、まったく。」

悪態をつくように笑いながら、園崎茜(あかね)は紫陽花の花束を、娘の詩音(しおん)に手渡した。詩音は、母親と大石の距離を測るようにしながら、どうすればいいのか戸惑(とまど)っているように見えた。

「…ほら、いつまでもお墓の前で突っ立ってんじゃないよ。そこをおどき。」

大石は墓前を譲りながら言う。

「………まさか、あんたが毎年、おやっさんに紫陽花を？」

「綺麗だろう？　ウチの庭のヤツなのさ。やっぱり六月は紫陽花さね。あんたの桔梗も珍しいね。白いのもあるのかい。それも涼しそうで良さげだよ。」

「あー、大石のおじさま、ちょっとすみません。お花生けますんで、お邪魔します。」

詩音は墓前にしゃがむと、手馴れた様子で花束を開き、すでに桔梗の花の飾られた花立てに紫陽花の花を添えていった。
白い桔梗と青い紫陽花はとても映え、初夏の訪れを感じさせるとても涼しい色合いを見せてくれる。
「偶然にしちゃ、いい取り合わせじゃないかい。白に青に、よく引き立てあってるよ。」
「……毎年、私が来ると紫陽花がありましたからね。青い花じゃ相性が悪いと思いまして。」
「なぁんだ、なら私たち、相性はばっちりじゃないかい。」
「………そうですねぇ。…なっはっはっは。」
「どうしたんです、おじさま。レントゲンに妙なモンでも写ったんです？　何か今日は嫌に神妙で気持ち悪いですね。」
「おや、それは本当かい？　あんたにゃ色々世話になったねぇ。あんたの墓にもちゃんと紫陽花を飾ってやるから安心しな！　あとうちの組の店にツケが残ってるだろ。そいつの請求書を供えに来てやるよ。」
「なっはっはっはっは…。やれやれ、親子揃って口の減らない一家です。生憎、まだ当分、お迎えは来ないみたいです。定年までもうラストスパートですが、まだまだ行きますよう？」
「なら結構！　興宮の一市民としては公僕の頼もしい一言で安心だねぇ。はっはっはっは！」

それは、社交辞令で塗り固められた会話のはずなのに、…何か、ちょっとだけ違うような気がした。

「………しかし、ひとつ教えちゃくれませんかね。死守同盟と現場監督のおやっさんは犬猿の仲だったはずでしょ。そのお二人が、どうして花を供えてくれるんです…？」

「そりゃあ犬猿さね！　私たちゃ敵同士！　ねぇ詩音!?」

「ええそうです！　こんにゃろーはとにかくむかつくジジイでしたからね！　噛み付いてやったし、鳩尾に肘をくれてやったし、あと車のボディを十円玉で削ってやったり！」

「……詩音、時効前だよー。」

詩音はぺろりと舌を出して母の後に恥ずかしがるように隠れる。

「…それだけ仲の悪かった詩音さんまでが、どんな経緯でここへ墓参りに来てるんですか。」

「ってか、ダム戦争はもう終わりましたし。…まぁその、敵とはいえ、色々シャレにならないこともしましたしねー…。」

「…………………。」

「何だい、納得いかないのかい？　終わった戦争さね。ラグビーだって終わったらノーサイド、敵味方ナシなんだろ。そういうことさ。」

茜はさも当然のように言うが、大石は納得しかねていた。第一、あれだけ対立してきたのだ。

……憎み合い、唾棄し合うべき関係で、…墓前に花を供えようという気持ちになるわけがない。
でも茜は、そんなのは当然のことだという。………茜と大石の価値観が合わない。
「私にゃあんたの方が理解できないねぇ。私の中ではダム戦争は終わったことになってんだけど、あんたの頭の中ではまだ続いてるってのかい？」
「んっふっふ！　まさか。ちゃんと終わってますよ。…あの騒々しいスピーカーが未だ頭の中から鳴り止まないなんて、冗談じゃないです。」
「なら、園崎家が墓参りしてもおかしいことはないだろ？　ほら、どきなどきな。私もお供えを持ってきたんだから。」
そう言いながら、茜は巾着の中から小さな包みを取り出し、それを墓前に供えた。
「……その包み、毎年見かけてましたが、中身は何なんです？」
「鬼婆特製のおはぎです。酒飲みは甘いのは苦手だろうからって、砂糖抜きだそうですが。」
「…お魎の婆さんが、ダム監督の命日のために、おはぎを握ったと仰るんですか。」
「毎年握って供えてるよ。あんた、毎年見てるって今言ったじゃないかい。」
大石は半ば、呆然とするしかない。
……お魎は鬼ヶ淵死守同盟のタカ派中のタカ派。…そして、おやっさんを殺した真の黒幕だと信じてきたのだ。

それが、毎年命日におはぎを供えてくれていたなんて、…信じられない。
「そんな顔しなさんな。……もうさ、そういうのはおしまいにしようじゃないかい。」
「……そういうの、とは何のことですかな？」
「園崎家が、ダムの監督の墓前に花を供えちゃいけないとか、そういうのさ。」
「…………………。」
「もう昭和も六十年になろうってんだ。下手すりゃ数年もしない内に元号も変わるかもしれない。……そんな時代にまで、あんたは終わっちまった戦争をずるずる引き摺りたいってのかい？」
「…ご冗談を。もうあんな戦争はごめんです。平和が一番ですよ。」
「国にも悪いところがあった。反省が必要だね。でも私たちにも悪いところがあった。だから私たちは反省するよ。そして、それはそれでおしまいになったなら、あとはいつまでもぐだぐだ言ってても仕方ないだろ。古い時代を片付けて、新しい時代を作るのが若者の仕事さね。
……不幸な事件があって、この御仁は死んじまったけど。…もし生きてたなら、私ゃ一緒に酒を飲んで全部水に流したいと思ったさ。…でも死んじまった。だから、この御仁とはもう仲直りできない。…………悲しいことさ。」
「……………それが、死別というもんですからねぇ…。」

「……でも、あんたは生きているじゃないかい。」
「そうですね。私は生きてます。あんたらも生きてます。」
「……なら、あんたともいつか、仲良くできる日も来るかもしれないねぇ。」
「なっはっはっは…。さぁて、どうでしょうねぇ…。」
「詩音、こいつを住職さんに渡してきて。そしたら表の車で待ってな。」
「…うん。」
茜は懐から何か封筒を取り出すとそれを詩音に渡す。
詩音はそれを受け取り、大石にぺこりと会釈すると駆けていった。
「………ダム戦争の時は、小生意気なお嬢さんだと思ってましたが。…いつの間にか成長されたもんです。」
「ダム戦争から何年経ってると思ってんだい。その間に赤飯も炊いたし、一緒にブラも買いに行ったよ。いつまでも小娘じゃないのさ。それだけの時間が経ってる。」
「……それだけの時間が経ったんですねぇ。…時間は若者ほど濃密で、…年寄りほど希薄になる。」
「変わらないのは年寄りだけさ。……でも、時代と若者は絶えず成長してる。そして、ぼんやりしてる間に私たちを追い抜いて行っちまうのさ。で、私たちは隠居して若者を見守るのさ。

オツなもんだろ？」
「オツなもんですなぁ。……あの鹿骨（ししぼね）の鬼姫、園崎茜（あかね）に、いつの間にか説教をされるようになったんですから。」
「嫌だね、そんな通り名、まだ覚えてるのかい？　今じゃ鹿骨のレディーで通ってるんだよ？　そいつぁ内緒にしてくれるとありがたいねぇ。」
「んっふっふっふっふ！　ダム戦争も終わったんですしねぇ。」
「そうさ。もう終わったことなのさ。」
本堂の前で住職と詩音がやりとりをしているのを、二人は見守る。無言だけれども、なぜか心地がいい時間。風は吹かないけれど、…モンシロチョウがひらひらと舞い、涼感を誘ってくれた。
「……勤務中だろうけどさ。どうだいひとつ。ひんやり冷酒（れいしゅ）でも行かないかい？」
「今日は遠慮しましょう。私も車ですし、あなたも車じゃないんですか？」
「くっくっくっく。そりゃあ残念だね。またの機会にしようかい。」
「そうですなぁ。またの機会にしましょう。」
大石の中の、…長いこと居座っていた何かが解けていく。凝（こ）り固まった何かが、解けていく。
「そろそろ戻ります。あなたもお嬢さんを待たせているでしょう。」

「そうさね。お開きにしよう。………あんたとは色々あった気がするけどさ。これで一度、ぱーっとチャラにしちゃいたいね。」
「その辺りの清算会は、また後日に改めてやりましょう。いずれ、きっと。」
茜は、晴れ渡った空に負けないくらいの笑顔で、それに頷き返すのだった。だが突然、その表情が媚（こ）びたものに変わる。
「それでねぇ、大石の旦那！　…私たちのわだかまりがぱーっとなくなったところでさ。えっへっへっへ〜！　昨日、反則切符もらっちゃったんだけど、むしゃくしゃして、ぱーっと破り捨てちゃってさー！　…これもぱーっとなかったことにできないかねぇ？」
「……そいつは最寄（もより）の警察署へどうぞ。私に声を掛けてくれりゃあ、順番待ちを優遇するくらいはしますよ。んっふっふっふっふ…！」
「ちぇー。サービスの悪い人だよ。くっくっくっくっく。」
「なっはっはっはっはっは…！」
真っ青な空の下で、二人の小気味のいい笑い声が響くのだった……。

■鷹野ターン

「お待たせしましたわ、野村さん。…………いえいえ、失礼しました。」
鷹野が取る受話器の相手は女性のようだった。
「その後のお加減はいかがですか？」
「ええ、万事つつがなく。明日が、祭りになりますわ。」
「そうですか。それは良かったです。ふふふふふ。」
「明日の夜、富竹二尉は哀れな事故に。全て廃棄したはずのH173が投与された痕跡を残し、どういう形であれ、哀れな最期を遂げるでしょう。くすくすくす。」
「それはとても楽しそうな幕開けです。こちらではすでに議事録の捏造が終了しています。入江二佐が研究継続を求めて、他国に研究を売り渡そうとして独走し始める痕跡です。」
「……富竹殺しは、それに組み込まれる。」
「そうです。理事会に対し入江機関への疑問を抱かせる最初の布石になります。その辺りの工作は全てこちらが受け持ちますので、どうかお任せください。」
「…………それから、……その。……例の件ですが、もしもの時はいかがしましょうか。」

「もしもの時と申しますと？」
「あ、……いえその、……。……富竹二尉が買収に応じた場合です。」
「富竹二尉の買収は作戦には含まれていないのではありませんでしたか？」
「いえ、…だって、彼は理事会の監査役です。もしこっちの味方になってくれれば、色々利用できることも多いかと。」
「こちらの分析では、今回の作戦に富竹二尉が寝返ってくれても、リスクの割に得るものはありません。作戦に不安要素をわざわざ加味する必要はないのではありませんか？」
「仰るとおりですわね。失礼しました。何かに使えるかと思ったもので提案しただけです。……当初の予定通りに行きます。」
「それがよろしいでしょう。それではまた連絡します。失礼します。」
……私はしばらくの間、切れたままの受話器を握って放心していた。
そして、一度受話器を置きなおしてから、……もう覚えてしまった電話番号を押す。
「……………………………。」
「……ハイ！　エコノミーホテル興宮でございます。」
「あの、………406号室、富竹をお願いします。鷹野とお伝えください。」
「ハイ、今、お取次ぎしますので少々お待ちください。」

内線取次ぎ中の、電子音楽の心休まらぬ童謡が流れ出す。一分くらいは待たされてから、…出たのはさっきのホテルの従業員だった。
「申し訳ございません。４０６号室のお客様はただいま外出中でございます。お電話があった旨、ご伝言いたしましょうか。」
「…もう何度も伝言を頼んでるから結構です。………あの、…富竹さんはいつ外出したかわかりますか？　いつ頃に戻るかわかりますか？」
「あ、…申し訳ございません。それにつきましてはお答え出来かねます。」
「……わかりました。また掛けます。」
そう言い、相手の挨拶を最後まで聞かずに受話器を置く。
………これで三度電話を掛けた。…連絡が欲しいと伝言を頼んでるのに、…連絡がない。どうしてだろう…。…ひょっとすると、ひとりで写真撮影をしているのではないだろうか。
………それとも、…私たちが待ち合わせ場所にする、あの境内裏の見晴らしがよいところで待っていてくれるのだろうか…。そんな淡い期待に誘われて、私が実際に神社まで足を運ぶなんて、誰が考えただろう…。……私だって、驚いている。神社は明日の祭りに備えて、準備の真っ最中だった。模擬店のテントや様々な催しの準備がされている。
作業する人々の声と、模擬店のバッテリー駆動音がうるさくて、今の私にそれはとても不快

なものだった。気付けばそこは境内の裏。……多分、この村で一番風景の美しいところだ。…そこでよく、私とジロウさんは待ち合わせをする。ひょっとして……そこで私を待っていてくれるんじゃないか………。もちろん、そんなのは都合のいい甘えだ。

……わかってはいたが、……神さまは期待に応えてなどくれない。…連中は、人を試して遊ぶくらいしかしないのだから。私は少し強い風に髪を散らせながら、ぼんやりと村を見下ろすのだった。

普段なら、…彼は雛見沢にいる間中、私に付きまとう。…少ししつこいと思うくらいに、食事に行こう、散歩に行こう、撮影に行こうと、しつこく誘ってくる。…なのに、…なぜか今回の彼の来訪では、それがまるでない。

彼の、私に対する接し方が、変わったように感じる…。いや、彼の雰囲気が変わったのは、……彼の耳に、私が新理事たちに説明を挑み、最悪の印象を残した一件が入った時からかもしれない。

……やっぱり、彼の目にはあの一件以来、私がいわゆるマッドサイエンティストに見えてしまったのだろう。…彼の関心が私から、潮が引くように退いていくのを、ちくり、ちくりと感じていた。愚痴りたい気持ちもある。

……普段のどうでもいい時には、あんなにもしつこいのに、…………たまに胸の内を吐き出

したいと思えば、…そんな時だけ連絡がつかない。でも、……私は彼に電話が繋がったとして、……何を話したかったというのか。彼を暗殺する計画を打ち合わせたその舌の根も乾かぬ内に、……彼に何を話したかったというのか。……こんな女の電話なんか、取る義理は全然ないじゃないか。結局私は、………熱に浮かされるままに暴走し、……もう引き返すことのできぬ段階に入って、…………誰かに、何かを許してもらいたくて。……それを、……彼に求めている。…私の言うことなら何でも聞いてくれて、私の都合のいい時だけ呼び出せる、便利な彼に。

…………こんな、地獄行き以外にありえない女に、誰が、何を許すのか。

彼が、私に同情して、……こうなってしまったことを、許してくれる…？

……そんなはずない。…彼は大仰に驚き、………本来の職務を全うし、私を逮捕するだろう。私の身分は一応、自衛隊なのだから、…よくわからないけど、国家反逆罪とかそういうのでもあるんじゃないだろうか。

「…………はぁ……。」

………この数日、…彼のことばかり考えている。…そしてわかったことがある。彼には、男性としての魅力などまったくないこと。そして、ジョークのセンスもなく、お洒落のセンスもないこと。

ないないない、何にもない。かといってお腹の肉はちゃんとある。いいとこなしだ。こちら

の都合なんかお構いなしだし、しつこいし、たまに機嫌（きげん）がよくてやさしくしてやると、必要以上に増長（ぞうちょう）する。……全然、ダメダメ。いい年して、最後に女性と手を繋いだのが、林間学校のフォークダンスなんて言ってるんだからなおさらだ。…しかもこれが笑ってほしい話らしいのだから、輪（わ）をかけてダメダメだ。でも何がダメと言ったら、彼が私の気持ちなんか全然お構いなしな自分勝手なところだろう。

私にだって、ひとりになりたい時もあれば、気分が乗らない時もあるというのに、そんな表情を汲み取ろうともせず、いつもいつも無理やり私を連れ出すのだ。だから、どんなに疲れてる時でも、気乗りしない時でも、…私は結局、彼に付き合って、笑ってしまうのだ。……それは疲れることなんだと、ずっと思ってたのに。そんな彼に、………私を連れまわしてほしいと思う、生涯（しょうがい）一度とないだろうこの時に限り、………彼が、いない。私は、彼に連れまわされるのを、本当に苦痛だと思っていたのだろうか。………ひょっとして、…彼からもたらされる、溢（あふ）れるほどの好意を、…湯水か何かと同じに考えていたのではないだろうか。…気分の乗らない日に連れ出されると、……最初は不機嫌な私でも、…いつの間にかペースに乗せられてきて、…最後にはあの人をからかって遊ぶくらいに元気になれたんじゃなかったっけ。…………彼が今、いてくれたなら。…私をいつものように野鳥撮影に連れ出し、…聞いてもないノウハウを楽しそうに説明してくれるのだろうか。

それはきっととても退屈で面倒なことなのに、……今はそれが欲しいと、素直に思えた。

……結局、私は彼の好意におじいちゃんの代わりを求めているだけではないのか。祖父に甘えた。祖父が私の生きる目的を教えてくれた。それに甘えた。

小泉のおじいちゃんに甘えた。私の夢をかなえるために協力してくれた。それに甘えた。

二人のおじいちゃんが亡くなり、……私はその面影を彼に求めていただけではないのか。

……私は保護者に飢えているのか…。幼い頃に両親を突然亡くしたトラウマが未だ癒せず、…常に身近に、保護者的存在がいないと心の安定が保てないくらいに、……私は幼いままなのか。

…………幼い私が、…完成できない玩具に癇癪を起こし、どうせ壊すなら私がやると息巻いている。…それは、私だけの問題では済まない。……とてもとても大変な、取り返しのつかない大惨事を伴うだろう。

………そうしなければ、祖父の論文の正しさを証明できない。そう信じてここまで準備を進めてきた。あと何日もしない内に、祖父の論文を政府首脳部は穴が開くほどに読み、祖父の警告する最悪の事態に恐れおののき、十分な対策を怠り、その研究を中止した愚かさを悔やみながら、…最終解決を承認するのだ。

その時、祖父の論文は真実となり、その偉業は昇華され、祖父の名は歴史に刻まれる。そし

て、神になる。それは永遠の存在。私はオヤシロさまと呼ばれ、神と崇められる。雛見沢症候群を暴き、その存在を地に堕とす。

そして、五年目のオヤシロさまの祟りを、ジロウさんの死と私の死で完成させ、祟られる側から祟る側へ、…試される立場から試す立場へとその身を移す。それは、私の神への昇格。祟りを自らの意で自在とし、この地の神を蹴落としその座につくのだ。

そして、私と祖父は共に神として、永遠に一緒にいるのだ…。神は、試されない。運命に、試されない。もうどんな不幸も私たちを引き裂けない。永遠に、私はおじいちゃんと一緒なのだ。

そして、…あの懐かしいホルマリンの臭いのする書斎で、いつまでも仲良く、……研究をする。それはあの懐かしき日の原風景。おじいちゃんは、書斎机の前で私に背中を向け、ずっと書き物をしている。

私はその大きな背中を見ながら、絨毯の上にうつ伏せになり、足をこう、ぱたぱたとさせて鼻歌混じりのご機嫌。

研究の手伝いという名の、書籍を積み木に見立てた整理ごっこで遊んでいる…。……そこへの回帰が、私の、唯一の願い。もちろん、そこまで遡れるなら、……死んだ両親が生きていてほしいとも思う。

おじいちゃんの背中を見ながら分厚い本で遊び、……母がまな板を包丁で叩く音と、父が新聞をめくる音が聞こえたなら、………それはどんなに幸せな世界なのか。それは、…理想の子供時代。でも、その理想の世界は屋内で、…外へ出る扉はない。

……だから友達の家へは遊びに行けない。…なぜなら、……私が友達の家に遊びに行ったら、……帰ってきた時には誰もいなくて、…みんなみんな、………鉄道事故で死んでしまうのだから。

だから、お外なんていらない。……ずっとずっと家の中で、両親や祖父に囲まれていたい……。…私だって医者の端くれだ。自己分析くらいできる。

………それが、いつまでも幼いままのみっともない心の表れであることくらいわかってる。

……そこまでわかっていて、……なお、この期に及んでジロウさんに、保護者の姿を求めるのか。彼の死を含む計画を進めながら、…都合よく彼の背中にすがろうというのか。…神を目指す反逆児のつもりなら、最後の最後まで悪党らしく小憎らしく。…寂しがりやの少女のつもりなら、最後の最後まで少女らしくしおらしく。

そのどちらであろうとも、それが自分の生き方だと言うならば、誰にも責めることなどできないだろう。だって、自分が正しいと信じているのなら、誰が批判しようとも耳を貸さず、その道を突き進むのみなのだから。でも、私はそのどちらの道も、…未だに選べていない。……

だから、誰かに責められたい。誰にも自分の道を批判されなかった。だから、誰かの批判に耳を貸したい。その道は間違っていると叱咤されたい。

…ジロウさんに、君は何て馬鹿なことをしたんだと罵倒されて、…頬をぶたれたい。

そんな被虐的な願いが、……今の私を、自身が否定していることを物語る。……それすらも結局は、保護者に対する甘えなのか。私は、自分を幼いと呼ぶにはもうあまりに歳を取りすぎた。……私が自らを幼いと称しても、誰もそうとは認めないだろう。

内なる私がどんなに幼くとも、……世間は私を、一人前の大人として扱うのだ。そして、大人に相応しい責任と判断力を持ち、それに従ってここまでやってきたのだと言うだろう。……やがて私は閻魔の前で裁かれて。…その時にもなお、幼い私を大人として裁かないでくれと主張するのか。………私は、閻魔の前にまで来ても、…まだそんなザマなのだろうか。地獄行き確定のくせに悪魔にすらなりきれず、地獄が嫌なくせに悔い改めようともしない。………私の心は血の池に浮かび、溺れながら彷徨するのみだ…。ジロウさんさえいてくれたら………。いつもの無神経なおしゃべりに付き合っている内に心も晴れただろうに……。……なんでこんな気持ちの、…そして彼と過ごせる最後の時間に限って、……いないのか。

彼がいないだけで、ここまで自分が不安定になるその幼さが、…今はただ憎かった…。私は、いつのまにか賽銭箱の前に来ていた。かつて、入江診療所の工事が終り、入江機関の研究がい

よいよ始まるという時、私はここへ来た。

あの時、……私はこの地の神に対し、とても勇ましく挑戦を叩きつけた気がする。希望と野望に満ち溢れていたあの頃。

私は幾多の困難の積み重ねを経てこの地に城を築き、……神にすら至ろうと誓ったのだ。この地の神の社を前にして。……何だか、似たような話を祖父にしてもらったような気がする。そうだ、……バベルの塔の神話だ。まだ世界に人の言葉が一つしかなかった頃。全ての人は同じ場所に住み、一つの意志に基づき暮らしていた。そんな彼らは、自らの威光を掲げるため、天に届く巨塔、バベルの塔を建て始める。神に対する敬いを忘れて天に至ろうとする傲慢な人間に対し、天は怒り。

彼らの言葉が一つであるから、彼らの意志が一つであるから、全ての人間が集い、このような暴挙に至ると考え、…言葉を砕き、混乱（バラル）させ、人々の言語が互いに通じ合わぬよう、無数の言語を与えたという。

人々は意志の疎通ができなくなり、次第にその地を離れ、天に挑んだ塔は朽ちるに任された…。そんな話。……昔話にありがちだが、何を教訓にしろというのか少しわかり辛い。祖父は、この話を私にこう読み解いた。

天にも届く塔は、人類最大の挑戦であり、同時に神への挑戦でもある。

それは罪深いことでもあるが、人として生まれた以上、挑まずにはいられない処女峰であると。しかし、巨塔を天に至らすのはあまりに容易ではない。塔を建てる間に、必ず人の和が乱れたり、当初の意志疎通ができなくなったり、……初めは一つだった意志が、乱れだす。

これは、大勢の人間にだけ言うことではなく、一人の人間に対しても言えることなのだ。どんな鉄の意志を持とうとも、天に近付けば近付くほどに、神は人としての限界を与える。……つまり、どんな鉄の意志も、必ずいつかは心乱れる。

…最後まで初心を貫けると思うことが人の傲慢であるのだ、…とか。それは祖父の内心だったのだろう。誰にも認められぬ研究に、何度も挫けかけたに違いない。でも、いつか必ず評価されると信じて、その日まで歯を食いしばると誓っていたのだ。

………評価されることが願いで、…天に至ることではなかったのかもしれない。祖父は研究を完成できないことを悟り、…自分の身に妥当な評価があればそれでいいと、妥協点を見つけていたのかもしれない。人の身に、天に届く塔など作れない。…しかし、バベルの塔は神話に残った。天に届かぬ塔だが、…天に挑んだ塔として、神話に残された。神話では、塔はやがて放置されたという。

だから、その造りかけの塔はその地に長く残り、決して天には届いていないわけだけど、……見る者があったなら、かつて偉大な挑戦をした勇者がいたことに感銘を受け、讃えるに違

いない。私は、祖父からこの塔を受け継ぎ、……天まで届かせると意気込んだが、同じ末路を辿る。

そして、どうせ崩される塔ならば我が手で崩そうとする。………私は、………一体、何…？私が祖父の研究を引き継ぎなどしなければ、…雛見沢症候群の名を記した論文は永遠に残った。

訪れる者も久しい廃墟の塔だろうが、……もし詣でようという人が訪れたなら、…きっとその偉大な挑戦を讃えた。…祖父を、讃えた。しかし、…私がそれを引き継ぎ、……天に近付けすぎ、再び天の怒りを買い、…今度は塔を崩されるという運命を招いた。塔は瓦礫の山となる。…入江機関が閉鎖された後には全ての記録が抹消され、地上から消し去られる。祖父の願いだった、人からの評価は、永遠に受けられないようになる。

……私は、祖父とその研究を永遠の存在にしようとして、……永遠にそうなれないよう、道を、閉ざしてしまっていたのだ。何が高野三四なのか。祖父の一二三の後を継ぎ、三四を数えるどころか、……零にしてしまっただけ。……私なんて存在がなかったら、…祖父の論文は廃墟の塔となって残れた。この地に永遠にその痕跡を残せた。

…それを、私が台無しにしたんだ。……私が……。全身に、何のためにかいてるのかわからない汗が滲み始めるのを感じる。……それは、…取り返しのつかないことを私がしてしまったことを初めて知る、汗。私がどこの段階から間違っていたのか。いつから間違っていたのか。

ここへ来た時じゃない。もっと。…もっともっと、前の時から、私は道を間違えている。……あぁ、祖父の身になって考えればわかるじゃないか。祖父は偉大な挑戦をしていた。そして偉大な塔を築いた。その塔は祖父の死後も威厳を持って建ち続け、いつかそれを評価する者を待ち続けるはずだったのだ。

祖父は、自分の死後であっても評価されればいいと、はっきり言っていたじゃないか。それを、…どこかで私が履き違えた。どこかで私が、道を間違えた。祖父の理念をどこかで履き違え、………全てを無に帰し、台無しにしただけ。祖父を永遠にしようとして、……闇に葬ってしまうだけ。祖父が永遠に残る塔を築いたのに、それを闇に葬ってしまう。どこからが間違い？　何が間違い？　決まってる!!　祖父は、一、二、三、までを数え、……それで完成をさせていたんじゃないか！　私が余計なことをしてさらに石を積もうとしたから、…全てが崩れて台無しに…!!　私が四を数えようとしなければ良かった。余計なことをしなければ良かった。それに、祖父は一言だって私に、研究の続きを頼むなんて言わなかったじゃないか……!!

……女の子が、こんな暗い書斎でひとりで遊んでいないで、表に行って友達と遊びなさい。

………そんなことも祖父が言っていた気がする。でも私は、…そんなことよりおじいちゃんの研究のお手伝いをする方がいいと言って断り、書斎に居座るのだ。

誰にも顧みられぬ研究に、理解を示す義理の孫娘の気持ちの心地よさに、…次第に祖父は私

に表へ遊びに行けとは言わなくなってしまったけど…。でも、……出会ったばかりの頃は言っていた。確かにそう言っていた…。
では、…何？　私が、おじいちゃんのところへ来たことが、そもそも一番最初からの間違いということじゃないか。
では、何？　私が施設を脱走した時、……あそこでおじいちゃんに電話しなければよかった！　十円玉を見つけなければよかった！　おじいちゃんに助けてもらわなければよかったッ!!　あぁぁ、わかったわかったよ思い出した。私が本当にいるべきところを思い出したよ…!!
…ガン、ガン、ガンッ、ガンッ！！！
金属音が近付いてくる。近付いてくる…。私には眠る時間なんて許されてないんだ。あぁぁ寝てたわけじゃないんです、目を瞑(つむ)ってただけなんです、ごめんなさいごめんなさいッ！！！
「＊＊＊＊＊ッ、＊＊＊のくせに＊＊＊ってんじゃゃ＊＊＊＊！！！」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、気をつけます、ごめんなさいごめんなさい！！！」
「＊＊＊＊！！！　もっと＊＊＊＊＊、＊＊＊＊＊だろぉがッ!!　＊＊＊＊、＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊！！！」

ガンッ!!　ガツ、ガン！！！　ガンッ！！！　蹴らないで、蹴らないで…!!　その金属の音が怖いんです。お願いですから蹴らないでください。私が直接蹴られてるわけじゃないかもしれない。でも音が、私を蹴るんです。だから蹴らないでください、お願いですから金網（かなあみ）を蹴らないでください…。全身にひびが入ります。体中にひびができた気がします。私の全身のひびに、汚い痒（かゆ）い痛いのがいっぱい染み込んできて、それが汚くて痒くて痛くて気持ち悪いです。それがだんだん胸の奥にまで染みてきて、溜まってきて、……私はそれが心に付かないように必死に背伸びしてそれを持ち上げています。でも、どんどん、どんどん汚くて痒くて痛いのが溜まっていきます。もう胸まで浸（つ）かって、……その内、私の顔も飲み込むでしょう。……私はその汚くて痒くて痛いのに溺れそうになっても、…それでも心がそれに浸からないよう、必死に必死に息を止めて背伸びをして………。

「＊＊＊＊！！！　＊＊＊＊っ＊＊＊んだよ！！！　＊＊＊＊！　＊＊＊＊＊！！！」

ガン!!　ガン!!

「＊＊＊！　＊＊＊！　＊＊＊！　＊＊＊！！！」

ガン！！！　ガン!!　ガンッ！！！

…………もう、……息が続かない。私は…汚物の海に溺れていく。………そして、………

汚物を飲み込みながらも、それでも一滴たりとも染みを付けまいと抵抗して持ち上げてきた自分の心ごと、……汚物の海に沈んでいく…。……溺れ苦しむのは、陸に帰りたいと喘ぐ陸の生き物だけ。…海に棲む生き物なら、溺れて苦しんだりはしないんだから。

……………おじいちゃんは、…助けに来ない。

……それが、……私とおじいちゃんの、……一番いい形だったんだ……。私は＊＊＊＊れ、……＊＊＊＊＊の＊＊＊で…＊＊＊＊ていく……。も＊＊＊＊＊、＊い＊＊＊＊＊＊…。……ほら、……私が大人しくなったから、……もう、…音がしないよ。…あの怖い金網を蹴る音が、……しなくなったよ…。…雄叫びか、…咆哮か。

私は現世に帰って来るために叫びの力を借りなければならなかった。全身は汗でべっとりだ。…それは汚くて痒くて痛くて…。あの日を思い出させる。汚物のような汗が全身を這うと、這った後がみみず脹れのように腫れあがって痒くなる錯覚がする。……いや、幻覚だ。痒いわけなんかない。だって、あれは終わったことじゃないか！　毎日お風呂に入っている、体が擦り切れるくらいに磨いてる。だからあの汚いのがわずかほども残ってるはずないじゃないか…!!　でも、思い出してしまう。あの汚らわしさを思い出してしまう…！　私は、痒みの幻覚に爪の跡が残るくらいにぎゅうっと腕を掻き、現世の痛みでそれを払うほかなかった。……全身の痒みを、払えない。……全身の穢れを、祓えない。祓えないのは当然なんだ。私は汚らわしい存

在なのだから。そんなのをおじいちゃんが助けなければよかった…。おじいちゃんと私が出会ったことが、おじいちゃんを不幸にしてしまったんだ。私がいなければよかった。生まれてこなければよかった。あの金網の中で、一生を汚らわしく生きてればよかったんだ…!! あの金網の中に帰らなくちゃ。あそこから出ちゃ駄目なんだ。あの中が、あの中だけが、…こんなにも穢れた私の、唯一の居所で帰る場所だったんだ…！ あの嫌な金属音で私を追い詰めて。あの汚いので、あの痒いので、あの痛いので私を潰してしまって。殺してしまって。…私がおじいちゃんと、出会うことがないように。

……それがあなたの願い？

そうよ、……崩れるバベルの塔の頂上に取り残され、天にも届かず墜落するのみの、イカロスのような私の、最後の願いよ。

私をあの金網の中に戻して。そして、この汚らわしい私にぴったりの末路へ送り返して。

……嘘つきの願いは、叶えない。

私は、…嘘なんか……………………。

あなたは本当の願いを一度は口にしたけれど、まだそれが一番の願いだとは気付いていないようだから。…私はまだまだそれを叶えてあげない。

……それが、神に挑もうとした罪深い人間への仕打ちだってこと…？

あなたも知ってるはず。願う強さが未来を作ると。その強さが足りない。

………………く……。………私には、……まだまだ、自分を穢すことが足りないって言うの………？　私のような中途半端ものには、…地獄の扉すら開かれないって言うの……。

■入江ターン

「……梨花ちゃん、沙都子ちゃん。容態はいかがですか～？　私です、入江です。」

赤坂に注意されたので、入江は用心をするようになっていた。赤坂は無言で鍵を開けた。

「お疲れ様です。外は賑やかですね。」

「えぇ。明日のお祭りの準備で大賑わいです。これは模擬店部会さんからお見舞いにと持たされたカキ氷です。せっかくなのでいただきましょう。」

「これはありがたい。いただきましょう。」

赤坂はTシャツ姿で汗まみれになっていた。

カーテンを閉めっぱなしで窓もろくに開けられないとあっては無理もないが、それでも汗をかきすぎだと思った。

「すごい汗ですね。確かにこの暑さでは無理もありません。」

「いえ、トレーニングを少ししていただけです。ドタバタするわけにはいきませんので、もちろん気をつけながらですが。……いつ有事が起きてもいいように、体を常に臨戦態勢にしておくためのウォーミングです。」
「…ふむ。適度な運動は気分転換にもいいですからね。このようなところでずっと緊張を強いられていては、精神的にも参ってしまうでしょうに。」
「いえ、慣れてますから。でも、先生の差し入れはとても助かります。」
赤坂は子供っぽい笑顔を浮かべるとイチゴのカキ氷を口にするのだった。
「何か動きはありますか？　富竹さんから連絡は？」
「いえ、まだ何も動きはありません。……あ、…鷹野さんが富竹さんと連絡がつかないと言っていました。」
「身の安全のために宿を変えているはずでしたね。…勘付かれたのでしょうか。」
「いえ、そういう不信感を持ってはいないようです。私も、写真撮影に飛び回っているのではないかとフォローしています。」
「怪しまれるのも時間の問題ですね。……風向きはどちらにせよ、近いうちに強い風が吹きそうです。入江先生、くれぐれもご用心を。」
「ええ、もちろんですよ。……あぁそうだ。先ほど、大石さんにお会いしまして。こんな話が

進んでいるので伝えてほしいと頼まれました。」

入江は、四十八時間作戦について赤坂に説明した。

赤坂はなかなかの妙案だと感心し、そのアイデアが年端も行かぬ少女たちが考え出したと聞き、さらに感心するのだった。

「…うまい手ですね。連中に相当のゆさぶりをかけられるでしょう。そのうろたえぶりから、富竹さんが敵の尻尾を摑める可能性は十分にあると思います。で、その作戦の始動は？」

「それは今夜、大石さんと皆さんが打ち合わされて決められるようですが、やはり時間は掛けられないということで、早ければ明日の早朝には決行するそうです。」

「……そうですね。長い時間、臨戦態勢でいるのはかなりの消耗を強いられます。打てる手があるなら早い内の方がいい。」

「赤坂さんが雛見沢に滞在できる休暇の限界もありますしね。いつまでなんですか。」

「家内には一応、日曜日の深夜には帰ると言いましたが、事情が変われば止むを得ません。…雪絵も刑事の妻です。わかってくれると思います。」

「……ここでは奥さんに電話をすることもできませんね。…それは辛い役を押し付けてしまったものです。」

「大丈夫です。新婚時代じゃあるまいし。毎晩電話しなきゃ三行半ってわけじゃありませ

ん。」
　とは言いながらも、もし電話できるなら電話したい未練も感じさせているところに、入江は若さを感じて微笑むのだった。
「赤坂さんの方では何か変化はありましたか？　何か必要なものがあれば持って来ますので。」
「必要なものは特にありません。変化は、……難しいところです。何しろ祭りの準備でこれだけの出入りがありますからね。その中に不審な気配が混じりこんでいても、とても私にはわかりません。むしろ逆に、この人ごみの中に、ここを監視する敵も混じりこんでいると思って警戒するくらいがちょうどいいでしょう。」
「……そうですね。……そうそう、山狗ですが、やはり赤坂さんが仰られるように動き出しているようです。小此木さんに予定を聞いたところ、五年目の祟りに便乗した愉快犯が梨花ちゃんを狙う可能性を考慮して、祭りの前後に警護態勢のレベルを上げた、というのです。」
「………ふむ。現在の状況と一致しますね。…まるで、明日の祭りに合わせて、表も裏も、全ての準備が同時に進んでいる気がします。」
「明日は、色々な意味で祭りになる、と仰るわけですね。」
　…もし明日の早朝に四十八時間作戦が決行されれば、……きっと慌しい激動の一日となるだろう。

そう、……全ては、…明日、動く。

昭和五十八年六月十九日。

数多（あまた）の世界で平和な時間と惨劇の時間を分けた、その分水嶺（ぶんすいれい）となる激動の日。この日に、……この世界の命運が、動く。入江は赤坂との接触を終え、不審がられないよう、二階の窓に、ちゃんと寝てるんですよ〜〜、と声をかけてからその場を立ち去る。その様子を見て、祭りの準備の村人たちが、容態はどうですかどうですかと声をかけて来るのだった。

それが、梨花一人に限ったものでなかったので、入江は小さな嬉しさを感じていたのだった。昨日のお魎の言葉の意味は、いつの間にか村の老人の間に知れ渡っている。それはつまり、……オヤシロさまの祟りは、明日を待たずにすでに解かれていることを示すのかもしれない。これで明日、…恐ろしいことが何も起こらなければ、………この村はようやく祟りとダム戦争の亡霊から解放されるのだ。

……その戦いにこれから挑む自分たちの責任は、…あまりに重い。入江は下腹に力を入れて無言の決意を示す。本部テントの役員たちに挨拶してから診療所に戻ろうとした時、…鷹野さんに会った。彼女がひとりでこんなところに来るとは珍しい。富竹さんと二人で撮影というならわかるが、ひとりでこんなところに来るような人ではない。…一瞬、自分と赤坂の接触を気取られたのではないかとひやっとしたが、鷹野の様子がそんな感じではなかったので、少し安

心した。
「珍しいですね。こんなところでどうされたのですか？」
「うぅん、別に。ちょっとした気まぐれの散歩ですわ。」
「そうですか。今日は気持ちいい風が吹きますからね。散歩も気持ちがいいと思いますよ。」
「……ジロウさんも、そんな風に誘われて、ひとりで散歩に行ってるのかしら。」
不思議な語感の言葉だった。
鷹野は、富竹のことなど興味もない、社交辞令で付き合ってるフリをしているだけだ、というのが体面だったはず。
……普段そんな様子の彼女がこんなことを言うとは思わず、入江は少しだけ驚く。
「そうかもしれません。彼は東京の人ですからね。雛見沢の自然や空気は、とても貴重なものだとわかるのでしょう。」
「……所長。ジロウさん、どこに行かれてるか、ご存知ありません？」
「いえ、存じませんが。…はて。」
「……昨夜の会合にも欠席してますわね。他のスタッフが進行してくれたからいいですけど、…本来ならジロウさんの役目じゃないんですかしら？　…くす、職務怠慢（たいまん）でしてよ？」
……入江は話題の方向性がよくないと危惧（きぐ）する。何とか話題を富竹から逸（そ）らさないと…。

「ま、まぁ、彼もたまには羽を伸ばしたいこともあるんじゃないでしょうか。彼にもあるんですよ。ひとりになりたい時が。あなたと同じにね。」
「……………そうですわね…。私ったら、……。」
うまい言い方で丸められたと思う。彼女はそれ以上、富竹の行方について問おうとはしなかった。ここから境内の様子を見下ろすと、明日の盛大な祭りの様子が浮かび上がってくるようだ。年に一度の村で一番のお祭り、綿流し。
毎年その規模は大きくなり、ダム戦争後から本格的になった村祭りは今年にその最高潮を迎えた。
きっと、村中の老若男女(ろうにゃくなんにょ)が、明日の祭りを盛大に楽しむだろう。そんな微笑ましい光景を、入江と鷹野は見下ろしている。
「……明日は、楽しいお祭りになるでしょうねぇ。」
「……………ええ。楽しい祭りになりますわね。」
それはとても皮肉な会話。二人とも、別の意味で言っている…。
「祭りの幕開けが、楽しみですね。」
「ええ。………楽しい祭りの、幕開けですわ。」
入江は鷹野の表情に浮かぶほんのわずかの、形容できない歪(ゆが)みや苦笑、感情を読み取る。

「……明日は晴れるといいですねぇ。ここまでせっかく準備して、雨で中止なんて気の毒です。」
「くすくす。ここまで大々的に準備した盛大なお祭りですもの。……雨天如きで中止になるわけありませんわ。」
「……そうですね。明日はどんな天気になろうとも、必ず祭りになりますね。」
「ええ。…盛大なお祭りになりますわよ。きっと…！」

■四十八時間作戦発令

大石さんからの回答は極めて明快だった。つまりはＧＯサインだ！
「やるね。さぞや話をまとめるのは難しかったでしょ。」
「いや、それがね？　私が呆れるくらいあっさり皆さん、舟に乗ってくれちゃいまして。いやぁ、若さっていいなぁ。私ひとりだけがうじうじとみっともないったりゃありゃしないです。……もう後にゃ引けません。この大石蔵人、切るならど真ん中、最後まで突っ張りますよ！」
大石さんは元々貫禄のある人だ。その人が気合を見せるというのは、若輩の俺たちにとってこの上なく頼もしいものだった。行ける。この作戦はうまく行く！

敵は途方もないくらい巨大だが、先制奇襲はこちらからなんだ。相撲だってそうだろ？　どんな巨漢力士が相手だって、立合いの一瞬の変わり身でうっちゃって瞬時に決着がつくことだってあるんだからな！

「ね、梨花。味方が多いというのは、こんなにも心強いことなのです！」

「……もうあんたに口を挟む気はないわ。…ほんの数日前まで私は運命に屈しかけていたというのに、それから数日を経ただけで、ここまで変わるなんて。……これは本当に、…運命を引っくり返せるかもしれない。」

「梨花、そんな弱い気持ちでは駄目なのです！」

「……そうね。引っくり返せるかも、じゃない。引っくり返す。勝つ。私たちは運命を、打ち破る！」

「となれば、次に重要なのはトラップのタイミングですわね！」

「タイミングも何もねぇだろ、即時発動だろ！　今夜には梨花ちゃんが姿を消してから四十八時間が成立する。待てば待つほど相手を利するんだから、すぐに仕掛けるべきだと思うぜ!!」

「……そうだね。慎重さは今回に限り相手を利するだけというのは同感。守りは慎重であるべきだけど、責めは大胆であるべきだと思う。」

「圭一とレナの太鼓判がもらえれば、とても心強いのです！　どうですかみんな！」

「私は異存ないわ。もう覚悟は決まってる。いつだってＯＫよ。」
「……ふむ…。機はすでに熟してる？　どう見る沙都子。」
「急ぐのはもちろんですけど、今すぐというのは性急ですわ。相手の虚を突くなら、もう少し冷静に引き金を絞るべきでございましてよ！」
「奇襲なら夜だろ！　今を除いて最高のタイミングがあるのかよ‼」
「まぁ落ち着きな。……沙都子の言うのも一理あるし圭ちゃんの言うのも一理ある。奇襲の定番は夜襲。…でもね、今の私たちを見てごらん？　ほら、こうして深夜でも血気盛んでしょ？夜襲が効果的だったのは電気がなかった時代の話だよ。近代戦では深夜は奇襲になりえない。もっと最適な時間帯がある！」
「奇襲により適した時間帯があるのですか？　あぅあぅあぅ？」
「……………わかったわ。……払暁奇襲ね。」
「ほほう？　難しい言葉をご存知ですねぇ！　確かに人間、どの時間に一番電話がもらいたくないかと言ったら、深夜よりは明け方です。何しろ寝惚けているところでは正常な判断ができませんからね。」
「夜明け前の奇襲…。うん、いいタイミングだと思う！」
「……うん。私もそれが一番効果的だと思う。……鷹野さんの性格から考えて、五年目の祟り

を装う形で何かのアクションを起こす可能性は極めて大だと思う。…なら、今夜はそれの前夜に当たる。」

「前夜ほど、逸る心を抑え、十分な睡眠を取ろうと思うのが人なのです。」

「をっほっほっほ!! 見えてきましたわね、最高のトラップタイミングが!!」

「夜明けの奇襲か、……くぅぅぅう、何だよそれ!! 男として生まれたからには一度はやってみたいシチュエーション!! 燃えてきたぁぁあ!!!」

「前原さんもうちの連中と同じですねぇ…。…おや、ということは、男で燃え上がらないのは私だけ、ってことですかねぇ。……やれやれ…。…………いよおおし!! ならいいですね!? 明日の早朝に四十八時間作戦を発動します!! これで敵がどう動くかです! 相手を攪乱し、その出方に合わせて攻撃する! これは遊撃作戦ですよ!!」

「よぉし!! 部長、園崎魅音の名において、四十八時間作戦の発動を命ず! 決行は明朝四時!! 一気に慌しくなる可能性が高い。総員は何があっても即応できるよう、心身のコンディションを最高で保つこと! そして忘れるな!! 雛見沢の興廃はこの一戦にあり!! 敵の陰謀を許せば村が滅ぶかもしれないんだよ!!」

「け! んなこと、我が部の目が黒い内には許すかってんだ!」

「さぁ、相手がどう出るか。鬼が出るか、大蛇が出るか…!」

「……みー。にゃーにゃーが出て来るかもなのです。」
「ほっほっほっほ！　そうだったら可愛いですわねぇ！」
「それはないです。絶対に、大きな動きが起こります。…例えるならこれは微震。大きな津波が押し寄せる前の予兆のよう。」
「そうだね。私もその微震を感じてるよ。……さぁ、私たちでその津波を起こしてやろう!!　飲み込まれるのは村か、連中か!!」
「俺たちはその波で波乗りと洒落こんでやるぜッ!!!」
四十八時間作戦は、敵に大きなショックを与える。
慌てだし足並みが乱れて必ず何かのボロを出す！　それがどんな形かはわからないけど、…それをすでに予見して態勢を整えている俺たちに全て利がある！　雛見沢という巨大なゲーム盤の上に、敵を取り囲むように十重二十重に俺たちが配置されている。
このゲームは、祭りは、俺たちの包囲から始まるんだ。さぁ、…明けてきやがれッ!!!
昭和五十八年六月十九日ッ!!!

ねぇ梨花…？　これだけのたくさんの思いが、この一日に集まったことなんてあったっけ…？

うぅん、いつだってたくさんの思いがこの世界にはあった。私たちが投げやりに過ごしてきた六月十九日に、いつだって無数の思いが集まっていたのだ。
私たちはこの世界を個人の主観で見ることが多かったから、ついつい忘れてしまっていたけれど。
この世界には気が遠くなるほどたくさんの人がいて、それらのひとりひとりにものすごく大切な思いがあって。
それらがたくさんたくさん集まってこの世界を、カケラを形作っている。あぁ、これだけのたくさんの思いが集まったなら、私たちはどんな世界を見るのか。どんなカケラを許されるのか。
勝つのは鷹野か、私たちか。さぁ、今こそその時は来た。
開こう。昭和五十八年六月十九日の扉を…!!



■六月十九日

深夜から早朝に移り変わる時間帯。
夜更かしと早起きがどちらも混じらぬ、……本当の意味での静かな夜。…それは小此木造園の事務所内であっても同じだった。当直の二名だけが起きており、応接机で花札に興じていた。
戦場の歩哨というわけではないので、常に緊張感を維持している必要はないが、それでも居眠りなどは許されない。
テレビが終わってしまう深夜以降の時間帯には、花札やトランプで遊ぶ隊員も多かった。そんな中、唐突に電話が鳴った。彼らはすぐに受話器を取れるよう、近くの電話を応接席の脇まで持ってきていた。
「…毎度、小此木造園でございます。…………………はい。…………えッ⁉」
男の形相が変わって姿勢が伸びる。その時、膝がぶつかって机を弾いたが、男は気にしなかった…。
鷹野は髪を乱しながら、地下のセキュリティルームに駆け込んできた。

「お休みのところ申し訳ございません、三佐!!」
「コーヒーは後よ。状況を！　本当なの!?」
「ハイ。午前四時十五分、興宮署内で、身元不明死体がRであるということが確認されたという情報が入りました。」
「そんなわけないでしょう！　だってRは風邪で寝込んでいるんでしょう!?　それをあんたたちが監視してたんでしょう!?」
「その、三佐。…話に続きがありまして、…興宮署の諜報員によると、……死後四十八時間が経過しているとか……。」
　鷹野は、足元からざらざらと凍(こお)った血液が登ってくるのを感じた。
…ありえないありえない。四十八時間前に死んでいた!?　女王の死後四十八時間経っている!?　だってそれじゃあ!!
「そんなことありえない!!　だって、じゃあ村人はどうして平然としてるの!?　早ければ三十六時間の段階で、つまり昨夜の時点でかなりの末期発症が出ていてもおかしくないじゃない!!」
「し、しかし、……諜報員によると、これはかなり確実性の高い情報とのことで、……村への信仰上の影響を危惧して、現在、署内に強い緘口令(かんこうれい)が布(し)かれているということです。」

「か、か、確実性が高いってんなら、あんたたちが見張ってたあの家の古手梨花は誰なのよ!!」
「三佐、監視態勢は完璧です。古手梨花は間違いなく現在、あの家です。監視態勢が布かれて以来、彼女が外出したことはただの一度もありません。中にいたことも入江所長が確認なさっています。絶対にありえません！」
「ならどういうことよ!! 警察が、死体は梨花で四十八時間前に死んだって言ってるのよ!! それがデマだって言うの!? ……デマ、……デマ？ ……そうよ、勘違いかもしれない。……だって、私の作戦なら、今日の夜、私は岐阜県警内の工作員を使って、同じ手法で偽装死を装うつもりだったんじゃない…。……こ、これは偽装よ。いや、デマよ！ 何かの勘違いに違いない!!」
鷹野が焦っていたのは、何も寝起きで混乱しているからだけではない。……鷹野は何よりも恐れていた。女王感染者が死んで四十八時間経ったら、村人は全員末期発症することになっている。そう祖父が論文に書いた。
……それが、嘘だったことになってしまうッ！ そうなったら、その論文を信じてくれた…あの人たちが……、
「失礼します三佐！ 東京の野村さまよりお電話です。」

「…………く…。…………どこで嗅ぎつけてるのよ、あの女は…………！　私が電話をしている間に、大至急、興宮署の死体を調べさせなさい‼」

「現在は非常に困難です…！　協力員が明朝に出勤すれば、興宮署へアプローチを掛けさせ、確実に状況を確認できます！」

「その早朝というのは何時⁉　午前五時⁉　六時⁉　大至急よ‼　急がせなさいッ！！！

…………くすくす、おはようございます。鷹野です。」

興宮の山狗駐屯地である小此木造園には隊員たちが非常召集されていた。

「あぁ、わかった。興宮署の方がわかり次第、俺と三佐に連絡しろ！　それより！　R宅の監視態勢だが、Rの在宅確認をなぜ怠った‼」

「風邪だったということで、受話器を取らなかったものと思いました。その後、入江所長が訪問し在宅を確認したため、それを以って在宅確認としておりました。」

「…甘ぇぜ…。………R宅に少なくとも誰かがいるのは間違いないんだな⁉」

「はい！　それは間違いなく！」

「……隊長。R宅に突入しては。まだぎりぎり可能な時間帯です。」

「そいつは三佐の許可がなけりゃできん！　三佐も、興宮署の件が判明するまで突入許可は出

すまい。突入命令に備えて、R宅監視を増員。八人態勢に増やせ！」
「隊長、今日は境内で祭りがある日です。監視は出来るでしょうが、突入は恐らく、本日深夜まで不可能です。」
「……ち、うまいタイミングだ!!　うま過ぎる。……うま過ぎるんじゃやねえのかコイツは？」
小此木の、長く錆び付いていた野性の勘が警鐘を鳴らす。…これは何かの攻撃だ。敵の攻撃が始まっている。……こちらが先手を打つつもりで、逆に先手を取られたのだ。
人は、攻撃に踏み切る直前に一度深呼吸をする。その、打って出る直前こそが一番危険なのだ。……そこまで読みきったなら、……どうやら敵が何者であれ、相当の名将らしい。
「………そういや、富竹二尉。先日の診療所での会合に欠席したってな。」
「でしたでしょうか…、確認させます。」
「……三佐、俺にヤツがどこに行ったか知らないかとか聞いたよな。………………。」
「まさか、富竹二尉が？」
「鶯で富竹の寝床を確認しろ!!　こいつぁ一杯食わされたかも知らんぞ…!!」

■興宮署

「…さぁて、もう後戻りはできんぞい。」
「へっへへへ、さぁてこれで大山鳴動して何が出るっすかね…。」
熊谷は、武者震いをしてみせた。
「熊ちゃん。私は通信センターの方へ様子を見てきます。ここは絶対に死守してください。」
「うおっす!! 死んでも誰も通さないです!!」
「……後のわしの役目は、掛かってくる電話を誤魔化すことだの。わしもわしの持ち場へ戻るぞい。熊谷、ここは頼むぞ！」
「任してくださいッ！！！」
熊谷は、そっと扉を閉め、その前に仁王立ちになった。熊谷勝也、一世一代、男の見せ所なのだ。その頃、大石は通信センターへ行っていた。
無線や電話は、まず最初にここに集められる。昼間の時間帯なら代表窓口も電話を取るが、窓口が閉まってる時間は通信センターが取る。
「どうですかこちらは。」

「はい。ついさっき外線経由が鑑識課の直通番号に一本。」
「相手は。」
「県警本部、大高警部です。」
「…………あぁ、大高くんかぁ。…へぇ〜。」
大石はにやりと笑った。どうやら敵が動き出したらしい。敵は警察内部を買収してスパイを持つという。…そいつがどうやらまんまと動き出したらしい。しかし、それがまさか、あの大高くんだったとはねぇ。
大高はインテリを鼻にかけたようないけ好かない男で、現場経験第一主義の大石とは真っ向から対立している男だ。かつて大石が県警にいた頃も犬猿の仲だった。
「通話が終わったようです。」
「……爺さまに聞いてみよう。ピ、ポ、パ！　と、…もしもし？　おおぉっと、大丈夫、私ですよ。いかがでしたか？」
「かっかっかっか！　青二才が粋がりおってからに。鼻であしらってやったわ。奴さん、トサカに来とる。署長の出勤を待って朝一でこっちに直接踏み込んでくるぞ。」
「相変わらず、事を派手にしたがる性分だなぁ。てめぇの体ひとつで喧嘩もできないんですかねぇ。んっふっふ！」

「わしもますますに面白くなってきたぞい。今の電話で眠気が飛んだわ！　やはりいるな！　お前の言う、怪しげな連中がぞろぞろと這い出してくるのを感じるぞい！」
さぁて、面白くなってきましたよぅ。次は何が来る？　ほらほら鬼さんこちら。もっと踏み込んでいらっしゃい！

富竹ターン

「……もしもし、富竹です。」
「おはようございます、富竹二尉。早朝にすみません。山狗に動きがありましたのでご連絡します。つい先ほど、山狗の全隊員に非常召集が掛けられました。目的は不明です。」
「え、……そうですか。動きがありましたか！」
富竹はベッド脇の照明スイッチを入れ、眼鏡(めがね)をかけながら返事をする。
「それから、そちらの警察内で妙な情報が流れています。まだ裏付けが取れませんが、女王感染者である古手梨花の死体が発見されたというのです。」
「……えッ！！！　く、詳しい話を!!」
「収容されていた身元不明死体の身元が古手梨花だった、というものです。死後四十八時間を

経過しているとか。緊急マニュアル第34号の発令基準を超えた事態ですが、現在のところ雛見沢地区は平穏が保たれているとのことです。そちらでは何か情報が入っていませんか？」
「いえ、私は興宮にいますのでわかりませんが、…それはありえないでしょう。多分、女王感染者の死亡は何かの誤報だと思います。」
「こちらも誤報を疑っていますが、分析では情報の精度は極めて高く、ほぼ間違いないとのことです。未確認ですが、鑑識課職員複数が証言しているとも。」
「し、しかし、…………ん。」
富竹は気付く。そうだ、興宮署は大石さんのテリトリーじゃないか。これは………、そうか、全て梨花ちゃんたちの作戦だ。…なるほどな、落ち着いて考えればよくわかる。敵の正体が掴めずとも、緊急マニュアルが爆弾の導火線であることに変わりはない。だから、その導火線を役に立たないようにすることを考えたのだ。
緊急マニュアルの根拠は、女王感染者の死亡後、四十八時間以内に事態を収拾しなければ、村人全員が末期発症するという研究結果による。
だが、四十八時間経っているにもかかわらず村に何事も起きていないということになれば、緊急マニュアルに存在価値はなくなるのだ。そして、それを受けて山狗が非常召集をかけたということは、…………。

「……もしもし？　富竹二尉？」
「あ、はい、失礼。…どうやら現状を考えると、入江機関に不穏な動きがないと断言することは難しいようです。一佐に、入江機関を緊急査察されるよう進言をお願いします。また、最悪の事態に備え、番犬部隊への予備命令も進言します。」
「了解しました。九時になればもっとまとまった連絡が入ってくると思います。山狗造反となれば、そちらも危険です。十分、ご注意を。」
「もちろん用心してます。」
「では次の定期連絡は九時に。」
時計は午前六時。三時間後だった。

■山狗ターン

「………鶯1より全員へ。富竹は406号室だ。屋外監視、問題ないか。」
「鶯4、屋外監視問題なし。」
「鶯5、フロア問題なし。」
「鶯3、室内は無音。……多分、就寝(しゅうしん)してます。」

富竹の部屋のドアノブには、ベッドメイクに知らせる「起こさないでください」の札が掛けられていた。………夜更かしでもして昼まで寝ているつもりだろうか。
彼らにとっては大きなチャンスだった。
「……いいか、生かして捕らえろ！　三佐のオーダーだぞ。始めろ！」
富竹の泊まる406号室の鍵を、……最小限の音で開錠する。ホテルの部屋の鍵など朝飯前のようだった。二人の隊員が、手話で突入の合図を出し合う。
相手が寝静まっているとわかってるなら、威勢よく飛び込むのは愚策だ。息を殺し、慎重に扉を開けていく…。室内は、小綺麗ながらも殺風景な、いかにもな安ホテルだった。寝るためのベッドと、書き物をする程度の机、そしてコイン式のテレビしかない。…寝る以外に何も用途がない部屋だった。ベッドにはすやすやと眠る富竹が……。…………いない。
「どうした鶯3、応答しろ！」
「…くそ、もぬけの殻ですッ！」
普通ならまだ寝ていておかしくない早朝だ。それが、空っぽ。
「……どういうことでしょう。…富竹には野鳥撮影と散策の趣味がありました。…まさか早朝からどこかへ出掛けているのでは…。」
「いや、……違う！　…こいつぁ多分、やられたぞ…!!」

ドアノブにかかっていた「起こさないでください」の札。
あれがあったら、ベッドメイクは室内に入らないから、部屋が空室でもわからない。多分、あの札は前日からずっと掛けられている。ホテル側も、滞在期間内だからと気にしていないのだ。
つまり、……昨日からとっくに空室だった可能性があるということだ。
「……多分、ヤツは襲撃を予見して宿を変えたんだ。…そうか、それでしばらく姿を現さなかったのか!! 三佐に緊急連絡！ 畜生（ちくしょう）、こっちの作戦が漏れているぞ!!」
小此木は完全にやられたことを察した。…緊急マニュアルの根底である四十八時間が崩れて、終末作戦の最前提が揺さぶられている。……三佐はかなり動揺していて事態の確認を性急に急がせ過ぎだ。
富竹がすでにこちらを疑って身を隠していたなら、それを見てこちらの尻尾を根元からフン捕まえるに違いない…!
「全てが出来過ぎだぜ…。くそ、向こうの計略に綺麗にはまっちまったみたいだぞ…。」
落ち着いて考えるんだ。ヤツはこちらを内偵する役なんだぞ、まだ近くにいるはずだ。恐らく調べてるのは東京の調査部だろう。その調査部からの報告を、どこかで待ち受けてるはずだ。
恐らく、変更した宿だろう。おそらく興宮の宿のどこか…。

「……東京班の鴉に連絡を取れ。恐らく、調査部が定期連絡してる相手がいるはずだ。その相手の番号を調べさせろ。そいつが鹿骨市内の番号だったらビンゴだ……！」

小此木はこの想像にかなりの自信があった。

……だが、この想像が当たるということは、自分たちの正体がすでに暴きかけられていて、作戦を開始する以前にすでに作戦が破綻していることを示す。…だが、まだチェックメイトじゃない。興宮署の死体がRでないと確認できれば、全て仕切りなおせるんだ。

……富竹を捕らえ、興宮署の死体を確認する。…それだけでだ！

「隊長、鴉に連絡が取れました。通話内容は確認不能ですが、電話番号だけなら何とかできると。ただし時間がほしいそうです。」

「どの程度！」

「ほんの数時間ほどだそうです。」

「ち！　ほんの、と来たもんか。……急かしゃしねぇが、可能な限り急げと伝えろ。」

時計は午前六時を少し過ぎたところだ。……夜はすっかり明けたが、まだセミが鳴きだす時間にはちょっと早い。……これで真珠湾の第一波は凌いだ。こちらがどれだけ早く態勢を立て直せるかだ。……ウチの三佐のお姫様が妙な癇癪を起こさなきゃいいんだがな。

「…隊長！　鴉より連絡です。電話番号は調査中。なお、調査部は九時を定時連絡時刻に定め

ているようです。」
「あと三時間かッ！」
時計を見上げる。
…小此木はすでに三時間に満たないと細かいことが気になり、…そう考えている間にも秒針が刻まれ、一秒ずつその時間が近付いてくるのに焦りを感じていた。
「それから、調査部長の岡一佐が番犬に対し予備命令を発令しました。任務は示されていないとのことです。」
「……ってことは、引っ込みが付くような召集ってわけだな。大事でなけりゃ訓練ってことにして誤魔化そうってらしい。…大丈夫だ、まだ時間があるってことだ…！」
「続報です！　調査部長が幕僚長の自宅へ電話しています。内容は不明！」
「……大丈夫だ、…大丈夫。……まだ、…ぎりぎり大丈夫だ。」
番犬に予備命令が出た、ということは、入江機関造反の可能性をかなり高く見積もっているということだ。……現場レベルではほぼ間違いないと断定したということだろう。
だが、緊急マニュアルほどではないにしても、番犬に出動命令を出すのは容易ではない。それを命じることは、ある種のトラブルや失態を彼らが認めるということだからだ。今回の一件を穏便に決着できる、あるいはしたいと思っている連中は、今回の一連の動きを何かの勘違い

ということで沈静化したがっているはず。……そのぎりぎりの妥協点が、番犬への待機命令、ただし任務は示さずということなのだ。

だが、調査部長が幕僚長に電話というのはかなり危険な事態だ。……つまり、番犬の出動はありえると、陸自トップ、あるいはそれ以上の上層部との調整に入ったということだ。制服組は血気盛んだが、背広組は事なかれ主義。その間でまだ揺れている段階、ってことでもある。……まだ、俺たちの敗北は決まってない。勝ちも引き分けも、全てが同じテーブルに乗った状態なのだ。……だとするとその調査部の九時の連絡というのはヤバイ。何の根拠もないが、ヤバイ気がする。…山狗なんて珍妙な部隊の隊長を命じられた俺の野性の勘だ。多分、東京の連中は、その電話でもう一度詳しく富竹に現地の状況を聞き、最終確認を取るに違いない。…場合によっては、その電話に調査部長、…下手をすれば幕僚長が自ら出ることすらありえる。……となれば、その九時の連絡の受話器を置くと同時に番犬に出動命令が下って、こちらの負けが確定することになる。……まだ東京だって揺れてるんだ。何かの勘違いだと思ってるし、思いたい連中がいるんだ。

…………その電話を富竹が取れなければ、至急確認せよとこちらに人間を送ることはあっても、番犬を出動させるには至らない。そうなら十分、引き分けの目はある。……そして、興宮署のRの死体が真実ではなかったとわかったなら、かなりの追い込みになるが、まだまだ勝ち

の目だってなくなったわけじゃないのだ。しかし、それでももう、完全勝利の目は失われている。………お姫様のクライアントは完全勝利以外はオーダーしてないはずだ。

…悔しいが、敵の先制奇襲攻撃は完全に成功しちまったってことになる…！

「隊長…。」

「…やかましいんね、落ち着けやダラズが…。……連中はまだ確信してない。疑っちゃいるが、バレちゃいない。まだぎりぎり大丈夫なんだ。………とにかく、先に情報を得た方が勝つ。連中が尻尾を掴むか、俺たちが尻尾を掴むか…！　確かに緒戦の奇襲で徹底的にやられたが、……まだ全滅じゃない。だから白旗を揚げるんじゃやねぇ…！　………とにかく待つんだ。…鴉が富竹の潜伏先を暴く。…警察の協力員がR死亡の真偽を暴く。……とにかく今は待つんだ…、耐えるんだ……！」

「失礼します、鷹野三佐からです！　…相当、ご立腹の様子です。」

「……くそ、伏してチャンスを待とうって時に、俺はお姫様のお守りかよ…！　………あ、…もしもし、小此木ですん。……………ええええ、まぁそう焦らずに。まだそう決まったわけじゃありませんね。えっへへっへ。まずは落ち着いてコーヒーでも。ええ。」

笑って誤魔化そうとする小此木の受話器からは、何を言っているかわからないが、ヒステリックな雰囲気だけはわかる鷹野の声が漏れてくるのだった。時計の秒針が、カチコチと時を刻

む。……果たしてその刻みは、誰に微笑むためのものなのか…。今日は、長丁場になるかもしれない。…小此木はそう直感していた。

■大石ターン

「お疲れさんです。今のは誰からです?」
「今度はウチのハナ垂れ署長じゃわい！　段々と手強くなってきたぞい！　だが、わしの敵じゃないな！　事務屋風情が技術屋に勝てると思ったか！　しかし、署長が今日、署長会のゴルフでよかったわい！　直接来られたら、ちと面倒だったぞ。」
「んっふっふっふ！　ゴルフ場から電話とは、仕事してんだかしてないんだか。大高くんめ、署長と一緒に乗り込みたかったろうに、今頃悔しがってるぞぅ！」
「間接攻撃でダメなら、次は直接攻撃ですかね。…乗り込んできますか、大高のヤツ。」
「署長が捕まらないんじゃ、自分で乗り込むしかないと踏むでしょう。もうじき八時半か。下の窓口が開く頃だ。」
　もう夜ではなく、完全に朝だった。
　セミの合唱はもう始まっている。…それだけを聞いていているなら、今日という日も、まるで普

段通りの一日になるように勘違いするだろう。だが、…今日はただの一日にはならない。ただの日曜日にはならない。

大石たちは、すでに自分たちが巨大な陰謀の尻尾に触れていることに気付いていたのである…。

「……大高くんの性分だと、多分、堂々と胸を張って正面からやってくるでしょう。」

「へ、自分だけが正義だと思ってるヤツにありがちっすね。」

「わしはここで電話を耐える。お前らはそいつを頼むぞ!!」

「……よし、お出迎えと行きましょうかねぇ。熊ちゃんはここを頼みます。」

興宮署の窓口ロビーは、多くの警察のロビーと同じで決して開放的イメージのある爽やかな場所ではない。フロアタイルもひびがはいったり欠けたりしていて、たまにつまずく人もいるため、ダンボールが被せられていてマジックで転倒注意なんて書かれていたり。観葉植物がすっかり枯れていて無惨な姿を晒していたり。…そんな、まぁサービス業とは程遠いロビーだ。病院や銀行と違い、警察の窓口は朝一から行列しているということはないが、何人かの人が窓口が開くのをソファーで待っていた。

窓口はもうすぐ開く。カウンターの内側では事務屋たちが待機していて、始業のチャイムが鳴るのを待っているようだった。こんな朝っぱらから、あのいけ好かない野郎と揉み合わなく

ちゃならんのか。せめて彼が、ボインボインのお姉ちゃんだったら良かったのになぁ。……大石たちの役目は重大だった。…ここで簡単に古手梨花の死が偽装だったと暴かれたら、その時点でこの作戦は終わってしまう。

　古手梨花の死が拭えない今だけが、敵に揺さぶりをかけることができるのだ。…その時間を一分一秒でも長く与え、ちょろちょろとはみ出てきた尻尾を富竹が掴む。だから、彼が尻尾を掴む前に古手梨花の死が偽装だとバレれば、敵はその時点で態勢を立て直してしまう。緊急マニュアルは信憑性を回復し、敵はこの時期の作戦決行を一度は見送るだろうが、再び策を巡らしてより完璧な形で再来するだろう。……今回は、古手梨花が奇跡的な勘で陰謀を看破したようだが、……それは奇跡で、神風だ。元寇の襲来をその奇跡で二度は防いだが、…それに期待した太平洋戦争ではそよとも吹かなかった。奇跡の女神は何度も微笑んじゃくれない。その一度のチャンスを掴める者にしか微笑まないのだ。

　だから……、次はない。今回の一件で敵を叩きのめさなかったら、次は絶対に勝てない。…連中の内情に深刻なダメージは与えられるだろうが、……引き分けは最終的に敵の勝ちに結びつく。………我々は是が非でも敵を暴き、富竹に鎮圧部隊を呼ばせて敵を打ち倒さねばならないのだ。だから、自分はここで敵の尖兵を食い止めねばならないのだ。……俺の後にあるものは重い。

……なぜなら、敵の陰謀が達成されたなら、……雛見沢が滅び、ガス災害の名の下に二千人以上が虐殺されるのだ。どう転んでもこの事件は表沙汰にならないだろう。しかし、……今ここで自分が体を張らねば救われない人たちがいる……!! 表向きはあらゆる職務違反だ。

……だが、…私は今、本当の意味で刑事魂を燃やす時なのだ。

そうだ、私はあの若かった日に、おやっさんに殴り倒されて、そいつを教えてもらったんじゃなかったっけ…!! 自動扉のガラス戸がすーっと左右に開閉し、……この蒸し暑い朝にもかかわらず、きっちりスーツを着こなした男が入って来た。

…子分どもを二人も連れてやがる。相変わらず、権威的に振る舞いたがるヤツだ。

「いよう、おはようございます、大高くん！」

「……！ これはこれは。おはようございます、大石さん。それから私のことは〝くん〟と呼ばないでください。もうあなたに〝くん〟で呼ばれるような立場ではありません。」

「まぁまぁ、そんなこと言わずに大高くん。同じ卓で麻雀を打ったよしみじゃないですかぁ。」

大高の顔がわずかに歪む。

…かつて麻雀に強いことを鼻にかけていたのだが、大勢の前で大石にさんざん負かされ、プライドを傷付けられたことがあったからだ。

「あなたとゆっくり旧交を温めたいところですが、今日は急ぎの用事がありますので、失礼さ

せていただきます。」
「んっふっふっふ！　まぁまぁ、そう言わずに〜！　あんたが交流剣道大会で賞状の筆耕委託を忘れてたのを、あんたが私に泣きついたんで、こっそりステージ裏で書いてあげたから無事、表彰式が出来たんじゃないの。」
「………く。そ、その件については感謝していますが、今は関係ないことです。」
「ありゃぁ、感謝してくれてましたの？　なっはっは、そりゃ失礼。そういう話はとんと聞いたことがなかったもので。県警では、私が書きたいとわがまま言ったから、筆耕委託を断って、わざわざ書かせてやったんだって話で通ってましたよ？　賞状の文字があまりうまくないので、どういうことなんだと本部長に聞かれて以来のあなたの言い訳のはずですがぁ？」
「……………さ、さぁ。どうなんでしょうね。誰かが誤解してるんじゃないですか…？　……私はそんなこと言ってませんよ？　…ははははは。」
「県警本部はあんたのシマだろうが、生憎ここは興宮署でね。あんたの思い通りにゃそうそうならんってことです。」
「ほぅ…。それはどういう意味ですか大石さん。」
「あんたがここへ何しに来たか知らんが、あんたのシマは穀倉だ。興宮じゃない。大人しく引き上げてもらいましょう。」

「な、……なんの権限があってだね！」
「そちらこそ何の権限があってですかなぁ？」
「け、県警本部で現在、捜査中のある秘匿捜査事件についてだ。その件に関連があると思われる身元不明死体がこちらにあると聞いてね。」
「んなら電話でお問い合わせを。興宮はね、貧乏人の町ですから。オーダーのスーツなんか着てるボンボンの来るところじゃあないってことです。」
「……なるほど、どうやら鑑識課の連中とつるんでいるようですね。署長から検死報告を全て県警本部に引き渡すよう命令が来ているはずです。」
「その件については鑑識から署長に説明が入ってるはずです。まだ検死中でね。ちょいとうちのミスで、身元が特定されたような情報が内部に流れちまったようですが。ですので、報告書を出すにはちょいとお時間をいただかないとならないわけです。」
「なら、その検死に我々も立ち会わせてもらおう。」
「嫌です。」
「…は、…はぁ!?　私は県警本部の秘匿事件担当として、」
「それが本当なら!!　私はあんたの刑事魂を疑わない。刑事魂は高潔だ。そりゃあお給料がもらえなかったらこんな商売、誰だってやりゃあしないです。…ですがね、…それだけじゃ測れ

ない魂がなきゃ刑事は務められないんです。……あんたにその魂があるってんなら、私ゃここを譲りますよ。」

大石の目が、怒りの炎に燃えるように凄みだす。……大高はその形相を見て、…忘れていた数々の恐ろしい記憶が蘇るのを感じていた。

大石にその怯えを気取られたくないと思ったが、咄嗟に飲み込んでしまった固唾を隠すことはできなかった。

「な、……なら、そこを譲ってもらいましょう。私も刑事魂でここに来ています。そこをどいてください。」

「なら、私をその刑事魂で押してどかしてみなさい。ほれ。」

「……な、……何ですって……？」

「あんたの刑事魂が、私の刑事魂に負けないくらいに重いものなら、私なんか簡単にどかせちゃうはずですよ。ほれ。試してみなさい。」

「………………く……。」

それは、ここは通さないという明白な意思表示だった。

…こんな滅茶苦茶がまかり通るはずがない！　大高はそう思って混乱した。自分は県警本部のエリートだ。信頼を得るのは学歴と勤務評定だけだ。それを信じて今日まで積み重ねてきた。

この大石という男はそれを一切認めず、自分を尊敬しようともしない、クズ中のクズだ。野蛮な人間に多い、自分のプライドを守るために、自分の上位者を全て認めず、粗暴さだけで存在意義を確立しようとする最低のタイプだ。県警本部にいた時から不思議だった。なぜこんな男の言うことをみんな信じるのか。こんな男のことをどうして尊敬するのか。…こんな男のことを、どうして私よりも評価するのか！

「……ど、……どきたまえ。今すぐどかなければ、捜査妨害で君を告発することも出来るんだぞ…‼」

「ほぅ？　そりゃどんな捜査ですかな。話してくれりゃ協力もしますよ。」

「………く、…だ、だから君もわからない人だな。秘匿捜査だから、君如き田舎署の刑事には話せんのだ…！」

「なるほど、全部話せないなら一部でもいい。……あんたはその仕事に、何を背負ってますか。」

「……背負う…？　な、何を言ってるんだ。」

「私はね、背負ってますよ。……私の後には、村の住民の命運二千人分があります。あんたを通せば、二千人、いや、その親戚やご家族も含めればもっともっと大勢の人が悲しむことになる。…………あんた、……わかってますよね…？」

「…………何の話か、…さっぱりだ…！」

「……腹を割ってやる。あんたの飼い主は恐ろしいことを企んでいる。あんたはそこまで想像がついちゃいないだろうが、何千人もの人が不幸になる恐ろしい陰謀を企んでるんだ。……そいつが挫かれる瀬戸際だってんで、多分、就寝中だったあんたを叩き起こして、すぐに調べろと命じたんだ。……いくらの小遣いで頼まれてるか知らんが、…それがあんたの刑事魂より重いってんなら…。」

そこで言葉を区切ったが、…それ以上は口に出さずとも大石の目が語っていた。

「なな、何を言っているのかさっぱりわからないですよ…！　とにかくそこを通してくださ、」

大高のうろたえぶりもまた、口で語るより雄弁に全てを語り、認めていた。彼が胡散臭い何者かに買収されているのは事実だ。……いや、彼は買収されているつもりはないだろう。

自分の意志で築いた（と思い込んでいる）情報網から、バーターを求められて、古手梨花の死体の確認を頼まれただけ、のつもりなのだ。もちろん、秘匿捜査のためなどは嘘っぱちだ。

…でも、県警本部のエリートの自分が秘匿捜査のためと言えば、誰もが平伏して最敬礼で迎えてくれた。

…なのに、なのに！　何でこの男だけは最敬礼をしないんだッ…!!

「は、話になりません…！　このことは後日、必ず署長に抗議させていただきます。……ぅわ

「……!?」
「……おう、待たんかい。話はまだ終わってませんよ。」
　脇を通り抜けようとした大高の肩を、がっちりと大石の豪腕(ごうわん)が摑む。大高はその手を振りほどこうとするが、……万力(まんりき)のような力で締め上げられ、とても逃れられない…！
「…いい、……いててて、……離して下さい、大石さん…！」
「ありゃ、大して力を入れてるつもりはないんですがねぇ？　あんたに真の刑事魂があったなら、こんなのには屈しない。あんたの揺ぎ無い正義が、私なんかあっさり打ち倒して踏み越えていくでしょう。だが、あんたはこの程度の腕も剝(は)がせない。…………何でかわかりますか。」
「………は、…離せぇぇぇ…！」
「てめえには刑事魂がないからだよッ！！！」
　大石がその肩を摑んだまま思い切り放ると、大高はフロアを二メートル以上も転がりながら吹き飛ばされた。
「な、……、…こ、これは捜査妨害だ！　公務執行妨害、いや、傷害の現行犯だぞ！　緊急逮(たい)捕(ほ)しろ!!」
　大高が子分の二人に命じるが、どうしたものか困惑しているようだった。目の前の男も警官だし、どうやら二人の間には確執があるようで、とても自分たちの出番とは思えない。

……しかも、………これは子分ゆえの直感だ。…目の前の男の方が、格上なのだ。けしかけられても、とても立ち向かえない…！
「ど、どうしましたか大石さん…！」
ロビー内の警官が何事かと集まってくる。状況がわからないという顔つきだ。
「いえいえ。県警の青二才が筋の通らんことを言い出したもので、ちょいと先輩として指導したまでです。」
警官たちはどうしたものかと、大石と大高を見比べる。
…ただならぬ事態なのはわかっているのだが、事情がわからず、どちらを止めたものかもわからない。大石は興宮署に勤める警官たちにとっては頼れる兄貴分だ。
尊敬してない警官はいない。その大石が、筋が通らないと言っている以上、そこで悔しそうな顔で睨みつけている男に、何か非があるのだ。それに大石だって分別のある年齢だ。その大石が、一般客の目もあるこのロビーでこれだけのことをするのだから、……それはよっぽどのことに違いないと思った。
このような視線を集めることは、大高にとってはあまりに耐え難い屈辱だった。彼は屈辱を怒りで覆い隠しながら、……それでも平静を装うフリだけは忘れずに立ち上がった。
「……なるほど。あなたの言い分はわかりました。私も子供の使いでここに来ているわけじゃ

ない。」

「いい根性です。胸を貸しますよぅ？　かかって来い、青二才があッ！！！」

大石がそのたくましい胸をドンと力強く叩く。…男に生まれたなら、拒み難い挑発だ。

大高は普段、冷静な分だけむしろ頭に血が上ってしまい、猛烈な勢いで大石のその胸倉に摑みかかった。

「ぅ、ぅおおおぉおおおおぉ！！！」

「甘いわ!!　そんなもんか!!」

決して小柄ではない大高を、大石はバランスを崩すようにして投げ倒す。長年鍛えた柔道の技だった。

「く、くそっおおおおおお！！！」

「お前の刑事魂はそんなもんかぁあぁ！！！　俺は雛見沢二千人を背負ってる!!　所轄管内二千人の命を預かってるッ!!　ならば二千人を押し退ける気迫で来んかいッ！！！」

「ぅおおあああああ！！！」

まるで関取と子供の相撲だった。大高が何度挑みかかろうとも、ころり、ころりと体が転げる。大石の足は大地に根を下ろしたようにどっしりと立ち、二千人を背負うと自称するだけの気合を見せていたのである。三度も床を転がされれば、彼もさすがに挑発に乗せられたことを

悟ったようだった。………彼は髪を整えなおす仕草をしながら、呼吸を整えた。
「ふ、ふふふ…。わかりました。ならばお教えしましょう。私が担当している事件は、あなたもご存知のS号絡みです。………その経由で、とある方面から、真偽を確かめてほしいと依頼されたのです。」
「回りくどい言い方じゃあわかりませんなぁ。もうちょいとわかるようにお願いします。」
「…何しろ、疑われているのは雛見沢地区では信仰上のマスコットとも言える少女の死なのです。それが事実かどうか、すぐに確かめなければなりません。」
「だぁから、電話で説明したでしょ？　現在、調査中。まだまだお時間がかかります。」
「ふ、……いや、言いたくなかったんですがねぇ。…この依頼は、……もう伏字はやめましょう。あなたの大の苦手の園崎議員からです。…ふっふっふ。」
「あぁ、あの紋付袴の怖いヒトね。く、……確かに苦手ですねぇ…。あのヒトに凄まれたら、私も、道理引っ込めて無理を通すしかありません…。」
「…ふふふふ、そうでしょう、そうでしょう？　その園崎議員から、大至急、本当に古手梨花の死体なのかどうか確かめてほしいと依頼されたのです。住民の依頼ですからね。住民のための警察です。引き受けるのは当然ですよ。何しろ、古手梨花は雛見沢ではただの少女じゃない。特別な意味を持つ少女です。その少女の死体が出た、なんて話が未確認情報でも流れれば、そ

れを確かめたいと思うのは至極当然です。そうでしょう。」

「……あんた、そういうのは一般の方の耳に入らないところで言った方がいいですよ…。ここ、ロビーですから。」

「…………ん、…これは失礼。」

大高も、それはちょっとまずいことをしたと思った。

実際、彼の後ろから、一般客のヒソヒソと言う声が聞こえてくる。…そして一般客のひとりが恐る恐る大高の背中に声をかけた。

「ふ、古手の梨花ちゃまが亡くなったってのは本当なのかい…!?」

「ご安心を、奥さん。まだそうと決まったわけではありません。それを確認するために県警から参上しました。」

「そうです。まだそうと決まったわけではありません。現在、それを確認中なのでお待ちをと申し上げているだけなのです。」

「その確認に立ち会わせろと言っているのです。ふふふ、いいんですか!? 私は園崎議員の依頼でここに来ているんです。その私にここまでの邪魔をしてくれたというなら、それは全て議員に話します。困ったことになるのは、大石さん、あなたの方なんですからね。……ふっふっふ、そろそろ降参した方がいいんじゃありませんか？」

園崎議員はこの辺りでは、非常に強面の議員として名が知れ渡っている。その事情を十分知っている一般客たちがヒソヒソと囁きあう。

……大高はそのヒソヒソ声に、ニヤリと笑う。自分の脅し文句が、この興宮では想像以上の効果とわかるからだ。

「…あらやだ。三郎さん、そんなこと頼んだのかい？」

「………そこの県警さんや、すんませんがのぅ。それ、園崎議員さんが本当に頼んだんですかいのぅ…。」

「ふっふっふ、えぇ、そうです。私が議員から直接依頼されたのです。ふっふっふ、どうです？　大石さん。さすがに降参では？　ふっふっふっふ！」

後のヒソヒソ声がまたヒソヒソと囁きあう。……ふっふっふ、やっぱり園崎議員の名前は大きい。

興宮界隈ではこの名を出せば、チンピラだって道を譲るぞ…。ふふふふふ…。

「さぁ、議員が怖かったらそこを空けてもらいましょうか、大石さん。」

「…………………あー。反則切符の再交付は、八番の窓口でご相談を。」

「………は？　私がいつ反則切符などを…！」

大石との会話が急に噛み合わなくなった。

大石の目が自分より後に焦点を合わせている。…何だ？　この忙しい時に誰と話してやがるんだ？　私の後には、古風な身なりの老人と、着物姿の女性がいた。
目が合うと、茶目っ気のある笑顔で微笑んでくれた。………ちょ、ちょっと好みかもしれない。
「なぁ、お前さん。本当に園崎議員に直接依頼されたんだね？　秘書とかそういうのじゃなく。」
「そ、そうですとも。ははははは、こう見えても園崎議員とは懇意な関係でしてね。直接お電話をいただくこともあるのです。」
　それを聞き、老人がキョトンとしながら聞く。
「………お前誰じゃい。」
「…は？　ははははは、名乗るほどではありません。県警本部に勤める一警官に過ぎませんよ。」
「……………あまりにも、……出来すぎなシチュエーションで、その…。なっはっはっはっは…、笑うしかないですなぁ…。」
「あっはっはっは。なぁんだ、やっぱりこれは笑ってもいいところなのかい？　それは私も気付かなかったわ。あっはっはっはっはっは。」
…大高だけが、大石とご婦人の笑いについていけない。

「どうしたんですか、今日はご一緒でお越しになって。」
「いやぁ、それがねぇ？　例の切符なんだけどさ。左折禁止の看板が茂った葉っぱで見えなかったんだよ。その出口に白バイが待ってるーってのは、ちょいとやり口が汚いんじゃないかいって言ったらさ。三郎さんが、それは抗議した方がいいって言って、こうしてついてきてくれたわけなんだよ。」
「……あ———……。公道の樹木は市役所の管轄ですからねぇ……。よくそういうのウチに来るんですが、……何とも難いんですよねぇ。」
「うむ。それを知りながら出口で待ち伏せとるっちゅうんがけしからんと思ぅてな。こうして抗議に来たんじゃゃ。」
「わかりました。そいつは市役所と交通課に私の方から言っときますんで、……今日はひとつ、穏便にすましちゃもらえませんかね…。」
「……ふーむ。あんたがそう言うなら、顔を立てようじゃないか。今日は引き上げるとしよう。」
大石の客とわかり、意地悪をしたい大高はネクタイを締め直しながら言う。
「でも違反切符はちゃんと支払うんですよ。規則です。」
「カ、カチンと来るお人だねぇ…。」

「…カチンと来るお人でしょ？　…お茶目な一面もたま〜にあるんですがねぇ。」
「わ、私は今、そこの大石刑事と重要な話をしている最中なんです。さぁお二人とも用が済んだらお帰りを。…そして良い一日を奥さん。」
キラーン。
「あはははは。良い一日をね、県警の旦那も。」
ぐわし。帰り際の二人が、後から大高の肩を掴む。ご婦人が大高の右の肩を鷲掴みにし、老人が大高の左の肩を鷲掴みにする。
「……県警の旦那。私ゃ生まれてこの方、嫌いなものが二つある。何かわかるかい。」
「は、………はぁ………？」
「一つはシイタケ！　生まれた時からこいつだけは苦手でね。食うのも駄目だしダシを取ったのもダメさ！　もう一つは嘘!!　食わされるのも駄目だしダシに使われるのも気に入らないッ!!　ここまでコケにされちゃ退けないねぇ!!　鹿骨の鬼姫、園崎茜ッ!!　売られた喧嘩は値引かないのだけが自慢さぁ！！！」
「そそッ園崎家のあんたが言うな――――!!　あと、鬼姫って部分を一市民に置き換えれば完璧です。」
「…………は？　…………へ？　………!?!?」

警官たちもロビーの人々も、大高の子分も流れについていけず目を白黒させるしかない。
「……あー、ご説明します。こちらは園崎茜さん。鹿骨市婦人剣友会の副会長さんです。こちらは園崎三郎さん。県剣道連盟の名誉理事さんです。…それより前に肩書きがありますね失礼。鹿骨二区選出の県議、園崎先生です。」
「………………ふぇ…。」
「いやぁ！　お二人とも、県警剣道部師範代の大高くんに稽古をつけるために本日はお越しくださったんですよねぇ⁉　なっはっは、朝からホント申し訳ございません…‼　ささ、先生方を道場にお通ししてください…！」
「……え、………と、………議員しゃん？」
「何じゃい。お前さんとは懇意な仲じゃらん、おどれがゆうたんじゃや。……今日はとことん付き合ってもらうぞ…！」
「くっくっくっく…。私も久々に燃えてきたあぁぁぁッ！！！」
鷹の爪のように両肩を摑んだ二人が、怪しげに目を光らせて笑う。釣られて大高も笑う。
「……ふふふふふ…？　……ふふふふふふふふ…？」
「ふふ、ふぎゃぁあぁあぁ――――ッ！！！」

■入江診療所

「……確かですわよね⁉　確かに昨日の時点で、入江所長は女王感染者が在宅しているのを確認したんですわよね…⁉」

「在宅を確認なんてひどい…。夏風邪を引かれたというので、様子を見に行ったのです。…………ですから、梨花ちゃんの死体が見付かるなんて、はははは、ありえるわけがないじゃないですか。」

「そうですわよ、ありえるわけがないんですわ…。で、…でも、それを確認しないと、信じてしまって、その、…誤解する人もいますので…。」

「誰が、何の誤解をするんですか…？」

「……そ、その、……古手梨花が死んだなどと村に知れたら、大変な騒ぎになりますし…。」

入江は、鷹野の嘘がこれほどわかりやすく苦し紛れだと感じたのはこれが初めてだった。

……もう富竹さんの調査結果を待つまでもなく、確信できる。

鷹野さんの目的は、緊急マニュアルだ。…その前提を崩されることに狼狽（ろうばい）しているのだ。…彼女に対し、同情的に言えば、……誰も理解を示さなかった研究に、誰かが理解を示し、彼女

の拠り所になってくれた。
……その、海原に浮かぶ藁のような儚い拠り所に、切り捨てられたくなくて……、こうして慌てふためいているのだ。それはこの上なく哀れな姿。…もし可能で、伸ばすべき手があるならば、…溺れる彼女に手を差し伸べたいと思った。……だが、手が、届かない。彼女が伸ばさない限り。…自分が溺れていて、助けを欲していることを認めない限り、手は届かない。
　彼女はそれに気付かない限り、私がいくら手を伸ばしてもそれを払いのけるだろう。……だが、私のその他人事な想像はすぐに打ち切られた。梨花ちゃんが在宅しているのかいないのか。そこに話が及べば、中にいると言ってきた自分に疑いがかかるということだ。………危険が一気に高まったことも意味する。さっきから受話器に耳を当てていた隊員が、諦めたような顔をして受話器を置いた。
「……三佐。電話に出ません。不在のようです。」
「監視班は何と言ってるの。」
「いえ、監視態勢に入った十七日以降、外出の形跡はなく、電話の一本もありません。」
「ねぇ、入江先生。…………ということは、まだ中に梨花ちゃんたちはいる、ということですわよね…?」
「……え、…ええ。そういうことだと思いますが、はは、どうでしょう。もうだいぶ治りかけ

て元気になってますからねぇ。うまく抜け出して遊びに行ってるのかもしれません。……ほら、今日は綿流しのお祭りじゃありませんか。梨花ちゃんの家の近くには確か、模擬店部会の水場が設けられていたはずです。人の出入りも多いですから、監視の方が見逃してしまった可能性も…。」
「…どうなの？　そんなことはありえるの？」
「入江所長が出られた後には必ずシールしています。まさか、窓から出たのでもない限りありえないでしょう。」
「山狗は、あくまでもRは家を出ていないと、そう言うのよね…？」
「そうです。間違いありません。Rは R宅内です。そして十七日以降、一度たりとも外出していません。絶対に在宅しています。」
「……それを確認したのが入江所長だけで、山狗の誰一人確認していないのに、そうだと言える…、……のね？」
「……えっと、………………ぅ。」
山狗の隊員が助け舟を求めるように入江を見る。…入江は一度、固い唾（つば）を飲み込んでから、それに頷き返してやった。
「なら、どうして興宮署でRの死体が出てきたりするのッ⁉」

「ですからそれは誤報の可能性も…。その後の情報では身元不明死体の検死はまだ終わっておらず、古手梨花であるというのは何者かの憶測に過ぎない可能性が高いと…。」
「もうその話は聞き飽きたわッ！！！　その怪情報が流れて、東京にまで伝わってからもう何時間が経過してると思ってるの!!　このままでは東京に、………ん……。」
鷹野は入江がいることを思い出し、そこまでで口をつぐんだ。だが、入江はその先に何を続けるつもりだったのか、想像はついていた。
「三佐、東京の野村さまよりお電話です。」
「………く…。だからしばらく待てと言ってるのに……！」
普段、あれだけ余裕を見せる鷹野が、人目もはばからず頭を掻き毟る。彼女の焦る気持ちが、心だけでなく体にも出ていた。…体に爪を立てるのが癖なのだろう。
彼女が腕を組む時に指が当たる場所は、ぎゅうっと深い爪の跡が残り、彼女の焦る気持ちを如実に物語っていた。
「鷹野さんはお忙しいようですね。私が出ましょう。野村さんですか？　初めてお電話する方ですね。」
「い、いいえ、三佐宛てですので…。」
隊員は渋る様子で鷹野の顔と見比べる。

「……入江所長。今、ちょっと立て込んでおりますの。大変申し訳ございませんけど、所長室にお戻りいただいてもいいですかしら。」
「…………そうですか。……そうですね。入江機関の運営はあなたに任せています。私が口を出すことではありませんね。」
「誰か所長室までお送りして。……早く！」
それは露骨な、出て行けと同じ意味の言葉だ。…入江は刃向かわず、セキュリティルームを後にした。
「もしもし、鷹野です。お待たせして申し訳ございませんわ。」
「……何度もお電話して申し訳ございませんです。いかがですか、興宮署の情報については確認できましたか？」
「申し訳ございません。今、急ぐように指示をしているところです。すでに内部協力員を興宮署に向わせましたので、その連絡を待つだけなのですが…。」
「そうですか、もうじきですね。では、何時頃までにこちらにご連絡をいただけますか？」
「えっと！　もちろんわかり次第すぐにご連絡申し上げます。ただそれが何時になるかはお約束が難しいのですが、……大至急、ええ、急がせておりますので…、ええ！」
「……ふふふふ。三佐。飛行機に乗ったことはおありですか？」

「え？　あ、あぁ、もちろんですわ…。」

「飛行機が離陸するために加速する時。この時に大きな出力を出すため、エンジントラブルを起こすことがあるのだそうです。その時、まだ大して速度が出ていないならブレーキを掛け、離陸を断念するそうですが、もしすでに十分な速度が出ていた場合は、ブレーキはかえって危険なため、そのまま離陸をしてしまうのだそうです。四発の旅客機なら、内一つのエンジンが壊れていても飛行は可能ですから。それはもちろんこの度の作戦も同じです。エンジンはひとつではありませんから、十分な速度が出ていれば離陸に踏み切るでしょう。後のことはどうとでもなります。………ですが、この度の作戦という飛行機は、まだ十分な速度どころか、これから離陸しようという段階です。おわかりですね？」

終末作戦の第一段階は、監査役の富竹暗殺から幕を開ける。…それすらまだ始まっていないのだから、それは的を射ている。

「もし、貴女(あなた)が乗った旅客機が、離陸前からエンジンが故障しているとわかったらどうしますか？　降りるでしょう？　同じことです。離陸前からエンジンに故障が見付かったため、乗客であるクライアントたちが飛行機を降りたがっています。」

…もう後戻りできない段階に至れば、多少のミスに目くじらを立てることはなくなる。……だが、後戻りができる今の段階だからこそ、彼らはデリケートで、わずかの失態にも過敏にな

るのだ。
「そ、それが本当に故障なのか、今、点検させているところなのです。」
「ええ、存じています。貴女は管制塔の管制官。私は彼らをなだめる添乗員。離陸の見込みの薄くなる飛行機から降りたいと言い出すクライアントたちを懸命になだめているところです。……これ以上、事態の改善が遅れると、この飛行プラン自体がなかったことになります。……鷹野三佐？　それはつまり、貴女の祖父の論文が、世迷言の狂人論文であったと烙印を押されることですよ？」
「…………く……。」
「一人の少女が死ぬと村人が全員錯乱する？　…ふふふははは、ばっかみたい。何を根拠にそんな世迷言を。この分厚い研究結果は全てそんな空想論文だ、なぁんて、ふふふふあはははは、おっかしいぃ。高野一二三と鷹野三四って何なのかしらぁ。おかしいおかしい、おっかしい、ふふふふふふはははははははは……。」
鷹野がぎりぎりと歯軋りをする。そして受話器を握り潰すくらいにギリギリと爪を立てて…。
「…………と。なってしまいます。おわかりですか…？　これは、貴女と貴女の尊敬してやまないおじいちゃんの、名誉を守るためでもあるんですよ…？」
「…え、……ええ…。お気遣いをありがとうございますわ…。」

「安心してください。私は貴女の唯一の味方です。貴女にとって一番幸せで報われる最後になるよう、最後までお手伝いします。……ですので、どうか私の顔も立てて、興宮署の情報の真偽を確かめてください。私も努力してますけど、機嫌を損ねるクライアントの皆さんのお相手は楽ではないもので。」

「……ご迷惑をお掛けしますわ…。もうしばらくだけご猶予を…。えぇ……。……はい、失礼いたします。」

鷹野は向こうが受話器を置いたことを確かめてから、ガチャンと叩きつけるように受話器を置いた。

「小此木から連絡はまだないの!!　電話して!!」

「三佐、つい十分前に電話したばかりです…。情報が入ればすぐに連絡してくることになっています。少しお休みになられては…。先ほどのコーヒーも、」

気遣うように隊員が差し出した紙コップのコーヒーを鷹野が払いのけると、それは床に叩きつけられて、フロアタイルの上に黒い水溜りを作った。その様子に、セキュリティルームは、息を呑む音さえ静まり返る。

「………何よ……。ぼけっとしている暇があったら、誰かモップでも持ってきなさい！　十分前に電話してても構わない、もう一度かけて催促して!!　古手梨花の死体のわけないという裏

付けと、……行方不明の富竹の確保よッ!!」
もう鷹野も気付きかけていた。…富竹の行方不明が、何か嫌な意味があることに気付きかけていた。
…富竹を捕まえれば、きっと興宮署のことも知っているに違いない…！　あの一見、間抜けそうな男は、どういうわけか我々の計画を見抜き、揺さぶりをかけるよう工作したのだ。
…そう、全て富竹の差し金に違いない…!!　大人しく今日を過ごしていたなら、せめて死ぬ前に祭りのひと時を楽しませてやろうと、取り計らってやろうと思っていたのに……ッ!!
……一番手っ取り早いのはあの家にいる古手梨花の顔を私が見ること。
でも私はこの場を離れられないし、入江では信用できないし、……祭りで人が大勢出入りしてるから山狗も監視が精一杯で迂闊に近付けないし…。
せめて電話に出てくれればいいものを、なぜか電話に出ないし…!!　これじゃあ、あの家はもぬけの殻で、……古手梨花の死は本当だということになってしまう。どこで狂った？　誰が騙したッ!?　……決まってる。…在宅確認をした唯一の人物、……入江が一番怪しいじゃないか。富竹がすでに宿を抜け出してどこかに潜伏しているように、……梨花もすでにあの家を抜け出して別の場所に潜伏しているんじゃないだろうか。だったなら、……入江は裏切り者で、…富竹と内通している……？

「…………い、入江所長に監視をつけるのよ。」
「まさか、所長の在宅確認が、……嘘…⁉　どうして所長が！」
「……富竹はいつの段階でかわからないけれど、私たちの計画に気付いたのよ。そして、宿を脱出し、Ｒも秘密裏に安全なところへ避難させた。…私たちはまんまと騙されて、空き家を見張り続けていたのよ……‼」
「あ、空き家ということはありえません。人影が確かに…！」
「それがＲだという保証はあるの⁉　Ｒじゃない。監視する山狗を騙すだけの役で、誰かがあそこに身代わりとして留守をしている、そうよそうに違いないわ…‼　小此木に、Ｒ宅への強行突入を命じなさい！　誰がいるんだか知らないけど、そいつは富竹や梨花に通じてる。そいつを締め上げるのよッ‼」
「……し、しかし、Ｒ宅への突入は、本日は不可能です…！　Ｒ宅前は水場になっており、祭りの関係者が常にごった返しています。今日の祭りが終わる深夜までは不可能です…‼」
「それを何とかするのが山狗でしょうがッ‼　何とかしなさい、何とかッ！！！　…何で⁉　何で私が言うことじゃ聞いてくれないの⁉　私の言うことは聞けないって言うの⁉　……私の…保護者の言うことじゃなきゃ、聞けないって言うの…。…ぅうぅぅぅ……！」
隊員たちは沈黙するしかない。…どんな言葉をかけても今の鷹野の慰めにならないとわかっ

ていたから。……そんな中、沈黙を切り裂く電話の呼び出し音が鳴る。鷹野がびくっとする。
「…はい。…………え!?　さ、三佐、朗報ですッ！　鴉が東京調査部の定期連絡先の、で、電話番号特定に成功したとのことです!!　電話番号は鹿骨市内！　山狗が住所の特定作業に入りました!!」

■興宮の小此木造園

「富竹だ、間違いない！！！　雲雀、腕利きを集めろ。ヤツは用心してるぞ、ぬかるんじゃねぇ!!　白鷺はバックアップしろ！」
「了解!!　雲雀1より全班員へ。突入先が特定され次第、出動するぞ！　全員、搭乗しろ!!」
「くそぉ…、電電公社の協力員はまだかッ！！！」
「調べさせてます!!　五分です！」
時計は、……午前九時まであと十五分足らずだ。
市内のどこに潜伏してるかわからないが、…場所によっては距離上の理由だけでアウトだ。
こいつは運頼みになる……!!
「馬鹿野郎ッ、五分じゃねぇ五十秒だッ!!　何やってやがんだ、端末に番号打つだけだろうが

ッ!!」
「来ました!! 住所は市内平坂一丁目ＸＸ番、ホテルモデラート！ 交換機を経由してるため、部屋番号は不明!!」
「聞こえたな雲雀ッ!!」
「了解、出動ッ！！！」
平坂一丁目なら幸運だ、ここからすぐ近くだ!! やはり読みは当たっていた。ヤツはすぐ近くに潜伏していたのだ！ 小此木造園の業務車両のシャッターが次々開き、白いワゴン車が続々と飛び出していく……！
「い野郎…。今度はこっちの番だ。まさか調査部に俺の子飼いが混じってるとは思わなかったろうよ…。……こっちが今度は貴様を奇襲してやるぜ…!!」
ホテルモデラート。…響きの割に安っぽい煤けた看板だった。場末のビジネスホテル崩れで、潜伏者にとってとても都合のいいホテルだったに違いない。
時代に合わせてラブホテル風に改装すれば少しは客足も見込めたのだろうが、改装工事のための資金的余裕はなく、いつ潰れてもおかしくない。…そんなホテルだった。その二階の一室に、富竹が潜んでいた。室内は、最初の富竹の宿に比べてもさらに貧相で、寝床と内線電話しかないという有様だった。……だが、その電話が富竹にとって今、唯一必要なものでもある。

定時連絡以外に連絡を取らないならば、富竹は宿を固定せず、常に移動し続ける方が安全ではある。…だが、調査部の進展を刻一刻と待ち、その内容によって対応が変ってくる現在の状況では、不必要な移動はかえって緊急の連絡を困難にしかねない。

………まさか、東京調査部の内側にもスパイが入り込んでいるなど、そこまでは富竹も考えが至らなかった。時計の針の音だけが室内に響き渡る。

もうすぐ九時だ。……だが、別に九時ジャストに電話がなければいけないわけじゃない。……富竹は焦らず、受話器の前で待ち続ける。電話で、誰が出て、何を聞かれても冷静に現在の状況を説明できるよう、要点を頭の中でまとめ、呼吸を落ち着ける。

…同時に、何かの手段で敵がここを嗅ぎ付け、襲撃してくる可能性も排除しない。その時、どこか遠くの部屋で女性の悲鳴が聞こえた。……何事かと思っていると、また遠くで、別の女性の悲鳴が聞こえた。ホテルの館内を覆いだす、ばたばたとした気配。

……直感する。何者かが、それも大勢で、マスターキーを使い、全室をチェックしているのだ…！　富竹はカーテンを細く開けて表を見る。…通りには数人の山狗隊員が立ち、ホテルからの退路を遮断(しゃだん)、包囲していた。……いつの間に!!　…やられた。ヤツらは自分の寝床を探り当ててきたのだ…!!　どたどたとした足音はすぐ隣の部屋から聞こえる。いや声も聞こえた。

「空室だ、次!!」

この安ホテルにチェーンはない。マスターキーを拒む手段はないのだ。退路遮断に割(さ)いてる人数と気配から考えて、敵は二十人近くいるだろう。いや、もっとかもしれない。抗戦は不可能だ。隠れるしかない!! ベッドの下? 風呂場? 映画のように簡単に天井(てんじょう)が開くわけがない。窓から外へ? ……ここは二階だ。飛び降りられない高さじゃない。

だが向こうもそれは警戒してる。でもここは市街地のど真ん中だ。脚力に自信さえあれば逃げ切ることも不可能じゃない……!! ついに富竹の部屋の前に、どたどたという足音が殺到する。

……もうこれまでだッ!! 窓から威勢よく飛び出し、階下に降り立つ富竹……! もちろん、山狗たちが待ち受けていた。いたぞと指を指し、六人ほどが猛烈な速度で駆けて来る! 富竹は降り立ったその体勢から低い姿勢のまま飛び出す!! 隊員たちは追いながら驚く。飛び降りたあの体勢からすぐにあれだけの速度で疾駆(しっく)できるとは……!

しかし富竹にとってはそれほど不思議なことじゃない。万が一のこのような事態に備えて日々体を鍛(きた)えているのだ。

「雲雀10より雲雀1!! 標的発見! 追跡中!! 応援求む!!」

「雲雀1より白鷺! 標的は裏通りを西に向かい逃走!! 制圧しろ!!」

「白鷺了解!! 白鷺2、3、4!! そっちへ行くぞッ!!!」

「……来たぞ……!! ヤツだ!!!」

富竹の前に、電信柱の物陰から三人の隊員が飛び出し立ち塞がる！　彼らは機関車のような重量感で突進してくる富竹との間合いを計る。相手は自分たちを倒そうと走ってくるのではない。自分たちを潜り抜けて逃げ去ろうとしているのだ。

ファイティングポーズなど何の役にも立たない。彼らは腰を低く落とし、一度に飛び掛かって重さで圧殺しようと目論んだ。

「今だ!!　うおおおりゃあああああ……！！！」

その低い腰からの飛び掛かりを、逆に飛び越えるように！　飛翔する富竹はまるでハードルを飛び越える陸上選手のようだった。だが、彼は陸上選手じゃないし敵もハードルではない。

……だから富竹の突き出された踵が正面の男の顔に、めりりと打ち込まれる!!　左右の二人は何とか富竹に組み付いたつもりだった。だが、富竹は突進の重量感からは想像もつかないくらい軽やかに身を翻すと、二人の顔面が互いに勢い込んでぶつかるように頭を抱え、猛烈な力を加えて打ちつけ合ってやった。この程度の攻撃で三人を沈黙させるには至らないが、彼らから逃れるには十分過ぎる隙を得る！

「標的、西側阻止線を突破！　追跡中!!」

「馬鹿野郎、何やってんだッ!!　白鷺10!!　車両で回り込め、二つ先のブロックを左折で、九時方向にヤツを捉える!!」

「大丈夫かッ⁉　くそぉおお‼　逃がすなぁ！！！」
「あンの野郎、何て馬鹿力だ…。クソ、鼻血が止まらねぇ…‼」
富竹の正面の十字路に、スライドドアが開きっぱなしのワゴン車が飛び込んでくる！　それはブレーキで止まりきれず、ブロック塀に側面を打ち付けるように停まると、中からわらわらと四～五人の隊員が飛び出してくる…‼
「是が非でも止めろ‼　後がないぞッ！！！」
「かかってきやがれ畜生めッ、こっちは五人だ！！！」
富竹の前方に待ち構える五人！　だが、富竹は自分がその五人程度で止められるとはまるで夢にも思わなかった。
……汽車の前方に人がいたら警笛(けいてき)を鳴らすのはなぜ？　汽車が傷つくからじゃない。相手が撥(は)ね飛ばされるからだッ‼
「うぉおおぉおおどっけえぇええぇえッ！！！」
その雄叫びはまさに機関車の警笛！　自分の邪魔だからどけと言ってるんじゃない。怪我(けが)をしたくなかったらどけと警告しているのだッ‼
「こ、こっちはこれだけ人数がいるんだ‼　体重だけ見たってヤツの五倍だぞ‼　それだけに圧し掛かられてもなおヤツを止められないってのか⁉　ありえない‼　ありえねぇ、絶対ここ

で止めろッ！！！　かかれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
不敵に、…いや、笑っていない。機関車は笑わないぃッ！！！
「ううおおおおおおおおおおおおおおッ！！！」
——富竹が如何に猛々しく戦い、そして華々しく散ったのか。それを記すには紙面が足りない。……あるいは割くほどの時間も掛けなかったのだろうか。
通信を受けた男は鷹野に振り返り、実に短くその顛末を伝えた。
「富竹の確保に成功しました。」
「本当!?　くすくす、あっさりだったわねぇ。色々と聞きたいことがあるわ。殺しちゃ駄目よ、こっちへ連行して！　どうせ殺すけど、彼には似合いの死がすでに用意してあるんだからね。…くすくすくすくすくす。」
その頃、……ホテルの富竹の一室では、部屋の主を失った電話が戻るはずのない主を求めて、いつまでも呼び出し音を鳴らせ続けていた…。

■入江ターン

両手両足を手錠で拘束され、猿ぐつわまでされた富竹が入江診療所の裏口に運び込まれたのは、それから三十分後のことだった。富竹は薬物でも与えられたのか、ぐったりとしていて動かなかった。それを隊員たちに抱えられるようにしてワゴン車から運び出されている。

…入江は所長室の窓からその様子に気付き、飛び出してきた。そこにはもう鷹野の姿もあった。

「……こ、…これは何事ですか鷹野さん。」

隊員たちが、無言だが厳しさを感じさせる目をぎょろりと入江に向ける。……来てはならぬところに来た、というのを肌で感じるほどだった。

「ジロウさんの姿が見えないと思ったら。何と末期発症をしていたのですわ。不審に思い、山狗たちに探させていて正解でした。」

「ま、末期発症…？　富竹さんがですか…⁉」

もちろん、ぐったりとしている富竹がそれに答えるわけもない。だが、入江はそれ以上を口には出さなかった。

「そうですか……。それはとても不幸なことです。すぐに治療薬を投与してください。」
「もちろんですわ。投与の間に合う段階だといいのですが。…くすくす。」
入江は理解していた。山狗たちが、内偵していた富竹を見付け出して捕らえたのだ。
富竹は東京と話を付けられたのか。番犬部隊を鎮圧に送ってもらえるように話を出来たのか。
……いや、多分出来ていない。
番犬が派遣されるという事態になれば、多分、彼らはその情報を察知する。そうしたらもう言い逃れなど出来る段階ではない。ここを放棄して逃走するはずだ。富竹を捕らえて地下に担ぎ込むということは、……まだそこまで至っておらず、事態をうやむやにして誤魔化せる程度の段階なのだということだ。
つまり、…富竹に私たちが期待したことが、完遂出来なかったのだ…。彼らは富竹をどうするつもりだろう。生かして連れてきたのだから、拷問にでもかけて何か情報を引き出そうとしているのか。危険だ…。このままでは多分、彼は殺されてしまう。彼に代わって今度は自分が何とかしなくてはならないんだ…！
入江が富竹を救出しなくてはならない最大の理由は、彼が「東京」への連絡方法を持たないためだった。鷹野は入江を形骸化させ、機関を牛耳るため、東京への連絡方法は機密であるとし、入江に連絡方法を明かしていなかったためである。そのため、入江は東京からの電話を

受けることはできても、鷹野を経由せずに連絡を取る方法を知らなかったのだ。
つまり、…富竹がキーマンであることに代わりはなく、…富竹を救出する以外に勝ち方がないのである…。しかし、自分は山狗のような特殊部隊でも何でもない。ただの医者で研究者だ。非常召集がかかり、セキュリティが最高まであげられた研究区画から彼を救出するなど、とてもできやしない……。ここには、診療所警護のため、保安要員の山狗が八名もいる。……普段は多くても二名なのだが、鷹野さんが非常召集をかけたため、見たこともない人数が詰め込んでいるのだ。もちろん地下の研究区画は厳重なセキュリティが施されていて、パスカードがなければ入ることも出ることもできない。……つまり、パスカードを持つ、彼らの息のかかっていない人間、…つまり、入江にしか富竹を救助することはできないのだ。パスカードの認証の他に指紋による個人認証も並行する最新式のセキュリティだ。だからこのパスカードを誰かに譲渡（じょうと）しても意味がない。
このカードを持つ、入江にしか、地下区画から富竹を救出できないのだ。だからこそ、……いくら無理でも、…入江がやらなければならない…。入江は自らの勇気を振り絞ろうと、両拳を作ってぐっと握り締めたが、自らの震えに気付かされるだけだった。
……………入江。忘れましたですか…？
その時、入江は以前、赤坂に受けた忠告を思い出す。

自らの危機を測るのはとても難しいことです。まだ大丈夫、多分大丈夫などと思っている内に連絡の機会さえ逃してしまいかねません。…少しでも嫌な予感がしたら緊急時と判断していいでしょう。…陰謀の度合いから考えて、敵は私たちを生かしはしません。くれぐれもご用心を。

入江の背中を冷たい汗が一滴、すーっと流れる…。赤坂に言われた緊急時とは、…今のことではないのか。まだ大丈夫なんて甘えが、自らの逃げ出す余地さえ失わせる…。……そうだ。ここで私が勇気を出したとしても、それは蛮勇でしかない。自分の手元にはパスカードがある。……だからと言って、自分一人で救出しなければならないわけじゃない。…みんなが力を合わせているように、自分もみんなの力を借りるべきなのだ。

そして、富竹が捕まったということは、……すでに山狗が自分たちへの攻撃を認識し、反撃に転じていることを示す。いや、今や自分に疑いの目が向けられていても何もおかしいことはないのだ。

梨花の家に山狗たちが一度踏み込めば、自分がついてきた嘘は瞬時に暴かれる。……そう。今が赤坂の教えてくれた、緊急時なのだ。入江はそれを判断する。…すでに自分に危険が迫っているのだ。……今すぐここを脱出した方がいい。非常時の集合場所は園崎家だ。園崎家に味方は集まる。状況を話し、富竹救出の作戦を練るべきなのだ。多分、鷹野さんはすぐには殺さ

ない。……五年目の祟りになぞらえて今夜に殺すつもりだ。だから時間はわずかだがある。

　こちらには他に味方もいるし、パスカードを持つ自分もいれば、まだ救出するチャンスは残るのだ。なら、自分が脱出することを赤坂にも連絡しないと…。自分が疑われれば、あの家には誰がいるのか、ということになり赤坂にも危険が及ぶ。……連鎖的に危険が起こる可能性が高い…！

「…………………………。」

　こうして入江は、見逃しかねなかった、最後の逃走のタイミングを見誤らずに済む。…逃げる前の最後の仕事だ。入江は所長席の受話器を取り、梨花の家の短縮番号のボタンを押してから受話器を脇に置き、掛けっぱなしの状態のまま放置した。

……このまま、ずっと鳴らし続けるのが緊急事態の連絡なのだ。入江は、あと何年この所長室で執務をすることになるのかと感慨（かんがい）にふけったことがあるのを思い出す。

　まさか、この部屋を去る日が、こんなにも唐突に訪れるとは思わなかった…。常に卓上に置いていた両親の写真立てが目に入る。……父と母の誤解を解き、……家族愛を取り戻すために足を踏み入れたこの世界だった。…それが、……いつの間にこんなことに巻き込まれるような道に入ってしまったのか。

　いや、……またきっと帰って来る。そして私は再びここで執務をし、…雛見沢症候群という

不幸な病気を撲滅するため、戦い続けるのだ。…私は、その責任を絶対に放棄したりしない…！

「……必ず戻って来るよ。……父さん、母さん。」

入江は最後の別れを残し、所長室を後にした。

セキュリティルームで、いくつかのランプが瞬く。それが意味するところを山狗のひとりが甲高い声で告げる。

「……三佐。所長室の内線から外線へ通話中です。…電話番号は、……R宅です！」

「え？　………どういうこと、それは？　盗聴できるの？」

「もちろんです。ここでもモニターできます…！」

隊員がコンソールをいじると、室内スピーカーから電話の呼び出し音が聞こえてきた。

「……一体、このタイミングで入江所長は何をあの家に電話しようというの…？」

「…やはり、Rは在宅していて、富竹を捕らえたことを連絡しようとしているのでは。」

「…………ありえないことじゃないわ。……くすくす、聞かれてるとも知らずに。」

さぁ、何を話すというの入江。…話してみなさいな、聞いていてあげるから。…しかし、呼び出し音がいつまでも繰り返される。もう三十秒近くは鳴らしているだろうか。…出ない。

……やはり留守なのだろうか。

「……所長も根気がありますね。……必ずいるはずだという強い確信があるのでしょうか。」

「さ、三佐!!　裏口のモニターカメラに所長の姿が!!」

四分割された白黒の監視モニターには、裏口の扉から駆け出していく入江の姿が映っていた。

「……どういうことッ!?　じゃあ誰が所長室から電話をしているの!?」

鷹野が混乱している間にも、延々と呼び出し音が聞こえ続ける…。

……まさか………！　鷹野は自分の瞳孔が開いていくような感触を覚える…。

「罠よッ！！！　ヤツは私たちが監視しているのを知ってて、わざと空電話をかけて油断させた!!　入江は裏切り者の仲間よ!!　捕らえてッ！！！」

「い、一階保安室ッ!!　入江所長を制圧せよ!!　標的は裏口から職員駐車場へ!!」

一階保安室でトランプに興じていた二人は、カードを飛び散らせながら保安室を飛び出す!!

彼らの保安室は裏口のすぐ脇にあったから、入江はまだ捕らえられる距離内のはずだった。

……一方、入江のミスは致命的だった。鷹野たちが電話に耳を澄ませている最初の三秒で診療所を脱出できたのだ。

だが、一度は駐車場まで辿り着いた入江は、車のキーを所長席に忘れていたことを思い出し、取りに戻ってしまったのだ。キーを忘れたにしても、今さら戻るべきではなかった。徒歩でそ

のまま脱出するべきだったのだ。
……だが、入江は赤坂のように緊急事態に慣れているわけじゃない。生まれてこの方、一度も危機にあったことがない一般人として当然のミステイクだった。二重にミスを犯しながらも、それでも赤坂への連絡を忘れなかったことを褒めるべきだ。こういう時に限り不器用になってしまうのは焦る人間の悲しさだ。普段はただひねるだけのキーなのに、ただそれだけのことができず、焦ってしまう…！　ドルルルルン!!　ようやくエンジンが着火する…！
大丈夫だ、自分が脱出するのはバレていない。バレたって、ちょっと買い物にでも行くと言って誤魔化せばいい…。そんなことを考えながら、嫌な汗でぐっしょり濡れた左手でサイドブレーキを下ろした時、バックミラーに裏口が荒々しく開けられ山狗が二人飛び出してくるのが見えた。彼らはきょろきょろと見回し、……その一人とミラー越しに目が合った気がした。バックミラーの中の一人がこちらを指差し、二人が駆けてくるのが見える。その表情はこれ以上なく真剣で、間違っても、拾った落し物のボールペンを持ってきてくれるようには見えなかった。
「……ふ、……うううううぅぅぅ…!!」
入江の全身から、これ以上まだ出るのかというほど、嫌な汗がぶわっと湧き出る！　彼らが車に飛び乗る前に、入江の車はホイルスピンしながら急発進した。もちろん敵はそれで肩を落

としたりはしない。すぐに自分たちも車に乗り込むと追跡を開始した。
「……保安より本部！　所長は車両で逃走中。強制停車させますか、どうぞ！」
「三佐…！」
「……鷹野よ。恐らく行き先は古手神社ね。神社に行かれたら今日は人だらけ、捕らえることは難しくなるわ。多少の怪我も構わない。行かせては駄目ッ!!　強引に停車させなさい…！」
「保安了解。これより強制停車に移る。念のためバックアップを送れ、どうぞ。」
「本部了解。鶯をバックアップに送る！　だがバックアップは待つな！　直ちに制圧せよ!!」
入江の車がタイヤに悲鳴をあげさせながら疾走させているのを、追う山狗の車は完全に前方に捉えていた。あとは仕掛ける場所とタイミングを計るだけだ。車というのは悲しい。アクセルを深く踏めば速い速度が出るのは間違いない。…でも、焦るハンドルでは、必ずしも速く逃れられるとは限らないのだ。入江はバックミラーに映る追っ手にすっかり取り乱し、大味なハンドルを切っていた。……このまま追っ手に煽られていれば、彼らが仕掛けずとも単独で事故を起こしかねないくらいに、そのハンドルは乱れていた。
また、恐怖心が頭を真っ白にしてしまい、…こんなにも長く走ってきた道なのに、混乱していつもと違う場所で曲がってしまったのである。…その一つのミスがますますの混乱を誘い、入江を焦らせていく…！

「へへ、所長、そんな運転じゃ危ねぇぞ。一発で免停だぜ。」
彼らは仕掛けろと命じられているが、このまま追っている内に勝手に事故ってくれるのではないかと思い始めていた。…できることならカーチェイスの真似事はしたくないのだ。
「ザザ、ザ、……追跡中の保安車両へ。こちら鳳1、聞こえるか。」
「隊長だ！　…こちら保安車両。現在追跡中。現在位置は五丁目付近林道、詳細な位置は不明。」
「…本部要請につきバックアップに向ってる。到達予定は十五分後。こっちはアテにするな。俺だって間に合うわけねぇと思ってんだ。」
小此木がぼやく。彼の言うところの三佐のお姫様に命じられて興宮から飛び出してきたのだ。だが、距離的に間に合うはずがない。
それでも出動しろと命令を受けたらしい。……それを説明してわかってくれるお姫様ではない、ということなのだろう。追跡者の隊員たちはその事情を察し苦笑いする。
「追跡の方角は。」
「最悪の場合、町の方へ抜けます。」
「そいつは許すな。山狩りはしてやる、足を破壊しろ。そこに人目は？　武装は？」
「両脇は深い森林です。人目はなし。武装は保安車両常備の短機関銃が1。」

助手席の隊員がリクライニングを倒して後部座席に行き、シートを持ち上げると、そこから黒く華奢そうな銃が現れる。角の塗装が剝がれ一部に銀色を光らせていた。機関銃という名にしては迫力不足、に見えたかもしれない。

…だが、隊員がショルダーストックを伸ばして構えると、それは雰囲気を一変させ、この上なく凶暴な外見に豹変した。

後部座席の隊員がバックミラーに銃を構えてみせ、特異な太く長い銃身を見せる。

「保安常備はMP5だな。A5か？　3か？」

「3です。サイレンサー付き。」

「発砲を許可する。フルバーストでタイヤを破壊しろ。」

「保安車両了解。攻撃する。」

後部座席の男が運転手の後方の窓を開けて身を乗り出した。獲物を狙う鷲のような目が、照準と入江の車のタイヤを重ね合わす…。道は一直線。入江の車は多少の蛇行をしているが、その程度では回避運動になりはしない。まさに追跡者たちは、入江の車を完全に捕捉していた。

少しでも集弾するため車間距離を縮めたいところだが、あまり寄せすぎれば、入江の車が横転するなどした時、巻き込まれかねない。これ以上、詰めるのは危険だった。

「3カウントで発砲する。3、2、1。」

シュカカカカカカカカッ！！！　誰もが期待する銃声とは違う、滑稽なくらい軽い連射音が響き渡った。

だが、軽いのは発砲音だけでその威力と連射力は別物だ。狙われた入江の後部タイヤが細切れに刻まれていき、見る見る内に白煙を噴いて潰れてしまう…！　瞬時に後輪の片側を潰され、入江は大きくハンドルを取られた。…焦って大きく切ったハンドルが余計に事態を致命的にする…！

入江の車は大きくスピンしながら路肩を外れ、勾配の浅くない林の斜面を転げ落ちていく…！

「わあああぁあ、うわああああぁあぁああ！！！」

バサバサバキバキと木立をへし折る音と、車体が潰れたりガラスが砕ける音が、斜面の下へと消えていった。追跡者たちは車を停め、斜面を見下ろすが、草木が深くその状況をここから確認するのは不可能だった…。

「攻撃成功。標的車両は斜面を転落。死亡の可能性もあり。これより徒歩で追跡、制圧する。」

「鳳1了解。鶯が周囲を探し回ってるぞ。運が良ければ合流するだろ。こっちは相変わらず間に合わん。お前らが頼りだ。頼むぞ！」

「了解、交信を終わる。…行くぞ!!」

隊員は降車し、戸惑うことなく茂みの中に飛び降りていくのだった。

■赤坂ターン

赤坂は、入江が送った電話によるメッセージを聞き取り終えていた。三分間鳴りっ放しのメッセージ。入江に危機があり、なおかつ、ここにも危機が迫っている可能性も知らせるものだ。…鷹野はミスを犯していた。まさか、呼び出し音だけでメッセージになるとは想像しなかったのだ。これだけ長く鳴らしているのだから、そこに潜む居留守を使う何者かが緊急事態だと思って受話器を取る可能性を考えていたのだ。

……その読み違いが結果的に赤坂に重要なメッセージを伝えることを許してしまう…！　ぎりぎりの三分ジャストまでその呼び出し音を聞き終えた赤坂は、素早く扉を開けて階下に駆け下りる。すでに靴を履き終えて電話が鳴るのを聞いていたのだ。赤坂は電話台にあった町内地図から村のおおよその地理の吸収を終えていた。ここを出てから園崎家までの最短ルートと、万が一、それが通行できなかった場合の予備ルートを含めて頭に叩き込んである。ここから家の住人でない男が突然現れれば、見た人たちは驚くだろうが、今はそれに構う時じゃない。大至急、園崎家に向かいみんなに合流する時だ…！

それよりも、ここを未だ監視し続けている敵に自分の姿を見られることが問題だろう。追ってくるに違いない。この部屋に誰もいないと知れば、行方を逃げた男が知っていると思うのは当然だ。ここを飛び出せば、直ちに戦闘態勢。……赤坂は一度肩を回してから、表への扉に手をかけた…。

「……三佐、R宅の監視班からです‼　R宅から不審な男が飛び出しました。」

「男？　何者⁉　……ど、どうでもいいわ、追って捕らえてッ‼」

「監視班了解、追跡開始。制圧する…！」

時間はまだ午前の十時にもならない。…今日の祭りのため、出店や催しの関係者が次々訪れ準備を始める賑やかな朝だった。その人の波を逆走し、境内からの階段を駆け下りていく赤坂。その後を追い、同じように人の波を逆走する山狗たち…！　楽しい祭りに心を浮き立たせる村人たちと、赤坂たちの真剣な形相があまりに対照的だった。

追跡者が人々の肩を弾きながら追ってくるのを、赤坂は耳にしていた。振り向かずとも追っ手の存在を把握する。赤坂は呼吸を停止し、五感を最大限まで研ぎ澄まし、全力のさらに上を行く全力で疾走した。逃走の成功率は相手との距離に応じて二次関数的に高まる。わずかの距離でも有利になるッ‼　突風のような速度で石段を駆け終えると、園崎家とは逆の方向へ向う。……もちろん、これはミスではない。追っ手の追跡を撒くための計略だ。

「……や、……野郎、……何てスピードだ…!!」
「ヤツは……韋駄天(いだてん)かよ……!! はぁ、はぁ!!」
監視の山狗たちは心構えが出来ていなかった。中からこれほどの猛スピードで逃げ出していく成人男性などまったく想定していなかったのだ。
中にいるのは小さな少女。……そういう思い込みが完全に油断を招いた。ましてや赤坂の身体能力は常人とは比べ物にならないのだ。虚まで突かれた彼らに追いつける道理はない。完全に遅れた山狗たちは、赤坂の引っ掛けにまんまと掛かり、逆の方向へ逃げたと本部へ連絡し後を追う。
赤坂はもう少しの時間がもらえれば、彼らを十分に攪乱した上で撒ける完璧な自信があった。いや、それどころか彼らを個別撃破し、人数を減らす自信だってある。追っ手は三人? いや、恐らく四人だ。………心技体、三つが全て最高のコンディションにある自分なら可能だ。自分の過大評価は危険だが、赤坂はすでにその未熟なレベルは卒業していた。
目的地と的外れな場所で激しい抵抗を見せ、増援を送らせることは彼らに人員の浪費を強いることが出来るだろう。だが、入江の電話メッセージの真意はわかっていない。緊急度は決して低くないのだ。かくれんぼにかまけていないで園崎家へも急がなくてはならない。赤坂は疾駆しながら冷静に黙考する。……彼らを撃退し、さらに園崎家へ急げるか? 背後の追っ手は

息を切らせながら縦に長く広がって分散してしまっているようだった。四人と同時に戦うのは簡単ではないが、一人と四回戦うのは話が別だ。……赤坂は充分な勝機を算出できると、息を大きく吸いなおしてから、電信柱に掴まり、ぐるりと一回転して今自分が駆けてきた方向へ一気に逆走する!!

「…………………んなッ⁉」

突然、逃げていた相手が逆走してきたことに山狗は面くらい、応戦の構えを取ったが、……その未熟な構えに対しどう打ち込み、何撃目で沈黙できるか。…赤坂がそれを完全に脳内でシミュレートを終える時には、まだ六歩も間合いを残していた。

だがそのシミュレートは外れる。…徹甲弾（てっこうだん）とまで恐れられるその鉄拳の初弾を、顔面でまともに受けて、二の太刀が必要だとでも⁉　先頭の男が宙に浮いている間に、次の徹甲弾は後続の二人目に火を噴いていた…。

その頃。

……転落して潰れ掛けた車の中で、入江は意識を取り戻していた。

セミの合唱だけが聞こえる……。

はっと入江は我に返った。

……転落の衝撃から入江が立ち直るには少々の時間が必要だった。律儀なシートベルトをする習慣が彼を軽傷で済ませたのは間違いない。だが、シートベルトの金具が歪んで解けなかったり、ドアが歪んで開かなくなるといった事態にならなかったのは、大変幸運だったと言えるだろう。そこは、斜面下の、別の林道の傍らだった。入江は痛む体に歯を食いしばりながらシートベルトを外すと、車を降りた。今、自分が転げ落ちてきた斜面の深い茂みを、がさがさと人が降りてくる音が聞こえる。

……追っ手だ…！　自分はここで捕まるわけにはいかない…。自分が捕われれば、外部から富竹を救出することは不可能になる。…いや、それどころか、富竹が診療所の地下に捕らえられていることすら、誰にも伝えられなくなってしまう…！　自分に力はなくとも、…あっさりと捕まるわけにはいかないのだ。悔しいが、……こうしてヤツらに逆らい、一秒でも長く逃げ延びることが…今の私にできる唯一の抵抗…。だが、こうして駆けてみてわかる。……すっかりさっきの転落で全身の力が抜けてしまい、膝はがくがく震え、目の前がぐにゃりと歪むような錯覚さえする。ただアクセルを踏んでいただけなのに、肺は爆発しそうで、頭は酸欠状態だ。緊張状態が途切れた直後に来る、ある種の脱力状態に違いない。……理屈でそれがわかっていても、体を緊張状態に戻せない…！　それでも、一歩でも遠くへ逃げようと、のたのたと走る。

背後で、がさがさ、どさどさ！　という茂みの斜面を駆け下りる音が聞こえた。
…年貢の納め時だ。…そう思ったが、それでも、奴らに取り押さえられるまで走り続けるのが抵抗なのだ…。
「保安より本部。発見した。負傷している模様。制圧する。」
無線でそう伝える声が聞こえる。…………く、どうすればどうすれば…！　逃げなきゃ…、逃げなきゃ…ッ!!

「む〜ねにき〜ざむは退却魂〜♪」
「詩音さん、さっきから歌ってるその歌は何ですか？」
「あれ、知らない!?　流行ってると思ってんだけどなぁ！」
「すみません。流行には疎いもんで。…………ん？」
前方に無惨な事故車両の姿が見えた。…しかもまだ薄っすらと白煙を吐いていて、ついさっき事故があったかのようだった。
葛西は念のため速度を落とした。
「どしたの？　ぅわ、……ひゃぁ、やっちゃったですねー！　って、あれ、監督じゃない!?」
車を停める。そのブレーキ音に入江は過剰に驚き、飛び退くようにして尻餅をついた。

そのヨレヨレの様子から、入江が事故の当事者であるのは疑いようがなかった。
「はろーん、監督！　まさかあれ、監督の車ですか⁉」
「……し、………詩音さん…。」
「大丈夫ですか、入江先生。………すぐ医者へ行かれた方がいい。」
「監督を診療所に連れてって、監督が自分で診察するわけですね。あははははは。」
「さぁ、立てますか？　診療所までお連れしましょう。」
「…し、……診療所は…こ、こま、……困ります…。…園崎家に行かな、…………う………。」
「監督⁉　監督ぅ‼　ちょっとどういうことよ⁉　まずいんじゃない⁉」
葛西は、入江の車両を見てから、辺りの様子を探るようにきょろきょろする。
それから詩音にだけ聞こえるように小声で言った。
「詩音さん、訳ありのようです。」
「……どしたの？」
「入江先生の車に弾痕が。しかも拳銃とは思えません。」
「マジ？　………そっち持って。ひとまず本家に連れて行こう。」
二人は入江を後部座席に押し込むと、すぐに乗り込み、急発進した。

「監督に話を聞かないと状況がわかんないですね。……診療所は困る？　どういうことだろ。」
「診療所の何者かに追われた、と見るのが今は妥当でしょうが、話を聞くまでわかりません。ただ、相当のヤバイ事に巻き込まれたのは間違いないようです。」
「…あれッ⁉　どこ行くの⁉」
葛西が、妙な道で曲がったので、詩音はどこへ行こうとしているのか混乱した。
「……敵は先生のタイヤを狙ってました。生かして捕らえるつもりです。私たちのすぐ近くに追っ手が迫っていたかもしれません。」
「ってことは追ってきてる⁉　…後方に車影なし、上空に機影なし。この地形じゃ密着尾行以外は不可能でしょ。」
「念のためです。もう一度だけ左折したら本家へ直行します。申し訳ありませんが、詩音さんは後方監視をお願いします。」
「了解です！」

「………保安より本部。標的は民間車両に拾われた模様。車両ナンバーと車種を送る。」
「本部了解。捜索中の鷹は民間車両に標的を変更。至急捜索せよ。入江所長は極力、生きたままで確保。接触民間人も制圧せよ。ただし生死は問わない。」

「大丈夫なの、すぐに見付かるの⁉」
「ご安心を。所長の白衣には発信機が。鶯の応援車両には測定器が積まれていますので、三角測定法で位置を検知できます。」
後部座席でぐったりしている入江の白衣。
……その後襟の裏側に小型の発信機が取り付けられていたのだ。保安部のかけた、万が一の保険である…。
だから、尾行がないか懸命に目を凝らす詩音の努力と無関係に、彼らの車はすでに捕捉されていたのだ。
「鶯3、標的車両を発見。……水車小屋の前を小道に入った。」
セキュリティルームの卓上に広げられた雛見沢の地図。
…水車小屋の小道を入れば、……そこはすぐに私有地。園崎本家の敷地で、その先には園崎本家しかない…！
「三佐…！」
「くすくすくす…。あらあら、袋のネズミねぇ。」
「こちら鳳1。鶯、まだ突入するな。もうじき鳳が合流する。合流してから一度に突入するぞ！」

「鶯1了解。」
「小此木！　鶯にさっさと突入させないと相手に無駄な時間を与えるわよ!!」
「……ザザ、ザ、感度悪し、…………ザザ…。」
「…く………、誰も私の言うことなんか聞かないんだから…！」

園崎家の地下には、セキュリティ機能も与えられていて、園崎家の敷地内に点在する監視カメラの映像をここからでも見ることができた。
もっとも、入江機関のセキュリティルームのようにハイテクではない。合掌家屋の中二階のような、膝立ちでなければ頭をぶつける和風な小部屋の押入れの中に、のたくった配線の束とモニターテレビが置かれているという、まるで隠し部屋のような感じだった。ここには電話もあり、電気もあり、地下でありながら園崎家の基地機能を凝縮した空間だった。最初の内は部活メンバーもこの部屋で興味深くモニターを見ていたのだが、さすがにこの狭い部屋で全員は暑くて息苦しい。
魅音とレナだけが残り、用心深く監視を続けていた。
「魅ぃちゃん、何だろう、車が入って来たよ？」
「これは……、葛西さんの車だね。多分、詩音でしょ。今日の祭りに合わせて遊びに来たって

ことだろうね。ったく何でこんな日にー！　空気の読めないヤツ～！」
婆っちゃは朝一から神社の本部テントに行ってしまっている。だから上の本宅は無人だ。
自分がのこのこと出て行かなければ、詩音は私を留守と思うだろう。…んー、詩音にも事情を話した方がいいだろうか。……あの子、いざって時は案外、頼りになるし…。……んー。
そんなことを考えてる間に葛西の車は門の前に停まり、人影が降りてきた。
「……あれ!?　魅ぃちゃん、あれ、監督だよ!?」
「え！」
カメラには、葛西と詩音に両肩を抱えられて足取りもおぼつかない白衣姿の監督が映し出されていた。どう見ても、何か大変なことがあったのは明白だ！
「い、行ってみよう!!　レナに圭ちゃん、一緒に来て!!　沙都子たちはここでモニターの監視ッ!!　梨花ちゃんは表に出ちゃ駄目だよ！　羽入はそれでも出てかないよう梨花ちゃんの監視!!」
「お任せですわ!!」
「なのです！」
「…みー、ひどいのです。」
……これは小此木の判断の勝利だったかもしれない…。もし鷹野が急かすように鴬の追跡隊

が間髪入れずに追っていたら、それはモニターに映っていたからだ。だが、小此木が後続と合流するまで待てと指示したから、すぐに追わなかった。…そのため、彼らがすでに捕捉されていて、追っ手が突入してくる直前であることを見誤ってしまう…！

実はこの頃、水車小屋の前には何台もの山狗の車両が待機し、鳳1こと小此木も合流して、まさにこれから突入しようという段階だったのだ。だが、それでも沙都子をモニター前に残した分だけ冷静だった。それに、地上へ出なければ入江を見殺しにすることにもなる。

この時点で魅音は知らないが、富竹を救出するためには入江の存在が欠かせないのだ。…だから結果的にこれはベストだったのだが…。

「お姉ぇ〜〜、お姉ぇえ——‼　…もう神社の方かなぁ？」

「詩音んん————‼」

「お姉たち、どっから来てんですか。さては地下にいましたね？　あそこで遊んでるって鬼婆に言いつけますよ〜？」

「んなことはどうでもいい‼　監督は⁉　監督ッ‼」

「まさか、やられたのか⁉」

「……ってことは、お姉たちも訳ありのようですね。何が起こってるんです？」

「し、詩ぃちゃん話すからよく聞いて！　えっと、実はね…‼」

「監督…‼　何があったんですか…‼」
「……うぅ、…すみません…。富竹さんが山狗に捕まりました。診療所の地下区画に捕われているようです。……私は、逃げる時にヤッらに追われて、事故を起こしてしまい…。」
入江は苦しそうにしながら一部始終を説明した。みんなは無事を喜ぶが、魅音だけがすぐに表情を強張らせる。そして詩音に聞いた。
「…追われてる⁉」
「尾行はなかったッ！」
「……とにかく中へ。良くない雲行きです。」
車が近付いてくる音が聞こえてくる。それも一台じゃない…！
こんな時間にこんな大勢誰だろう。そんな場違いな想像は今さら無用だった！
「つけられてんじゃん、詩音のばか―――‼」
「つけられてないもん、お姉のばか―――‼」
葛西は、この期に及んでたくましい姉妹を両脇にひょいひょいと抱えると門の中に飛び込む。
「地下へ急ぎましょう。あそこなら安全です…！」
「み、魅音さん～～‼　変な車がいっぱい、いっぱい来ますわよー！！！」
「わかってる‼　地下に戻って‼　扉を閉めるよ‼　梨花ちゃんは⁉」

「羽入さんと一緒に、隠し部屋に入りましたわ!!」

「鶯6、標的を発見。Rの友人数人も一緒です。」

「……………くすくすくす！　間違いないわ、Rはそこに潜んでいるのよッ!!　そうよね？　ジロウさん？」

「……………………………く。」

セキュリティルームの床には富竹が寝かされていた。

両手両足の手錠をさらに繋ぎとめるように手錠をされたため、後ろ手にえび反り状態という辛い姿勢でうつ伏せにされている。この無様な状態では、起き上がることはおろか、寝返りだって満足にできない。鷹野は勝ち誇ったように笑うと、つま先で富竹の脇腹をくすぐるように突っつくのだった。

塀を軽々と山狗たちが越えてくる。…もうこの段階に至っては何の説明もいらない。彼らが敵で、何度も梨花ちゃんに聞かされていた山狗であろうことは明白だった。森の木立の中を駆けぬけ、窪地にある地下祭具殿の入口を目指す…!!　先陣を切った五人の山狗が、彼らを一人残らず捕らえるつもりだったが、…一人、また一人と転んで脱落する。

隊員の一人は、何をドジっているのかと訝しがった時、自分の足に何かが引っ掛かり、宙に舞うように転倒した。
「くっそぁあぁぁ…！！！」
立ち上がろうとして再び足を引っ張られる。…いつの間にか、ロープの輪が足に巻きついているではないか…！
しかも盛大に転んだ勢いでそれは締まり、容易には解放しないと強い意志を見せている…！
「…ちゅ、注意しろ！　ブッシュは対人トラップだらけだッ!!」
茂みの中に偽装した沙都子のトラップがあちこちに仕掛けられていたのだ。…沙都子ともあろうものが、これほどの敷地を与えられて、丸一日何もしないわけがない!!　部活メンバーたちは地下祭具殿の扉の中に次々飛び込んで行く。それが見えているのに、何の手も講じられず、歯噛みする罠にかかった山狗たち！
「閉めるよッ!!　みんな力を貸してッ!!」
「せぇえぇぇのぉおおぉぉ！！！」
重い扉も、この人数が力を合わせれば軽々だった。魅音は素早く鍵を掛け、さらに重そうなかんぬきも掛けた。
「……これ、大丈夫かな、破られないかな、かな！」

「テレビには五台、六台、いえもっと映ってたかもしれませんわ！　全部、ワゴン車で中には変な男たちがいっぱい!!」

「簡単には破られないでしょうが、荒事に慣れている連中です。過信しない方がいいでしょう。」

それを言い終わらない内に、扉が外からドンドンと叩かれる。後続の山狗たちが殺到してきたのだ。

……この重い扉越しであっても、敵のすぐ近くにいるというのは心理的に落ち着かない。

「…私の失態で……。すみません…。」

「監督は何も失敗してないですよ。とにかく奥へ行こう！」

「そうだな、監視カメラの様子で敵の人数を探ろうぜ！」

「あーはいはい、私ゃ除け者で事情もわからずいきなりクライマックスですよハイ。」

「あーも～!!　あんたにゃ五分時間が出来たら全部説明するからッ!!」

「鶯1より鳳1。標的は防空壕のようなところへ逃げ込んだ。扉は鋼鉄製、突破できない！」

「鳳1了解。…この園崎家ってヤツぁとんでもない金持ちだな。敷地が広すぎて包囲は不可能だ。包囲は断念、俺たちも突入に加わるぞ。鶯はその辺の倒木を探せ。槌にして扉をブチ破

る。」

「鳳7より鳳1。インドア用のプラ爆があります。準備しますか？」

プラスチック爆弾は工兵などが使う軍用の爆薬だ。

様々な用途に使えるが、彼が言っているのは、開かないドアを破壊するのに特化した形状のもの、という意味だろう。小此木もそんないいものがあったかと手を打ったが、すぐにその考えを引っ込める。

この谷間の小さな村で爆音がすれば、誰だって何かあったと気付くだろう。日中、そして地上、本来なら山狗にとってもっとも活動しにくい時間と場所なのだ。

「……さすがに爆破は無理だな……。………ん？　いや待て！　今、何時だ!?」

「もうじき十時です。」

「…………使えるぞ…。鳳7、やるぞ、信管を準備しろッ!!」

「は!?　隊長、どうして十時だと爆破が可能なんですか!?」

…小此木は普段の投げやりな様子からは想像もつかないくらい、思考が冴え渡っていた。そうだ、間違いない。…行けるぞ!!

窮屈な隠し部屋にみんなが殺到する。

「みんな、大丈夫なのですか…‼」
「……あぅあぅ、監視カメラを見てましたのです。敵は多分、三十人くらいいますのです…！」
「そんなにかよ…、へへ、やってくれるぜ…！」
「ちょっとスイッチをいじるよ？　ははは、連中、立ち往生してるよ！」
魅音がテレビの下のスイッチをいじると、この地下の入口が映る画面に変わった。何人かの山狗が扉をさすったりしているのが見える。それは乱暴に打ち破ろうという様子ではなく、開ける方法がなく途方にくれているように見えた。
「……向こうはどう打って出るでしょう。」
「こっちを袋のネズミと思ってますもの。多分、大勢で体当りでもして無理やり破る気ですわ！」
「何だこいつら、丸太なんか持ってきて⁉」
「…どうやら、あれで扉を打ち破ろうとしているようです。」
「……今、沙都子が袋のネズミだと言いました。…なら、相手が扉を開けようと苦闘している間にここを脱出するべきだと思います。」
「同感です。それに、…富竹さんも助け出さないと…。」

「そうだね。いくらここの扉が厚くても、敵に見付かったら価値はないと思う。…私も脱出する時だと思うな。」
「お姉、この状況なら、もうとっくに警察に電話できる段階じゃありません？」
「だねぇ。一番最初の市民の権利を忘れてたよ！　仮に警察のスパイに電話を聞かれたとしても、もうこの段階ではバレバレだしね！　大石さんが駆けつけてくれるはずさ！」
魅音は余裕たっぷりに受話器を取る。…今ここで頼れなくて何のための警察なのか！
「…………ん？　…………あれれ？」
「…どうした⁉」
魅音の表情に焦りが浮かび、やたらと何度もフックを押してから受話器に耳を当てるが、…その焦りが収まる様子はなかった。
「…電話が、……何で⁉　ウンともスンとも言わない！」
「……ケーブルが切られたかもしれません。」
「ぅわッ⁉⁉」
突然、真っ暗になった。
「…………な、…何だろ、停電⁉」
葛西がライターの灯り(あか)を点ける。魅音も非常用の懐中電灯を点けた。

「地下の弱点を突かれたね…。」
「……でも、これだけ暗ければ敵だって簡単には…。」
「わかんないけど、多分、暗闇でも見える機械とかあるんじゃない？　……持ってそうよね、あの連中…。」
「魅音さん、どうして敵は電気を切断しましたの？　ただの嫌がらせ⁉」
「…………嫌がらせ以上の意味があるとすれば、………ここのセキュリティを殺すこと？」
「あいつら、扉を撫でてましたの‼　諦めたんじゃない。あっと言う間に壊す方法を持ってて、それを気取られないためにカメラを殺そうと、それで電気を切ったんじゃ…！」
「まっさか、………爆破する気ッ⁉」
「ってことは扉は一瞬で破られて、………ここにもう砦の価値はねぇってことじゃねぇのか⁉」
「魅ぃちゃん！！！　今すぐにここを脱出しよう！　さっき言ってた隠し井戸の脱出口を教えて‼」
「……こっちです、みんな‼」
魅音のコンピューターがわずかの混乱でノイズ混じりになる。……魅音は決して山狗を過小評価したわけじゃない。
爆弾を持ってるかもしれないことは想定した。……でも、真昼間（まっぴるま）の雛見沢で爆破なんてでき

るわけがないと思ってた。
　絶対に誰かに音を聞かれる！　音を聞かれない爆弾なんてあったっけッ!?
「荒っぽい連中なんだろ…！　多少の危険は顧みないのかもしれないぜ。」
「…確かにこんな事態ですが、……山狗は非常に慎重な方々です。こんな真昼間に爆弾なんて、……鷹野さんならともかく、あの小此木さんが許可するはずない…！」
「それでもブチ抜こうってのかい…!!　いい度胸だよ!!」
「レナはわかんないんだけど、音がしない鉄砲があるように、音がしない爆弾ってあるの？」
「ないです！　どんな爆弾もみんな似たような音がします！」
「……そうか、わかりましたわッ、やつらの狙い!!　監督は綿流しの本部役員ですわよね!?!!
今日のお祭り、雨天順延の判断は!?」
「今日の、確か十時に決まって、…………ぁ、」
「……あぅあぅあぅあぅ!!　まさか、…運動会と同じで…!!」
「木を隠すには、森ってことね…!!」
　梨花は入江以上に小此木の性分を知っていた。自分のことをお姫様のお守りと愚痴る投げやりな男だった。
　………その小此木が、こんな鋭さも持っていたなんて！　だから梨花が一番悔しかった。

地下への入口の扉には、いつの間にかアーチ状に粘土ブロックのようなものが貼り付けられていた。…それらは配線で繋がれ、何十メートルも延び、その先で山狗たちが伏せて待ち構えていた。

隊員の手には起爆スイッチ。そこに全ての配線が集まっている。

「……もうじき十時です。」

「へっへへへへはははは。……今朝、連中に先制を打たれた時はよ、よりによって今日かよと思ったよ。だが、今は、今日で助かったぜって思ってるぜ。」

…今日という日を有効利用できるのは貴様らだけじゃないぜ。こいつぁ俺の寝起きを叩き起こしてくれやがったお返しだ。地域ぐるみの大きな行事などでは、決行するかどうかを知らせるため、……花火を鳴らす。朝から行なう運動会などでは、早朝にこの花火を鳴らすことも多い。…綿流しの場合は夕方からの開催だから、十時で十分なのだ。……その時、ボン！　ボン！　と花火が聞こえ出す。谷間の雛見沢ではその音は残響して、どこから聞こえてきたのかもわかりにくい。…それがますますに山狗に有利に働いた。

「やれッ！！！」

凄まじい音と震動が地震を思わせるくらいに響き渡った。この歪（いびつ）な地下のあちこちの梁（はり）を歪

ませたらしく、ぎしぎしと不安感を煽る音が木霊(こだま)し、天井からはパラパラと砂埃(すなぼこり)が落ちてきた。
これだけの力だ。今の爆発で多分、扉は吹き飛んだだろう。村の誰にも不審に思われずに!!

「さぁ入って!! この奥だよ!」
魅音がひとつの岩牢にみんなを誘う。…そこは入らなければわからない絶妙な隠し方で、縦穴が隠されていた。隠し井戸とは名ばかりの不気味な縦穴だ。人数分にも満たない懐中電灯では、この不気味な垂直トンネルの全貌(ぜんぼう)はとても照らし出せない…。
「……こいつを降りろってのか。…どこまで続いてるんだ?」
「だいぶ降りると途中に横穴があるの。そこを抜ければ山中の古井戸に抜けられるようになってる。」
「ってことは、それについて一番詳しいお姉が先頭打者決定です。お先にどうぞ。」
「ちょ、私がトップ⁉」
「他の誰がトップなんです! 殿(しんがり)は私と葛西が務めます! 早く行ってッ!!!」
「…………わかった。」
魅音は自分が殿を務めるつもりだった。
……でも、多分、魅音と詩音だけが直感していた。この縦穴をこの人数で降りていこうと

したら、殿は間に合わないかもしれないと。表の鉄扉と違い、中に入ってしまえばいくつか扉があるとはいえ、人の力で破れないものじゃない。ルートもほぼ一本道。ここまでは大して迷うまい。だから、詩音は先に殿の役を魅音から奪った。本当は、自分が姉だから。姉の役目を必死にこなす妹を、本当の危機の時に守りたかったのだ。…魅音はそんな詩音の考えを、…彼女らだけにしか通じ合えない生まれつきの直感で悟った。……魅音もわかっていた。私たち姉妹の関係は、姉を奪ってしまった自分だけが非を感じているのではない。

当主の運命を押し付けてしまった詩音も非を感じているのだ。そして、それを贖罪（しょくざい）する機会を、詩音はついに得たのだ。

「魅音さん。武器庫の鍵を。今は開けるべき時です。」

魅音が無言で当主の鍵を放る。それを受け取ると、葛西と詩音は岩牢の奥へ駆けて行った。

「みんな聞いて！　横穴までは大体、三十メートルちょっと。落ちたら底なしだよ!!　しかも真っ暗なんだからね、慎重に降りて！　待機してる人はちゃんと梯子（はしご）を照らしてあげること！…一度に、せいぜい一人か二人しか降りられないからね。私が先陣を切る！　照らしてて!!」

「…魅音さん、気をつけて…！　照らす人も落ちないように！」

もし電気が絶たれていなかったら、次々と降りればいいだけのことだった。この暗闇ではわからないだろうが、実はほんのいくつか井戸の中に電球が設（もう）けてあって、隠されたスイッチで

点灯できるのだ。
……もちろん魅音はすでに試したが駄目だった。地下への電線が切断されているのは間違いなかった。だから、懐中電灯の灯りしかないこの状況で、登りならいざ知れず、下るのは極めて危険だ。誰かが降りている間、上と下の人間が照らしている必要がある。……その魅音の読みは当たっていた。先陣を切り、わずかの灯りさえもなかったらとても満足に降りられないことを実感する！　降りれば降りるほどに灯りが届かなくなる…。途端に足元が不安になり、わずか一段下を探るのにも顔から汗が噴き出すほどに緊張させられた。横穴までだって三十メートル。それだって十分深い。……でも隠し井戸はそれ以上に底が深いという。間違って落ちたら怪我じゃ絶対に済まない…！　…そ、……そろそろ、…三十メートルくらいじゃないだろうか…？　三十メートルって畳何枚分くらいの長さだっけ……。まさか私、横穴を通り過ぎてしまっている…？　そんな不安を感じた時、ひんやりとした風が全身に吹きつけてきた。風の流れから大きな横穴の気配を感じ、ポケットから懐中電灯を取り出して辺りを照らした。……そこに漆黒の口を開く横穴を見つける！
「…………は、…………はッ！　…………………えい!!　はッ、はぁ、は！　ＯＫ!!　いいよー！！！　梨花ちゃんから降りてきてー!!」
魅音は下から懐中電灯を照らす。

「よっしゃ！　次は梨花ちゃんだ!!　その次が監督で、次が羽入、沙都子な！　どんどん降りろよ!!」

入江が自分は後でいいと言おうとしたが、レナがきっぱり言った。入江がいなければ地下区画に入れない。富竹救出は不可能になるのだ。

…人の命に序列はないが、今においてだけは梨花の次に重い！

「気をつけてください、照らしています！」

「……わかってる！　みんなも、急いで…、あッ!!」

「梨花ッ！！！」

魅音と違い、梨花は身長も低い。魅音のようにひょいひょい降りられるわけではなかった。足の長さが足りず、左足が滑ったのだ。

「だ、大丈夫…！　くそ、いつまで経っても成長できない人生なんてごめんよ…！　私は昭和五十八年六月を超える…！　そしてね、もっともっと身長が伸びるのよ…!!　胸だってもっと大きくなる…！　いつまでもこんな子供の体なんて、絶対にごめんなんだから…!!」

百年を超えた魔女とて高所の恐怖は拭えない。

梨花は暗闇と不安定な足元の恐怖と戦いながら、それでも一秒でも早く降りようと歯を食いしばって耐えた。

その内、上からの灯りが届かなくなり、下の魅音の灯りの方が照らされるようになる。あとは魅音の灯りさえあれば十分だ。次の人はもう降りてきていい。
「ボクはもう大丈夫です!! 次、降りてきて!!」
「さ！　次は監督なのです!!」
「大人らしくきりきりお降りあそばせ!!」
「…わかりました。先に行きます！」

扉を吹き飛ばした山狗たちは、暗視ゴーグルを装着した異様な身なりで慎重に歩みを進める。先頭の一人が沙都子が仕掛け残したトラップに気付き、後続を制止した。
「鶯7より鶯1へ。ワイヤー感応のトラップを発見。突入は慎重を要す。」
「鶯1了解！　鳳1、トラップの痕跡少なからず。通電を検討されては。」
「……馬鹿野郎〜、そんなことしたら連中が逃げやすくなっちまうじゃねぇか。向こうはこの暗闇で逃げるのもままならねぇはずだ。俺たちに有利なフィールドを最大限に使うんだ。この暗闇で追い詰めて捕らえろ。……これほどのデカイ壕だ。別に出口がきっとある。連中は隠れたりしないぞ、必ずそこから逃れようとするはずだ。…突入班に火器と防弾楯、スタングレネードを与えろ。園崎家って言やぁヤクザの大御所だ。密輸拳銃くらいの反撃は想定しろよ。

……ってことは、そのワイヤートラップもクライモア程度には注意しろってことだ。全身に千個も鉛球(なまりだま)食らいたくなかったらな。全身バラバラになるぞ‼」
「了解。」
彼らがプロであるゆえに効果のあったトラップだったかもしれない。…沙都子は、これらのワイヤーを、プロならもっと危険なトラップだと勘違いしてくれるに違いないと思い、そこら中に仕掛けまわっておいたのだ。その沙都子の策は的中し、山狗は最大の障壁である鉄扉を打ち破ったのに、未だ拷問室にも至れていなかった。
もっとも、この隠し井戸の大空洞は拷問室と扉一枚しか隔てていない。敵が来るのは時間の問題だ。
「よっしゃ、次はレナだぜ‼」
「うん！　圭一くんも急いでね！」
「圭ちゃぁん！　どんな感じですか‼」
「あぁ、今レナが降りてる‼　割ときりきり降りられるみたいだぞ‼」
「ハイハイ、焦って落ちないようにね。その井戸、歴代園崎家に逆らった連中の死体を捨てるのに使ったって噂もある、底なしの井戸だそうですから☆」
「げ、…し、詩音、お前、何だよ、その持ってるの…⁉」

さっきまで姿を消していた詩音の手には、…いつの間にかでっかい機関銃があった。な、何だっけ…、よく戦争映画で敵兵が持ってる機関銃だ!! 弾倉(だんそう)が前に丸く反(そ)り返ったのが特徴の、えっとえっと！ 同じ機関銃が葛西さんの手にもあった。機構をいじって動作確認する様子はあまりに手馴れすぎていて、一瞬の現実離れを感じさせる。

……でも、この懐中電灯の灯りだけで照らし出された異様な世界ではとても当り前に見えて…。その銃の使い方を知らない自分の方が、ここでは異邦者なのだと思わされた。詩音と葛西さんは、この隠し井戸のある岩牢に入り、左右の淵に分かれて身を隠し、拷問室への入口を安定して照準できる姿勢を探しているようだった。

…葛西さんだけでなく、詩音もかなり手馴れているように見えた。

「し、詩音、その役は俺がやる。だから次は詩音が降りろ！」

「圭ちゃんの男のプライド、サンキューです。でも、圭ちゃんにカラシニコフの説明をするより、圭ちゃんの番になったらきりきり降りてくれる方がロスタイムは少ないです。…気にしないで。いい女は死なないから☆」

詩音がウィンクした時、遠くの扉が打ち破られた音がした。途端に詩音と葛西さんの目が厳しくなり、岩陰に身を隠しながら銃口を暗闇に向けた。敵は恐らく今、拷問室の中だ。拷問室の扉の脇にはぽつんと懐中電灯が置かれていた。…照準代わりにさっき葛西さんが置いたのだ。

……敵はどうも暗闇でも見えるようだが、こっちはそうはいかない。咄嗟の工夫だった。拷問室から、がさがさごそごそと大勢が息を殺しながら近付いてくる音が聞こえる。……となれば、…敵とこっちの間にあるのは、あの扉一枚だけ。
「圭一くぅうぅ〜ん!! 早くぅうぅ！！！」
「詩音、お前が先に下りろ!!」
「………詩音さん。」
「んで、圭ちゃんに譲って私だけ生き残ったら。私ゃお姉に一生恨まれますって。……私の想い人はもういないけど、お姉にはいるもん。」
「…………は⁉ お前、この忙しい時に何の、」
「死ぬ気はないけど〝詩音〟に伝えて。……私たち、また次の時も双子がいいね!! 行けぇぇええッ！！！」
詩音は、有無を言わせない意味でこれ以上はない真剣な叫びで、俺に降りるように促す。何で詩音が「詩音」に伝えてと言ったのかわからない。……でも、伝えろと言われたから、俺は伝えなきゃならない…。
じゃなかったら、…本当に最悪の時、…詩音のその想いは魅音に伝わらないのだから。その時、空間が破裂した。拷問室の扉から何かが投げ入れられ、それが破裂する音と、葛西さんの

機関銃が火を噴く音。それらがこの洞窟内で反響してものすごい音になった…。俺は、その壮絶な明滅する光の連続写真を、目に焼き付けて…、……自分が何の役にも立てない無力さに涙を我慢できなくなりながら、……梯子を降りて行くしかない。下で魅音が早くと金切り声を上げる。俺も降りながら上に早くと金切り声を上げる。

「鶯1!! 攻撃を受けた!! 敵は拷問室奥の大空洞内で阻止線を展開。マズルフラッシュは2、おそらくAKだ。」

「集弾がうまいぞ、プロだ。鳳1、指示を乞う。」

「へっへへへははははははは!! そう来なくっちゃな。相手はプロだぞ。キリングハウスの卒業生以外は突入するな。鶯1、2、鳳7、8、突入準備。火器はいくつある?」

「MP5が4、各種グレネード多数。防弾楯は突撃銃には信用できない、放棄する。」

「入ってすぐ脇に発光した懐中電灯が落ちている。おそらく向こうは暗視装備がないものと推定。」

「鶯1だ。突入は俺たちでやる。合図と同時にスタングレネードを放り込み突入散開。」

相手が息を潜めた隙に、葛西は弾倉を換える。

「詩音さん、もう十分です。行ってください。」

「私が抜けたら葛西が弾倉を換えてる間に誰が弾幕張るんです。ツーマンセルが基本でし

よ！」
詩音の発言には矛盾があった。その論法では、最後に残った二人はいつまで経っても脱出できないのだから。横穴では魅音が身を乗り出し大声を上げ続けていた。
「詩音の馬鹿ぁあぁ！！！　早く降りてぇえぇ！！！」
本当はこの場に留まり続けるのは危険なことだと誰もがわかっていた。
…でも、叫び続ける魅音を制止することなど、誰もできない。
「……俺と魅音はここで詩音を待つ。レナはみんなを連れて裏山に逃げてくれ。」
「わ、……わかった。」
「……嫌よ。誰が欠けても嫌。」
「梨花……。」
「……これが、最期の世界なのよ!!　ここでひとつ後悔が残ったからもう一度やり直そうというのはもうないッ!!　私は嫌よ、詩音が死んだり葛西が死んだりする未来はごめんよ!!　もうやり直せないって知ってるから、嫌よいやいや絶対いやッ!!　だから詩音ッ、早く降りてきてえええぇえぇえぇえッ！！！」
俺たちが見上げた井戸の上が、再び凄まじい轟音に包まれ、激しく明滅した。
それから、耳をつんざくような破裂音。詩音たちとは違う銃の音。チリンチリンとばら撒か

れるのは薬莢の音なのか。それらは全て俺たちの目には映らない。俺たちに見えるのは明滅と、音だけ。それが終わった時…。わずかの静寂を挟んだ後、詩音たちとはまったく違う足音が残響しながら増え、そしてその音は詩音たちがいるはずのところへ響き渡った。硬い靴が、薬莢をチリンチリンと弾きながら歩くのがわかる…。

「……クリア。鷲1より鳳1、銃眼を制圧。」

その声は、井戸に響きながら、魅音たちの耳にも届いた……。

俺たちは、……ある者は呆然とし、ある者は涙を流し、…ある者は声なき叫びをあげ、……いつまでもトンネルを見上げ、…そこからひょっこり詩音たちが降りてくるのを待ったが、……それはもう、………ありえないことで……。井戸の上から強力なビームライトが照らされる。入江が魅音と圭一の襟首を引っ張って引っ込めた。だが、向こうは暗闇でも見えているのだ。この横穴に潜んでいることなどすぐバレる。

「…………了解。試みる。…………………聞こえるか！　返事をしなくてもいい、聞け！」

井戸の上の男は、潜む彼らに言った。

「女王感染者、古手梨花と、診療所長、入江京介を引き渡せ!!　君たちは誤解している。我々は特別な風土病を撲滅するためにやって来た。今回の件は、所長がある陰謀に加担している可能性があるためだ。君たちには何の関係もない。大人しく、両名を引き渡せッ!!」

向こうに気取られないよう灯りを消したから、誰がどんな表情をしてるのかわからないけれど、……魅音の表情がくしゃりと歪んだのを感じた。

だから、魅音が叫んだとしてもそれは誰にも止められなかった。

「人殺しッ！！！　よくも、……よくも詩音をッ！！！」

「この少女のことか。それが問題ならば安心しろ。生きている。気絶してるだけだ。」

「……生きてる、生きてるってよ魅ぃちゃん！」

この状況下で生きていることが何の解決にもならないことを魅音は知っているから、そんな言葉では安堵しない。

「こっちの男も同じだ。生きてる。だが、両名の引き渡しを無駄に拒むなら、この二人を交渉に使わねばならないぞ。」

「な、何をする気ッ⁉」

魅音が何も見えるはずのない暗闇を見上げると、……井戸の上がぱっと明るくなり、信じられない光景が飛び込んできた。それは、……ぐったりとうな垂れた詩音が、後襟を捕まれた状態で、……井戸の淵から突き出されているのだ。襟を掴んでいる男が手を離せば、詩音はすぐにでも井戸を落ちていくだろう。……底までどれだけあるかもわからない。無事で済むわけがない！

「し、……詩音ッ！！！」
詩音は答えなかったが、確かにわずかに動いた気がした。
生きているのだ。……今はまだ。
「……は、……はったりだ。落とすわけねぇ…。」
「はあッ⁉　何を根拠に言ってんのッ⁉　人質ってのはね、二人以上いる時に限り、いくらでも殺せるんだよ‼　上には詩音と葛西さんがいる。ヤツは詩音を突き落として、もう一度こっちに同じ選択を迫れるんだよ‼　はったりなんかで言ってんじゃないよぉおお！！！」
魅音が圭一に猛然と食って掛かる。圭一は軽率な言葉を悔いるしかなかった。
「考える時間が必要なら与える。ただし六秒経過したら最初の人質を突き落とす。よく考えて素早く決断しろ‼」
「……どどどど、どうしよう、どうしようッ！！！」
魅音が半狂乱になりながら声を張り上げる。
「……敵の狙いは私です。梨花さんはすでに脱出に成功してしまっているということにして、私だけが行きましょう。それで多分、許してもらえるはずです。」
その提案は一見、被害を最小限に食い止める最善策に聞こえたが、……レナが静かに言った。
「…………駄目。詩ぃちゃんたちが、私たちを逃げ出す時間を稼いでくれたんだもん。……監

督が行ったら、何のために詩ぃちゃんたちががんばってくれたか、わかんなくなっちゃう。」
「じゃあ何ッ⁉　詩音に死ねって言うの⁉　レナあんた詩音が死んでもいいって言うのッ⁉
あああああんたね、詩音はあああああああッ！！！」
「やめてくださいまし魅音さん……！！！　私だって、……私だって胸が張り裂けそうなんですのよ……。だって、……詩音さんは、……私の、ねーねーなのに………‼」
「……ぅぅうぅぁあぁぁあああ、詩音、…詩音んん…‼」
魅音は沙都子の頭を抱えるように抱き、すすり泣き続けた。
山狗たちが照らすビームライトの光がわずかに横穴に入り込んでくる。……闇に目がなれ、そのわずかな光でもみんなの様子がわかるようになってきた。……でも、わかったから、…何だというのか。事態は絶望的で、すすり泣く魅音と沙都子。下唇を噛んで何かの感情に耐えているレナ。俯く監督。
……そして、……そわそわとしている梨花ちゃんと、羽入。
「…………………どうすればいいの、羽入…。どうすればいいのかわからない…。」
「……僕にもどうすればいいかわかりませんです。」
「あんた神さまでしょ？　何とかしてよ…、何とかしてよ…‼　神通力とかで敵をやっつけて、詩音を助けてよ‼　奇跡でも起こらなきゃ救えない‼　なら起こしてよ、神様のあなたが起こ

してよ！！！」

ぱちん。妙な音がした。……誰もが驚く。羽入が梨花の頬を平手(ひらて)で打ったからだ。

「梨花。聞きなさい。」

「…………羽入……？」

「私たちは共に数多の世界を渡り、人の身では知り得ないことを、いくつも知ってきました。ある時はあなたが教えられ、ある時は私が教えられ。いくつもの大切なことを学び、ようやくこの世界でもっとも大切なことを学び取りました。私たちが求めて止まず、そしてようやく得たもの。…それが何かわかりますか。」

「…………………。」

……それは奇跡の起こし方。

奇跡は人の世に起こるサイコロの目の一つ。結果に一喜一憂する人間の身には天の気まぐれとしか映らない。奇跡は神の手にある。それを操る資格は人にない。

でも、資格はなくとも、人は悟る。如何にすればサイコロの目がよくなるか、如何にすれば、奇跡が起こるか。

「…………奇跡の、起こし方。」

「梨花。あなたはもう知っているはずです。私よりも先に知ったはずです。……あなたが本

当に大事にしたい、この最期の世界で、………知りつつ、そのやり方を試さないのですか…？」
「…………………あ………。」
梨花の口が、ぽかんと開く…。
…そっか。………奇跡の起こし方、………また忘れていた…。
「……みんなは、逃げてください。」
梨花は立ち上がるとみんなに言った。みんなが驚く。
「入江。みんなを頼みますです。出て行くのはボクだけで十分です。……鷹野は入江もボクも殺すでしょうが、………ボクの殺し方には、鷹野なりのこだわりがあるはずなのです。だから多分、しばらくは殺されないでしょう。」
「じょ、冗談じゃねぇ…、でも必ず殺されるってことじゃねぇか!!」
「ボクが出て行かなければ、今すぐ詩ぃたちは殺されます。なら、ボクが捕まっても、ボクが殺されるまでの時間は、きっと反撃のチャンスにもなりますです。」
「……り、…………梨花…ちゃん…。」
「考えてみたら、とっても簡単なことだったのです。」
梨花はそう言いながら横穴を出て梯子に手をかける。……その姿にビームライトが何本も当

てられた。その姿は、………この暗闇の世界では、…………天の啓示を受けたような神々しさを感じさせる。
「だって。……ボクたちは絶対に勝てるって、みんな信じてるから。ボクもみんなも、そして神さままでも信じてるから、…こんなのピンチでも何でもないのです。にぱ～☆」
梨花ちゃんのその微笑は、………俺たちへの、…百パーセントの信頼。
自分が殺される前に必ず助けに来てくれる。なら、今、自分が出て行くのは大した問題じゃない。それで詩音たちの命が助けられるなら安い取引だ。……そう言っているのだ。
「…………今、上がります。詩ぃを引っ込めるのですよ。」
上の山狗たちはその取引に応じ、詩音の体を井戸の淵からどけた。
「ボクの仲間に指一本触れてみろ。舌を噛んで死んでやりますです。……鷹野は自分の手でボクを殺したがってますから、お前たちは困ったことになりますですよ。」
「………わかった。上がって来い。」
「ボクの仲間をこのまま見逃すのです。どうせ、お前たちの計画でやがては全員死ぬのです。」
「…………その条件は飲めない。命は保証するが拘束する。」
「じゃあお気の毒さようなら。舌を噛むよりここで手を離した方が早いわね。この底は深いわよ。……私の死体が出てこないと、それもまたお前たちの計画に困るんじゃない？」

「…………………………………………。」

この時、上の山狗たちは、梨花の確保以外は生死を問わないつもりだった。梨花だけ捕まえれば、あとは抵抗があるなら即座に射殺するくらいのつもりでいた。

だから梨花の条件など飲めない。……でも、梨花をこの場だけ騙すために嘘をついてもいいか。………そんなことを考えた時。………羽入が、透き通るような。…それでいて響き渡るような不思議な不思議な声色で、言った。

それは、地の底から聞こえるようでもあり、天から岩の天井を染みて聞こえてくるようでもあり。羽入は、言った。

「…この私が取引に応じると言っている。ぐずぐず言わずに言う通りにせよ、下郎。」

「…………………………！」

「古手梨花は上がる。それに対し求めた小さな約束を履行せよ。天は、自ら与えぬ者に与えることはない。人の身に過ぎた考えは不要。身に過ぎた偽りの罪に身の程を知れ。」

「…………………。」

降伏勧告をしていた隊員、鶯1はさっきから奇妙な感覚に囚われていた。

…こちらが有利な立場で勧告しているはずなのに、………どうして、いつの間にか風向きが逆になっているのか…!? でも、少女の声には、………何だろう。…人の身では決して醸し出

すことができない、何かの神々しさが宿っていて、……それを男は本能で感じ取った。
…………人は人としか交渉できない。……人以上の存在とは交渉してはいけないのだ……。
「ま、……………待て……。隊長に相談する。そのままで待て。………う、鶯1より鳳1……。」
先ほどまで脅迫めいたことを言っていた男はすっかりうろたえてしまっているようだった。
……俺たちは、梨花ちゃんと、…羽入の不思議な存在感に呆然とするしかない。
「必ず……、………すぐ、………助け出すからね…………。」
レナが涙を噛み締めながら、呟く。
「…………貴様らの条件を飲もう。この場は見逃す。古手梨花は上がれ。鷹野三佐がお前に用があると言っている。」
「では、行ってきますですよ。にぱ〜☆」
梨花ちゃんのその表情は最後の最後まで。…絶対の信頼に裏付けられていて、わずかほどの怯えもなかった。
……そして梯子を登っていく。…何本ものビームライトを浴びながら。
それは天女が天に帰るようにも見える神々しさがあった…。

蟬の声で満たされた白昼の地上に梨花は引っ立てられる。
そして指揮車の前で待っていた小此木に引き渡された。
小此木はようやく捕らえることが出来て、実にご満悦というようなニヤニヤ笑いを浮かべていた。
「探しましたんね、梨花さん。あなたは大事な身なんですから、急に姿を消されちゃたまりませんね。……こいつぁ、ルール違反ですん。」
「……み〜。」
「では梨花さんは診療所に来てもらいましょう。お前たちは行け。」
梨花を連行してきた突入班たちは再びぞろぞろと地下の方へ戻っていく。
……ルール違反なのはこっちもだ。
「……や、約束を、…破る気ね…。」
「約束？　そりゃ何の話ですんね。へっへへへへへへへへへ。」
「…………………くッ、」
「おおっとぉ‼　すったらん、本当に舌を嚙まれちゃかないませんわ。…おい‼」
駆け出そうとした梨花の細い腕を小此木が摑む。抵抗するがこの力強い握力の前には何の意

味もない。隊員のひとりが、ケースから注射器を取り出す。……命を脅かすものではないだろうが、梨花を昏睡させてしまうようなものには違いない。
鷹野にとって重要なのは生きた女王感染者であって、喋る古手梨花ではない。……ここで注射をされたら、………それが、……この世界の、最期。
「ん、んんんんんんんんんッ!!!」
梨花が悲鳴をあげようとするより早く、別の隊員が後から梨花の口を押さえた。
「んんんんんん!!! んんんんんんんんん!!!」
「さっさと注射しろぃ。」
小此木が合図すると注射器を構えた男が梨花の腕に迫る。後から摑まれて口まで塞がれ、梨花にできる身体的抵抗はあらゆる手段を失った。
……信じてる。…………私がたとえ眠らされても、……信じてる…。
……そして、目を開いて最初に目にするのは私の愛しい仲間たちなんだ………!!!
きっと私は目を醒まさせてもらえる。
「……………え?」
…他の隊員たちは、その不思議な光景を見た。
注射器を持った男が、空中をぐるんと二回転以上回ってから、地面に落ちる。小此木も含め

て、……この重力法則を無視した突然の現象が理解できない。……それは梨花もだ。梨花を後から掴んでいた男が言った…。

「…………間に合った……。」

その声は、後悔と苦渋（くじゅう）を知る者にしか出せない重みがある。
「……数え切れない世界で後悔した。…いつも、気付くときには手遅れだった…。」
「お、……お前、……誰だ…。」
隊員たちが、梨花と、…梨花を後から掴んでいる男から、後ずさる…！　山狗にはいくつも班があるから、別の班のヤツの顔までは詳しくない。
……いくつもの班が入り乱れていたから、…気にしなかった。山狗の隊員は戦闘職でなくてもある程度の体格はある。
…それでも立派な体格だと思っていた。
小此木も、こんなヤツうちの隊員にいたっけ？　鳳に引き抜こうかななんて思っていた……。
……でも、……でもでも、
「………私が、ずっとずっと、…一番伝えたかった言葉を言うよ。」

「……あ、…………あ、」

「梨花ちゃん、君を助けに来た……!!」

「赤坂ぁあぁあぁッ！！！」

「「や、野郎ぉおぉおぉッ！！！」」

梨花を抱きしめていた手がやさしくその肩を離れる。……手が離れる時はやさしく。……そして、やさしさは残像を引くように怒りに代わり、背後から飛び掛かった二人の顔面を裏拳で粉砕する…！！！　打たれた二人は確かに宙に浮いた…!!　しかも背後から襲い掛かる二人を振り返りもせずにだッ!?

「…………ッ！！！」

その場にいた山狗たち五人が赤坂を取り囲む。だが、赤坂の眼中に五人はない。……ただただ、ようやく辿り着けた後悔の時への感慨しかない。

……だが五人は感じていた。…眼中にないのは、……ひょっとして、…言葉通りの意味なのでは……。

「な、……何をぼさっとしてるん!!　制圧しろッ！！！」

小此木の声が合図で五人の山狗が一斉に飛び掛かるッ!!

「梨花ちゃんは伏せて。」

「はいです…！」

梨花が頭を抱えて地面に伏せると、…………そこに残ったのは、…ひとりの少女との五年ぶりの約束を守るために帰ってきた、一人の男だけだった。……だが、この男の約束は、五年などという浅い月日では培えぬ重みがある。

…梨花は知っていた。…そして男も、言葉に出来ない何かで理解していた。これは、……百年にも勝る約束の誓い。足して百年間。

あの日この場所にいたなら少女を陰謀から救えたのにと後悔し続け、この日に帰ることが出来る奇跡をひたすらに信じて我が身を鍛え続けた。

そして、男の強い意志が、そして奇跡を待つ少女の想いが、奇跡を起こす!! …一度しか起こらぬ奇跡が男を、昭和五十八年六月の雛見沢に間に合わせたッ！！！ 最初の男は小此木が最初の瞬きをするのと同時に撃沈される。組み伏せようという低い姿勢が命取りだったのだ。そんな甘えた隙を見逃すほど、この男は甘くないッ!! 男の後頭部に打ち込まれる手刀は、演舞で氷柱を叩き割り、何枚も重ね合わせた瓦を粉微塵にする威力がある。……でも、そんな普段でも赤坂は怪我をしないために手加減していた。

その手加減を赤坂は初弾からやめるッ！！！

だから一撃で撃沈するッ！！！

地面に叩きつけられ跳ね返って宙に浮くくらいに!!

鍛え上げられた無敵の拳が、小此木の次の瞬き、その次の瞬きの間に次々と山狗たちに叩き込まれていく。……いずれも、一打必殺。それこそが空手の真髄の体現ッ!!　その威力を男の同僚たちはこう呼び、讃え、恐れた!!

その威力はまさに、徹甲弾ッ！！！

いかなる装甲も意味を成さない。いかなる悪がいかなる非道で身を固めようとも赤坂の前にそれは装甲の意味を成さないのだ。

…だが、彼らがそれを理解するには赤坂はあまりに強過ぎたッ！！！　人が、視界に入りきらない巨人を見上げるために上を向かねばならないように。でも赤坂は、悪党どもにその時間すら与えないのだからッ!!　山狗の誰かがインカムで応援を呼んだらしい。十人以上の山狗が戻って来る！

「……大丈夫だ。梨花ちゃん。私がここにいる限り、君には指一本触れさせせないッ!!」
「……み～☆　ボクはお絵描きして待ってますです。」
地面に伏せた梨花は木の棒で地面に何からくがきをする余裕を見せていた。…その挑発的な態度に小此木は怒りに我を忘れそうになったが、すぐに冷静さを取り戻した。そして、……小此木は自分の血の中に眠る戦闘職の直感で悟った。
…人数の問題じゃねぇ。このバケモノに、技術屋混じりの山狗程度が束になって掛かってもかなうもんか。……唯一かないそうな戦闘職は全員、地下じゃねぇか。無理だぜ無理無理、かないっこねぇ…。
「………へっへへへへははははははは。ってことはよう、……戦闘職の俺しか勝負にならねえってことじゃねぇか。………それに、…お前の顔、思い出したぜ。…こいつぁ懐かしい顔だ。逞（たくま）しくなったじゃねぇか。」
「…………………貴様、………まさか…………。」
「へっへへへ。標準語じゃ思い出せねぇか？　なら訛りで話してやるぜ。…すったらんなっつかしかぁ！　あん時の青二才がよくもここまで立派になったもんよ！」
それは五年ぶりの再会。
……大臣の孫の誘拐事件の時、対決した。…だがあの時の赤坂はあまりに未熟だった…！

「あん時は手加減せぇん指示だったん、サービスもしたらった。……だがな、今日はそういうわけにはいかんね。……へっへっへ、あの樽男も助けに来ねぇぞ！」

「…………………………。」

「しかし、…この五年でだいぶ鍛えよったんなぁ…。俺は嬉しいんね。……俺はこういうのを期待しとったんよ、…この五年間なッ！　お前らは手を出すな、俺の獲物だッ！！！」

小此木はインカムやごちゃごちゃした装備など邪魔になるものを取り外して捨てると、胸元のボタンを一つだけ外して、半身に構えた。赤坂はそれを見て多少できるのかと警戒し目を細める…。

小此木はそれを見て屈辱だと思った。…赤坂は思っている。「多少」できるのかと、その程度に見ている。その態度はつまり、自分も他のザコと同じ扱いだと言っているも同じだったからだ!!　赤坂は梨花を巻き込まないために、初めて動き、構えを取った。……思えば、さっきから、梨花の背中にいた時のまま、ほとんどその場から足も動かしていなかったのだ…！　小此木は赤坂の空手の実力を相当に高く評価した。だが同時にさばきやすいタイプだとも思った。現代の空手は武術ではあってもしょせんスポーツだ。自分が培ってきた軍隊格闘とはまったくの別物！　確かに相当の研鑽を重ねたようだが、所詮はお遊戯。動きも全て型に過ぎん。…それに空手の動きは直線的。空手屋潰しの戦い方だって十分理解している!!　小此木は爪

先を使った細かいフットワークを使い始める。対する赤坂は半身の構えのまま動かない。

……まるで、小此木のそのフットワークが小細工の域を出ないかのような態度。……それが小此木の怒りに火をつける!!　猛然と、だけれども波間を縫うような軽やかな動きは、なるほど先ほどまでの赤坂の愚直な直線の動きとは異なる!!　赤坂は悠然と構える。だが小此木はそれをこう見た！　こちらの動きに対応できないので、肉を切らせて骨を断つ気だろうと読んだッ!!

「うぅぅうぅぉおおおおおぉおぉおお！！！」

赤坂の顔面を狙う鋭く素早い拳を赤坂は防げず顔面で受けるしかなかった。もちろんそれは素早さだけしかない軽いものだったが、目的は赤坂の目を打ち、一瞬の隙を得ることだった。

動物的本能でガードが上へ上がるのはわかってる！　本命はその浮いたガードの下、下腹に足刀をぶっ込んでやることだッ！！！　もちろん赤坂のガードが間に合うはずもない！　その攻撃は動体視力でどうにかなるものではない。日々、鍛錬を重ねた小此木だけが会得できた速度と技なのだ……!!

並みの人間ならその蹴りでゲロをはいてのたうち回る。素人なら内臓破裂ってとこだ!!　まともに受けたにせよ膝をつかないだけ赤坂は大した鍛え方のようだった…。

「へっへへっへへへへ!!　どうした空手屋！　相手も同じ流派じゃないと戦えないってのか、

え⁉」

「…………………………。」

「………何？」

赤坂が一言呟いたが、聞こえなかった。…いや、聞こえていた。……でも、こんな状況下でその言葉を言い返されるなんて、小此木にはまったく想像がつかなかったから、…聞こえなかった。理解できなかった。

「…………………………軽い。」

「な…………んだとぉ……？」

「…………貴様の一撃は、相手を打ち倒すことしか考えていない。…だから、重さが宿らない。」

「はぁ……⁉　な、何を馬鹿なこと言ってやがる…⁉」

「………空手は心を養う。人を打つ、ということは自らも打たれることを知る、ということだ。自らの一撃が相手に何を及ぼすか、どれだけの痛みや悲しみを与えるかを知った時。……人は打つ意味と、打たれるということを知るのだ。………だから、それに至らない貴様の一撃には

重みが宿らない。」
「それは……俺が未熟だと言うことかぁあああぁぁあぁぁッ！！！」
再び襲い掛かる小此木だが、今度は赤坂の様子が違うッ!!　小此木の拳が脚が、赤坂にさばかれる、防がれる!!　もちろん小此木が一方的に打ち込んでるだけじゃない。赤坂のさばきに次第に容赦がなくなる。さばくのではなく、小此木の攻撃する手や脚が打たれるようになるッ!!　小此木はヤバイ相手だと直感した。
……こいつ、ただのお巡りじゃなかったっけ？　この動きはヤバイ。この容赦のなさはヤバイ！　訓練の量、そして実戦の数が桁違いだッ！！！　しかも、………待てよその馬鹿みてぇにダイナミックな踵落しは空手じゃねぇだろッ！！！　紙一重で頭部への直撃をかわすが、チリリと髪の毛が削られた感触がした。
「て、………てめぇ、空手以外にもやってやがるなッ!?」
「いいや。私は空手しかやっていない。」
「う、うそつくんじゃねぇ…！　さっきから明らかに空手じゃ見たことねぇ技が目立つぞ!!」
小此木の焦りが募っていく…。彼がスポーツ武道を馬鹿にするのは、彼らがみんながみんな石頭で、決められた型しか使わないからだ。
空手ならこういう突き。ボクシングならこういうパンチ。柔道ならこういう投げ。

だからあっさり読める、さばける、そして勝てる！　だがこの目の前の男は、空手しかやってないというのに、…そして空手を極めかねないくらい稽古を積んでやがる石頭の空手バカなのに、……型に囚われねぇ柔軟さを持ってやがるッ！！！　それは、精神の会得。武道の心は型じゃない。それを得るための道として型を通るだけだ。

……ゆえに達した者に型はない。あるのは達観した精神ッ!!

「…………貴様の未熟さには落胆した。」

「………く、…くそぉおぉおぉ…！！」

赤坂が、……初めて歩く。前へ。小此木との間合いを自らの意志で詰める!!　赤坂の踏み込みにより、赤坂を中心とした、…いわゆる攻撃可能圏がぞわりと小此木に迫る。……その範囲に入ることは、即ち「死」だッ!!　小此木はそれに合わせて後ずさる…。これは極めて冷静に間合いを読んだ結果だ…。決してビビって下がってるわけじゃない…！

「……人を打つ意味のわからない貴様に、本当の重さというものを教えてやるッ!!」

「くぅうぅ……!!　………ぅ？」

後ずさった小此木の足が、彼らが乗ってきたワゴン車にぶつかる。……そう、完全に追い詰められたのだ…!!　壁を背にするのは不利なことではないが、背中を密着させてしまうほどではかえって不利になる…。

なら、もう一歩の踏み込みを許せば、自分は有効な迎撃態勢も取れなくなってしまうということだ……!!　小此木は即断する。……赤坂が次の一歩を踏み出す瞬間だけが最後のチャンスだ!!

そして、赤坂の足が、……砂塵を上げて、……もう一歩………!!　今だッ!!

「くたばりやがれぇぇぇぇぇぇぇぇッ!!」

それは、小細工無しの腰を低く構えた渾身の一撃ッ!!　正面から向ってくる赤坂の胸骨を砕き心臓すらも破裂させてしまおうという悪意ある渾身の一撃ッ!!!　俺はプロなんだプロフェッショナルなんだ!!!　こんなアマチュアに負けてたまるもんか!!

「俺が山狗の小此木だぁああぁああぁああぁ!!」

「そりゃよかったな。給料いくらだ。」

その瞬間、くわっと赤坂の目が見開かれるッ!!!

「うぅぉおおおおおおおおおおッ!!!」

その場に居合わせていた山狗たちは、音を、聞いた。

……それは人と人が戦う音じゃない。……そうあれは、ええと、……そう、交通事故の時に

聞く音だ……ッ!!　小此木の渾身の一撃は………、紙一重で逸れ、赤坂の正拳が、小此木の顔面の拳一つ分脇を打ち抜いていた。

そこにあるのは、車のスライドドアの淵。…両側のガラスが割れて砕け散り、フレームが、まるで車にでも突っ込まれたように歪み、………反対側の窓ガラスまで砕け散るなんて、……か、考えられないッ！！！　凍った時間がガラスごとブチ破られ、小此木は食らったわけでもないのに膝をついて倒れる！　赤坂が外したわけではなかった。渾身の一撃のあまりのパワーを赤坂もまだまだコントロールできていなかったということだ。……小此木は赤坂に感謝した方がいい。

…もし赤坂の稽古が、さらにさらに深かったなら、……今頃、小此木の顔面は砕け散っていたかもしれないッ！！！　だが、顔面には当たらなくても、その、当たれば砕いた一撃は、小此木の心を打ち砕いた。

「……赤坂〜、ぱちぱちぱちぱち！」

梨花がぱちぱちと拍手を送る。だが緊迫したこの状況下ではそれは拍手に聞こえない。…まるで、火薬のような赤坂の闘志が爆ぜているように聞こえる…！　赤坂は砲弾のように打ち込まれた拳を引き抜き、…悠然と振り返り言う。

「……次だ。面倒だから一度に来い。」

「「「…………ッッ！！！！」」」

あぁもう誰も間違わない。小此木でなくても全員にわかる。この男に素手で挑んで勝てるわけがない!!

こいつを倒すには銃がいる、武器がいる!! 応援がいる、地下にいるはずの戦闘職の応援がいる!! その時、突然慌しくなる。地下に行っていた山狗たちがわらわらと戻ってきたのだ。

「地上での発砲は許可されていない、繰り返す地上での発砲は不可!!」

「鳳1、Rを回収して退却許可を!!」

だが、赤坂の戦いを真正面で見ていた山狗たちは、自分たちが逃げる番になったことに気付くと、もう梨花のことなど構っていられない。

あれだけの恐ろしさを見せ付けられて、なおもこの男に立ち向かって梨花をさらおうなどという勇者がどこに!? 小此木も正気に戻ると、ワゴン車に逃げ戻る山狗たちに混じり車に飛び込んだ。赤坂と戦うため、インカムを外していたため、地下の状況がまったく耳に入っていなかったのだ。あの後、梨花との約束を無視して部活メンバーへの掃討が行なわれるはずだった。

だが、赤坂が現れ地下と地上に兵力が分散したため、状況が変わった。

じっと伏してチャンスを待っていた葛西が反撃に転じ、どうやってあの井戸の底から這い上がったのかわからないが、その隙をついて部活メンバーが反撃に転じたというのだ。山狗たち

は地上では発砲の許可が出ないため、銃を持って地上に出た葛西たちに発砲させるのは事態を悪化させると判断。…連絡の付かない小此木に代わって鶯1が退却を指示したのである。
……誰に責任があるかと言えば、赤坂と一騎打ちしようなどとしゃれ込んでインカムを外し指揮官の仕事を一時的に放棄した小此木にあるに違いない。
でもそうしたのは赤坂が現れてくれたからで、小此木の失態によるというよりは、赤坂の功績という方が妥当だろう。全てが奇跡的タイミングだった…。ただ、これで山狗たちが尻尾を巻いて逃げ出したわけではない。流れが悪くなったので一度引き上げただけだ。
……いや、今度は十分な武装と人数で、殺す気で襲ってくるだろう。そして、それは間髪を入れずに実行されるだろう。一息をついている暇はない。
「……梨花。無事でよかったのです。」
「…………何とかね。奇跡のおかげで。」
「奇跡じゃありませんです。みんなで力を合わせたから、みんなの内の一人の赤坂が助けに来てくれただけのことなのですよ。あぅあぅ。」
「…………そうね。この程度で奇跡じゃ、…もったいないわね。」
「さぁ、今度はこっちが打って出る番なのです！」


最期の闘い

■救出作戦

地下では部活メンバーたちが、盛大な反撃戦の自分の戦果を誇りあっていた。
梨花は彼らが誇りあう大反撃に加われなかったのが残念だったが、…それよりももっと嬉しい言葉を赤坂にもらえたので、それでいいことにした。
梨花により赤坂の大活躍がみんなに伝えられ、赤坂は今さらのように照れるのだった。葛西さんはほとんど問題ないようだったが、詩音には少々ダメージがあったらしい。
もちろん命に別状はないのだが、至近距離で爆発があったためか、左の耳がよく聞こえないという。魅音が試しに左側にまわって、ばーかばーかと悪口を言ってみるが、ちゃんと聞こえているようだった。
…右の耳で聞いている可能性もあるだろうが。詩音は拷問室の畳で横になり、今、監督が様子を見てくれているところだ。
魅音はずっと心配そうだったが、詩音に自分の心配はいいから今後の作戦を！　と追い出され、戻ってきた。人が心配してるのに〜と悪態吐きながら。俺たちは、診療所の富竹さんをどうやって救出するか、相談しなくてはならないのだ。

ここには、赤坂さんと葛西さんという、荒事に非常になれた頼れる大人が二人もいる。そして誰も知らない、診療所の地下区画について詳細に説明できる監督もいる。すぐに動き出さなければならないが、最低限の作戦方針は必要だ。時計を見れば、もうじき午前の十時半だった。…あれだけの大騒ぎがあったからへとへとになってしまい、もう夕方のような気分だったが、……学校だったらようやく二時間目か三時間目って程度のところなのだ。

こんなんじゃいけない！　気合を入れねぇと‼

入江はペンライトで照らしながら、詩音の左耳を覗いていた。

「耳鼻科の先生でないとわかりませんが、運が悪ければ鼓膜が破れている可能性もあります…。頭痛や眩暈はありますか？」

「いいえ。全然へっちゃらです。」

入江は拷問室の脇にある流しでハンカチを絞ると、煤けて汚れてしまった詩音の顔をやさしく拭いてやった。

「……驚いてます？　雛見沢ファイターズのマネージャーが銃撃戦ができて。」

「…………えぇ、驚いています。……あなたが死ぬ気だったとは。…前原さんに聞きましたよ。」

「……うっわ。ああいう言葉ってその場ではかっこいいけど、生き残っちゃうと滅茶苦茶恥ずかしいですね〜、あはは、やだなぁ！」

〃んで、圭ちゃんに譲って私だけ生き残ったら。私ゃお姉に一生恨まれますって。……私の想い人はもういないけど、お姉にはいるもん。〃

「……茶化しっこなしです。…あなたの想い人というのは、…悟史くんのことですね？」

「…………さぁ、どうでしょうね〜。……今頃どこにいるやら。…生きてるのか死んでるのかもわかりませんけど。」

「生きてます。」

「…………え。」

入江の即答に、詩音はしばらく思考が止まった。

「北条悟史くんは、生きています。………彼は去年のあの日、…不幸な心労が祟り、末期の発症を迎えてしまったのです。」

詩音はすでに、魅音たちに現在の状況を聞かされていたから、…それがどういう意味かわからなくはなかった。

「……私は沙都子ちゃんと同じ薬で治療できると思いました。……ですが、沙都子ちゃんが治療できたのは極めて幸運なケースだったようで、…悟史くんの治療は困難を極めました。…そ

してその治療は、……今も続いているのです。」
「………悟史くん。…………悟史くん……。…生き、……てるの……。」
「……今まで、話せなくてすみません。…悟史くんは地下区画にいます。」

拷問室から詩音と監督が戻ってきた。
詩音の表情が険しい。…いや、戦うための重大な決意を秘めた表情だった…。その時、俺たちはどうして敵はこの場所がわかったのかという話をしていた。
するとと詩音が即答する。
「……入江先生の着衣に、発信機か何かがつけられていることは考えられませんか。先生の私服ではなく、診療所で持たされる物や着せられる物にです。」
「だとすると、……この白衣くらいのものですが…。」
「監督、ちょっとボディチェックします。」
詩音が監督の体を、空港の金属検査みたいな感じで手早く探る。
……すると、後襟の裏側から、ボタンのようなものを見つけた。学生服のボタンのようなちょっと膨らんだ形のボタンだ。……こんなものを後襟の裏などにつけておく理由がない。
「こいつが発信機でしょ。連中はこいつを信頼してるから直接尾行しなくてもここを突き止め

られたんです。」
「……やられたわ。となりゃ、このボタンがある限り、陽動作戦が可能になるってことだね。」
「ボタンを持った囮隊が敵を誘き寄せ、その隙に手薄の診療所を襲い富竹さんを助け出す。……それが最善でしょう。」
「をっほっほっほ!! となれば、その囮隊が陽動するには私の裏山が一番でございますわね!」
「そうだな、あそこなら敵を引っ張りまわせるぜ! しかもあれだけの山だからな。敵も相当の手勢を集めるだろ。その分、診療所ががら空きになる!」
「読みきれないのは、どの程度、敵が診療所に残すかだ。……診療所には敵にとっても重要な富竹氏がいる。相応の守備を残すだろう。」
「……となれば、富竹よりおいしいエサを囮と一緒にするのがいいのです。」
「大丈夫ですか、梨花。」
「……はいです。みんなと一緒で沙都子の裏山なら絶対に捕まりませんです。」
「裏山に精通してるのは、この中では部活メンバーだけだね。…囮は部活メンバーが引き受けるといいかもしれない。」
「そうだね。その間に大人部隊は診療所を奇襲。…勝算は大丈夫!?」

「赤坂さんのお目こぼしがあれば。…警察の方と聞いておりますので。」
葛西さんはそう言いながら、これまた手馴れた様子で散弾銃に次々弾を込めている。
「……今はオフですので。」
そう言いながら赤坂さんも、自動拳銃の扱いを確認していた。…この銃を扱うのは初めてでも、銃そのものは日々訓練している。発砲に当たっての心構えも十分だった。監督もそれを見習いながら安全装置のいじり方を覚えようとしているが、その手はたどたどしい。
「赤坂さんは機関銃の経験は？」
「ありません。拳銃だけです。」
「では慣れたものがよろしいでしょう。弾倉は十分に。弾詰りに備え同じ銃をもう一丁。」
「葛西さんは、…すごいですね。これはショットガンですか。」
「奇数発目はスラッグ弾です。面制圧も壁抜きもできます。」
「お～、散弾銃の辰って通り名は聞いてたけど、本当にショットガン使いなんですねー！」
「……散弾銃は恐ろしい武器です。…ですから、相手に当てずとも降伏させることもできます。あと皆さん、防弾ベストがありますので着てください。」
…葛西さんたちの頼もしさを感じる反面、それだけの危険な任務になることも想像させた。
……殴り合いの喧嘩とは違う。…銃撃戦は、たった一発の偶然で、どんなベテラン兵士も死ぬ。

……だから練度に関係なく常に死の危険が付きまとうのだ。実際、頼もしいのは葛西さんと赤坂さんだけ。

監督はあまりに危なっかしいので、銃を持たない方がいいと葛西さんが諭していた。……味方に背中から撃たれたらたまったものではないのだろう。もう少し人数を割くべきではないかと魅音が提案したが、銃の扱えない人間が来ても足手まといになるし危険だと、断られた。

「なら、私が行くしかないですねぇ？　第一、火力が足りなさ過ぎです。ファイアサポートに私がイングラムでも持ってきましょう。」

「でも詩音、お前、耳、大丈夫なのかよ⁉」

「えぇ。もう治っちゃいました。ケロっとね。ご心配かけてすみませんでした。」

「………詩音。今、私が何て言ったか聞いてた？」

「え…？　………あ、…あははは、嫌だなぁ、聞こえてましたよ、あははは！」

…それは魅音のはったりだ。魅音は何も言ってない。

…詩音の左耳はまだ調子がよくないのだ。

「…………詩音、危険だよ！　正直に言って、囮に混じるのも危険だと思ってる。詩音はどこかに身を隠してて！」

「………お姉、聞いて。……私、どうしても診療所に行かなければならない用事ができたの。

……でも、…それを今話したら沙都子まで来ると言い出す。…それは駄目。こっちは室内戦、向こうも撃ってくる。」

「…………………それって、………………。」

魅音は察した。………詩音がどうしても診療所に行きたいという意味を。だから、…それ以上言うのをやめた。もし自分が詩音だったなら。たとえ両耳が聞こえなくてもそう言っただろうから。

「き、危険ですわよ詩音さん！　考え直してくださいまし!!」

「沙都子！　詩音は救出隊に回る。沙都子は囮隊のエースなんだよ。自分の仕事に専念して！」

「……詩ぃちゃん。」

「………レナさんならわかるよね？　私が死ぬ気じゃないってこともね！」

「うん。わかってる。…こういう時の女の子ってね、絶対に死なないから。」

「ですよね！　殺されたって死ぬもんか！」

詩音とレナは拳を打ちつけ合うような仕草をする。

「決まったようですね。では、もう動き始めましょうです。」

「……詩ぃ。ボタンをこっちで預かるです。」

「はいこれ。……がんばってね、梨花ちゃま。」

「詩ぃもがんばって。………詩ぃが、強く強く信じてきた奇跡だから、今この瞬間に叶うのです。…だから、きっとこれは、詩ぃのために神さまが微笑んでくれたチャンスなのです。」

「…………信じなかった日もあった気がする。…それを誰かに諭された日もあった気がする。…………信じ続けるって、大変なことだよね。」

「……でもあなたは信じ続けました。信じなかったことを悔い、信じました。だから訪れた今日を、どうか大切に。今日を呼び寄せたあなたの強い意志の前に、…目の前の苦難はもはや苦難ではない。」

「…………あんた、お姉の新しい友達ですか？　名前は知らないけど、ありがとう。…うん、うまく行きそうな気がします。」

「……うまく行きますですよ。オヤシロさまのお墨付きなのです。」

「はははははははは！」

■鷹野ターン

一度退却した山狗は、態勢を立て直し部隊を再編成。再攻撃の準備を終えていた。一度はR

を確保したにもかかわらず取り逃がすという大失態に、鷹野は激怒。
山狗の総力を結集して捕らえるよう命じた。…そのため、今、診療所には山狗の全ての車両が結集し、攻撃命令は今か今かと待ち構えていた。激怒していたのは鷹野だけでない。…小此木もだった。五年前に見下していた新米刑事が、あれほどの成長を見せ、…自分を屈服させるとは……!!

このままでは引き下がれないと、復讐の炎を燃やしていた。攻撃命令が一度保留されたのは、入江につけている発信機の反応が一度消えたからだ。

これは故障したためでなく、さらに地下に深く潜ったためと判断された。……彼らは地下に再び戻り、秘密の通路か何かを使いどこかへ逃れるつもりだろう。

だが、そうそう長大な通路のわけはない。必ず地上に現れる。…そこを抑えるつもりだった。

村人たちは祭りの準備に大忙しでまったくこの騒動に気付いていない。

…実はこの頃、すでに山狗によって村の通信網は遮断されていた。警察への通報等を防ぐためだ。

…町へ通じる唯一の道路にも、こっそり封鎖部隊が配置され、彼らの脱出を厳しく監視していた。……必ずRたちは地上に現れる。…まさか地下に潜ってやり過ごそうなんて甘えてはいないはずだ。彼らの生命線である富竹はすでに捕らえてある。だがまさか、救出にここを襲う

という無謀はありえまい。

……なら、徒歩で村を脱出し町を目指すのが妥当だ。そこで警察なり何なりに応援を頼もうという魂胆だろう。村の中には偵察班が数台の車両を走らせ、発信機の電波と、あるいは逃走する彼らの姿を見つけようと監視の目を光らせていた…。

今は、待ちなのだ…。戦いは振り出しに戻り、互角になっている……。

「雲雀2より定時連絡。異常なし。」

「……いつまでも息を潜められるわきゃねぇんだ。焦れずに待て、絶対に出やがる…！　……ところでうちのお姫様はどうした。」

「富竹二尉に尋問中です。寝返りを求めているのだと思われます。」

「………こうなっちまったら、穏便に済ませるには監査役を抱きこむ他ねぇからな。………生かして捕らえたのはデカかったぜ。へっへへへへ。お姫様はいねぇし、東京からの電話もねぇ。ようやく落ち着いて冷房を浴びられるってもんだな。」

「隊長、東京から無線です。野村さんから三佐宛てでなく、隊長宛てです。」

「…やれやれ、電話が駄目なら無線かよ。さて、東京の女王様がこの期に及んで、俺に何のお話ですかね。…………山狗の小此木です。どうぞ。」

富竹の閉じ込められている部屋は四人も入ったらいっぱいの小会議室だった。
その机の下に富竹は押し込まれていた。自分の意志では転がることもできないくらいに拘束されたままで。鷹野はその脇の椅子に座り、前の会議の書き残しのホワイトボードをぼんやり見ていた。予算縮小に伴い、中止する研究プランについてが箇条書きされている。…だが、鷹野はそれをぼんやり見ているだけで、別に読んでいるわけではない。
互いに言葉も交わさず、…沈黙だけの会議室だった。
「…………もうすぐ十一時ね。…本当に今日は長い日。……あんなにも早朝に起こされてから、まだ半日も経たないのね。」
「………………。」
富竹は応えなかった。
「……………ジロウさん。……今からでも、私に協力してはくださらない…？」
「……………。」
「…………山狗なんかいらない。……あなたさえいてくれればいいわ。…山狗には、私の心を慰めることなんかできない。…………あなたの、一見無神経な心遣いでしか、慰められないって、…この数日でわかったわ。………ジロウさんは、…わかってて私に無神経に接してくれたのよね。…………変に同情しても、何の役にも立たないなら、…せめて私の心を気分転換で楽

にさせてあげようと思って。…そう思って、……あんなに無神経を装ってでも、…私を楽しませてくれたのよね………?」

「…………………。」

「……鷹野三等陸佐として話してるんじゃない。……鷹野三四としてジロウさんに話してるの。

……それでも、返事をしてはくれないの…?」

「……捕虜は、名前と階級と認識番号しか喋っちゃいけないことになってるんでね。」

鷹野は、しゅんとして俯く…。

「………その手錠の鍵、持ってないの。ごめんなさい。」

「……いいよ。それを求めたわけじゃないさ。」

「…コーヒー、……飲む…?」

「遠慮するよ。……この状態でトイレの世話になりたくないからね。」

それだけのやり取りだけど、…鷹野は富竹が言葉を返してくれたのが嬉しかった。

でも、…だからといって、何の解決にもなりはしない…。

「……僕を殺すしかないなら、それも構わないさ。捕らえられた時に、すでにその覚悟はできてる。」

「…………………そうね。…私も、ジロウさんを今夜、殺すつもりだったから。…あなたに

その覚悟があって嬉しいわ。」
「……ならよかったよ。この覚悟が無駄にならなくて済む。」
「…………ねぇ、…死にたくないとは思わないの？　…あなたが私の味方になると誓ってくれれば、私はあなたを死なせずに済むの。……上は、あなたを生かす価値はないって言ってるけど、……そこは私が何とかするから。」
「……上は、誰だい。」
「知らないわ。……私と接触するエージェントは野村と名乗ってるけど、どうせ本名じゃない。私も素性はよく知らないわ。」
「……でも、手を組む相手に足ると思う程度には話をしたんだろ？」
「数度ね、おしゃべりをしただけよ。……今にして思うと、私を利用したいという魂胆が見え見えだった。…でも、……なぜかあの時は、彼女だけが私のことを理解してくれるって、…そう思ったのよ。」
「……わかるよ。……君に、…誰かの助けが必要な時期があったことは知っている。」
「…………。」
「……その時、……君の側にいるのが僕でありたかった。」
「……そうね。……そこにいたのがジロウさんだったら、…どんなによかったこと

か。」

「…………………………まだ、…誰も死んでない。」

「……これから殺すわ。」

「東京には、君の黒幕もいればそれと対立する黒幕もいるが、…ほとんどの上層部は今回の件をうやむやにして終わらせたいと思っているはずだ。………鷹野さんはもう全てが手遅れだと思っているだろうけど、…まだ何とかなるんだ。まだ、取り返しがつく。なかったことにできる。」

「……そうして、……祖父が築き上げた、雛見沢症候群の研究も、なかったことになるのね…。」

「………………………鷹野さん。……君は、何がどうなれば満足だったんだい…？」

富竹のその問いに、…鷹野はわずかの間、目を閉じて考える。踏みにじられ穢された祖父の論文。………それを、彼らよりはるかに権威的立場の人間の手に取らせ、真顔で読ませたかった。……野村は、それをかなえてくれる。

…終末作戦が始まれば、この国のトップたちに祖父の論文が突きつけられ、トップはその内容を信じ、それに基づいて緊急マニュアルを決裁する。……そうすることで取り返しのつかない惨事が起こる。

…だがそれは同時に、惨事という消せない印鑑で、…この国が祖父の論文を認めたことを印(しる)すものでもあるのだ。

「………それで、君は満足なんだね…？」

「…………ええ。満足よ。………それが、……鷹野三四の、生を受けた理由だから。」

「…前に聞いたね。………なら、君は、この作戦が終わったら、消えてしまうわけだね。……鷹野三四の目的は達せられ、地上からなくなり、……君は、本当の君に戻るんだ。………田無(たなし)美代子(みよこ)。……それが、本当の君の名前のはず。」

鷹野は…ずいぶん懐かしい名前が、よりにもよってこんな時に出て来るとはと、…目を薄く瞑る。

「…………そうね。……私はもうすぐ。…田無美代子に、帰るのね。」

「田無美代子という少女は、……両親を失って施設に送られた。…………そして、そこで虐待(ぎゃくたい)されて死んだ、……君はそう言ったね。」

「……ええ、言ったわ。…………私は、あの日のあの金網の中に戻らなければならない。……ジロウさんは経験ある？」

………鷹野が話したそれは、……あまりに陰湿で無惨な、……人として考えに至ることすら許されない、……最低の虐待。

「………もう一度あそこに戻って、………今度はおじいちゃんに助けられずに死ぬの。……そうすれば、……私はここにいない。……私がいなければ入江機関もなく、………こんな妙な運命の行き止まりに迷い込むこともなかった。」
「………君は、………死ぬ気だね…？」
「……作戦が終わったら色々とご褒美があることになってるけど。………あまり信じてない。………ある日突然、ホームでどんと突き落とされるんじゃないかしら。」
「………君には、……心を許せる味方はいないのか。」
「クライアントは所詮クライアント。…味方じゃないわね。…………でも、山狗は味方よ。彼らが私の靴を舐めたくなるくらいの金を弾んでやったからね。」
「……でも、心は許せないんだろう…？」
「……………………。」
「………味方は味方よ。…あなたを捕らえ、今からRたちも捕らえようとしている。…私の役に立ってくれてるわ。」
「…それは、…今の君に必要な味方じゃない。」
「…そうね。…今の私に必要な味方じゃない。」
鷹野はそこで沈黙した。

……………鷹野が漠然と思いながらも言葉にできなかった思いを、富竹がほとんど言葉にしてくれたからだ。…………富竹が姿を消した日から、ずっと心が落ち着かなかった。

………私は、…認めなければならない。……彼が、……必要なのだ。

「…………ジロウさん。……山狗は何億円かのお金で転んでくれたわ。……まだ私の手元には一億ちょっと残ってる。…あなたは、いくら払えば転んでくれるの…?」

「……君が一番ほしいものが、いくらで買えるかを、考えてみるといい。」

「……………こんな時にキザな例えだこと。……お金では買えないって、言わせたいのね。」

「…………諦めるんだ。山狗は飼いならせても、僕は飼いならせない。」

「それを、転ばせたいと言ってるの。……あなたが望むなら、……お金だけじゃない。…何でも与えるわ。私の髪の毛一本から、爪先の先端まで、あなたのものにしていい。靴を舐めろというなら、今この場で舐めてもいいわ。………それでもまだ足りない?」

富竹は何も答えなかった。…それは沈黙という名の肯定ではなく、…鷹野に伝えたいことは全て伝えたという意味の、…今の鷹野にとって最も寂しい形での沈黙だった。

「……あなたより毎朝早く起きて、朝食を作るわ。……待ち合わせ場所には必ずあなたより先に来る。……二度とあなたを待たせて試すような真似をしない。………それでも、……駄

目なの……？　………ジロウさん…。」
もう富竹は、…何も答えなかった…。……机の下に伏せる富竹には鷹野の表情は見えない。
……でも、…わかる気がした。だからこそ、……今は不必要な言葉をかける時ではない。…富竹の今かけられるたったひとつの気遣いだった…。そこへ内線の呼び出し音が響き渡る。鷹野は一度鼻をすすると、あ、あー、と発声練習の真似事をしてから受話器を取った。
「…鷹野よ。……………そう。わかったわ。今すぐ行くわ。」
受話器を置くと鷹野は立ち上がる。
「Rが発見されたわ。入江の発信機の反応も一緒。街道が封鎖されていることを知ってて、山中を徒歩で脱出するつもりのようね。山狩りには手こずりそうだけど、人目がないのは私たちに好都合だわ。…………じゃあね、ジロウさん。……何となく、これがあなたとできた最後のおしゃべりになるような気がする。……最後に、あなたに言葉がもらえなくて残念よ。」
それでも、……富竹は言葉を、返さなかった。
鷹野は駆け出し、部屋を出て行く。……それは、急ぎ戻ろうという仕草とは少しだけ違っていた。
「連中は初め、近くの山中に出現し村中に出たようです。村人に接触して助けを求めようとし

たのかもしれませんが、偵察車両の一台が逃走者の一部とRを発見、追跡。一時期、Rと発信機は別行動しましたが、地図の山中で合流しました。」
「……散り散りになったのが合流できたということ？」
「えぇ、連中は逃走路について十分な打ち合わせをしてやがったん、ちゅうことでしょうな。……山の中なら、地の利があると踏んでやがるに違いない…。………ブッシュが深ければ武器の効果は激減する。あの空手野郎の考えそうなことですんね…。」
小此木が、今度は遅れを取らない、さっきは油断しただけだと何度も口にし、悔しがる。
「今度はもう逃がせないわよ。雛見沢でならともかく、興宮に入られたら、もうどうにもならない。」
「えぇ、わかってますん!!　向こうに地の利がある山中とあっちゃ、こちらも躊躇したらアウトですわ、全力投球で行きましょう。全班で包囲、圧殺します。聞こえてるな、全班!!　こいつはサッカーだ。敵はゴールエリアに侵入してる。ゴールは興宮だ!!　絶対に許すな!!　特にあの空手野郎だ、あいつは許さねぇ、俺の獲物だ。絶対に仕留(しと)めてやるッ！！！」
「鳳了解。」
「鶯了解。」
「雲雀了解。」

「白鷺了解。」

「行くぞ、山狗の総力戦だッ！！！　こいつをしくじれば、うちらは詰まれてゲームオーバーだ!!」

「その通りよ！　もう後がない。私も出て陣頭指揮を執るわ！　……富竹はここに置いていっても大丈夫？」

「大丈夫ですんね。完全武装の保安隊員が八人もおりますんね。その倍の完全武装兵が来ても凌げます。それよりも問題なのは、あの空手野郎です。ヤツを侮ることはできませんぜ。」

小此木が絶大な信頼を寄せる武装保安隊。彼らは、入江機関の心臓部である研究区画の守備を任されているため、山狗の中でもっとも重武装が許されていた。彼らへの信頼感と、……小此木の過剰なまでの赤坂敵視が、陽動を完全に成功させる。だがそれは同時に、囮となる部活メンバーに過剰なまでに兵力が集中したことも示していた。山狗の白いワゴン車が次々村の中を走り抜けていく。屋外なので発砲はできないが、射出型のテーサーと呼ばれるスタンガンを全員が携帯していた。

射程距離は極めて短いが、近距離戦で瞬時に標的を制圧できる強力な武器だ。メモリひとつで、生かすも殺すも自由自在、音もせず、これほど彼らに相応しい武器はない。ワゴン車は班ごとに分かれていき、部活メンバーが潜む裏山に至る道を進んでいく。……戦略的に包囲し燻

し出そうというのだ。
「隊長、全班、作戦開始位置に到着しました！」
「さすがに展開が早いぜ。三佐、全班にありがたい訓示を頼みます。」
「……鷹野よ。Rだけは生かして捕らえること。他は殺してしまってもかまわないわ!! この山から逃がしては駄目！ この山で、今日の戦い全てに決着をつけるのよ!!」
「鶯、雲雀、白鷺、山狩りを開始しろ。鳳はゴールキーパーで予備兵力を務める。緊急展開が可能なように常時待機しろ！」
「鳳7了解。」
「さぁ、おっ始めろッ！！！」
山狗の隊員たちが、数メートル間隔で横列を作りながら進軍を開始する。この裏山は普段なら村人も出入りしない未開の山だ。獣道はあっても人が通るための道など舗装されていない。
水も漏らさぬ山狩りを行なうには、相当の慎重さと丹念さ、そして忍耐が求められた。隊員たちの顔にも緊張が浮かぶ。敵のほとんどは子供だと聞かされているが、数名大人が混じり、しかも相当の訓練がされているらしいという。
その上、重火器で武装していると思われ、地の利は向こうとなれば、苦戦は初めから必至だ…。

「……小此木。山狩りってのは普通、どのくらいの人数がいるの？」

「一概にゃ言えませんが、多けりゃ多いほどいいでしょうなぁ。…山狗の人数じゃ全員集めてもまったく足りません。」

「…でも、向こうも少人数なんだからそう不利な条件じゃないでしょう？　ほら、よく言うじゃない。守備を崩すには三倍の兵力がいるって。こっちはさらにその倍以上いるんだから。」

「まぁ、数万の兵力の場合ならそういう数式になるでしょうが。…もっとミニマムなゲリラ戦ではそうも行きませんね…。米軍がベトナムでそいつを嫌になるほど証明してますん。」

「……なら、今回の山狩り。小此木はどれだけの兵力がいると見てるの？」

「へっへへへ。何でもありってことでですか？」

「何でもありって意味がわからないけど、どのくらいが適正な兵力なの。」

「今朝の政治的奇襲も含めて、向こうの指揮官は相当優秀です。そして、火器取り扱いのベテランが最低2。近接格闘のベテランが最低1。」

「…そこまでは認めるけど、あとは所詮子供でしょ？」

「…あとは子供のようですが、多分、ここに逃げ込んだからには彼らのテリトリーでしょう。地の利が充分な子供一人はよく訓練された強行偵察隊一個班に匹敵しますんね。……三佐が考えてますより、相当やっかいな相手ですわ。」

「……そ、…それを制圧するのに、どの程度の兵力が必要だって言うの。」
「山岳歩兵が一個師団。あぁ、師団ってのは山狗が三つ四つくっついて大隊。そいつがさらに三つ四つくっついて連隊。そいつがさらに三つ四つで師団ですんね。」
「……さ、三十倍の兵力が必要だと言うの⁉」
「もちろんそれだけじゃ足りません。砲兵陣地に要請して山ほどの事前砲撃が必要ですわ。航空支援が得られるなら、ファントムにナパームもバラまかせたいところですんね。」
「冗談じゃないわ、そんな兵力ここにはないわ！ ……じゃあそれにはるかに満たない山狗で山狩りをしたら、…どうなるって言うの‼」
「まぁ、楽じゃないでしょうなぁ。へっへへへはははははは…！」
小此木は不敵そうにけらけら笑う。
…楽ではない、と言っているが、それを成功させるのが自分だ、という自負も感じさせる。
「連中のテリトリーでしょうが、逃げ込んだのはついさっきです。陣地もなけりゃトラップ設置の暇もないはずだ。地の利を活かすにゃ時間が足りないはずです。」
「…………………………。」
その小此木の評価を聞きながら、鷹野は一抹の不安を過ぎらせていた。……かつて、…表向きだけ親しくしていた沙都子に、……色々自慢をされたことがなかったっけ…。

裏山には自慢のトラップが山ほど仕掛けてあって、…なんて話。……あれって、どこの山のことだっけ……。
「雲雀より本部、標的の一部を発見。Rは視認できない。現在追跡中！」
「……人質にできれば十分よ!!　Rがいなくても捕らえて!!」
「鶯、聞こえるか！！　近隣の班を応援に回して退路を断て!!」
「鶯了解、バックアップする。」

「くっくくくくくくく!!　そりゃそうだよねぇ。退路を断ちたいよねぇ…！」
太い杉の木に倒木が倒れかかり、天然の櫓(やぐら)を作っていた。その上にベニヤの板などで作られた小さな小屋が設けられている。
……沙都子が裏山にいくつも作った秘密基地のひとつである。ここからは非常にいい形で麓(ふもと)が見下ろせ、戦況を見極めたい魅音にとって極めて好都合だった。
「すごいね…。魅ぃちゃんの予想通りだね…!!」
「さぁって、我が部にどの程度かなうか、お手並みを拝見しようかねぇ!!」
「レ、レナたち、勝てるかな、かな！」
「くっくっくっく！　なぁに言ってんだか。向こうの指揮官は無能だね。私たちを攻めるなら

山岳訓練を終了したベテラン歩兵が一個師団はいるね！　それをせいぜい中隊規模でとはね。未熟にもほどがあるよ‼　さぁて、何人が私たちを相手にして、この山を無事に下りられるかなぁ⁉」

「くそったれ‼　……雲雀4、攻撃を受けた！　くそ、逃がすな‼　丸太を山ほど転がしてきやがった‼　雲雀6が捻挫で追撃不能。残りで追撃する！」

「へっへへへへ、逃がすなよ。追って追って追いまくれ、休ませるんじゃねぇ‼」

「雲雀11、トラップによる攻撃を受けた！　雲雀12、13が多分、脳震盪だ！　あんなの当たり所がわるかったら死んでるぞ‼」

「ひ、雲雀16、トラップにやられた。鋼線が足に絡まって脱出できない。ナイフじゃ切断できない。番線カッターを持ってきてくれ…‼」

次々と混乱した無線が錯綜する。

……小此木は、先ほどの山狗に有利だと評価した部分の修正を迫られなくてはならなかった。

「鶯10より本部‼　くそったれが、井戸を偽装した落とし穴だ‼　隊員二名が閉じ込められて救出不能‼　応援を送れ‼　って⁉　うわッや、やめ！！！」

「どうした鶯10‼　応答しろ鶯10‼」

「………う、…鶯10だ、…やられた…。俺を後から突き飛ばしやがった…。鶯9〜11は井戸内。健在なれど脱出不能、…くそ!!」
「本部より鶯、バックアップが奇襲を受けた。行動が読まれているぞ!! 注意しろ!!」
「鶯1だ。聞いていいか、どうして動きが読まれるんだ!! 上空に無人機の影はないぞ!!」
「雲雀1より本部、追跡に失敗…! 見失った! む、無理だ、この山はトラップだらけだぞッ!! この距離を追うだけで何人負傷したってんだ!!」
「白鷺1より本部、Rを含む数名を発見した。追跡している。至急応援を送れ!!」
「……へ、へへへへへ!! 連中め、少人数の利点を活かして分散しやがった。…撹乱してトラップで搦め捕ろうってんだな…。白鷺1、用心しろ!! 向こうはお前らをトラップ地帯に誘き寄せるつもりだ!! 敵は各個分散し陽動と奇襲のゲリラ戦術で抵抗してくる気だ! 高度だぞ!! すでに他班でトラップとアンブッシュで負傷者が多発している。用心しろ!! 気合入れてかかれ白鷺1!! ………白鷺1⁉」
「…し、白鷺2より本部! 白鷺1がトラップに!! 誰か班長を吊るしてるロープを切れ!! 残りは追撃しろ、Rを逃すな!!」
「鶯1より本部。鶯7たちが沈黙した。襲撃にあった可能性が否定できない。応援を送る許可を!」

「白鷺5、隊員三名が上空から降ってきたドラム缶の直撃を受けて昏倒した！　何なんだここは!!　こんなのがまだまだあるってのかッ!!」
「……ひ、…雲雀13だ。…やられて倒れてたようだ。…………あ!!　今、一人発見した!!　追跡するッ！！！　野郎、よくもやってくれやがったなあああぁッ！！！」
「よ、…………よせ…、やめろ雲雀13！！！　お前がひとりでかなう相手じゃないッ！！！」

「をっほっほっほっほ!!　鬼さんこ〜ちら〜〜ですわよ！！！」
「クソガキがぁああぁ!!　待ちやがれぇえええ！！！」
沙都子がするすると逃げていく後を、鬼のような形相で雲雀13が追う。
大柄な彼の体を小さな梢たちがちくちくと痛める。それらに顔をしかめながら懸命に追う。
…だが沙都子の逃げ方は涼しいものだ。自分の庭を走っているだけなのだ。自分の庭で怪我をするわけがない！　駆け抜ける途中。トラップに搦め捕られて身動きできなくなった隊員たちに何人もすれ違った。
……追えば追うほど、そんな隊員たちとすれ違えばすれ違うほど!!　自分が追っているのは子供ではなく、…子供の姿をした別の存在であると思えてしまう!!　森が切り開かれ、丸太の積まれた、まるで伐採の途中のような広場に出た。……そこは、異様な光景だった。逆さ吊り

になっている別の班の班員や、……落とし穴から逆さに靴を覗かせて身動きできない隊員。手錠のようなもので足を木の根っこに拘束され、何とか逃れようともがく隊員。

………そんな隊員たちを抜けて、その広場はあった。全員から嫌な汗がどっと噴き出る…。

自分は、…今、トラップに誘われている、これは罠だ、俺ははめられているんだ…!! しかも、……その少女は悠然と広場に立ち止まり、切り株の上に立って、こちらへ余裕の眼差しを送っているのだ。………くそ、誘ってやがるッ!!!

「雲雀13だ…！　一人を広場みたいなところで追い詰めた！　捕まえてやる、捕まえてやるッ!!!」

「こちら鶯7…、お前の後で吊るされてる男だ…。そいつは少女じゃない、…少女の姿をした悪魔だ…。そいつの後を追えば、地獄まで誘い込まれるぞ…!!」

「本部より雲雀13！　それで十分だ！　応援を待て!!　今そこに最寄の隊員を向わせている!!」

「をっほっほっほっほ。どうなさいましたの？　私を捕まえたければ、あともう十メートルくらいは歩く必要がございますわよ？」

十メートルだ。…たった十メートルで、このクソ生意気な小娘の首根っこを掴めるんだ…!!

俺は十メートルを走破するのに何歩かかる？　適当に十歩と見積もって、…つまり俺は十回、

トラップを踏む危険を冒さなきゃあの切り株に辿り着けないってことじゃないか…。しかし、…たった十歩なんだ。…たった十歩で捕まえられるんだッ!!
「そうお思いなら、まずは最初の一歩を踏み出してみればいいではございませんの。ほらほら。」
「……………く、…………くそぉおぉ…!!!」
最初の一歩は、……どう踏み出す？　あの草むらはいかにも何かが潜んでいそうだ。…いや、あの剝き出しの土も怪しい。……なら切り株の上に逃れるか？
いやいや!!　それこそが向こうの狙いだ!!　全身からじわじわと嫌な汗が滴り続ける…。くそったれ、たった十歩なんだ。最初の一歩で俺は何でこんなに緊張してやがるんだッ!!
「……雲雀13、ここから見る限り切り株の上は安全そうに見える。切り株だ。」
「…よせ雲雀13。さっき根っこで足を縛られてた鶯8だ。切り株はきっと罠だ。辺りは切り株だらけというのが胡散臭い！」
「……聞こえるか雲雀13！　ブッシュは危険だ！　草むらは踏むな！　剝き出しの土もヤバイ!!」
「く、くそったれぇえぇえ…。じゃ、どこを踏めばいいんだよ、空を飛んでけってぇのかよ…ッ!!!」

「まぁだいらっしゃいませんの？　私、退屈ですからそろそろ失礼しますわよ？　をっほっほっほっほ！」

「……こ、こちら簀巻きにされて転がってる鴬9だ…。今、標的のひとりに、……その、頭を撫でられている。…そこはトラップフィールドだと言ってるぞ…。………え？　…………その待ち構えてる小娘の、…最高傑作が設置されてるらしい。……ゆ、…油断するな……。」

　ふ、……ふざけやがって…、最高傑作だと？　傑作って何だよ！　さっきまでのあのトラップ群が傑作じゃねえってのかよ!!　俺たちはプロだぞ、給料もらってやってる本職の戦闘集団だぞ!!　それが、こんな小娘に翻弄されて、勝てないってのかよ、勝てないってのかよッ！！！　ふざけるなそれははったりだ!!　こんなところにこれ以上、どんなとんでもねぇトラップがあるってんだ!!　はったりだ、はったりに決まってる!!　ふざけやがって、俺がてめえのバケの皮を剥いでやるぜッ！！！　ま、……まずは右、………いや、左足からだ……ッ！！！

　その時、待ち構える少女が片手を広げて突き出した。………それは、…待てというサインなのか…？

「……五歩ですわ。」

「何ぃ……？」

「……何事もなく、五歩を無事に歩けたらあなたの勝利ということでいいですわよ。」
「ほ、……ほほぅ、それは大した自信じゃねぇか…。…もし、…俺が五歩、何もなく歩けたらどうするつもりだ…？」
「そうですわねぇ。私の敗北を認めて降参してさしあげてもよろしくってよ？　私、……今日は最ッ高にトラップ脳が絶好調ですの。……あなたを五歩で搦め捕ってご覧にいれますわッ！！！」
「く、…くそがきゃあぁあぁ…！！！」
「落ち着け雲雀13、挑発に乗るな!!」
「……そいつは悪魔だ、外見に騙されるな。そいつは人の心を読むぞ、俺たちのかなう相手じゃねぇ…！」
「本部より雲雀13！　深追いするな！　十分だ!!　近くまで鶯が応援に来ている。その場で堪（こら）えろ!!」
「……そ、………それじゃあ、俺の負けってことじゃねぇかよぉおぉ……。五歩だと？　五歩だと!?　くそ、乗ってやるぜ、五歩だな!?　たったの五歩だな!?」
「男が何度もくどいですわね。愛の囁き以外は、男は一言で十分ですのよ？」
「くッ、……このがきゃあああぁあぁあ！！！」

「雲雀13！！！　読まれるぞ、激情は思考を読まれるぞ！！！」
「……落ち着け、クールになれ雲雀13。…そうさ、俺は雲雀の13番。ゴルゴみたいにクールなのが取り得さ。……だから熱くならずによく考えろ。……そうさ、俺の思考はすでに搦め捕られていた。……ヤツに向って五歩進まなければならないって時点で、思考を搦め捕られてたぜ…!!」
「……ほほう？　それはどういう意味でございますの？」
くっくっくっく、はっははははは!!　それはなぁこういうことさッ！！！
「前じゃねぇぇぇぇ、後に五歩、歩くんだよぉおおぉ！！！」
決まったッ、決まったぜ俺!!
こいつはトンチだったんだ。五歩歩けば俺の勝ちだったんだ!!　前である必要はねぇ、後に下がったってそれは五歩なんだ!!　どうだよこの悪魔め！！！！
「……だから、あなたは五歩でおしまいなんですのよ!!」
無線の向こうから聞こえた激しい音とノイズは、雲雀13が食らったであろう、凄まじいトラップの威力を、間接的によく伝えていた。
「ひ、雲雀13、沈黙!!」

「あのバカ…、すっかり乗せられやがって…ッ!!」
彼に限らず、もはや大勢の隊員が犠牲になっている。凄まじい損害だった。
しかし、獅子奮迅の活躍は沙都子個人によるものだけではない。魅音が地形と敵の布陣を完全に理解した上で沙都子に知恵を授けていたからだ。
沙都子は自身の仕掛けたトラップを律儀に地図に記していた。その地図と魅音の指揮能力が加われば、それは恐ろしいまでの戦闘力を発揮する!! 沙都子の次に裏山に詳しい梨花と羽入は、魅音からの指示を圭一やレナに逐一伝えては、待ち伏せ攻撃に移る。
罠は踏むと発動するものばかりではない。圭一たちが潜み、最適のタイミングで発動させることで効果を得るものもある。圭一とレナは、魅音の指示で次々転戦し、時には潜み、時には自ら攻撃し着実に追撃戦力を削ぎ落としていた。沙都子のトラップによる撃墜数が一番多いが、多分、圭一のバットによる奇襲も次に多い。
トラップで虚を突かれたところへの強襲は、訓練された山狗隊員でもそうそう対応できるものではない。人間にはリアクションタイムというものがあるという。米軍の研究では、平均的な兵士でそれは十五秒。
…つまり、奇襲を受けてから十五秒間はどんな兵士であっても無力なのだ。その十五秒の空白をいかに短くするかが彼らの訓練の真骨頂なのだ。だが、それはどんなに鍛えてもゼロには

ならない!!

彼らが相互通信する無線も、実は混乱をより助長させる一因となっていた。続々と耳に入ってくる他班のダメージ状況は彼らを不安に陥れ、ますますに足を遅く、そして思考を単純にしていく。

その心理状態の時点で、魅音にとっては山狗など殻を剝いてまな板に載せた剝きエビも同然なのだ。

「魅ぃ！　圭一は大成功しましたです。仲良く簀巻きにしてにぱ〜☆　なのです。」

「……あぅあぅ!!　沙都子の方もうまく行ったようなのです！　みんなみんなやっつけてしまいましたです!!」

「了解。この攻撃での確認戦果は5ね？　くっくっく！　どうするよ敵さん。南部方面軍はこれで戦力の三割は脱落だよぅ？　負傷者の対応に通常一人から二人。ってことは手の空いた兵士はほとんどいないってわけだ。まっとうな指揮官なら本部に撤退を申し入れるねぇ！」

「こちら雲雀1…、隊員に負傷者多数。負傷者への対応で追撃に手が回らない！　これ以上の追撃は断念せざるを得ない…!!」

「雲雀1、損害は大きいが我が方は確実に敵の行動圏を狭めているぞ。撤退は認めない。現状兵力で戦線を維持せよ！」

「…く、くそ…!! 雲雀1より全員！　本部から死ねと命令だ。装備を再点検しろ、進軍を再開するぞッ！！！」

「……くっくっく！　でも鷹野さんたちは頭に血が上ってるから、それを許可しない。指揮官は撤退を却下され、士気が低下したまま追撃を再開。…こいつは叩く絶好のチャンスだね!! 梨花ちゃん！　レナと合流して、Z地区に誘い込んで!!　あそこのトラップはだいぶごっついよぅ!!　羽入は圭ちゃんに、X地区に転戦しろと連絡を!!　くっくっくっく、こんな面白いゲームはないねぇ、くっくっくっくっく！！！」

「あぅあぅあぅ！　魅音が絶好調なのです。」

「……今の魅音が生まれる時代を間違えていたら、歴史に名を残しかねないのです。」

「くっくっくっく!!　私に言わしゃ、ネルソンもトーゴーもまぁまぁってとこだね!!　もう裏山全体が手に取るようだよ、くっくっくっく！！！」

魅音は自分の力を二乗するタイプなのだ。…落ち込む時はとことん落ち込むが、…絶好調の時はとにかく大変なことになる…！　この血こそが、雛見沢御三家当主の血!!　今の魅音が歴史的合戦の地にいたなら、ことごとく歴史を引っくり返したかもしれない。

…ナポレオンと組んでいたら今頃シベリアはフランス領。ヒトラーと組んでたら今頃ヨーロ

ッパは千年王国だ‼
そして、魅音にとってこの裏山の戦いは、所詮、陽動に過ぎないのだ。

■診療所突入

裏山での戦いは魅音の目論見通り大混乱を引き起こしていた。彼らがもう少し冷静だったなら、大人の姿が未だ発見されていないことに不信感も持てただろう。…だが、次々と押し寄せる攻撃情報に混乱し、その大切な一点に気付けずにいた。もちろん、これも魅音の計算による。陽動の規模の大きさが結果的に富竹救出隊という別働隊がいることを隠蔽し、そのまま彼らへの援護射撃となるのだ。
そのためにも、魅音は徹底的に派手になる戦い方を選んだのである。同時にそれは魅音のもっとも得意とする戦い方でもある。
今や魅音は陽動などで済ますつもりはない。この山で山狗主力を撃滅するつもりでいた。しかし、…つくづく恐ろしいのは地の利だろう。
防御側は攻撃側の三倍有利であるという定説の大部分は地の利が占めると言っても過言ではない。ならば、富竹救出隊の方はどうか。……攻める側の不利があるのではないか。入江を

先頭に救出隊四人の姿は、診療所脇の茂みにあった。
「行きましょう。こちら側をフォローするカメラは故障中で、来期の予算で修理することになってますから、大丈夫です。」
「……こんなとこから堂々と？　うっわ、怖いね…。」
「敵は監視をセキュリティに依存しきってるようです。問題ないでしょう。」
「行きましょう。まずは、壁沿いに伝い、所長室の裏へ？」
「はい。私が出る時、窓は閉めませんでしたからまだ開きっぱなしでしょう。そこから入ると、すぐ脇が裏口で、そこには監視カメラと一階保安室があり、今日は二名が常駐しているはずです。地下区画前は厳重に監視カメラで見張られていますので、必ずバレるでしょう。」
「…地下に行く前にその一階の二人を制圧しないとね。退路確保は基本でしょ。」
「まずは所長室から入って、一階保安室…。」
入江の案内する監視カメラの死角から建物に張り付き、慎重に窓の下を潜りながら、所長室の窓に辿り着く。
…もし村の子供がこんな光景を見たなら、何をして遊んでいるのかとちょっかいをかけてくるだろう。……今日が日曜の休診日でよかった。入江が恐る恐る室内を見ると、……そこは入江が出て行った時のままになっていた。窓も網戸のままだった。そこから、銃で武装した四人

がそろりそろりと入り込む。赤坂がすぐに廊下への扉に耳をつけた。そして気配はないとサインを送る。
休診日だから、この診療所にいるのは山狗だけだ。…今日が日曜で本当によかった。診療所の中はシンと静まり返っている。…染み入ってくるのはセミの声だけだ。所長席の上には卓上時計があり、……もうじき十一時半を指そうとしていた。……こんな時でもお腹は空くんだなと、詩音は人間の偉大さに感服していた。葛西と赤坂がそれぞれ自分の武器を点検する。
入江が鍵のかかった棚の中から、入江診療所建設計画と書かれた大きな青焼きの図面冊子を持ってきた。
「……ここが所長室です。ここが一階保安室。出てすぐそこです。監視カメラはこの赤鉛筆がそうです。」
「一階保安室の制圧自体は難しくなさそうだ。…問題は地下ですね。」
「……これが地下の研究区画です。ここが入口。図面では表向きは、職員用の二階への階段室になっていますが、実際は地下区画への入口が隠されています。そして、階段で地下へ…。」
「よくもこんな大きな地下を作ったものです。…地上部分よりもよっぽど広いですね。」
「……それは、地下こそがこの診療所の真の姿である証拠です。」
「で、これが監督のパスカードでないと入れない扉、と。……パスカードが封印されて使えな

くなってるなんてことは？　万一パスカードが使えない場合にゲートの物理的突破は可能？」
「非常に厳重な扉で、証拠隠滅時にはこの扉を封鎖して内部に注水して封鎖する決まりになっています。」
「……ということは気密扉か。この容積を満たす水圧に耐えるということは、相当に頑丈だ。」
「ってことは、パスカード以外の方法では不可能、ってことだね。」
「一般用のパスカードは個別の登録抹消が可能なはずですが、私と鷹野さんのパスカードは将校用の特別カードと聞いています。登録抹消には各個に設定した八桁のパスワードが必要ですから、事実上、彼らには抹消できません。」
「…将校自らが不法使用することは想定していない、ということですね。」
「それでも駄目な時は、一階保安室の人間に開けさせせましょう。保安要員のカードなら、将校の次に強力なはずです。」
「素直に協力してくれるとは思えませんが？」
「くっくっく、協力しないんなら、カードと指紋認証用に指を一本、ちょん！　と拝借するまでです。」
「……そ、そうしたくはないですね。私のカードで開くことを祈るばかりです。」
「地下のセキュリティルームはどれですか？」

「パスカードで入ってすぐ脇のこの部屋です。この部屋には空調もテレビもありますから、基本的に保安の方はそこに全て詰めています。上で二人をやっつければ、残りの六人がいるはずです。」
「六人か…。一気に制圧しないと、難しいね。…一瞬で制圧しないとほぼ確実に警報を鳴らされる。先に警報を切断する方法は？」
「……ちょっとわかりませんが、予備電源や予備回線があるはずです。」
「現実的じゃないか。セキュリティルームを制圧する方が現実的ですね。保安の連中の武装は？」
「一階の保安は非武装ですが、一階保安室には一応、銃が置かれているという話です。地下の保安は全員が拳銃を携帯しています。あとセキュリティルームにはもっと強力な連発式の銃が何丁か置かれていたはずです。」
「……屋内での用途から考えて、多分、口径の短い機関拳銃のようなものでしょう。長距離での命中率はひどく落ちますが、小回りが利き、近距離では十分な火力を持つ危険なものです。」
「地下で撃ってきた連中、MP5でしたし。……そいつが何丁もってのはちょぃと厄介ですね。…でも、ここを制圧できれば、…地下は私たちの手に落ちる。………監督、悟史くんは!?」
「……本当は動かしたくないところですが、…敵の巣の中に放置はできません。悟史くんも安

全なところに移しましょう。私の付き添いも必要です。」
「悟史くんは、……どの部屋にいるんです……？」
「……この奥の、監禁病室にいます。…ここは去年から、彼の専用の部屋になってます。」
「…………悟史……くん……。」
詩音の目が、使命感で一際強く引き締まる…。一階保安室の中では、さきほど入江を追った保安の隊員たちが再びいて、さっきうやむやになってしまったポーカーの続きをしていた。彼らも、山狗が総動員で山狩りをしていることは知っていて、機関存続の危機らしいことは十分知っていた。
だが、今の彼らの役目はここに詰めていることだ。…彼らはその役得として再びポーカーに勤しんでいるのだった。もっとも、実際はポーカーは上の空だ。先ほどの大捕り物の興奮が冷めず、ああだこうだと武勇伝に沸きかえっているのだった。
タイヤを狙えという指示だったが、所長を狙えという指示だったなら面白かったのに。そうすりゃ元々逃がすことなんてなかったんだと笑う。……人は緊張感が途切れた時、それに見合う分だけ隙を作る。その好例だった。
だから、制圧は二秒で終わった。
「……両手を頭の上へ。」

彼らはプロだった。…ゆえに、葛西や赤坂、詩音の持つ銃がモデルガンなどではないことが瞬時にわかった。…そして、園崎家地下で銃撃戦があったらしいという話も聞いている。

……銃を玩具にしている素人ではない。相手は発砲を躊躇わないベテランなのだ。…ゆえに、彼らは屈するのが早かった。彼らは拘束用の手錠を各自持っていたため、楽に彼らの自由を奪うことができた。まさか彼らも、それで自分たちが拘束されるとは思わなかったに違いない。

しかも、拘束されるのが便所とあっては尚更だ。職員便所の便座に座らせ、後手に配管を通す形で手錠をかける。口はタオルを詰めてガムテープでぐるぐる巻き。

……詩音は、一度こういうのをやってみたかったと面白そうに笑い、葛西を失笑させていた。

「ここまでは順調ですね。……問題は、地下です。監視カメラで必ず気付かれます。」

「そのカメラはモノクロ？　画面は四分割？」

「確かそうだったと思います。よくある防犯カメラの画面です。」

「ふ〜ん、ってことは解像度はよくないですね。なら、……くっくっくっくっく、私、いい〜手を思いつきました。」

「……詩音さん、捕虜の虐待はあまりよくないのでは…。」

「むがふが……!?」

……拘束された二人の隊員は、トイレで拘束されるのみならず、さらに気の毒な目に遭わさ

れなければならなかった…。
　セキュリティルームのスピーカーからは裏山で戦闘を繰り広げる山狗たちの無線が絶え間なく流れてきた。保安隊員たちは腕を組みながらそれに耳を傾けている。刻々と入ってくる戦況を聞く限り、明らかにこちらが劣勢なようだった。…トラップ地帯で次々に待ち伏せや奇襲を食らい、予想外の損害を受けている…。
　罠にはめられたのは間違いなく、下手をすれば戦術規模でなく、戦略規模ではめられたのではないかとすら思われた。……山狗は見誤っていたのだ。彼らが雛見沢を脱出するために山中に入ったのだと思った。
　…実際は違ったのだ。綿密に準備された敵陣地に誘い込まれたのだ。無線の向こうでは、興奮した隊員たちのやり取りや、怒鳴り続ける鷹野の声、損害を強いられながらも着実に追い詰めようと彼らに檄を飛ばす小此木の声が飛び交い、…文字通り戦場のような様子だった。
「……ザザ！　鳳1より鳳。休憩時間は終りだぞ、俺たちも出撃する！　壊滅した白鷺のポジションを埋めるんだ。味方の損害率はすでに致命的状況だが、敵は確実に後退を重ねてすでに包囲されつつある。もう一息だ！　温存した鳳で一気に圧殺する！　陣頭指揮は三佐が直接執られるそうだ。俺も出るぞ、これで決着させるッ!!」
「……おい、隊長が出るぞ！　鳳も上がる、総力戦だ!!」

「何てやつらだ…。ってことはすでに被害は小隊規模にもなるってのか⁉」
「…俺たちは何者を相手にしてるんだよ‼　相手はどこの特殊部隊だってんだ⁉」
無線から聞こえる戦況変化に一喜一憂するセキュリティルームの面々。
その時、ピンポ――ンという可愛らしいチャイム音が鳴った。その音は、地下区画の入口に人が入ると自動的に鳴る警告音だ。この音がしたら、誰が訪れたのかを画面で確認するのが規則だ。
その画面を見た隊員は、一瞬思考が停止してから驚く。
「お、おい！　入江所長だぞ！」
「何⁉」
地下区画入口のモニターを見ると、一階の隊員二人が、所長と少女の二人を拘束しているようだった。
「……これ、…所長だよな？　どういうことだ⁉」
「そういうことか、わかったぜ。……向こうは陽動で、こいつらが富竹救出に忍び込もうとしたってことだ…。」
「さ、三佐に所長を連行したと連絡しろ…！　ん…？」
ピーという音がして、端末に使用されたパスワードの情報が出ている。

将校用パス：登録番号1（特1種）二等陸佐：入江京介（所長）
パスワード：＊＊＊＊＊＊＊＊：一致
指紋認証　：＊＊＊＊＊＊＊＊：一致

「………………⁉」

……妙な話だった。入江を保安が連行してきた。そこまではいい。だが、何で所長のパスカードを使用するんだ…？？　指紋認証まで入江にやらせている。どうしてそんな面倒な真似を？　自分でやった方が早いだろうに？？

「あッ！！！」

隊員が勘付いた時にはもう遅かった。地下区画入口は開かれ、四人が一斉に中に飛び込む‼　その画面を走り抜けた四人の足音は瞬時にセキュリティルームの前へ疾走してきた。……やられたッ‼　扉が開いた瞬間、保安隊員たちが一斉に銃を抜き発砲するッ！！！　赤坂は、もうわずかに引っ込むのが遅れていたら蜂の巣にされていただろうことにヒヤリとした。その隙に隊員の一人が机を横に倒す！

机の上の紙コップなどがガサガサ落ち、床にコーヒーをぶちまけた。そして机をバリケード

にする！　彼らが牽制射撃をしている間は、反撃できない。
その隙に他の隊員が、一人は非常警報のスイッチを押し、他は壁に掛けてあった、あの保安隊御用達の短機関銃を取る。さらに一人は防毒マスクを取った。わずか数秒でここまでの防戦態勢を取れるとは…さすがだった。この状態では相当性質の悪い銃撃戦になり、制圧に時間がかかってしまうだろう。
地下区画には警報のサイレンが鳴り響き、奇襲が失敗してしまったことを教えてくれた。
「……………ち！　一気に制圧し損ねた…！」
「でも敵は全員この中、袋のネズミです。この部屋に釘付けにしている内に、悟史くんと富竹さんを救出しちゃいましょう！」
多分、警報は表へ出ている山狗にも届くだろう。となれば、もたもたしていれば敵が戻ってきて彼らは退路を断たれてしまう。袋のネズミはこっちになるのだ。
「……そ、……そうだ…。確か、セキュリティに侵入者対策で確か、……えっと、」
入江が今頃思い出したようにあたふたしだす。…そういうことは侵入する前に思い出してください と詩音がぼやく。そして、入江がそれを思い出す前に警告音声がそれを教えてくれた。
「エントランス区画にて緊急事態が発生しました。エントランス区画にて緊急事態が発生しました。問題が解決するまで研究施設内の全区画は緊急閉鎖されます。エントランス区画のスタ

ッフはセキュリティルームに集合し、防毒マスクを着用してください。保安隊員の指示に従ってください。百二十秒後に研究区画エントランス区画には鎮圧用ガスの自動散布が行なわれます。…繰り返します。」

「……どうやら、一分以内に制圧して警報を解除しないとヤバイことになりそうだな…。」

「鎮圧用ガスって何ですか。毒ガス!?」

「た、確か、ジフェニルシアノアルシンです。極めて高い濃度で吸えば危険ですが、命を直ちに脅かすものではありません。吸入後数分で作用。症状はいくつかありますが最大の特徴は約三分間くしゃみが止まらなくなることです。」

「……あか剤というヤツでしょう。昔、軍が陣地制圧に使った強力なヤツです。」

すぐにここを逃げるかセキュリティルームを制圧するかだが、この区画は閉鎖されたというから脱出はできないだろう。かといって、中には短機関銃で重武装した隊員が数人もいて、少しでも顔を覗かせようとすると、凄まじい弾数をお見舞いしてくる…!

「…くそ、駄目だ！　これでは狙って撃つなんて到底できない！」

「インドアの基本は……グレネードか…。くそ、そんなのないって…!!」

「焦って飛び込めば蜂の巣です…。……どうすればいいんだ…!!」

「…………悟史くんは……目前だというのに……。……悔しい……!!」

詩音は自分の銃に額を押し付けながら、ぎりぎりと悔しがる…。
…それを見て、葛西が立ち上がり、言った。
「皆さん、………私に任せてもらいましょう。」
セキュリティルーム内の保安隊員も、決して状況は予断を許さなかった。
ガスが吹き出れば全ては決着するだろうが、向こうも座してそれを待ちはしまい。多少の損害を顧みず、突撃をしてくるはずだ。それを蜂の巣にはできるだろうが、かなりの至近距離戦になる。味方にもかなり厳しい被害が予想された。
……だからこそ、ガス噴出の秒読みが減れば減るほど緊張感が募っていく…。………だから、
…彼らが開け放った扉が、…再び閉められるなんて想定もしなかった。その扉に対し、数丁の短機関銃が火を噴き、扉に小さな穴をいくつも開けた。
だが、……それで静まる。
………あいつら、……何を考えてるんだ…？
隠れるところなどない。
ガスが出るまでもうすぐなのに、…何だって扉なんか閉めやがったんだ…？　何の意味があるんだ？？　その時、ものすごい爆音がして、扉に握りこぶしほどの穴が出来た。……のみならず、それをさらにブチ抜いて、セキュリティルームの奥の壁にまで同じ穴を開けた…!!

「……マ、マグナム⁉　ち、違う、スラッグだ‼」
その問いに、扉の向こうから低い落ち着いた声が答えた。
「…………ご名答です。こいつぁ人間を撃つ弾じゃありません。威力は、皆さんほどならすでにご存知でしょう。」
「……………………く…………！」
スラッグ弾の威力は至近距離に限定するとはいえ絶大だ。……何しろ、散弾銃で発射するのに散弾じゃない。
…本来散弾を放つべき銃で、絶大な威力の巨大な弾を一発だけ撃つ。…それがスラッグ弾なのだ。それは本来なら狩猟用。人ならざるものを撃つためのものだ。……人体に使われたなら、…腕や足なら砕け散り、頭部だったら粉砕され痕跡も残らないだろう。それはもはや銃弾とは呼ばない。砲弾と呼ぶのが相応しい…！　そしてその絶大な貫通力は、扉をブチ抜き、彼らがバリケードにする机もブチ抜き、さらにその後に隠れる隊員を丸ごと貫通して壁にまで至るだろう。
……その異常な、あまりに過剰な威力を、彼らは理解していた。彼らの銃は対人戦を想定した小さい弾丸を多数放つもので、ドア越しでは信頼性に欠ける。
……だが、向こうはドア越しでもまったくお構いなし‼　何もかもをブチ抜くッ！　こうし

て机の陰に隠れていても何の意味もないのだ…!!

「……あなた方を粉々にできることがご理解できたはずです。……死にたくなかったら警報を切っていただきましょう。」

「…………………お、落ち着け。…もうじきガスが出る。それまでの辛抱(しんぼう)だ…。」

「……その前に、皆さんが内臓をブチまけることになるとは、お考えが至りませんか。」

葛西の声が、…いつの間にか凄みを増している。

…それは、…散弾銃の恐ろしさを真に理解した者にしか出せぬ凄みだった。

「時間がありません。五秒で決を取ります。……五つ数えて警報が切れなければ、………覚悟していただきます。」

「……ど、どうする…。ガスまでまだ六十秒くらいあるぞ畜生…!」

「焦るな、向こうだってビビってるんだ。飲まれるんじゃねぇ…。」

……その時、腹の底にまで響くような低い声が轟(とどろ)き渡る。

「おい。………人が親切に話してるのに聞いてねぇのか……?」

…それは同じ人物の声であるのは間違いない。でも、そのあまりの変わり身に彼らは驚かずにはいられなかった。

「この葛西辰由(たつよし)がてめぇらを生かしてやると言ってんだ。…ありがてえとは思わねえのかガキ

ども が。……お前ら、俺を舐めてんのか。……あぁ？　…………………。返事せんかガキどもがぁああぁあッ！！！」

轟音、爆音、破裂音が瞬時に吼え猛り、扉の上半分を一瞬でバラバラに吹き飛ばした。室内に膨大な数の鉛球が跳ね返り、壁を砕き天井の照明を叩き割って破片やガラスの雨を降らせる！！！　それは、吼え猛る散弾銃が見せるこの世の地獄だった。鉛の暴風が吹き荒れ、砕き、散らし、飛び跳ねて室内を粉々にしていく!!　彼らは伏せて頭を庇って祈るしかなかった。その鉛球が自分にかすらないでくださいと祈って降り注ぐ破片の雨に耐えるしかないッ!!　その最中に扉をブチ破って葛西が飛び込み、彼らが震えて隠れる机を蹴り飛ばして、伏せる隊員の頭を踏みつけて怒鳴りつけた……！！！

「ガキどもがあぁぁああッ、最初にミンチになりてえのは誰だッ!!　てめぇかコラ!!　さっき上等キメやがったのはてめぇかゴラぁッ!!」

「ちち、違う違う!!　ここ、降伏する!!　撃つな撃つな！！！」

「何いつまでチャカ、ひけらかしてんだコラ!!　殺されてぇか青二才ッ!!　てめぇとは築いてきた屍の山の高さが違うんじゃボケ!!」

「ぐぉあッ!!　すす、すんません、勘弁してくださいぃッ!!」

次々と銃を放ると、指示もしてないのに床に伏せて頭の上で手を組んだ。……あっという

間の制圧に、詩音すらも開いた口が塞がらなかった。何人もいて、全員が十分な武装をしていたはずだった。確かに葛西は強力な銃を持っていたが、………それ以上の貫禄勝ちだった。物騒な話だが、たとえ山狗であったとしても、…命をやり取りする修羅場を潜った数が、葛西とではまったく比べ物にならないのだ！

「何てめぇら昼寝始めてんだコラッ!! マスク剥がされてガス吸わされてぇのか!! とっとと警報止めろぃクソガキッ!!」

「てて、停止する停止する、撃つな撃つな…ッ！！！」

隊員のひとりが慌てて立ち上がり、コンソールのボタンのいくつかをいじり警報を解除した。

……葛西は悠然と構えていたが、実際はガスが噴射する数秒前だった。

呆然としていた詩音と赤坂は我に返り、慌てて室内に飛び込み、彼らの制圧に加わった。

「…………葛西、…………あんた、…………ひぇぇ………。」

「……こんな真似は二度としないつもりでしたが、……緊急措置でした。忘れてください。」

そこにいる葛西は、詩音のよく知るいつもの葛西に戻っていた。

…だが、結果的に葛西は誰も殺していない。園崎家地下で散弾銃を装填しながら、散弾銃は恐ろしい武器だと説いていたことを思い出す。

かつて鹿骨にその人ありと恐れられた、「散弾銃の辰」。……その片鱗であった…。

「急ぎましょう。どの道、すでに警報はならされています。長居はできません。」
「そうですね。急ぎましょう。」
赤坂と葛西は、彼らの腰にある手錠を抜き、それで隊員たちを拘束していた。
「…………さ、………悟史くん、………どこ……!?」
セキュリティルームが制圧され、悟史を阻むものがいなくなったことを知った詩音は…もう居ても立ってもいられなかった。さっき入江に図面で教えてもらったからわかる。確か、この奥の………。もう詩音は走り出していた。
「私も行ってきます…。悟史くんと富竹さんを助けないと…。」
「すみません、頼みます。」
「……!? 1、2、3、4、5。」
赤坂の全身にぞくりとしたものが走る…。
確か入江は、地下に保安隊員は六人と言ったはずだ……!! 詩音は……もう上の空だった。
……夢にまで見た悟史との再会に心を奪われていた。……そして、左の耳がまだ聞こえていなかった。しかも最悪なことに、……その保安隊員は、詩音の左側に待ち受ける形で潜んでいたのだ…! 詩音は自分の油断を後悔しなければならなかった。
物陰から飛び出してきた隊員に、がっちりと背後を取られ、太い腕で首を締め上げられる

ッ!! それは完全に決まっていて、詩音単独では脱出不能だった。それを、遅れてきた入江が見た。幸いなことに、彼らは入江に背を向ける形だった。だから、入江は今の一瞬だけ敵に奇襲するチャンスを得ていた。……しかし、……。……今日の一日で、…入江は自信を大きく喪失していた。今日一日、色々なことがありながら、自分はいつも何の役にも立たなかった。

……荒事は自分の専門ではないのだから役に立てないのは当然といえば当然なのだが、…それでも、彼は自分が何の力にもなれないことに深い失望を感じていた。……そんな自分にしか、今の一瞬を救えないなんて…。

もし時間が許すなら、すぐにでも葛西や赤坂を呼んできたい。どちらもとても頼もしい味方だ。必ずこんなヤツ楽々やっつけてくれる。だが、状況は悪かった。敵が背後を見せているのは今の一瞬だけ。

これを逃せば、多分、こいつは詩音を人質にし、この場に膠着状態を作り出してしまうだろう。…敵の応援がいつ来るかもわからない状況下での膠着状態は、座して死を待つのと同じだ。だからつまり、……誰の力も頼れない…。自分がやるしかないのだ。それに多分、許されるのはたった一撃。それで倒せなければこちらに気付き、すぐに膠着状態が始まるだろう。

………でも、自分に、一撃でこの男を倒せる方法などあるのだろうか……!? いや、…やらねば……。私も男だ。…それに、…私にしかできない倒し方だってきっとあるッ!! …入江は

白衣の内ポケットからシャーペンを取り出すと、それを握り締めた。……多分、それが彼が持つ一番の武器だったろう。
「え、…えぇぇぇぇぇぇいぃ！！！」
「うぎゃッ⁉　いてててて……、くそ、やってくれますね所長…、いててて！」
入江は渾身の力でシャーペンを思い切り首の後に突き立てたが、ちょっと怪我をさせて血を滲ませる程度のダメージしか与えられなかった。……一撃で倒せるわけなどない…！　そして男は銃を抜き、詩音の頭に押し当てて、予想通り膠着状態を作った。
「ご、………ごめんなさい…………。私、………悟史くんのことで、……頭がいっぱいだった………。」
詩音が涙を浮かべながら悔しがる。
「さて所長、月並みで恐縮ですが、他の侵入者ともども武装解除してもらいましょう。さっきのとんでもない音は相当デカイ銃を持ち込んでますね。撃たれたらたまりませんので。」
……思い出せ入江、さっきの葛西さんを…。できる、私にもできる……‼
「ふ、……ふふふふふふふふふ。…笑わせます。この入江機関の、そして研究区画で！　この入江京介に取引などできるつもりですか。」
「……な、……何ぃ⁉」

「これは、鷹野さんの開発したシャーペン型の偽装注射器です。……薬物については、ふっふふふふ、説明が必要ですか？」
「な、……何だとぉ………ッ‼」
普通の人間がこう言ってもすぐにはったりだと見破られただろう。
………だが、医者が白衣を着て、そして自分のテリトリーの中でそれを発言する時、…それには想像を絶する信憑性が宿る…‼　嘘だ、はったりだ！　……とは思いつつも、もう暗示にかかってしまい、男は自分の首の後が痒いような気がしてならない。
「H178は鷹野さんが生み出した17番台の最高傑作です。如何なる治療手段もなく、わずか数分で錯乱、妄想、頭痛、鼻水、鼻づまり、お通じの不通、数々の劇症を引き起こし、最後には自らの爪でおしりを掻き破って死んでしまいます。治療法はただひとつ。一分以内にこの解毒剤のお注射を受けることのみです‼」
「う、嘘だ、そんなのあるはずねぇ！！！」
「……ふむ。すでに三秒を経過ですね。そろそろ心臓を経由して全身に回り始めてくる頃です。全身のリンパ腺に痒みは出ませんか？　寝る時にいびきやオナラが出ませんか？　ふっふふふふふふふふ‼」
…詩音は何てクサイ演技だろうと思い呆れたが、……この怪しげな研究所の職員としては、

所長が語るこの怪しげな話を思わず信じてしまうのだ…！
「くそ、……わ、……わかった、降参する。早くその治療薬を打ってくれ…。」
「……はて、言葉遣いがなっていませんねぇ。」
「く、………わかりました、降参します。早く注射をしてください…。」
「駄目ですね。ご主人様への言葉遣いがなっていません。一度だけ指導しましょう、いいですか⁉　このお注射はお尻に注射しなくてはなりません。まず四つん這いになってズボンをずらしお尻を出します。その際、お尻は突き出すようにし両肩はぺったり床に付けるようにします。右手の親指の爪を噛みながら振り返り、そうそう‼　そしてお尻を振りながら、ご主人様、この淫らなメイドにお注射をくださいませと言うのです。言えませんかッ！！！　嘆かわしい、そもそも古来メイドはご主人様への絶対忠誠を誓い滅私奉公によって美徳と文化を築き上げてきたのです‼　そんな素晴らしい社会を作ったのに近年の日本はどうですか‼　メイドの心を忘れた若者は、ガングロ、ルーズソックス、派手派手なハワイ装束‼　あぁぁぁヤマトナデシコがなさけないッ‼　お肌をすべすべにお手入れして過剰な日焼けには要注意‼　ソックスはもちろんニーソですが、ガーターベルトも素晴らしい‼　いやでもたまにはハイソックスも素敵です！！！　そして培われるメイドの心‼　思えば日本はわびさびとメイドを忘れました。その結果がこの低出生率、超高齢化社会‼　今や熟年人口は増え続け、萌えメディアもその層

をターゲットにするのは時間の問題!!　今までHビデオコーナーではキワモノ扱いだったオバサンシリーズがやがては一大コーナーを築くようになるのです!!　オバサンとメイドの組み合わせはまさにトイレ用洗剤、混ぜるな危険ッ!!　それを混ぜるとなぜかメイドでなく家政婦になり、家政婦は見ていたシリーズになっちゃうのです!!　それはつまりメイドの絶滅ッ!!　その時、月は砕け悲しみの雨を地上に降らし、地球をアステロイドベルトが覆う!!　それこそが預言書に記された最後の審判の日ッ!!　全世界を偉大なるメイドカチューシャが覆いし時、真のメイド王が復活する!!　ふははははお静かに、諸君はメイド王の前にいるのだ!!　跪けッ!!　小僧から石を取り戻せッ!!!　困った時のおまじない、リテ・ラトバリタ・メイドッ!!　ふおおおおおおおおおおおお!!!　メイド　イン　ヘヴン!!」

入江の遠大かつ壮大かつ銀河的な大演説が終わる頃には、赤坂がもう駆けつけていて詩音を解放してくれていた。

「大丈夫かい、詩音ちゃん。」

「えぇ、ありがとです。……監督〜？　赤坂さんたち来て、やっつけてくれましたよ〜？」

「な、何ですってぇえぇ!?　まだメイド教育が終わっていないというのにッ!!」

「……先生、そいつは後ほどに。」

「さ、……悟史くん!!」
もう本当に誰も遮る者はいない。廊下を、詩音が転びそうになりながら全力疾走で駆け抜けていく…。
その、…正面だ…。詩音の前には、大きなガラス窓があり、…その病室が覗けるようになっていた。そのガラス窓に、ぶつかるように詩音は飛びつく。
……そこにはベッドがあり、……腕に点滴をうけながら、眠り続ける悟史の姿があった。額や胸などに脳波測定用の端末が貼り付けられ、それらが伸びた先の機械には、光の波形が刻まれていて、少なくとも彼が生きていることを知らせてくれた。
だが、その眠りはとても深いのかもしれない。……生きている、と言われなければそう見えなくてもおかしくないような、…真っ白な顔だった。
「……い、……生きてるんだよね……？　悟史くん、生きてるんだよね…!?」
「落ち着いてください…。入江先生、早く彼を…!」
入江は、悟史を運ぶための担架を持ってきた。…丸めて畳んであるそれを葛西が手早く広げる。
「は、早く悟史くんを、……悟史くんを……!」

「詩音さん……。彼を出す前に、ひとつだけどうしても約束してほしいことがあります。」
入江は、…この期に及んで詩音に条件を突きつけた。……詩音は何をもったいぶるのかと目に怒りを灯す。
「……今から彼を担架に移しますが、……決して起こそうとしてはいけません。いいですね、絶対約束してください。」
「ど、どうして!!　どうして起こしちゃいけないんですか!!」
それは、詩音が一番最初にしたいことだった。…彼が救い出され自由の身であることを最初に自分が教えたかった…!!
それを、するなと言われて詩音は憤慨した。
「辛いことですが、真実だけを手短に話します。………悟史くんはあの日、末期発症により、脳と心に深刻なダメージを受けました。……幸いなことに命に別状はありませんが、……悟史くんには、目に入るものの敵味方、真実と虚構の区別がつかないのです。……過度の被害妄想と恐怖に取り憑かれ、…それから逃れるために、窮鼠が猫を噛むように、目の前にいるのが誰であろうと襲い掛かります。……昨年、無用心なスタッフが整形手術を必要とするほどの大怪我をしました。………彼は、たとえあなたであっても例外としません。」
そこで詩音はやっと気付く。…悟史はベッドの上に毛布を掛けられているが、…その上から

シートベルトのようなものが二本掛かり、彼がベッドから起きられないようにされているのを。

……そして腕にも革製のベルトが通され。ベッドに固定されるようにされている。

……その革製のベルトは、…乱暴な何かの痕跡がいくつも刻まれてほころんでいた。

「…………………………そんな……。それって、……治るんですか…。」

「………………………。」

それは、……あまりに残酷な沈黙。……入江だって、………力強く治ると言えたなら言いたかった。

……でも、…彼は医者だった。無責任な言葉が結局は人を傷つけることがあるのを知っていた。……だから、何も言えなかった…。

「な、………何それ。…………何、……それ……。……じゃあ、………何？　悟史くんは、……もう、…むぅって……、言ってくれないの？　……私の頭を、………撫でてくれないの………？　何で？　……何で……!!」

詩音が涙を浮かべながらガラスをどんと叩く。

「いけません…。……彼のことを本当に大切に思うなら！　……どうか彼を起こさないでください…。それはきっと彼が望むことでもあるのです。……起こせば、…………その悟史くんの姿は、……あなたを必ず傷つけます。………そして、…悟史くんも、…その姿を、あなたに

見せたいとは思わないはずです。……ですから、………わかってください……。」

「………そ、…………そんな、…………ぁ。………ぅ、………ぅわぁぁぁあああぁぁぁぁぁぁ……。……ぅわぁあぁあぁぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁん、わあああぁあぁあぁあぁぁ……ん…。」

詩音は号泣しながら、ガラス窓からずり落ちるように、……床に伏せる。

そして床を掻き毟り、……悲しい再会と、やり場のない怒りに床を掻いた。……もし、床の下に悟史の笑顔があるなら、詩音は生爪が剝げるまで掻き続けたろう。でも、………悟史は床下でなく、……そこにいるのだ。………ベッドの上で、眠り続けているのだ…。決して起こしてはならないという眠りに抱かれて…。

「……ですが、決して悪い話だけではないのです。微弱ですが、……この一年、…脳波の傾向に回復の兆しが見られるのです。……人間の体は弱くありません、逞しいのです。それは脳も同じです。……脳に致命的損傷を負った人が奇跡的に回復を遂げたという報告は世界中にあります。………悟史くんは、帰ってこようとしています。……必死に戦っています。……そして、私も負けない。…帰ろうと戦う悟史くんをこちら側に連れ戻そうと、……私は今後も研究を続けます。………そして必ず、悟史くんを、……雛見沢に連れ帰ってみせます……！」

……脳が人そのものだ。…でも、脳も体の一部に過ぎない。そこに悲しい事故が起これば、

…人は望まずして変容する。

………その姿は、本人を傷つけるだけでなく、本人と親しい人をも傷つける。……そしてそのことがさらに本人を傷つけるのだ。入江の脳裏に、仲の良かった両親の顔が浮かび、……父の異常な性格変容と、それを脳の病によるものだと理解できず父を拒否したまま死んだ母の顔が浮かんだ。

……こんな、……悲しいことはもうたくさんだ。あれが、……私が脳の医者になろうとしたことの原点じゃないか……ッ!! 今、目の前にひとりの少年がいる。…そして少女がいる。そこにあるのは、あの日の悲しみのカケラ。……あの日の後悔の、カケラ。私は父の死後に脳の病気による悲しい誤解があったことを知った。…だから、全てが手遅れだった。

あと五年早く脳の世界に踏み込んでいればと後悔したが、どうにもならなかった。……だが、……今、自分は数え切れないほどの勉強と努力を積み、揺ぎ無い実績と自信を確立している。

……そして、……目の前にはあの日の後悔があるのだ。入江は両手の拳を握り締め、…涙さえ隠さずに言った。

「……絶対ですッ…!! 命をかけてもいい。私は絶対に悟史くんを雛見沢に連れ帰ります…!! この入江京介が絶対と言うのです。そして悟史くんも帰ってこようとしている!! 互いが手を伸ばし合って届かぬわけがない!! ……だから詩音さん。私を信じて、その日まで待ってく

ださい。絶対!!　絶対、この入江京介が彼を連れ帰ります!!」
それは、魂からの誓い。入江は今こそ悟る。この日の誓いのために今日までがあったと悟る。
目の前の二人は自分の両親ではない。
……でも、……私はついに長年の後悔と決別し、自分の全ての魂を注ぎ込むことを知ったのだ。
「ほ、………本当に………？　本当ですね………？　悟史くん、……帰って来るんですね……？　本当に………、……ぅわぅ、……わあああぅぅぅ…。」
「絶対です。私の人生の全てを捧げてでも、彼を雛見沢に連れ帰ります。…だから詩音さん。その日を信じて、私と待ちましょう。そして、…きっと私たちで彼を迎えてあげましょう。………その日まで待てますか？　この悲しい事実を、…沙都子ちゃんに内緒にできますか？」
「…………ぁい。……悟史くん帰って来るなら、……何でもします…。何でも我慢します……。」
「あれを、……見てください。」
「…………あ………。」
病室の奥の、……薄暗い隅に、……この無機質な病室には似つかわしくないものがあった。
……それは、……あの日、悟史くんが買っただろう、……あの、…大きな大きなぬいぐる

み…。
「彼が、沙都子ちゃんの誕生日のために、……一生懸命に働いて貯めたお金で買ったものです。……………あれを、悟史くんが沙都子ちゃんに渡さないでこの世を去るなんて、考えられますか？　……考えられないでしょう。………悟史くんは必ず、あのぬいぐるみと一緒に、あなたと沙都子ちゃんのところへ帰ってきます。………どうか、……その日まで、我慢をしてくださ い……。」
「……っく、……ひっく…。……お見舞いに、…来ても、いいですか…？」
「もちろんです。」
「……彼の脇に座ったり、……本を読んであげたりしてもいいですか？　それからそれから、……うううぅうぅ…。」
「いいですよ。………きっと、彼も喜ぶでしょう。」
「…………………………うううぅうぅう…。」
再びすすり泣く詩音。
そこへ富竹を連れた赤坂がやって来るが、何の言葉を掛けることもできなかった…。
「無事でよかったです。あなたに番犬を呼んでもらえれば全ては解決できます。」
「……実はそうも行かないのです。さっきの保安室の銃撃戦で無線装置が壊れたようなのです。

…山狗は非常時対応で村全体の通信手段を遮断しているでしょうから、ここの無線装置が損傷した以上、東京へ連絡をするには村を脱出する他ないんです。」
「…となれば、車で強行突破するしかないでしょう。……魅音さんたちもよく時間を稼いでくれています。しかし籠城ですからやがては追い詰められるでしょう。一刻も早く富竹さんを村の外へ脱出させ、番犬を呼び寄せる必要があります。」
「……困った問題がひとつ。彼らが非常時対応で電話線を遮断しているなら、同じ対応で町へ通じる街道を封鎖することになっているのです。車両突破を防ぐため、彼らには歩兵携帯の対戦車榴弾砲が一つ与えられているはずです。」
「……RPG-7ですか。戦車を想定していないでしょうから、弾頭は榴弾でしょうが、……直撃しなくても車が引っ繰り返るかもしれません。…相当厄介な相手です。」
「しかし、街道を車で突破しなかったら無駄な時間が掛かりすぎる…。迂回などしていたら日が暮れます。みんなもよく戦ってくれていると思うが、…暮れるまで持ちこたえられるとは思えません。……急がないと危険です。」
「…………もたもたしてる暇はないです。何が何でも富竹のおじさまを興宮に大至急。監督は悟史くんと安全な場所へ。とにかく大至急出ましょう。ここに敵が殺到するのも時間の問題です。」

詩音は泣き腫らした目をしていたが、もう落ち着きを取り戻していた。
…この悟史くんの無事も、自分たちが勝ってこそなのだ。そのために、今、目の前にある危機に打ち勝たねばならない。それに、いくら悲しい状況といえ、……悟史は生きていて、きっといつか帰ってきてくれるのだ。……それを理解した時、詩音の涙に、熱いものが一粒だけ混じるのだった。
お姉、みんな、…ありがとう。こっちは成功したよ……!

■部活メンバー奮闘

鷹野はこんな山地を歩くほどの体力はなく、息も絶え絶えになりながらも、無線で山狗たちを怒鳴り続けていた。彼女は他の山狗たちのようなインカムではなく、隊員の背負った通信機で怒鳴るから、背負っている隊員は背中越しに延々と鷹野の怒鳴りを聞かねばならず、辟易(へきえき)としていた。
「…………く！　どいつもこいつも頼りないったらありゃしない…！　それでも特殊部隊なの⁉　天下の山狗はどうしたというのよ…‼」
イラつきながら下唇を噛み、左の腕を握り締めながら爪をぎゅうっと立てる…。よく見れば、

腕のあちこちが爪の跡だらけになっていた。……その左手には、…祖父の研究スクラップが一冊。

いつの間にこんなものを小脇に抱えていたのかわからない。……せめて祖父の助けとぬくもりが欲しいと、無意識の内に手にしていたのかもしれない。山狗たちはすでに壊滅的な打撃を受けていた。

土地勘のない山中をぐるぐると引っ張りまわされ、十重二十重のトラップ地帯で幾度も消耗を強いられ、強靭(きょうじん)な彼らにも音(ね)をあげさせるほどだった。

「……………くそ、………うちの三佐にゃ、………突撃以外に知ってる言葉はねぇのか……。……はぁ、……………はぁ…!!」

「鶯1より鶯13…、用心しろ、お前の左翼が沈黙した。今度はお前が狙われるぞ…!」

「ふ、…ふざけるなよ、…何だってんだよ……俺かよ畜生!!」

彼が焦るのも無理はない。……先ほどから繰り返しなのだ。

一人ずつ左から徐々に削られていく…!! そして今度は…自分の番なのかッ!! なら九時方向から敵は来るのか…!? いやそんなのあの悪魔たちには通用しない…!! そもそもこの山中じゃ、前後三百六十度でも警戒が足りない!

足元から頭上まで全ての全てに警戒してもなお足りないってんだぞ!! ど、どこから来やが

るんだッ!? くそったれ、来やがれ来やがれ来やがれッ！！！ 男はテーサーを構え前後を怯えながら振り向く。

……このテーサーも本来なら強力な武器となるはずだった。だが、それは元々屋内で使うものだ。この茂みの深い山中ではまったく効果が発揮できない。男の背後でがさごそッと茂みが動く音がした。そこに人影を見た気がして、男はテーサーを発砲する!! 電極針が射出され、誰もいない茂みに飛び込む。……き、気のせいか!?

その時、テーサーに妙な手応え。

………そう、テーサーと電極針を結ぶ伸び切ったコードが茂みに絡まり巻き戻せないのだッ!! だから彼らは武器がまったく役に立たず、丸腰も同然だったのだ。その時、彼の後に再びがさがさっと音がして、今度こそ人影が飛び出る!! だが、頼みの綱の武器は今や役立たずだ！ その人影が吼えるッ！！！

「あうあうあうあうあうあうあうぅッ！！！」

「ぅわあああぁあぁ!! い、…ぃ野郎ぉおぉッ！！！」

それで十分だった！ 恐怖に駆られ飛びかかろうとしたその瞬間、彼の思考は完全に単純化し、……沙都子の読みに完全にはまる!! 頭上の枝の上にいる沙都子が下にブリキバケツを落とす。…それは、戦略弾頭も裸足で逃げ出す正確さで男の頭にはまるッ!!

「ぅ、ぅわあぁあぁああ、何だこれ、何だこれッ！！！」
そのブリキバケツには、妙なラクガキがされていた。
……何だろう。妙な謎生物のラクガキだ。…ほら、あれだ、よく教育番組のお姉さんが絵描き歌で描くような得体の知れないマスコットキャラ!!
「かぁいいよぉおぉおお〜〜、おッ持ち帰りぃいいぃッ！！！」
別の茂みから飛び出したレナの、萌える拳の一撃がブリキバケツごと男を打つッ！！！いや、その鋭さは打つと形容するのは妥当じゃない。…穿つというべきだッ!! 後に弾き飛ばされる男の先には、………圭一の姿が。その姿はまるで、……何だっけえっと、そうだあれだ!! バッターボックスに入った打者のよう!! 片足立ちするその構えは…世界のホームラン王が編み出したという、伝説の一本足打法ッ!?!? 破壊力は一方だけでは決まらない。双方の衝突の相対速度で決まる!!
圭一の一撃と、レナに吹き飛ばされたそのスピードが、驚異的な破壊力を生むッ！！！
「うぉおおおおぉ、バスターホームランッ！！！」
グワァアァアァアン……、あまりに壮絶かつ爽快な快音が響き渡り、レナに吹き飛ばされたのとは百八十度逆の方向に錐揉み状態で男は空を飛んでいた。そしてごろごろと転がり、地面に突っ伏した先には、しゃがんだ梨花ちゃんが待ち構えていた。……もうそこに飛んでくるの

が最初から計算済みのような配置だった。
「かぁいそかぁいそなのです。なでなで、みーみー☆」
バケツ越しでもわかる巨大タンコブを撫でてご満悦の梨花。…隊員を一瞬だけ迎えた癒しの時は本当に一瞬で終りだった。その尻に魅音がテーサーの針を打ち込むと、隊員は電撃でビクンと跳ねて無力化した。
「くっくっくっく！　一丁上がりぃ!!　こいつもフン縛っちまいなぁ!!」
その隙に、待ってましたとばかりに圭一とレナが飛び掛かり、後手に針金で締めてしまう。
「あぅ～あぅ～!!　完全に決まりましたですよ、部活コンビネーションなのです!!」
「をっほっほっほっほっほ!!　バーッチリですわね!!　次はコンビネーションその7で参りますわよ!!」
「あぅあぅ!!　僕はさっきのその5がもう一回行きたいのです！」
「あらあら、あの爽快感がわかるなら羽入さん、トラップ使いの才能がございましてよー!!」
羽入と沙都子が、いえーい！　と手を打ち合わせる。圭一とレナが隊員を縛り上げる間。
梨花は五感を研ぎ澄まし、四方の気配を探っていた。
「……みー、みー、みー。ぴこーん。……向こうの方角から別の気配が近付いてくるのですよ。……みー、みー、みー、反応は2、かなり怯えてるのですよ、にぱ～☆」

そして魅音に周囲の状況を伝える。まるでレーダー要員だった。魅音は、すでに倒した男は眼中にない。梨花の検知した敵気配を加味して、沙都子の裏山地図を見ながら次の転戦先の検討に入っている。

みんなが、次はどこへ攻めどうするのかとわくわくしながら魅音の指示を待つ。

「くっくっくっく!! 何だいみんなのその目はぁ。まぁだまだ食い足りないってぇ? 確かにねぇ。我が部としちゃあようやく体が温まってきた程度だしねぇ!! 行っちまう? この山で、みんなやっちまうかぁぁぁぁ!!!」

「「うおおおおおおお!!!」」

魅音の部長としての才能は、指揮能力や作戦能力もさることながら、もっとも評価されるべきなのが士気を鼓舞（こぶ）する能力だろう。

勇将の下、弱卒なし。そして勇敢な兵士は魅音の指揮の下、百万の兵に匹敵する英雄の活躍をするッ!! 今の魅音を、いや、部活メンバーを、…誰が止められる!? 当初の鷹野や小此木の見積もりも今ではすでに甘い。

小此木はこの頃、思っていた。

……この包囲戦を始める前、自分は彼ら一人をよく訓練された一個小隊などと例えたが、……もうそれは適当ではない。…連中は、最精鋭の一個機甲師団に匹敵する。……機甲師団に

歩兵が勝てるわけがない。ましてやこっちはせいぜい中隊規模なんだぞ!! 重爆の航空支援、さもなきゃ艦砲射撃、砲兵陣地はどこだよ!? この山を野戦砲で地図の書き換えがいるほどに穴だらけにしろ!! それができないってんなら潜水艦に頼んで戦術核をブチ込んでくれ!! それが駄目なら退却させろぉおぉおぉおぉッ!!! もう小此木は疑わなかった。……敵の指揮官は何者か知らないが天才級だ。名将の下に全ての兵士は万夫不当の豪傑となる!! せめて顔を拝ませろ、どんな悪魔なのか名前だけでも教えてくれッ!! あぁ、雛見沢って鬼の住む村ってことになってたんだよな…。

……今ならわかるぜ、……こいつが、…鬼ってヤツかッ!!!

「鶯13、沈黙!」

「鳳4、沈黙!!」

「こ、こちら雲雀10…! こ、子供の笑い声が聞こえる…、ほほ、包囲された!! た、頼む助けてくれッ!!!」

「雲雀10、退却しろ退却しろ!!」

「退却ってどっちにだよ!? うッうわあああああああ!!!」

「お、鳳9だ…! Rを発見、追跡している、応援を送ってくれ!!」

「鳳9、どこにいるんだ、所在地がわからない! 周辺の状況を送られたし!!」

「……き、霧が出てる、……寒い寒い…、……こ、ここは河原⁉」
「鳳9、地図上ありえない、落ち着いて状況を確認しろ‼」
「そ、そんな……河原の向こうに……、し、死んだ姉ちゃんが……‼　お姉ちゃーん‼」
「鳳9、鳳9‼　応答しろッ‼　お、鳳9、沈黙ッ‼」
「無理だ、やつらはこの山の鬼だッ‼　俺は知ってる、これは鬼隠しなんだ‼　俺たちは全員この山で消されちまうんだッ‼」
「ば、馬鹿なことを口走るのはやめろ‼　各班長は再点呼で状況把握と士気高揚に努めろ‼　敵は悪魔なんかじゃない‼　ただのクソガキだ‼　ビビるな、格の違いを見せてやれッ‼」
「……ぁはははははは、ぁはははははは……。」
「き、聞こえる、誰のインカムから聞こえてるんだッ⁉　俺じゃない、俺じゃない‼」
「くッ熊だ！！！　うわああああああああああッ！！！」
「鳳3だ。ここには野生の熊がいるのか⁉　聞いていない‼　鳳1、一度撤退し火器の武装の検討を‼」
「ば、馬鹿言うんじゃねぇ、いくら谷河内山系ったって野生の熊がいるはずねぇだろッ‼　連中のはったりだ、乗せられるなッ！！！」
「……人の身に過ぎたるを知らぬ愚かなる人間たちよ。穢すことを許されぬ聖地を踏み荒らす

罪を知るがいい……。我に感謝せよ、聖地を穢した罪を償う機会を与えしことを感謝せよ、
……くすくすくす、ぅふふふふふはははははははは…。」
「ち、畜生、誰かのインカムを奪ってやがるんだ!! 敵の士気減退戦術に乗るな!!」
「……恐れを知ることかなわぬ哀れな人間どもよ。よかろう汝(なんじ)らがその身でしか知ることができないというなら、我がそれを教えようぞ…。」
「…う、鶯1だ…!! 後衛が来ていない…!! 馬鹿な、どこへ行った、応答しろッ!!!」
「……くすくすくす。哀れな鶯が一羽、踏み込むこと許されぬ地に迷い込む。…そんなにも知りたいか？ 鬼の世を知りたいか…？ 告げよ人の世に別れを。我が忠告に耳を貸さぬ愚を今より知れ…。」
「……ぐ、…ぇぇぇぇ……ぎぇッ!!!」
「だ、だだ、誰の悲鳴だ今のは!! 鶯、点呼を取れ!!」
「…………ぐがッ、……く、…かか、……かかか……!」
「またやられた!! 誰が沈黙した!? それより本部、俺の左肩には誰かいるんだよな!? 俺は孤立してるんじゃないよな!?」
「……くすくすくす、………まだ聞きたいか、痛みを伴う声が。」
「バギョッ!! ………ザザ…ザ…。」

「な、何だよ今の音!!　何がひしゃげたらあんな音になるんだよ…!!」
「俺、昔、電車の飛び込みを見たことある…!　あん時と同じだ!!　全身がひしゃげる音だッ!!」
「嫌だ、そんな死に方ごめんだ!!!　死にたくねぇ、死にたくねぇ!!!　やめてくれ山の神さま!!　俺も好きでやってるわけじゃねぇんだ、給料もらってやってるだけなんだ!!」
「う、鶯1より本部!!　駄目だ、士気の高揚は困難。隊員の脱落と士気低下は深刻!　これ以上の戦線維持は困難!!　損害が増えるだけだ…!!」
「だから落ち着け鶯1…!　他の隊員は野戦の素人ばかりじゃねぇか!!　お前はあの地獄の卒業生だろうが!!　そのお前が混乱してどうするんだ!!　落ち着け、お前が範を示せッ!!」
「……ほ、本部、鶯1が応答しない…!!　そんな、あの人がやられるなんて、……駄目だ、やっぱり悪魔だ!!」
「だ、駄目だ……、くそ!!　敵は心理戦までこなしやがるのかッ!!　ガキどもの癖に、プロの不正規戦部隊に士気減退戦術まで仕掛けやがるというのかッ!!!」
無線は本来、連絡をスムーズにして連携を取らせるための武器となるはずだ。……だが、著しく減退した士気に付け込まれ、それが裏目に出た。
敵は倒した隊員からインカムを奪い、混乱をより深める心理攻撃に出てきたのだ。落ち着い

て考えればチープなそれも、前後左右もわからない敵地の山中で孤立し、徹底的な打撃を受けて消耗している彼らには有効だ。

一番有効な手は全員にインカムの使用をやめさせることだが、それでは敵による各個撃破をさらに招いてしまう!!

小此木は、その全貌（ぜんぼう）も知らぬ部活メンバーに対し、畏怖（いふ）の念を抱かずにはいられなかった…。

それに比べ、びくびくするなと、ただ怒鳴り続けるだけの鷹野の現状認識の甘さは、今や滑稽なくらいだった。………ひたすら突撃しか言わず、部下を死地に着き落としてきた指揮官ってのは、こういう背広将校なんだろうよ…。

だが、鷹野のがむしゃらな突撃命令は、皮肉にも多少の効果を挙げている。敵は絶大な戦果を挙げつつも確実に後退し、行動範囲を狭めている。敵はトラップ地帯に誘い込み、そこから撤退し次のトラップ地帯へ誘い込むのを戦略としてる。

…つまり、自分たちの陣地と引き換えにこちらに出血を強いているのだ。

…………すでに山狗は壊滅状態だが、……連中の行動範囲もかなり狭まっている。向こうが心理戦に出てきたのは、決着を急いでいることの表れだ。……ここで撤退すれば、むしろこれまでの損害が無意味になる。

……悔しいがお姫様の言う通りにするしかない。…もうじきで連中の首根っこをふん捕まえ

ることができるのだ……!!

敵から奪ったインカムの前では、羽入と圭一が交互に出ては、色々と演技していた。

「はぅ〜、羽入ちゃんすごいよ、本当の神さまみたいだった!!」

「っていうか、すごいね羽入。あのドスは並みの人間にゃちょいと無理だよ……!」

「……だって神さまなのですから。にぱ〜☆」

「あぅあぅあぅ！　それを言ったら圭一もすごいのです。鶏(にわとり)の首を絞めたみたいなすごい悲鳴を出してましたです。」

「をっほっほっほ！　こんなの圭一さんには朝飯前ですわよ？　何しろ我が部の通り名は口先の魔術師でございますもの!!」

「へっへっへ!!　相手が人で耳がついてる限り!!　誰だろうと俺様の圭一マジックで思いのままに操ってやるぜッ！！！」

「将来、圭一は声優になるといいのです。きっとガ□ダムとかでかっこいい役をやれますですよ。にぱ〜☆」

「聞こえる!?　私は鷹野よ、三等陸佐よ!!　あんた達の最上位の上司よ!!　聞きなさい、鬼も

いないし神さまもいないわ。もしいるなら戦いなさい。神などその座から引き摺り下ろしてやるのよ!! 雲雀と鶯は合流して戦力を立て直しなさい。鳳は白鷺の残存と合流。敵は山頂付近の、営林署の資材小屋あたりを本拠地にしている模様! 高所を取られてるわ、こちらの動きが筒抜けのはず!! 奇襲はあって当り前よ、刺し違えてでも倒しなさい!!」
「三佐、武装に戻る許可を!! やつらを制圧するにはテーザーでは無理です!!」
「許可できるわけないでしょ!! 私たちは今、やつらを完全に包囲して追い詰めているのよ!! ここで退けば逃がすわよ!! 私たちはあいつらの首に両手をかけてる。後は絞めるだけなのよッ!!!」
無線で部下たちを怒鳴り続ける鷹野を尻目に、小此木へ別の回線で連絡が入った。通常では使用しない回線でわざわざ、ということは、鷹野に聞かれずに隊長と話をしたい、ということに違いない。小此木はその意味を理解し、鷹野から少し離れて小声で無線に応えた。
「指揮車より鳳1。…緊急事態です。診療所研究区画が襲撃を受けたようです。エントランス区画への侵入者警報を受信しましたが、すぐに解除されました。誤報時の手続きによらない解除です。状況の確認を求めていますが無線に応じません。現在、研究区画の武装保安隊も含め、全員が沈黙しています。」
「…………。……………へ、………へっへへへへへへははははっははは…。」

小此木は全てを理解した。……完璧にやられたのだ。陽動の可能性ももちろん、多少は考えていた。だが、山狗の中でもっとも重武装の研究区画武装保安隊が、奇襲を目論むような小規模別働隊に壊滅されるとは夢にも思わなかった。

相手が迷彩服を着た兵士の一群だったなら引っ掛からなかった。心のどこかで、所詮ガキの集まりとの見下しが最後まで抜けなかったのだ。今こそ、全てを理解する。この山中の戦闘で、一度も姿を見せていない大人たちの違和感が全てわかる。

「…………わかった。そいつは東京の郭公（カッコウ）に伝えたか。」

「まだです。連絡しますか？」

「………連絡しろ。…富竹は奪還され脱出。………村境で封鎖線を張らせてるが、…無理だろうな。……武装保安隊を秒殺した連中だ。RPG一基では難しいだろ。」

「封鎖線に応援を送りますか。」

「ばぁか、そんな余剰人員があったらお姫様が突撃させせてるぜ！　今、手が空いてるのはむしろお前くらいだ。封鎖線に連絡。車両の強行突破に備えろと伝えろ。」

「りょ、了解。」

■封鎖線突破

「…了解。警戒を厳にする！　各自、聞け！　診療所が襲撃され捕虜を奪われたとの連絡が入った。敵はおそらく車両にて強行突破を試みるものと思われる。ＲＰＧを準備。他は一斉射撃で蜂の巣にしろ。射殺許可は出ているぞ。」

隊員の一人が頷き、路肩に止めてあるワゴン車の荷台にある細長いケースを開ける。

……そこには、明らかに戦争に使うものとしか思えない、強力な対戦車榴弾砲、ＲＰＧ−７が横たわっていた。…この武器こそが、近代戦の歴史を変えたとまで言われている。

何しろ、この恐ろしい武器の射程は数百メートルにも及び、地上に存在するほとんどの戦車を一撃で葬るというのだ。

…つまり、この武器の登場により、一人の歩兵が、一台の戦車を撃破できる火力を持つ時代が訪れたのだ。…戦争の歴史すら塗り替えかねない兵器。…それが、このＲＰＧ−７だった。

他の四人の隊員たちも、入江の車のタイヤを瞬時に撃ち砕いたあのＭＰ５なる銃を持っている。

……この封鎖線が絶大な火力を持つことは疑いようもない。彼らはワゴン車の中に待機し、不審車両が来たら車を道路の真ん中に出して封鎖。全員の一斉射撃の火力で相手を撃滅しようと

いう魂胆だった。彼らは慎重に後方の、雛見沢方向から不審な車が来ないかを見張っている。……雛見沢と町をつなぐ街道はこの一本だけだ。他の道を使い別の人里に出るには、半日掛かりの時間を費やすことになる。そして、…この砂利道と舗装道路の境目であるこの場所は、通称、村境と呼ばれ、村を出ようとするものを阻止できる最後の場所であることを物語っていた。雛見沢の方が高いから、敵は坂を下ってくる形になる。……こちらが車でバリケードを作ることは読めているだろうし、十分な阻止火力を持っていることも理解しているはずだ。……突破しようと思ったら、強行突破以外にありえない。

さもなければ、この封鎖線を完全に無力化するだけの銃撃戦が必要になるだろうが、それには相当の時間を掛けるだろう。寸秒を惜しむ彼らが取れる戦術ではない。………ぐるるる…。……誰かのお腹がなったが、誰も茶化さない。生理現象だから仕方ないし、今は臨戦態勢だったから笑おうとも思わなかった。

…時計を見る。……もうすぐで正午だ。お腹が空くのも当然だった。その時、…雛見沢方向から車の爆音が聞こえてくる。エンジンの叫び声からして相当の速度を出しているのは疑いようもない。

「来たぞッ!!」

運転手がワゴン車を出し、道路に横向きに停める。隊員たちは車の陰に隠れたり、道路わき

の草むらに伏せたりして銃口を、砂塵を吹き上げながら迫ってくる不審車両に向けた。相当の速度を出しているだろう。…だが、ここは非常に長く見通しのいい直線だ。いくら速度を出そうとも、完全に捕捉されている…！　その車は葛西のものだった。高級外車の黒いボディが光り、エンジンの高級さもその音から察することができる。

「ぎりぎりまで引き寄せろ…！　撃てるのは一発だぞ！　一撃で仕留めろッ!!」

ＲＰＧ-７は無誘導ロケット弾を放つ。だから高速で移動する目標に当てるのは本来、至難だ。

……だが、相手がいくら速かろうと真正面。車の機構上、急激な動作で回避しようとすれば横転は避けられない。……それが誘えるなら、何も直撃させる必要もないのだ。それに、葛西の言う通りの威力なら、その威力はたとえ直撃しなくても車を引っくり返すくらいのものだという。

撃てるチャンスが仮に一度だったとしても、先制攻撃の有利はあまりに山狗に大きかった。

「……富竹さん。不審なワゴンが路上を封鎖してます。伏せてください！」

「注意して！　向こうのワゴンの鼻先に当てるようにするんだ！」

「わかってます！　一度経験してますのでコツはわかってますよ！」

爆走する車を真正面に捉え、全員の照準がぴたりと合わされていた…。

「まだまだ引き寄せろ……!!　距離百未満まで引き寄せろ!!」
「わかってる!!　測距してろッ!!」
草むらに伏せた男は、もっとも安定する射撃体勢である匍匐姿勢で発砲体勢に入る。
先端の歪なロケット弾が不気味に光り、生涯に一度しか許されない獲物をしゃぶり尽くしてやろうと舌なめずりをしているように見える……!
「距離二百、………百五十………、……攻撃用意ッ!!!」
RPG-7の引き金に指が掛かる……!!
「うおおおおおおおおおおお!!!」
「赤坂さん、衝撃に備えてください!!!!」
「距離百、…………撃てッ!!!」
…………………。……………?　発射されない。不発!?　その時、脇で双眼鏡で距離を測っていた男はぎょっとする!!
RPGを構えていた男が、肩を撃たれてのたうちまわっていたからだ……!!
「ス、スナイパー!!　銃声はなかった、距離四百以上だッ!!」
「そんなのはどうでもいい、撃て撃て撃て撃てッ!!!」
あとは銃の火力で止めるしかないッ!!　他の隊員たちが一斉に銃火の咆哮を浴びせかけ

た！！！　だが、彼らはすぐに違和感に気付く！！！　この距離で一斉射撃を浴びせれば、普通の車なら穴だらけで炎上するはずだ!!　なのに、しない!!　た、ただの車じゃないッ!?!?
「……そりゃあそうです。園崎家御用達の防弾リムジンですから。……葛西ッ！　ＲＰＧを観測手が拾った!!　撃たせるなッ！！！」
「……ふ。…この距離で外すとでも？」
詩音と葛西の姿は、この直線の道路の、ずっとずっと向こう、敵から見ると丘になった向こうの死角にある、捨てられた廃車の屋根の上だった。詩音は膝立ちで、軍用の高性能双眼鏡で敵の動向を確認している。そして葛西は屋根の上に伏せて、銃身とスコープの長さの特徴的な……、狙撃銃を手にしていた！　詩音は土地勘から待ち伏せはこの場所だと断定し、狙撃戦で制圧するしかないと判断したのだ。二人とも狙撃の訓練は、ダム戦争時代に渡米してまで受けている本格派だ！
葛西のスコープには、撃たれた男が落としたＲＰＧを拾い、大慌てで構えようとする姿が完全に捉えられていた。
「早く撃て、吹き飛ばせよ！！！　…んな!?」
再びＲＰＧは発射されず、それは草むらに転がり、…撃とうと試みた二人が傷口を押さえて呻いていた。

……撃った箇所はいずれも肩。命を奪うほどではないが、戦闘能力を確実に奪っている！

もう車は至近距離に迫っていた!!　隊員たちは悲鳴をあげて飛び退く!!　赤坂の運転も荒事に慣れたものだった。封鎖するワゴンの鼻先にぶつけて撥ね飛ばし、見事突破したからだ！　撥ね飛ばされたワゴン車はぐるんと輪を描くように回った。

「追撃しろ!!　行くぞッ！！！」

ワゴン車に乗り込もうとする彼らに容赦なく狙撃弾が浴びせられる…!!

「銃声が完全に着弾より遅れてるぞ、超長距離狙撃だ!!　狙撃教練を完全に終了してるベテラン狙撃手だぞ!!」

「あと、それと同格のベテラン観測手がペアだ!!　こっちの動きが丸見えらしいぞ!!　狙いが正確すぎる!!」

狙撃銃のスコープは狙撃に特化するあまり、拡大率が高いため視界が極めて狭く、戦況判断に遅れる弱点がある。それを補うためにペアを組むのが観測手だ。観測手は視野が広く強力な双眼鏡で戦況を見極め、狙撃手にそれを伝達する。

……狙撃手は一人では活躍できない。同格の観測手と組んで初めてその真価が発揮されるのだッ!!　立ち上がり車に乗り込もうとするが、それを牽制(けんせい)するように超高速のライフル弾が撃ち込まれる!!　その弾丸は空気を切り裂き、何しろ音の速度をも超えるのだ…！　…そんな弾

丸があげる唸りは、軽少な銃のものとはレベルが違う。それはまさに、死神が鎌を振るう音にも似た、文字通り空気を切り裂く恐怖の音、〝音を超えた音〟だ!! その上、向こうにはこっちが手に取るように見えているのに、こっちは向こうが捉えられない!

この恐怖は、狙撃を受けたことのない者には説明できない…!!

「だ、駄目だ、車に近付けない!! 俺たちはいい、お前たちだけでも追えッ!!」

「わかった、俺たちだけで追撃する!!」

ワゴン車には運転手ともう一人しか乗り込んでいなかった。でも、今すぐ追わなければ手遅れになる!! 運転手は即断し発進した。

「どうですか、追ってきてますか。」

「………うん。来てるよ! 運転がうまいね、あんなワゴン車なのに追い上げてくるよ。」

「ははは、それは参りました。…応戦を頼みます!」

「うん、任せて!」

富竹は後部座席の窓を開けるとそこから身を乗り出す。…お昼の暑い熱気を伴う風がざぁっと室内に入って来た。そして、悪路にガクンガクンと揺られながらも、平然と銃の機構を確認する。その動作は手馴れているどころか、…富竹の普段と変わらない様子を見ていると、まるでお気に入りのカメラをいじっているようにしか見えないくらいに自然だった。

その銃は地下区画で保安隊員から奪ったものだ。
一方、追い上げてくる車両の隊員の手にも同じ銃が握られている。火力はまったくの互角だ！　道路は直線をやめ、のたうつ蛇のようにうねり始める。それは時に激しい段差や急カーブを伴って車内を振り回した。…このような状況下での銃撃戦は相当困難を極めるに違いなかった。無駄弾を撃てばすぐに弾切れになるのを富竹は理解していて、迂闊に発砲せず、慎重に距離を計った。…そうすることで相手にまだ射程外だと勘違いさせ、距離を詰めさせようとしているのだ。逆に山狗の方はもう緊張に耐えられなかったらしい。こんな振り回されるくらいの悪路で、ほとんど当たりもしない弾を撃ちまくった。
それらの弾は時折、ボディに当たり、不快な金属音を車内に響かせる。
「富竹さん、身を乗り出していては危険です!!」
「大丈夫。あんなヘタクソじゃ当たらないよ。僕の生徒だったらゼロからやり直しだなぁ。…このような状況下では動きを読むんだ。挙動を予測し、弾幕で予測射撃をするんだ。当てようと思わない。弾幕に突っ込ませるようにするんだ。…こういう風にね!!」
富竹が十分な距離と、路上の具合から射撃タイミングを計り、初めて発砲した。その射撃スタイルはわかる者が見れば惚れるものだった。がっちりと構えて激しい連射の中でもコントロールを失わない。それでいて力は入りすぎず、ゆとりも残している。

車から身を乗り出すという変則的な構えにもかかわらず、富竹は実にうまく応用を利かせ、この不利な体勢の中で抜群の命中率を叩き出していた…!! それは先ほどの向こうの、下手な鉄砲、数撃ちゃ当たるなんてのとはまったく違う! 当たるべくして当たるところへ刻み込む!! 同じ銃での発砲とはまったく思えなかった!!

ワゴン車のボディに正確に刻み込まれるその嫌な音は、彼らに嫌と言うほど富竹の実力を思い知らせていた。

「……く、……くそ、あいつ滅茶苦茶射撃がうまいぞ!! ただの東京の事務屋じゃねぇのかよ!!」

「…………………俺、噂に聞いたことあるんだ。富竹二尉って、事故で事務屋に移ったらしいが、教官時代は不正規戦部隊の射撃教官だったと聞いたぞ…。」

「な、……何だよそれ…!! ってことはあいつ…、うわッ!!」

富竹は降伏を迫るように徐々に着弾を運転席近くへ集めて行く。……彼らにはもう、この圧倒的に不利な状況が理解できていた…。富竹は、この悪路の中でもやすやすと的に当てる技量を持っているのだ。その上、向こうは防弾リムジン。こちらは普通車。…しかも運転席を正面に晒している、もっとも不利な追う側だ。

これまでの射撃は所詮、威嚇射撃なのだ。これ以上、引き際を見誤ると、…富竹は今度こそ

効力射に踏み切るだろう。…勝ち目などない！
「………鳳1より追跡車両。封鎖線が突破されたなら十分だ。深追いするな。富竹は射撃の名手だぞ！　死に急ぐな！」
「…………ど、…………どうする、…行かせていいのか……。」
「………く、……了解、こちら追跡車両。追跡を断念、帰投する！」

山狗のワゴン車がゆっくりと振り切られていく。露骨に車間が開きだしたのを見て、富竹は彼らが追跡を断念したことを知る。
彼は少しだけほっとする。敵対しているとはいえかつての同僚たちだ。傷つけるようなことにならなくて良かったと、胸を撫で下ろす。
「はははは。諦めたようだね。向こうは速度を落としたよ。」
「……ひゅう。あれだけの銃撃戦をしたのに、まったく平静なままですね。…相当の場数をお見受けします。」
「あはははは！　訓練の賜物（たまもの）さぁ！」
富竹は車内に戻るとバックミラー越しにガッツポーズを決めてみせた。普段の飄々（ひょうひょう）とした雰囲気が、激しい銃撃戦のあとでも変わらない。赤坂は初めて、富竹という男を知るのだった

…。

■番犬出動

「……富竹二尉!! ご無事でしたか、連絡が取れず心配しておりました！！！」
富竹の姿は興宮の外れの電話ボックスにあった。ここの電話線は山狗たちが抑えているのとは別系統。通話が可能だった。
富竹は直ちに東京と連絡を取っていた。東京調査部に山狗のスパイが混じっているらしく、自分の隠れ家が特定されたこと。つい先ほどまで囚われていて、何とか脱出してきたこと。敵は陽動にかかり今ある山中にいるということ。
囚われている時、首謀者である鷹野三佐が自分に、黒幕の存在をほのめかした等々、現在知り得る限りのことを全て説明した上で、言った。
「入江機関の早急な鎮圧を。彼らはすでに地上での発砲を繰り返しており、このままでは村人に発覚するのも時間の問題です。番犬の緊急出動を強く要請します！」
「……もしもし、調査部の岡だ！ 無事で良かった！ 番犬はすでに雛見沢地区の南方三十キロメートルで空中待機してる！ こちらも上層部に鎮圧命令を求めていたのだが、石頭どもが

事なかれ主義で渋りやがってな！　だが君が無事ならば話が早い！　君の話はすぐにトップに説明する。許可はすぐ出るだろう。二十分以内に番犬は到着する！　ん、…つい今、鷹野三佐と小此木二尉に逮捕命令が出たぞ！　入江機関の即時制圧と山狗への武装解除命令も出た!!　君のお陰だぞ、でかした!!」

電話ボックスから富竹が出てきた。
「話はつきましたか。」
赤坂はうまく行ったのかと尋ねるが、富竹の様子を見る限り、返事を待つ必要はなさそうだった。
「えぇ。番犬部隊が鎮圧に緊急出動するそうです。すでに近くに空中待機していて、二十分ほどで急襲するそうです。」
「どの程度に強いんですか？　その番犬という連中は。」
「山狗が機密保持のための多目的部隊だとしたら、番犬は戦闘のみに特化した精鋭部隊です。装備も人材も比べ物になりません。おそらく、あっという間でしょうね。」
赤坂は腕時計を見る。………正午を三十分くらい過ぎたところだった。あと二十分ほどで番犬がやって来る。空腹感を思い出す。…もうお昼なのだ。

もし、それだけの度胸があるならば。…今からどこかのそば屋にでも入り、冷えた素麵でも平らげる頃には全てが終わっている。あれだけの戦いぶりを見せ、…その最後の最後まで戦いを続けた山狗の末路としては、あまりに呆気ない時間だった。ここは田んぼと住宅が入り混じる、文字通り興宮と村の境目だった。

さっきまであれほど強く太陽は照り付けていたのに、いつの間にか銀色の雲が薄っすら覆って、涼しい風を吹かせていた。……………軽く、にわか雨でも降りそうな、そんな雲行きだった。二人とも、今日一日、何度死線を潜ったかわからない。ここでぼんやりとして、降るかもしれないにわか雨に身を晒したい誘惑に駆られもした。少しの間だけ、その誘惑を楽しんだ後、……赤坂はぽつりと言った。

「どうしますか富竹さん。」

「……ん？　どうするって、何をだい？」

「私、…雛見沢へ戻ろうと思ってます。……まだみんな、戦ってる。」

「……………そうだね。でも、いいのかい？　一度は潜り抜けた死線だよ。」

「梨花ちゃんが、…待ってる。まだ約束は果たし終えていません。」

「………………なら、戻ろう。僕も用事があってね。ちょうど戻ろうと思ってたんだよ。…赤坂さんはヘリの旅の経験はあるかい？　乗せてもらえることになってるんだ。」

男たちはしばし田んぼの青々とした海が風にそよいで作る波を見詰めた後、再び弾痕の残る車に乗り込むのだった。車が急発進し、道を逆戻りする。まだ、昼なのだ。……綿流しの祭りが始まるまでには、まだまだ時間があるのだ…。

二 フィナーレ

空はいつの間にか曇(くも)り、急激に涼しくなり始めていた。

……これは少し降るな。小此木は直感した。小此木はすでに、封鎖線が破られたことを知っていたが、それを鷹野に知らせてはいなかった。……知らせても今さらどうにもならないし、…山頂へ至りたいという目的において、鷹野と同意見だったからだ。今の小此木の気持ちはたったひとつ。………今日という、人生最悪の日を作った元凶(げんきょう)。

…敵の指揮官の顔を拝むまでは、どうしても負けを認める気にならなかったのだ。すでに負けた戦だ。…まだ負けてないと思っているのはお姫様だけ。

隊員たちはあの後も様々なトラップや奇襲で脱落し、小此木は自分たちの一団を除いて、全班に戦線を離脱させ車両に戻らせた。息はあがっているくせに相変わらず血気盛んなお姫様と、自分、そして疲労困憊(こんぱい)で、もはや歩くので精一杯、たとえ会敵出来てもとても戦闘など出来ぬ

ほど消耗した死に損ないの隊員が数名残るのみだった。やがて、斜面が少しずつなだらかになっていき、……山狗の生き残りたちは山頂付近の、営林署の資材小屋に辿り着いた。……こちらが壊滅状態なのは向こうも知り尽くしているようだった。…人数、戦力、…全ては今や向こうに劣る。

…だから全員でお出迎えがあったとしても今さら驚かなかった。そこには今日一日、山狗を壊滅に追い込んだ子供たちの全員がいた。彼らも今日を全力で戦った。終始圧倒していたとはいえ、体力を全て使いきり、向こうだって立っているのがやっとのはずだった。でも、……彼らは気力で立っている。

それは、勝利したものにだけ神が許す、勝者の栄誉という名の気力だ。

「い、……いたわ‼　Rよ、小此木、捕らえさせなさいッ‼」

「へへへ、へへ。三佐、よくもこんなザマの我々をこき使えるもんです。」

「何？　私に逆らう気なの⁉」

「……まさか。逆らう気なんか最初からありませんやね。へへへ、へっへへへへ。」

小此木は、通信機やテーサーなど、重かった装備の数々を外して捨てた。

そして、ボタンをいくつか外して胸をはだけながら、……他の隊員たちに来なくていいという仕草をしながら、前へ歩み出る。

…山狗と彼らの真ん中まで、歩み出る。
「………山狗の鳳1こと小此木だ。……お前らのリーダーに敬意を表する。…名前を聞かせてくれ。」
彼らは顔を見合わせる。その先には、……背の高い少女がいた。年齢は大したことないだろう。…だが、その鷹のような目つきは、歴戦のベテランに勝るとも劣らないいい眼だ。
…どういう経緯かは知らないが、日頃から死線を潜っていなければ宿せない眼光だった。
「………部長、園崎魅音。」
少女は歩み出て、言った。
「…………いくつだ。……いや、……年齢なんてどうでもいい。…………朝からの興宮署での騒ぎからこの山での戦いまで、……全てお前の指揮なのか。」
「………………。」
魅音と名乗った少女は答えなかったが、…むしろそれは自分たちを完膚なきまでに叩きのめした敵将として、貫禄ある返答だったかもしれない。
「…………この戦はお前らの勝ちだ。…へへ、まだ負けてねぇと思ってるのはウチのお姫様だけさ。……もう今さらどうにもならねぇ。富竹は封鎖線を突破。興宮にすでに到着して東京に連絡を取っただろう。……鎮圧部隊がいつここにやってくるか知らねぇがそれも時間の問題だ。

……笑いたきゃ笑え、詰めってヤツさ。」
「小此木、何をやっているの!!　その女は敵のリーダーよ、倒しなさいッ!!」
「………お姫様が何か言ってるが気にするな。」
「……望みは何？」
「…………お前も大将。…俺も大将だ。…………わかるな。」
「…………………。」
「あいつ、……降参してるんじゃないのか…？」
「…レナにはわかる。……あの人は今日、敵の指揮をしていたんだよ。そして部下がみんなやられた。……だからはいそうですかって言って負けを認めるわけにはいかないの。」
「……我が身を犠牲にしてしか、敗軍の将は禊げないというのですか…。」
「……………いいよ。あんたが納得するようにすればいい。」
「…感謝するぜ…。」
魅音が足を大きく開いて、構えるようなスタンスを取る。小此木もそれに応じて、身構えた。
…普通に考えれば、小此木は赤坂に及ばないとはいえ、近接格闘のスペシャリストだ。だからいくら疲労が激しいとはいえ、魅音に勝てる道理があるわけがない。
鷹野もそう思った。いくら何でも小此木を甘く見すぎだと思った。だが、……魅音は、理解

していた。そして、それが与えられるのは、彼が認めた自分だけなのだ。

「……行くぜ。……ぅうりゃッ！！！」

「…………ふん……！」

小此木が腰だめから鋭い突きを放つが、魅音はその突きの肘を側面から弾き、その腕をぐるんと下に回しこんでそのまま裏へ持って行き、腕をねじ上げる形で抱え込んだ。そのまま、ぐるりとひねり…、小此木は、あぁ折られるなと思った。

いい体捌きだった。突きの力を綺麗に流して腕取りに繋げた。魅音が付け焼刃程度でない護身技術を持っているのは間違いなかった。だが魅音は折らず、小此木を地面に転がした。

追い討ちはしない。早く起きて掛かって来いとでも言うように悠然と見下ろす。

「…へ、……へへへへへへ！　やるな。」

「小此木、何やってるの!!　早く制圧しなさい!!」

「ぅ、うるせぇッ！！！　黙って見てろ!!　こいつは大将戦だ!!」

小此木は素早く立ち上がると、今度は大きく上段に構えてから手刀を振り下ろす。でも、その手刀を魅音はさも問題なさそうに避けると、その手刀に手を添え、…さっきとまるで同じ。…外した手刀が下からぐるんと後に回され、さっきとまったく同じ形に固められてしまう。…そしてさっきと同じ。極めても折らず、ごろんと投げると、立ち上がって来いと見下ろした。

「……回転投げか。当て身を入れねぇとこを見ると養神館じゃねぇな、お上品な皇武館ってとこか。…ちなみに腕を決めた時、下がる相手の顔面に膝が入れられるぜ。」
「…………そうなんだ。今度試してみるよ。」
「み、…魅音ってすげぇ…。向こうの隊長と互角に渡り合ってるぞ…。」
「小此木、武器を使いなさい!! 何をやっているの!!!」
「行くぞぉあッ!! ふぁ!!」
今度の気迫はもっと強かった。半歩多い間合いから中段蹴りで一気に蹴り抜こうとするッ!! だが、魅音が今度は先に仕掛けるように踏み込んだ。何と蹴ろうとする足に自ら飛び込むように!! 蹴ろうという足を抑え込み封殺する魅音は小此木の至近距離に低姿勢でいた。…となればその頭上を狙うのが定石だ。
その頭頂部に肘を叩き込んでやろうと右腕を振り上げた時、今度は魅音はがばっと立ち上がり、その腕を振り下ろさせまいと両手で押さえ込んだ。さっきまでの、相手の力を受け流すような軽やかさに比べると、それは単なる力比べ。…体格が圧倒的に劣る魅音が勝てる力比べじゃない。しかし、魅音はその振り下ろそうとする肘と抑える自分の力の均衡を自ら破り、虚を突いて力を抜き、肘を振り下ろさせた! それを側面を回り込み、……あぁあぁ、さっきとまったく同じじッ!! 腕がそのまま下にぐるりと回されて後ろで極められる!

　しかし、その後が少し違った。腕が後方に高く極められ、その弾みで顔面がお辞儀をするように下げられるそこへ向かって、……魅音が膝蹴りを叩き込んだからだ！　それは、小此木がさっき指導したそのままの技だった。そして再びごろんと投げ捨てた。

「……そうだ。飲み込みが早ぇじゃねぇか…。おめぇ、……戦略、戦術、…そして戦闘、…全て三拍子揃ってるぜ。……お前みたいなヤツが俺の役をやるべきなんだよ…。山狗みてぇなクソどもの隊長をな…！」

「ははん。ごめんだね、あんたらみたいな根暗そうな秘密部隊の隊長なんて！」

　魅音が笑い捨てる。小此木もそれを笑って受けた。謙遜でなく、それは純粋な反応だと思った。

「……へへへ、そうだな。お前ほどの器なら日本の不正規戦部隊長なんてもったいないぜ…。SASでもデルタでもスペツナズでも、…どこでも最高の人材になれるだろうぜ。何しろ、」

「ははははは、あっはははははは！！！　SASぅ？　デルタフォースぅ？　下らないねぇ！そんな退屈なところじゃあ、私を飼いならせやしないよ!!」

「……へっへへははははは！　そうだろうな。そうだろうよ。……なら聞かせてくれ。お前ほどのヤツなら、何の隊長を望む！」

「隊長なんて興味ないね。部長でいいね。」

「……部長…。英国情報部辺りってとこか、…ふ、妥当だな。」

「だめだめだめ、なってないね！　あのねぇ、私がやりたい部長はたったひとつ!!　雛見沢分校の我が部の部長だけさッ!!　罰ゲームのない戦いなんてごめんだね！　口先の魔術師、前原圭一！　かぁいいモードの竜宮レナ！　トラップ使いの沙都子に萌え落としの梨花ちゃん!!そして期待の新人、古手羽入!!　これだけ揃ってりゃ、世界のどこだろうと退屈だねッ!!」

「………勝てねぇ…。……勝てねぇよ……。…こんなヤツが隊長だったんじゃゃ、…勝てるわきゃねぇやな…。へへへへはははははははは!!」

「お、小此木ッ!!　しっかりなさい!!」

鷹野が檄を飛ばすが、小此木の耳にはまったく届いていないようだった。

「……これでウォーミングアップはいいだろ。次の一撃でブチ抜いてやるぜ。…当たったら死ぬぞ。覚悟しな。」

「………来な。あんたに似合いの最後をくれてやるよ。………あんたが欲しいと思ってる、決定的な最後をくれてやるよ…!!」

「よく言ってくれた…。………へへへ、よく言ってくれたぜぇえええええ！！！」

小此木は五歩も間合いを取り直すと、大きく息を吸い……体を捻って、右の拳に全ての気合を溜め込む…！

それは本人の予告通り、当たったらシャレにならないに違いない一撃だ…!!　魅音は目を細めて左半身でそれを受けるつもりだ。

空がざわめき始める…。ぱらぱらと小さな雨粒が額に当たるようになる。

「………行くぜ。……殺すからな。……殺しに来いよ…？」

「…………あんたのお祈りが済んだらいつでも来な。」

…………………一瞬の緊迫した間が、…破られる!!

「うッおおおおおおおおおおおおぉおぉおお!!」

まるで陸上選手が走り出すような、……そんな低い姿勢からの全力のダッシュ。…それが、体の捻りを加えて……、全ての力が集められた右腕を、咆哮させる……！！　落雷が、俺たちの時間を一瞬だけ切り取り、その一瞬を俺たちの目蓋に焼き付けた。その時、……魅音の体勢は何も変わっていなかったと思う。いや、それは落雷の瞬間に閃くように動いたのか。……目蓋に焼きついた光景から、遡って思い出すしかない。

小此木は、…魅音をバラバラに砕きかねない恐ろしい一撃を、その右拳に託して放ったのだ。……つまり、…そのエネルギーを百パーセントの転換率で反撃に返したなら……。その落雷の瞬間、……小此木の体は確かに宙を高く舞っていた……。日本武道の、柔道と合気道がそれぞれ伝える幻の技、……空気投げ。相手に指一本触れずに投げているように見えることからそう

名付けられた、電光石火の神技!!

魅音が持つ武術の中で、……敗軍の将である小此木に与えられる技の中で、もっとも高貴で気高い一撃だった。その一撃は、地面に叩きつけられる威力以上に、…宙を舞う時、一瞬だけ知る俗世からの解放感が印象的なのだという……。小此木が魅音の背後の地面に叩きつけられた瞬間、雨がどっと降り、さらに突然の嵐が襲った。前後に二枚のローターが特徴的な大型のヘリコプターが突如、山陰から圧し掛かるように現われたからだ。ローターで気流が掻き回され、雨粒が嵐のように吹き荒れる。そのローターの爆音も嵐そのものだった。ヘリの後方からロープが垂らされ、そこから次々に隊員たちが降りてくる。……しばらく呆気に取られてから理解した。……番犬だ。富竹さんが呼んでくれた番犬部隊だ!! 小此木は我に返ると山狗たちのところへ駆け戻る。

状況は一変した。彼らはぼやぼやせず、そのまま転がるように斜面を降り、森の中に姿を消した。状況が飲み込めず混乱する鷹野を引き摺りながら。さらにもう一機のヘリが山を旋回しながら、聞き取りにくいスピーカーで何か言っていた。

「……入江機関の全職員に告ぐ! 本日一二三〇(ヒトフタサンマル)に入江機関の全権限は凍結され、上級司令部の直轄となった。また、同時刻、上級司令部は入江機関全職員の武装解除を命じた。山狗中隊全隊員は直ちに武装解除し、入江診療所裏駐車場、もしくは山頂資材置き場に集合せよ! こ

れに応じない場合、国内法及び自衛隊法に基づき厳正に対処することをここに通告するッ!!」
ヘリからは次々とロープで隊員たちが降りてくる。それは明らかに山狗とは違う隊員たちだった。
……より武装が重く、彼らが持つ銃は皆、あまりに大きくて長くて、それを見ただけでも山狗とは格の違う部隊だとわかった。
「…これで、……私たちの、勝ち、…ですの…?」
「……わかりませんのです…。……ボクも、……初めてのことなので、…勝ったのか、……わからないのです……。」
沙都子と梨花ちゃんが呆然としながら、…抱き合ったまましゃがみ込む。雨にびしょ濡れになりながら、泥の上でも構わず、その場にしゃがみ込む…。魅音は、勝者の将に相応しい、それでいて敗者を見下しもしない表情で、雨の中に立ち尽くしていた。
……もう山狗はいない。みんな散り散りに逃げた。俺とレナは魅音に駆け寄る…。
「……………魅音……。」
「……魅ぃちゃん…。」
「…………終わった、……ね。」
「…あぁ、………これで部活は、………終わりさ。」

「梨花ちゃんも無事。……みんなも無事。……魅ぃちゃん。私たちは勝ち取れる最高の勝利を勝ち取ったんだよ……。」

「……魅音がみんなを率いたんだ。…魅音のお陰の勝利さ…。」

だが、俺とレナの声は魅音に届いていないようだった。……魅音が誰に言うわけでもなく、呟く。

「……………私さ。……部活の罰ゲームって、………好きなんだよね。」

「……え？」

「…………部活ってさ、…残酷だよね。仲間で戦いあってさ、ビリを決める。……つまりそれは、その子がビリだってみんなが見下すことなんだよね。」

「……見下してなんかいねぇだろ。………楽しく罰ゲームをしてそれでおしまいさ。」

「そう。………罰ゲームで楽しく遊んで、それで終わり。…………敗戦の将の責任をさ、……楽しくみんなで笑って、それでチャラにできるから好きなんだよね……。負けた本人も含めて、…みんなで笑って。」

「……誰も傷つかない。みんなで楽しく笑って、おしまいにできる。」

「………あの、小此木ってヤツは、…………私に投げ飛ばされて、……叩きのめされなきゃ、自分の罪がさ、…禊げないって思ったんだよね……。そりゃさ、今日何度もヤバイ

目にあったよ。殺されそうに何度もなったよ……！　…………でもさ、…………もう終わりでしょ？　ゲームセットなんだよ。…………なのに、彼らにはチャラにする罰ゲームがないんだね………。」

魅音は、あの落雷の瞬間に小此木を投げて、……何か達観したことでもあったんだろうか。

……それを、俺に理解するのは難しかった…。

「…魅音が何を言ってるのかわからねぇよ……。もう忘れろ…。あいつらはもう終わりさ…。」

「……そうだね。……これでもう全て、おしまいなんだね……。」

「……みんな、生きてる。…誰も怪我してない…。今は、……最高のハッピーエンドを喜ぼうよ。」

「……そ、…そうだな…！　誰もやられなかった。最高のハッピーエンドじゃねぇか!!」

この時点では詩音たちの無事をまだ確認していなかったから、これは性急な発言なのだが、……結果的にはそうだ。……これは俺らが望む最高のハッピーエンド。…なのに、…なぜか魅音の心は晴れなかった。……その理由を、魅音は落雷の瞬間だけ悟っていた。

……でも、…閃きが終わった時にはそれは消えてしまい、……何か大切なことを知り、…そして忘れてしまったことだけを覚えているような、…悲しい喪失感に苛まれるのだった……。俺たちの周りにもわらわらと番犬の隊員たちがやって来る。最初はものものしくて、

俺たちも敵扱いみたいだったが、富竹さんが現われて俺たちの立場を説明してくれると、すぐに誤解は解けたようだった。彼らの指揮官がやってきて、今回の一件は政治的なトラブルが云々とのたまい、最後の最後に、どうか内緒にしてほしいと、ぺこぺこ頭を下げる。その厳しい重装備の姿で謙虚に頭を下げるギャップが何だかとっても妙だった。…もちろん、しゃべるつもりなんてさらさらない。

…終わった今となっては、……思い出すだけでも、夢の中のような、ふわふわと現実感のない一日だった。もし明日の朝になってみんなに、昨日は何かあったっけ？　…なんて言われたら、俺はあっさりとこれは夢だったのかと納得してしまうだろう。……それくらいに現実感を喪失した一日だった。

……頼まれたって、しゃべったりするもんか。

「梨花ちゃん！　無事で良かった！」

「赤坂ぁぁあぁ‼　無事でよかったのです、みーみーみー‼」

「こっちも大成功だったよ。そっちもみんな無事かい？　入江診療所はすでに彼らが制圧したそうだよ。山狗の隊員たちも続々と投降に応じてる。隠れていた入江先生ともうひとりの少年も彼らに保護されたそうだよ。」

「監督も無事ですのね‼　よかったですわ‼　……少年？？　はて、どなたでございましょう

ね？　富田さんか岡村さん辺りが巻き込まれて怪我でもしたのかしら。」
「………沙都子……。……本当に良かったのです……。」
梨花のその微笑みは、……苦難を潜り抜け、疲れきった者が、最後の最後にだけ浮かべることを許されるものだった。でも、今の沙都子は、その意味をまだ知らない。
………その意味を教えるには、どれだけの時間がかかるのだろう。……でも、………入江なら、きっと何とかしてくれる。……きっと、…………沙都子のにーにーを村に連れ帰ってきてくれるだろう…。
「……そうだ、沙都子。今日のお注射をしていないのではないですか。お注射をしないと駄目なのです。」
「あ、……そうでしたわね…。こんな時にも注射をやめちゃいけないなんて、面倒な話ですこと…！」
………沙都子はこの期に及んでも、自分の注射が雛見沢症候群に関係があると思っていないように見えた。…………あるいは、薄々気付いていていて、まだ気付いていないふりをしているのか。
……梨花は、…親友が辛い過去と決別するのを、どれだけ長い時間がかかろうとも、絶対に見守ろうと誓うのだった…。

「…このお注射も、日に二回で助かりますわよね。以前の三回の時は本当に大変でしたわ！」
……その、治療薬の注射の進化に、……悟史が関わっていたとは沙都子は気付かないだろう。
悟史という検体は、沙都子の治療薬研究にこの上なく貢献したと入江に聞いた。
……眠りながらでも、……沙都子の負担を和らげてやりたい、悟史の気持ちが、……沙都子の薬に何かを与えたに違いないのだ…。沙都子は注射をお腹にする。なので、物陰で済ませるため、すぐそこの木立に駆けて行った。
大丈夫、すでに一帯は安全地帯だ。ヘリからは次々と番犬が降りてくる。一台のヘリに二十、三十人は乗っていたのではないだろうか。この山頂にさらに一台、他の山腹にも二台のヘリから番犬が降りているようで、もうこの山一帯が番犬の制圧下にあるようだった。銃声は一発も聞こえない。……すでに戦う気力すら砕かれている山狗には、大人しく降伏する以外、選択肢が思いつかないだろう…。雨はもうだいぶ弱くなっていた。……あと三十分もしない内に晴れるだろう。暑い時期にありがちな、天気の狂いだ。沙都子が戻ってきた。そして言う。
「……梨花、羽入さんの姿が見えませんわね…。さっきまで一緒にいましたのに…。」
「………？　………羽入？　…………羽入？　どこ………!?」

■鷹野ターン

一瞬でも、東京が増援を送ってくれたのだと思った私だけが馬鹿だった。彼らの様子では、すでに自分たちの負けがだいぶ前からわかっていた素振りだった。……私だけに、それが伝えられていなかったのだ…。

「どういうことなの!! 状況がさっぱりわからないわよ小此木ッ!!」

「手詰まりってヤツです。富竹が呼んだ番犬が到着したんですよ。」

「番犬!? な、名前は聞いたことあるけど、…でも山狗と似たようなものでしょう!? どうして応戦しないのよ!!」

「ご冗談を…。山狗は所詮、防諜部隊です。対して番犬はほんまもんの戦闘部隊ですわ。……ハナから勝ち目なんざありませんね。」

わずかに三人残る隊員たちも、それを認めるように疲れきった目を私に向けるのだった。

「だ、大体、どうして番犬が来るのよ! 富竹は捕まえてるのにどうして!! 他にスパイがいるんじゃないの!? それは誰よ!!」

「………三佐、すでに診療所が襲撃され、富竹二尉が奪い返されたことはご存じないのですか

…。」

隊員のひとりが恐る恐る言うと、小此木が、余計なことは言うなというような仕草をした。

「そ、そんなの聞いてないわよ!! それはいつよ!! どうなってるの小此木!! それに村から逃げられないよう、封鎖部隊というのもいるんでしょう!?」

「…………………………。」

彼らは、もう私の問いかけに答えようとはしてくれなかった。…まるで、私だけが置いてきぼり。私だけが何も知らない。私だけが仲間外れにされている…。隊員たちは小此木を見て、小此木の指示だけを待っている。私の指示なんか誰も待っちゃいないし、聞く気もないのがもう態度でわかった。

「隊長、指揮車より無線です。」

隊員の一人がインカムを小此木に渡す。

「……………鳳1だ。」

「隊長、郭公より最終連絡です。〝カッコウを実行せよ〟。」

「……カッコウ、了解した。」

「指揮車を番犬が包囲中です。投降を勧告しています。…いかがしますか。」

「………………指揮車、……いや、太田(おおた)、安達(あだち)、ご苦労だったな。投降を許可する。武装解除し

て以後は番犬の指示に従え。」
「……指揮車、了解。」
「各員その場で聞け。指揮車が制圧された。すでに診療所も制圧されているだろう。我々は全てのバックアップと装備を失った。全班は壊滅。個々の隊員たちも武装解除に応じているだろう。山狗の完全敗北だ。」
「………く、……まだよ…！　何とか東京の野村さんに連絡を取るのよ!!　番犬が何よ！　番犬に匹敵する部隊を送り込んでくれるわ!!　Rは生きていたのよ!?　終末作戦の実行は可能だわ!!　それをすぐに野村さんに連絡しないと！　そのためにはまず東京への連絡手段を取り返すことが重要よ！　こうなると村の連絡網を遮断したのが裏目に出るわね。指揮車を奪還するしかないわ！　指揮車の無線で東京に連絡して応援を呼ぶのよ!!　幸い、指揮車は今、あっさり降伏してみせたから奴らも油断してるはず。小此木と三人も隊員がいれば十分可能よ!!　まだ六月十九日!!　作戦開始は…ええと二十一日？　二十二日だったかしら…？　まだ間に合う…まだまだ間に合う!!　ここから巻き返すわよ、小此木！　すぐに指揮車の奪還を実行しなさい!!」
「…………………。」
「…………………。」

「…く、…………な、…何で誰も私の言うことを聞けないの…!! 私は三佐よ!? 小此木よりずっと偉いのよ!! 小此木の言うことは聞けてどうして私の言うことが聞けないの!!」
「…………三佐。さっきから飛び回ってるヘリが言う通りですわ。このゲームはうちらの負けです。これ以上の往生際の悪さは互いに得になりませんね。」
「な、何を言うの小此木!! まだよ、もう挫けるの!? あなたもRが生きているのを見たでしょう!? 今日の一日が狂いだしたのはRが死んだなんて噂が流れたからよ!? でもRは生きていた!! 今日の一日はなかったことになるのよ!! 緊急マニュアルはまだ生きてるわ。女王感染者が生きている以上、あらためて殺せば、そこから四十八時間の緊急マニュアル執行可能な時間が…!!」
「三佐、緊急マニュアルがどうこうって次元じゃ、もうないんですよ。もう東京は女王感染者とか、それが死んだら四十八時間とか、もうどうでもいいんです。終末作戦は完全に失敗しました。……我々のクライアントはすでに証拠の隠滅に走り回っているでしょう。我々の役目もおしまいですわ。山狗なんて面白い部隊を十年ほど指揮させてもらいました。貴重な経験ができましたわ。それも今日でおしまいです。……そして三佐、あんたの役割ももうおしまいです。」
「な、………何よそれ…!! 私の役割!? 何のことよ…!!」

「三佐。あんたの役目は、……その手に持っておられるスクラップ帳を育て上げることです。」
「……な、…何の話よ……⁉」
鷹野はここで、お守り代わりに持ってきた祖父の研究スクラップのことを言われるとは思わなかった。
「雛見沢症候群って病気があるこたぁ疑いません。だが、女王が死ぬと四十八時間で村中が大パニックになるってぇのは、へへへへ、見た者がいません。ホントかウソかなんて、わかりゃあしないんですよ。」
「馬鹿なことを言わないで…‼　ほ、…ほら、書いてあるわよッ⁉　どど、どこのページかしら…。ほ、ほっ他の類似の脳内寄生虫症の症例から類推して、とと、統計的に、……ど、どこよ…こんな時に限って……ぅうぅぅぅ…‼」
うろたえながら鷹野はスクラップ帳を捲る。…指が震えて、混乱してしまって、どこのページだったか思い出せない…。そのスクラップ帳を、小此木がぴしゃりと叩くと、それはバサリと、……いや、下は泥の水溜りだったから、…ばちゃりと、音を立てて地面に叩きつけられた。
スクラップ帳が開かれたまま泥の水溜りの上にうつ伏せになり、……その泥の色を吸い取って変色していった…。
「な、何をするの…ッ‼　こ、これは大切な……！！」

しゃがんで拾おうとしたそのスクラップを、小此木は目の前で踏みつけてみせた。……力強く踏んだ拍子に飛び散った泥の飛沫が鷹野の顔を汚す…。鷹野が、自分の命よりも大切にしてきたスクラップ帳が、…無惨に泥の中に踏みつけられるのを見て、鷹野は呆然とするしかなかった…。

「三佐。………このスクラップに書いてあることが本当だろうとでっち上げだろうと、どうでもいいことなんですんね。真実だろうと虚偽だろうと、実は誰も気にしてませんのですわ。」

「…そ……それは……どういう…意味よ………。」

そう言いながらも、小此木の足の下からスクラップ帳を引っ張り出そうとするが、小此木の踏みつけからそれを解放することはできなかった…。

「東京のクライアントが期待してたのは、そのスクラップ帳の中身を、どれだけの人間が信じてくれるかってことなんです。本当か嘘かはどうでもいい、ただ、信憑性さえありゃよかったんです。」

「……本当か嘘か、……どうでも……いい…………。」

「そうです。どっちでもいいんです。でっかい研究所で、偉い先生方が研究して、これこれこういう結果ですっていう専門用語だらけの難しい資料を作ってくれて、中身などロクにわからねぇ連中を騙せるだけの信憑性ってヤツを、そのスクラップ帳に与えることが、あんたの役割

だったんです。」
「嘘なんかじゃないわ…!! 私と祖父が何年にもわたって研究してきて……! …あ、足を、…どかしなさいよ……。」
こうしてる間にも…どんどんスクラップ帳が泥に塗れていく……。鷹野はせめて泥が染みないようにスクラップ帳の周りから泥を払うような真似をするが、…何の意味もない。
「女王が死んだら村は皆殺し。そういうとんでもない話をお偉方に納得させられりゃあよかったんです。……雛見沢症候群が脳みそに寄生してどうこうとか、んなこたぁ誰も興味ない。政治的アクションに使えるかどうかにしか興味がなかった。……んなことはあんただって十分承知していたでしょうが。…そして、今や誰もこんなインチキスクラップは信じやしません。……このスクラップ帳に大勢が賭けた。そして負けたんですわ。……山狗もこのスクラップ帳に厚く張って負けた。それだけのことですんね。」
「イイ、イイイ、インチキスクラップなんかじゃない…!! これは真実なのよ、全部真実……!! おじいちゃんが調べて、私が調べて、…そして書き上げてきた真実の研究結果なのよ…!! だって、みんな信じてくれた…! だからあんな立派な研究所を作ってくれたのよ!? 信じてくれたからみんなみんな…、そう野村さんだって、だからこそ私に声をかけてくれたのよ…!! この研究の真価をわかってくれるクライアントはきっと他にだっているわ…! だっ

て、この研究は人類の未来の可能性に、きゃッ!!」
これ以上、鷹野の戯言に付き合いきれないというでも言うように、小此木は鷹野を蹴った。
その体は、…あまりに華奢で軽く、…そこまでしたつもりはなくても、後ろにころんと転んで、鷹野の着衣も泥に塗れさせた…。無様な姿で尻餅をつく鷹野を見下ろそうとするかのように、あまりに淡白な表情の小此木が歩み出る。
「…………幸いなことに、東京のクライアントも、…そしてうちらも、三佐にまだ期待している役割があるんですわ。……おい。」
小此木が言うと、隊員の一人が拳銃を小此木に手渡した。小此木は弾倉を確認した後、その銃を鷹野の前に放った。
「…な、…………何よ、…………これ……。」
「三佐。そいつで自分の頭ぁ、ブチ抜いてくれませんか。」
「…………え……。」
鷹野は放られた、その無慈悲な金属の塊を見る…。…銃など入江機関で何度も見てきた。
怖いなんて思ったことなかった。……それに、……初めて怯える…。
「よくあるヤツですわ。…トカゲの尻尾ってヤツです。三佐。敗軍の将の責任ってヤツで、そいつで自分の頭、ブチ抜いてください。」

「…………そ、…………そんな…………。」
人に、本当の意味で死ねなんて言われたことはない。…自分で死んでみせろなんて言われたこと、…一度だってない…。
「クライアントもうちらも、三佐が死んでくれりゃあ、三佐があることないことやってくれたってことで、うまぁく丸く終わらせられるんです。……すでに東京はその準備に入ってますんね。」
「ばば、……ばばば、……馬鹿なこと言わないで……、そんなこと……でで、…できるわけ……んぐ、………ぅううぅぅ……。」
震える鷹野の口からは、…言葉とも嗚咽ともつかないものが零れるだけだ…。
「まぁ、無理ならいいんです。今のあんたにそこまで求めるのは酷でしょ。」
小此木が銃を抜き、鷹野に向けた。
…他の隊員たちは銃を向けなかったが、…鷹野が死ねば全てが丸く収まることを、その無表情な目で突きつけてくれた…。
「……投降を説得するも、頑なに拒否し抵抗。銃撃戦になり、やむなく射殺。…そっちが本当の筋書きなんです。…………自殺用の銃は、…短くない時間、世話になったことへの俺なりの気遣いだったつもりです。」

「そそ、そんな筋書き嫌よ……、嫌よいや……。そんなの誰が考えたのよ、…嫌よ…、」
「あんたがさっきから助けを求めたいって言っておられる、東京の野村さんです。」
「………え……。」
「終末作戦が失敗した時に備え、ダメージコントロールを図る作戦ってぇのも、ちゃんと併せて用意してあったんです。………野村さんの暗号名は郭公。そして三佐の暗号名は雛でしたね。…郭公が卵をどこに産むかご存知ですか？」
「…………そ、………そんな………。」
「郭公の卵はよその鳥の巣に産み付けられ、そこから孵った郭公はですね、元々の巣の雛を突き落として、巣を乗っ取っちまうんだそうです。……巣から落ちた飛べない雛は、地面でのたくり、……まぁ普通は、野犬や山狗に食われて殺されちまうってことですわ。」
鷹野は…小泉のおじいちゃんにもらったたくさんのお金で、…山狗を買収して、……頼もしい味方を得たつもりでいた。
………小此木は粗野な感じの男だけど、頼れる男だと勝手に思ってきた…。
でも、……その巣は、…………いつの間にか、……乗っ取られていたのだ…。
「三佐。あんたの味方なんていなかったんです。あんたは、東京のクライアントが描いた絵の通り踊って、緊急マニュアルってヤツを煽ってくれりゃあそれで十分だったんですよ。ですが、

その舞台も幕が降りて、………あんたにステージから退場してもらおうってことになった、ってことですわ。…………そら。あんたの大好きなスクラップ帳。……そいつを左手に抱きながら、……右手で銃を拾ってくださぃ。」

ようやく解放された泥だらけのスクラップ帳を鷹野はようやく取り戻す。そして、それを両手で抱きながら、…………ただただ、…泣いた…。

「……うぅうぅうぅうぅ…。……うぅうぅうぅうぅうぅうぅうぅうっうぅうぅ……。」

鷹野三四の人生なんて、…最初から最後まで茶番だった。

……今こそ、……今こそ、あの時に、……あの施設の金網の中に戻る時なのだ……。震える鷹野の手が、………冷たく冷え切った拳銃を握る…。

「弾は一発ですから慎重に。……頭蓋骨は案外、弾を滑らすって話ですわ。…口を開けてその中に撃つのがよくあるやり方です。………ほら、銃を持って、構えて。………そして、死んでくださいな。」

「……うぅ……ぅうううぅ……うぅぅううう…!!」

…………山中に、銃声がひとつ、…木霊した…。

その銃声を聞いて、番犬の隊員たちが殺到する。小此木たちは両手を挙げて投降した。

「へ、へへへへへ…。鷹野三佐も一緒でしたんが、…どうしても投降は嫌だと渋りましてね。……今の発砲は、三佐がこっちに銃を向けたんで撃った威嚇射撃です。」

「レトリバー7よりリーダー！　小此木二尉と山狗隊員三名を逮捕！　鷹野三佐はこのすぐ近くを逃走中の模様！　足跡が南西方向へ消えているがブッシュが濃い、それ以上の追跡は不能！　大至急応援を!!　鷹野三佐は武装している、繰り返す鷹野三佐は武装している！」

「レトリバーリーダーよりオール。重要手配犯の鷹野三佐が現在逃走中。鷹野三佐は武装している模様、注意されたし。逃走地点を中心にパトローリングで封殺せよ。」

鷹野は…ひとり泥に塗れながら、……同じく泥塗れのスクラップ帳を抱きながら……ひとり山中を走っていた。

雨でぬかるんだ悪路に何度も転び、……その度に梢や木の根に苛められながら…。

………途中で転び、靴を片方失ってしまったので、…踵の高さが合わず、もう片方の靴も脱ぎ捨てる…。………雨の中、誰の助けもなくひとりで走って逃げるなんて初めてじゃない…。裸足で逃げるのだって初めてじゃない……。足の裏がこんなに痛いのだって、初めてじゃない……。こんなに涙が出るのだって、……初めてじゃない…。……うぅぅうぅぅ…。

「…り返す。鷹野三佐、武装解除し投降せよ。逃げ場はない。山狗はすでに全員投降した。君に味方はいないぞ。」

頭上を時折通り抜けるヘリが自分の名前を呼んでいる…。鷹野は朽ちた巨木の洞の中に入って、膝を立てながら小さく身を縮めて隠れていた…。……昔、裸足で逃げたこともあった。…だが、…それは昔の話…。鷹野の足はすっかり皮が破れ血塗れに腫れ上がり、もう歩くことも出来なくなってしまっていた…。…洞に隠れ、スクラップ帳の角を噛みながら、……悔し涙を零すことしかできなかった…。悲しさと悔しさが交互に訪れ、……悲しい時には涙が止まらず、悔しい時には自分の体に爪を立て怒りを鎮めなければならなかった…。そして、……右の手には、……弾が一発だけ込められた拳銃……。…………自分は、………死ぬしかないのだ……。死ぬことでしか、全てを清算できない。自らに引き金を引くことでしか、……あの日へ帰れないのだ…。

でも、左手のスクラップ帳を見ると悲しさと怯えが襲ってくる……。

「……死にたくない……。……ううぅ、……死にたくないよ、……うぅぅぅぅ、…ひっく、……………うぅうあぁあぅ…………。」

死ね。死ぬことで責任を償え。

小此木たちのあの目が蘇る…。……わかってる。……私には罪がある。きっとある。たくさんある。とても償いきれないくらい…。でも、…………それは、……私が死ななくちゃ償えないの……？

「いやだ……、……死にたくないぉ……、……ぅぅ……わぁぅ……ぅぅ。」

泣きじゃくる鷹野の前に、…………いつからいたのか。……あの、……少女がそこにいた。

……かつて入江機関が設立され、雛見沢にやってきた時、……神社で宣戦布告した相手。

……この地を預かる、……神。神は、哀れむというより、その愚かさを呆れるような、……そんな淡白な眼差しで私を嘲笑った…。

「……それでもまだ、人の身を捨て神の座を求めるというのか、人の子よ。」

「……ずいぶん、…久し振りね……。……負けよ…。……このゲームは、……私の負けよ……。人の身の分際で、……神に挑戦した、……哀れな女の末路が、……これよ……。」

「……人の子よ。まだ神の座を追い求めるのか。数々の試練をまだ潜り、それでもなお神の座を求めるのか。」

「……冗談じゃないわ……。神の座なんて、……もう……無理じゃない……。」

「人の子よ、聞け。……今こそ、神になる道を、示そう。」

「……………え……。」

「そなたの右手に持つ鉄の火で。己が生に別れを告げるがいい。……神の座に肉の器は不要。

人にその姿を認められようなどと思ってはならぬ。……神とは孤独な存在。それに好んでなりたがる愚かな人の子よ。………それでもなお、神の座を目指すというのか。」
「……これで、……私の頭を撃ち抜けって言うの……。くくく、ははははは……。そんな、……そんな簡単なことで……私は神になれるの…？　そんなにも簡単なことだったの…？　なら私は何？　今まで何を積み上げて来たの？」
「大勢の人間の罪を、背負った。その大勢の罪を、今こそ己を生贄に捧げることで禊ぐのだ。……その勇気は讃えられ、神の座の末席を許すであろう。」
「……何よそれ……。私に、トカゲの尻尾を引き受けて、……全員の責任を押し付けられて死ねと、そういうの!?　ふ、……ふざけないで!!　そんなの嫌よ!!　絶対に嫌ッ!!」
「何故に嫌か。人の世に和を求めるためには、常に一つの穢れに一つの生贄がいる。…それが人の世の理、罪の禊の方法ではなかったのか。………そなたの望む未来に一人の少女を生贄に求めたのはそれを理解していたからではなかったのか。」
「……………わ、……わかんない話はやめて…。私には、…何のことかさっぱりわからないわ……！」
「……それがわからぬなら所詮は人の身。神の座を求めた身の程知らずを悔いよ。」
「悔いるわ。……他の人の責任を被って死ぬのが神になる道なんて絶対嫌…、そんな神さまな

りたくない…。…私は、……人間でよかった……。ただただ、人間として生きていいよって、誰かに許してもらいたかった…！　生きてもいいよって許してもらいたかっただけなのッ!!
それなのに、…それなのに、…何でッ、…こんなことにッ!!」
「なれば、この度の人の世の穢れを如何にして祓うのか。…如何にして代価を払うのか。」
「…………何でよ……、何で誰かが責任を取らされなくちゃならないのよ…!!　誰もが相手を利用してジョーカーを押し付けあって!!　自分の手を汚さずに済むように立ち回り、立ち回り……。……それが人の世なの…？　……違うわ、…そんなの人の世じゃないよ…。……だって、……お父さんやお母さんや、……おじいちゃんと生きてきた日々には、……そんなのなかったもん……！　みんながみんな幸せだった…。誰にもジョーカーなんか押し付けなかった…！
どうして、その世界から私は零れてしまったの？　どうして私は……こんな雨の山中を、泥塗れになりながらひとりで彷徨(さまよ)っているの……？　私は、……どうして、…………うううううっっぅ!!!　これが、…私の罪に対する、……報いなのね…。わかってた、…うっすらと気付いてた…。何か大切なものを間違えて、……でもそれを認めたくなくて、……取り返しがつかないところにまできて初めて後悔した、…自分の罪に対する、……これが！　………報いなのね……。……うううううぅぅ……あうううぅぅぅ……。」
「……人の世はそなたに罪の禊を求めるだろう。この度の穢れはそなたを生贄に捧げることで

祓われよう。……それが人の世の、祓い方。………なれど、我は人にあらず。人を超える存在にして、…欠けたる和を埋める存在。人の罪を、許す存在。人の罪を人には許せぬ。我こそが、人の子の罪を許そう。」

そなたを、許そう。生贄を求めて穢れを祓うは人の世の理にあらず、鬼の理と知れ。この世は人の世にあらず。人と人に巣食いし鬼の織り成す、鬼の世なり。

その理を断ち切るのは人の身ではかなわぬ。それをかなえるために、…我は神の座についたのだから。それは千年を超える苦痛。……私はこの座を、降りたかった。神が和を取り持たなくても、…みんなで仲良くやっていける世界を見たかった。そして、……千年の時の中で、私はようやくそのカケラを見た。

さぁ、…人の子よ。……そなたの罪を、我が名の下に許そう。跪いて悔いるがいい。そして許しを求めるがいい。さすれば与えよう。神が、人を許そう。人の罪を、許そう………。少女の姿を借りた神が私に歩み寄り、そして、手を伸ばす。

………膝を抱いて俯く私の頭に、……触れる……。

「…羽入〜〜〜、羽入ぅ〜〜〜!! ど〜〜こ〜〜!!」

「羽入ちゃぁん! 聞こえたら返事をしてぇー……!」

遠くから聞こえたその声に、私は我に返る。私の、……前には、一人の少女が。…それは憎

き憎き、…魅音たちの部活メンバーの子の一人だった。……くそ、……隠れているのを、……見つけられたか…。いつの間にか雨は止んでいた。…私は木の洞を出て立ち上がる。

……雨が上がると今度は不快なくらいに湿度が高く感じられ、じめじめとした全身の汗に悪寒を感じた。全身は汗と泥と雨に汚れ、不潔なことこの上ない…。それに藪蚊にまで刺され、痒くて痒くて、……あぁ、これだから山は嫌いなのよ。

「声を上げては駄目よ。」

私は銃を向ける。少女はそんなもの眼中にないように、ただただ静かに私を見ている。

…でも、少なくとも、私の言う通り、声は出さないでくれた。どうする…、この少女を人質にとって…何とか立ち回る…？

…弾は一発しかない。それでどこまで立ち回れるのか…。

「羽入ぅぅぅ!!　どこだよー!!　参ったな、マジで迷子だぞあいつ。」

「あ、みつけましたわ！　羽入さん!!」

「……羽入、一体、今までどこへ……、……あ…！」

「…………本当に、………最後の最後までツイてないわね……。いや、あるいはツイてるのかしら。…最後の最後で、一矢報いることはできそうね。……みんなこれが何かわかるわね？　銃よ。身動きしちゃ駄目よ。…………くすくすくす、これで状況は逆転ね。」

「………くそ、……何て……こと……。」
「魅音ちゃん、…他の誰かを撃たれたくなかったら一歩前に出なさい。」
「……だ、駄目だよ魅ぃちゃん…！」
魅音は大人しくみんなの前へ出る。……リーダーらしい、いい根性だった。
「あなたのお陰で、…私はもう滅茶苦茶よ。私を殺そうとこの山中に怖いお兄さんたちが歩き回ってるわ。………どうせ私は許されない。…でもこのままではあまりに悔しいわ。…だからね、せめてお返しをしてやりたいの。……くすくすくす。」
「…ふん。偉そうに言ってるけど、その銃に弾が一発しかないのは知ってるぜ…！」
「その通りよ？　でも、その一発で魅音ちゃんが死んでしまうかもしれないとは、考えない？」
「……た、鷹野！　魅ぃを撃つ気ですか…‼」
「誰も動いちゃ駄目よ？　焦って撃ったら誰に当たるかわかんないんだから。…くすくす。」
「みんな、…動いちゃ駄目だよ…。私の後に隠れてて。」
「…勇敢ね。誰かを撃たれるくらいなら、自分が撃たれようという自己犠牲？」
「……まぁね。拳銃の一発でそうそう人間くたばるもんじゃない。…当たり所にもよるだろうけどさ。」

「……驚くわ。…何て勇気なの…？　みんなに代わって、…私に撃たせようってこと？　言っておくけど、銃声がすれば怖いお兄さんたちが殺到するだろうから、それを恐れて私が発砲しないなんてのは、今の私にはないわよ？　くすくす。」
「じゃあ、撃てばいいよ。……ただし、その一発を撃った後、私の仲間たちは、あんたを八つ裂きにするよ。」
「……くすくす。望むところよ。人を呪わば何とやら。…小此木を屈服させるほどの名将と相打ちなら、それも悪くないわね。」
「撃ちなよ。……その代わり、絶対私に当てな。……私以外の仲間に当ててみろ、……あんたを死ぬより辛い目に遭わせてやるッ！！！」
「………こわぁい。くすくすくす。」
「駄目だよ魅ぃちゃん…。鷹野さんは本気…。この人、本当に撃つよ…。」
「…な、…何とか時間を稼ぐんですのよ…。そうすれば番犬の誰かがきっと…。」
「ええもちろんそれもわかってるわ。だから、一矢報いる機会がなくならない内に、さっくり一発撃たせてもらうわ。……さぁてどこに当たるかしらね。ヘタクソだから、どこに当たっても許してね。くすくすくす！」
「……魅ぃ、……ほ、…本気ですか…。」

「みんな、動くんじゃないよ…。私は部長さ。…みんなを背中に守れるなら、こんなに嬉しいことはないね！　……もし…当たり所が悪かった時はさ、…はは、部活ロッカーの中に神棚を作って、私を軍神と讃えてよ！　……次期部長は圭ちゃんね。…みんな、そん時はあとをよろしく。」

魅音は撃たれる覚悟を決めていた。

……鷹野は追い詰められたネズミなのだ。

どんな言葉も交渉も通用しない。それを完全に魅音は理解していたから、…自分以外の誰が撃たれても嫌だから楯になることを選んだのだ。……魅音にとって、それは気楽なことなのだ。だって、仲間は誰も傷つかない。…そして自分が怪我程度で済めばラッキー。

……たとえ助からなくても、…仲間の死を看取るより百倍マシだから。そして、だからこそ鷹野は撃つ。…そんな魅音の高潔な心を、…痛いくらい理解できるのに、あまりに痛くて受け容れられないから、…だから撃つ。

鷹野は絶対に引き金を引く…！　人の世の不条理というジョーカーを、一発の弾丸に込めて、撃つ…！

「………あなたたち、よくゲームはするわよね。………トランプのババ抜きはやる？」

「…………………やらないね。うちはジジ抜きばっかだよ。」

「ふ、…同じようなルールよ。………人の世の罪はババ抜きと同じ。誰もが一枚のババを互いに押し付けあう。それは勝者を求めるゲームではなく一人の敗者と生贄を決めるゲーム。……私はそのババを引いた。そのカードをもう渡す相手がいない。……だから、その腹いせに、…あなたを撃つの。…不条理な人の世らしくね。」

鷹野が銃を構える…!!　その瞳の色に躊躇はない。…本当に撃つ、冗談抜きで撃つ!!　魅音は目を堅く瞑り、両手を広げてわずかでも仲間を庇おうとした…。……その時、魅音の前に羽入が歩み出た。

「は、羽入!!　危ないから下がって!!」

「……勇敢なる魅音。あなたの勇気はそれで十分です。人の世のババ抜きが、必ず人に押し付けられなければならないものならば。…それを引き受けるのが私の役目。」

「……羽入……あんた、何を……。」

「……梨花。この世界はすごく楽しかったです。……私も部活メンバーに加われてよかった。…見ているだけじゃなく、…加わる部活は本当に楽しかった。……ありがとう。もう十分に楽しんだ。………神の身には過ぎたくらいに幸せだった。」

そして羽入は、毅然とした表情で鷹野を睨む。

「さぁ、撃て。人の子よ。………人の世の、押し付けずには済まぬ罪を放て。それを受け止め

てやる。」

「わかったわ、わかったわかったわかったわかった。なら死ねッ！！！」

……冗談に決まってる、はったりだ、……撃つわけ、……ねぇ……!!

破裂音にも似た発砲音。

………時が水飴のように粘る世界で、…俺たちは確かに見た。……羽入の直前で、銀色の鉛弾が見えない壁に、……突き刺さるのを…。それはまるで、羽入の前に透明な壁があって、防いでいてくれるように見えた。銃弾は羽入の胸を貫きたかったのだろうが、…その目論見は達せられない。

……羽入の額に一筋の汗が浮く。羽入が、…何かの、目に見えぬ力で弾丸を押し止めていることに、そこで初めて気付いた。

「…………………………く……。」

「……は、羽入…！」

「…………大丈夫です。人の身でも、これくらいのことはできますです。」

銀色の弾が、……ぎりぎりと震えながら、ゆっくり押し戻され…、鷹野はこの世ならぬ法則に驚愕し、…その言葉を口にする…！

「……こ、……この、……バケモノッ!!!」

震えていた銀色の弾が、……透明な壁を撃ち砕いた。もう壁はない。羽入の身を弾丸から守ってくれる透明な壁はない。

……羽入の、胸板に…弾丸が、迫って…。ぅ…ぅおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!! それを、誰にも止められない、止められない…!!!

凍った時間の中で、……羽入の胸の直前で凍り付いて止まった弾丸を、誰にも止められない…!!! …俺たちはこの光景を知っている…。どうにもならないチェックメイトの光景。

どれだけ悲しい声で叫んでも、……次の瞬間の悲劇が回避できないのを、…ありえない記憶で知ってしまっているッ!!!

「くすくす、くっくっくっく、はっはっはっは!! あなたは死ぬ、絶対死ぬ! 好きなだけ走馬灯を御覧なさい。それが終わったら胸板をブチ抜かれて、血をばらまいて、自分の血で溺れてのたうちまわって死になさい!! あはははははは!!」

「…………その覚悟がなかったら、……僕は魅音の前になんか出ないのです…!」

これで、全て丸く収まる。初めから存在しなかった僕が再び舞台を降り、…舞台の上には本来の出演者が全員、無事なまま残る。

……………これが、……最善なんだ…………。その時、…………羽入であったとしても驚く……。動けぬはずの凍った世界で、…………梨花が、そっと手を伸ばし……、宙に凍りつく弾丸にそっと手を添えたのだ……。…動けるはずがない。……羽入ですら動けぬのに、……どうして、……人の世の…梨花が……。

「それを驚くのはおかしいわ。……あんたと学んできたんじゃない。奇跡の起こし方。……今日、何度もすごいことが起こったけれど、…本当の奇跡なんて何一つ起こしちゃいないわ。……全て、信じあえば起こって当然のことだった。……だから、……この最後の瞬間に、本当の奇跡を使うわ。……私、オヤシロさまの生まれ変わりだしね、最後にこの程度の奇跡は使わせて。」

梨花は、…やさしく、やさしく、……羽入の前に凍りついた弾丸を撫でると、…………そっと握り締め、…………愛おしそうに胸に抱く。羽入さえも動けない世界の中で。

「……鷹野も羽入も、…人の話を聞かないヤツだってこともわかったわ。……魅音の話を聞いてた？　私たちはババ抜きなんてやらないわ。ジジ抜きしかやらない。……それを鷹野は同じようなゲームだと笑ったけど、…………全然違うゲームなのよ。」

ババ抜きは、調和の取れた五十二枚のトランプの世界に、…ジョーカーという不調和を一枚混ぜて、それを押し付けあう。

だがジジ抜きは、調和の取れた世界から一枚を欠き、…余った不調和のカケラを押し付けあう。それはジョーカーとは違う。欠けたものがあったならきっちりと調和していたもの、なのだ。

同じ押し付けあうゲームだけど、……押し付けあうものの意味が、あまりに違う。

「ジジ抜きも同じ。敗者の手元に一枚カードが残って終わる。……それを鷹野が同じだと例えた気持ちはよくわかるわ。………でもね、……違うの。…………だってジジ抜きは、」

欠けた一枚のカードが足されたら、……敗者が出ないゲームになる。誰かに罪を押し付けねば終わらぬ世界に、羽入という欠けたカードが参加した。だから、敗者の出ないゲームなのだ。

それをわざわざ、一枚欠こうなんて、……愚の骨頂、奇跡の無駄遣いもいいところ。

「………敗者なんか、……この世界にいらない…。………これが、…………古手梨花が奇跡を求めた千年の旅の最後に、……辿り着いた答えよ…。」

答えは、……魅音の部活の、……一番最初のゲームに、…もう込められていたのだ。

カードの欠けたトランプでゲームをするから、敗者が必ず出るのだ。信じ合い、助け合うことで欠けたカードを補えたなら、………それは五十二枚の完全なるトランプ。

敗者の出ない、……完成された世界。仲間外れが出ない、完成された世界。誰一人、輪の外で指をくわえてなくていい。誰一人、罪を背負い込んで泣かなくていい。全員が手を取り合い、

罪を赦せる世界。人が生きる以上、垢が湧くように罪も湧く。大切なのは罪を湧かせないことじゃない。罪を赦すことなのだ。罪に対して潔癖であろうとするから、より世界は醜く歪むのだ。罪を、受け入れよう。そして、みんなで赦そう。それが、古手梨花が見つけて至った、完成された世界…。それは、……一人を敗者にしなくてはならない、人の世の罪からの解放。
梨花は、人の身でありながら、至った。……気の遠くなる時間の果てに、…ついに至った……!

母上、お帰りなさいませ。

…凍った時間は、いつの間にか解けていた…。
鷹野の銃口から硝煙が立ち上っているから、…鷹野は確かに撃ったのだ…。でも、…誰も撃たれていない…。圭一は誰かに当たってはいないかと恐る恐る、きょろきょろ仲間たちを見る。……みんな健在だ。撃たれてなんか、…いない。
「へ、…へへへ、……は、…外しやがった……?」
「…ざ、……ざまぁないね……、……くっくっくっく…。」
精一杯の虚勢を張った魅音も緊張感が途切れたのか、今になってどっと汗が噴き出す。

「こ、…この私が、……この距離で、………外すなんて………！」

部活メンバーの誰もが思った。…この距離で誰にも当たらなかったなんて、……それは、……奇跡…。部活メンバーたちは、実は全員が思っていた。……誰かに当たるくらいなら、…その弾をどうか自分にと。

でも違った。古手梨花はさらに上の奇跡を願った。それは部活メンバーたちの高潔な自己犠牲よりさらに上の、奇跡。誰にも当たらず、誰も傷つかない世界。誰にも当てず、鷹野も傷つかない世界。すぐにばたばたと慌しい足音が殺到してきた。

鷹野は逃げ出そうとするが、…木の根に転び、スクラップ帳をぶちまけ、……それを掻き集めようとしている間に、番犬隊員たちに包囲された。隊員たちに銃口を突きつけられ、その先端で小突かれても、……彼女は散らばったスクラップ帳と資料を集めるのをやめなかった。

隊員に踏まれた資料を、その足裏から引き抜こうと、健気に引っ張りながら…。

……踏まないで、……踏まないでと……小さな涙声で言いながら…。

「鷹野三佐。あなたを逮捕します。」

「………………私が、…全部、…悪いことになるのよね……。ふふふ、……ぅうぅう、…ぅわぁあぁあぁあぁあぁあぁぁぁぁあぁあぁ…。」

部活メンバーたちが、…その悲痛な泣き声に心を掻き毟られ、俯く…。

「立て！　両手を後に回せ。こら、抵抗するな…！」
「いや、いやよいや…、おじいちゃんのスクラップ、…持ってくの、…いや、……いや…‼」
……鷹野は、足元に散らばったスクラップ帳が拾いたいだけだった…。でも、……番犬たちは、鷹野が抗おうとしているだけにしか見えず、しゃがもうとする鷹野の髪を引っ張り、無理やり立たせようとするのだった…。…それは鷹野の末路とはいえ、あまりに見ていて辛いものだった…。……その時、凛とした声が響き渡った。
「待てッ‼」
その男は、……神々しい眩しさと共に現われた。
それは……私たちのよく知る人だった。だが、その表情は私たちが一度も見たことがないほどの、…決意に満ちていた。
「…調査部の富竹二尉だ！　彼女は調査部が保護する！」
「し、…しかし富竹二尉…。司令部からただちに東京へ連行せよと命令を受けています。」
「君たちは彼女を見て気付かないのかッ！　彼女の全身を見ろ‼　掻き毟った後でいっぱいじゃないかッ‼　雛見沢症候群のかなり高いレベルの発症が疑われる‼」
彼女の手首や、腕、首筋に、無惨な引っ掻き傷がいくつも残っていた。…それは、今日一日、色々なことがある度に鷹野が掻き毟ってできた傷だった。……それが症候群によるものなのか、

いらついた彼女の自傷癖なのかはわからない。…でも、富竹に言われて見てみれば、…そうでないとも言い切れない…。

「し、しかし、三佐は入江機関で予防薬の投与を受けているはずです。発症するわけがありません。」

「君たちは資料をちゃんと読んでいるのか!! 予防薬は百パーセントの効果を保証するものではないと書いてあるぞ!! 十分読んでいれば、彼女の状態が末期症状であるとわかるはずだ!! 調査部は彼女の尋問に当たり、雛見沢症候群の治療が最優先されると考える! そもそも今回の事件が彼女の意志に基づくものなのか、末期発症による妄想、錯乱によって引き起こされ、それを誰かが利用したのか、慎重な判断がなくては全容解明は不可能であると考える!! 彼女の罪なのか、彼女の病んだ病の罪なのか! この場で断言するのは不可能だ! それを判断するためにも彼女には治療を受ける権利があり、義務がある!!」

「…………ジロウ……さん…………。」

「彼女を直ちに入江機関本部へ移送し、発症レベルの検査に入る! 鷹野三佐の治療態勢を準備させるよう入江二佐に連絡を!! ただし、三佐については今後厳重に監視をつけ、全ての行動には制限が加えられるものとする。詳細は調査部長、岡一佐から上級司令部を通して命令があるはずだ!!」

隊員たちは、無線でそれを伝えている。基本的に異存はないようだった。逮捕までが自分たちの仕事だ。

そこからの尋問や事件の究明は調査部の仕事になる。その調査部がそう言うなら、それでいいのだろう。富竹は、泥塗れでしゃがむ鷹野の元へ歩み寄る…。

「…………ジロウさん………ジロウさん………ぅわぅううぅぅううぅぅ、わぅううぅぅううぅぅううぅぅううぅ!!　あうううぅぅううぅぅ、わぅううぅぅううぅぅううっぅ!!」

鷹野は富竹の胸に顔を埋めて、……泣いた。……その涙の意味は、…彼女と富竹にしかわからないだろう。

「………遅くなったね…。…君を迎えに来たよ。」

「ぅわぅううぅぅううぅぅ…。ジロウさん、…ジロウさん、…わぅううぅぅううぅぅ…!」

「君は、君がそうだと思っているような悪い人じゃないんだ。……やり直そう。…今度こそ、君の本当の人生を、……田無美代子の人生をやり直すんだ…。」

「…できない、…できないできない…。…私、…いっぱい罪にまみれた…。やり直したりなんかしちゃいけない、死ななきゃいけない…。……じゃなきゃ、…私は自分の罪の重さで……、」

「……そうだね。君の罪は、ひょっとすると軽いものじゃないかもしれない。でも、大丈夫。

…僕が一緒だから。…だから一緒に償おう。鷹野三四の罪を償おう。…そして、僕と一緒に田無美代子を、取り戻そう。その日まで、僕は決して君の側を離れない…！」

「い、………生きていいの…？　私は……生きてていいの…？　みんながお前が死ねば丸く収まるって私に言うよ……？　それでも、………それでも、私は生きてていいの……？　それでも、ジロウさんは生きててもいいと言うの？　それでも、私は許してもらえるの…？」

「……世界は君を許さないかもしれない。でも、それが何だってんだい！　僕が、君を許すよ。だから生きよう。死ぬことは罪の償いにはならない。生きて償い、世界に許しを乞おう。そしてやり直すんだ。そうしたらきっと思い出せる。君が本当はどんな人で、……どんな風な笑顔を浮かべていたかをね！」

……やがて、…鷹野は手錠で拘束され、入江機関へ連行された。……ただし、手錠は後手ではなく、前で。

…その手には、富竹によって泥の払われたスクラップ帳が抱かれていた……。昼過ぎに降った突然の土砂降りは、もうその気配もない。さっきまで隠れていたセミたちはけろりと合唱に戻り、当り前な雛見沢の六月を再び歌い始める。

こんなにも暑い六月だから、天気が夏空のようにおかしくなることだってあるだろう。……もう、…こんなにも空は晴れ晴れとしている。誰かが誰かに時間を聞いた。腕時計を見る。午

後、三時だった。綿流しのお祭りは、五時からだ。…なら、……もうすぐじゃないか。
……ここから古手神社の境内が遠くにぼんやり見える。赤い祭り提灯がいつの間にか飾られていた。…夕闇が近付けば、それは赤々と灯され、祭りの夜を彩ってくれるだろう。………もうすぐ、綿流しのお祭り。そして、…全てが終わる。
ひぐらしのなく頃に。
数多の世界で繰り返されたゲームは終わりを迎え、………ついに得た勝利の果てに勝者が望んだもの、……それは、………敗者の出ない、…ゲームの終わりだったのだ。羽入は、…ゲームの終わりに、……この舞台を退く覚悟があった。
なのに、………まだここにいた。…いることを許されていた。つまりそれは、………彼女が抜かれた一枚のカードではないこと。ジジ抜きのために抜かれたカードでは、もうないということ。呆然と立ち尽くし、…汗と汚れでぼろぼろになった髪を風に揺らす。……そこへ梨花がやって来て肩を並べた。そして、……言葉などいらない。…ただ羽入に、…微笑んでみせるのだった。……傍観者を気取った少女が、舞台に上がる決意をし、……もう十分と思い、降りようとした。
………舞台の上の輝かしい瞬間を思い出に、…舞台を降りようとした時、…その袖が引っ張られ、止められた。舞台の上に、いてもいいんだよ。気付けば、自分はまだ舞台の上にいて、

……しかもこれからも舞台を降りなくていいのだ。私はもう傍観者などでは断じてないというのだ……。
カーテンコールにも自分の居場所があり、……それは、…ありえない奇跡。
……台本にない役なのに、…私はいなくていいはずなのに、…存在が認められる奇跡。
「……あれだけ苦労した旅だったのです。…その程度の奇跡じゃ、ちょっと足りない気もしますですよ。にぱ～☆」
「あ、……あぅあぅあぅ…。……十分ですよ…。こんな奇跡、僕の身には…十分過ぎて…。」
梨花はもう一度微笑むと、右手の握り拳の中身をそっと…羽入に託す。羽入の手の中に、ころりとした感触。…それは何だろう。羽入はそっと手を開き、…それを見た。それは、………
鷹野の放った弾丸。奇跡の起こったことの、証。羽入がここにいていいことの証。
そして、……いつまでもいつまでも一緒にいていいのだという、…証…。
「もうすぐ、暗くなってお祭りの時間になりますです。」
「……あぅ。」
「みんなで楽しくお祭りで部活なのです。もう脇で見てることなんかできませんです。きっと新人イジメの洗礼で罰ゲーム三昧でかぁいそかぁいそなのです。」
「………もう、綿流しのお祭り、見てるだけじゃないのですね。」

「そうです。だってお祭りは、見るものじゃなくて、加わるものですよ。」
スピーカーのテストだろうか。まだ明るいのに、もう祭囃しのＢＧＭが聞こえてくる。
ダビングを重ねた安っぽいＢＧＭ集の祭囃しが、遠く見える古手神社から聞こえてくる。
…それはとてもとても楽しそうで、……ずっとずっと加わりたかったお祭り。

梨花が、その手をそっと握る。

みんなで一緒に行こうね。
綿流しの、お祭り。
みんなで、
一緒に。

うん。





■綿流し

……思えば、彼らはあまりに元気だった。これほどに長い一日を経験して、……さらに祭りにまで出ようというのだから。でも、…今日の祭りだけは特別なもの。オヤシロさまの祟りなどという呪いが解かれ、……二度と惨劇など起きない。

ダム戦争が終わって以来、雛見沢が初めて迎える、…惨劇なき、綿流しの夜。村人たちは、日中に一時電話の不通があったことを知っていたが、気付いたら直っていたので大して気にしなかった。

自衛隊のヘリコプターが裏山の方で何か騒がしくしていたが、噂では訓練の山と間違えて迷い込んでしまったらしい。がんばれ国防の若者たちと老人たちは笑っていた。聞く話では、何と入江診療所にまで自衛隊が降りてきたらしい。

陽気な村人たちはそれも大して疑問に思わず、きっと入江診療所は自衛隊の健康診断も引き受け始めたのだろうと笑った。そして村境の路肩には、交通事故でもあったのか車のものと思われるガラス片が大量に飛び散っていた。

こんな見晴らしのいい道路でも、交通事故を起こす間抜けがいるらしい。慣れた道でも余所

見運転はいけないと老人たちは諌め合った。
　こんな、交通事故の痕跡もよくある光景。大して珍しいものではなかった。あとは早すぎる夏の怪談だ。
　今日のお祭りの開催を知らせる花火が、一発余計に聞こえたというのだ。残響なんかでなく。花火業者たちは不思議がったが、梨花が、花火が面白そうだったのでオヤシロさまも鳴らしたくなったのだろうと言ったら、それで村人は納得してしまった。今夜は一年に一度の、そして最大のお祭り、綿流しの夜。堅苦しいことは抜きにして、村人たちは今夜を思い切り楽しむのだった。部活メンバーは、…相変わらず今年も絶好調だった。
　どのくらい絶好調だったかと言えば、……まぁ全員、本部テントへ連れてかれて、村長さんにこってり油を絞られたくらい、と言えばわかるだろうか。前日まで風邪で寝込んでいた梨花ちゃまは、病み上がりにもかかわらず、奉納演舞を熱演。幼くして貫禄あるその舞いに、村人たちは老若男女を問わずに絶賛の拍手を送るのだった。それは、村人たちにとってみれば、いつも通りの綿流しの夜だったろう。
　ひとつ決定的に違うことがあり、………それを勝ち取るために、少女たちが気が遠くなるほどの時間、数多の世界で戦ってきたことを知ることができる人間は、いない。……あぁ、大きな変化があった。古手梨花が、夏になったらプールに行きたいと言い出したのだ。

ややもすると受身な彼女が自分からどこかへ行きたいと言い出すなど、とても珍しいことだ。そして、天体観測がしたいとか、キャンプに行きたいとか、今年こそひまわりの観察に成功しようとか、夏休み中は学校で肝試し大会をやろうとか。夏休みにやりたいことの夢が、尽きない。

…そう。古手梨花は初めて、…昭和五十八年六月以降の予定を立てたのだ。だってそれは、百年を経て初めて得る夏休みなのだから。心が躍るのも無理からぬことだった。古手梨花は今、沙都子よりも朝早く起き、昭和五十八年六月を越えた日捲りカレンダーを破くのを一番の楽しみにしているという。

古手梨花の前に広がるのは、無限の未来。…それは無限の可能性のある世界で、…だけどもその内の一つしか選べない。

いや、だからこそ輝く素晴らしい世界。古手梨花と共に戦った他の人間たちにも触れよう。

園崎魅音は、夏休みが終わったら進学のための勉強に専念するように誓わされているらしい。

…圭一に言わせれば、そんな時期からの勉強で間に合うのか疑問だ、とのこと。もっとも、稀代の名将、園崎魅音がまさか進学で失敗することなんてあるまい。……とんでもない方法で見事志望校に合格しそうな気がする。

…それが犯罪でないことを祈りたい。

そんなわけで、最後の夏休みを満喫すると、今から遊び倒す予定をぎっしり考えているらしかった。この夏休みも、部活メンバーは魅音から逃れられそうにない。彼女に関わったのが運の尽き。どんなに恋しくても、もうひとりぼっちの退屈な夏休みには戻れないのだ。

前原圭一は、魅音と知恵先生から次の委員長を打診されているという。ゆくゆくは部活の部長も…なんて言われて大慌てで固辞したという。

だって、前原圭一が好きなのは魅音の部活なのだから。そこで止めておけばいいものを、魅音の「部活」「部活」と何度も連呼したら魅音にむくれられた。…圭一にはその理由がわからず、相変わらずのようだった。まぁ圭一は鈍感だから圭一なのだ。だから、今日も彼を中心に賑やかなのだ。今や彼の名は興宮にも馳せ、口先の魔術師はますます絶好調だという。

竜宮レナもまた、ますます元気になっていく。お持ち帰りの犠牲者に新たに羽入が加わり、沙都子、梨花、羽入の三人はいつ自分が誘拐されるかと戦々恐々としながら過ごしているという。…あと、ますますにしっかりしてきた気がする。後輩の面倒見がよく、クラスのお母さんのようだった。暴走気味な部活メンバーのお母さんとしても、ますますレナはがんばっている。

…圭一が、なら俺はクラスのお父さんで行くぜ！　というと、例によって深読みし過ぎて真っ赤に赤面してしまうのだった。

北条沙都子だって、ますますに元気が止まらなくなっていく。山狗との裏山戦でトラップのほとんどを使い切ってしまったため、再び有事に備えて裏山を要塞化しているという。…聞くところでは、現場検証の番犬隊員にその高度な技術を驚かれ、ぜひ指導を、なんて求められたとか求められないとか。富士山の近くの樹海に自衛隊の演習場があるらしく、そこをトラップだらけにしてほしいと言われたらしい。……それはいくらなんでもヤバ過ぎだ。マジで樹海が帰らずの森になってしまう…。

次は番犬と戦いたいなどとのたまう彼女はもう無敵だった。あと、最近、料理の腕がだいぶあがった。羽入が料理の指導に当たっているからだ。

…彼女に言わせれば面倒臭がり屋の梨花よりもずっと筋がいいとのこと。いつか必ず帰ってくる兄のため、兄の大好物だった唐揚げを練習し、それで迎えてあげるのが夢のようだった。…私だけが知っている。彼女のその夢は、きっと遠くない内に叶うことを。

……そして、彼女の兄、北条悟史は、まだ帰ってこない。何の変化もない。

変化があったといえば、園崎詩音の方か。…彼女が休みの度に診療所を訪れるようになったからだ。

何をしに行っているのかはわからないが、…でも彼女はとても幸せそうだったから、誰も特に気にはしなかった。魅音はそれを、怪しげな豊胸手術に加担しているのだと冷やかすが、詩音はにこにこと上機嫌に笑うのみで、決して喧嘩を買ったりはしなかった。あと、彼女はどういうわけか、親族の洋服屋に出入りし、男物の様々な服を買い漁っているという。…最近は男物以外の服も買うようになったが、……どうして診療所へ自分のサイズでないメイド服を持って意気揚々と出掛けていくのやら。…真相は闇の中だ。……あと、最大の変化は、これまで以上に沙都子を甘やかすようになったことだろう。最近はことあるごとに沙都子に、ねーねーと呼ばせようとしており、沙都子を辟易させていた。

入江京介は相変わらず、落ち着きある医師とメイドの伝道師の二足のわらじを履いている。

…実は一度、入江診療所が閉鎖になるという話が出た。でも、彼を敬愛する村中の人々が嘆願し、その話は流れたという。彼は本来、村の人間ではなかったかもしれない。でも今は、自他共に認める、村でもっとも積極的に貢献する若者のひとりである。雛見沢症候群に対しては、

かつてのような消極性はなくなり、極めて積極的に研究を進めているという。
これほどの情熱を見せるのだ。近い将来、この悲しい病気の犠牲者たちはきっとその悲しみから解放されるだろう。また、後に彼は脳が及ぼす影響について先進的な論文を発表し学会を驚かせる。ここでは割愛するが、憎むべきは人か罪かを考えさせられる、とても意義深いものであったことは記しておく。
そして、その論文の引用元には、故高野一二三と、鷹野三四の名が含まれていたという。

富竹ジロウは相変わらず季節の度に雛見沢を訪れている。
戦う旅行写真家の通り名は依然健在で、精力的に村中を歩き回っては撮影ポイントを探しているらしい。でも、以前に比べると村の中で見掛けない。診療所の裏に彼の自転車があるということは、診療所で過ごしているのだろう。
村では、病気を患って療養中ではなんて囁かれているが、彼の晴れやかな笑顔を見る限り、それはなさそうだ。…そして、その連れの鷹野三四は、あの日以来、姿を見掛けない。…どこに行ってしまったのか誰にもわからないが、……富竹の表情を見る限り、それは心配することではなさそうに感じられるのだった。
……いつか、またひょっこりと帰ってきて、頼んでもいないのに怪談をねっちり聞かせて

きて、小さな子供を大いに怖がらせるのだろう。

赤坂衛は、…彼のエピソードがとても笑える。何と、奥さんと娘さんが赤坂に内緒で追ってきていたのだ。そして綿流しの祭り会場で偶然を装って再会したのだ。

…そこで梨花がパパ～☆などと呼ぶものだから瞬時に修羅場化。奥さんにニコニコ微笑まれながら、髪の毛のおさげで首を締め上げられていた。両手は組んだままなのに、まるでおさげが尻尾みたいに自由自在なんてすごい。ぎゅいい。

…しかし、素手で特殊部隊を壊滅させる男を絞め落とす奥さんとは。梨花はますますにかかい修羅場を極めて行くのだった。でも、家族も雛見沢を気に入ってくれたようで、また来たいと言ってもらえた。梨花と赤坂の娘はとても仲良くなれたようで、それはまるで姉妹のようだった…。

大石蔵人は、一度は冷めた麻雀熱が再び再発。しかも、その卓にどういうわけか園崎茜が加わっているらしく、一時期、雀荘の前に機動隊が出動しそうになったとかならないとか云々。あと、彼の表情が非常に穏やかになったと署内で評判だ。……長年のわだかまりが解けたからだろう。でも彼の同僚たちは、それが何なのか理解できなかった。彼は定年を迎えたら北海道

に引っ越す予定だが、夏が来る度に帰って来ようなんて考えている。彼の前に、今や第二の人生は広大に開かれているのだった。

葛西辰由は、他の大勢と比べると一番変化がなかった。

…一部の人間にとって、後の人生に対する心構えさえ変えかねない大事件も、…葛西の中では武勇伝に新しいエピソードがひとつ追加された程度に過ぎない。

葛西が言うには、今回の事件は、まぁ上の中くらいの事件でしたというのだから恐ろしい。上の上ってどんな事件だ…。

詩音はそれを教えろとせがむが、葛西は内緒です、の一点張りだった。あと、往年の片鱗を少しだけ覗かせてしまったことを後悔しているらしく、詩音にまた凄んでよーと言われても知らぬ存ぜぬで通してるらしい。…それも彼らしかった。

最後に、私を語っておこう。

古手羽入は、今日も元気だ。罰ゲーム常連から徐々に抜け出しつつあり、かつて前原圭一に与えられていたダークホースの称号は今や羽入に与えられていた。

素直な性格で言われたことを鵜呑(うの)みにする性分なのを突かれて、魅音たちに妙なことを吹き

込まれて、最近どんどん朱に交わりつつある。よく言えば逞しく。悪く言えば狡猾に。だってそうじゃなきゃ部活じゃ生きてけない。
彼女は、人の世で人として生きる逞しさを部活を通じて今日も学んでいる。

昭和五十八年六月十九日、日曜日。
この千年で、一番一番長かった一日の夜が、更けていく。
はしゃぐ部活メンバーの声。大勢の人の賑わい。模擬店のおじさんの客引き。スピーカーから流れるざらついた、でもとっても楽しそうな、祭囃し。どれもすでに十分知ってた光景だけど、それを肌で感じ、耳で聞くことの鮮烈さ。
知ってるつもりだった。みんなの後にずっとついてきて、物陰から見てるから知ってるつもりだった。でも、そんなの全然、知ってることにならなかったのだ。知ってはいたけれど、初めて加わるものばかり。
たこ焼きの早食いをやった。たこが入ってないけどおいしかった。
カキ氷の早食いをやった。もっとゆっくり食べればおいしかった。
リンゴ飴を初めて買った。みんなにかじられて穴だらけ。でも、おいしかった。楽しかった。
射的ゲームをやった。こんなにも当たらないものなんて知らなかった。でも楽しかった。

あと、胡散臭いくじ引きゲームをやった。束ねた紐を引っ張ると景品が吊れるというアレだ。全然いいのが当たらない。みんなでオヤジにぶーぶー言った。すっごく楽しかった。

そうしてる内に、奉納演舞の時間になった。もちろん部活メンバーは用意周到。一番良く見える場所を陣取っていた。私はそれをそっと抜け出し、この時だけいるように求められている私の場所に立つ。……部活メンバーたちが陣取った真正面より、ずっとずっとよく見える場所。そこは、彼らが崇める存在がおわすべき場所。演舞が奉納される対象がおわす、私のいなければならない場所だったところ。いや、…私がいなければならないと思い込んでいた場所、だったところ。

でも、私はここで見る奉納演舞は楽しくなかった。だからすぐ戻った。みんなと一緒の場所に戻った。私の場所がちんまりと空けてあって。どこへ行ってたんだあれほど迷子になるなと言ったのにー、とみんなに頭をわしゃわしゃわしゃされた。

あぅあぅ言って謝った。嬉しかった。たくさんの人たちに混じって、ぎゅうぎゅうになりながら見る、奉納演舞。私に捧げられて来た千年の演舞の中で、………一番嬉しくて輝いていて、目が潤んだ…。

それが終わった後、割いた布団の綿が村人に配られた。私たちは、この一年の罪や穢れを綿に託し、沢に流す。綿は、綿。人じゃない。人の代わりに流すことで、誰も悲しませない。

それはつまり、誰にも悲しみを強いない、罪の禊ぎ方。
「はいこれ、羽入ちゃんの綿だよ。やり方はわかる？」
「わかりますのです。こうしてポンポンしてから流すのですよ、あぅあぅ。」
私に綿をくれた少女は、去年の綿流しで、自分の名から〝イ〟の文字を流し、苦悩から解放されて新しい生活を歩みだした。

私たちは罪を、沢に流す。
それは綿に押し付けて流すという意味でなく、自分で自分の罪を流して赦すという、自らに課す贖罪の方法。そして赦し合い、助け合い、人の世の歴史が築かれていく。
私は、そっと沢に綿を浮かべる…。
それは清流の流れに乗って、………罪の洗い流される世界へ、続いていく。
私は素足を清流に浸しながら、…いつまでもいつまでも、…人々が流す綿が流れる幻想的な沢の中にいて、……夜の闇の向こうに去って行く綿たちを見送り続けるのだった…。
全てのカケラが紡がれ、完成された世界。
これ以上ない、理想の世界。

まだこれ以上、何を、
あなたは望む?
古手羽入は、
まだ望む。
だって、

もっともっと、私たちは幸せになれるから。望んだ数だけ、幸せになれるから。
それは遠い未来のことじゃない。ちょっとすぐ先の未来。
……ならそれは、いつ? だから割と、すぐだってば。
私たちは、幸せになれるよ。
……ほら、
ひぐらしのなく頃に。

誰だって幸せになる権利がある。
難しいのはその享受。
誰だって幸せになる権利がある。
難しいのはその履行。
誰だって幸せになる権利がある。
難しいのはその妥協。

Frederica Bernkastel

だって、これから
もっともっと幸せになるんだもの。
これくらいじゃ、妥協なんてしないんだから。
私たちは、これまでの幸せを全部取り戻すよ。
私は百年分を。
あなたは千年分を、ね。

Frederica Bernkastel

入江機関クーデター事件報告書（案）

入江機関クーデター事件について

■背景

入江機関（以後、機関と呼称）に与えられている権限のひとつである、緊急マニュアル第34号に着目した何者かが、これを何らかの意図に利用するために執行を画策。機関副所長鷹野三佐と機関付部隊長小此木二尉を金銭で買収。騒乱を目論んだものである。

■対応

機関権限を即時凍結。緊急時即応部隊が機関を急襲、これを鎮圧した。
機関職員は全員投降。これを逮捕。身柄を上級司令部が確保した。

入江機関付将校・士官について

■入江二佐（所長）
本件査問委員会は二佐が本件に無関与であることを確認。
ただし監督責任義務違反により、懲罰委員会へ引き渡す。
懲罰委員会は、二佐の所長職を罷免。身分を上級司令部付とした。ただし、機関残務整理のため、機関への再出向を命じられている。

■鷹野三佐（副所長）
本件査問委員会は三佐が本件の首謀者であると断定。
調査部は三佐の背後関係を引き続き調査中である。
また機関の調査では三佐に高いレベルでの雛見沢症候群発症が認められ、事件時、三佐には責任能力がなかった可能性が指摘されている。
三佐の身柄は、末期発症予防のため機関に送致され、現在、治療を受けている。
回復の目処が立った段階で、身柄を懲罰委員会に引き渡す予定である。

■小此木二尉
本件査問委員会は二尉が本件の副犯格であると断定。

調査部は三佐に買収されたものと分析しているが、不審な点も多く、背後関係を引き続き調査中である。

懲罰委員会は、二尉が積極的に聴取に応じ、本件解明に貢献したとして、一部の罪状について司法取引に応じる予定である。

入江機関について

当初の方針通り、三ヵ年計画で研究業務を完全に終了予定。

上級司令部より新所長を派遣。前所長は新所長の監督下で引き続き研究業務に当たる予定である。

雛見沢症候群撲滅後は研究区画を完全閉鎖し、地上診療所部分は民間に売却する予定である。

なお、所長就任時に契約で、優先交渉権が入江二佐に与えられていることを追記する。

その他

査問委員会の一部に、委員会の運営が正常な状態にないとの声があがっている。
本件の重要性を加味し、査問委員会の人選を改め、別の切り口からの検証も必要ではないかと考える。

このような感じではいかがでしょうか。
ご決裁がいただければ、明晩に官邸へお届けいたします。

野村

〈ひぐらしのなく頃に解　第四話～祭囃し編～　了〉

あとがき

長かった『ひぐらしのなく頃に』という物語は、ようやくこの「祭囃し編」をもって完結しました。

しかし、それはあくまでも、古手梨花が昭和五十八年の袋小路を抜けるためだけの物語。賑やかな部活メンバーたちの物語は、これから先もずっと続いていきます…。

この「祭囃し編」では、鷹野三四という悪役を打ち立て、それに立ち向かう形で、人々の結束と奇跡、そして勝利を描いています。

しかし、お気付きと思いますが、それでは羽入が千年前に犯した過ちから何も変わってはいません。

最後の最後に、梨花と羽入はそれに気付くことで、鷹野を許し、物語は誰をババにすることもなく、静かに終わりを迎えます。

……しかしそれは、勝者である梨花が敗者を許しただけであって、鷹野を生贄にした物語自体を否定したことにはならず、結局のところ、鷹野という生贄なくして、物語は終了できなかったのではないかという最後の疑問を突きつけます。

私たちは。敵を設けなければ困難に打ち勝てないのでしょうか。

第三の敵を設けなければ、目の前の敵と和解は出来ないのでしょうか。

鷹野を悪役に据えることなく。戦いを経ることなく。この物語を終わらせるカケラは考えられないでしょうか。

……もしも、そんなカケラが見つけられたとしたなら。そのカケラは、この「祭囃し編」よりもずっと素晴らしいものに違いありません。

そのカケラを見つける旅は、百年の魔女である梨花にも、まだまだ遠く険しいものになりそうです。

どうやったら、生贄を設けずに、問題を解決できるのか。

羽入が千年をかけても思いつくことの出来なかった〝謎〟を、この物語を終えた皆さんに、どうか託させて下さい。

この謎は多分、『ひぐらしのなく頃に』がお届けできる、最後にして最大の謎。

それを思いつくことが、もしもあなたに出来たのなら。
あなたにとっての世界がもっと明るく楽しいものになると、私は強く信じて疑いません。
昭和五十八年六月の袋小路を打ち破った古手梨花はこれからどうするのでしょう。
百年の魔女の旅の終点は……？
エピローグである「賽殺し編」にて、梨花はその旅を終えることになります……。

竜騎士07


おまけのカケラ



■禁宝「鬼狩柳桜」

禁宝「鬼狩柳桜(おにがりのりゅうおう)」。
古手神社、祭具殿に納められていると伝えられる至宝。
神代の昔。
この地が、人と鬼の混在した「混沌の世」であった時、混沌の根源であった鬼神を討ち倒したと伝えられる宝刀である。
その存在を見た者はこの千年間、存在しない。
伝説では、祭具殿に奉納されているオヤシロさま御神体に封印されているとされ、その構造上から、信仰が続く限り永遠に封印を解くことのできない禁じられた祭具と記されている。
また、その存在はいずれも固く封印された古手神社の禁書にしかなく、その存在を知る者は、歴代古手家当主以外にはこの千年間、数えるほども存在しない。
複数の禁書の伝えるところによれば、その形状は、枝を垂らす柳の如しという。
その形状を想像した数人の古手家当主が墨絵を残しているが、どの形も一致せず、想像の域を出ていないことを物語っている。

伝説によれば、桜花という名の穢れなき一人の乙女が、混沌の世の根源を討ち倒すべしと天啓を受けたという。

その根源である鬼神は、人の剣でも、鬼の剣でも殺すことはできない。

人の剣でもなく、鬼の剣でもない、剣。

両者の交じり合った者にしか扱えない剣でしか、討ち取れない。

(※雛見沢の先祖が半人半鬼の血を引くとの記述は枚挙に暇がないが、両者の血を引くと記された最古で最初の人物がこの古手桜花〔???年～????年〕と考えられ、この記述はそれを伝えるものだと考えられている)

天は桜花に、一振りの宝刀を託す。

その宝刀はまるで柳の枝の如し。

その枝葉は三つに分かれ、天、地、人の三つの調和を示し、天、鬼、人の三者の融和を象徴していたという。

桜花は啓示のあった鬼神の潜む沼のほとりへ向かい、宝刀にて鬼神を討ち倒した。

(※討ち倒した、の記述が禁書ごとに非常に曖昧である。成敗したとも、退散させたとも、屈服させたとも伝えられ、鬼神のその後については不明な点が多い。最古の書物には、宝刀にて鬼神の角を激しく打ちつけた、という記述があるが、別の書物にそれはない)

鬼神を打ち倒した宝刀は奉納され、後に「鬼狩柳桜（おにがりのりゅうおう）」と名付けられた。

だが、桜花はこの宝刀を神社の奥深くに封印し、その存在を永遠に禁じたという。

（※鬼神であれど、神の身と人の身を結んだ刀は、すでにこの世のものではなく、地上に存在すべきものでなかったため、人の世から遠ざけた、という説もある。だが、桜花こそが鬼神の娘であり、親殺しの剣を禁じたのではないかという異説もあり、この記述がその根拠のひとつとされている）

原始のオヤシロさま崇拝においては、オヤシロさまは鬼神のことを指したのではないかという説もある。

混沌の根源であり、全ての諸悪と不和の根源。

それを崇め慰めることで、人の世への再臨を防ぐというのが、原始崇拝の根底とも考えられている。

（※ある種の邪神崇拝か。加護を求めるのでなく、祟りを治めるために祀るという考え方は今日のオヤシロさま崇拝にもややつながり、近代崇拝の言うオヤシロさまの恩恵、良縁や縁結びを司（つかさど）るという守り神の姿とはやや遠ざかる）

人の不和は全てオヤシロさまの仕業であり、人の世には鬼はなしという、人間性善説の考え

方。

ここから神話は、人と鬼の融和という、今日にもっとも広く知られる形に少しずつ姿を変えていく……。

だが、この時代に、オヤシロさま信仰の原点を記した書物や、古手家開祖の書物の多くが禁書となり、封印されていく。

慈愛の存在として神格化された後世のオヤシロさま像と、諸悪の根源という原始のオヤシロさま像が矛盾し、教義の説明が困難になったためと考えられる。

また、禁書を信じるなら、古手家は自らの手で親である鬼神を討ち取った親殺しの一族であり、その血は深く深く呪われていることになる。

それらが全て真実ならば、今日の信仰は、古手家開祖の興したものとは異なることになる。

数百年前の古手家当主のひとりが、禁書の余白にこう記している。

伝説の宝刀、鬼狩柳桜は古手家と人の世の罪の象徴である。

諸悪の根源を他者に求め、それを討ち取ることでしか罪の禊を知らなかった混沌の時代。

古手家開祖（注1）は、混沌の元凶を全て背負いて我が子に討たせ、この地を混沌より解き放った。

（注1：古手家開祖とは一般に古手桜花のことを指すが、稀に桜花の討った親を指す場合が見

受けられる。古手家開祖＝鬼神、との考えは古手家の最大の禁忌のはずであり、それでもなお、そう捉えていた当主が存在していたことは意義深い）

古手家が、人の世が、再び罪を他者に求める愚を犯し、鬼の世に戻ろうとする時。

信仰は消え、御神体は砕け散り、その身に封じた鬼狩柳桜は再び、我らの前に姿を現すであろう。

それは、古手家が忘れてしまった罪の記憶を、再び蘇らせるための再臨なのである……。

鬼神は伝説上の架空なのか。それとも、実在の人物なのか。

非常に稀な例として、生まれつき角を持った人間が生れ落ち、鬼神の子と呼ばれ蔑まれたことがあったのではないか。

これをやがては読むであろう古手家末裔よ。

神話を伝える禁書は数あれど、その記述にはあまりに違いが多い。

しかし、だからといって煙にまかれてはならない。

どんなに記述が違おうとも、それらが伝えようとしていることはたったひとつしかない。

鬼狩柳桜を永遠に禁じた、古手桜花の心を探れ。

それこそが、古手家当主が悟るべき境地なり。

◆お子様ランチの旗

「遊びに行ってくるね――――！！！」
少女の元気な声が家中に響き渡る。
貧乏長屋なのだから壁は薄い。
その元気な声はお隣にも響いていたが、微笑ましい子供の声に文句を言う無粋な人などいるはずもない。
「美代子。お父さんたちデパートへ行こうと思うんだが……」
その声は、原っぱに新しい秘密基地を作り、早くみんなとそこで遊びたいと胸をいっぱいにする少女には、届いていない。
父は、少女が家族とデパートへ行くのを楽しみにしていて、両親だけで出掛けてしまうとヘソを曲げるのを知っていたから声をかけたのだ。
…そして、少女にお子様ランチの旗を集める趣味があって、あと一本で二十本が揃うらしい、ということも。
少女は、お子様ランチの旗に、幸せの願掛けをしていた。

二十本が揃えば、きっと何かの奇跡が起こり、幸せになれると、…信じていた。
仕方ない。お土産に、お子様ランチの旗を持ってきてあげよう。大したものじゃない。レストランの人に、頼むよと言えばわけてくれるだろう。
その日、……鉄道のダイヤはちょっとした信号事故で、乱れていた。
寸秒を争うダイヤの遅れを取り戻そうと、運転手が、いつもブレーキをかける場所では少し遅く、いつも加速する場所より少し早く、…そういう運転をしていた。
田無家に自家用車などあるわけもない。デパートへは電車で行く。

スキップしながら友人の家を目指す少女を、…………ひとりの見慣れない姿の女が呼び止める。
少女は一目で、この近くの人ではないなと思った。
この辺りはご近所付き合いの深い貧乏長屋だ。ご近所さんの顔はみんな知っている。
だから、知らない人がいたなら、…それは新しい郵便屋さんか、…さもなければ近道ができると勘違いして迷い込んだ余所者かのどっちかだった。
女は少女に言った。
「……生きたい？　………死にたい？」

それだけを聞いたなら、普通の人なら、おかしな人だと訝しがるだろう。
だが、少女には、まだそれを真に受けるだけの純粋さがあった。
だから少女は即答する。
「生きたい！」
「そう。ならお行きなさい。どうせ行っても友達は留守だけど、それでもお行きなさい。」
「…………留守なの？」
少女は、この不思議な女がどうしてそんなことを知っているのか、不思議に思った。
女が立ち去ろうとするのを呼び止める。
生きたい、と答えたことへの答えがこれなら、…ちょっと不気味だけど、もう一方の答えだと、どういう答えが返って来るのか、子供の無邪気さから興味を持った。
「なら、死にたいだとどうなるの？」
「お子様ランチの旗が、もう一本手に入るわ。」
「……え!! あ、ずるい、私に内緒でデパートに行く気だ!! ずるいずるい！」
もう少女は一目散。今来た道を駆け戻ろうとする。
「いいのね……？　………後悔は、……しないのね……？」
不思議な女は、念を押すようにそう言う。

「何で後悔するの？」
「………教えないわ。…意地悪だから。」
「……ふーん…。」
少女は、何かのなぞなぞで試されているのかと思い、あれこれ思案したが、…思いつかない。
そして、……なぁんだ、どうでもいいことだとポンと手を打って言った。
「大丈夫だよ、お姉ちゃん。」
「どうして大丈夫なの？」
「何があっても、お父さんとお母さんが一緒だもん。」
「…………………………。」
それを聞き、女は道をあける。
少女はぺこりと会釈をして家へ駆け戻った。

そこには施錠をして、まさにこれから出掛けようとする両親の姿があった。
少女はそれに飛び付き、自分も行くとせがむ。
……少女は、家族と一緒にデパートへ行けることになった。
そして、家族三人で駅へ行って、……電車を待ち、……乗り込んだ。

運転手は取り返せない時刻表の遅れに焦りを持っていて、……それは乗客たちにも運転の様子から暗に伝わっているようだった。
今日は揺れるね。そう少女は、座席の上に膝立ちして外を見ながら言う。
母親は、危ないからちゃんと座りなさいと注意した。でも少女は舌を出す。
……そして、……電車は、……とてもとても大きな、……とてもとても急な、……カーブにさしかかる。
電車の中は、その方向に大きく傾き、大勢の人がそちらに押し付けられて押しくら饅頭(まんじゅう)になった。
その窮(きゅう)屈さに、呻きが聞こえる……。
そして、……電車はさらにそのまま、ぎゅうっと…………。
…………。

少女と両親は、両手一杯に買い物のペーパーバッグを抱えながら、満天の星空の下を、帰宅した。
鍵を開け、真っ暗な家の中に灯りを点し、……少女は荷物を玄関に置くと、自分の部屋へ駆け込んだ。そして、……学習机の引き出しを開け、…ポケットの中に入っていたそれを、収め

た。

……一度は閉めた引き出しをもう一度開け、少女は畳の上に、…何本ものそれを広げる。

それは、色々な国の国旗を模した、…お子様ランチの旗。

日の丸、アメリカ、イギリス、これはえぇとどこだっけ…。三色旗はわかりにくい…。

それから数えるように並べ直す。そして口で数えながら置いていった。

そして少女は嬉しそうに踊りだす。

念願の、二十本の旗が揃ったからだ。

これを揃えるのにどれだけの時間が掛かったことか。

その苦労は少女にとって大きなもので、それを乗り越えて達成した偉業の喜びにしばし躍り上がった。

これだけ苦労して集めたのだから、きっと何かいいことがある。

二十本集めたら、きっと幸せになれるって願掛けをした。だからきっと今から何か素敵なことが起こるんだ…。

少女はわくわくしながら待つが、…魔法のランプじゃあるまいし、ドロンと魔神が現われて何かをかなえてくれるわけもない。

今夜じゃなくて明日にいいことがあるのかもしれない。少女は気長に待つことにする。

何しろ、二十本も集める偉業を成し遂げたのだ。
きっときっと、素敵な幸せが訪れる。
きっときっと、素敵な奇跡が訪れる。
あるいは、悲しい不幸を退けてくれるお守りになるのかもしれない。
少女は二十本の旗を再び引き出しに戻す。
そして、歯を磨いて寝なさいという母親の声に、洗面所へ駆けて行くのだった…。

いいんじゃない？　こういうのも。
奇跡に、前借りがあったって。
さぁってと、次は何をして遊ぼうかしらね。
何しろ遊べるカケラはいくらでもあるんだから。
何？　あなたも遊んでみる？
くすくす、面白いわよ。神さまにでもなった気分がするものね。
悟史が一緒にいる世界とか、園崎姉妹が入れ替わってない世界とか。

沙都子の両親や、梨花の両親が健在な世界はどうなってるんだろう。
あぁ、こんなのどう？
赤坂が鷹野に籠絡されて敵側なの。あはは、面白そう。
個人的には、あの鷹野が富竹にゾッコンな世界とか興味あるんだけど。
圭一を色々な女の子にくっつけて遊んでみるのも面白そう。私、修羅場、大好きだもの。くす！
さぁて次は何をして遊ぼうかしらね。カケラはいくらでもあるわよ。
ねぇ、いくつかいる？　あなたは何して遊びたい？

〈ひぐらしのなく頃に解　了〉

本書は、２００６年発表の同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に解　祭囃し編』のシナリオをもとに著者である竜騎士07氏自らが全面改稿し、小説化したものです。

ILLUSTRATION　ともひ
BOX&BOOK DESIGN　Veia
FONT DIRECTION　紺野慎一（Toppan Printing Co.,Ltd）

本文使用書体
本文：FOT-筑紫明朝 Pro L　A-OTF フォーク Pro R　凸版明朝V2 Pro W7　A-OTF 明石 Std L
見出し：FOT-筑紫ゴシック Pro D

著者紹介

竜騎士07

1973年生まれ。同人ゲーム作家、小説家。2002年夏、コミックマーケットで同人ゲーム『ひぐらしのなく頃に 鬼隠し編』を発表。以来、夏と冬に1作ずつ『ひぐらしのなく頃に』シリーズ新作を精力的に発表し続け、まんが、アニメ、コンシューマー・ゲームなど、様々な他メディアを席捲する一大ムーブメントを作り出す。2007年8月、最新シリーズの『うみねこのなく頃に』を満を持して送り出す。小説の単行本化は、本作が初となる。

Illustration

ともひ

1983年生まれ。まんが家、イラストレーター。魅力的なキャラクターのみならず、奥行きのある妖しくも美しい背景を描く。竜騎士07たっての強い希望で、新人ながら、本作『ひぐらしのなく頃に』シリーズのイラストを担当することになる。ウェブサイト「古街」(http://furumati.com/)を運営。

講談社BOX　KODANSHA BOX

ひぐらしのなく頃に解　第四話～祭囃し編～(下)　定価はケースに表示してあります

2009年1月5日 第1刷発行

著者 ── 竜騎士07

発行者 ─ 中沢義彦

発行所 ─ 株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号 112-8001
編集部 03-5395-4114
販売部 03-5395-5817
業務部 03-5395-3615

本文データ制作 ─ KODANSHA BOX DTP Team

印刷所 ─ 凸版印刷株式会社

製本所 ─ 株式会社若林製本工場

製函所 ─ 株式会社ナルシマ

ISBN978-4-06-283697-5　N.D.C.913　424p　19cm


ご愛読ありがとうございました！




太陽は輝けない――。
A GIRL BEYOND THE TIME
KODANSHA BOX
第1巻 堂々発売！ 続刊、毎月"月初"刊行!!


1つの天空に、3つの
2009
四方世界の王
古代オリエント幻想創世記
時は、文明の曙。
其処は、遥かなる東方の地。
人々が未だ神話と日常のあわいに生き、
数多の都市国家と有力者達が覇を争う只中に、
世界は、3人の"資格者"を産み落とした。
バービルムの王子・ハンムラビ
アッシュールの英雄・シャムシ=アダド
ラルサの帝王・リム=スィーン
土煙鎮まらぬ戦乱の大地に、
最後に立っている者は誰なのか。
群雄割拠のオリエントを統べ、
"四方世界の王"の名を戴くのはただ一人
古代世界の神位と覇権を巡る戦いは、今、
少年と少女の出会いから始まる
定金伸治
『ジハード』『Kishin 姫神』『ユーフォリ・テクニカ 王立技術院物語』
Illustration/記伊孝
『マテマティシャンズ』
A BOY MEETS
2009年1月5日


produced by
KODANSHA BOX
CARNIVAL ISSUE
2008
WINTER
Vol.2
SIDE-B
KODANSHABOX
MAGAZINE
パンドラ
Illustration／ともひ
思春期の自意識を生きるシンフォニー・マガジン

KODANSHA BOX最新刊

講談社BOXは、毎月"月初"に発売！

お住まいの地域等によって発売日が変わることがございます。あらかじめご了承ください。

竜騎士07

ひぐらしのなく頃に解　第四話～祭囃し編～（下）

何度も繰り返される"昭和五十八年六月"を乗り越える——。そのたった一つの"奇跡"を起こすために、最後にして最大の闘いがはじまる。最強の部活メンバーや、大石、赤坂だけではない。雛見沢の人々の前に姿を現した羽入もまた、傍観者の立場を捨てて自ら闘いに身を投じる。彼らは、鷹野率いる山狗の猛攻を凌ぎ切り、最高の結末を迎えることが出来るのか……!?

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

定金伸治　　Illustration・記伊孝

古代オリエント幻想創世記

四方世界の王１　総体という名の60

紀元前1800年。群雄割拠するオリエント。バービルムの書記学生・ナムルは、神の欠片を持つ謎の少女・シャズと出会い、大いなる戦乱の渦へ飲み込まれていく。戦いの大地に最後に立っている者は——"四方世界の王"の称号を頭上に戴くのは誰なのか。運命の２人が出会う時、オリエントの覇権と神位をめぐる戦いの狼煙は上がる！

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

ロクニシコージ

こぐまレンサ 完全版

これは謎の少女"こぐま"の物語であり、見知らぬ誰かの物語であり、あなたの物語でもある。無数のエピソードと新世界"チチェ"の物語が連鎖する時、まだ見ぬ現代のフェアリー・テールが生まれる。ＹＭが生んだ稀代のショートストーリーテラーの傑作、リメイク刊行！

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

島田荘司　　Illustration・士郎正宗

Classical Fantasy Within

第七話　アル・ヴァジャイヴ戦記 再生の女神、アイラ

アル・ヴァジャイヴを横断する五日間の冒険行の果てに辛くも生き残った仲間は、千騎の中のわずか数人。そして刻々と迫り来る、滅びを決定づけられた都サラディーンを救うためのタイム・リミット——。アル・ヴァジャイヴ戦記、ついに完結！

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

講談社BOX＆アニメスタイル共同編集

劇場版 空の境界　第四章「伽藍の洞」画コンテ集

かつて誰もが映像化は不可能だと断じた奈須きのこの大ヒット小説、『空の境界 the Garden of sinners』を、全七章・全七部作として完全映像化！　ufotableによる至高の映像詩編、『劇場版　空の境界』の第四章——「伽藍の洞」の画コンテを講談社BOXとアニメスタイルの共同編集によって一カット残らず完全収録！

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

売り切れの際には、お近くの書店にてご注文ください。



ひぐらしのなく頃に解

07th Expansion presents Welcome to Hinamizawa 「WHEN THEY CRY」

KODANSHA BOX

竜騎士07

Illustration／ともひ

ひぐらしのなく頃に解

第四話～祭囃し編～（下）

「みんなで一緒に行こうね。綿流しのお祭り。
みんなで、一緒に。」